千葉県文化財センター調査報告第514集

千葉東南部ニュータウン32

－千葉市小金沢古墳群２－

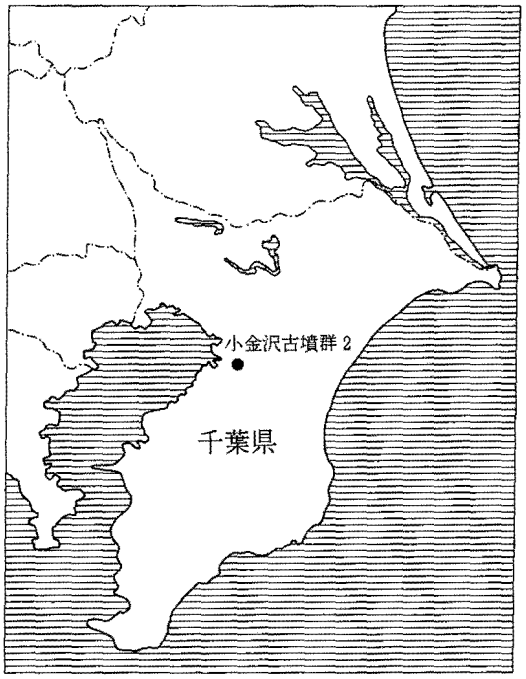
平成17年３月

独立行政法人　都市再生機構

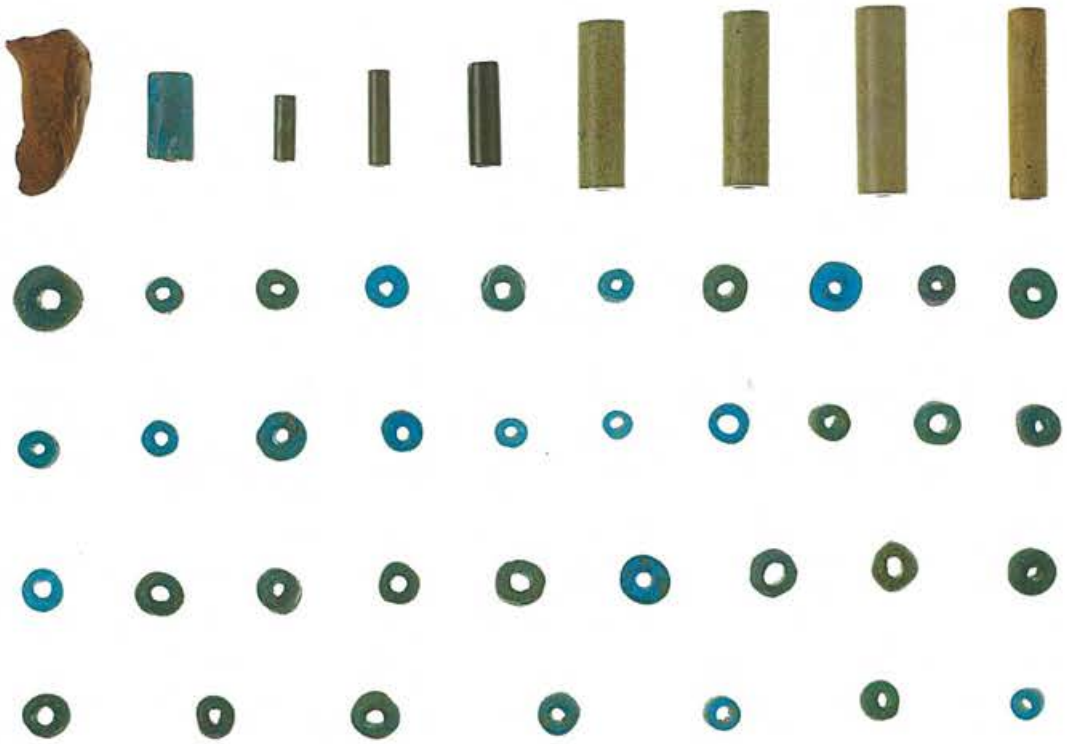
財団法人　千葉県文化財センター

千葉東南部ニュータウン32

－千葉市小金沢古墳群２－



24号墳出土　七獣形鏡



24号墳出土　玉類

序　　文

財団法人千葉県文化財センターは，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県文化財センター調査報告第514集として，独立行政法人都市再生機構の千葉東南部地区土地区画整理事業に伴って実施した千葉市小金沢古墳群２の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，旧石器時代の石器が出土したほか，古墳時代前期の七獣形鏡や玉類，後期の古墳群，縄文時代から平安時代にかけての集落跡が発見されるなど，この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行にあたり，この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成17年３月

財団法人千葉県文化財センター
理事長　清水新次

凡　　例

1　本書は，独立行政法人都市再生機構千葉地域支社（旧都市基盤整備公団）による千葉東南部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉市緑区おゆみ野中央７丁目９番地他（旧千葉市小金沢町297他）に所在する小金沢古墳群（遺跡コード 201-217）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，独立行政法人都市再生機構千葉地域支社の委託を受け，財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の組織，担当者及び実施期間は，第１章に記載した。

5　本書の執筆は，以下のとおりである。

関口達彦　第１章，第２章，第３章第１節から第４節，第４章，第５章

大内千年　第３章第５節　　西野雅人　付章

編集は関口が担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，独立行政法人都市再生機構千葉地域支社，千葉市教育委員会ほか多くの方々から御指導，御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は，下記のとおりである。

第１図　国土地理院発行　1:50,000　千葉　平成12年９月発行

8　本書で使用した周辺航空写真は，京葉測量株式会社が昭和47年に撮影したものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は，すべて座標北である。座標系は，日本測地系を使用した。

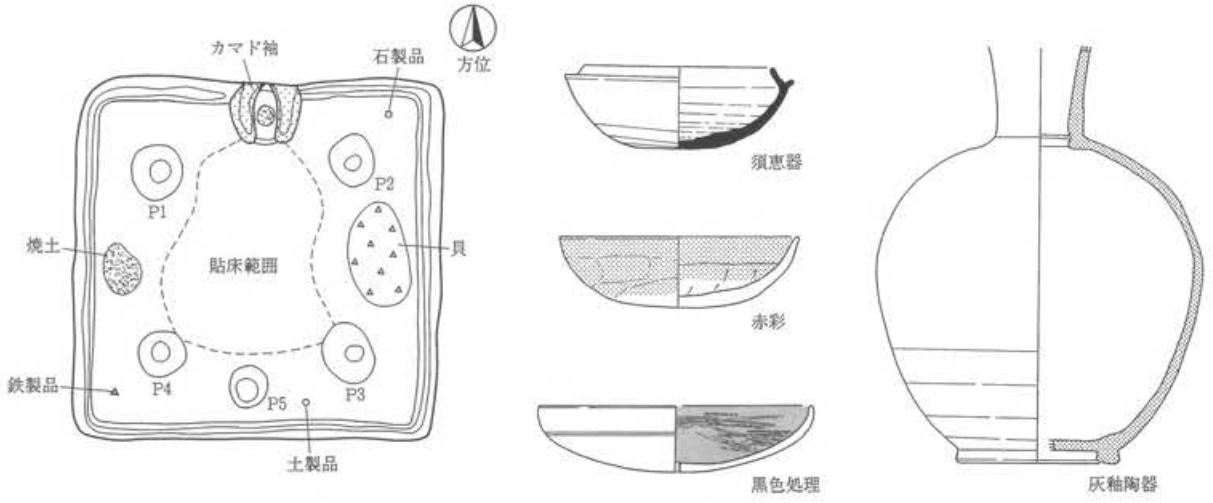
10　本書の遺構及び遺物の縮尺は，以下を基準とするが，作図の都合で統一されなかったものもある。

旧石器時代ブロック・竪穴住居跡・炉穴・方形周溝　1/80　　陥穴・土坑・土坑墓　1/60

古墳　1/200　　埋葬施設　1/50　　方形周溝　1/200

土器・支脚　1/4　石器　2/3・1/3　拓影　1/3　土製品・石製品・金属製品・玉類　1/2・1/1

11　本書の挿図の用例は，次のとおりである。住居跡の基本的な柱穴等の符号は以下のとおりであるが，これ以外の配列については挿図中に示した。



本　文　目　次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　遺跡の位置と周辺の遺跡……2
　第３節　調査の方法と経過……6
第２章　旧石器時代……12
　第１節　調査の概要……12
　第２節　基本土層……14
　第３節　石器群の分布と出土遺物……14
第３章　縄文時代……67
　第１節　竪穴住居跡……67
　第２節　埋設土器……68
　第３節　陥穴……69
　第４節　炉穴……73
　第５節　グリッド出土遺物……80
第４章　古墳時代以降……137
　第１節　古墳……137
　第２節　竪穴住居跡……167
　第３節　土坑墓・土坑……188
　第４節　方形周溝……190
　第５節　土器集中地点……191
　第６節　遺構外出土遺物……191
第５章　まとめ……194
付　章　貝サンプルの分析結果……211
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　千葉東南部地区事業範囲位置図……3
第２図　千葉東南部地区遺跡分布図……5
第３図　調査区及び周辺地形図……7
第４図　遺跡全体図……9
第５図　遺構配置図(1)……10
第６図　遺構配置図(2)……11
第７図　旧石器時代調査概要図……13
第８図　基本土層図……14
第９図　第１ブロック遺物分布図……15
第10図　第１ブロック母岩別分布図……16
第11図　第１ブロック出土遺物(1)……18
第12図　第１ブロック出土遺物(2)……19
第13図　第２ブロック遺物分布図・
　　出土遺物実測図……20

第14図　第３ブロック遺物分布図・
出土遺物実測図……21
第15図　第４ブロック遺物分布図……23
第16図　第４ブロック母岩別分布図……24
第17図　第４ブロック出土遺物(1) ……26
第18図　第４ブロック出土遺物(2) ……27
第19図　第４ブロック出土遺物(3) ……28
第20図　第５ブロック遺物分布図……30
第21図　第５ブロック出土遺物……31
第22図　第６ブロック遺物分布図……33
第23図　第６ブロック出土遺物(1) ……34
第24図　第６ブロック出土遺物(2) ……35
第25図　第６ブロック出土遺物(3) ……36
第26図　第７ブロック遺物分布図……38
第27図　第７ブロック母岩別分布図……39
第28図　第７ブロック・ブロック外
遺物接合状況図……40
第29図　第７ブロック出土遺物(1) ……43
第30図　第７ブロック出土遺物(2) ……44
第31図　第７ブロック出土遺物(3) ……45
第32図　第７ブロック出土遺物(4) ……46
第33図　地点外・単独出土遺物分布図(1) ……48
第34図　地点外・単独出土遺物分布図(2) ……49
第35図　地点外・単独出土遺物分布図(3) ……50
第36図　地点外・単独出土遺物(1) ……51
第37図　地点外・単独出土遺物(2) ……52
第38図　地点外・単独出土遺物(3) ……53
第39図　地点外・単独出土遺物(4) ……54
第40図　地点外・単独出土遺物(5) ……55
第41図　地点外・単独出土遺物(6) ……56
第42図　地点外・単独出土遺物(7) ……57
第43図　045及び出土遺物 ……67
第44図　050A及び050A･B出土遺物 ……68
第45図　陥穴(1) ……70
第46図　陥穴(2) ……71
第47図　陥穴(3) ……72
第48図　炉穴(1) ……74
第49図　炉穴(2) ……76
第50図　炉穴(3) ……77
第51図　炉穴(4) ……78
第52図　炉穴(5) ……79
第53図　グリッド出土縄文土器(1) ……81
第54図　グリッド出土縄文土器(2) ……83
第55図　グリッド出土縄文土器(3) ……85
第56図　グリッド出土縄文土器(4) ……86
第57図　グリッド出土縄文土器(5) ……87
第58図　グリッド出土縄文土器(6) ……89
第59図　グリッド出土縄文土器(7) ……90
第60図　グリッド出土縄文土器(8) ……92
第61図　グリッド出土縄文土器(9) ……93
第62図　グリッド出土縄文土器(10)……94
第63図　グリッド出土縄文土器(11)……96
第64図　グリッド出土縄文土器(12)……97
第65図　グリッド出土縄文土器(13)……98
第66図　グリッド出土縄文土器(14) ……100
第67図　グリッド出土縄文土器(15) ……101
第68図　グリッド出土縄文土器(16) ……103
第69図　グリッド出土縄文土器(17) ……105
第70図　グリッド出土縄文土器(18) ……106
第71図　グリッド出土縄文土器(19) ……107
第72図　グリッド出土縄文土器(20) ……108
第73図　グリッド出土縄文土器(21) ……109
第74図　グリッド出土縄文土器(22) ……110
第75図　グリッド出土縄文土器(23) ……111
第76図　グリッド出土縄文土器(24) ……112
第77図　グリッド出土縄文土器(25) ……113
第78図　グリッド出土縄文土器(26) ……115
第79図　グリッド出土縄文土器(27) ……116
第80図　縄文時代土製品 ……117
第81図　縄文時代石器(1)……129
第82図　縄文時代石器(2)……130
第83図　縄文時代石器(3)……131
第84図　縄文時代石器(4)……132
第85図　縄文時代石器(5)……133

第86図　縄文時代石器(6)……134
第87図　21・22号墳現況測量図 ……137
第88図　21号墳全体図 ……138
第89図　21号墳墳丘及び周溝内出土遺物 ……139
第90図　21号墳石室及び遺物出土状況 ……140
第91図　21号墳石室展開図 ……141
第92図　21号墳出土遺物 ……143
第93図　22号墳全体図 ……144
第94図　22号墳墳丘及び周溝内出土遺物 ……145
第95図　22号墳石室及び遺物出土状況 ……146
第96図　22号墳出土遺物 ……147
第97図　23号墳全体図及び墳丘内出土遺物 …149
第98図　23号墳石室 ……150
第99図　23号墳遺物出土状況及び出土遺物 …152
第100図　1号墳全体図……153
第101図　1号墳周溝内遺物出土状況……154
第102図　1号墳周溝内出土遺物……155
第103図　1号墳石室……157
第104図　1号墳石室遺物出土状況……158
第105図　1号墳石室内出土遺物……159
第106図　25号墳石室及び出土遺物……161
第107図　24号墳遺物出土状況……163
第108図　24号墳出土遺物……164
第109図　009及び出土遺物(1)……168
第110図　009出土遺物(2)……169
第111図　010 ……170
第112図　010カマド ……171
第113図　010出土遺物(1)……172
第114図　010出土遺物(2)……173
第115図　011 ……174
第116図　011出土遺物 ……175
第117図　014及び出土遺物 ……176
第118図　017 ……177
第119図　017出土遺物 ……178
第120図　018及び出土遺物 ……180
第121図　035及び出土遺物 ……181
第122図　037 ……182
第123図　037出土遺物 ……183
第124図　052 ……184
第125図　052出土遺物 ……185
第126図　102及び出土遺物 ……186
第127図　103及び出土遺物 ……187
第128図　土坑墓・土坑……189
第129図　016 ……191
第130図　土器集中地点出土遺物……192
第131図　遺構外出土遺物……193
第132図　貝種組成……212
第133図　貝類計測値分布……213
第134図　マガキ計測値分布……215

表　目　次

第1表　第1ブロック出土遺物組成表……19
第2表　第2ブロック出土遺物組成表……20
第3表　第3ブロック出土遺物組成表……21
第4表　第4ブロック出土遺物組成表……29
第5表　第5ブロック出土遺物組成表……32
第6表　第6ブロック出土遺物組成表……36
第7表　第7ブロック出土遺物組成表……47
第8表　第1ブロック出土遺物属性表……59
第9表　第2ブロック出土遺物属性表……59
第10表　第3ブロック出土遺物属性表……59
第11表　第4ブロック出土遺物属性表……59
第12表　第5ブロック出土遺物属性表……61
第13表　第6ブロック出土遺物属性表……62
第14表　第7ブロック出土遺物属性表……63
第15表　地点外・単独出土遺物属性表……65
第16表　陥穴一覧……69

第17表　縄文土器観察表 ……119
第18表　縄文時代土製品計測表 ……134
第19表　縄文時代石器計測表 ……135
第20表　耳環計測表 ……143
第21表　21号墳鉄鏃計測表 ……143
第22表　22号墳鉄鏃計測表 ……148
第23表　23号墳鉄鏃計測表 ……151
第24表　1号墳大刀計測表 ……159
第25表　1号墳鉄鏃計測表 ……159
第26表　25号墳鉄鏃計測表 ……160
第27表　24号墳玉類計測表 ……166
第28表　小金沢古墳群一覧 ……194
第29表　小金沢古墳群出土副葬品一覧 ……195
第30表　複合鋸歯文をもつ鏡 ……198
第31表　関連する古墳の副葬品 ……200
第32表　古墳出土土器観察表 ……202
第33表　住居跡・土坑・遺構外出土
　　土器観察表 ……204
第34表　小金沢古墳群貝サンプル ……212
第35表　貝類種名一覧 ……212
第36表　貝類同定結果 ……212
第37表　ウミニナ属計測値 ……212
第38表　貝類計測値分布 ……214

図　版　目　次

巻頭図版　24号墳出土七獣形鏡・玉類
付図版　107出土のウミニナ類
図版1　遺跡周辺航空写真
図版2　遺跡全景
図版3　調査前状況
図版4　旧石器時代遺物出土状況
図版5　縄文時代遺構(1)
図版6　縄文時代遺構(2)
図版7　21号墳，22号墳
　　21号墳石室全景
図版8　21号墳
図版9　22号墳
図版10　23号墳
　　24号墳銅鏡出土状況
図版11　1号墳
図版12　25号墳
図版13　009・010・011
図版14　014・017
図版15　018・025土器集中地点
図版16　035・037・052
図版17　102・103
図版18　005・030・004・002・123・125・016
図版19　第1ブロック出土遺物
　　第6ブロック出土遺物
図版20　第4ブロック出土遺物(1)
図版21　第4ブロック出土遺物(2)
図版22　第5ブロック出土遺物
　　第7ブロック出土遺物(1)
図版23　第7ブロック出土遺物(2)
図版24　第7ブロック出土遺物(3)
図版25　地点外・単独出土遺物(1)
図版26　地点外・単独出土遺物(2)
図版27　地点外・単独出土遺物(3)
図版28　地点外・単独出土遺物(4)
図版29　炉穴出土土器
図版30　縄文土器(1)
図版31　縄文土器(2)
図版32　縄文土器(3)
図版33　縄文土器(4)
図版34　縄文土器(5)
図版35　縄文土器(6)

図版36　縄文土器(7)
図版37　縄文土器(8)
図版38　縄文土器(9)
図版39　縄文土器(10)
図版40　縄文土器(11)
図版41　縄文土器(12)
図版42　縄文土器(13)，土製品
図版43　縄文時代石器(1)
図版44　縄文時代石器(2)
図版45　縄文時代石器(3)
図版46　古墳出土土器(1)
図版47　古墳出土土器(2)
図版48　古墳出土鉄製品
図版49　１号墳出土鉄製品
図版50　24号墳出土七獣形鏡
図版51　24号墳出土玉類
　　石製紡錘車・玉類・土玉
図版52　古墳時代出土土器(1)
図版53　古墳時代出土土器(2)
図版54　古墳時代出土土器(3)
図版55　奈良・平安時代出土土器(1)
図版56　奈良・平安時代出土土器(2)
　　土坑出土土器
図版57　土器集中地点・遺構外出土遺物

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

住宅・都市整備公団（現独立行政法人都市再生機構）は，首都圏の人口増加に対応するため，千葉東南部地区土地区画整理事業として大規模な宅地造成を計画した。このため，千葉県教育委員会では昭和46年に実施した事業地内の遺跡分布調査の結果に基づき，所在する埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議を重ねてきた。その結果，可能な限り公園や緑地として現状保存をはかる一方，やむを得ず現状保存が困難な遺跡については記録保存の措置を講ずることとなり，財団法人千葉県文化財センターが住宅・都市整備公団から委託を受け，発掘調査を実施してきた。

今回報告する小金沢古墳群は，記録保存の措置を講ずることで協議が整い，18,000㎡を対象に当文化財センターが昭和62年度と平成4年度の2次にわたって発掘調査を実施した遺跡である。小金沢古墳群の一部は，すでに昭和51・52年度に今回の調査区の東側の範囲を発掘調査し，その成果は『千葉東南部ニュータウン8』として刊行されている。さらに，北側に展開する小金沢貝塚に分布していた古墳群の支群の調査成果については，『千葉東南部ニュータウン10』として刊行した。今回の調査の結果，旧石器時代の石器集中地点6か所，縄文時代の竪穴住居跡1軒・埋設土器2基・陥穴14基・炉穴26基，古墳時代の竪穴住居跡6軒・古墳及び埋葬施設6基(うち1基は一部既報告)・土坑墓2基，奈良･平安時代の竪穴住居跡5軒・土坑墓4基・方形周溝1基などを検出した。なお，昭和51・52年度の第1次調査の際に，道路下のため未調査であった1号墳の周溝と石室の一部及び25号墳(石室のみの遺存)については，平成3年度に行われた隣接する御塚台遺跡の第4次調査で調査したが，小金沢古墳群に含まれるため，今回の報告書に収録することとした。

発掘調査の終了後，平成6年度に水洗・注記を行い，平成7年度からは本格的な整理作業が開始され，平成16年度をもって報告書刊行の運びとなった。発掘調査及び整理作業の各年度の実施期間，組織及び作業内容は下記のとおりである。

発掘調査

昭和62年度

期　　間　　昭和62年4月1日から昭和63年3月31日

組　　織　　班　長　阪田正一

担当職員　主任調査研究員　川島利道　鈴木康夫　　調査研究員　糸川道行

内　　容　　確認調査　上層1,247㎡　下層600㎡，本調査 上層10.000㎡　下層0㎡

平成4年度

期　　間　　平成4年4月1日から平成4年6月25日

組　　織　　班　長　矢戸三男

担当職員　研究員　斉藤　茂　　主任技師　川島利道　麻生正信

内　　容　　確認調査　上層－㎡　下層132㎡，本調査 上層3,000㎡　下層100㎡

整理作業

平成7年度

期　　間　　平成7年4月3日から平成8年3月29日

組　　織　　千葉調査事務所長　矢戸三男

内　　容　　記録整理から復元の一部

平成10年度

（重点遺跡整理促進事業）

期　　間　　平成10年７月１日から平成11年３月31日

組　　織　　整理課長　佐久間　豊

担当職員　主任技師　渡邉修一　　整理技術員　大久保奈奈

内　　容　　実測から写真撮影の一部

平成11年度

（重点遺跡整理促進事業）

期　　間　　平成11年４月１日～平成11年６月30日

組　　織　　整理課長　古内　茂

担当職員　主任技師　渡邉修一　　整理技術員　平井真紀子

内　　容　　実測から写真撮影の一部

平成15年度

（重点遺跡整理促進事業）

期　　間　　平成15年９月１日～平成15年10月15日

組　　織　　整理課長　深澤克友

担当職員　上席研究員　渡邉修一　　整理技術員　山岡磨由子

内　　容　　分類・選別から挿図・図版作成（下層）

平成16年度

期　　間　　平成16年５月１日から平成16年７月31日

組　　織　　中央調査事務所長　谷　旬

担当職員　主席研究員　関口達彦

内　　容　　挿図・図版作成の一部から報告書刊行

第２節　遺跡の位置と周辺の遺跡

１　遺跡の位置（第１図）

小金沢古墳群は，千葉市緑区おゆみ野中央７丁目９番地他に所在する。

緑区は千葉市の東南部に位置し，南は村田川を境として市原市と接し，ＪＲ外房線や千葉東金道路，千葉外房有料道路などが通っている。本遺跡の所在する千葉東南部地区は，ＪＲ外房線鎌取駅の南側に広がり，現在も「おゆみ野」として新しい街づくりが展開している地域である。

千葉市は千葉県の北東部に位置し，東京湾を西に臨み，内陸には房総半島の北部一帯を占める広大な下総台地が展開している。この台地は無数の小支谷によって開析され，東京湾岸には海岸平野，三角州などの沖積低地が形成されている。千葉東南部地区は，千葉市と市原市の境を流れ東京湾に流入する村田川の下流域右岸に位置し，台地はこの村田川に注ぎ込む支谷によって樹枝状に複雑に開析されている。

小金沢古墳群は，このような支谷の一つである小金沢支谷の最奥部で，北へ分岐した萩ノ作支谷に張り

第１図　千葉東南部地区事業範囲位置図

出した舌状台地上に位置している。この台地は，萩ノ作支谷から侵入した短い支谷に南北を挟まれ，西側へ大きく張り出している。北側は泉支谷から長く延びた谷津に開析され，東側からは鍋田谷津が侵入している。舌状台地は狭長で，東西200m，南北35m～60mの広さをもつ。台地は尾根状で，ほぼ平坦な中央部は狭く周囲は緩斜面に連続する。標高は40m～42m，谷部との比高は約20mである。舌状台地基部の東側は小金沢古墳(第1次)が展開し，北側は小金沢貝塚，南側は御塚台遺跡が位置する台地に，それぞれ連なっている。鍋田谷津を挟んだ東側の台地上にはムコアラク遺跡が位置している。

2　周辺の遺跡（第2図）

千葉東南部地区内の遺跡の多くは，旧石器時代から中・近世までの遺構・遺物を複合的に伴っており，特定の時期に限られた単純な遺跡はきわめて少ない。なかでも，縄文時代の大型貝塚や古墳時代後期の集落跡や古墳群，奈良・平安時代の集落跡などが密集しているのが特徴的である。

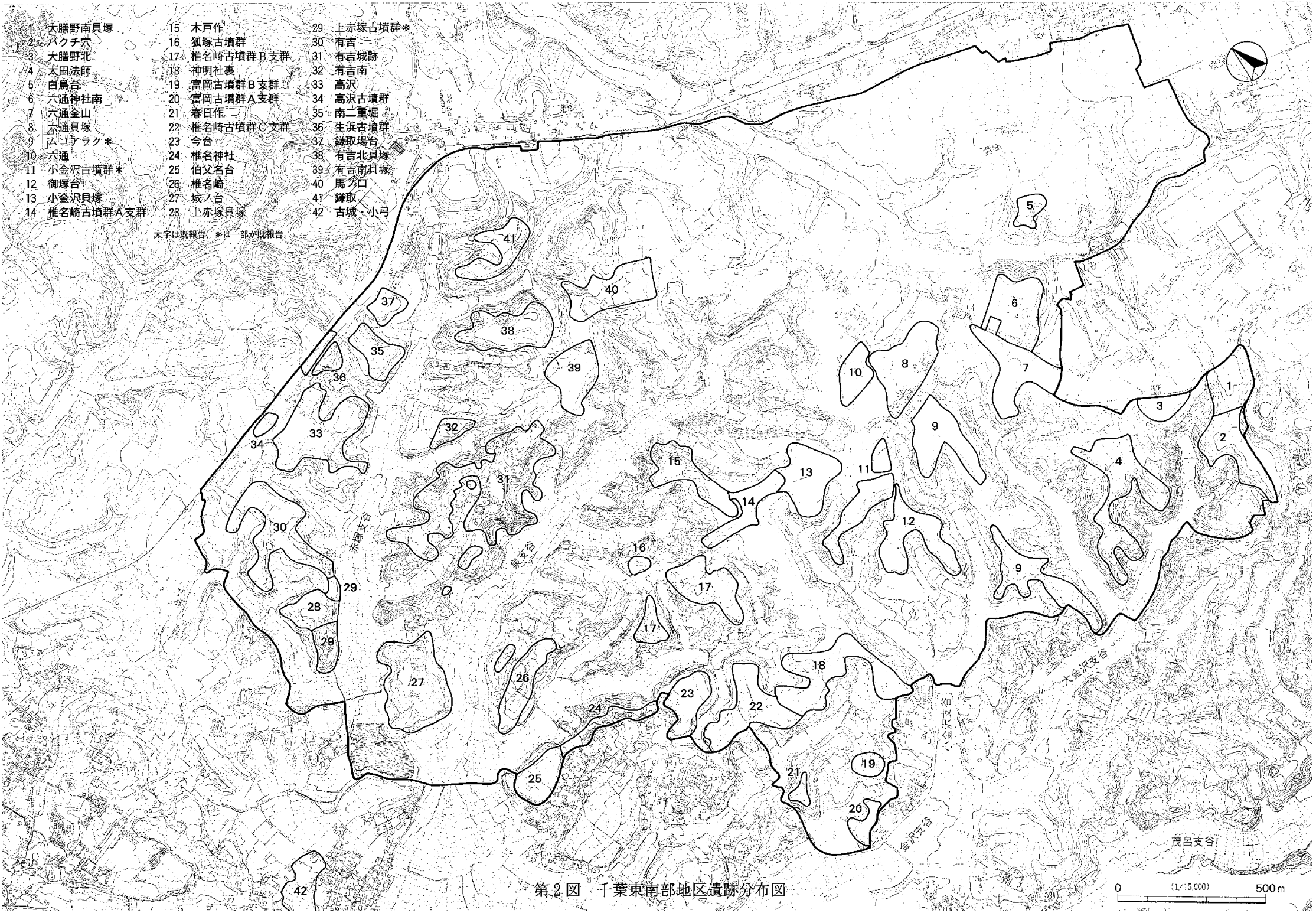
旧石器時代の遺物は，地区内で調査されたほとんどの遺跡から出土している。規模が比較的大きなものとしては，有吉城跡，太田法師遺跡，椎名崎古墳群B支群，神明社裏遺跡などがあげられる。なかでも神明社裏遺跡からは，ナイフ形石器・掻器・石核・尖頭器・剥片などが多量に出土している。

縄文時代には，中期から晩期の大型貝塚の他にも各時期にわたって各種の遺構や遺物が数多く検出されている。早期の炉穴は御塚台遺跡など，多数の遺跡から検出されている。前期では，地区内の北西に位置する南二重堀遺跡，鎌取遺跡，有吉城跡で竪穴住居跡が若干検出されている。中期には，ほとんどの遺跡に遺物の散布がみられ，特に上赤塚貝塚，有吉北貝塚，有吉南貝塚など大規模な貝塚が集中してみられ，多数の竪穴住居跡や土坑群を伴う大集落が形成されている。後期には，木戸作貝塚，小金沢貝塚，六通貝塚等，引き続き大規模貝塚が形成されているが，中期ほどの厖大な遺構を伴う大集落は形成されなくなる。晩期には，遺跡数は激減するが，六通貝塚などで良好な遺物包含層等が検出されている。また，高沢遺跡では遺構は確認されなかったが，晩期終末の荒海式土器がまとまって検出されており注目される。

弥生時代は，地区内の遺跡が極端に少なくなる。有吉遺跡やバクチ穴遺跡などで遺構が検出されているにすぎず，遺物の出土も極めて少ない。市原市草刈遺跡などの大規模集落群に，周辺地域の小集落が集約されることもその原因の一つと考えられる。また，村田川下流域の海岸平野の低地一帯に集落が展開している可能性も考慮される。

古墳時代に入ると新たな集落跡が展開する。前期から中期の遺跡は，地区北西側に集中していることが特徴的である。なかでも，南二重堀遺跡，城ノ台遺跡，鎌取遺跡，馬ノ口遺跡などで竪穴住居跡が検出されている。後期では，有吉遺跡，高沢遺跡，有吉北貝塚，城ノ台遺跡で多くの竪穴住居跡が検出されるなど，大規模集落が展開するようになる。古墳は，地区内において約290基が確認されている。前・中期の古墳では，石枕などが出土した上赤塚1号墳をはじめとする上赤塚古墳群や馬ノ口遺跡の方墳，椎名崎古墳群C支群の円墳などが検出されている。後期になると，有吉遺跡，生浜古墳群，南二重堀遺跡などでは，有吉遺跡と高沢遺跡の大集落と重複せずに明らかな墓域として大規模古墳群が営まれる。さらに，椎名崎古墳群のように人形塚古墳をはじめとする，地区内で最も大規模な古墳群が造営されようになる。

奈良・平安時代の遺跡は，古墳後期から連続する大規模な集落が多い。特に，地区北西部に位置する有吉遺跡，高沢遺跡，椎名崎遺跡では古墳時代より集落の規模は大きくなる。鉄製品の保有率も高く，それぞれの遺跡に特徴的な墨書土器なども出土している。また，大金沢支谷の太田法師遺跡では，砂鉄などの



第２図　千葉東南部地区遺跡分布図

原料に恵まれた立地条件のため，鍛治関連遺構が多数検出されている。有吉城跡，今台遺跡などでは，小鍛治遺構を伴う遺跡もわずかながら存在している。

中世以降では，伯父名台遺跡，有吉城，城ノ台遺跡，有吉北貝塚などから，台地整形区画・土坑墓・火葬墓・地下式坑などが検出されている。周辺には小弓城などもあり，中世では軍事，交通の上で要衝の地域であったことが窺える。

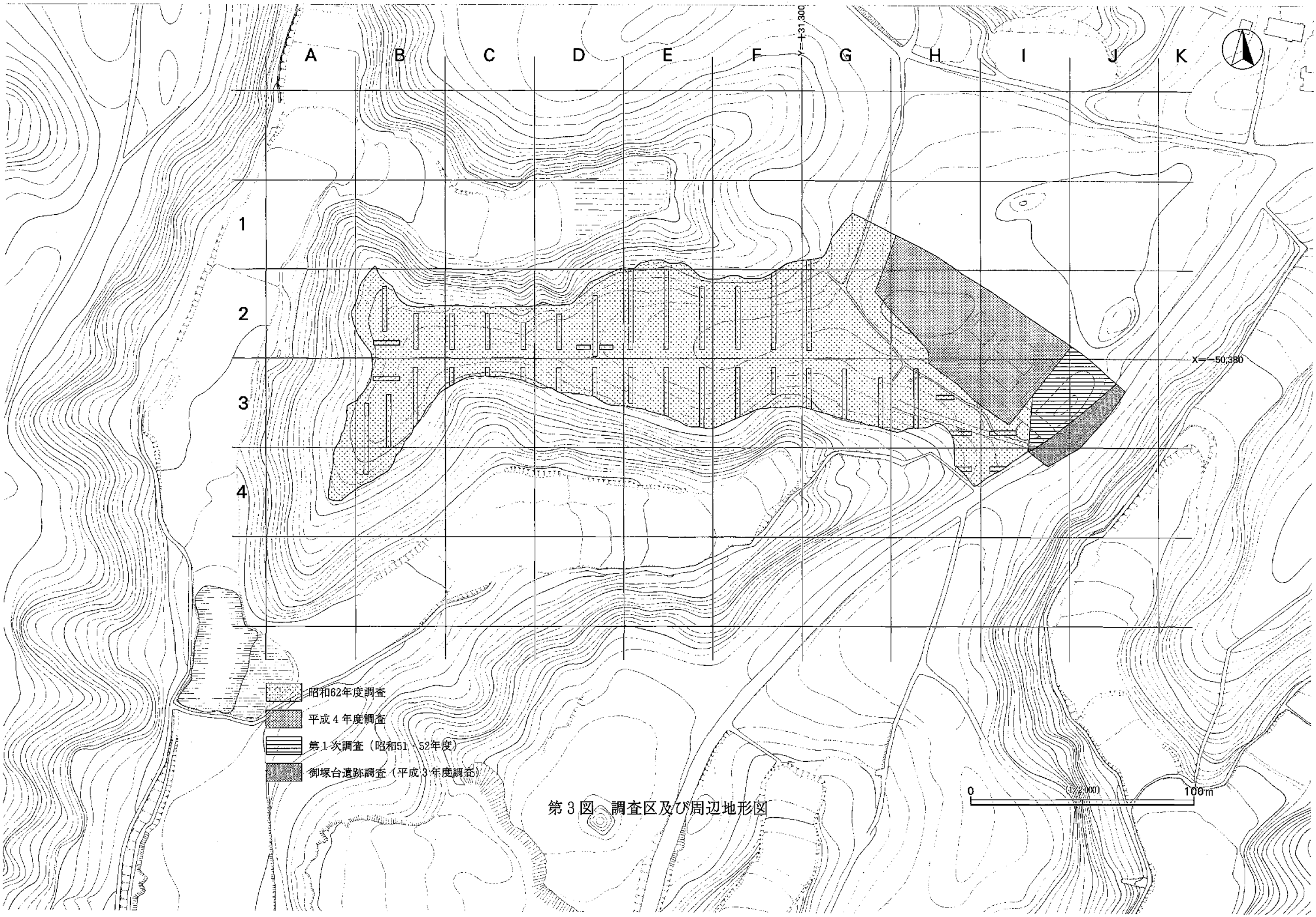
第３節　調査の方法と経過（第３図）

発掘調査に先行して，公共座標（第Ⅸ系）を基準に，調査対象範囲全域に40ｍ×４０ｍの方眼網を設定し基準点測量を行った。これを大グリッドとし，北西に起点を置いて，東西のＹ軸は西から順にＡ，Ｂ，‥‥Ｆ，南北のＸ軸は北から順に１，２，３，４と付した。さらに，この大グリッドを４ｍ×４ｍの小グリッド100区画に分割し，北西隅を起点に01，02と順に付し南東隅を99とした。従って小グリッドの呼称は，例えば1A-25などとなる。

昭和62年度は15,000㎡を対象に，上層の確認調査を昭和62年５月６日から６月22日まで行った。３基の古墳の範囲を除く12,477㎡の10％について，幅２ｍの確認トレンチを設定し重機による表土除去を行った後，遺構・遺物の検出状況を確認した。その結果，調査区の縁辺部を除く範囲から，縄文時代早期の陥穴・炉穴，古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡などが確認された。本調査は，遺構の検出されなかった台地縁辺部を除く10,000㎡と古墳３基を対象に実施することとなり，確認調査に引き続き昭和63年３月31日まで行った。また，下層の確認調査は，上層の本調査に並行して昭和63年１月22日から同年３月12日まで行った。上層調査区の約４％について，調査区域全域に２ｍ×２ｍのグリッドを設定し，立川ローム層下部まで人力で掘削して，石器等の有無を確認した。その結果，６か所で石器が出土したため，さらに周辺を拡張して石器の広がりを確認したが，それ以上の出土がみられず確認調査の段階で調査を終了した。

平成４年度は，昭和62年度の調査区の東側3,000㎡を対象に，平成４年４月１日から６月25日まで調査を実施した。これまでの調査から，上層の遺構が今回の調査区に広がることは明らかなため，直ちに本調査を行った。その結果，縄文時代早期の陥穴・炉穴，平安時代の竪穴住居跡などを検出した。また，下層の確認調査は，上層の本調査に並行して５月11日から５月22日まで前回と同様の調査方法で実施した。その結果，２か所で石器の出土が確認された。このうち複数の石器が出土した１か所については，さらに周辺を拡張して石器の広がりを明らかにし，本調査の範囲を確定した。本調査は100㎡を対象に行い，Ⅲ層～Ⅳ層からナイフ形石器などが出土した。

遺構番号は，発掘調査時の番号を極力使用することにしたが，調査年次が複数年度にわたるため，平成４年度調査の遺構番号については，整理作業の際に新たに100番台の遺構番号を付している。また，一部の遺構は欠番にするなどの変更を行っている。また，古墳は小金沢古墳群の調査として，第１次調査（１号墳～６号墳），小金沢貝塚内支群の調査（７号墳～20号墳）の番号を継続し，21号墳から付している。

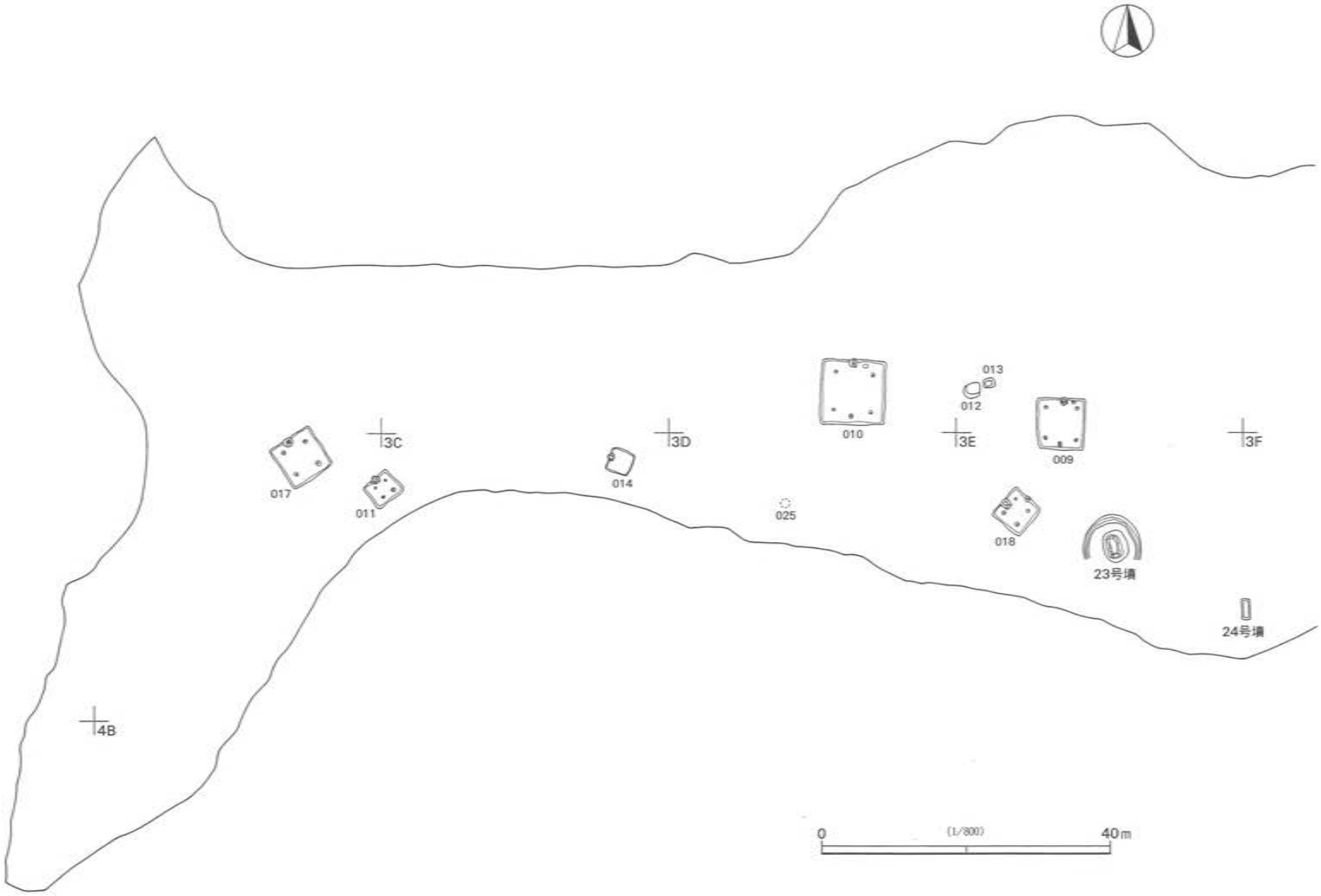


第３図　調査区及び周辺地形図

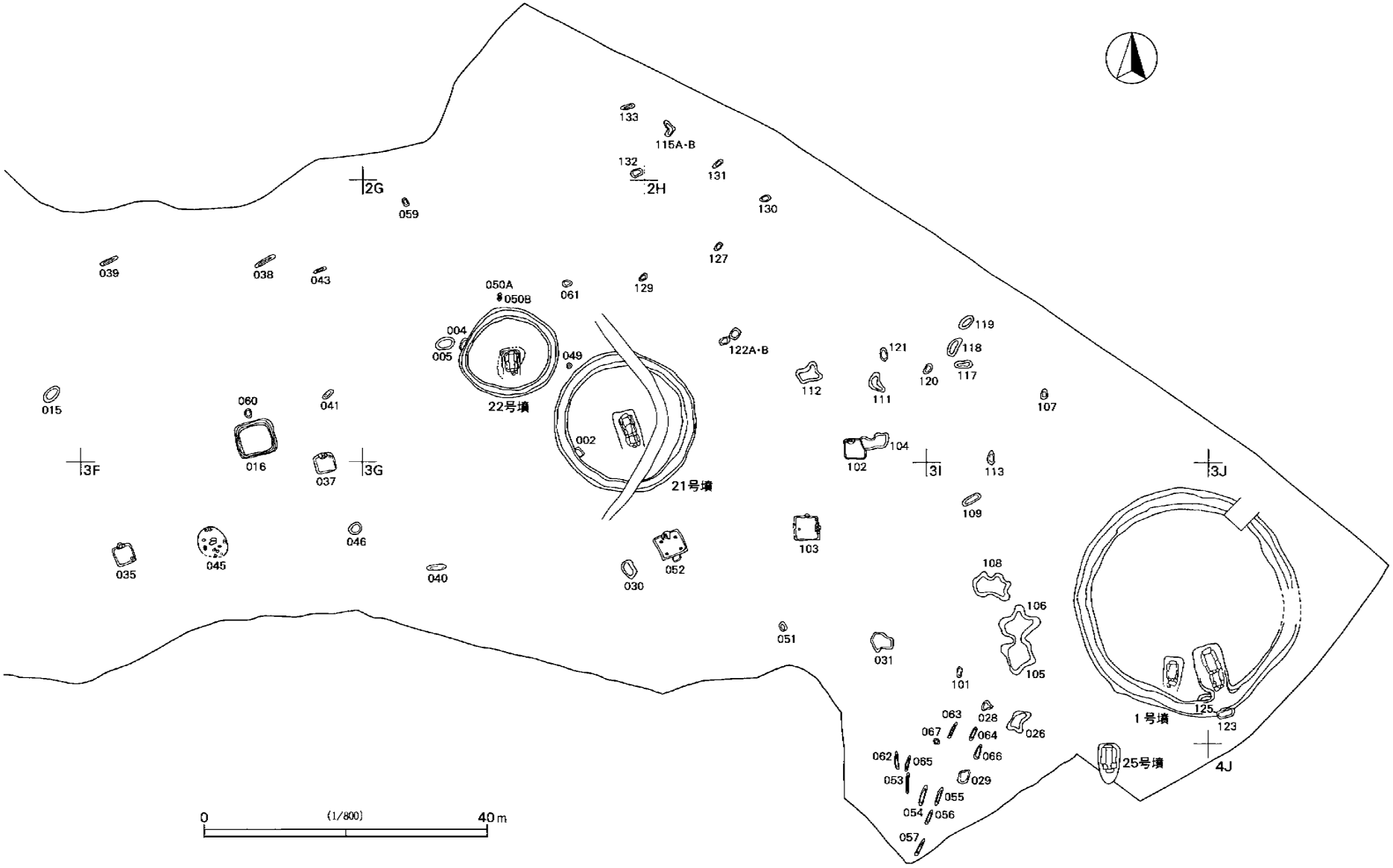
参考文献

(財) 千葉県文化財センター1975『千葉東南部ニュータウン１－椎名崎古墳群(第１次)－』
(財) 千葉県文化財センター1975『千葉東南部ニュータウン２－木戸作遺跡(第１次)－』
(財) 千葉県文化財センター1975『千葉東南部ニュータウン３－有吉遺跡(第１次)－』
(財) 千葉県文化財センター1977『千葉東南部ニュータウン４－生浜古墳群－』
(財) 千葉県文化財センター1978『千葉東南部ニュータウン５－有吉遺跡(第２次)－』
(財) 千葉県文化財センター1979『千葉東南部ニュータウン６－椎名崎遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター1979『千葉東南部ニュータウン７－木戸作遺跡(第２次)－』
(財) 千葉県文化財センター1979『千葉東南部ニュータウン８－ムコアラク遺跡・小金沢古墳群－』
(財) 千葉県文化財センター1980『千葉東南部ニュータウン９－六通遺跡・御塚台遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター1982『千葉東南部ニュータウン10－小金沢貝塚－』
(財) 千葉県文化財センター1981『千葉東南部ニュータウン11－六通金山遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター1983『千葉東南部ニュータウン12－南二重堀遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター1982『千葉東南部ニュータウン13－上赤塚１号墳・狐塚古墳群－』
(財) 千葉県文化財センター1983『千葉東南部ニュータウン14－バクチ穴遺跡・有吉遺跡(第３次)・有吉南遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター1984『千葉東南部ニュータウン15－馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター1985『千葉東南部ニュータウン16－大膳野北遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター1990『千葉東南部ニュータウン17－高沢遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター1993『千葉東南部ニュータウン18－鎌取遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター1998『千葉東南部ニュータウン19－千葉市有吉北貝塚１－』
(財) 千葉県文化財センター1998『千葉東南部ニュータウン20－千葉市有吉北貝塚２－』
(財) 千葉県文化財センター1999『千葉東南部ニュータウン21－千葉市有吉遺跡(第４次)・高沢古墳群－』
(財) 千葉県文化財センター1999『千葉東南部ニュータウン22－鎌取場台遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター2001『千葉東南部ニュータウン23－千葉市太田法師遺跡２－』
(財) 千葉県文化財センター2002『千葉東南部ニュータウン24－千葉市富岡古墳群・富岡古墳群Ｂ支群－』
(財) 千葉県文化財センター2002『千葉東南部ニュータウン25－千葉市有吉城Ｉ－』
(財) 千葉県文化財センター2003『千葉東南部ニュータウン26－千葉市椎名神社遺跡・古城小弓遺跡・
六通神社南遺跡・御塚台遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター2003『千葉東南部ニュータウン27－千葉市春日作遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター2004『千葉東南部ニュータウン28－千葉市今台遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター2004『千葉東南部ニュータウン29－千葉市バクチ穴遺跡・大膳野南貝塚・有吉城２－』
(財) 千葉県文化財センター2004『千葉東南部ニュータウン30－千葉市伯父名台遺跡－』

第4図　遺跡全体図


3C
3D
3E
3F
4B
017
011
014
025
010
012
013
009
018
23号墳
24号墳
0
(1/800)
40m

第5図　遺構配置図(1)


133
115A-B
132
131
2H
2G
059
130
127
039
038
043
050A
050B
061
129
004
005
049
122A-B
119
121
118
117
120
112
111
107
015
060
041
22号墳
002
104
102
3F
016
037
3G
21号墳
3I
113
3J
109
046
103
035
045
040
052
030
108
106
051
031
105
101
063
028
026
067
064
062
065
066
053
029
055
054
056
057
1号墳
125
123
25号墳
4J
0
(1/800)
40m

第6図　遺構配置図(2)

第2章　旧石器時代

第1節　調査の概要（第7図）

小金沢古墳群の下層調査は，昭和62年度・平成4年度に実施した。調査概要は以下のとおりである。

昭和62年度は，15,000㎡を対象として600㎡の確認調査を実施した。その結果，6か所で石器が出土したため，周辺に調査範囲を拡張し，分布の広がりを確認したが，それ以上の出土が見られず，確認調査の段階で調査を終了した。ブロックはいずれも舌状台地上に分布しており，両側を開析谷にはさまれている。

ブロックは西側から順に第1ブロック～第5ブロック，第7ブロックである。

第1ブロックの遺物の主な出土層準はⅥ層～Ⅶ層である。両設打面の不整円筒形の石刃核と，その石刃核と同一母岩の二側縁加工のナイフ形石器が出土している。石材組成は石英安山岩(トロトロ石)3点・流紋岩2点・ホルンフェルス3点・白滝頁岩17点である。

第2・3ブロックから出土した遺物はわずかである。第2ブロックはⅥ層・Ⅸa層から，第3ブロックはⅨa層・Ⅸb層から石器が出土している。tool類は第3ブロックで削器が1点見られるのみである。第2ブロックの石材組成は黒色緻密質安山岩1点・チャート3点(黒色珪質頁岩の可能性もある)，第3ブロックの石材組成は，黒色緻密質安山岩1点・流紋岩1点・黒色頁岩1点・玉髄1点である。

第4ブロックの遺物はⅡc層からⅢ層の上面に及ぶ。石材組成は，黒色緻密質安山岩115点(うち礫3点)・石英安山岩1点・黒曜石4点・粘板岩1点・チャート2点・鉄石英(赤：チャート2と分類)1点・ホルンフェルス39点である。黒色緻密質安山岩製の剥片・礫片素材の両面加工・片面加工の尖頭器と，ホルンフェルス製の礫素材の両面加工尖頭器が主なtool類である。

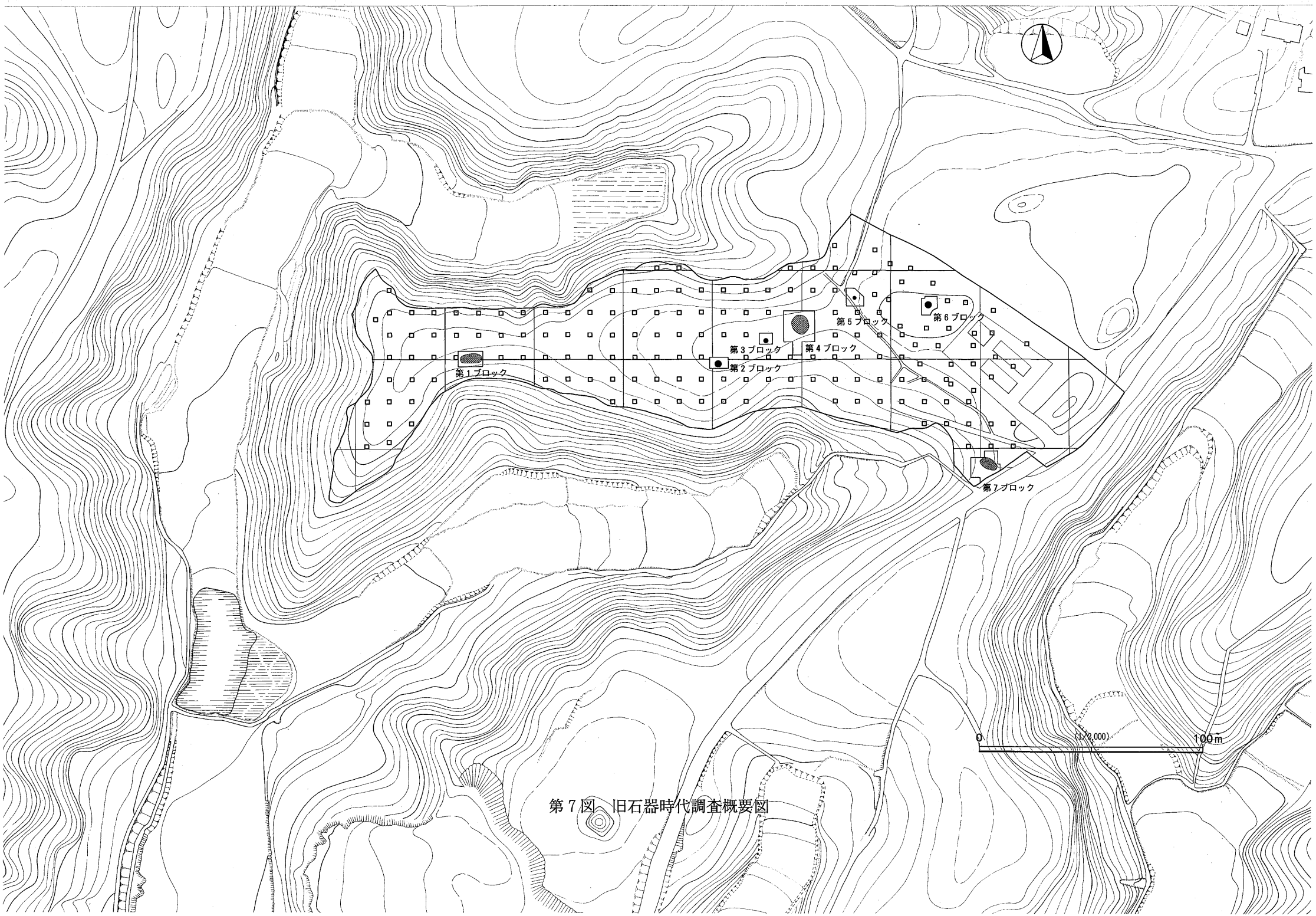
前者が割り取り系であるのに対し，後者が割り出し系である。また両者ともに遺跡内に原石を搬入して，尖頭器製作を行っている。房総半島で本層準から出土している石器群は，尖頭器石器群F(田村2003)であり，神子柴型尖頭器や本ノ木型尖頭器に対比される資料である。本ブロックは遺跡内に原石を搬入して尖頭器製作を行っていること，割り取り系の尖頭器が存在している点で，尖頭器石器群Fとは異なる。利用している石材は，尖頭器石器群Fと共通する第四紀礫層起源の黒色緻密質安山岩・ホルンフェルスがほとんどを占めるが，小深沢産と思われる黒曜石製の剥片も含まれている。

第5ブロックの遺物は，Ⅸ層から散発的に出土している。石材組成は，黒色緻密質安山岩1点・黒曜石1点・珪質頁岩1点・鉄石英(黄：珪質頁岩2)1点である。Tool類は，原礫面を表面に残す二側縁加工のナイフ形石器が出土している。

第7ブロックの資料は，主にⅢ層～Ⅵ層にかけて出土している。セクション図では水平堆積を示しているが，実際の地形は緩斜面であることから，図面作成にミスがあったものと思われる。遺物は緩斜面に残されたと考えられ，切出形ナイフ形石器を含むことからⅣ層下部・Ⅴ層を主体とする石器群であると思われる。本ブロックでは，切出形ナイフ形石器・一側縁加工ナイフ形石器・二側縁加工ナイフ形石器とともに周縁加工の小型尖頭器が出土している。石器石材は黒曜石が多く，珪質頁岩・凝灰岩がそれに続く。

平成4年度は，3,000㎡を対象として132㎡の確認調査を実施した。その結果，2か所で石器が出土し，複数の石器が出土した1か所では，周辺を拡張し，本調査の範囲を確定した。本調査は100㎡を対象に行い，Ⅳ層・Ⅴ層から角錐状石器などが出土した。

第6ブロックの遺物はⅣ層・Ⅴ層から出土している。石材組成は出土石器70点すべてが黒色緻密質安山



第7図　旧石器時代調査概要図

岩である。黒色緻密質安山岩製の角錐状石器が出土しており，原石を搬入して製作したものと思われる。円礫を分割して角錐状石器を製作する工程と別に，矩形の剥片を生産する工程も見られる。また本ブロック内で鋸歯縁状の削器から，厚型複刃削器(角錐状石器)へのリダクション工程を示す接合資料が得られている。

第2節　基本土層（第8図）

本遺跡の立川ローム層の堆積状況は，下総台地で広く観察される基本土層と共通する。ここでは，現在当センターで最も広く採用されている層序区分に統一し，各層の概略について記す。

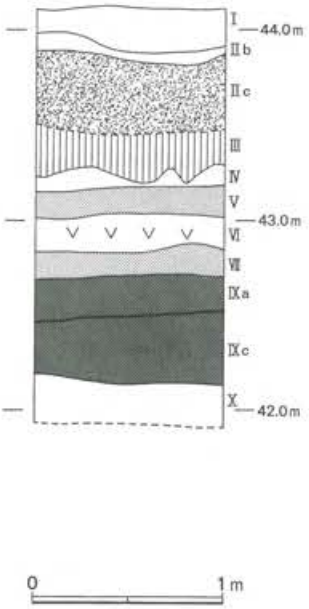
Ⅲ層　黄褐色の軟質ローム層で，厚さは15cm～30cmである。

Ⅳ・Ⅴ層　にぶい黄褐色の硬質ローム層で，その大半が下総台地における立川ローム層第1黒色帯に相当すると考えられる。厚さは10cm～25cmである。

なお，本地域では，軟質ローム層下部から硬質ローム層上部にかけてスコリアを多く含む赤褐色の土層が観察されることが多く，これをⅣ層として区分している。本遺跡では，Ⅴ層とⅥ層の区分は容易であったが，Ⅳ層・Ⅴ層ともにスコリアと思われる赤色粒子が含まれ，Ⅳ層とⅤ層に関しては明確な分層が行えなかった。

Ⅵ層　明黄褐色の硬質ローム層で，黒色粒と火山ガラスを豊富に含むＡＴ(姶良丹沢火山灰)ブロックがまとまって包含されている。厚さは10cm～15cmである。

Ⅶ層　黄褐色の硬質ローム層で，立川ローム層第2黒色帯上半部に相当する。ＡＴが拡散しており，Ⅴ層と同様，あまり暗い色調ではない。厚さは5cm～10cmである。



第8図　基本土層図

Ⅸａ層　褐色の硬質ローム層で，第2黒色帯下半部の上層である。赤色，暗緑色のスコリアを含む。厚さは15cm～20cmである。

Ⅸｃ層　暗褐色の硬質ローム層で，第2黒色帯下半部の下層である。赤色，暗緑色のスコリアを多く含む。Ⅸａ層よりもスコリアが多く，また大型のものを含んでいる。厚さは30cm～40cmである。

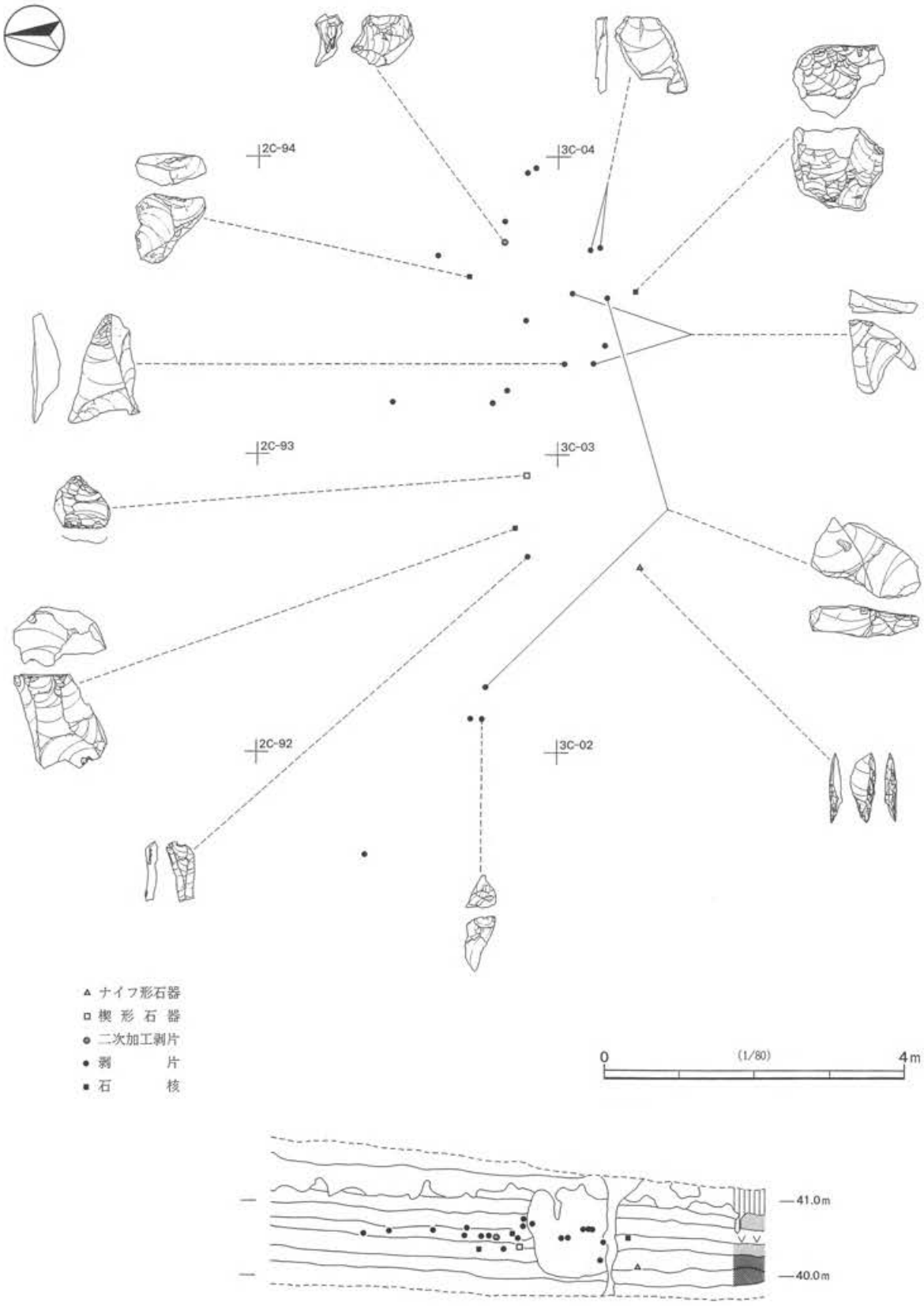
Ⅹ層　黄褐色の硬質ローム層で，Ⅸ層に比べて軟質になる。スコリアは激減するが，部分的に赤橙色で小型のスコリアを含む。

第3節　石器群の分布と出土遺物

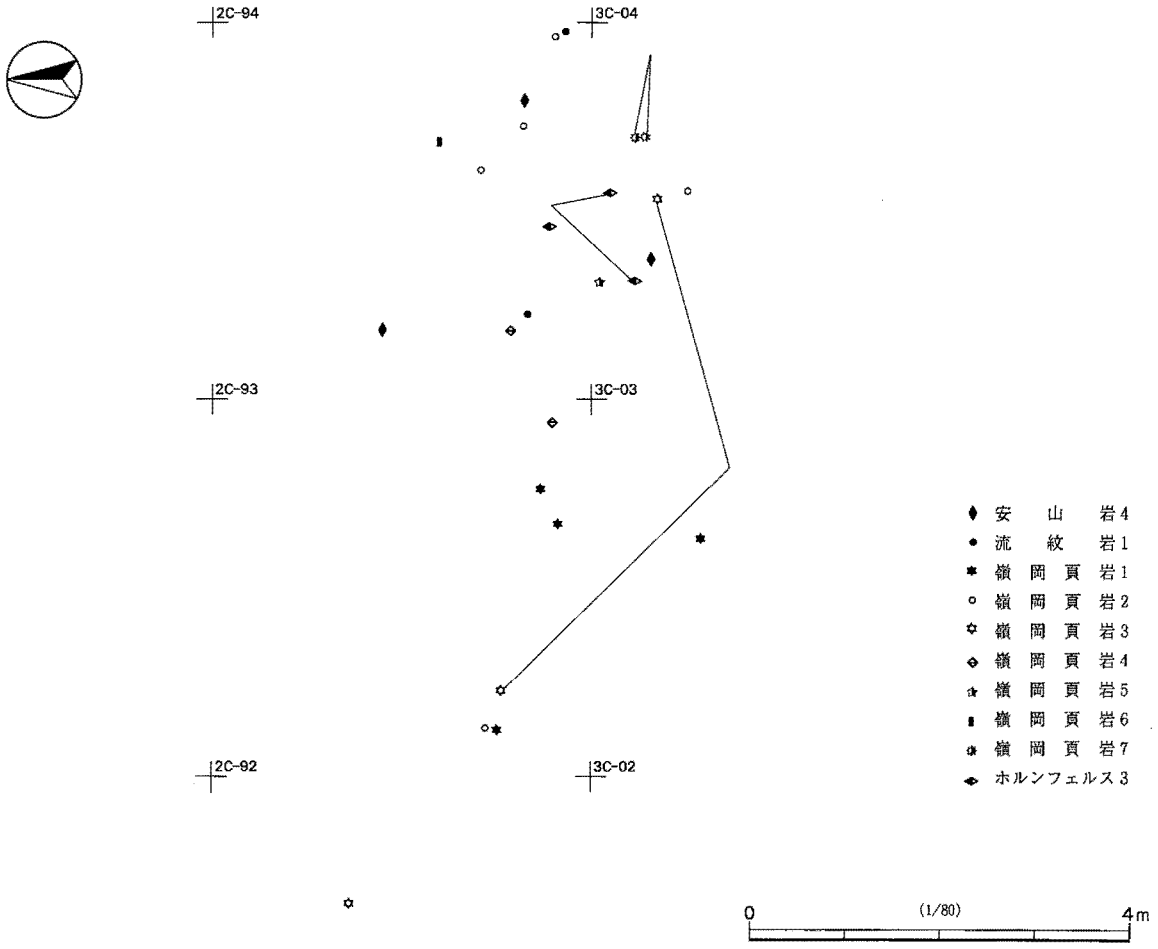
1．第1ブロック（第7・9～12図，第1・8表，図版19）

1）概要

第1ブロックは，舌状台地上の西側，台地の先端近くに位置している。東西方向に8ｍ，南北方向に3ｍの範囲に帯状に散漫に分布している。2C-91・92・93グリッド，3C-02・03グリッドに対応する。Ⅵ層からⅨａ層下端の範囲で出土しており，Ⅶ層に特に集中して分布する。他のブロックとの接合関係は確認されていない。石器組成は二側縁加工ナイフ形石器1点・楔形石器1点・二次加工剥片1点・剥片19点・石核3点である。石材組成は石英安山岩(トロトロ石：安山岩4)3点・流紋岩2点・ホルンフェルス3点・



第9図　第1ブロック遺物分布図



第10図　第１ブロック母岩別分布図

白滝頁岩(嶺岡頁岩１～７)17点である。

本ブロックからは両設打面の不整円筒形の石刃核が出土しており，同一個体に使用痕を有する剥片と二側縁加工のナイフ形石器を含む。一方で矩形の剥片生産を行っている石核も見られる。

２）母岩別資料

・安山岩４　明灰色で白色の部分が斑状に入る石英安山岩である。トロトロ石と俗称される。剥片３点を含み，総重量は44.16ｇである。

・流紋岩１　原礫面はベージュ色で，剥離面は淡青灰色を呈する。剥片２点を含み，総重量は9.25ｇである。

・嶺岡頁岩１　淡緑灰色の地に，暗い乳白色の珪化度の高い部分が斑状に入る。田村隆氏のいう白滝頁岩である。なお本ブロック内で嶺岡頁岩と分類されている母岩は，すべて白滝頁岩であると思われる。石刃核１点・ナイフ形石器１点・剥片２点を含み，総重量は55.17ｇである。

・嶺岡頁岩２　原礫面は明黄褐色で，剥離面は淡灰色の地に，暗灰色の部分が斑状に入る。剥離面の原礫面に近い部分には，淡黄褐色の部分が見られ，珪化度が非常に高い。二次加工剥片１点・剥片２点・石核２点を含み，総重量は107.0ｇである。

・嶺岡頁岩３　原礫面は淡茶褐色で，剥離面は淡灰色の地に，乳白色の珪化度の高い部分が斑状に入る。剥片３点を含み，総重量は34.54ｇである。剥片のうち２点はブロック内で接合する。

・嶺岡頁岩４　原礫面は淡茶褐色で，剥離面は淡灰色の地に，乳白色の珪化度の高い部分が斑状に入る。嶺岡頁岩３と類似しており，同一母岩の可能性も考えられる。楔形石器１点・剥片１点を含み，総重量は5.48ｇである。

・嶺岡頁岩５　原礫面は淡黄褐色で，剥離面は淡黄色から暗い淡黄色を呈する。一部に凝灰岩質の部分を含む。剥片１点を含み，総重量は15.58ｇである。

・嶺岡頁岩６　原礫面は茶褐色で，剥離面は淡茶褐色の地に，淡黒色の部分が縞状にわずかに入る。斑状の構造が顕著でないため，白滝頁岩と断定はできないが，原礫面の質感は他の白滝頁岩と類似する。剥片１点を含み，総重量は7.3ｇである。

・嶺岡頁岩７　原礫面は淡明茶褐色で，剥離面は淡緑灰色の地に，乳白色の部分が縞状に入る。剥片１点を含み，総重量は5.65ｇである。

・ホルンフェルス３　淡灰色に風化しているが，やや風化の弱い部分は淡黒色を呈するため，表面は淡灰色の部分と，淡黒色の部分が微細に入り組んでいる。その地の上に，細かい黄褐色の斑点が見られる。剥片３点を含み，総重量は10.43ｇである。

３）出土遺物（第11・12図）

本ブロックの遺物は，Ⅵ層からⅨａ層にかけて出土しているが，分布の主体がⅦ層にあること，同一母岩の資料の分布から，Ⅶ層に帰属するブロックと考えられる。

二側縁加工ナイフ形石器(第11図１)は，同一母岩の不整円筒形の石刃核から剥離された石刃を素材にしていると思われる。右側縁は側縁全体に急斜度の二次加工を加えているのに対し，左側縁では基部付近にのみ急斜度加工を施し，一次剥離による鋭い縁辺を刃部として設定している。同じ石核から剥離された石刃で，左側縁に微細剥離を残す資料も見られる。

二次加工剥片(第11図３)は原礫面付きの厚手の幅広剥片の左側縁に，背面側から二次加工を加えている。

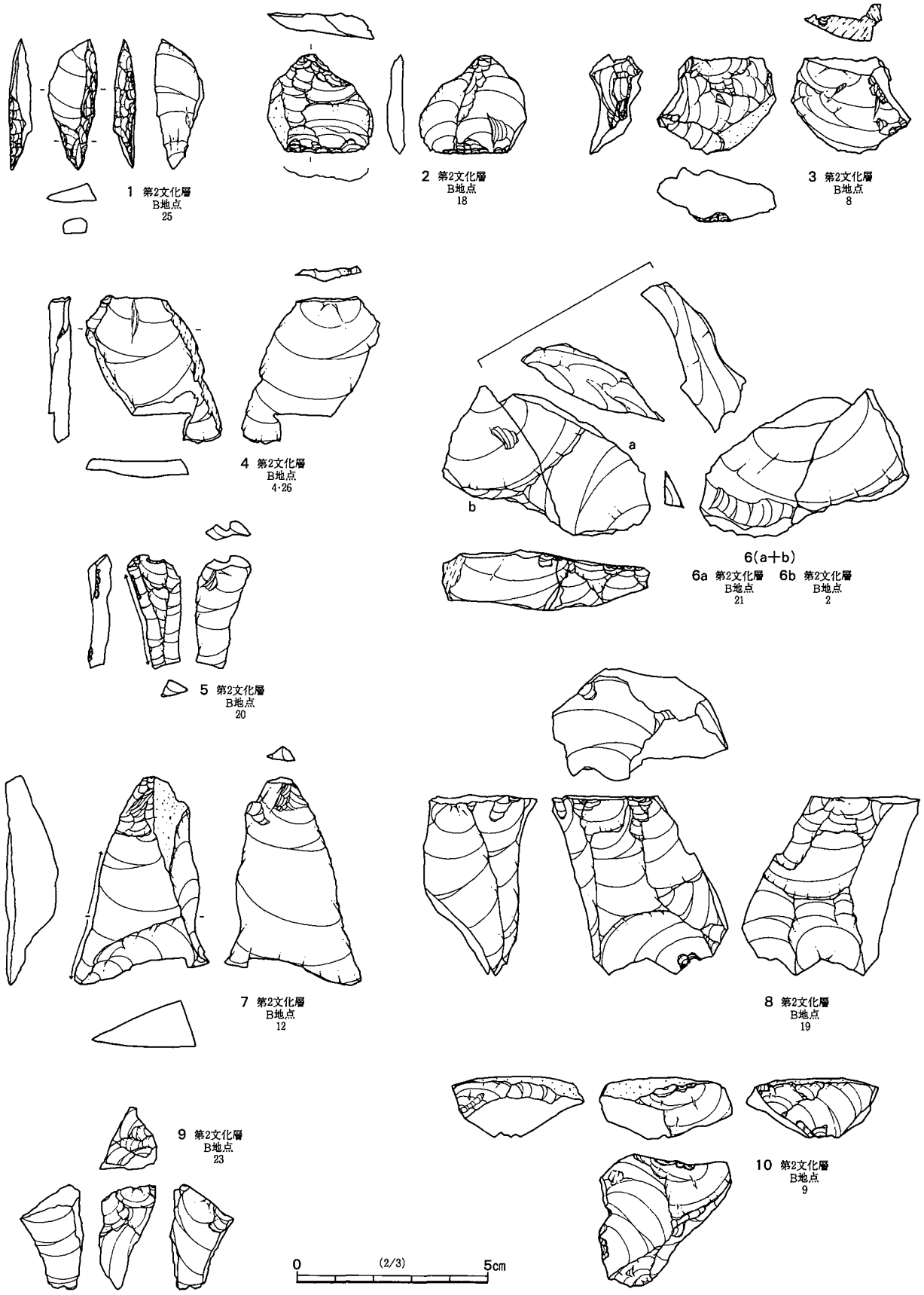
楔形石器(第11図２)は幅広剥片を用いており，上端と下端につぶれが見られる。

本ブロックで剥片剥離作業の痕跡を推定できる母岩は，嶺岡頁岩１と嶺岡頁岩２である。

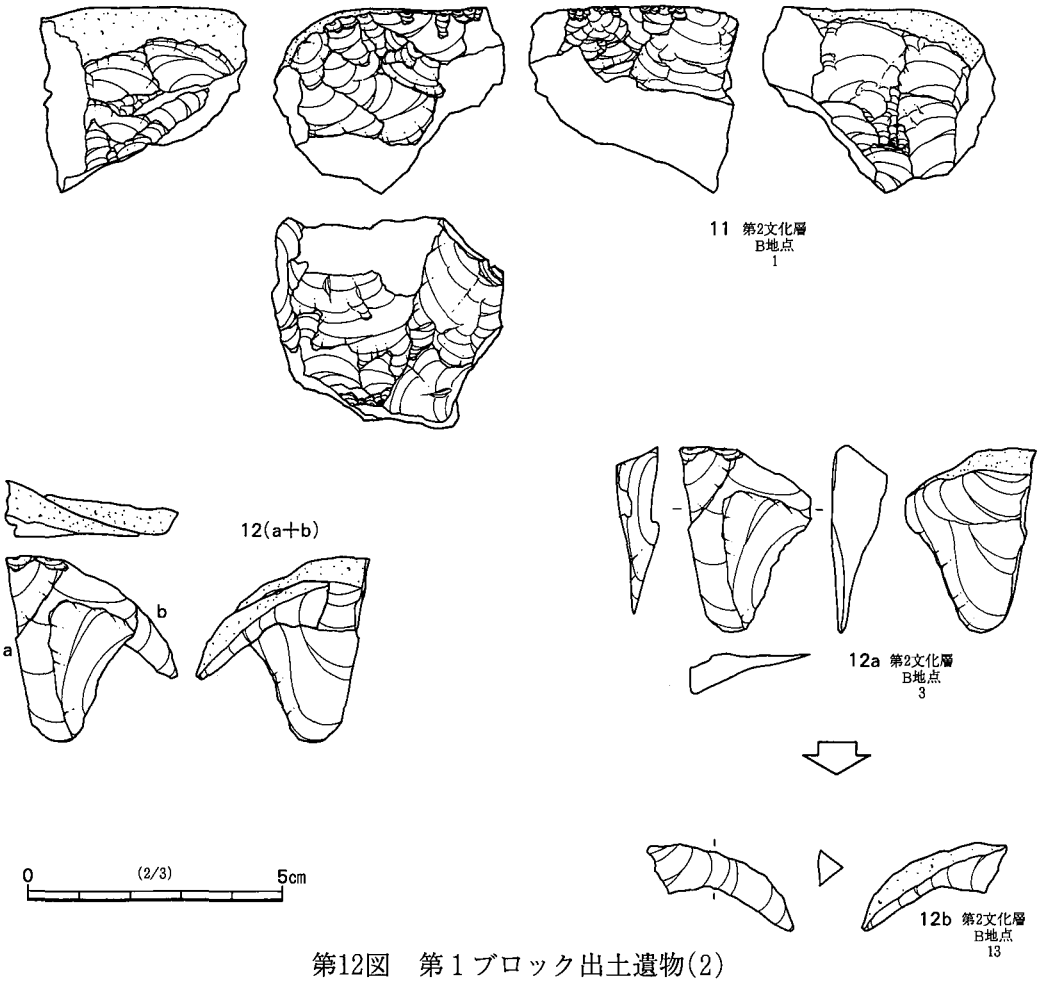
嶺岡頁岩１に含まれる製品(ナイフ形石器：第11図１，微細剥離痕を有する剥片：第11図５)と石核(第11図８)を対比すると，石核に残された剥離痕は，二次加工を考慮しても製品よりも幅・長さともにかなり大きい。よって本ブロックには石刃核と，製品が持ち込まれたものと思われる。

嶺岡頁岩２の石核(第12図11)は，打面と作業面を交互に入れ替えながら，剥片剥離を行っている資料である。同一母岩の資料に稜形成を行っている剥片が含まれている。嶺岡頁岩１と比べると石質が不均一で，縦長剥片の生産には適さなかった可能性がある。

本ブロックでは，石核から生産されたと思われる剥片が，ブロック内にほとんど残っておらず，廃棄地点としての性格が強いと思われる。



第11図　第１ブロック出土遺物(1)



第12図　第１ブロック出土遺物(2)

第１表　第１ブロック出土遺物組成表

母岩名	ナイフ形石器	楔形石器	二次加工剥片	剥片	石核	点数	点数比	重量 g	重量比
安山岩4	−	−	−	3	−	3	12.00%	44.16	14.99%
流紋岩1	−	−	−	2	−	2	8.00%	9.25	3.14%
嶺岡頁岩1	1	−	−	2	1	4	16.00%	55.17	18.73%
嶺岡頁岩2	−	−	1	2	2	5	20.00%	107.00	36.33%
嶺岡頁岩3	−	−	−	3	−	3	12.00%	34.54	11.73%
嶺岡頁岩4	−	1	−	1	−	2	8.00%	5.48	1.86%
嶺岡頁岩5	−	−	−	1	−	1	4.00%	15.58	5.29%
嶺岡頁岩6	−	−	−	1	−	1	4.00%	7.30	2.48%
嶺岡頁岩7	−	−	−	1	−	1	4.00%	5.65	1.92%
ホルンフェルス3	−	−	−	3	−	3	12.00%	10.43	3.54%
計	1	1	1	19	3	25	100.00%	294.56	100.00%
点数比	4.00%	4.00%	4.00%	76.00%	12.00%	100.00%			

2．第2ブロック（第7・13図，第2・9表，図版4）

1）概要

本ブロックは舌状台地の基部に位置しており，4点の遺物が散漫に出土した。3F-00グリッドを中心に分布する。Ⅵ層・Ⅸa層から石器が出土している。他のブロックとの接合関係は確認されていない。石器組成は剥片4点である。石材組成は黒色緻密質安山岩1点・チャート3点(黒色珪質頁岩の可能性もある)である。

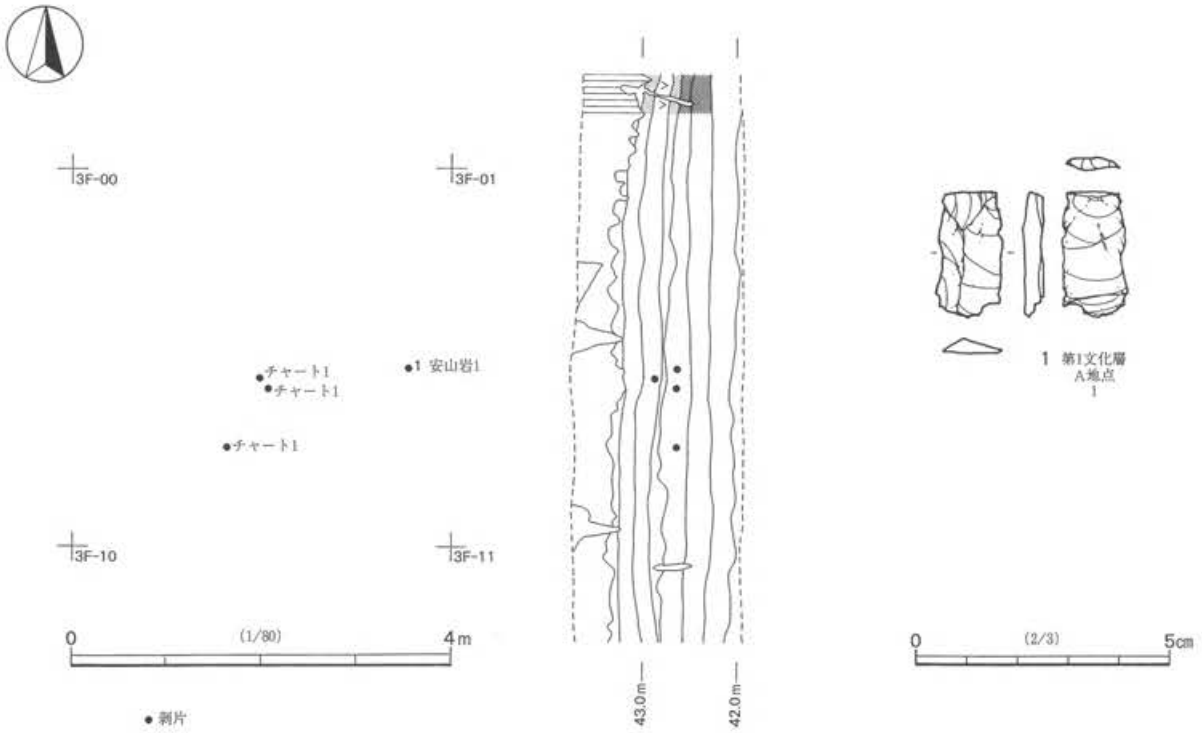
2）母岩別資料

・安山岩1　淡黒色の黒色緻密質安山岩である。剥片1点を含み，総重量は1.22gである。

・チャート1　原礫面は白灰色の地に，黄褐色の部分が斑状に入る。剥離面は青黒色を呈する。節理がほとんど見られないことから黒色珪質頁岩とも考えられるが，小片のためどちらかに判定するのは困難である。剥片3点を含み，総重量は1.78gである。

3）出土遺物（第13図）

黒色緻密質安山岩の縦長剥片(第13図1)1点とチャートの矩形の剥片3点が出土している。



第13図　第2ブロック遺物分布図・出土遺物実測図

第2表　第2ブロック出土遺物組成表

母岩名	剥片	点数	点数比	重量g	重量比
安山岩1	1	1	6.98%	1.22	2.19%
チャート1	3	3	4.65%	1.78	0.10%
計	4	4	100.00%	3.00	100.00%
点数比	100.00%	100.00%			

3．第3ブロック（第7・14図，第3・10表，図版4）

1）概要

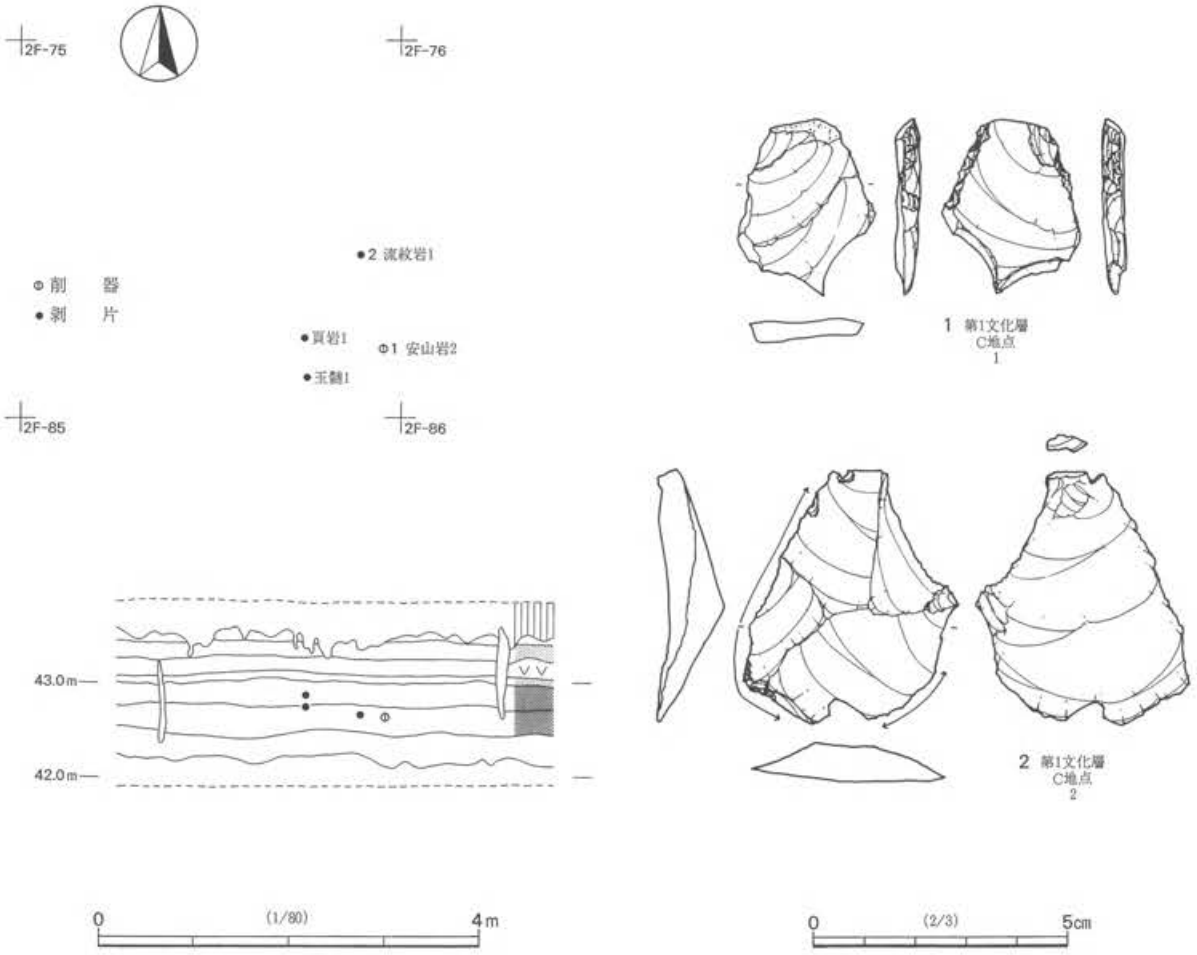
第3ブロックは，舌状台地上の張り出し部の付け根に位置しており，4点の石器が出土した。2F-75グリッドに散漫に分布し，Ⅸa層・Ⅸb層から石器が出土している。他のブロックとの接合関係は確認されていない。石器組成は削器1点・剥片3点である。石材組成は，黒色緻密質安山岩1点・流紋岩1点・黒色頁岩(頁岩1)1点・玉髄1点である。

削器1点のほかは矩形の剥片である。

2）母岩別資料

・安山岩2　淡黒色の黒色緻密質安山岩である。削器1点を含み，総重量は5.03gである。

・流紋岩1　乳白色の部分と，黄色がかった乳白色の部分が斑状に入り混じる。剥片1点を含み，総重量は13.81gである。



第14図　第3ブロック遺物分布図・出土遺物実測図

第3表　第3ブロック出土遺物組成表

母岩名	削器	剥片	点数	点数比	重量g	重量比
安山岩2	1	−	1	25.00%	5.03	11.72%
流紋岩1	−	1	1	25.00%	13.81	32.18%
頁岩1	−	1	1	25.00%	8.25	19.23%
玉髄1	−	1	1	25.00%	15.82	36.87%
計	1	3	4	100.00%	42.91	100.00%
点数比	25.00%	75.00%	100.00%			

・頁岩１　原礫面は緑がかった淡緑色で，剥離面は青灰色を呈する。黒色頁岩である。剥片１点を含み，総重量は8.25ｇである。

・玉髄１　半透明で黄色味をおびており，部分的にベージュ色の部分が入る。剥片１点を含み，総重量は15.82ｇである。

３）出土遺物（第14図）

本ブロックから出土した資料は，いずれも単独母岩の資料である。黒色緻密質安山岩製の複刃削器（第14図１）が出土している。器体下端部に折れ面が２つあるが，錐状の尖った部分を作出している可能性がある。

４．第４ブロック（第７・15～19図，第４・11表，図版４・20・21）

１）概要

第４ブロックは，舌状台地上の張り出し部の付け根に位置しており，160点の石器・３点の礫が出土した。2F-58・59・69・79・99グリッド，2G-50・60・61グリッドに分布する。Ⅱｃ層からⅢ層上面にかけて石器が出土している。他のブロックとの接合関係は確認されていない。石器組成は尖頭器10点・ナイフ形石器１点・削器１点・楔形石器１点・二次加工剥片10点・石核２点・剥片135点・礫（安山岩９）３点である。礫を除く石材組成は，黒色緻密質安山岩（安山岩１～６・８）112点・石英安山岩（安山岩７）１点・黒曜石４点・粘板岩１点・チャート２点・鉄石英（赤：チャート２）１点・ホルンフェルス39点である。

本ブロックでは，原石もしくは分割礫を搬入して尖頭器の製作を行っている。尖頭器製作に使用されている石材は，黒色緻密質安山岩とホルンフェルスである。黒色緻密質安山岩が厚手の剥片から小型の尖頭器を製作しているのに対し，ホルンフェルスは礫を素材として尖頭器製作を行っているものがほとんどで，石材の用い方・予想される完成品の形態に違いが見られる。

２）母岩別資料

・安山岩１～６・８・９　淡茶褐色から淡黒色を呈する黒色緻密質安山岩である。安山岩９は被熱した資料であると思われる。尖頭器５点・ナイフ形石器１点・削器１点・楔形石器１点・二次加工剥片７点・剥片96点・石核１点・礫３点を含み，総重量は345.02ｇ（石器類273.28ｇ，礫71.74ｇ）である。

・安山岩７　明灰色を呈する石英安山岩である。剥片１点を含み，総重量は5.53ｇである。

・黒曜石１　不透明な黒色の部分がほとんどだが，透明な部分が一部に見られる。肉眼鑑定では小深沢産の黒曜石に類似する。剥片３点を含み，総重量は1.8ｇである。

・黒曜石２　灰色でほとんど透明である。剥片１点を含み，総重量は0.07ｇである。

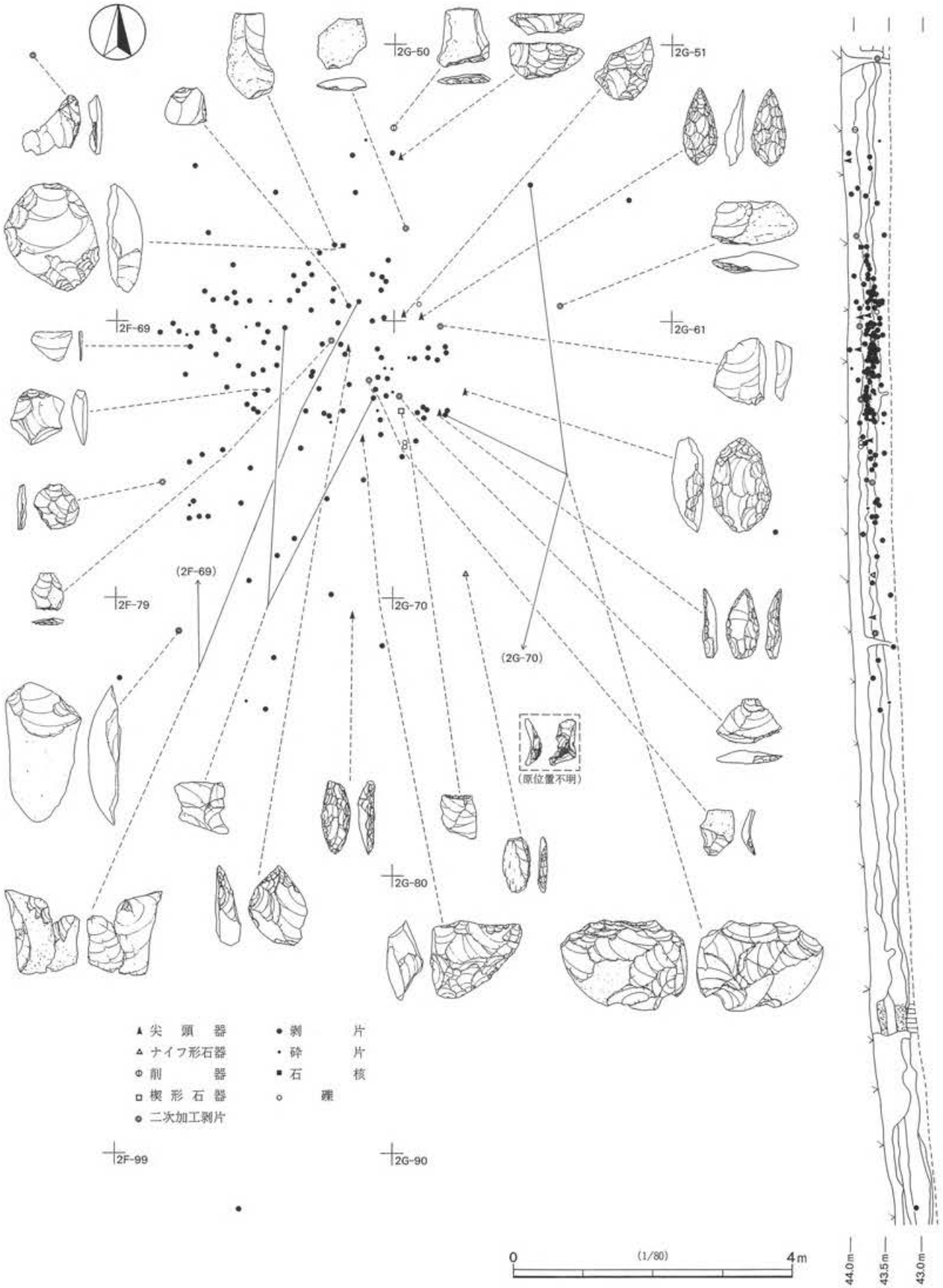
・粘板岩１　原礫面は暗青灰色で，剥離面は青黒色を呈する。剥片１点を含み，総重量は0.33ｇである。

・チャート１　原礫面は青灰色から明青灰色で，淡黄褐色の部分が縞状に入る。剥離面は青黒色を呈し，ベージュ色の節理が入る。剥片1点を含み，総重量は10.98ｇである。

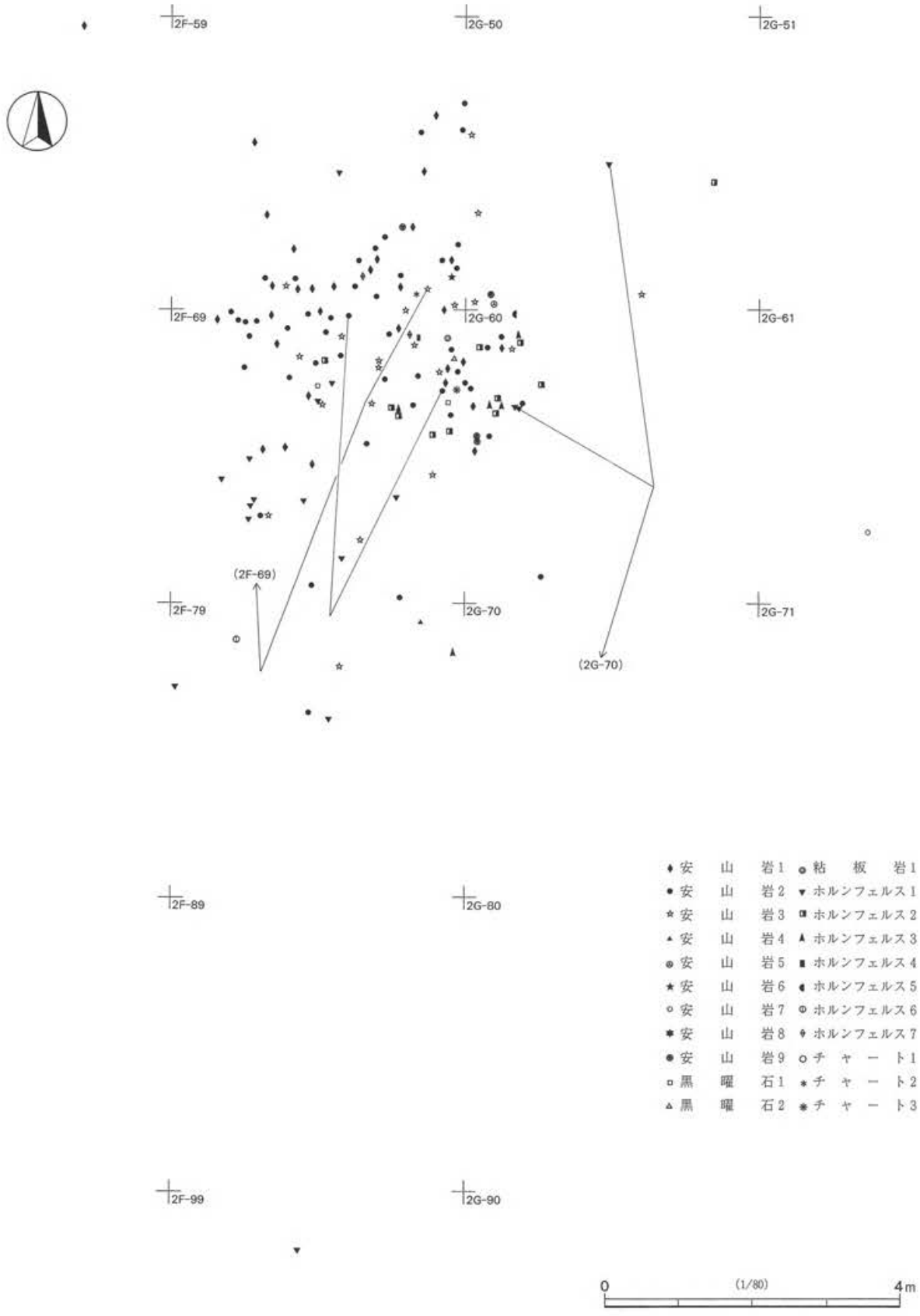
・チャート２　紅色の部分と暗紅色の部分が入り混じっている鉄石英（赤）である。剥片１点を含み，総重量は2.33ｇである。

・チャート３　青黒色の地に，淡黄褐色の節理が無数に入る。剥片１点を含み，総重量は0.88ｇである。

・ホルンフェルス１　淡青灰色の地に，ベージュ色の部分が入り混じる。尖頭器２点・二次加工剥片１点・剥片16点を含み，総重量は171.43ｇである。



第15図　第４ブロック遺物分布図



第16図　第４ブロック母岩別分布図

・ホルンフェルス２　青灰色の地に，黄褐色の微細な斑点が無数に入る。尖頭器２点・剥片８点を含み，総重量は65.89ｇである。

・ホルンフェルス３　明灰色の地に，黄褐色の微細な斑点が無数に入る。剥片４点を含み，総重量は6.56ｇである。

・ホルンフェルス４　青灰色の地に，青黒色と明灰色の部分が縞状に入る。尖頭器１点・石核１点を含み，総重量は320.13ｇである。

・ホルンフェルス５　青黒色の地に，黄褐色の微細な斑点が無数に入る。二次加工剥片１点を含み，総重量は8.62ｇである。

・ホルンフェルス６　淡青灰色の地に，ベージュ色の部分が入り混じる。ホルンフェルス１と類似している。二次加工剥片１点を含み，総重量は51.67ｇである。

・ホルンフェルス７　風化の進んだ部分は，白みがかったベージュ色で，相対的に風化の弱い部分は青灰色を呈する。剥片２点を含み，総重量は27.04ｇである。

３）出土遺物（第17～19図）

本ブロックでは，黒色緻密質安山岩とホルンフェルスを用いて尖頭器製作が行われている。尖頭器は10点が出土しており，黒色緻密質安山岩製のものが５点，ホルンフェルス製のものが５点出土している。黒色緻密質安山岩製のものは，厚手の剥片を素材とする(第17図１・２・７)のに対し，ホルンフェルス製のものには，剥片素材(第17図８)に加えて礫素材のもの(第18図27)も見られる。第18図31cは，石核とも考えられるが生産されている剥片に斉一性がないこと，同様に礫から生産されている尖頭器未製品があることから，尖頭器未製品と判断した。

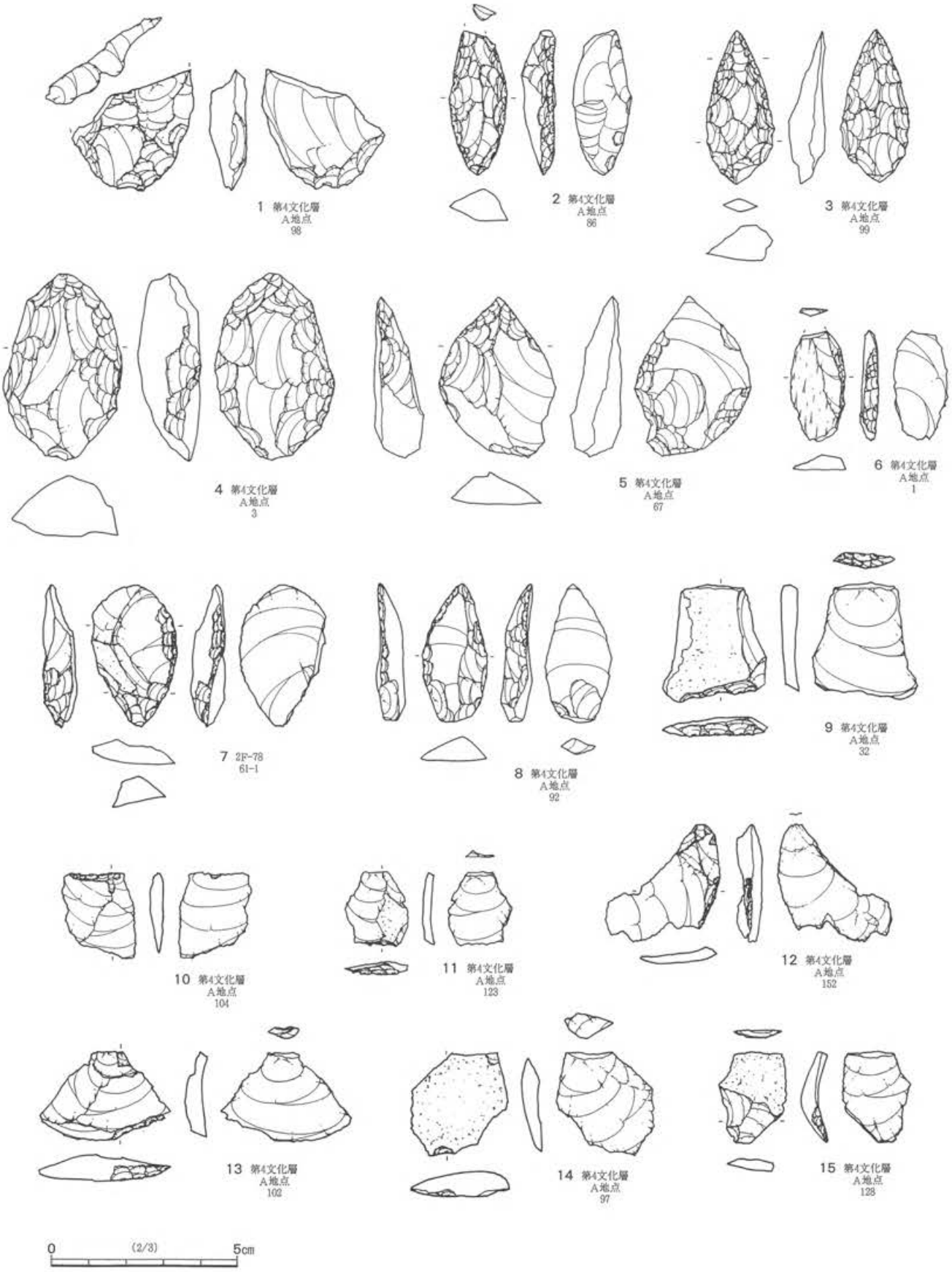
右側縁の基部近くに急斜度の加工を加えたナイフ形石器(第17図６)が１点出土している。尖頭器の素材に用いているものよりも，薄手の剥片を素材としている。

その他には，礫面付きの剥片を素材とした削器１点(第17図９)・楔形石器１点(第17図10)・二次加工剥片10点(第17図11～15，第18図16～18・28，第18図30a)・石核２点(第18図25・28)が出土している。

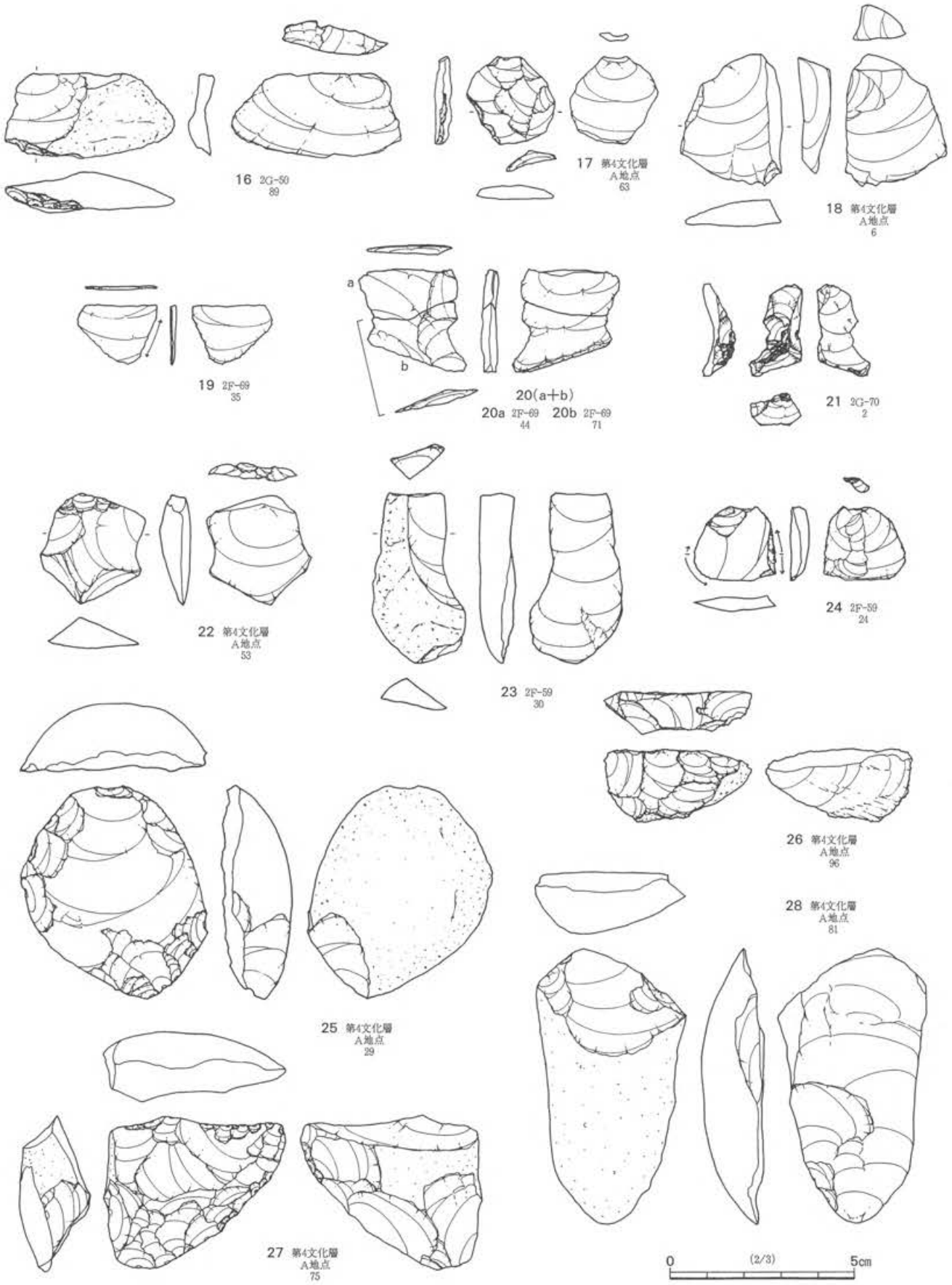
二次加工剥片は，尖頭器製作で生じた調整剥片を利用していると思われる。

石核は２点出土しており，黒色緻密質安山岩製のものが１点，ホルンフェルス製のものが１点である。黒色緻密質安山岩製の石核(第18図25)は，分割した礫の周縁から，腹面側を作業面として剥片剥離を行っている。剥離面は大きいものでも1.3㎝×0.9㎝程度であることから，二次加工石器であるとも考えられる。ホルンフェルス製の第19図29に関しても，交互剥離によって形成されている稜につぶれが見られることから，石核というよりはむしろ礫器として使用されたものと思われる。

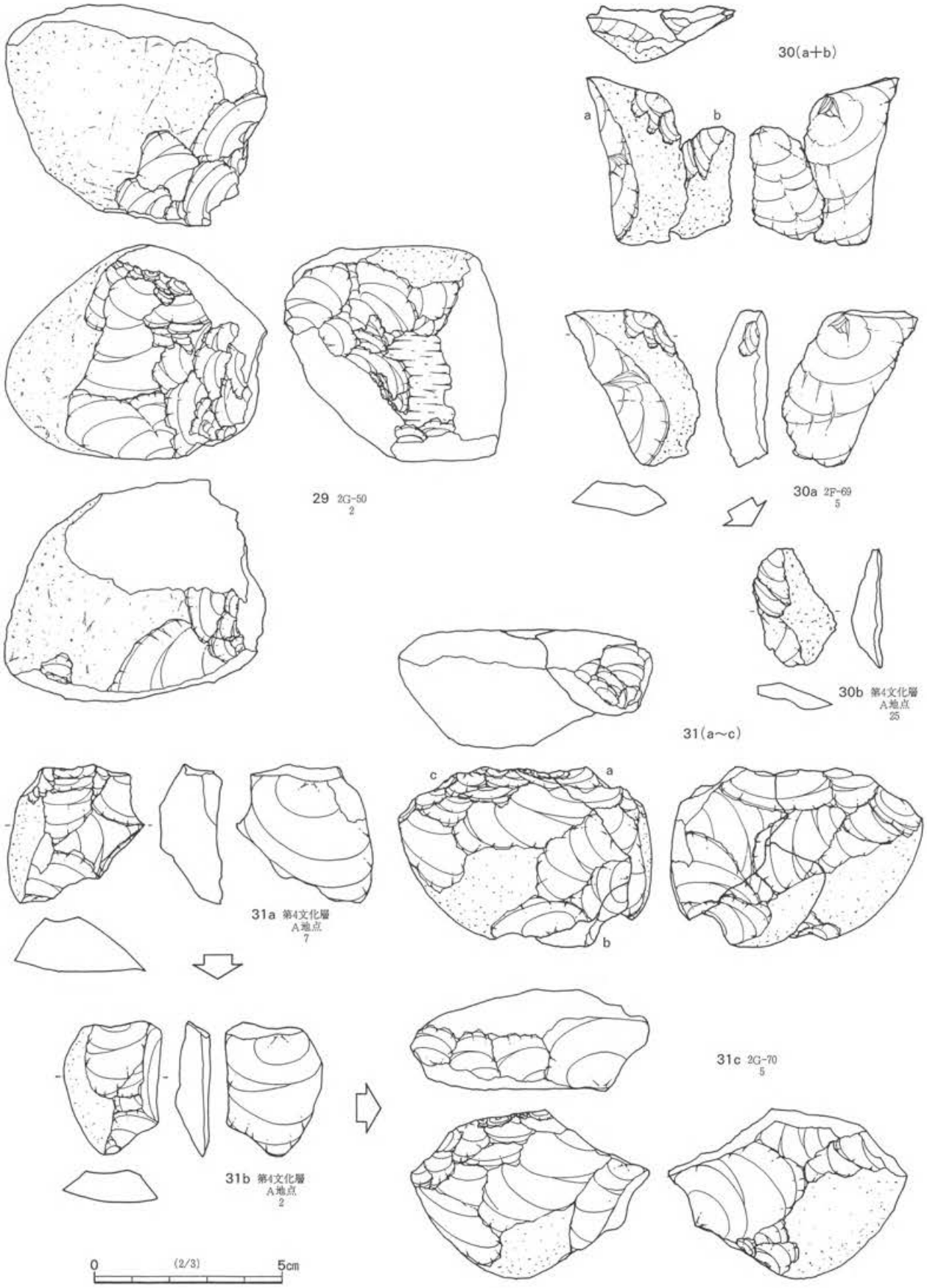
本ブロックでは，黒色緻密質安山岩とホルンフェルスの円礫を持ち込んでの，尖頭器製作を行っている。原石は，その形態から房総半島内の第四紀礫層に由来すると思われる。礫器とも考えられる石核を除いては，基本的に尖頭器製作の過程で生じた剥片から，尖頭器以外の tool 類を製作している。ナイフ形石器とした資料も，その素材となる縦長剥片を連続的に生産している形跡がないことから，偶発的に生じた素材に合わせて加工を加えた結果とも考えられ，二次加工剥片とした方がよいかもしれない。ホルンフェルスでのみ，円礫からの割り出しによる尖頭器製作を行っており，円礫を素材とするものの方が，より大型の尖頭器に仕上げられると思われる。粘板岩・黒曜石(第18図21)・チャート(第18図23・24)の剥片も出土しているが，単独出土のものがほとんどである。黒曜石は肉眼観察では信州系(小深沢)のものと思われる。



第17図　第４ブロック出土遺物(1)



第18図　第４ブロック出土遺物(2)



第19図　第4ブロック出土遺物(3)

第4表　第4ブロック出土遺物組成表

母岩名	尖頭器	ナイフ形石器	削器	楔形石器	二次加工剥片	剥片	石核	礫	点数	点数比	重量g	重量比
安山岩1	−	−	−	1	2	27	1	−	31	19.02%	104.82	10.29%
安山岩2	−	1	1	−	1	48	−	−	51	31.29%	44.07	4.33%
安山岩3	3	−	−	−	4	19	−	−	26	15.95%	106.59	10.47%
安山岩4	1	−	−	−	−	−	−	−	1	0.61%	5.20	0.51%
安山岩5	1	−	−	−	−	−	−	−	1	0.61%	6.12	0.60%
安山岩6	−	−	−	−	−	1	−	−	1	0.61%	3.64	0.36%
安山岩7	−	−	−	−	−	1	−	−	1	0.61%	5.53	0.54%
安山岩8	−	−	−	−	−	1	−	−	1	0.61%	2.84	0.28%
安山岩9	−	−	−	−	−	−	−	3	3	1.84%	71.74	7.05%
黒曜石1	−	−	−	−	−	3	−	−	3	1.84%	1.80	0.18%
黒曜石2	−	−	−	−	−	1	−	−	1	0.61%	0.07	0.01%
粘板岩1	−	−	−	−	−	1	−	−	1	0.61%	0.33	0.03%
ホルンフェルス1	2	−	−	−	1	16	−	−	19	11.66%	171.43	16.84%
ホルンフェルス2	2	−	−	−	−	8	−	−	10	6.13%	65.89	6.47%
ホルンフェルス3	−	−	−	−	−	4	−	−	4	2.45%	6.56	0.64%
ホルンフェルス4	1	−	−	−	−	−	1	−	2	1.23%	320.13	31.44%
ホルンフェルス5	−	−	−	−	1	−	−	−	1	0.61%	8.62	0.85%
ホルンフェルス6	−	−	−	−	1	−	−	−	1	0.61%	51.67	5.07%
ホルンフェルス7	−	−	−	−	−	2	−	−	2	1.23%	27.04	2.66%
チャート1	−	−	−	−	−	1	−	−	1	0.61%	10.98	1.08%
チャート2	−	−	−	−	−	1	−	−	1	0.61%	2.33	0.23%
チャート3	−	−	−	−	−	1	−	−	1	0.61%	0.88	0.09%
計	10	1	1	1	10	135	2	3	163	100.00%	1,018.28	100.00%
点数比	6.13%	0.61%	0.61%	0.61%	6.13%	82.84%	1.23%	1.84%	100.00%			

5．第5ブロック（第7・20・21図，第5・12表，図版4・22）

1）概要

小金沢古墳群は，3本に枝分かれした舌状台地のうち，西側の舌状台地に位置しており，東隣の舌状台地には御塚台遺跡が位置している。第5ブロックは，この2つの舌状台地へと分岐する，より幅の広い台地上に位置している。2G−25・2G−35・2G−36グリッドを中心に4点の石器が散漫に分布し，Ⅸa・Ⅸc層から石器が出土している。他のブロックとの接合関係は確認されていない。石器組成はナイフ形石器1点・石核1点・削器1点・二次加工剥片1点である。石材組成は，黒色緻密質安山岩1点・黒曜石1点・珪質頁岩1点・鉄石英(黄：珪質頁岩2)1点である。

原礫面付きの縦長剥片を用いた二側縁加工のナイフ形石器が出土した。

2）母岩別資料

・安山岩1　淡黒色の黒色緻密質安山岩である。石核1点を含み，総重量は68.57gである。

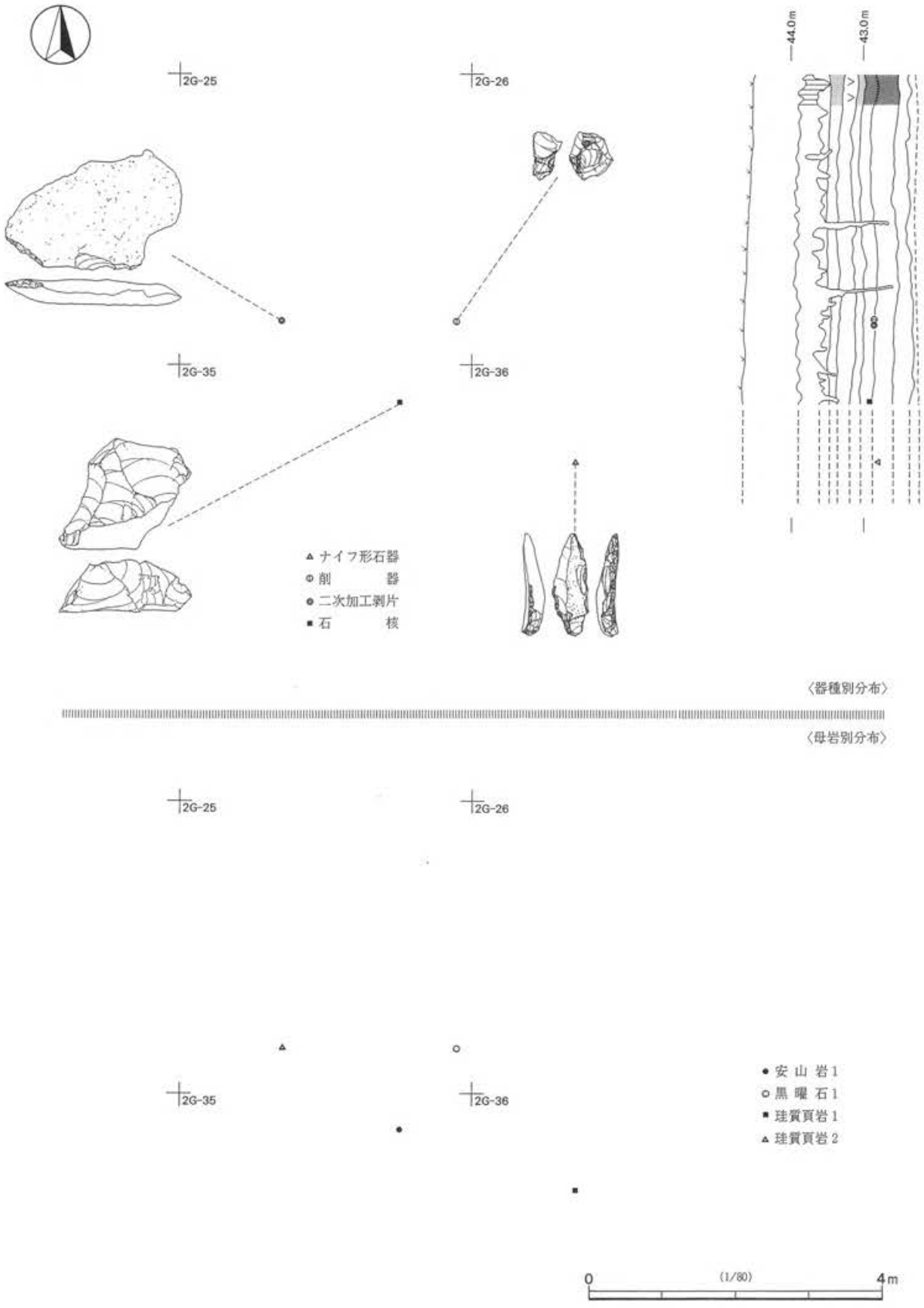
・黒曜石1　灰色で透明度が高く，直径約2㎜の球顆を含む。信州系の黒曜石と思われる。削器1点を含み，総重量は4.86gである。

・珪質頁岩1　原礫面はベージュ色と青灰色の部分が斑状に入り混じる。剥離面は灰色の地に，明灰色の部分が斑状に入る。ナイフ形石器1点を含み，総重量は8.14gである。

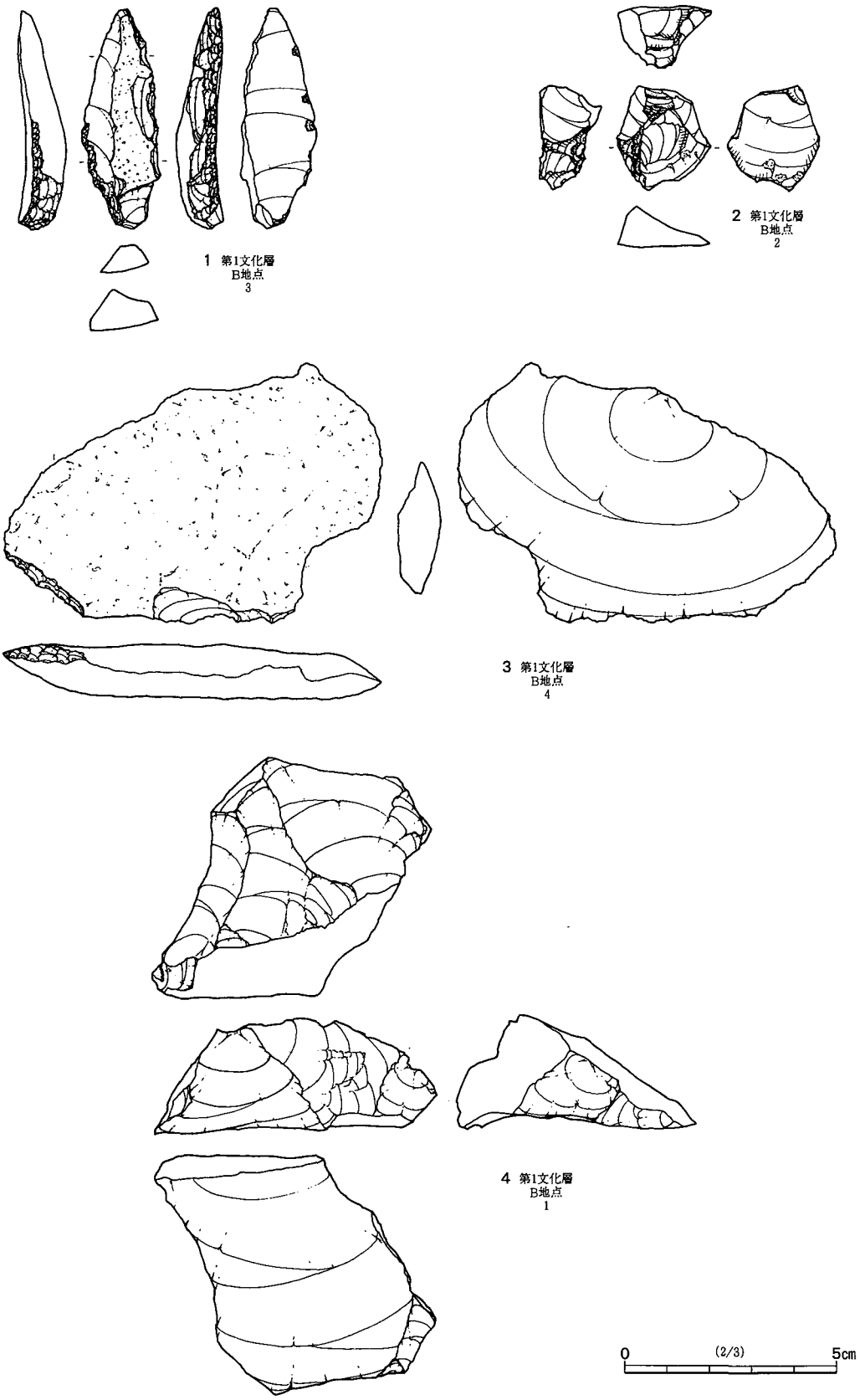
・珪質頁岩2　黄褐色から茶褐色を呈し，玉髄質の節理がわずかに入る鉄石英である。二次加工剥片1点を含み，総重量は66.16gである。

3）出土遺物（第21図）

本ブロックからは，搬入されたと思われる石器のみが出土している。二側縁加工のナイフ形石器(第21図1)は，背面に原礫面を残しており，断面形態は台形を呈する。右側縁は全体に急斜度の加工を施しており，左側縁は基部の近くのみに加工を加え，一次剥離による縁辺を刃部としている。刃部には微細剥離



第20図　第5ブロック遺物分布図



第21図　第５ブロック出土遺物

痕が見られる。

黒曜石の削器(第21図２)は，打面と作業面を交互に入れ替えながら剥離されたと思われる。頭部調整が行われている。なお，表では削器とされているが，二次加工剥片である。

二次加工剥片(第21図３)は，原礫面付きの大型の剥片を使用している。

石核(第21図４)は大型厚手の剥片素材で，素材の背面上の稜から腹面側に剥片剥離を行っている。

第５表　第５ブロック出土遺物組成表

母岩名	ナイフ形石器	削器	二次加工剥片	石核	点数	点数比	重量ｇ	重量比
安山岩1	−	−	−	1	1	25.00%	68.57	46.42%
黒曜石1	−	1	−	−	1	25.00%	4.86	3.29%
珪質頁岩1	1	−	−	−	1	25.00%	8.14	5.51%
珪質頁岩2	−	−	1	−	1	25.00%	66.16	44.78%
計	1	1	1	1	4	100.00%	147.73	100.00%
点数比	25.00%	25.00%	25.00%	25.00%	100.00%			

６．第６ブロック（第７・22～25図，第６・13表，図版４・19）

１）概要

第６ブロックは，第５ブロックと同じく，３つの舌状台地に分岐していく，より幅の広い台地上に位置している。分布範囲は4.5ｍ×5ｍの円形である。2H-34グリッド，2H-44グリッドに対応する。Ⅲ層からⅤ層にかけて出土しており，Ⅳ層・Ⅴ層にほとんどの遺物が分布する。他のブロックとの接合関係は確認されていない。石器組成は角錐状石器２点・削器２点・石錐１点・二次加工剥片１点・剥片59点・石核５点である。石材組成は出土石器70点すべてが黒色緻密質安山岩である。

本ブロックでは，黒色緻密質安山岩の円礫を持ち込んで，分厚い剥片や矩形の剥片を生産している。前者は本ブロック内で出土している角錐状石器の素材となっていると思われる。円礫からの一般剥片生産を示す資料も見られる。また本ブロックでは，鋸歯縁状の削器をリダクションしている過程を示す接合資料が得られた。

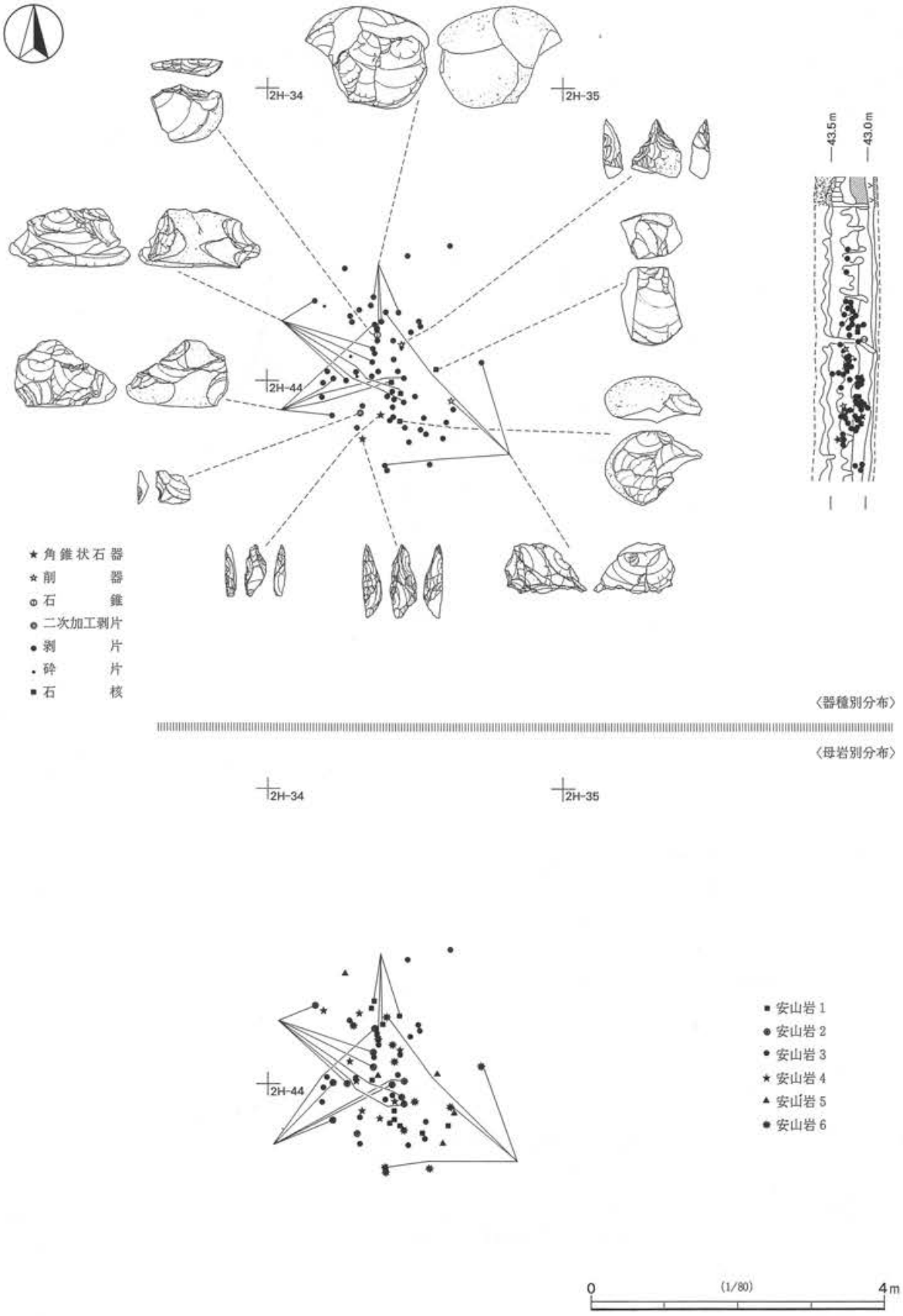
２）母岩別資料

安山岩１～６と分類されているが，いずれも黒色緻密質安山岩である。原礫面には爪状のくぼみが無数に見られる。原礫面は淡茶褐色で，剥離面は淡黒色である。接合資料などから考えると少なくとも５個の原石が持ち込まれていると思われる。石器組成は概要のとおりで，総重量は317.34ｇである。

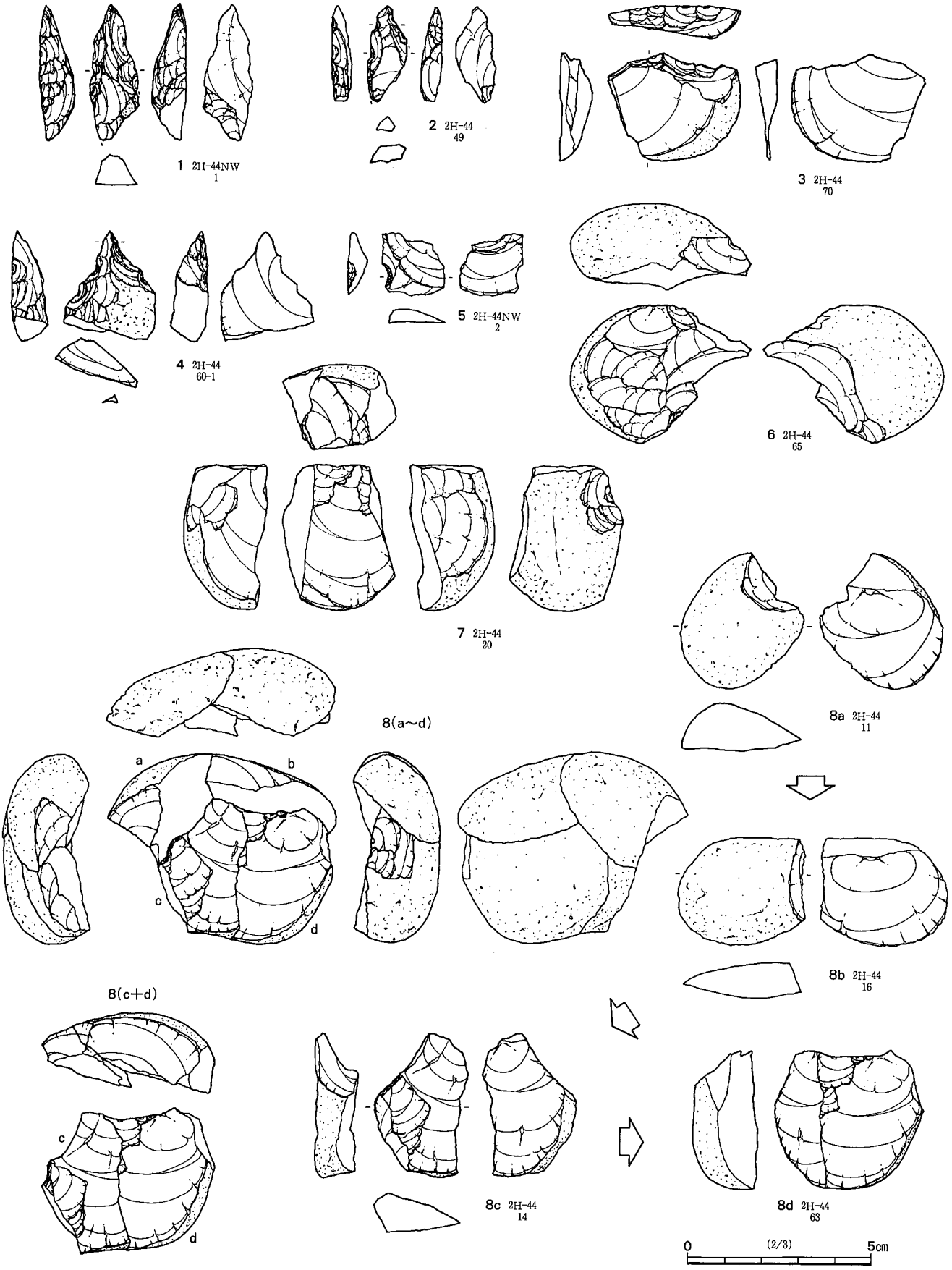
３）出土遺物（第23～25図）

本ブロックの資料はⅣ層とⅤ層にほとんどが集中し，角錐状石器を含むことからⅣ層下部・Ⅴ層に特徴的な石器群と思われる。

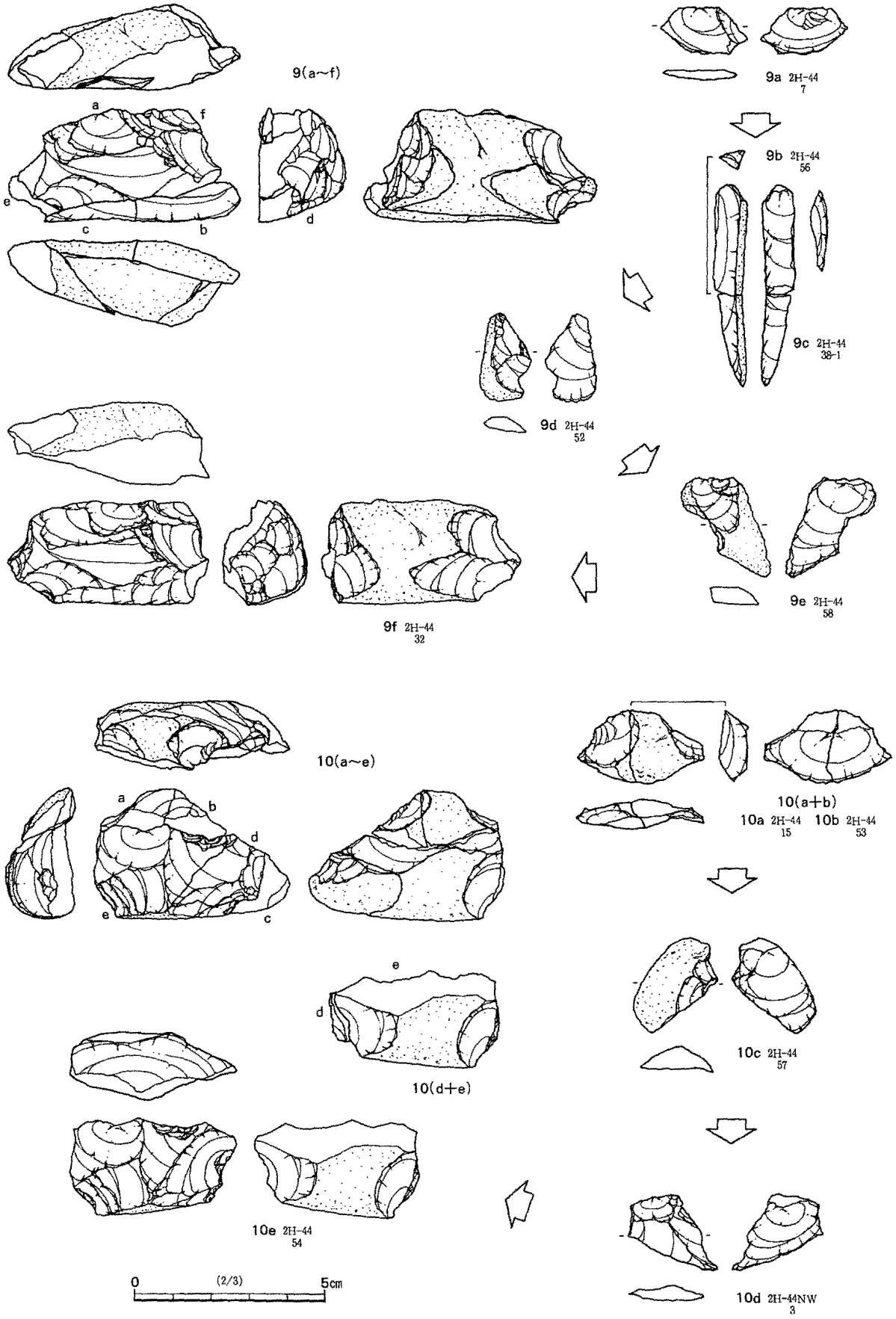
角錐状石器は２点が出土している。第23図１・２は器体の一部を欠損している。第25図11ｄの複刃厚型削器には３点の剥片が接合する。得られた接合資料は右側縁(第25図11ａ～ｄ)の下側の側縁に鋸歯状の刃部が作り出され，削器であると思われる。この状態から第25図11ａ・11ｂが剥離され，リダクションが行われる。さらにこの後第25図11ｃが剥離されていることから，さらに再生を意図していると思われる。一見，削器から角錐状石器への転用と思われるが，田村隆氏(田村1992)が指摘するように複刃厚形削器と考えれば，削器という器種の中でのリダクションと考えられる。しかし当該時期の角錐状石器・削器・ナイフ形石器の境界は漸移的である。角錐状石器と見るか，複刃厚形削器と見るかは，個々の遺物から判断す



第22図　第6ブロック遺物分布図



第23図　第6ブロック出土遺物(1)

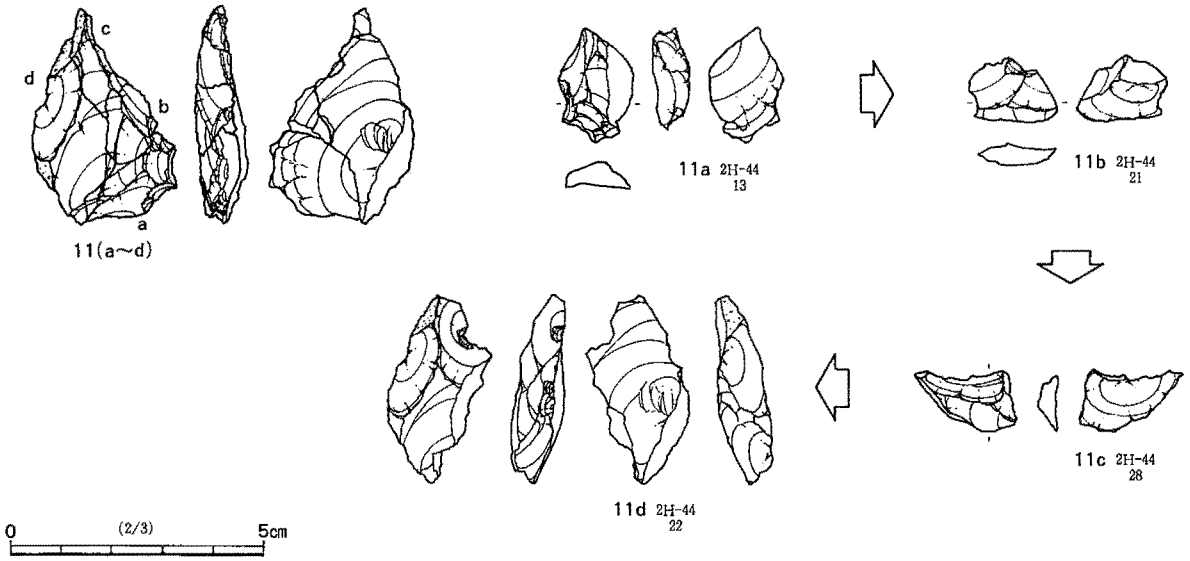


第24図　第6ブロック出土遺物(2)

るほかないと思われる。

石錐(第23図４)は下半部を欠損しており，角錐状石器と調整加工が類似していることから，製作中に破損した角錐状石器とも考えられる。第23図３の削器は鋸歯縁状の刃部を持つ。刃部の角度が急で，第25図11(a～ｄ)に類似する。

石核とした資料は，矩形の剥片を生産するもの(第23図６，第24図９ｆ・10ｅ)が主である。矩形の剥片を生産している資料は，求心状に剥離を行い，剥片を生産している。また円礫素材のもの(第23図７・８ｃ)もあり，厚手の礫片を生産している。



第25図　第６ブロック出土遺物(3)

第６表　第６ブロック出土遺物組成表

母岩名	角錐状石器	削器	石錐	二次加工剥片	剥片	石核	点数	点数比	重量ｇ	重量比
安山岩1	－	－	－	－	10	2	12	17.14%	124.07	39.10%
安山岩2	－	－	－	－	10	2	12	17.14%	76.27	24.03%
安山岩3	1	－	－	1	19	－	21	30.00%	17.38	5.48%
安山岩4	1	－	1	－	6	－	8	11.43%	28.24	8.90%
安山岩5	－	－	－	－	4	1	5	7.14%	44.78	14.11%
安山岩6	－	2	－	－	10	－	12	17.14%	26.60	8.38%
計	2	2	1	1	59	5	70	100.00%	317.34	100.00%
点数比	2.86%	2.86%	1.43%	1.43%	84.29%	7.14%	100.00%			

7．第7ブロック（第7・26～32図，第7・14表，図版22～24）

1）概要

小金沢古墳群は，3本に枝分かれした舌状台地のうち，西側の舌状台地に位置しており，東隣の舌状台地には御塚台遺跡が位置している。第7ブロックは，御塚台遺跡が位置する舌状台地の付け根に位置している。小金沢古墳群の他のブロックよりも，むしろ御塚台遺跡のブロックに近い場所に位置している。4I-00・01・10・11・20・21・30，4H-19・29・39グリッドから遺物が出土している。本ブロックは視覚的に，4I-10，4I-20グリッドを中心とする小ブロック(小ブロックａ)，4I-01グリッドを中心とする小ブロック(小ブロックｂ)，4I-21グリッドの東半を中心とする小ブロック(小ブロックｃ)の3つに分けることが可能である。小ブロックｂと小ブロックｃは接合関係を持つ。石器は主にⅡｃ層からⅥ層にかけて出土しているとされているが，セクション図を見ると斜面で水平堆積を示していると記録されている。しかしブロックの石器出土位置は，地形に対応して緩やかな傾斜を描いており，斜面堆積であることを示している。石器群は，幅広剥片の打点部を側縁に置いた切出形石器と，縦長剥片を用いたナイフ形石器，小型の尖頭器を含む。Ⅳ層下部・Ⅴ層の石器群と思われる。

125点の石器が出土しており，石器組成は，ナイフ形石器10点・彫器1点・削器2点・二次加工剥片5点・剥片99点・石核3点・敲石1点・礫4点である。石材組成は，黒色緻密質安山岩10点・黒曜石53点・珪質頁岩(凝灰岩1～4を含む)28点・凝灰岩(凝灰岩5)1点・砂岩3点・頁岩(頁岩1)2点・黒色頁岩(頁岩2)2点・鉄石英(赤：珪質頁岩9)1点・ホルンフェルス2点・玉髄23点である。

本ブロックでは，主に求心剥離によって幅広剥片を生産しているが，出土しているナイフ形石器の遺跡内での製作痕跡はない。遺跡内で剥片剥離作業が多く行われているのは，黒曜石1と玉髄1で，ナイフ形石器の製品とともに原石を持ち込んでいるものと思われる。ナイフ形石器の中には，周縁加工を加えて一次剥離面を残していないものと，先端から樋状剥離を加えた後に周縁加工を加えているものが含まれる。これらの石器はナイフ形石器というよりは，むしろ尖頭器であると考えられる。

2）母岩別資料

・安山岩1～3　いずれも黒色緻密質安山岩であり，区別が困難なことから一括した。淡茶灰色から淡茶褐色を呈する。一側縁加工のナイフ形石器1点・剥片9点を含み，総重量は37.23ｇである。

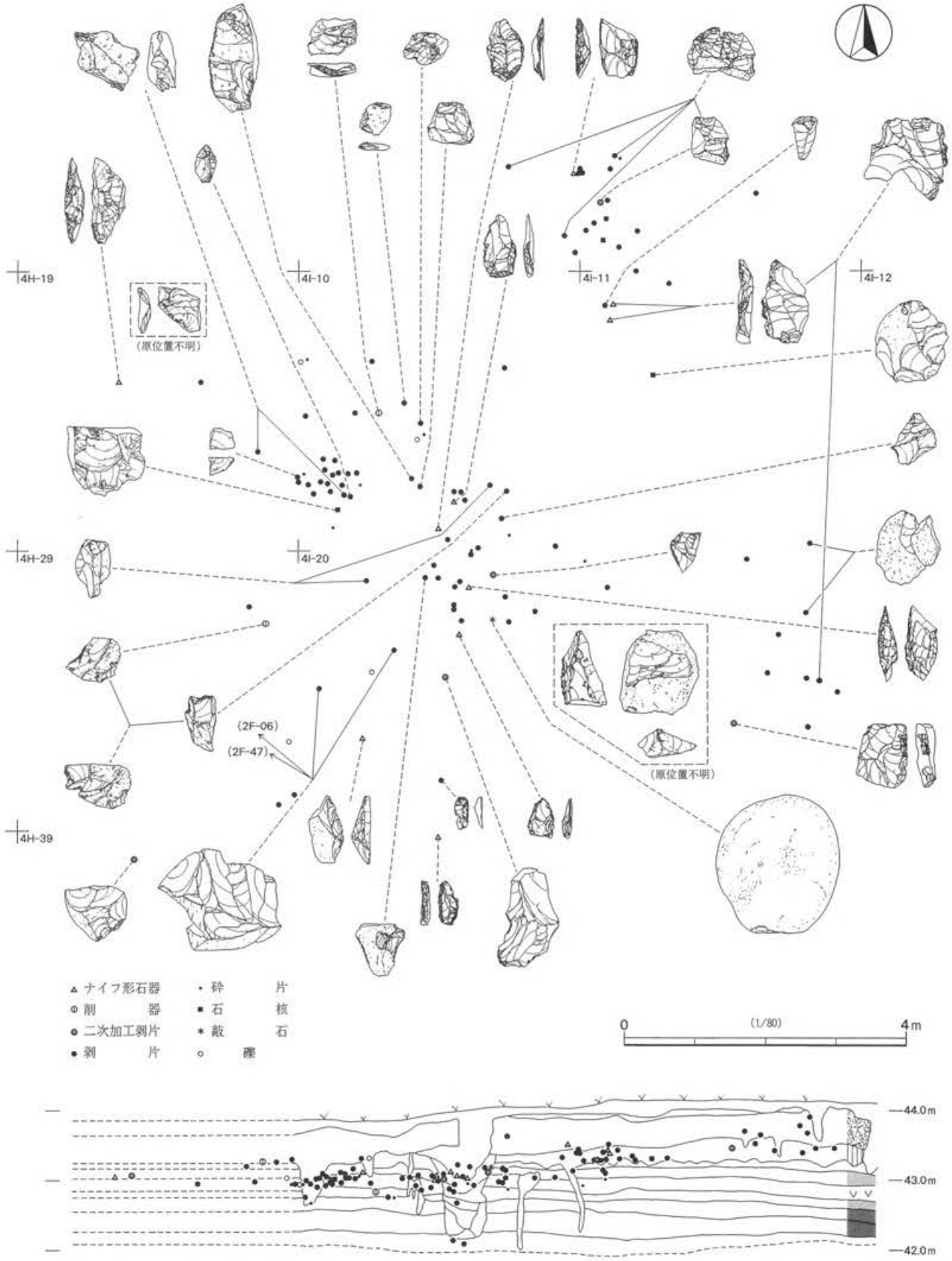
・黒曜石1　原礫面は淡黄褐色で，剥離面は黒色で径1.0㎜～1.5㎜程度の球顆が入る。光にかざすと透明の部分と灰色の部分がある。一側縁加工のナイフ形石器1点・二側縁加工のナイフ形石器1点・彫器1点・削器1点・剥片34点・石核1点を含み，総重量は78.21ｇである。

・黒曜石2　原礫面は淡黄褐色で，剥離面は黒色で径1.0㎜～1.5㎜程度の球顆が入る。光にかざすと透明の部分と灰色の部分がある。黒曜石1と特徴が類似し，同一母岩の可能性がある。剥片5点を含み，総重量は48.21ｇである。

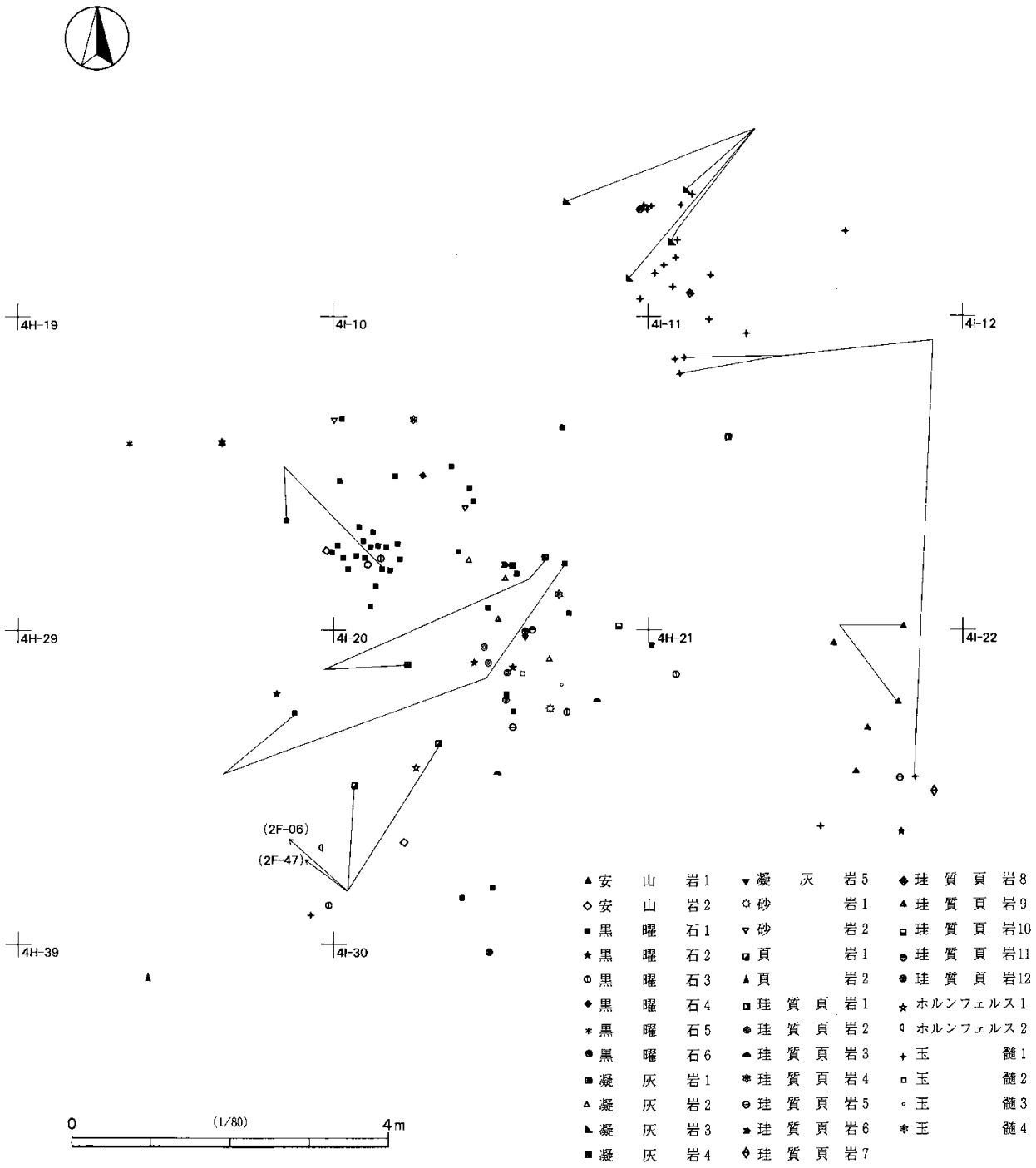
・黒曜石3　原礫面はすりガラス状で明灰色を呈し，剥離面はやや白く曇った黒色である。また径1㎜以下のベージュ色の球顆が無数に入る。光にかざすと緑灰色を呈する。剥片5点を含み，総重量は15.81ｇである。

・黒曜石4　剥離面は黒色の地に白色の微細な縞が無数に入り，光にかざすと灰色を呈する。また微細なベージュ色の球顆が入る。削器1点を含み，総重量は3.73ｇである。

・黒曜石5　剥離面は黒色の地に白色の微細な縞が，黒曜石4よりも多く入る。そのため全体に白みがかっ



第26図　第７ブロック遺物分布図

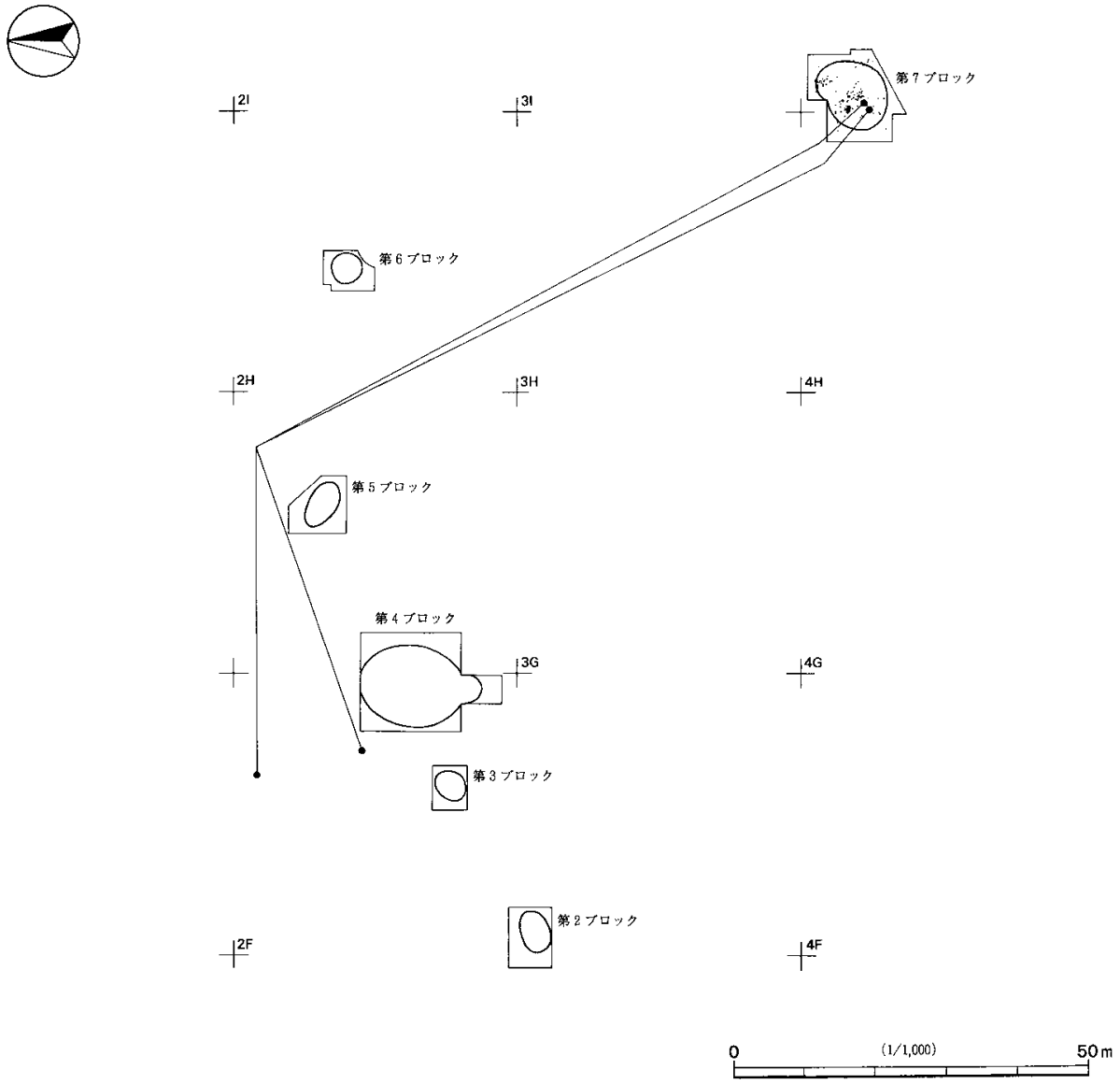


第27図　第７ブロック母岩別分布図

た色調である。また径２㎜以下のベージュ色の球顆が見られる。切出形のナイフ形石器を１点含み，総重量は6.87ｇである。

・黒曜石６　剥離面は灰色透明で，灰色不透明な部分が縞状に入る。切出形のナイフ形石器１点・面取りを持つ周辺加工の尖頭器１点(分類ではナイフ形石器)を含み，総重量は5.00ｇである。

・凝灰岩１　剥離面に明青灰色で淡黄色の縞が入る部分と，淡黄褐色の部分が，淡茶色の節理面を境に見られる。均質かつ硬質で珪質頁岩と考えられる。凝灰岩２・凝灰岩４・珪質頁岩２・珪質頁岩10は，質感



第28図　第7ブロック・ブロック外遺物接合状況図

が類似しており，同一の岩石であると考えられる。剥片1点を含み，総重量は22.88gである。

・凝灰岩2　剥離面は明青灰色で淡黄色の縞が入る。凝灰岩1と質感が類似し，同一母岩である可能性がある。本資料もむしろ珪質頁岩と思われる。二側縁加工のナイフ形石器1点・二次加工剥片1点・剥片1点を含み，総重量は6.47gである。

・凝灰岩3　原礫面・剥離面ともに淡赤褐色を呈する。本資料もむしろ珪質頁岩と思われる。二次加工剥片1点・剥片3点を含み，総重量は7.71gである。

・凝灰岩4　原礫面・剥離面ともにベージュ色の地に，青灰色の部分がわずかに斑状に入る。遺物番号22は青灰色の部分が入らず，質感も珪質でないことから別母岩である可能性がある。24・71は珪質頁岩2の原礫面の部分と類似しており，同一母岩である可能性がある。本資料もむしろ珪質頁岩と思われる。剥片3点を含み，総重量は6.95gである。

・凝灰岩５　原礫面は淡灰色と淡茶褐色の部分が入り混じる。剥離面は淡茶褐色を呈する。剥片１点を含み，総重量は2.17ｇである。

・砂岩１　青灰色・青黒色・緑白色の粒子からなり，原礫面は緻密で滑らかである。敲石１点を含み，総重量は324.8ｇである。

・砂岩２　青灰色・淡黄褐色の粒子からなり，原礫面は緻密で珪化している。礫２点を含み，総重量は17.01ｇである。

・頁岩１　剥離面は淡緑灰色を呈し，節理面は濃緑色から淡緑色を呈する。表面の質感は軟質で頁岩というよりは泥岩に近い。剥片２点を含み，総重量は27.45ｇである。上層出土の同一母岩の剥片２点と接合し，本ブロックの資料と合わせて計４点の資料が接合する。

・頁岩２　剥離面は淡いベージュ色を呈し，ガジリによる新鮮な面は黒色を呈する。黒色頁岩である。二次加工剥片１点・剥片１点を含み，総重量は20.33ｇである。

・珪質頁岩１　原礫面は茶褐色の地に，青黒色の部分が斑状に入る。剥離面は青灰色の部分と，青黒色の部分が斑状に入り混じる。石核１点を含み，総重量は42.36ｇである。

・珪質頁岩２　原礫面は淡いベージュ色や茶色を呈する。剥離面は原礫面に近い部分では黄褐色を，より中心の部分では青灰色を呈する。剥片４点を含み，総重量は11.81ｇである。

・珪質頁岩３　淡明青灰色や淡茶褐色の地に，青灰色の部分が縞状に入る。二次加工剥片１点・剥片１点を含み，総重量は19.65ｇである。

・珪質頁岩４　原礫面は淡茶褐色や青黒色を呈する。剥離面は濃青灰色の部分と，淡い薄茶色の部分が互層をなす。剥片２点を含み，総重量は7.28ｇである。

・珪質頁岩５　原礫面はベージュ色を呈する。剥離面は，淡赤褐色から赤みがかった乳白色を呈する地に，青灰色の珪化度の高い部分が細く縞状に入る。周縁加工の尖頭器1点(分類ではナイフ形石器)・剥片１点を含み，総重量は10.72ｇである。

・珪質頁岩６　原礫面は淡茶褐色を呈し，珪質である。剥離面の色調は原礫面と同じであるが，質感が粗い。剥片１点を含み，総重量は5.83ｇである。

・珪質頁岩７　原礫面は梨肌状で，青灰色と黄褐色の微細な部分からなる。剥離面は青黒色で，微細な黒色の部分や明灰色の部分が入る。珪化度が高くチャートとした方が適当と思われる。剥片１点を含み，総重量は8.43ｇである。

・珪質頁岩８　青灰色の地にオレンジ色の部分が縞状に入る。質感は珪質頁岩７と同様珪化度が高く，チャートと思われる。剥片１点を含み，総重量は4.70ｇである。

・珪質頁岩９　暗赤色の地に黒色の部分が縞状に入る。鉄石英(赤)と考えられる。表面に温度変化によってはじけた痕跡が見られる。剥片１点を含み，総重量11.05ｇである。

・珪質頁岩10　礫面に近い部分は茶褐色を呈し，より中心に近い部分は青灰色を呈する。剥片１点を含み，総重量0.74ｇである。

・珪質頁岩11　緑がかった青灰色で珪質である。剥片１点を含み，総重量は0.65ｇである。

・珪質頁岩12　青灰色で珪質である。剥片１点を含み，総重量は0.15ｇである。

・ホルンフェルス１　原礫面はベージュ色を呈し，剥離面は青黒色の部分とベージュ色の部分が互層になっている。礫１点を含み，総重量は21.39ｇである。

・ホルンフェルス２　青灰色の地に白色の縞が入る。表面には黄褐色の細かい斑点が入る。礫１点を含み，総重量は3.07ｇである。

・玉髄１　原礫面は白色や茶褐色を呈し，剥離面は乳白色で半透明である。一側縁加工のナイフ形石器１点・二次加工剥片１点・剥片17点・石核１点を含み，総重量は49.07ｇである。

・玉髄２　原礫面は白色を呈し，剥離面は乳白色で半透明である。切出形のナイフ形石器１点を含み，総重量は5.37ｇである。

・玉髄３　緑がかった茶褐色の地に，白色の多孔質の部分が若干見られる。剥片１点を含み，総重量は4.00ｇである。

・玉髄４　原礫面は赤褐色で半透明である。剥離面は淡いオレンジ色で半透明である。剥片１点を含み，総重量は5.35ｇである。

３）出土遺物（第29～32図）

本ブロックでは，切出形石器・一側縁加工ナイフ形石器・二側縁加工ナイフ形石器とともに尖頭器に分類される石器が出土している。これらの石器は，いずれもその素材が一般剥片である。切出形石器(第29図４・５・９)は，すべて幅広剥片素材で３点出土している。利用石材は黒曜石２点，玉髄１点である。一側縁加工ナイフ形石器は，幅広剥片素材(第29図３・第32図37ｂ)が２点・縦長剥片素材(第29図１)が１点の計３点である。利用石材は，それぞれ黒色緻密質安山岩１点・高原山産黒曜石１点と，玉髄１点である。二側縁加工ナイフ形石器は，幅広(第29図７)・縦長剥片素材(第29図２)が１点ずつの計２点である。利用石材は，それぞれ凝灰岩(珪質頁岩)１点・高原山産黒曜石１点である。周辺加工の小型の尖頭器(第29図８)は幅広剥片素材で珪質頁岩製，面取りを持つ周辺加工の尖頭器(第29図６)は縦長剥片素材で信州系黒曜石製のものが，１点ずつ出土している。

概要の部分でも触れたように，黒曜石１と玉髄１は，遺跡内で比較的まとまった剥片剥離作業を行っている。しかしナイフ形石器・尖頭器の調整剥片は，ほとんど見られず，ナイフ形石器と尖頭器は製品で搬入されたものと思われる。また遺跡内に残された剥片には，ナイフ形石器の素材となるものは残されていない。

彫器(第29図10)は１点出土し，剥片の末端部の折れ面から１条の樋状剥離を加えている。

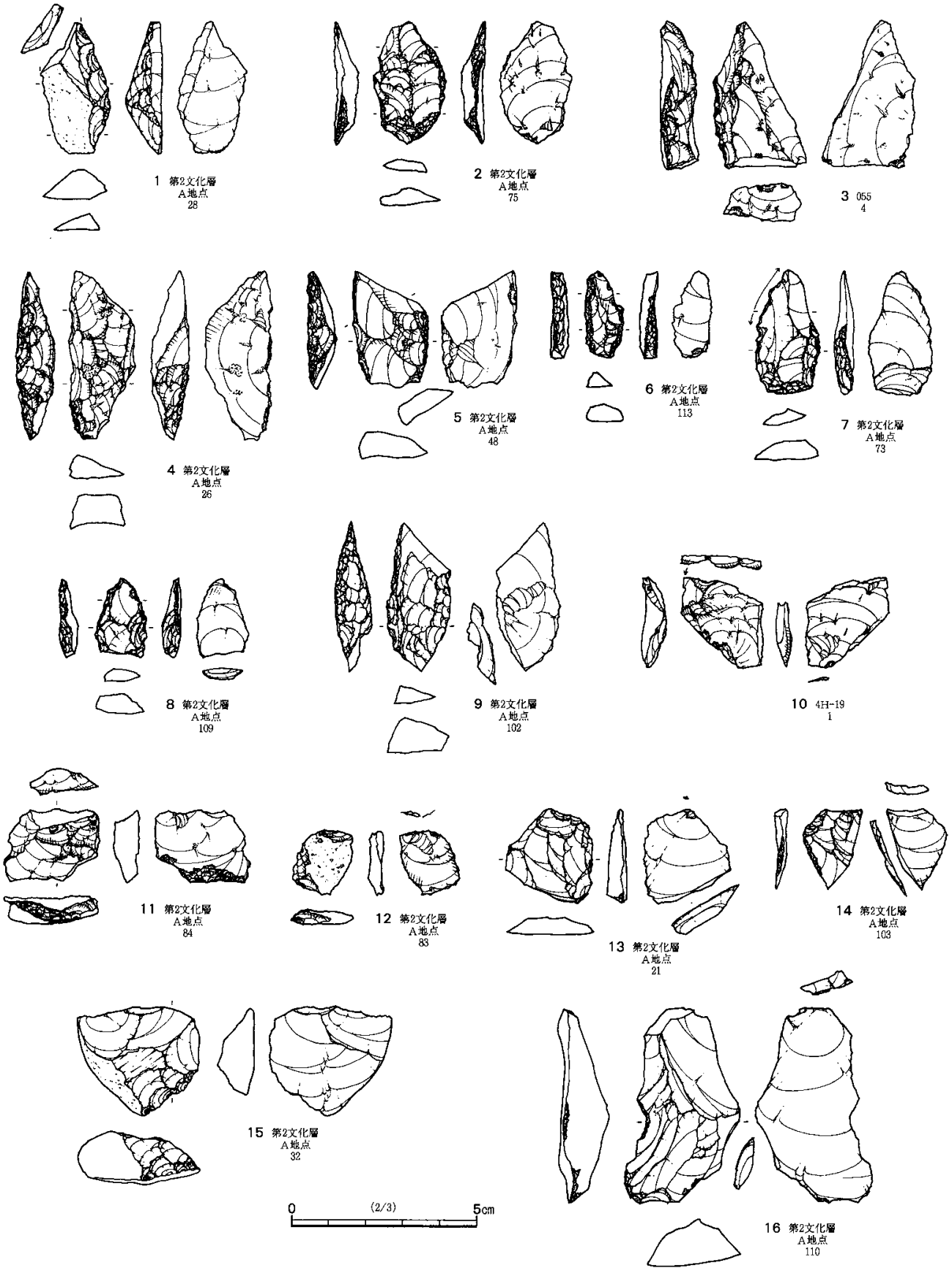
削器は２点出土し，それぞれ矩形の剥片の背面左側縁に加工を加えたもの(第31図32ｂ)，腹面端部に加工を加えたもの(第29図11)がある。二次加工とされる剥離面が特に新鮮であることから，これらの削器はガジリを二次加工とした可能性が高い。

二次加工石器(第29図14・15・16，第30図17，第31図34ｄ)は５点出土している。いずれも一般剥片に加工を加えている。

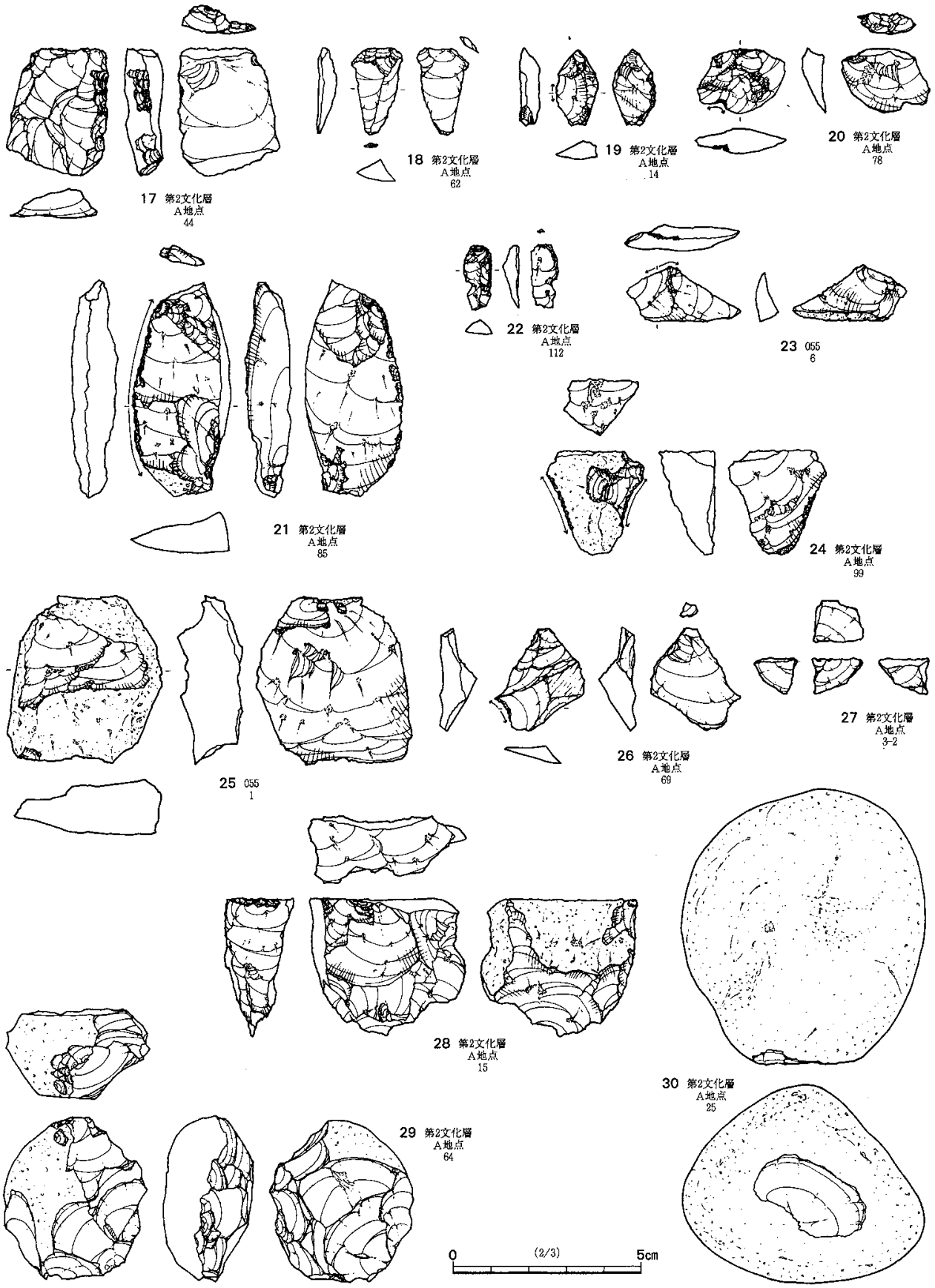
石核は３点出土している。黒曜石・白滝頁岩・玉髄製の石核がそれぞれ１点ずつ出土している。

黒曜石製のもの(第30図28)は厚手の剥片を素材として，小口面と隣の幅広の面を作業面に用いて矩形の剥片を生産している。白滝頁岩製のもの(第30図29)は円礫を用いて求心的に交互剥離を加えて剥片を生産している。同一母岩の剥片は遺跡内で出土していない。玉髄製のものは，円礫の礫面側から剥片剥離を行って剥片を生産している。

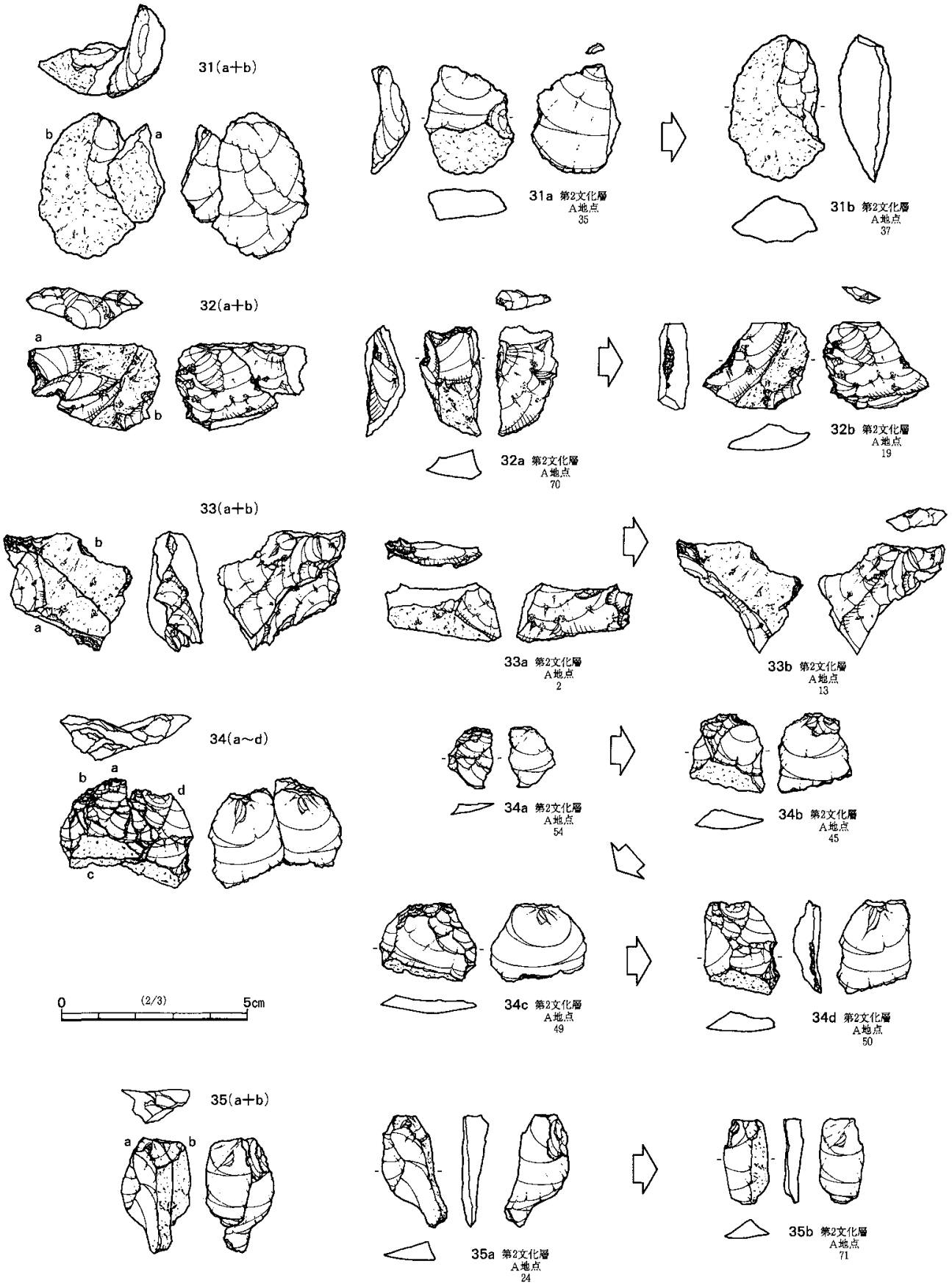
敲石(第30図30)は砂岩製で１枚の剥離痕を有する。



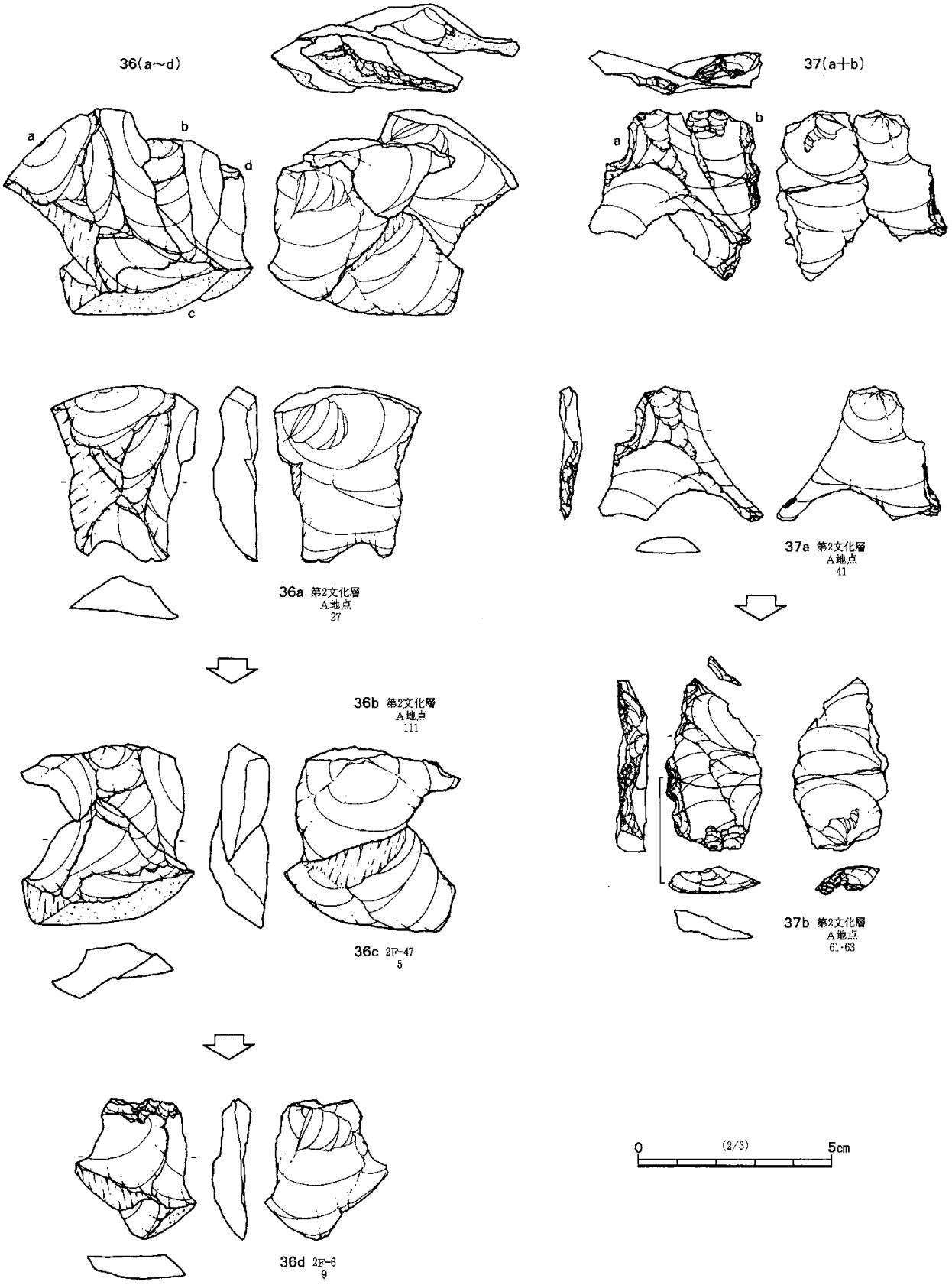
第29図　第７ブロック出土遺物(1)



第30図　第７ブロック出土遺物(2)



第31図　第７ブロック出土遺物(3)



第32図　第７ブロック出土遺物(4)

第７表　第７ブロック出土遺物組成表

母岩名	ナイフ形石器	彫器	削器	二次加工剥片	剥片	石核	敲石	礫	点数	点数比	重量ｇ	重量比
安山岩1	－	－	－	－	6	－	－	－	6	4.80%	27.26	3.24%
安山岩2	1	－	－	－	2	－	－	－	3	2.40%	8.34	0.99%
安山岩3	－	－	－	－	1	－	－	－	1	0.80%	1.63	0.19%
黒曜石1	2	1	1	－	34	1	－	－	39	31.20%	78.21	9.28%
黒曜石2	－	－	－	－	5	－	－	－	5	4.00%	48.21	5.72%
黒曜石3	－	－	－	－	5	－	－	－	5	4.00%	15.81	1.88%
黒曜石4	－	－	1	－	－	－	－	－	1	0.80%	3.73	0.44%
黒曜石5	1	－	－	－	－	－	－	－	1	0.80%	6.87	0.82%
黒曜石6	2	－	－	－	－	－	－	－	2	1.60%	5.00	0.59%
凝灰岩1	－	－	－	－	1	－	－	－	1	0.80%	22.88	2.72%
凝灰岩2	1	－	－	1	1	－	－	－	3	2.40%	6.47	0.77%
凝灰岩3	－	－	－	1	3	－	－	－	4	3.20%	7.71	0.92%
凝灰岩4	－	－	－	－	3	－	－	－	3	2.40%	6.95	0.82%
凝灰岩5	－	－	－	－	1	－	－	－	1	0.80%	2.17	0.26%
砂岩1	－	－	－	－	－	－	1	－	1	0.80%	324.80	38.55%
砂岩2	－	－	－	－	－	－	－	2	2	1.60%	17.01	2.02%
頁岩1	－	－	－	－	2	－	－	－	2	1.60%	27.45	3.26%
頁岩2	－	－	－	1	1	－	－	－	2	1.60%	20.33	2.41%
珪質頁岩1	－	－	－	－	－	1	－	－	1	0.80%	42.36	5.03%
珪質頁岩2	－	－	－	－	4	－	－	－	4	3.20%	11.81	1.40%
珪質頁岩3	－	－	－	1	1	－	－	－	2	1.60%	19.65	2.33%
珪質頁岩4	－	－	－	－	2	－	－	－	2	1.60%	7.28	0.86%
珪質頁岩5	1	－	－	－	1	－	－	－	2	1.60%	10.72	1.27%
珪質頁岩6	－	－	－	－	1	－	－	－	1	0.80%	5.83	0.69%
珪質頁岩7	－	－	－	－	1	－	－	－	1	0.80%	8.43	1.00%
珪質頁岩8	－	－	－	－	1	－	－	－	1	0.80%	4.70	0.56%
珪質頁岩9	－	－	－	－	1	－	－	－	1	0.80%	11.05	1.31%
珪質頁岩10	－	－	－	－	1	－	－	－	1	0.80%	0.74	0.09%
珪質頁岩11	－	－	－	－	1	－	－	－	1	0.80%	0.65	0.08%
珪質頁岩12	－	－	－	－	1	－	－	－	1	0.80%	0.15	0.02%
ホルンフェルス1	－	－	－	－	－	－	－	1	1	0.80%	21.39	2.54%
ホルンフェルス2	－	－	－	－	－	－	－	1	1	0.80%	3.07	0.36%
玉髄1	1	－	－	1	17	1	－	－	20	16.00%	49.07	5.82%
玉髄2	1	－	－	－	－	－	－	－	1	0.80%	5.37	0.64%
玉髄3	－	－	－	－	1	－	－	－	1	0.80%	4.00	0.47%
玉髄4	－	－	－	－	1	－	－	－	1	0.80%	5.35	0.64%
計	10	1	2	5	99	3	1	4	125	100.00%	842.45	100.00%
点数比	8.00%	0.80%	1.60%	4.00%	79.20%	2.40%	0.80%	3.20%	100.00%			

８．地点外・単独出土遺物（第33～42図，第15表，図版25～28）

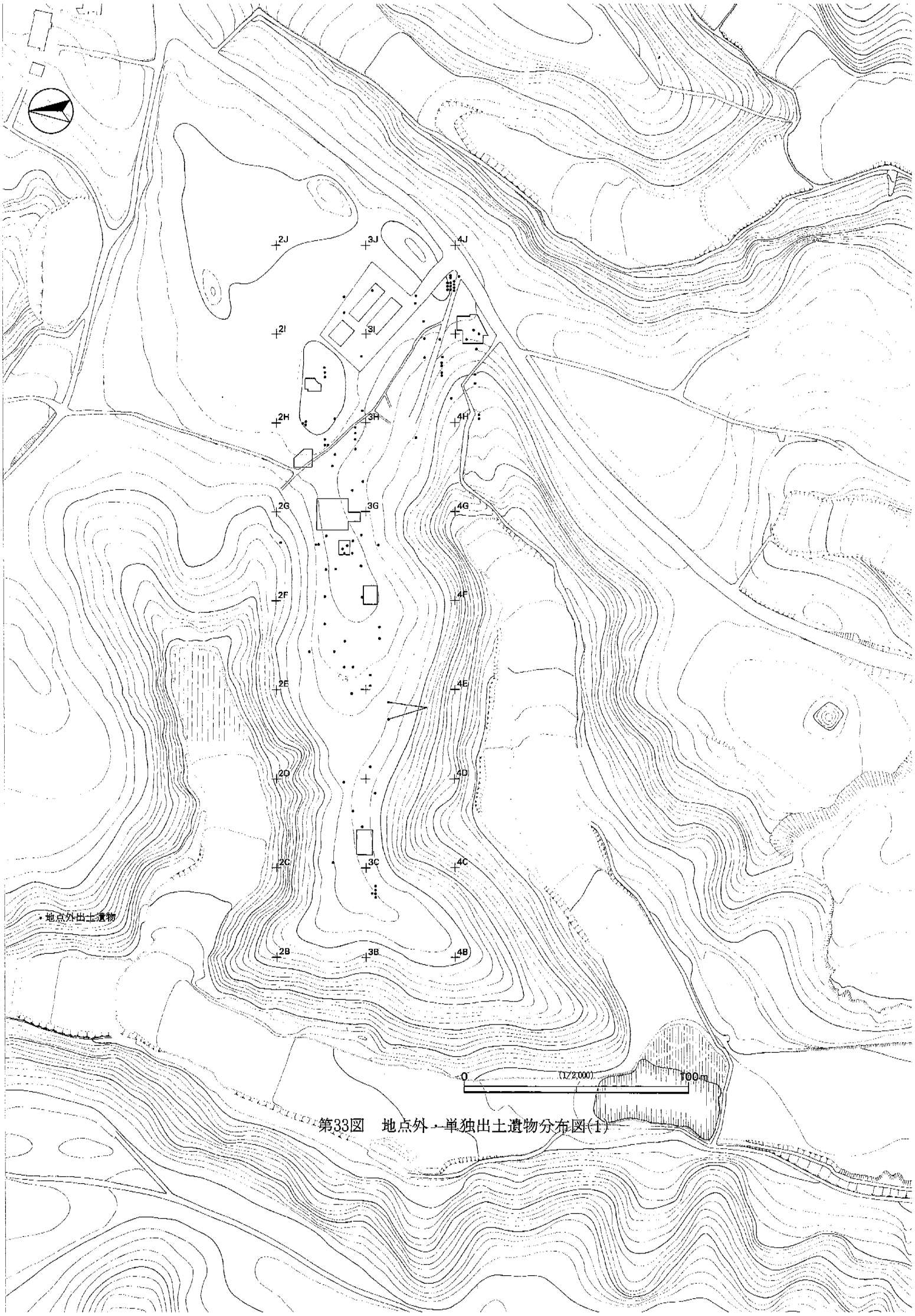
グリッド及び上層遺構の調査中に出土した石器を抽出した。ただし，削器など確実に旧石器時代に帰属するとは言えない資料も含んでいることをお断りしておく。個別の記載は確実に旧石器時代に帰属すると思われるもののみについて行う。

上層から出土している石器の内訳は，尖頭器６点・楔形石器７点・細石核１点・削器６点・石核17点・ナイフ形石器５点・二次加工剥片１点・礫１点・剥片53点で，合計97点である。

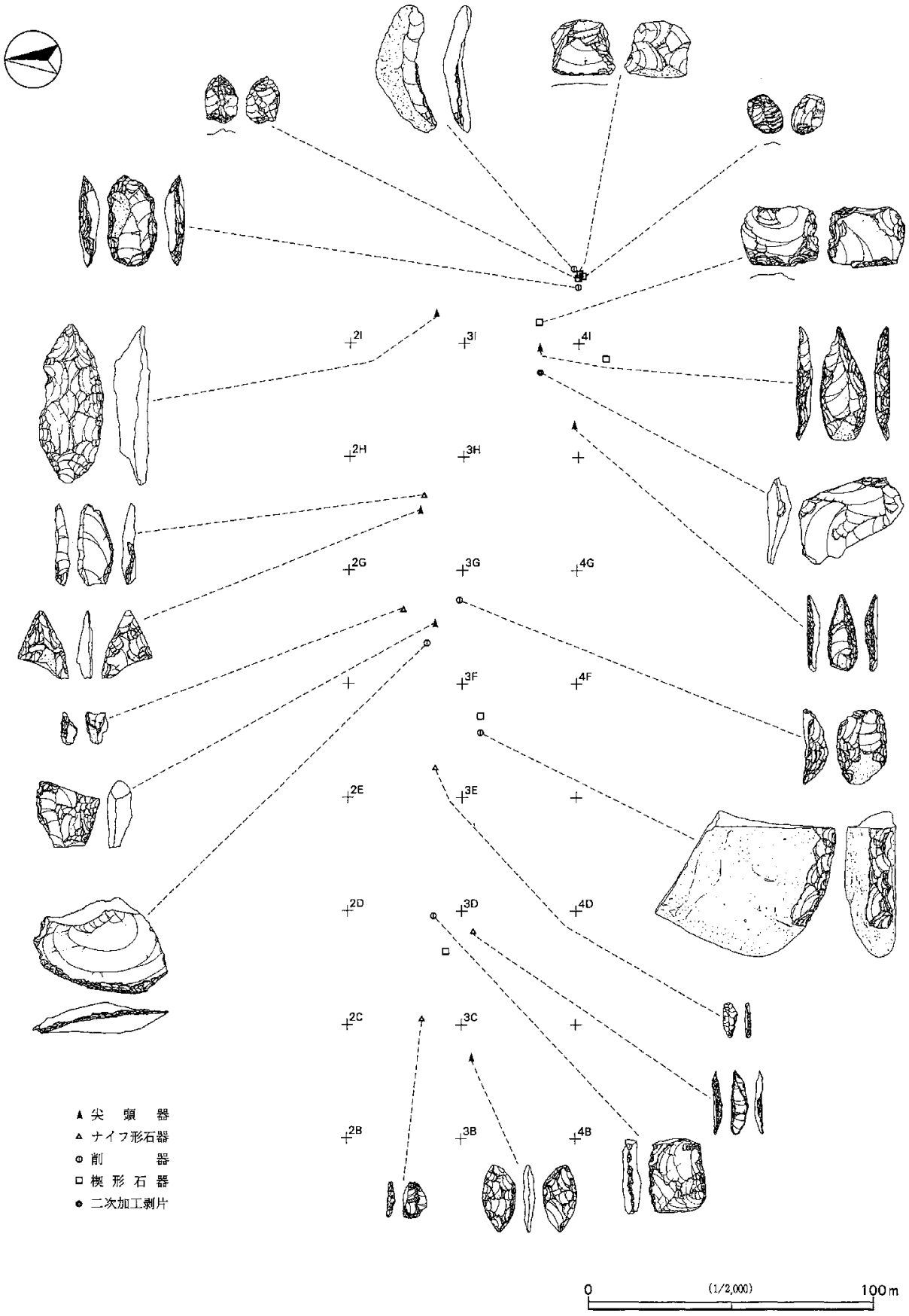
尖頭器は，礫もしくは礫片を素材とするものと，剥片素材のものに分類できる。

礫もしくは礫片素材のものは，ホルンフェルス製のもの(第36図５)・チャート製のもの(第36図６)が１点ずつある。ホルンフェルス製のものは長さ8.4cmの両面加工の尖頭器で，器体中央に厚みを残す。チャート製のものは，中間部だけを残す資料であるが，器体先端からの樋状剥離が確認できる。樋状剥離の後に，その縁辺から裏面側に加工を施している。

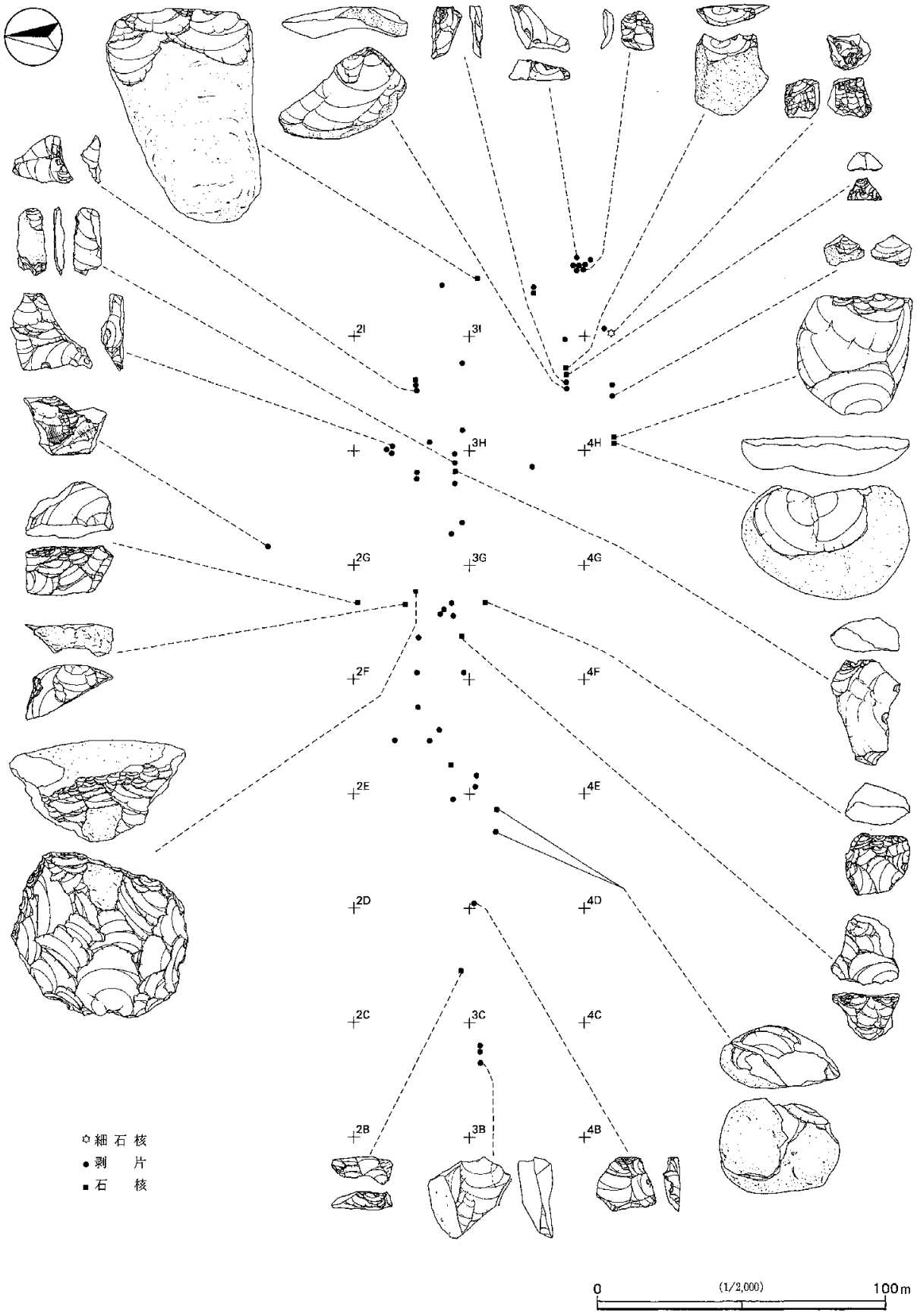
剥片素材のものは，石英安山岩製が１点・黒色緻密質安山岩製が１点・珪質頁岩製が２点である。石英安山岩製のもの(第36図１)は，両面に調整加工を加えている。黒色緻密質安山岩製のもの(第36図２)は，裏面に素材の主要剥離面を残し，幅広剥片素材であることが分かる。表面に原礫面を残す。珪質頁岩製の



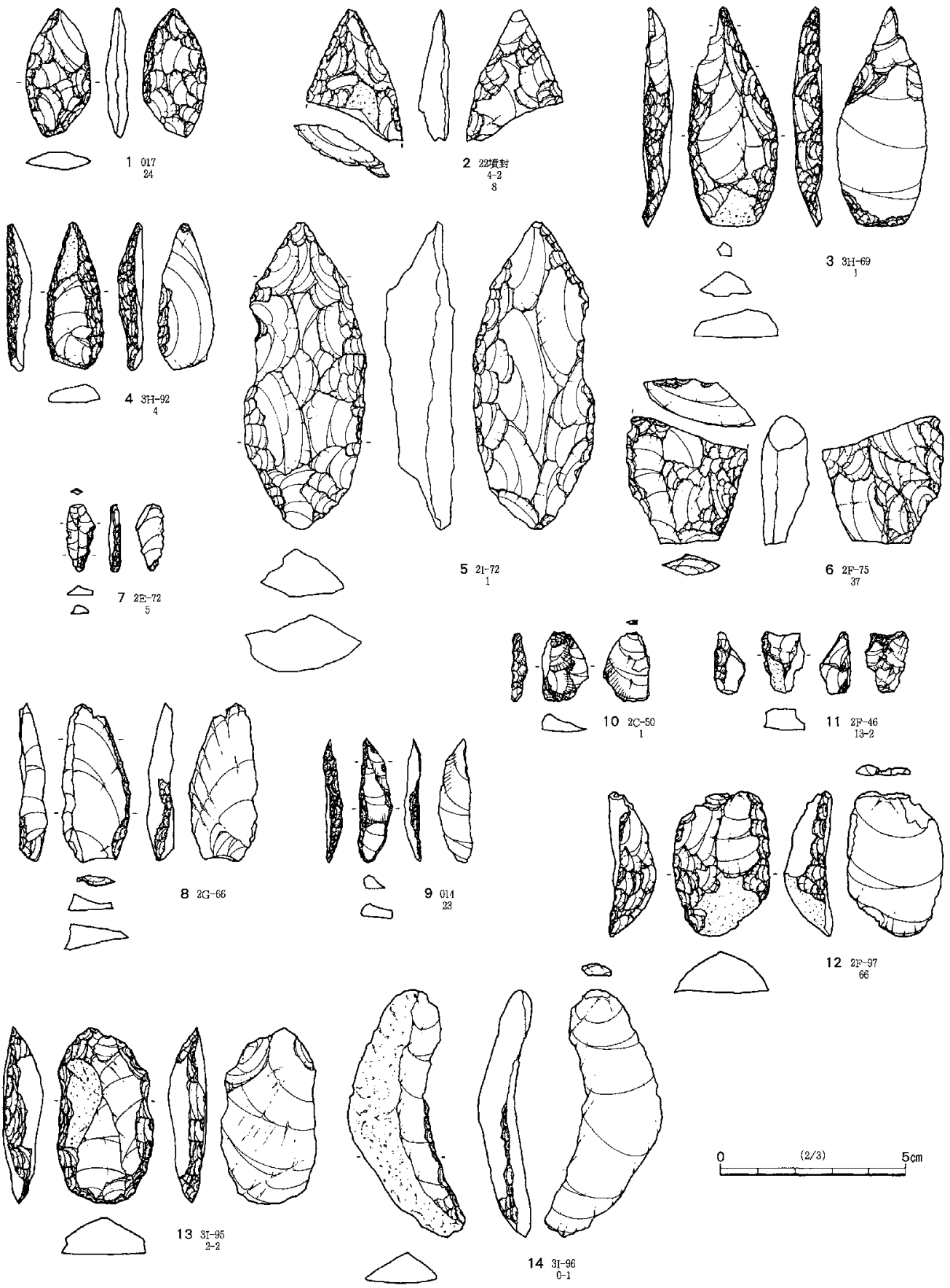
第33図　地点外・単独出土遺物分布図(1)



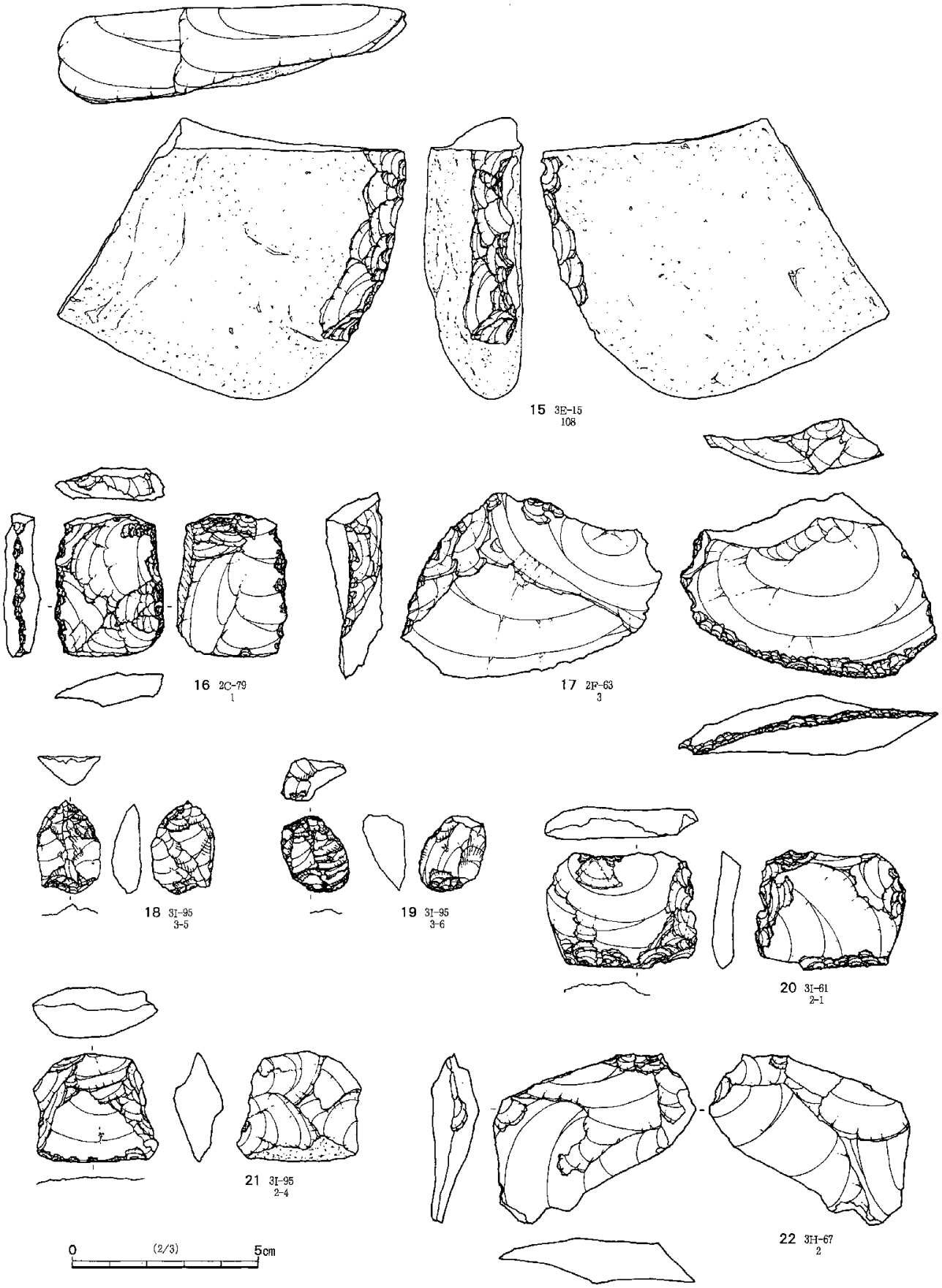
第34図　地点外・単独出土遺物分布図(2)



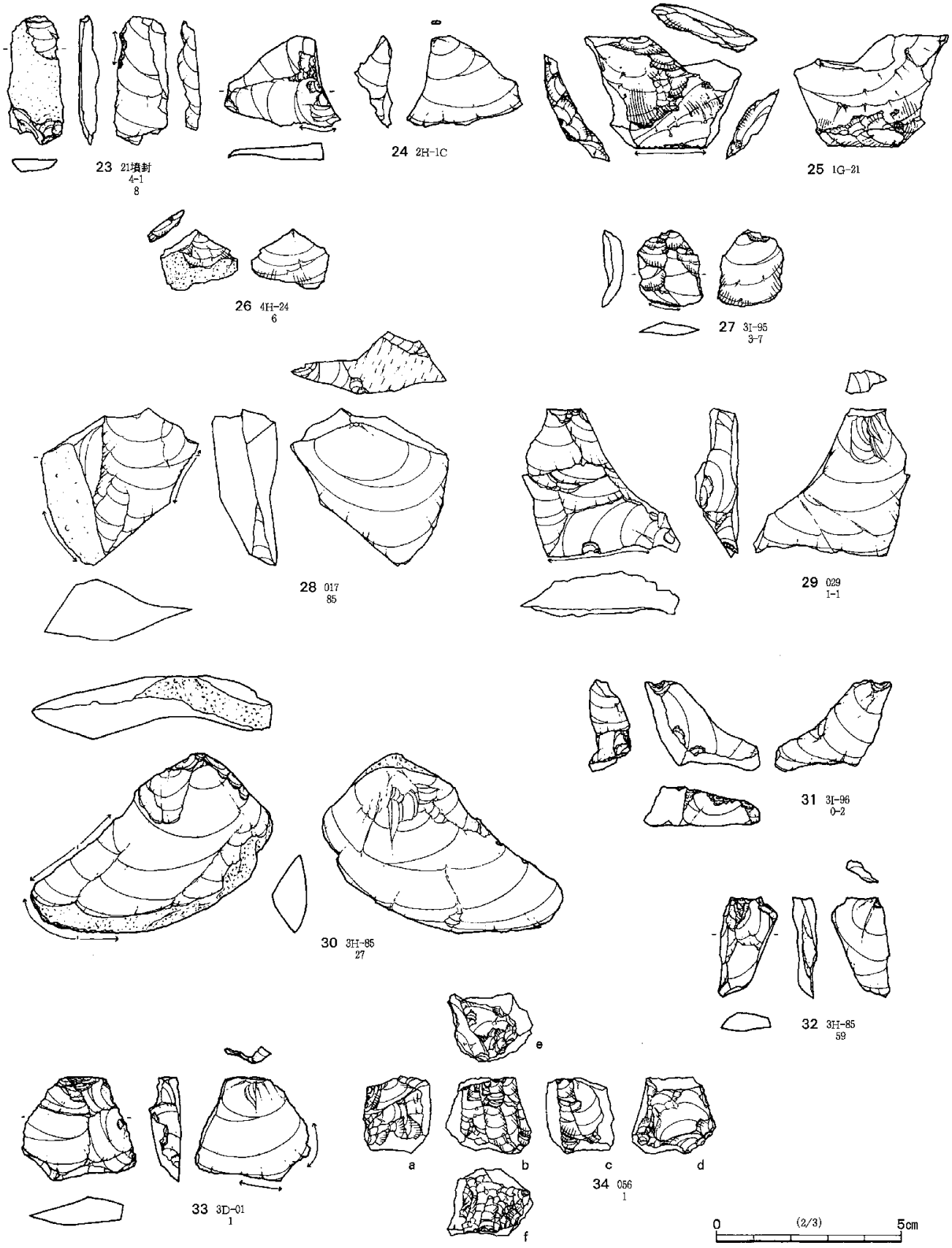
第35図　地点外・単独出土遺物分布図(3)



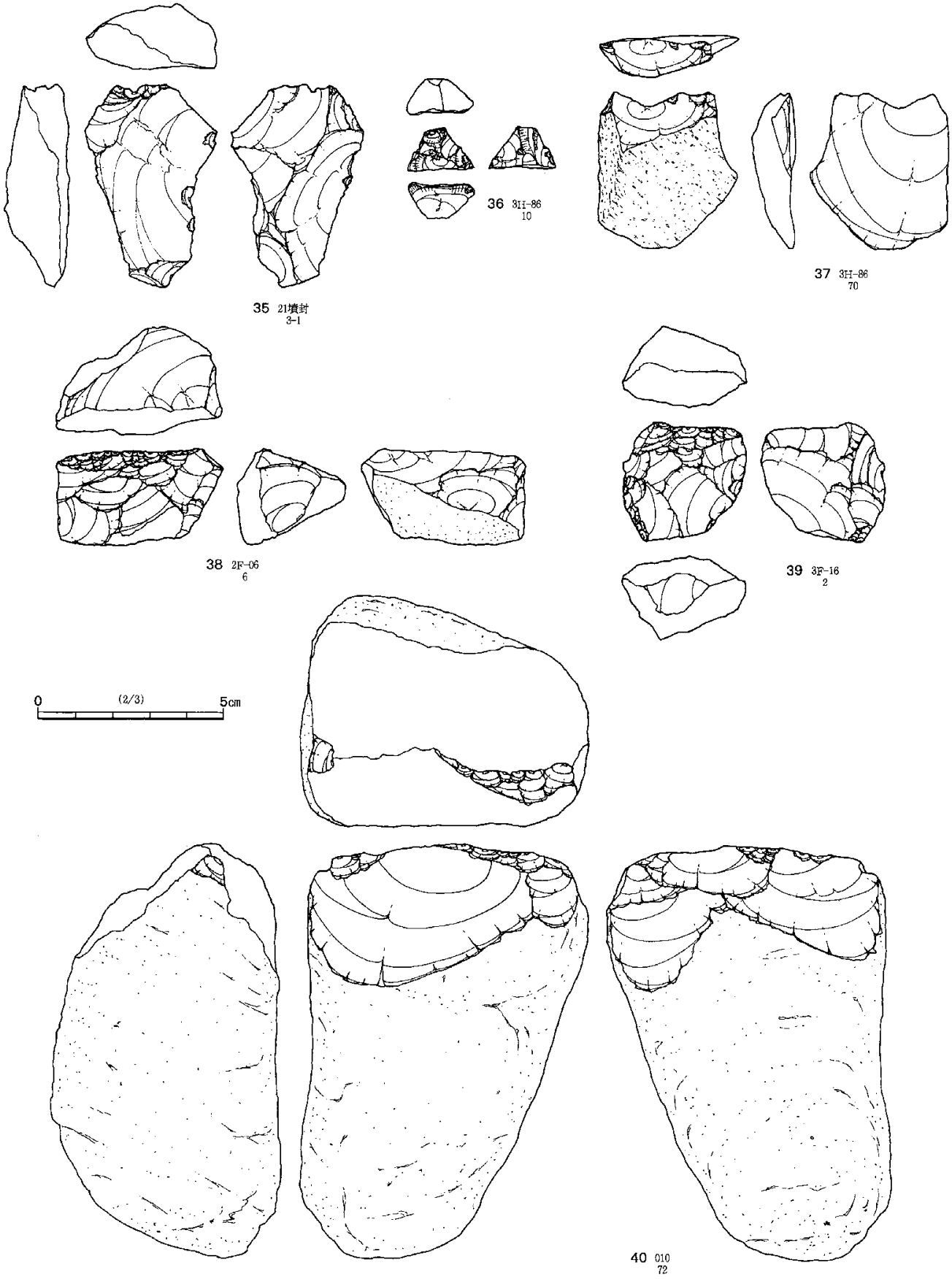
第36図　地点外・単独出土遺物(1)



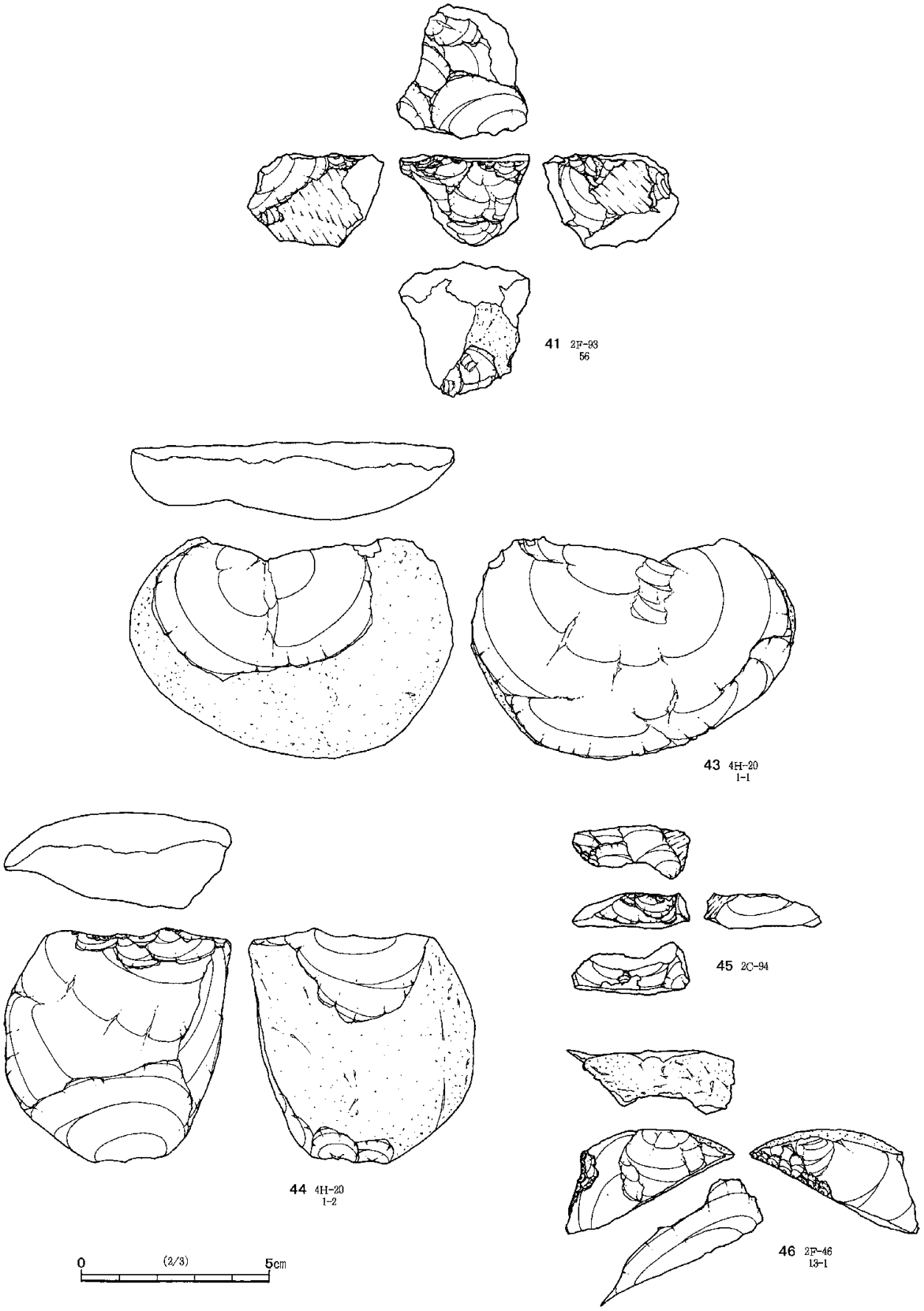
第37図　地点外・単独出土遺物(2)



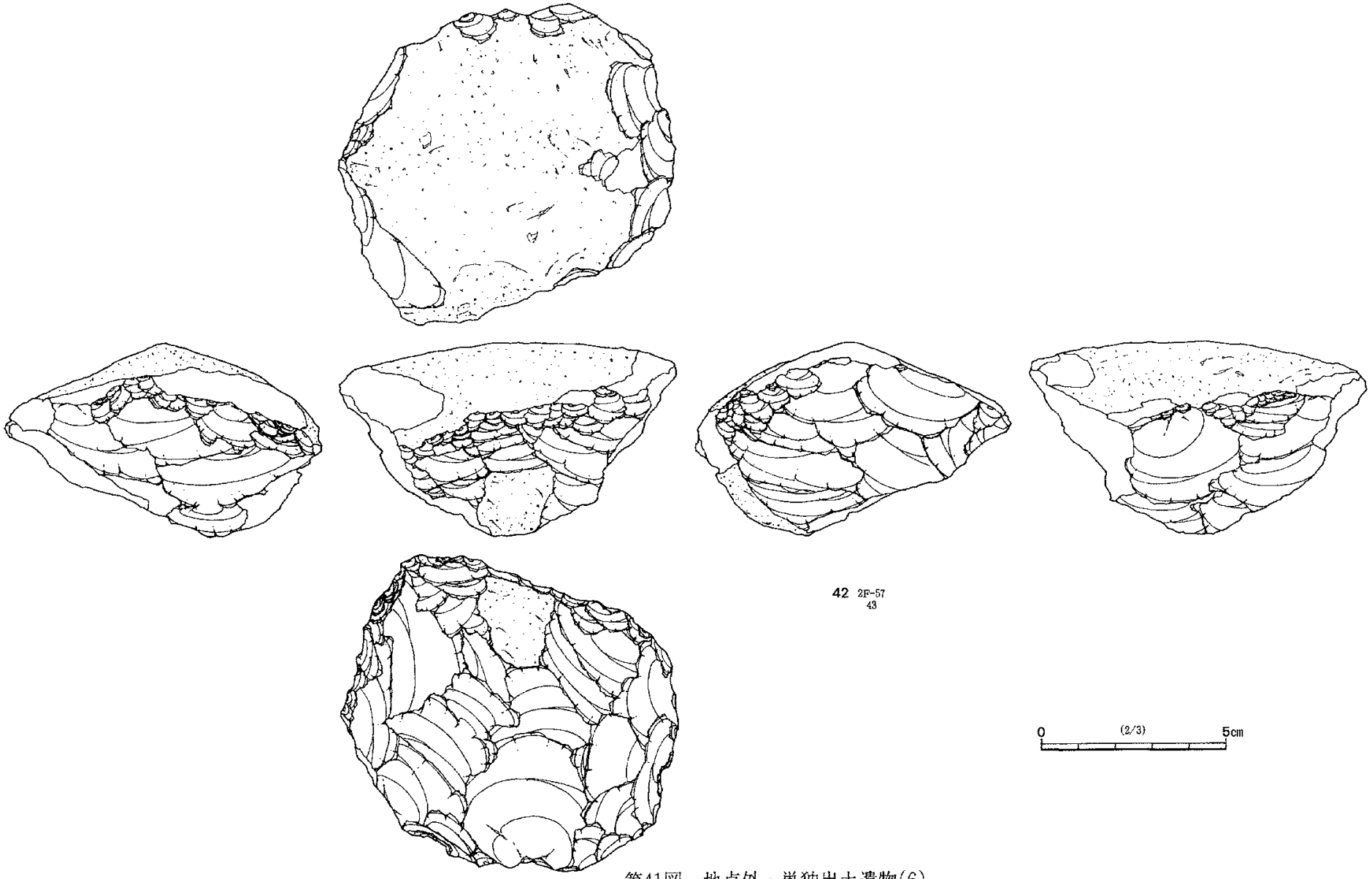
第38図　地点外・単独出土遺物(3)



第39図　地点外・単独出土遺物(4)



第40図　地点外・単独出土遺物(5)

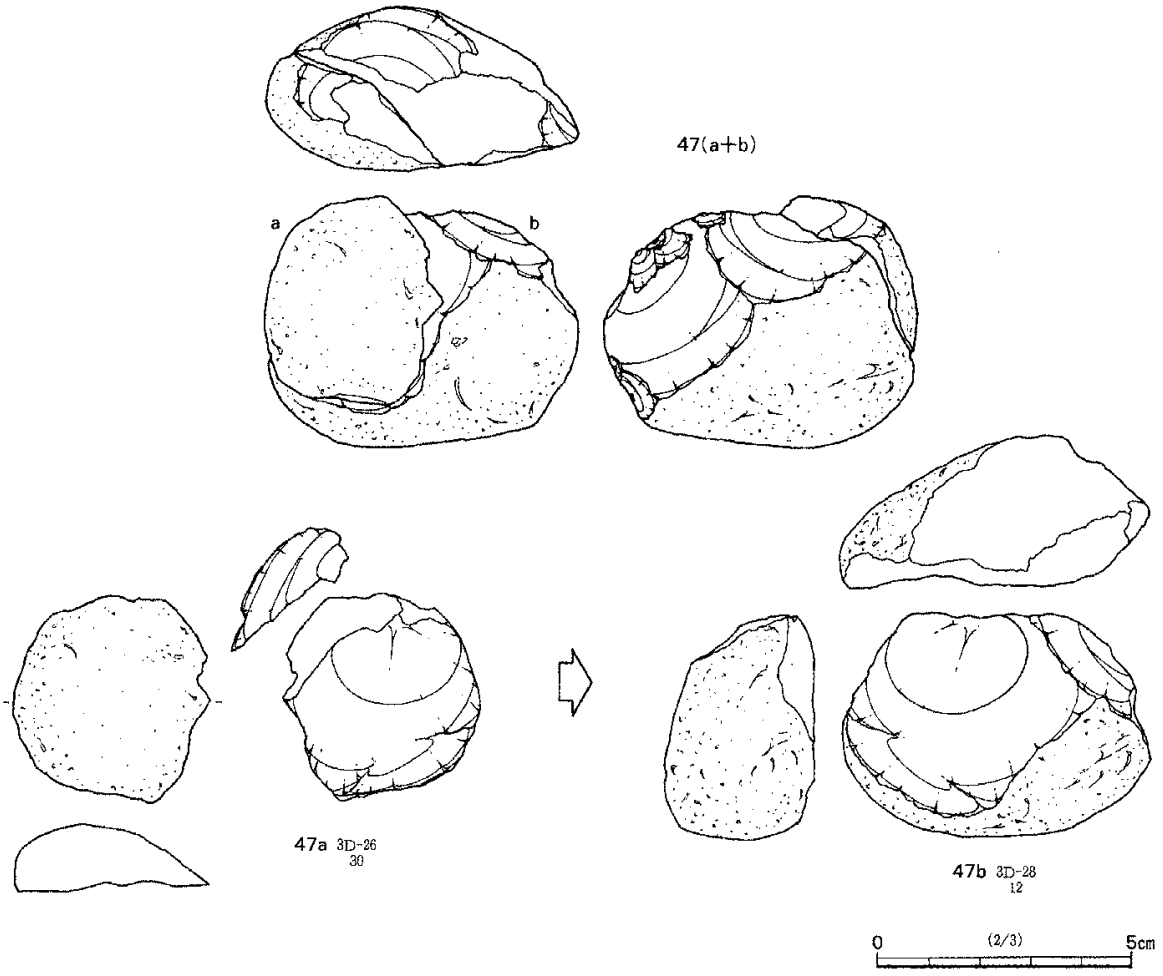


第41図　地点外・単独出土遺物(6)

ものは，縦長剥片素材のもの(第36図３)と幅広剥片素材のもの(第36図４)とがあるが，周辺加工を加えて涙滴状の形態に仕上げている点で共通する。第36図３に，器体先端部から２条の樋状剥離が見られる。

ナイフ形石器は，黒色緻密質安山岩が２点・信州系黒曜石が２点・高原山黒曜石が１点である。このうち高原山黒曜石製のもの(第36図11)は，表面の右側縁が折れ面であり，二次加工剥片と考えられる。また，黒色緻密質安山岩製のもの(第36図８)は，先行剥離による鋭い縁辺を残しておらず削器と思われる。一側縁加工のナイフ形石器は２点あり，黒色緻密質安山岩(第36図７)と信州系黒曜石製のもの(第36図10)を１点ずつ含む。小型で組み合わせて使用されたものと思われる。二側縁加工のナイフ形石器(第36図９)は１点で，信州系黒曜石が１点で幅広剥片を素材とする。

細石核(第38図34)は，高原山黒曜石製の野辺山型細石核である。実測図のｂ面とｆ面に細石刃剥離作業面が観察されるが，切り合い関係からｆ面のほうが古い作業面である。ｂ面で剥離作業を行っていたときと，ｆ面で剥離作業を行っていたときの打面は，それぞれｅ面・ｄ面であるがいずれにも打面調整が見られる。



第42図　地点外・単独出土遺物(7)

参考文献

田村隆　1992年「遠い山・黒い石」『先史考古学論集２』安斎正人編
田村隆　2003年「林小原子台再訪」『考古学Ｉ』安斎正人編

属性表註

打面　数字：打面上に残る剥離面数。打撃方向が判断できない節理面であっても，面数に含める。
　そのうちネガティヴバルブをもつ剥離面数を(　)内に示す。
Ｐ：点状打面。　Ｌ：線状打面。　Ｃ：自然面打面

打角・剥離角　打角：剥片の打面とポジティヴバルブがつくる角度。
剥離角：石核の打面とネガティヴバルブがつくる角度。

背面構成　Ⅰ：主要剥離面と同一方向の剥離面が存在する場合。
Ⅱ：主要剥離面と逆方向の剥離面が存在する場合。
Ⅲ：主要剥離面と直交または斜行する剥離面が存在する場合。
　Ⅰ～Ⅲの場合，剥片剥離後の調整痕は除く。
Ⅳ：剥離方向が不明な節理面。
Ｖ：原礫面

末端形状　Ｆ：直線状　Feather end　Ｈ：蝶番状　Hinge fracture　Ｓ：階段状　Step fracture
Ｏ：逆反りまたは石核底面に達する　Outrepasse

調整角　掻削器の刃部，ナイフ形石器の刃潰し，彫刻刀面の形成などにおける調整剥離角。
両面調整石器の場合は剥離角を示さない。

使用痕　Ｎ：刃こぼれ　Nicked edge
Ｃ：いわゆるコーングロス。植物との接触面に生じるポリッシュ。Corn gross
Ｓ：敲打　Striking(Striked) marks
Ｇ：すりつぶし
Ｐ：磨り
Ｈ：被熱痕

折れ　記号は折れによって残存している部位を示す。
Ｈ：頭部　Head
ＶＭ：上下方向の中間部　Vertical Middle
Ｂ：尾部　Bottom
Ｒ：背面からみて右側　Right
ＨＭ：左右方向の中間部　Horizontal Middle
Ｌ：背面からみて左側　Left

第8表　第1ブロック出土遺物属性表

挿図番号	遺物番号	器種	石質・母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
第12図11	1	石核	嶺岡頁岩 2	36.21	46.01	41.79	73.87		84～124						
第11図6b	2	剥片	嶺岡頁岩 3	36.16	28.96	15.98	12.46			Ⅲ	O			LB	
第12図12a	3	剥片	ホルンフェルス 3	37.20	25.07	8.82	5.63	C	112	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	H			R	
第11図4	4・26	剥片	嶺岡頁岩 7	38.20	36.49	5.72	5.65	2	110	Ⅰ＋Ⅳ＋Ⅴ	F	64			
	5	剥片	流紋岩 1	19.14	25.82	8.69	4.20			Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ				VM	
	6	剥片	嶺岡頁岩 2	28.68	19.18	8.90	3.35	1	76	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅳ	H				
	7	剥片	安山岩 4	59.96	43.02	16.03	42.20	C	130	Ⅰ＋Ⅴ	H				
第11図3	8	二次加工剥片	嶺岡頁岩 2	27.23	31.42	13.32	7.62	3(1)	96	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H	90			
第11図10	9	石核	嶺岡頁岩 2	18.38	34.68	35.27	16.05		70						
	10	剥片	嶺岡頁岩 6	28.44	24.85	13.13	7.30	1	132	Ⅳ＋Ⅴ	F				
	11	剥片	ホルンフェルス 3	21.63	24.73	9.06	3.62	C	78	Ⅰ＋Ⅴ	F			R	
第11図7	12	剥片	嶺岡頁岩 5	53.43	35.56	13.45	15.58	1	106	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅴ	H		N		
第12図12b	13	剥片	ホルンフェルス 3	26.99	22.52	5.72	1.18				H			B	
	14	剥片	安山岩 4	15.53	12.83	3.64	0.45	1	112	Ⅰ＋Ⅲ	H			L	
	15	剥片	流紋岩 1	23.25	18.79	14.40	5.05	1	116	Ⅰ				H	
	16	剥片	嶺岡頁岩 4	19.94	19.63	8.17	1.86	9(7)	96	Ⅲ＋Ⅳ＋Ⅴ	S				
	17	剥片	安山岩 4	10.89	23.58	7.17	1.51	1	104	Ⅲ	O				
第11図2	18	楔形石器	嶺岡頁岩 4	25.83	28.56	6.01	3.62								
第11図8	19	石核	嶺岡頁岩 1	48.08	43.11	32.62	47.02		56～106						
第11図5	20	剥片	嶺岡頁岩 1	29.49	17.05	6.41	2.01	1	124	Ⅰ＋Ⅲ	H		N		
第11図6a	21	剥片	嶺岡頁岩 3	37.54	39.91	14.84	15.42			Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	O			RB	
	22	剥片	嶺岡頁岩 2	26.95	22.76	11.26	6.11	5	92	Ⅰ＋Ⅲ	O				
第11図9	23	剥片	嶺岡頁岩 1	21.77	19.36	17.17	4.18		66～70						
	24	剥片	嶺岡頁岩 3	35.65	33.61	7.86	6.66	C	98	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
第11図1	25	ナイフ形石器	嶺岡頁岩 1	34.29	12.15	6.29	1.96			Ⅰ＋Ⅱ	F	66～90			

第9表　第2ブロック出土遺物属性表

挿図番号	遺物番号	器種	石質・母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
第13図1	1	剥片	安山岩 1	24.55	13.19	3.68	1.22	1	100	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	2	剥片	チャート 1	8.51	15.13	3.33	0.55	1	106	Ⅲ	H				
	3	剥片	チャート 1	15.69	16.20	4.31	0.96	1	142	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	4	剥片	チャート 1	13.58	9.50	2.64	0.27	1	124	Ⅰ	H				

第10表　第3ブロック出土遺物属性表

挿図番号	遺物番号	器種	石質・母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
第14図1	1	削器	安山岩 2	34.53	27.36	5.13	5.03			Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ		76～84			
第14図2	2	剥片	流紋岩 1	50.34	42.28	12.71	13.81	1	116	Ⅱ＋Ⅲ	H		N		
	3	剥片	頁岩 1	35.14	24.30	9.67	8.25	1	130	Ⅰ＋Ⅴ	H				
	4	剥片	玉髓 1	38.43	35.72	13.71	15.82	1	136	Ⅲ＋Ⅴ	H				

第11表　第4ブロック出土遺物属性表(1)

挿図番号	遺物番号	器種	石質・母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
第17図6	1	ナイフ形石器	安山岩 2	29.47	14.86	4.69	1.99			Ⅰ＋Ⅳ		74～96			＋
第19図31b	2	剥片	ホルンフェルス 1	36.27	25.73	9.65	9.26	1	126	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅴ	H				
第17図4	3	尖頭器	ホルンフェルス 2	50.74	31.79	17.09	28.63								
	4	剥片	安山岩 3	12.82	12.85	2.80	0.48	L		Ⅲ＋Ⅴ	F			R	
	5	剥片	ホルンフェルス 2	12.46	19.21	3.69	0.81	1	112	Ⅰ＋Ⅲ	H				
第18図18	6	二次加工剥片	ホルンフェルス 5	35.78	27.53	11.38	8.62	1	126	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	H	78		L	
第19図31a	7	剥片	ホルンフェルス 1	37.85	36.85	15.98	19.06	4(2)	106	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅴ	F				
	8	剥片	安山岩 7	32.72	30.05	8.80	5.53	1	120	Ⅰ＋Ⅴ	H				
	9	剥片	ホルンフェルス 1	13.73	16.00	2.62	0.48	L		Ⅰ	F				
	10	剥片	安山岩 1	11.55	19.35	5.43	1.12	1	106	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	S				
	12	剥片	ホルンフェルス 1	12.40	9.57	1.96	0.22	L		Ⅰ＋Ⅲ	F				
	13	剥片	安山岩 1	10.20	10.74	3.72	0.35			Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	F			B	
	14	剥片	安山岩 2	24.39	16.80	4.46	1.12	L		Ⅰ＋Ⅲ	O				
	15	剥片	安山岩 2	5.30	10.53	1.51	0.08			Ⅰ				VM	
	16	剥片	安山岩 2	19.92	19.85	5.56	1.26	L		Ⅰ＋Ⅲ	H				
	17	剥片	安山岩 1	9.23	10.20	2.42	0.15	L		Ⅰ＋Ⅲ	H				
	18	剥片	安山岩 2	22.19	16.00	4.58	0.96	1	110	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	F				
	19	剥片	ホルンフェルス 7	8.86	16.63	5.92	1.00			Ⅰ	O			B	
	20	剥片	安山岩 2	17.64	24.36	2.72	1.01	L		Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	F				
	21	剥片	安山岩 2	14.00	19.55	5.57	1.61	1	92	Ⅲ＋Ⅴ	F			L	
	22	砕片	安山岩 1	9.72	6.22	2.60	0.13	1	108	Ⅰ	F				
	23	剥片	安山岩 1	28.21	26.98	10.20	5.47	1	110	Ⅰ＋Ⅲ	F				
第18図24	24	剥片	チャート 2	19.74	22.11	5.02	2.33	6(4)	106	Ⅰ＋Ⅲ	H		N		
第19図30b	25	剥片	安山岩 3	23.84	27.83	8.34	4.03	L		Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
	26	剥片	安山岩 2	21.75	23.84	5.27	2.55			Ⅰ＋Ⅴ				VM	

第4ブロック出土遺物属性表(2)

挿図番号	遺物番号	器種	石質・母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
	27	剥片	安山岩 6	18.82	24.12	7.67	3.64			Ⅰ＋Ⅴ	S			B	
	28	剥片	安山岩 2	21.48	14.97	2.72	0.88	L		Ⅰ＋Ⅱ	F				
第18図25	29	石核	安山岩 1	58.16	50.77	18.69	57.27		70～84						
第18図23	30	剥片	チャート 1	46.13	25.36	9.50	10.98			Ⅰ＋Ⅴ	H			B	
	31	剥片	安山岩 2	8.98	15.38	2.45	0.34			Ⅰ＋Ⅲ				VM	
第17図9	32	削器	安山岩 2	31.31	27.98	4.54	4.32	9(5)	114	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ		58～76			
	33	砕片	安山岩 1	7.59	8.11	1.51	0.09	L		Ⅲ	F				
	34	剥片	安山岩 2	13.78	14.57	2.21	0.34	L		Ⅰ＋Ⅲ	S				
第18図19	35	剥片	安山岩 2	15.87	21.42	1.49	0.46			Ⅰ	F		N	B	
	36	剥片	安山岩 1	12.78	11.97	3.02	0.30	1	74	Ⅲ	F			R	
	37	剥片	安山岩 2	8.99	10.90	2.80	0.19	1	112	Ⅰ				H	
	38	剥片	安山岩 3	28.78	16.49	6.18	2.07	L		Ⅰ＋Ⅴ	O			R	
	39	砕片	安山岩 2	7.82	7.94	1.72	0.09	1	88	Ⅲ	F				
	40	剥片	安山岩 1	11.51	11.68	4.92	0.55	C	84	Ⅰ＋Ⅲ	F			R	
	41	剥片	安山岩 2	13.79	27.45	2.38	0.82	L		Ⅰ	F				
	42	剥片	ホルンフェルス 2	9.36	13.59	2.81	0.37	L		Ⅰ＋Ⅲ	H				
	43	剥片	安山岩 2	16.22	15.56	3.61	0.53	1	88	Ⅰ＋Ⅲ	F				
第18図20a	44	剥片	安山岩 2	13.62	26.62	3.19	1.26			Ⅲ				VM	
	45	剥片	安山岩 2	8.77	15.09	2.38	0.29	1	130	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	46	剥片	安山岩 3	32.91	25.06	8.55	5.93	2	124	Ⅱ＋Ⅴ	F				
	47	剥片	安山岩 2	10.85	9.20	2.51	0.21			Ⅰ＋Ⅲ				VM	
	48	剥片	安山岩 2	7.30	10.95	2.33	0.15	1	138	Ⅰ				H	
	49	剥片	安山岩 3	7.94	10.75	1.80	0.15	1	92	Ⅰ	S				
	50	剥片	黒曜石 1	9.11	10.37	4.86	0.33	1	92	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	51	剥片	安山岩 3	15.45	18.00	3.52	0.76			Ⅰ＋Ⅲ	H			B	
第18図22	53	剥片	ホルンフェルス 1	29.03	27.17	8.47	6.39	4	104	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	F		N		
	54	剥片	安山岩 3	32.48	29.45	13.62	7.52	4(1)	132	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	55	剥片	安山岩 2	10.16	13.35	2.28	0.33	1	104	Ⅰ＋Ⅲ				H	
	56	剥片	安山岩 1	41.37	28.83	8.29	6.30	1	116	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H			L	
	57	剥片	ホルンフェルス 1	17.23	22.95	4.64	1.63	1	140	Ⅲ	F				
	58	剥片	ホルンフェルス 1	19.68	10.48	5.88	1.20	1	122	Ⅰ＋Ⅲ	O			R	
	59	剥片	ホルンフェルス 1	15.41	19.24	2.69	0.65	L		Ⅰ＋Ⅲ	F				
	60	剥片	安山岩 2	15.52	20.04	4.35	1.04	1	94	Ⅰ	S				
	61	剥片	ホルンフェルス 1	35.97	9.85	8.88	2.55	1	136	Ⅰ＋Ⅲ	H			R	
	62	剥片	安山岩 3	18.79	12.94	3.28	0.50	L		Ⅰ＋Ⅴ	F				
第18図17	63	二次加工剥片	ホルンフェルス 1	23.81	23.91	4.68	2.82	1	106	Ⅰ＋Ⅲ		76～80		H	
	64	剥片	安山岩 2	10.29	13.25	3.35	0.44			Ⅰ＋Ⅲ	S			B	
	65	剥片	ホルンフェルス 1	27.41	15.88	8.48	3.18	L		Ⅰ＋Ⅲ	H			L	
	66	剥片	安山岩 3	30.74	29.62	10.13	6.34			Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H			B	
第17図5	67	尖頭器	ホルンフェルス 4	43.88	31.47	13.26	15.69	1	136	Ⅰ＋Ⅴ					
	68	剥片	粘板岩 1	12.78	10.69	2.80	0.33			Ⅴ	H			B	
	69	砕片	黒曜石 2	6.98	6.54	3.18	0.07	L		Ⅰ＋Ⅲ	O				
	70	剥片	安山岩 2	8.68	14.08	2.29	0.24	1	106	Ⅰ＋Ⅲ				H	
第18図20b	71	剥片	安山岩 2	18.86	25.68	4.25	1.56			Ⅱ＋Ⅲ	O			B	
	72	砕片	黒曜石 1	7.42	9.53	2.18	0.11	L		Ⅰ＋Ⅲ	H				
	73	剥片	安山岩 2	9.44	14.51	3.41	0.40			Ⅲ	F			B	
	74	剥片	ホルンフェルス 3	19.81	12.52	3.55	0.76	1	106	Ⅰ＋Ⅲ	F				
第18図27	75	尖頭器	ホルンフェルス 2	41.71	49.51	18.42	33.87		74～88						
	76	剥片	安山岩 2	19.91	21.85	3.66	1.35	L		Ⅲ	H				
	77	剥片	ホルンフェルス 2	5.72	11.85	2.04	0.18			Ⅰ＋Ⅲ	F			B	
	78	剥片	ホルンフェルス 1	14.68	15.45	3.19	0.67	1	108	Ⅰ	H				
	79	剥片	安山岩 3	20.32	27.40	4.74	2.15	L		Ⅰ＋Ⅲ	S				
	80	剥片	ホルンフェルス 1	12.75	9.97	3.65	0.50	1	120	Ⅰ＋Ⅲ	S				
第18図28	81	二次加工剥片	ホルンフェルス 6	74.91	40.70	17.64	51.67		64～74						
	82	砕片	安山岩 2	5.61	9.33	1.43	0.05			Ⅲ	F			B	
	83	剥片	ホルンフェルス 1	16.06	9.56	5.56	0.56	1	104	Ⅰ	F				
	84	剥片	安山岩 3	25.16	11.67	4.63	1.53	1	90	Ⅰ＋Ⅲ	H				
第17図2	86	尖頭器	安山岩 4	38.77	15.92	9.59	5.20								
	88	剥片	ホルンフェルス 2	23.77	9.12	4.17	0.79	L		Ⅰ＋Ⅱ	F				
	90	剥片	ホルンフェルス 3	27.09	22.11	5.58	1.88	L		Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	F				
第17図8	92	尖頭器	ホルンフェルス 1	37.45	17.35	7.53	4.84					66～84			
	94	剥片	安山岩 2	14.56	19.30	2.44	0.56			Ⅲ	F			B	
	95	剥片	安山岩 2	12.59	18.45	2.09	0.46	1	94	Ⅰ＋Ⅲ				H	
第18図26	96	尖頭器	安山岩 3	26.97	29.22	19.71	9.15		82						
第17図14	97	二次加工剥片	安山岩 3	27.83	26.61	6.95	4.36	1	96	Ⅰ＋Ⅴ	S	52			
第17図1	98	尖頭器	安山岩 3	37.99	25.10	10.69	10.39								
第17図3	99	尖頭器	安山岩 5	41.81	18.64	10.36	6.12								
	100	剥片	安山岩 1	10.76	14.44	2.37	0.31			Ⅲ	S			B	
	101	砕片	ホルンフェルス 2	7.23	9.50	2.74	0.17	1	122	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	F				
第17図13	102	二次加工剥片	安山岩 2	24.01	34.89	6.87	4.18	2	114	Ⅰ＋Ⅲ	F	66～78			
	103	剥片	安山岩 3	24.75	20.30	5.19	2.43			Ⅰ＋Ⅴ				H	
第17図10	104	楔形石器	安山岩 1	23.00	20.05	3.25	1.62								
	105	剥片	安山岩 2	11.61	14.79	2.43	0.21	2	104	Ⅰ＋Ⅲ	F				
	106A	礫	安山岩 9	11.93	8.08	4.00	0.32								
	106B	礫	安山岩 9	6.32	4.18	2.26	0.05								
	107	剥片	安山岩 2	25.50	18.07	8.24	3.55			Ⅰ＋Ⅱ	F			LB	

第4ブロック出土遺物属性表(3)

挿図番号	遺物番号	器種	石質・母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
	108	剥片	安山岩 1	27.01	19.84	4.96	2.14	L		Ⅰ＋Ⅴ	H				
	109	剥片	安山岩 2	12.78	22.38	2.02	0.60			Ⅰ＋Ⅱ	F				
	110	剥片	安山岩 1	13.04	12.69	6.47	0.75			Ⅲ	S			B	
	111	剥片	安山岩 1	19.73	23.51	5.01	1.58	1	108	Ⅰ＋Ⅴ	H			R	
	112	剥片	安山岩 2	15.69	17.65	3.72	0.47	1	82	Ⅰ＋Ⅲ	F				
	113	剥片	安山岩 3	16.00	19.00	3.76	1.10	1	100	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	114	剥片	安山岩 2	13.95	13.75	2.50	0.38	L		Ⅰ	F				
	115	剥片	安山岩 1	14.82	6.53	4.63	0.30			Ⅲ	F			B	
	116	剥片	安山岩 2	20.41	24.28	3.97	1.81	1	102	Ⅰ＋Ⅲ	F				
	117	剥片	安山岩 3	19.17	21.18	9.10	2.93			Ⅰ＋Ⅴ				VM	
	118	剥片	安山岩 1	31.42	20.47	12.96	4.83	3	74	Ⅰ	S				
	119	剥片	安山岩 1	9.26	12.88	2.96	0.18	L		Ⅲ	S				
	120	剥片	安山岩 1	11.78	14.56	2.71	0.38	1	108	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	121	剥片	安山岩 3	15.59	20.68	7.27	1.38	1	102	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	F				
	122	剥片	ホルンフェルス 7	35.37	54.32	18.35	26.04	4(1)	112	Ⅰ＋Ⅴ	H				
第17図11	123	二次加工剥片	安山岩 1	19.81	16.84	3.46	0.86	1	92	Ⅰ＋Ⅲ		74～78			
	124	剥片	安山岩 3	15.01	18.74	3.18	0.77			Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	H			B	
	125	剥片	安山岩 2	11.59	8.40	1.98	0.13			Ⅰ＋Ⅲ				VM	
	126	砕片	安山岩 1	5.66	8.96	1.82	0.08			Ⅰ＋Ⅲ	F			B	
	127	剥片	安山岩 2	13.07	8.99	1.82	0.26			Ⅱ＋Ⅲ	F			B	
第17図15	128	二次加工剥片	安山岩 3	24.40	18.46	7.10	2.20			Ⅲ＋Ⅴ	F	86～88			
	129	剥片	安山岩 2	16.54	14.17	2.47	0.48			Ⅰ＋Ⅲ	F			B	
	130	剥片	安山岩 1	15.46	34.72	8.62	3.10	1	106	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅴ	H				
	131	剥片	チャート 3	10.36	13.49	6.97	0.88	1	88	Ⅳ	F				
	132	剥片	ホルンフェルス 2	16.20	7.55	3.22	0.39	1	114	Ⅰ	O			R	
	133	砕片	ホルンフェルス 2	6.04	5.61	1.99	0.07	1	92	Ⅲ	F				
	134	剥片	安山岩 2	20.78	20.23	4.75	2.24	L		Ⅰ＋Ⅲ	F				
	135	剥片	ホルンフェルス 3	20.53	11.95	5.26	1.31	1	122	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	136	剥片	ホルンフェルス 1	34.55	45.97	9.64	13.13	2	124	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
	137	剥片	安山岩 1	19.30	21.60	3.70	1.08	2	110	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	138	剥片	安山岩 1	8.04	10.69	2.83	0.21			Ⅲ				VM	
	139	剥片	安山岩 1	18.95	21.41	4.69	1.55	1	90	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	F				
	140	剥片	安山岩 2	19.52	14.29	3.51	0.67	L		Ⅰ＋Ⅲ	H				
	141	剥片	安山岩 2	14.31	11.54	2.47	0.49			Ⅲ＋Ⅴ				VM	
	142	剥片	安山岩 1	13.34	7.96	3.25	0.20			Ⅰ＋Ⅲ	F			B	
	143	砕片	安山岩 2	8.27	9.68	1.89	0.12	1	108	Ⅰ				H	
	144	剥片	安山岩 2	10.00	17.87	2.70	0.47	1	136	Ⅰ＋Ⅱ				H	
	145	剥片	安山岩 1	16.02	15.48	5.94	1.05			Ⅰ	H			LB	
	146	剥片	安山岩 2	16.07	12.95	2.42	0.42	2	86	Ⅰ＋Ⅲ	F				
	147	剥片	安山岩 1	22.60	23.22	11.79	3.42	4	88	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
	148	剥片	安山岩 2	8.75	13.32	2.29	0.25	1	106	Ⅰ＋Ⅲ				H	
	149	剥片	安山岩 2	10.14	9.72	1.71	0.13	L		Ⅰ＋Ⅲ	F				
	150	剥片	ホルンフェルス 1	14.64	6.03	3.34	0.28	1	120	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	151	剥片	安山岩 1	11.34	13.18	3.88	0.36	2	124	Ⅲ	F				
第17図12	152	二次加工剥片	安山岩 1	31.69	31.29	6.60	3.20	L	78～86	Ⅰ＋Ⅲ	O				
	153	剥片	安山岩 1	24.57	28.02	10.96	5.89	2	98	Ⅰ＋Ⅲ				H	
	154	剥片	安山岩 3	23.39	33.76	5.68	2.86	1	104	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅴ	H				
	155	剥片	安山岩 3	25.29	21.87	8.29	2.81	L		Ⅰ＋Ⅴ	F				
	156	剥片	安山岩 2	10.01	10.51	3.24	0.19	C	102	Ⅲ	F			R	
	157	剥片	安山岩 3	22.96	19.97	5.36	1.45	L		Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	F				
	158	砕片	安山岩 2	6.83	9.84	2.06	0.13	1	106	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	159	剥片	ホルンフェルス 3	22.23	25.14	6.12	2.61	1	98	Ⅰ	F				
	160	礫	安山岩 9	55.57	37.29	27.44	71.37						H		
	2F-59-4	剥片	安山岩 8	17.41	27.14	6.87	2.84	2	112	Ⅰ	O				
第19図30a	2F-69-5	二次加工剥片	安山岩 3	41.77	35.23	14.30	15.07	1		Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H	88			
第17図7	2F-78-61-1	尖頭器	安山岩 3	38.26	23.48	9.58	7.19			Ⅲ＋Ⅴ	H	66～88			
	2F-79-15	剥片	ホルンフェルス 1	49.21	44.59	13.23	20.77	1	128	Ⅰ＋Ⅲ	H				
第19図29	2G-50-2	石核	ホルンフェルス 4	60.60	67.76	55.28	304.44		100～112						
第18図16	2G-50-89	二次加工剥片	安山岩 3	23.89	47.20	11.13	11.03	3	110	Ⅰ＋Ⅴ	H	74～86			
第18図21	2G-70-2	剥片	黒曜石 1	26.05	13.25	8.36	1.36	L		Ⅱ＋Ⅲ	O				
第19図31c	2G-70-5	尖頭器	ホルンフェルス 1	43.78	63.40	26.81	83.24		74～98						
	2G-70-6	剥片	ホルンフェルス 2	15.95	17.09	2.29	0.61	1	126	Ⅰ	H				

第12表　第5ブロック出土遺物属性表

挿図番号	遺物番号	器種	石質・母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
第21図4	1	石核	安山岩 1	25.71	67.23	56.78	68.57		52～74						
第21図2	2	削器	黒曜石 1	23.77	21.49	15.07	4.86					82～102			
第21図1	3	ナイフ形石器	珪質頁岩 1	51.89	17.75	9.24	8.14			Ⅲ＋Ⅴ		68～90			
第21図3	4	二次加工剥片	珪質頁岩 2	60.95	90.02	12.61	66.16	C		Ⅴ	H	86～92			

第13表　第6ブロック出土遺物属性表

挿図番号	遺物番号	器種	石質・母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
第23図1	2H-44-NW-1	角錐状石器	安山岩 3	37.26	12.80	9.34	3.44			Ⅰ		64～76			
第23図5	2H-44-NW-2	二次加工剥片	安山岩 3	16.94	17.44	5.00	1.12			Ⅰ＋Ⅲ	F	76			
第24図10d	2H-44-NW-3	剥片	安山岩 2	20.78	22.95	5.26	1.66	2	130	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	2H-44-4	剥片	安山岩 3	17.30	13.97	3.36	0.67	1	102	Ⅰ＋Ⅴ	F				
	2H-44-5	剥片	安山岩 3	10.52	15.08	4.18	0.45	1	110	Ⅰ＋Ⅴ	F				
	2H-44-6	剥片	安山岩 5	24.65	19.43	4.83	2.59	L		Ⅰ＋Ⅴ	H				
第24図9a	2H-44-7	剥片	安山岩 2	12.60	22.61	2.88	0.80	C	108	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	2H-44-8	砕片	安山岩 4	9.22	7.89	2.57	0.12	1	104	Ⅲ＋Ⅴ	H				
	2H-44-9	剥片	安山岩 3	28.14	14.09	9.43	2.87	1	106	Ⅰ＋Ⅴ	H				
	2H-44-10	剥片	安山岩 4	32.20	40.91	14.18	19.06	1	144	Ⅲ＋Ⅴ	O				
第23図8a	2H-44-11	剥片	安山岩 1	38.33	34.09	14.42	15.73	1	136	Ⅲ＋Ⅴ	H				
	2H-44-12	剥片	安山岩 1	3.52	13.62	5.75	0.22	1	92	Ⅲ	H				
第25図11a	2H-44-13	剥片	安山岩 6	7.02	22.67	12.64	2.06	4	132	Ⅰ	S				
第23図8c	2H-44-14	剥片	安山岩 1	36.85	30.40	11.90	9.77	1	124	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	O				
第24図10a	2H-44-15	剥片	安山岩 2	19.16	18.06	7.06	2.13	2	132	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ				LH	
第23図8b	2H-44-16	剥片	安山岩 1	32.15	35.26	10.27	13.11	1	132	Ⅲ＋Ⅴ	H				
	2H-44-17	剥片	安山岩 3	18.97	14.01	4.96	0.72	1	96	Ⅰ＋Ⅲ				H	
	2H-44-18	剥片	安山岩 3	12.53	9.62	2.91	0.26	1	128	Ⅴ	F			L	
	2H-44-19	剥片	安山岩 6	29.61	16.60	6.02	2.78	1	114	Ⅰ＋Ⅴ	S				
第23図7	2H-44-20	石核	安山岩 5	40.33	29.84	22.21	37.05		82						
第25図11b	2H-44-21	剥片	安山岩 6	11.85	17.07	6.47	1.10	1	116	Ⅰ＋Ⅲ	H				
第25図11d	2H-44-22	削器	安山岩 6	10.25	36.96	19.15	5.79		58～104						
	2H-44-23	剥片	安山岩 1	30.82	20.62	7.88	3.66	4(1)	126	Ⅰ＋Ⅴ	F				
	2H-44-24	剥片	安山岩 5	16.44	21.80	4.54	1.62	1	106	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	S				
	2H-44-25	剥片	安山岩 6	9.03	16.43	5.31	0.68	1	90	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	2H-44-26	剥片	安山岩 3	29.00	16.39	6.28	2.28	1	106	Ⅴ	H				
	2H-44-27	剥片	安山岩 3	19.12	14.29	3.20	1.05			Ⅰ＋Ⅴ	H			LB	
第25図11c	2H-44-28	剥片	安山岩 6	12.07	20.62	4.46	0.79	1	114	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
	2H-44-29	剥片	安山岩 3	10.12	16.08	2.99	0.44	1	108	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	2H-44-30	剥片	安山岩 6	17.90	25.78	9.07	1.94	1	126	Ⅲ＋Ⅴ	O				
	2H-44-31	剥片	安山岩 1	8.84	14.18	3.97	0.34			Ⅰ＋Ⅲ	F			B	
第24図9f	2H-44-32	石核	安山岩 2	24.64	51.23	24.97	34.27		68～80						
	2H-44-33	剥片	安山岩 4	19.87	10.49	2.79	0.55	2	104	Ⅰ	S				
	2H-44-34	剥片	安山岩 3	7.83	12.26	2.65	0.26	1	108	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	2H-44-35	剥片	安山岩 3	10.58	12.58	2.49	0.28	L		Ⅰ＋Ⅱ	F				
	2H-44-36	剥片	安山岩 3	19.47	15.75	3.41	0.86	1	126	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	2H-44-37	剥片	安山岩 5	21.97	20.81	6.42	2.75	1	104	Ⅰ＋Ⅴ	H				
第24図9c	2H-44-38-1	剥片	安山岩 2	24.51	6.50	5.19	0.63			Ⅲ＋Ⅴ	F			B	
	2H-44-38-2	剥片	安山岩 3	9.79	12.83	2.54	0.24	1	128	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	2H-44-39	砕片	安山岩 4	9.59	6.73	2.99	0.16	2	132	Ⅲ＋Ⅴ	S				
	2H-44-41	剥片	安山岩 3	11.15	11.18	3.61	0.30			Ⅰ＋Ⅲ	H			B	
	2H-44-42	剥片	安山岩 3	12.49	13.67	4.74	0.65	1	106	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
	2H-44-43	剥片	安山岩 3	12.77	10.15	2.76	0.28			Ⅰ	H			B	
	2H-44-44	剥片	安山岩 5	17.57	10.55	4.26	0.77	1	98	Ⅲ	O				
	2H-44-45	剥片	安山岩 1	24.78	19.39	10.29	3.37	5(1)	92	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
	2H-44-46	剥片	安山岩 6	11.78	12.82	3.39	0.39	L		Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
	2H-44-47	剥片	安山岩 6	16.21	20.10	4.06	1.38	1	128	Ⅰ＋Ⅴ	H				
	2H-44-48	剥片	安山岩 1	8.28	12.12	3.28	0.31			Ⅰ＋Ⅴ	H			B	
第23図2	2H-44-49	角錐状石器	安山岩 4	26.04	10.85	4.63	1.55			Ⅲ		74～98			＋
	2H-44-50	剥片	安山岩 2	22.24	25.06	7.33	4.03	1	120	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
	2H-44-51	剥片	安山岩 4	17.07	20.33	5.06	1.56	1	130	Ⅲ＋Ⅴ	H				
第24図9d	2H-44-52	剥片	安山岩 2	22.65	15.25	5.00	1.22	L		Ⅲ＋Ⅴ	H				
第24図10b	2H-44-53	剥片	安山岩 2	20.12	20.07	7.30	2.26	1	132	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ				RH	
第24図10e	2H-44-54	石核	安山岩 2	42.15	33.64	17.49	21.49		50～66						
	2H-44-55	剥片	安山岩 1	8.14	10.28	4.41	0.30	1	102	Ⅲ	F				
第24図9b	2H-44-56	剥片	安山岩 2	29.68	8.21	8.61	2.32	1	114	Ⅰ＋Ⅴ				RH	
第24図10c	2H-44-57	剥片	安山岩 2	25.25	21.56	7.28	3.07	1	136	Ⅲ＋Ⅴ	H				
第24図9e	2H-44-58	剥片	安山岩 2	26.50	22.79	7.49	2.39	1	120	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
	2H-44-59	剥片	安山岩 6	13.55	19.66	4.30	1.13	1		Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
第23図4	2H-44-60-1	石錐	安山岩 4	29.89	25.30	9.60	5.16			Ⅰ＋Ⅴ	F	64～86			＋
	2H-44-60-2	砕片	安山岩 3	9.13	6.57	2.25	0.12	1		Ⅰ	H				
	2H-44-61	剥片	安山岩 3	11.68	10.99	2.97	0.31	L		Ⅰ＋Ⅲ	S				
第23図8d	2H-44-63	石核	安山岩 1	37.32	41.91	17.79	36.19		56～74						
	2H-44-64	剥片	安山岩 6	12.64	16.00	4.48	0.77	1	122	Ⅰ＋Ⅲ	H				
第23図6	2H-44-65	石核	安山岩 1	36.28	47.64	23.80	40.64		60～120						
	2H-44-66	剥片	安山岩 1	12.36	14.54	4.16	0.43	1		Ⅰ＋Ⅲ	F				
	2H-44-67-1	剥片	安山岩 3	10.67	8.62	2.70	0.27	L		Ⅰ＋Ⅲ	S				
	2H-44-67-2	砕片	安山岩 4	7.80	6.02	2.49	0.08	1	118	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	2H-44-69	剥片	安山岩 3	6.15	17.73	7.12	0.51	1	104	Ⅲ	O				
第23図3	2H-44-70	削器	安山岩 6	29.14	35.86	8.52	7.79			Ⅲ＋Ⅴ	H	58～74			

第14表　第７ブロック出土遺物属性表(1)

挿図番号	遺物番号	器種	石質・母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
	1	剥片	玉髄　4	31.06	24.26	9.03	5.35	4(2)	136	Ⅲ＋Ⅴ	H				
第31図33a	2	剥片	黒曜石　1	14.98	32.17	9.44	3.68			Ⅰ＋Ⅲ	H			B	
	3-1	砕片	黒曜石　1	3.34	6.84	0.99	0.02			Ⅲ	H			B	
第30図27	3-2	剥片	安山岩　2	9.80	13.42	11.98	1.17		84						
	4	砕片	黒曜石　1	6.43	7.44	1.87	0.10			Ⅰ＋Ⅲ	F			B	
	5	剥片	黒曜石　1	7.51	10.33	2.18	0.12	1	130	Ⅲ	S				
	6	剥片	黒曜石　1	8.25	15.18	2.92	0.23			Ⅰ＋Ⅴ	S			B	
	7	剥片	黒曜石　3	39.80	18.23	7.97	3.20	1		Ⅰ＋Ⅲ	H				
	8	剥片	黒曜石　1	11.22	7.24	3.21	0.25			Ⅲ	S			B	
	9	剥片	黒曜石　1	20.61	28.69	9.30	4.26	3	64	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	H				
	10	砕片	黒曜石　1	7.31	7.36	1.38	0.05	L		Ⅰ＋Ⅲ	H				
	12	剥片	黒曜石　1	13.67	14.54	3.88	0.58	1	104	Ⅰ	F			R	
第31図33b	13	剥片	黒曜石　1	29.96	34.09	11.60	6.60	6(2)	118	Ⅲ＋Ⅴ				H	
第30図19	14	剥片	黒曜石　1	20.09	11.25	5.53	1.03			Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	S		N	B	
第30図28	15	石核	黒曜石　1	36.36	41.52	17.36	21.47		76～88						
	16	砕片	黒曜石　1	4.35	9.87	4.86	0.14	P		Ⅲ	O				
	17	剥片	黒曜石　1	13.49	18.41	2.24	0.61			Ⅱ				RM	
	18	剥片	黒曜石　2	10.20	6.64	1.78	0.10	L		Ⅰ＋Ⅲ	H				
第31図32b	19	削器	黒曜石　1	23.92	28.13	8.35	4.15	1	126	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	O	72～78			
	20	礫	ホルンフェルス　1	55.20	29.14	15.58	21.39						H		
第29図13	21	剥片	凝灰岩　2	25.45	23.55	5.16	2.90	1	98	Ⅰ＋Ⅲ		84		H	
	22	剥片	凝灰岩　4	25.77	26.57	7.63	3.56			Ⅲ	H			B	
	23	剥片	凝灰岩　5	18.64	13.76	10.50	2.17		118						
第31図35a	24	剥片	凝灰岩　4	29.88	17.04	7.12	2.22	1	100	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
第30図30	25	敲石	砂岩　1	73.99	65.51	53.59	324.80						S		
第29図4	26	ナイフ形石器	黒曜石　5	45.39	18.07	10.35	6.87			Ⅲ	H	78～100			
第32図36a	27	剥片	頁岩　1	45.74	38.42	11.60	16.94	3(1)	126	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ	H				
第29図1	28	ナイフ形石器	安山岩　2	35.99	18.92	9.65	4.75			Ⅰ＋Ⅴ	H	78～106			
	29	礫	ホルンフェルス　2	17.33	15.69	13.22	3.07								
	30	剥片	黒曜石　3	10.83	10.12	4.39	0.27			Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅴ	O			B	
	31	剥片	玉髄　1	20.72	25.39	5.56	2.10	2	102	Ⅲ	H				
第29図15	32	二次加工剥片	頁岩　2	29.10	33.03	14.63	12.85		1	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅴ	H			B	
	33	剥片	頁岩　2	33.39	31.19	8.95	7.48	5(1)	122	Ⅲ	O				
	34	剥片	玉髄　1	24.95	13.48	4.37	0.91	1	106	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	H				
第31図31a	35	剥片	安山岩　1	29.14	24.43	10.37	6.10	1	108	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H			R	
	36	剥片	安山岩　1	25.53	19.82	8.30	3.01	L		Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H			L	
第31図31b	37	剥片	安山岩　1	39.45	25.62	14.02	11.73	1	108	Ⅰ＋Ⅴ	H				
	38	剥片	安山岩　1	21.45	20.13	9.13	2.67	1	106	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	39	剥片	安山岩　1	19.30	23.60	7.43	3.56	C	136	Ⅲ				H	
	40	剥片	珪質頁岩　5	30.50	34.68	11.86	9.09	1	138	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
第32図37a	41	剥片	玉髄　1	34.42	42.21	5.72	3.41	3(1)	106	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	42	剥片	珪質頁岩　7	34.64	35.15	9.42	8.43	1	124	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
	43	剥片	黒曜石　2	34.51	38.06	10.47	11.74	1	90	Ⅲ				H	
第30図17	44	二次加工剥片	玉髄　1	34.16	27.08	10.78	9.89	8(2)	122	Ⅰ＋Ⅲ				H	
第31図34b	45	剥片	凝灰岩　3	21.23	19.82	6.83	1.95	1	122	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H		H		
	46	剥片	玉髄　1	14.52	8.34	3.46	0.33	L		Ⅰ＋Ⅲ	H				
	47-1	剥片	玉髄　1	19.25	8.25	3.51	0.33			Ⅰ＋Ⅲ	H			B	
	47-2	剥片	玉髄　1	14.12	9.37	3.71	0.22			Ⅰ＋Ⅲ	F			B	
	47-3	剥片	玉髄　1	6.53	10.45	8.35	0.47		82						
第29図5	48	ナイフ形石器	黒曜石　6	32.14	20.13	7.11	3.93			Ⅰ		64～90			
第31図34c	49	剥片	凝灰岩　3	20.80	25.57	5.45	2.15	1	122	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H		H		
第31図34d	50	二次加工剥片	凝灰岩　3	34.99	20.47	7.46	3.14	1	122	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H	80～94	H		
	51	剥片	玉髄　1	15.90	12.14	9.34	1.04	C	90	Ⅰ＋Ⅲ	H			R	
	52	剥片	玉髄　1	9.26	12.06	2.27	0.19	L		Ⅰ	S				
	53	剥片	玉髄　1	7.37	11.23	2.52	0.20			Ⅰ＋Ⅲ				VM	
第31図34a	54	剥片	凝灰岩　3	16.35	12.03	3.06	0.47	1	106	Ⅰ＋Ⅲ	S		H		
	55	剥片	玉髄　1	20.52	10.38	11.93	2.05	C	88	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	56	石核	玉髄　1	30.24	23.70	25.83	16.21		90～98						
	57	剥片	珪質頁岩　8	24.34	41.03	7.56	4.70			Ⅰ	S			B	
	58	剥片	玉髄　1	9.56	12.29	4.12	0.43			Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	S			B	
	59	剥片	玉髄　1	14.22	14.40	4.88	0.67	L		Ⅰ＋Ⅲ	H				
	60	剥片	玉髄　1	9.18	17.98	2.82	0.36	P		Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ	O				
第32図37b	61・63	ナイフ形石器	玉髄　1	44.35	24.57	8.55	7.42	10(3)	100	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅳ	H	72～98			＋
第30図18	62	剥片	玉髄　1	22.70	13.49	5.26	1.09	1		Ⅰ＋Ⅲ		78			
第30図29	64	石核	珪質頁岩　1	43.41	38.18	26.77	42.36		66～96						
	65	剥片	黒曜石　3	23.83	14.49	5.36	1.11			Ⅰ	F			LB	
	66	砕片	黒曜石　1	6.74	8.80	4.70	0.21			Ⅰ＋Ⅲ	F			B	
	67	剥片	珪質頁岩　10	16.48	17.11	3.18	0.74	1	96	Ⅰ＋Ⅲ	F				
	68	砕片	黒曜石　1	9.94	9.19	2.64	0.17	L		Ⅰ＋Ⅲ	O				
第30図26	69	剥片	珪質頁岩　4	27.52	24.54	9.86	3.08	1	124	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅳ	H		N		
第31図32a	70	剥片	黒曜石　1	30.14	15.89	10.51	4.09	1		Ⅰ＋Ⅲ	H	68		L	
第31図35b	71	剥片	凝灰岩　4	22.75	12.20	5.14	1.17	1	86	Ⅰ＋Ⅳ＋Ⅴ	S				
	72	剥片	黒曜石　1	4.58	12.09	3.34	0.18			Ⅱ＋Ⅲ	O			B	
第29図7	73	ナイフ形石器	凝灰岩　2	33.02	17.11	5.58	2.68	1		Ⅰ＋Ⅲ	H	46～94	N		
	74	剥片	珪質頁岩　6	27.56	29.70	13.56	5.83	4(1)	108	Ⅲ＋Ⅳ＋Ⅴ	H				
第29図2	75	ナイフ形石器	黒曜石　1	33.02	19.45	6.68	2.84			Ⅰ＋Ⅲ		70～104			＋

第7ブロック出土遺物属性表(2)

挿図番号	遺物番号	器種	石質・母岩番号		最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
	76	剥片	珪質頁岩	9	34.47	37.18	14.02	11.05	4	74	Ⅲ	H		H		
	77	剥片	黒曜石	1	15.24	10.20	2.29	0.21			Ⅱ＋Ⅲ	H			B	
第30図20	78	剥片	黒曜石	1	17.70	23.80	5.84	1.51	16(12)	102	Ⅰ＋Ⅲ	H		N		
	79	砕片	黒曜石	1	8.98	6.45	1.83	0.09			Ⅲ	O			B	
	80	礫	砂岩	2	10.52	7.73	6.72	0.55						H		
	82	剥片	珪質頁岩	4	14.63	32.95	11.67	4.20			Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	F			B	
第29図12	83	剥片	黒曜石	1	16.79	15.32	3.81	0.89	L		Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ		84～88		H	
第29図11	84	削器	黒曜石	4	20.94	25.94	7.04	3.73			Ⅰ＋Ⅲ		58～80		B	
第30図21	85	剥片	黒曜石	1	58.50	25.82	11.44	14.53			Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H		N	B	
	86	剥片	黒曜石	1	13.10	15.69	2.97	0.49	1	134	Ⅰ	S			R	
	87	剥片	黒曜石	1	24.66	37.56	11.16	3.99	1	92	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	O				
	88	剥片	黒曜石	1	19.11	19.75	4.16	0.96	3	114	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	89	剥片	黒曜石	1	15.69	14.30	3.56	0.39	L		Ⅰ＋Ⅲ	H				
	90	剥片	黒曜石	1	12.83	12.57	4.99	0.44			Ⅲ	F			B	
	91	剥片	黒曜石	1	10.35	7.15	2.35	0.12	1	132	Ⅰ	S			L	
	92	剥片	黒曜石	3	19.26	39.95	7.53	5.16			Ⅰ	S			B	
	94	剥片	黒曜石	1	4.97	10.47	3.51	0.11	1	62	Ⅰ＋Ⅱ	H				
	96	砕片	珪質頁岩	12	8.39	9.88	2.65	0.15			Ⅰ				VM	
	97	剥片	珪質頁岩	11	16.64	14.41	3.96	0.65			Ⅰ＋Ⅲ	H			B	
	98	剥片	珪質頁岩	2	16.33	28.43	12.66	5.03	1	92	Ⅰ＋Ⅴ				H	
第30図34	99	剥片	黒曜石	2	28.47	25.68	15.06	6.81			Ⅲ＋Ⅴ	H		N	B	
	100	剥片	珪質頁岩	2	18.47	18.72	4.57	1.18	1	122	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	101	剥片	珪質頁岩	2	18.46	8.06	6.23	0.45			Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	O			B	
第29図9	102	ナイフ形石器	玉髄	2	40.00	16.92	10.14	5.37	1	114	Ⅰ		80～86			
第29図14	103	二次加工剥片	凝灰岩	2	21.57	16.19	3.59	0.89	1	104	Ⅰ＋Ⅲ		52～60			
	104	剥片	玉髄	3	36.44	22.47	8.87	4.00	5	88	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	105	剥片	黒曜石	3	21.38	34.61	9.27	6.07			Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ				VM	
	106	剥片	珪質頁岩	3	16.87	27.11	11.82	5.23	1	132	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	107	剥片	珪質頁岩	2	34.48	35.08	5.56	5.15	1	110	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ＋Ⅴ	H				
	108	剥片	黒曜石	1	11.62	20.35	2.80	0.34			Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	H			B	
第29図8	109	ナイフ形石器	珪質頁岩	5	21.16	14.00	5.57	1.63			Ⅰ		66～104			＋
第29図16	110	二次加工剥片	珪質頁岩	3	52.22	31.73	13.43	14.42	4	118	Ⅰ＋Ⅲ	H	70～74			
第32図36b	111	剥片	頁岩	1	29.44	42.85	11.32	10.51	10(1)	134	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ	H		N		
第30図22	112	剥片	黒曜石	1	16.97	7.24	4.24	0.33	1	98	Ⅰ	F		N		
第29図6	113	ナイフ形石器	黒曜石	6	23.24	10.16	4.80	1.07			Ⅰ		72～104			
	114	剥片	安山岩	3	15.15	18.44	9.59	1.63	L		Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	O				
	115	砕片	安山岩	1	9.68	8.28	3.18	0.19	P		Ⅲ					
	116	礫	砂岩	2	23.66	16.23	10.64	3.61								
	117	砕片	黒曜石	1	7.51	8.68	1.59	0.05			Ⅰ	H			B	
	119	剥片	玉髄	1	12.53	20.09	10.33	1.69	1	86	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	120	砕片	玉髄	1	5.94	8.38	1.49	0.06	L		Ⅰ	F				
	121	剥片	黒曜石	2	13.02	14.22	6.14	0.58			Ⅲ	H			B	
	122	剥片	黒曜石	1	10.18	13.34	1.85	0.17			Ⅰ	H			B	
第29図10	4H-19-1	彫器	黒曜石	1	24.83	22.59	5.93	2.81	1		Ⅰ＋Ⅲ				H	
第30図25	055－1	剥片	黒曜石	2	45.15	41.58	16.79	28.98	C	126	Ⅰ＋Ⅴ	S				
第29図3	055－4	ナイフ形石器	黒曜石	1	41.00	22.56	10.47	7.91			Ⅰ＋Ⅲ	H	70～84	N		＋
第30図23	055－6	剥片	黒曜石	1	15.14	30.70	6.60	1.94			Ⅲ＋Ⅴ	O			B	
	055－7	剥片	凝灰岩	1	45.40	35.90	15.96	22.88	7(5)	140	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	056－2	剥片	安山岩	2	21.93	19.84	6.37	2.42	1	142	Ⅲ＋Ⅴ	H	52			

第15表　地点外・単独出土遺物属性表(1)

挿図番号	遺物番号	器種	石質・母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
第38図25	1G-21	剥片	黒曜石	30.99	42.55	9.66	10.54			Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	O		N	B	
第36図10	2C-50-1	ナイフ形石器	黒曜石	18.00	12.48	4.19	0.67	1	120	Ⅰ＋Ⅲ	S	82～94			
第37図16	2C-79-1	削器	頁岩	38.41	29.64	9.16	12.18					66～82			
	2C-86-3	楔形石器	珪質頁岩	18.36	19.44	6.08	2.22								
第40図45	2C-94	石核	チャート	9.44	31.36	13.51	4.27		80						
	2D-89-25	剥片	安山岩	22.25	18.95	4.18	1.45	L		Ⅲ	S				
	2E-34-2	剥片	ホルンフェルス	14.37	26.89	3.78	1.59	L		Ⅰ	H				
	2E-57-91	剥片	チャート	35.51	40.34	15.81	22.94	1	130	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	2E-64-5	剥片	安山岩	8.40	18.76	4.32	0.72	L		Ⅰ	S				
第36図7	2E-72-5	ナイフ形石器	安山岩	18.00	7.42	3.00	0.4			Ⅰ		66～78			＋
	2E-75-55	剥片	嶺岡頁岩	25.63	35.62	10.32	10.48	4	108	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅳ	H				
	2E-82-3	石核	チャート	18.18	26.23	13.15	5.8		80						
第39図38	2F-06-6	石核	砂岩	25.47	45.47	28.53	30.7		84～96						
第32図36d	2F-6-9	剥片	頁岩　1	36.09	32.57	9.32	8.78	C	116	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ＋Ⅴ	H				
第32図36c	2F-47-5	剥片	頁岩　1	37.85	33.30	14.91	14.81		112	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ＋Ⅴ	H				
第40図46	2F-46-13-1	石核	チャート	27.55	45.12	16.37	15.2		64～82						
第36図11	2F-46-13-2	ナイフ形石器	黒曜石	16.72	11.83	8.66	1.22			Ⅲ		78～110			
	2F-50-41	剥片	安山岩	14.86	14.11	2.86	0.69	1	98	Ⅰ＋Ⅲ				H	
	2F-53-4	剥片	安山岩	32.51	14.99	7.96	2.68	P		Ⅰ＋Ⅱ	H			R	
第41図42	2F-57-43	石核	ホルンフェルス	46.25	91.90	76.90	368.50		70～122						
	2F-61-1	剥片	嶺岡頁岩	21.26	17.34	6.83	2.06	L		Ⅰ＋Ⅲ	H				
第37図17	2F-63-3	削器	チャート	51.85	69.74	15.58	41.23	8(4)	132	Ⅰ		44～70			
	2F-75-?	剥片	頁岩	33.41	19.09	6.24	2.37	2	114	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
	2F-75-19	剥片	安山岩	36.91	32.73	9.85	8.00	2	138	Ⅰ＋Ⅴ	H				
第36図6	2F-75-37	尖頭器	チャート	35.14	32.63	12.89	13.44								＋
	2F-85-39	剥片	チャート	37.29	24.12	12.46	10.91	C	144	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ	O				
	2F-86-3	剥片	安山岩	27.63	33.90	6.58	5.11	3	136	Ⅴ	H				
	2F-90-26	剥片	安山岩	13.51	17.39	4.04	0.58	2	122	Ⅰ＋Ⅲ	S				
第40図41	2F-93-56	石核	珪質頁岩	24.93	34.91	37.17	28.67		72～82						
第36図12	2F-97-66	削器	安山岩	38.65	26.31	12.85	12.12	2	124	Ⅰ＋Ⅴ	H	56～74			
	2G-57-29	剥片	安山岩	45.84	38.76	16.18	24.41			Ⅰ＋Ⅴ	O			B	
	2G-57-5	剥片	安山岩	13.13	16.10	3.76	0.61	1	96	Ⅰ＋Ⅲ	F				
第36図8	2G-66	ナイフ形石器	安山岩	42.92	18.35	7.59	5.78			Ⅰ＋Ⅴ	F	60～100			
	2G-82-9	剥片	安山岩	33.72	32.77	10.51	8.55	L		Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	H				
	2G-93-3	剥片	安山岩	11.45	14.03	2.46	0.38	2	128	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	2H-1A	石核	黒曜石	18.06	31.24	16.32	6.59		50～94						
	2H-1B	剥片	流紋岩	24.89	31.25	9.55	10.78	1	110	Ⅰ＋Ⅲ	H				
第38図24	2H-1C	剥片	流紋岩	26.62	39.74	11.05	3.35	1	120	Ⅴ	H		N		
	2H-60-5	剥片	安山岩	16.18	21.65	2.79	1.03	L		Ⅰ	H				
	2H-91-9	剥片	粘板岩	12.80	20.86	4.31	1.29	L		Ⅰ	S				
第36図5	2I-72-1	尖頭器	ホルンフェルス	84.55	33.19	18.86	49.07								
第38図33	3D-01-1	剥片	珪質頁岩	27.74	30.39	7.95	6.17	3	96	Ⅰ＋Ⅲ	H		N		
第42図47a	3D-26-30	剥片	ホルンフェルス	42.25	40.05	15.59	26.26	1	104	Ⅲ＋Ⅴ	S				
第42図47b	3D-28-12	石核	ホルンフェルス	43.32	62.41	34.13	93.26		72～76						
	3E-00-13	剥片	チャート	25.67	31.50	6.00	4.41	L		Ⅲ				H	
	3E-01-15	剥片	嶺岡頁岩	18.50	24.02	10.60	3.51	4(2)	106	Ⅲ＋Ⅴ	H				
	3E-09-12	礫	頁岩	36.56	28.74	16.09	18.76								
第37図15	3E-15-108	削器	砂岩	72.70	87.80	24.14	225.98					72～80	H		
	3E-16-3	楔形石器	チャート	25.11	24.49	8.51	3.23								
第39図39	3F-16-2	石核	砂岩	30.45	32.83	23.08	21.46		86～106						
	3G-58-1	剥片	安山岩	34.71	28.50	6.96	6.22			Ⅰ＋Ⅴ	H			RB	
	3H-52-2	石核	チャート	9.61	23.11	12.44	3.06		78～82						
第37図22	3H-67-2	二次加工剥片	頁岩	45.30	54.56	12.83	23.82			Ⅰ＋Ⅲ	H	48			
第36図3	3H-69-1	尖頭器	珪質頁岩	59.65	24.19	7.90	10.81			Ⅰ					
第38図30	3H-85-27	剥片	頁岩	48.29	67.14	16.73	37.13	C	108	Ⅰ＋Ⅴ	H		N		
第38図32	3H-85-59	剥片	珪質頁岩	26.71	17.37	6.59	2.24	1	98	Ⅰ＋Ⅲ	H		N		
第39図36	3H-86-10	石核	黒曜石	11.26	17.67	9.48	1.34		56～82						
第39図37	3H-86-70	石核	砂岩	42.05	37.74	11.45	16.99		52						
	3H-89-2	剥片	チャート	25.62	24.45	7.38	3.37			Ⅱ＋Ⅲ	O			B	
第36図4	3H-92-4	尖頭器	珪質頁岩	39.05	15.28	6.08	3.17			Ⅰ＋Ⅴ		68～94			
	3I-53-1	石核	チャート	63.49	34.21	19.95	52.22		62～66						
第37図20	3I-61-2-1	楔形石器	珪質頁岩	31.39	40.56	8.20	13.50								
	3I-95-2-1	剥片	安山岩	40.39	42.57	19.88	23.76	1	116	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅴ	H				
第36図13	3I-95-2-2	削器	安山岩	47.59	25.67	10.52	13.95			Ⅱ＋Ⅴ		52～88			
第37図21	3I-95-2-4	楔形石器	ホルンフェルス	29.03	33.22	13.54	13.63								
	3I-95-2-7	剥片	頁岩	17.81	25.32	2.38	1.22			Ⅰ＋Ⅲ	S			B	
	3I-95-3-1	剥片	ホルンフェルス	25.16	33.22	7.69	5.18	1	130	Ⅰ＋Ⅲ	H				
	3I-95-3-2	剥片	砂岩	27.51	30.87	6.98	4.02	L		Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	O				
	3I-95-3-3	剥片	砂岩	23.24	45.25	8.22	5.95			Ⅲ	O			B	
第37図18	3I-95-3-5	楔形石器	黒曜石	25.05	16.71	7.70	2.66								
第37図19	3I-95-3-6	楔形石器	黒曜石	20.89	17.13	11.10	3.10								
第38図27	3I-95-3-7	剥片	黒曜石	20.04	18.35	5.32	1.24	L		Ⅰ＋Ⅲ	H		N		
第36図14	3I-96-0-1	削器	安山岩	65.64	26.71	13.91	14.05	1	138	Ⅲ＋Ⅴ	H	62～70			
第38図31	3I-96-0-2	剥片	頁岩	24.63	30.92	10.81	4.07	L		Ⅰ＋Ⅲ	O				
第40図43	4H-20-1-1	石核	ホルンフェルス	59.24	86.95	21.02	111.99		38						
第40図44	4H-20-1-2	石核	ホルンフェルス	62.49	60.86	24.57	108.07		46～48						

地点外・単独出土遺物属性表(2)

挿図番号	遺物番号	器種	石質・母岩番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 剥離角	背面構成	末端形状	調整角	使用痕 被熱痕	折れ	欠損
第38図26	4H-24-6	剥片	黒曜石	16.17	20.81	4.42	1.05			Ⅰ＋Ⅲ	H			B	
	4H-25-3	剥片	安山岩	15.91	15.01	6.87	0.79	1	90	Ⅰ＋Ⅲ	F				
	4H-28-2	楔形石器	チャート	27.12	16.04	7.57	3.93			41-06-2	剥片				
	41-06-2	剥片	チャート	30.80	21.06	8.43	5.64	1	116	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	O				
	002-3	剥片	安山岩	15.98	19.62	2.84	0.94			Ⅱ＋Ⅲ	F			B	
	006-3	剥片	砂岩	26.05	40.94	14.07	11.60	C	128	Ⅰ＋Ⅲ	S				
	007-15	剥片	安山岩	17.36	27.23	7.20	3.15	C		Ⅰ＋Ⅲ	S			R	
第39図40	010-72	石核	頁岩	113.20	78.40	62.10	725.90		76～86						
第36図9	014-23	ナイフ形石器	黒曜石	33.53	8.87	4.49	1.02			Ⅰ		78～88			
	017-204	剥片	安山岩	25.74	32.76	7.86	5.03	8(6)	134	Ⅱ＋Ⅴ	H				
	017-213	剥片	安山岩	28.08	28.06	6.00	3.11	C	100	Ⅰ＋Ⅲ	F				
第36図1	017-24	尖頭器	安山岩	35.06	17.32	5.52	2.98								
第38図28	017-85	剥片	凝灰岩	44.22	42.92	17.17	20.63	7(1)	110	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ	H		N		
第38図29	029-1-1	剥片	凝灰岩	41.02	44.22	11.90	12.11	1	110	Ⅰ＋Ⅲ	H		N		
	029-1-2	剥片	玉髄	15.17	28.05	7.27	2.37	4	138	Ⅰ	S				
	029-1-3	剥片	玉髄	14.07	20.32	6.08	1.21			Ⅱ＋Ⅲ	H			B	
	055-2	剥片	凝灰岩	10.34	23.25	7.04	0.86			Ⅲ＋Ⅴ	O			B	
第38図34	056-1	細石核	黒曜石	22.90	20.50	22.92	9.78		74～102						
	21墳周2-52	剥片	安山岩	33.35	26.25	4.48	3.06	2	96	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅴ	F		H		
第39図35	21墳封3-1	石核	流紋岩	55.18	36.39	19.57	27.28		68						
第38図23	21墳封4-1-8	剥片	安山岩	34.57	15.02	5.30	2.67	L		Ⅰ＋Ⅴ			N		
	21墳封4-71	剥片	安山岩	16.86	22.26	4.17	1.39			Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅴ	H			B	
第36図2	22墳封4-2-8	尖頭器	安山岩	36.76	26.32	8.21	4.91	＋							

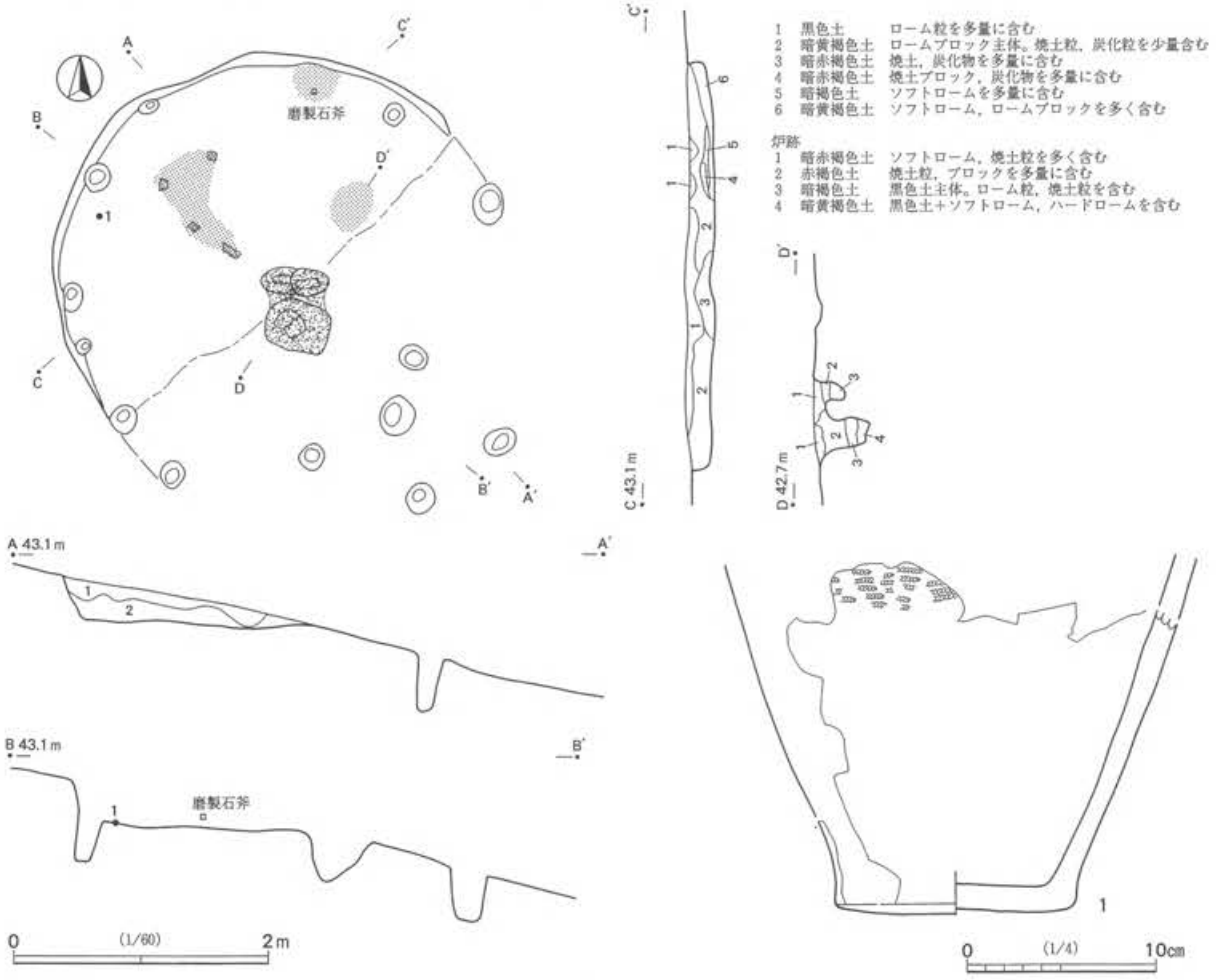
第3章　縄文時代

縄文時代の遺構は，竪穴住居跡１軒・埋設土器２基・陥穴26基・炉穴14基である。遺構の分布は全体に散漫であるが，舌状台地の基部周辺や台地縁辺部に陥穴と炉穴が集中している。竪穴住居跡は，基部周辺の緩斜面上にわずかに１軒を検出したが，遺物の分布状況や埋設土器の存在などから，本来は複数の住居が存在していたと思われる。縄文土器は，早期前葉の撚糸文系土器から晩期末葉の荒海式の後半に属する土器まで長期にわたり出土している。石器は，石鏃・石斧・敲石・石皿をはじめ石棒も遺跡内全体から出土している。土製品では玦状耳飾や耳栓のほか，晩期中葉の時期と考えられる人面付きの土版も出土するなど，多岐にわたる活動の痕跡がみられるが，検出した遺構はきわめて少ない。ここでは検出した遺構について述べるとともに，縄文土器と土製品については第５節で詳細に説明することにした。なお，石器については図示し(第81図～86図)，計測値等については第19表にまとめた。

第１節　竪穴住居跡

045（第43図，図版５・30）

調査区の中央やや東側３Ｆグリッドで，南側に谷津を臨む緩斜面上に位置している。遺存状態は，あまり良好ではない。南東側を削平されており，遺存していた柱穴の配列などから，平面形態等を推定した。



第43図　045及び出土遺物

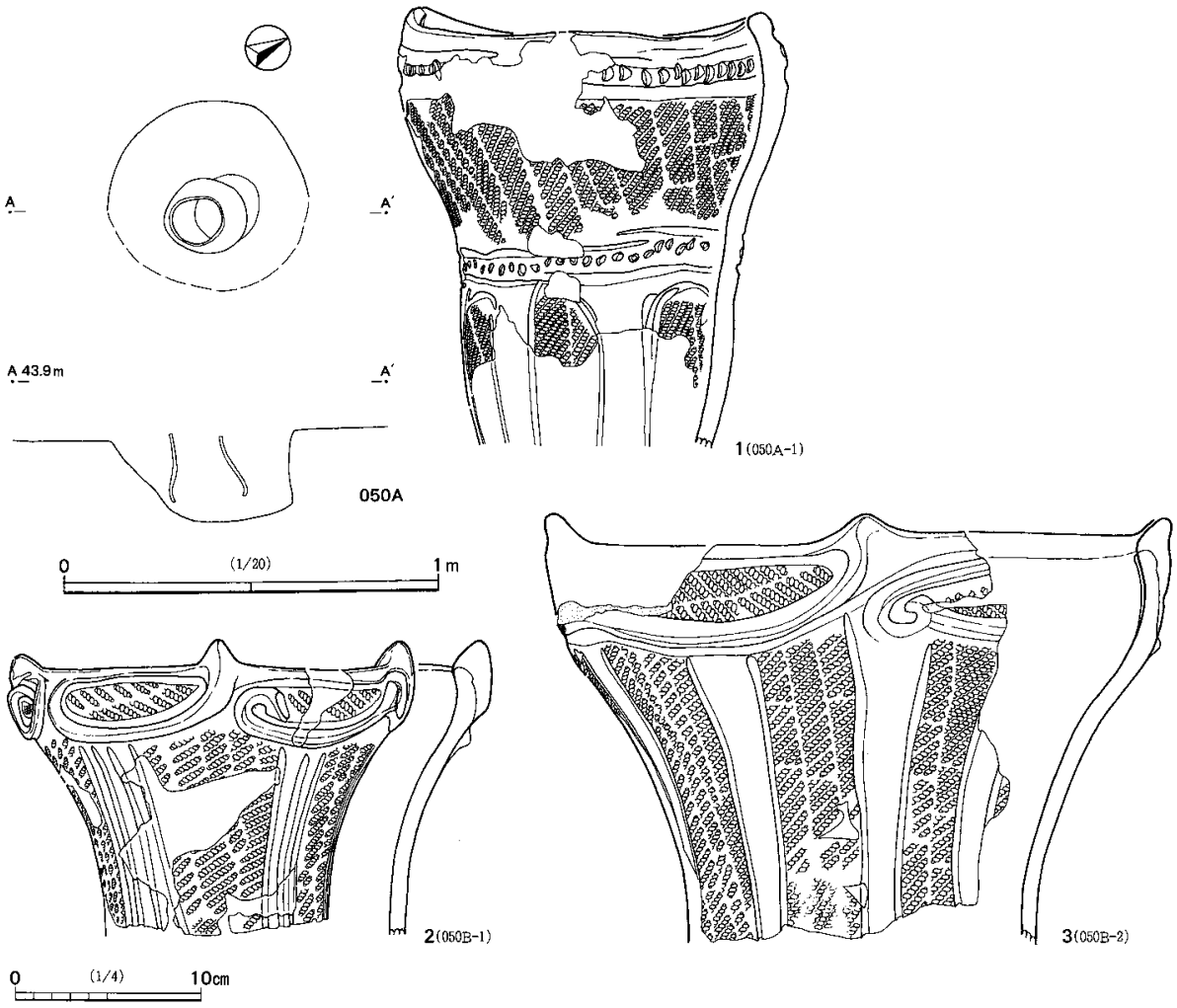
平面形態は楕円形になると考えられ，規模は北東－南西軸3.6m，北西－南東軸は4.1mと推定される。壁高は，遺存している範囲では7cm～36cmを測り，比較的遺存の良い北西壁側では35cm前後である。北西側の床面は，凹凸があるが堅緻である。ピットは13基検出された。主柱穴と考えられるP1～P8は壁際に設けられ，径16cm～32cm，深さは19cm～65cmと，規模は一定していない。P12(径20cm～24cm，深さ52cm)とP13(径20cm～26cm，深さ34cm)を出入り口施設に伴うピットであると想定すると，出入り口がやや南東方向に張り出す住居であることも考えられる。炉は床面のほぼ中央に位置し，3基の掘り込みからなっている。中央の掘り込み(径41cm×52cm，深さ40cm)は焼土が厚く堆積し，内側が被熱のため赤色に変色していた。

遺物は，1の土器と磨製石斧(第83図74)が出土した。1は胴部下半から底部にかけて遺存している。底部の形態などから後期前葉の時期が想定される。

第2節　埋設土器

050A・B（第44図，図版5・30）

050Aは，調査区の東側，2Gグリッドの平坦面に位置する土器を埋設した土坑である。土坑は径50cmの円形を呈し，確認面から底面までの深さは23cmである。土器は口縁部を下にして土坑のやや南側に埋設



第44図　050A及び050A・B出土遺物

されていた。土器は底部を欠損し，胴部下半は内外面とも二次焼成を受けている。胴部中位に沈線で区画された部分に横位に刺突文が巡り，その下には連弧文が施されている。

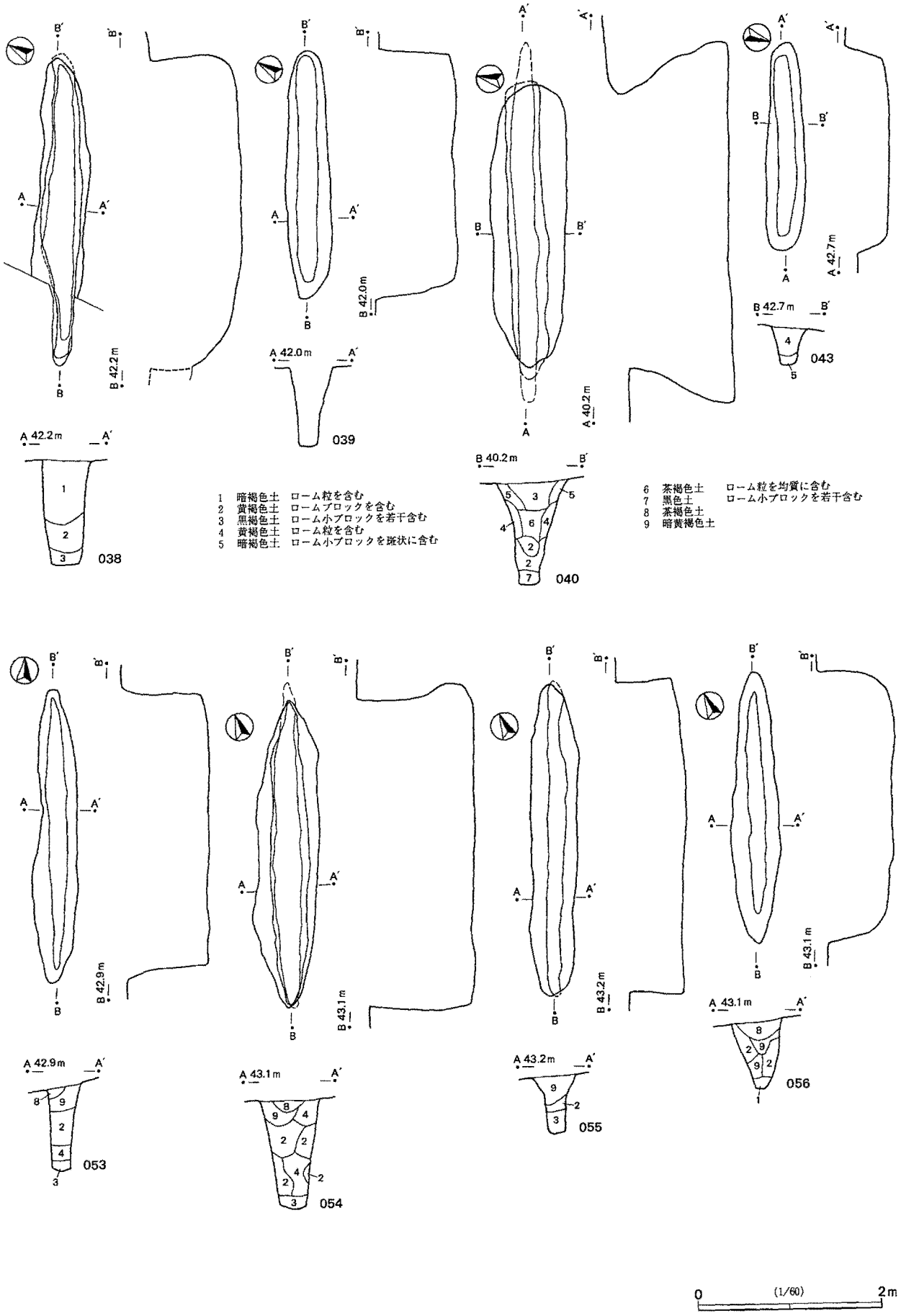
050Bは，050Aの南側に隣接して横位で出土した土器である。本来は土坑等の掘り込みが存在していたと思われるが，調査時には判然としなかった。2個体とも，内外面に二次焼成を受けている。いずれもキャリパー形の深鉢で，口縁部の楕円形の文様はやや形が雑になってきている。胴部は懸垂文が施文され，内側の磨消しは明瞭である。中期の加曽利ＥⅡ式であろう。

第3節　陥穴

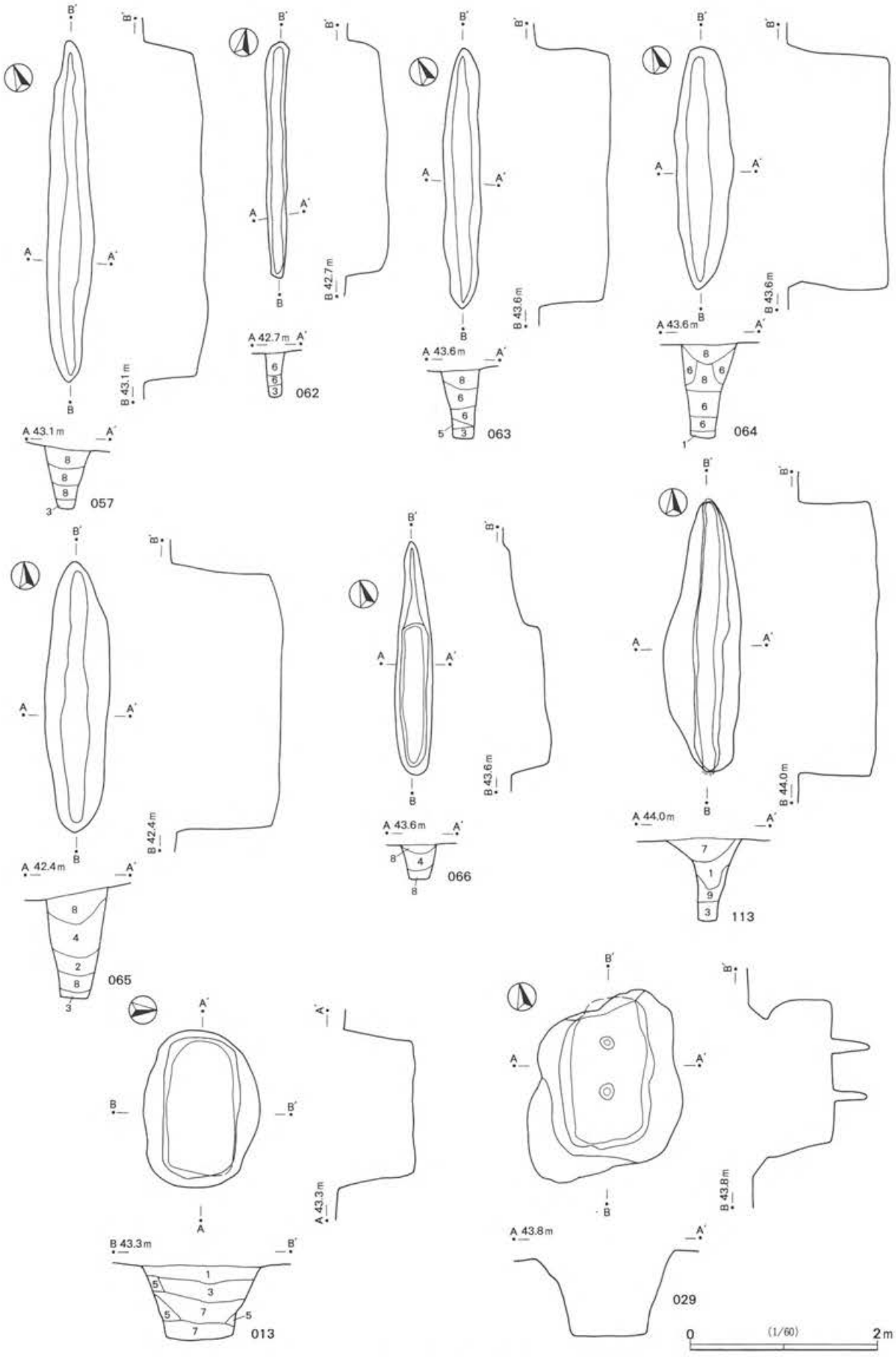
26基の陥穴を検出した（第45～47図，第16表，図版6）。時期を確定できる出土遺物はないが，平面形態などから主に縄文時代草創期から早期にかけての時期が考えられる。分布は，舌状台地縁辺部から台地中央部の平坦地にかけての範囲に散漫に分布するグループ(038～041，117など)と，調査区の東端で台地の南側に侵入した小支谷の奥部に集中するグループ(053～057，062～066など)に大きくわかれている。特に東端の長楕円形を呈するグループは，支谷から台地へ上がる緩斜面から台地縁辺部に，長軸を斜面の等高線に沿うように向けて2列以上で数基が集中しており，配置に計画性・規則性がみられる。平面形態は，長楕円形が15基と最も多く，楕円形・長方形は5基と少なく，方形はわずかに1基である。東端のグループは長楕円形が主体となり，Ｖ字形に掘り込まれ，長軸方向に底面が抉られオーバーハングしている陥穴もある。楕円形や長方形の陥穴は，013と059を除いて底面中央にピットが穿たれている。ピットは基本的には1基であるが，029は2基のピットが長軸方向に並んで穿たれている。規模は，長楕円形では長軸長

第16表　陥穴一覧

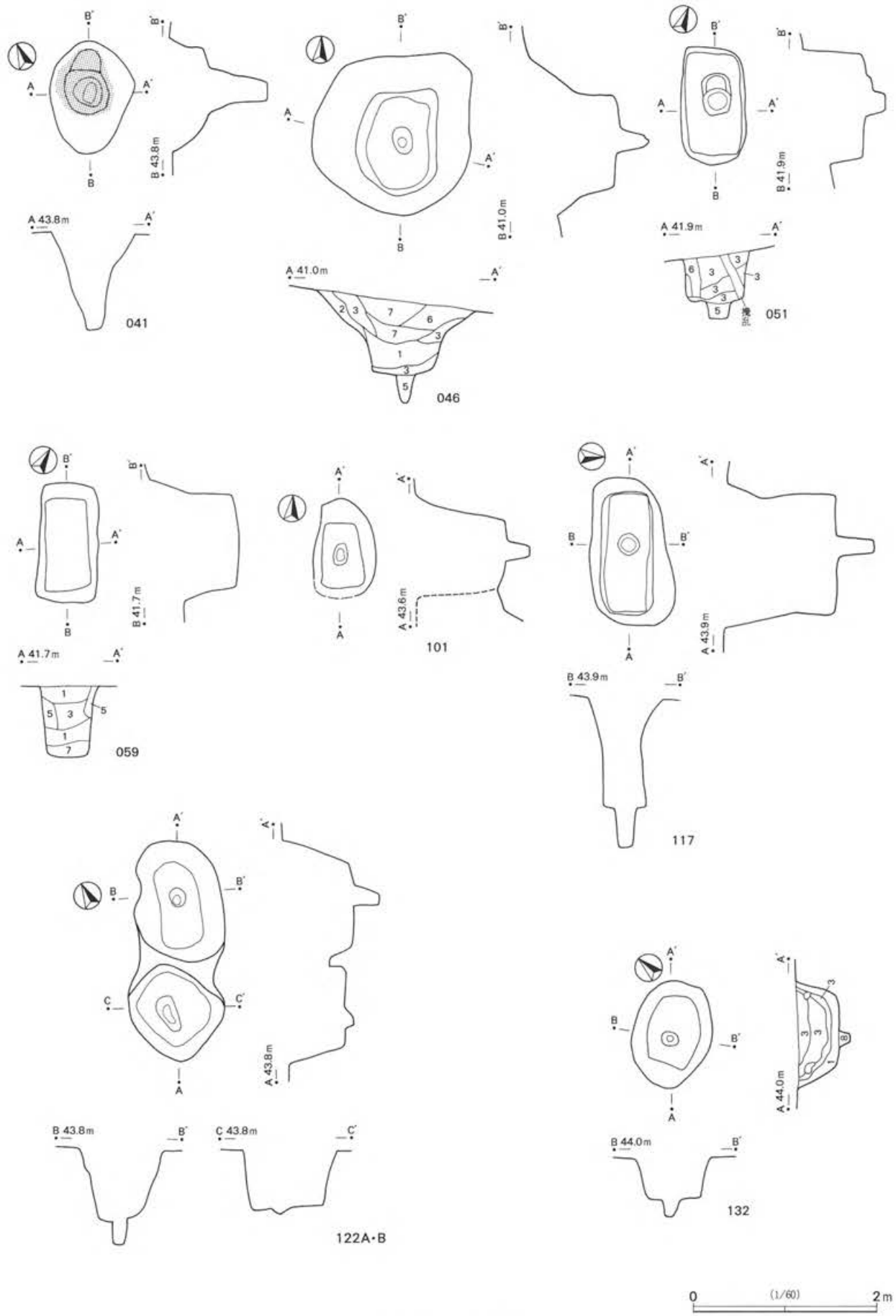
遺構番号	旧遺構番号	グリッド	平面形態	長軸方位	長軸長×短軸長(m)	深さ(m)	備考
013		2E－81	楕円形	N-87°-W	1.70 × 1.26	0.88	
029		4I－11	楕円形	N-12°-E	2.00 × 1.66	0.90	ピット2
038		2F－26	長楕円形	N-64°-E	3.46 × 0.56	1.06	
039		2F－20	長楕円形	N-62°-E	2.74 × 0.48	0.88	
040		3G－32	長楕円形	N-81°-E	4.00 × 0.84	1.30	
041		2F－78	楕円形	N-21°-E	1.23 × 0.92	1.10	ピット1
043		2F－38	長楕円形	N-69°-E	2.30 × 0.45	0.45	
046		2F－29	楕円形	N-2°-E	1.90 × 1.80	0.96	ピット1
051		3H－65	長方形	N-18°-W	1.28 × 0.70	0.70	
053		4H－19	長楕円形	N-2°-E	3.22 × 0.52	0.96	
054		4H－19	長楕円形	N-19°-E	3.60 × 0.68	1.27	
055		4I－10	長楕円形	N-24°-E	3.46 × 0.53	0.76	
056		4I－20	長楕円形	N-26°-E	2.98 × 0.52	0.84	
057		4H－39	長楕円形	N-24°-E	3.68 × 0.50	0.68	
059		2G－01	長方形	N-29°-W	1.32 × 0.67	0.90	
062		4H－08	長楕円形	N-8°-W	2.55 × 0.22	0.45	
063		3I－90	長楕円形	N-26°-E	2.80 × 0.38	0.80	
064		3I－91	長楕円形	N-22°-E	2.62 × 0.62	1.10	
065		4H－09	長楕円形	N-9°-E	2.90 × 0.70	1.20	
066		4I－01	長楕円形	N-22°-E	2.50 × 0.38	0.43	
101	001	3I－71	長方形	N-4°-W	1.06 × 0.70	0.98	ピット1
113	013	2I－93	長楕円形	N-3°-E	2.95 × 0.82	0.85	
117	017	2I－61	長方形	N-1°-E	1.62 × 0.90	1.28	ピット1
122A	022A	2H－53	長方形	N-20°-E	1.40 × 1.00	0.75	ピット1
122B	022B	2H－62	方　形	N-20°-W	1.05 × 0.90	0.60	ピット1
132	032	1G－99	楕円形	N-62°-E	1.16 × 0.88	0.45	ピット1


038
039
040
043
053
054
055
056
1 暗褐色土 ローム粒を含む
2 黄褐色土 ロームブロックを含む
3 黒褐色土 ローム小ブロックを若干含む
4 黄褐色土 ローム粒を含む
5 暗褐色土 ローム小ブロックを斑状に含む
6 茶褐色土 ローム粒を均質に含む
7 黒色土 ローム小ブロックを若干含む
8 茶褐色土
9 暗黄褐色土
0 (1/60) 2m

第45図 陥穴(1)



第46図　陥穴(2)



第47図　陥穴(3)

2.3m～4.0mと幅があるが，2.5m～3.0m前後が多い。上面を削平されているものも多く，深さは現状では0.43m～1.3mと比較的浅く，底面はほぼ平坦である。覆土は，黒色土や黒褐色土の堆積後に，暗褐色土や黄褐色土が自然に堆積している陥穴が多い。

第4節　炉穴

012（第48図，図版5）

調査区の中央，2Eグリッドの平坦面に位置する。

平面形態は不整形で，長軸長3.0m・短軸長2.4m，深さは62cmを測る。3基の炉床をもち，中央部に広く平坦の足場が設けられている。東側に偏在する2基の炉床(A60cm×70cm，B62cm×65cm)は，南北方向に突出するように位置しているが，西側の炉床(59cm×73cm)は炉穴の内側に設けられている。出土遺物は少ない。1・2は茅山下層式土器，3は鵜ガ島台式土器である。

015（第48図，図版5・30）

調査区の中央，2Eグリッドの平坦面に位置する。

平面形態は不整形で，長軸長2.62m・短軸長1.75m，深さは45cm～50cmを測る。楕円形の本体に炉床が付設されたような形態である。炉床(60cm×70cm)は北西側に偏在し，南西側に広い足場をもつ。炉床からはまとまって土器が出土した。4・6～8は茅山下層式土器である。5は田戸上層式の小型深鉢である。グリッドから出土した土器(第55図70)と同一個体である。

026（第48図）

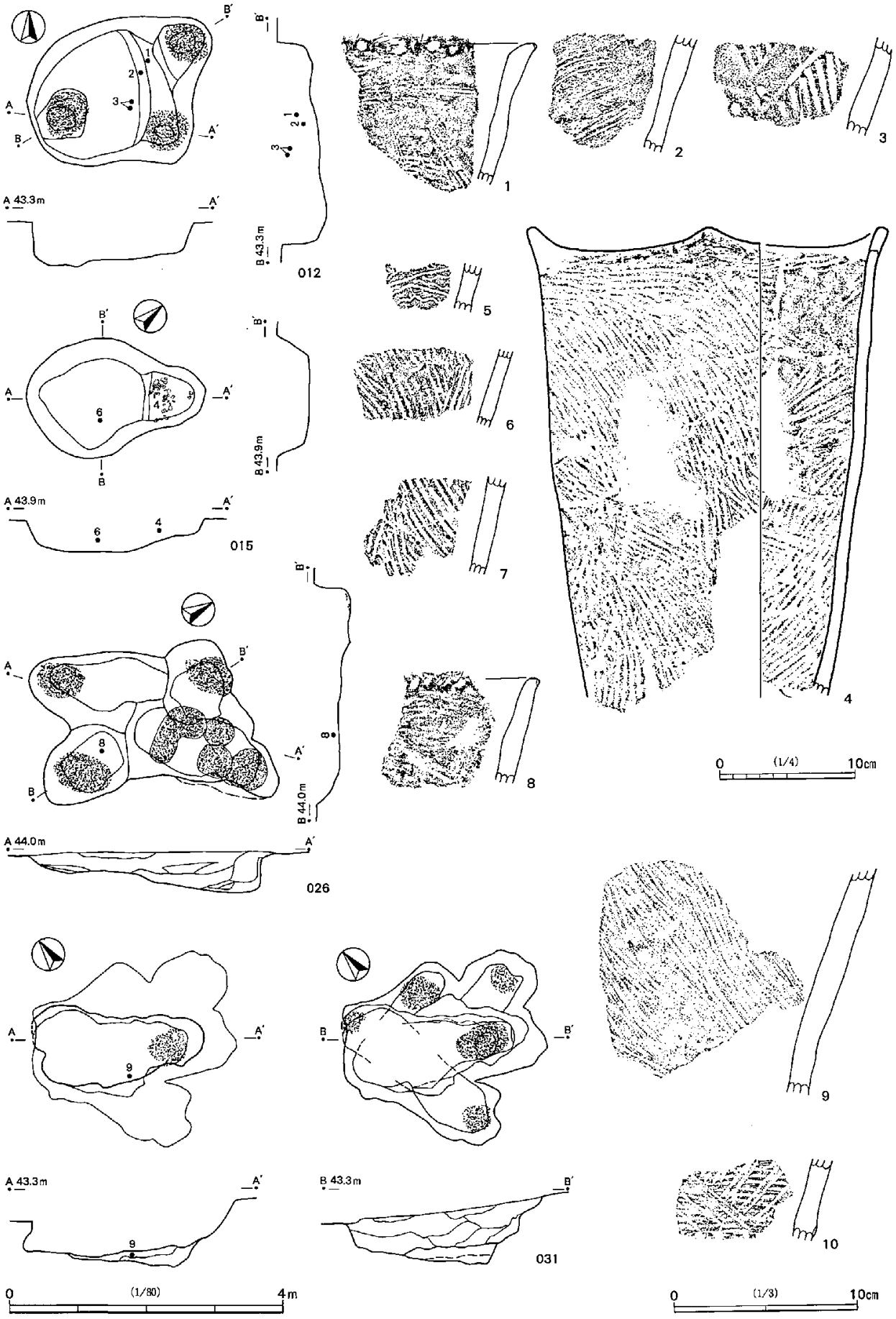
調査区の東端，3Iグリッドの位置する。7か所の炉床をもつ，複合した炉穴である。

平面形態は，長楕円形や楕円形の炉穴が複合し不整形を呈している。長軸長4.0m・短軸長2.2m，深さは21cm～57cmを測る。炉床は7か所(A～G)で確認された。土層断面等から判断すると，まず北側と北東側に位置するA(54cm×70cm)・F(54cm×60cm)の炉床が設けられ，一度埋め戻してからその上に新たにB(38cm×50cm)・C(42cm×53cm)の炉床がつくられている。D(52cm×68cm)・E(56cm×82cm)との新旧関係は不明であるが，B・Cと同時期かやや新しいと考えられる。なお，G(29cm×92cm)は炉床としては判然としないが，他の炉穴に埋土が堆積した時点で浅い掘り込みの炉床を設けたことも考えられる。G以外の炉床は底面がよく被熱し，硬化していた。遺物はEに限定的に出土しているが，小破片が多く図示できたのは8の茅山下層式土器のみである。

031（第48図，図版5）

調査区の東端，3Hグリッドの緩斜面上に位置する。6か所に炉床が構築された炉穴である。

平面形態は，長楕円形の炉穴が複合した不整形を呈している。長軸長3.15m・短軸長2.75m，深さは43cm～98cmを測る。Aの炉床底面が最も深くなっている。炉床は6か所(A～F)に設けられている。土層断面等からはA→B以外の新旧関係は判断できなかった。A・Bは同一の足場を利用し，A(48cm×53cm)の廃絶後にハードロームを主体とする土層で埋め戻して底面をつくり，B(36cm×43cm)を炉床として構築している。D(47cm×55cm)・E(35cm×45cm)・F(45cm×45cm)の新旧関係は不明であるが，炉床はよく被熱している。C(26cm×36cm)はFに対向して位置しているが，焼土の堆積も薄く炉床もあまり被熱していない。出土遺物は少なく，9はAから，10は覆土中からの出土である。ともに茅山下層式土器である。


012
015
026
031
A 43.3m
B 43.3m
A 43.9m
B 43.9m
A 44.0m
B 44.0m
0 (1/4) 10cm
0 (1/80) 4m
0 (1/3) 10cm

第48図　炉穴(1)

104（第49図，図版５）

調査区の東側中央，２Ｈグリッドの平坦面に位置する。中央部に設けられた平坦な足場を共有するように，３基が重複している。平安時代の102住居跡に西側の一部を削平されている。

平面形態は不整形で，長軸長4.74ｍ・短軸長2.4ｍ，深さ30cm～74cmを測る。炉床は，Ａ・Ｂが北東側，Ｃは北西側にそれぞれ設けられている。新旧関係は判然としないが，Ａ(33cm×37cm)はＢ(76cm×98cm)に足場の部分を削平されている。Ｃ(70cm×82cm)は，中央の足場からさらに一段掘り込まれ，狭い足場を構築している。遺物は少なく，１～３の茅山下層式土器が覆土中から出土している。

105・106（第49図，図版５）

調査区の東端，３Ｉグリッドのやや緩斜面上に位置する。複数の炉床をもつ炉穴105(南側)と炉穴106(北側)がさらに連結して，大きな一群を形成している。

平面形態は不整形で，長軸長8.72ｍ・短軸長4.2ｍ～4.52ｍ，深さは24cm～55cmを測り，南北に長く東西へは２か所でのびている。炉床は，南側に６か所(Ａ～Ｆ)，北側には５か所(Ｇ～Ｋ)の計11か所が設けられている。南側の群は，南北方向と東西方向の炉穴に大きくわけられる。新旧関係は判然としないが，比較的規模の大きい南北方向のＡ(1.2ｍ×1.4ｍ)を中心に，東西方向のＣ～Ｆが重複し，足場を北側に設けている。このなかではＦ(80cm×90cm)がほかの炉穴に削平されている。北側の群は，それぞれの炉穴が外側に張り出すように設けられている。Ｇ(72cm×122cm)は天井部が遺存しており，このなかでは最も新しい炉穴である。また，中央部の覆土中層からは少量の貝ブロックが検出された。分析結果は付章に記載した。遺物は北側の106に集中している。４～11は茅山下層式土器である。

108（第50図，図版５）

調査区の東端，３Ｉグリッドのやや緩斜面上に位置する。106の北側に隣接する。７か所に炉床をもつ。

平面形態は，長楕円形の炉穴を半円形に配列したような不整形を呈し，長軸長5.28ｍ・短軸長3.66ｍ，深さは40cm～54cmを測る。炉床(Ａ～Ｇ)は，Ｅ～Ｇを除いて外側に偏在している。新旧関係は不明であるが，足場を変えながら次々と炉床を構築していったと考えられる。Ｂ(90cm×92cm)・Ｃ(83cm×92cm)・Ｄ(88cm×106cm)の炉床はよく被熱していた。遺物は覆土中から条痕文系土器が出土したが，いずれも小片のため図示できなかった。

109（第50図，図版５）

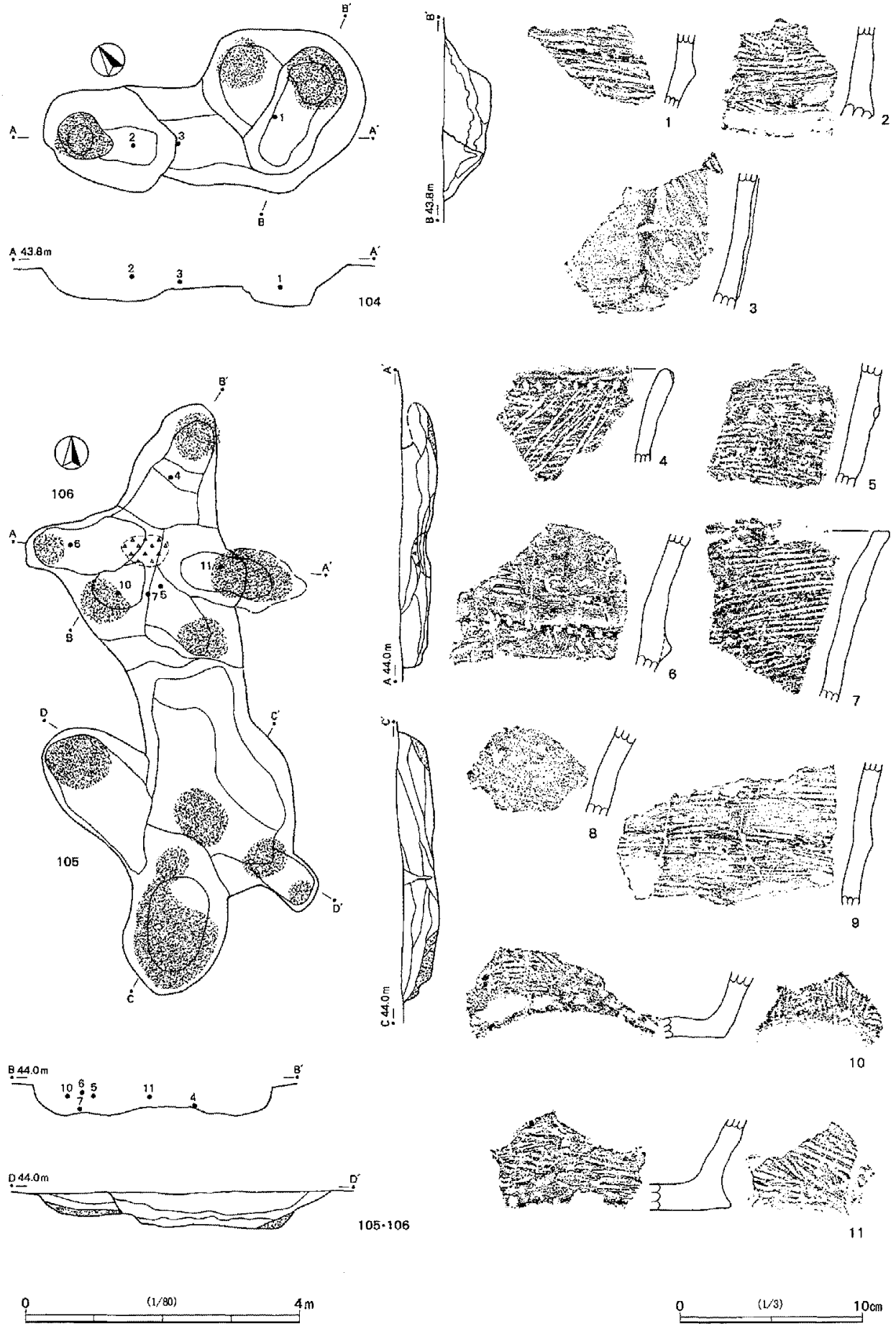
調査区の東端，３Ｉグリッドの平坦面に位置する。

平面形態は長楕円形で，長軸長2.95ｍ・短軸長1.05ｍ，深さは60cmを測る。炉床は２か所から検出された。北東隅に偏在する炉床(56cm×64cm)が最初に設けられ，そのなかを一段掘り込んで中央部の炉床(94cm×102cm)が構築されている。出土遺物は少なく，１は茅山上層式土器である。

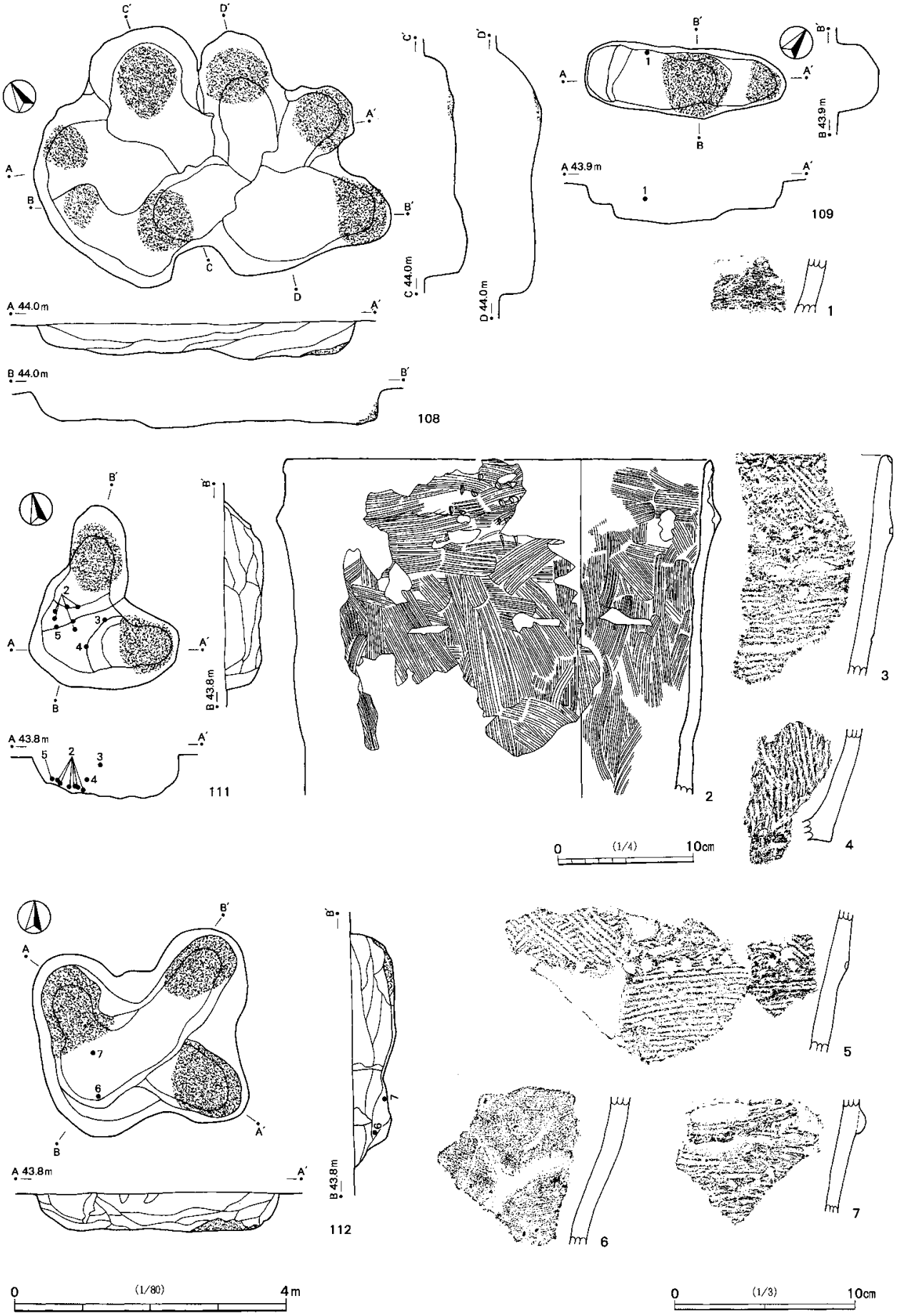
111（第50図，図版５・30）

調査区の東側中央，２Ｈグリッドの平坦面に位置する。足場を共有して２か所に炉床を設けている。

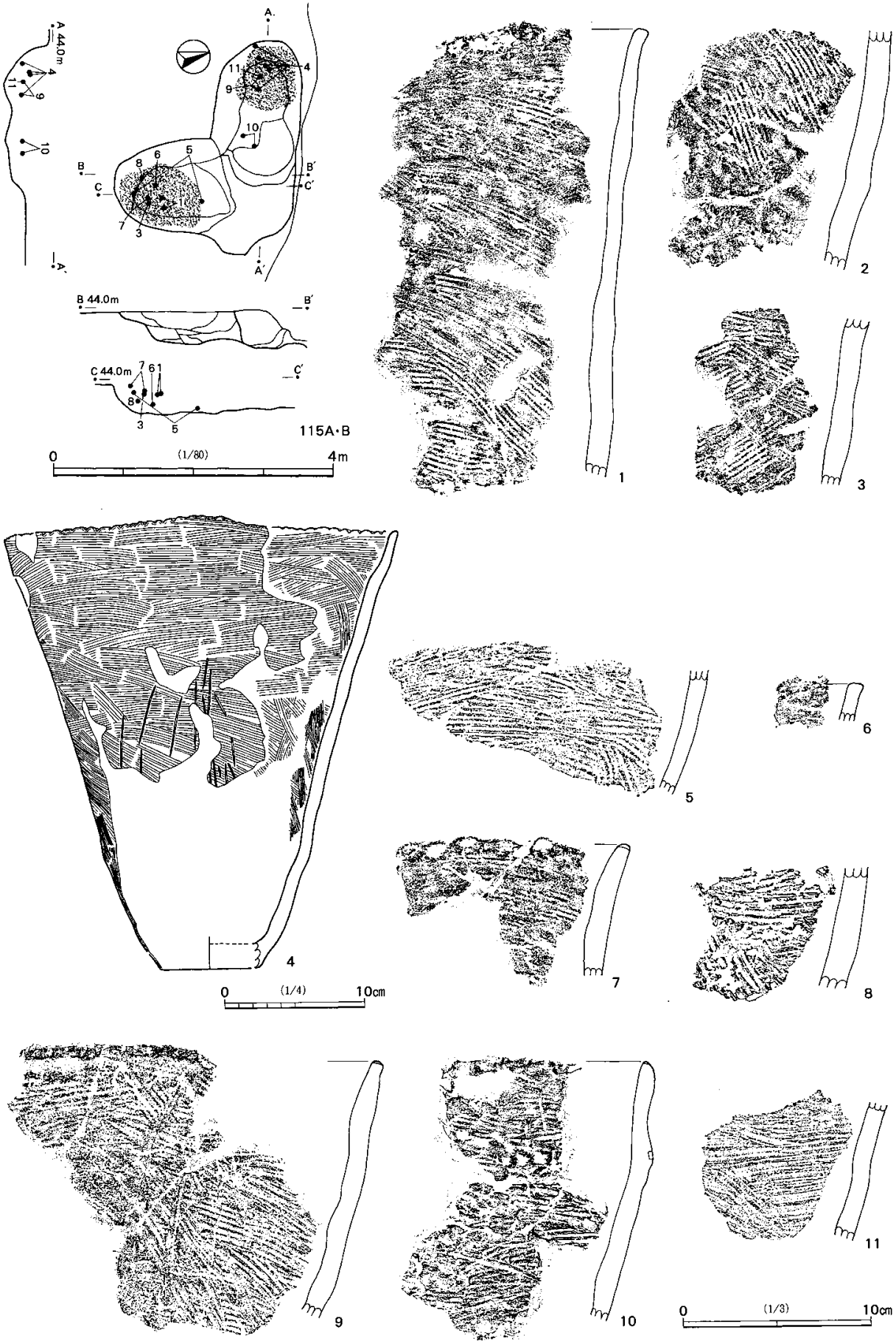
平面形態は，長楕円形の炉穴が直角に連結したような不整形である。南北の長軸長2.74ｍ・東西の短軸長2.2ｍ，深さは56cm～67cmを測る。北側に偏在する炉床(76cm×103cm)はやや浅く掘り窪まれているが，焼土の厚さは12cmである。東側に偏在する炉床(75cm×80cm)はほぼ垂直に掘り込まれ，焼土の厚さ10cmである。ともに底面はよく被熱していた。足場は南西側に設けられているが，部分的に凹凸がある。少量の貝ブロックが検出されており，分析結果は付章に記載した。遺物は足場付近の覆土中層から２～５の茅山


104
105·106
A 43.8m
B 43.8m
A 44.0m
C 44.0m
B 44.0m
D 44.0m
0 (1/80) 4m
0 (1/3) 10cm

第49図　炉穴(2)


108
109
111
112
A 44.0m
B 44.0m
C 44.0m
D 44.0m
A 43.9m
B 43.9m
A 43.8m
B 43.8m
0 (1/80) 4m
0 (1/4) 10cm
0 (1/3) 10cm

第50図　炉穴(3)



第51図　炉穴(4)

下層式土器が出土した。

112（第50図，図版５）

調査区の東側中央，２Ｈグリッドの平坦面に位置する。３か所に炉床が設けられている。

平面形態は，長楕円形の炉穴が複合した不整形である。長軸長3.66ｍ・短軸長3.62ｍ，深さは42cm～65cmを測る。炉床は，北西隅(88cm×118cm)，北東隅(73cm×114cm)，南東隅(94cm×110cm)に，それぞれ偏在して設けられてる。いずれの炉床も底面から側面にかけて，よく被熱していた。足場は南西側に設けられ，底面は平坦である。この部分にも薄く焼土が堆積していた。遺物の出土は少なく，足場から６・７の茅山下層式土器が出土している。

115A・B（第51図，図版５・30）

調査区の北東端，１Ｈグリッドの平坦面に位置する。２基の炉穴が複合しているが，北側の一部を削平されている。

平面形態はともに長楕円形で，Ａは現存値で長軸長2.6ｍ・短軸長1.35ｍ，深さは43cmを測る。炉床(90cm×106cm)は南側に偏在し，掘り込みは浅い。Ｂは長軸長3.10ｍ・短軸長1.22ｍ，深さは64cmである。炉床(84cm×92cm)は西側に偏在している。土層断面の観察からは，ＡがＢに先行して構築され，Ｂの足場はＡの足場を一段下げて設けられている。出土遺物は多く，Ａからは１～３，５～８，Ｂからは４，９～11の茅山下層式土器が出土している。

118（第52図，図版６）

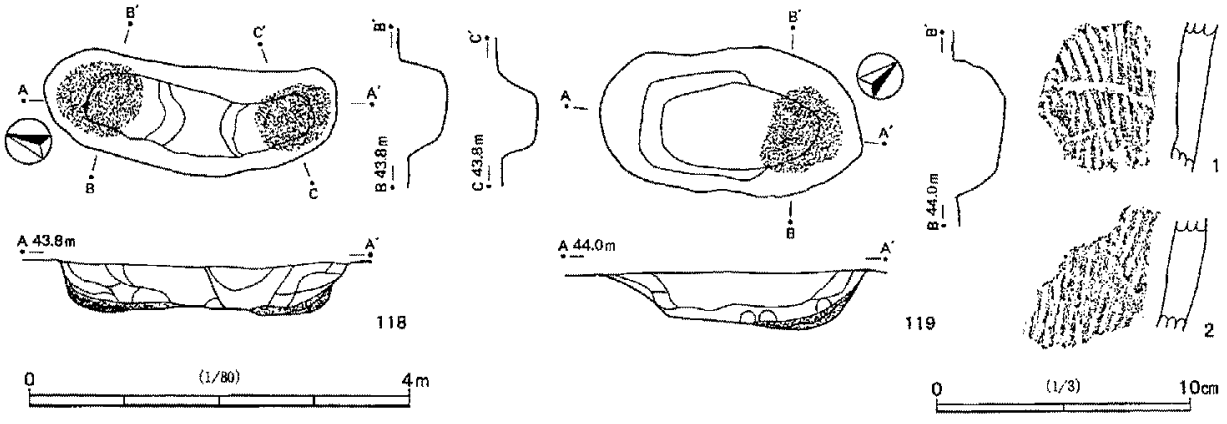
調査区の東側中央，２Ｉグリッドの平坦面に位置する。南北に２か所の炉床が設けられている。

平面形態は長楕円形で，長軸長3.06ｍ・短軸長1.20ｍ，深さは48cmを測る。北側に偏在する炉床Ａ(80cm×90cm)と，南側の炉床Ｂ(64cm×80cm)は，ともに掘り込みは浅く焼土の厚さは８cm程度であるが，底面はよく被熱していた。足場は２か所の炉床の中間に設けられ，ほぼ平坦である。出土遺物はない。

119（第52図，図版６）

調査区の東側中央，２Ｉグリッドの平坦面で，118の北東に隣接する。

平面形態は長楕円形で，長軸長2.76ｍ・短軸長1.56ｍ，深さは52cmを測る。炉床(84cm×99cm)は北東側に偏在する。掘り込みは浅く，焼土の厚さは７cmであるが，底面から側壁にかけてよく被熱していた。南西側にはほぼ平坦な足場が設けられている。遺物は少なく，覆土中から１・２の茅山下層式土器が出土している。



第52図　炉穴(5)

第５節　グリッド出土遺物

１　縄文土器

小金沢古墳群２次調査および３次調査で，遺構に伴わずに出土した，いわゆるグリッド出土の縄文土器と，後世の遺構中に混入した縄文土器について，一括して記載する。土器型式の認定に当たっては，小林謙一氏より懇切なご教示を頂いた。

出土した縄文土器は，早期から晩期にわたっており，時期比定が可能な土器を中心に図化した。縄文土器全体の出土量に関する集計は実施していない。

記載にあたっては，基本的に時期の古いものから順におこなう。群別して記載したが，便宜的なものである。図化した土器については，本文中で簡単な記載をおこない，観察表を付した(第17表)。焼成，色調，胎土といった項目については，観察表中に記した。胎土中に繊維を含む土器については，断面図に黒いドットが落としてある。図の縮尺は，土器拓影図および底部破片の復元図については1/3である。器形を復元した実測図については，1/3のものと1/4で図化したものがある。土器拓影図で内面の拓本を示す場合は，中央に土器断面図，向かって左側に土器の外面，向かって右側に土器の内面の拓本を示した。縄文の表記については，『日本先史土器の縄紋』[1]を参考として，１段右撚りの縄をＲ，左撚りの縄をＬ，２段正撚りの縄はＲＬ，ＬＲ，３段正撚りの縄はＲＬＲ，ＬＲＬなどと，簡略化して表記することとしたい。

Ｉ群　早期の土器

１．早期前葉・撚糸文系土器（第53図１～23）

１～７は稲荷台式に比定し得るものである。口縁部が顕著に肥厚せず，撚糸文を間隔を空けて施文することで共通する。１は丸頭状の口唇部をもち，口縁部が直に立ち上がるものである。２は口縁部が若干外反し，やや幅広の無文帯となる。３・４も丸頭状の口唇部をもつ。５は外削ぎ状の口唇部である。６は口縁部が若干肥厚する。７は同一個体片がいくつか存在する。若干肥厚する口縁部で，間隔を空けた撚糸文を斜方向に施す。

８は絡条体圧痕文をもつ土器である。口唇部は丸頭状で，口縁部に斜位の絡条体圧痕文を施す。稲荷台式の終末に絡条体圧痕文をもつ土器が散見されるが，その類例の可能性を考えここに置いた。絡条体に用いる原体は１段Ｒである。

９はやや厚みのある無文の口縁部で，稲荷原式かあるいはその影響を受けた花輪台式の口縁部であろう。

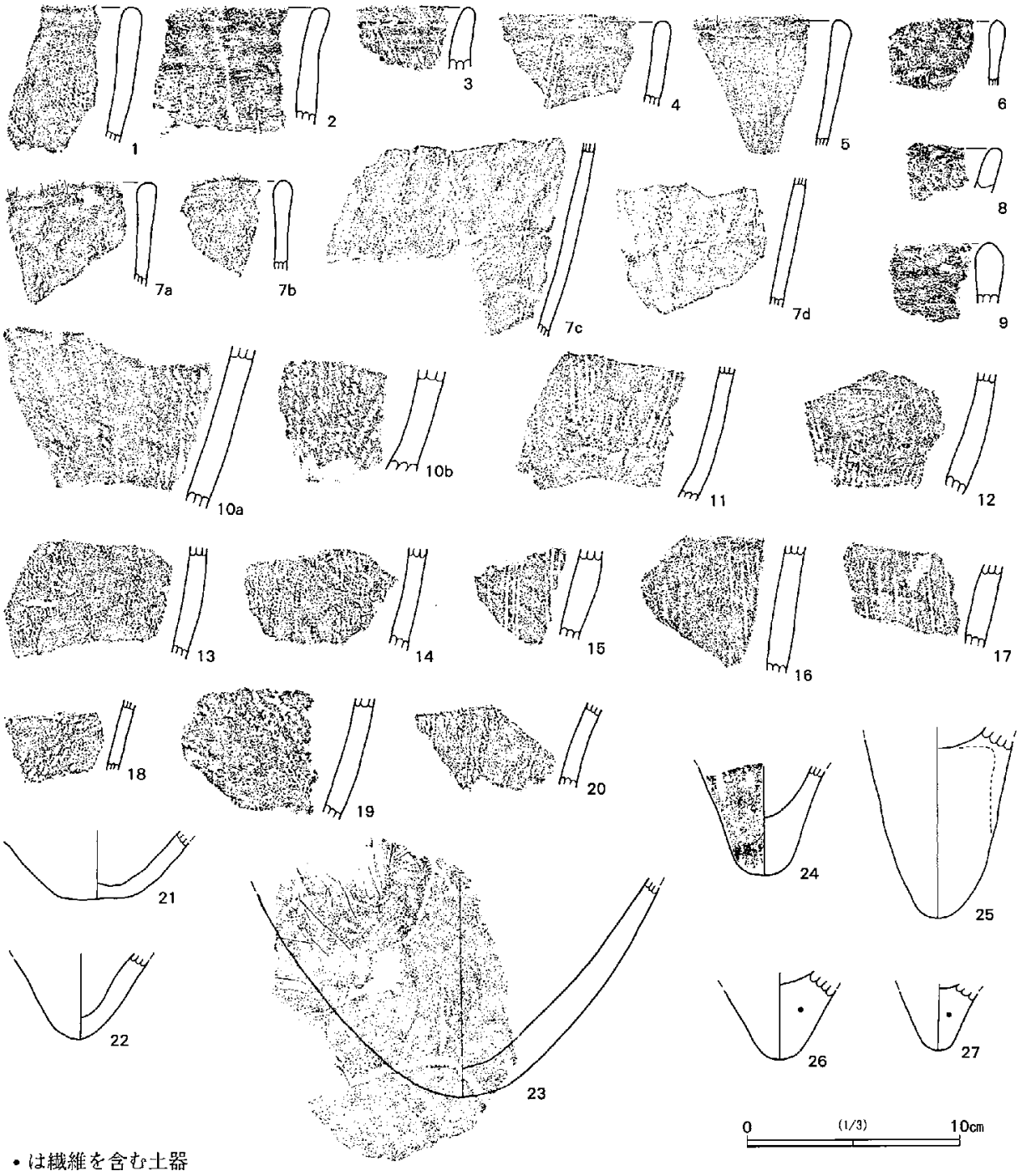
10～20は撚糸文が施された胴部破片である。全体的に間隔の空いた撚糸文であり，12・18・19などは施文方向がやや乱れる。概ね稲荷台式の胴部破片と考えて良かろう。撚糸文の原体は，確認できたものでは，19が１段Ｌの原体を用いる以外，１段Ｒの原体を用いた撚糸文が用いられている。

21～23は撚糸文系土器の底部と考えられる尖底部である。21は小平底といったような感じで底面がつぶれている。22はやや鋭角な尖底部である。23は丸底状である。体部には擦痕状に砂粒の移動が認められる。撚糸文系土器終末から沈線文系土器にかけての土器であろう。

２．早期中葉・沈線文系土器（第53図24～27，第54・55図）

（ａ）三戸式（第54図28～40）

28～40は概ね三戸式に相当する土器であろう。28から33，40は細沈線を組み合わせ幾何学的な文様を描くものである。28・29は平行する斜沈線間に短い斜沈線を組み合わせた梯子状の文様をもつものである。



• は繊維を含む土器

第53図　グリッド出土縄文土器(1)

31・33は方向の違う斜沈線により雑な格子目文が描かれるものである。34は口縁部破片で，平行する横位の細沈線を口縁直下から描くものである。35は無文の口縁部破片で，内削ぎ状の口唇部の外側にキザミをもつ。

36～39は条痕文を持つもので，繊維を含まないこととから沈線文系土器に伴うものと判断した。36は角頭状の口唇部をもつ土器で，条痕が格子目状に施される。37・39も条痕の施文方向を変えることで，一部条痕が格子目状になる。

（b）田戸下層式（第54図41～65）

41～65は田戸下層式に相当しよう。基本的には太沈線文を主要な文様要素とし，細沈線，刺突文などの文様を組み合わせる。田戸下層式は一般的にミガキが顕著で焼成良好な土器が多いが，焼成がやや悪く軟質な土器が目立つ。この遺跡の特徴と言ってよかろう。

41は曲線的な太沈線文に短沈線を組み合わせるものである。42は口縁部破片で，口唇部は角頭状である。口縁部に横位に平行する太沈線を巡らせ，以下に斜位の細沈線と太沈線を配する。43は太沈線，竹管による刺突，細沈線による格子目文を組み合わせるものである。44・45は横位の太沈線と縦位の平行する太沈線を組み合わせるものである。

46～49は横位の平行する太沈線が認められるものである。46は口縁部破片で，やや尖り気味の口唇部の先端がカットされたように水平になる。48も口縁部破片で，しっかりした角頭状の口唇部をもつ。50は縦位の太沈線間に縦位の細沈線を配するものである。

51～54は太沈線間に竹管による刺突列を配するものである。51の刺突列に用いる竹管は，先端が薄くなるように加工されたものである。55は太沈線間に斜位の細沈線をもつものである。

56～59は中太の沈線が主に斜位に施されるものである。60は半截竹管を用いた並行沈線をもつものである。61は貝殻腹文をもつもので，横位の沈線間に斜位の貝殻腹縁文が配される。62は貝殻腹縁文と細沈線による格子目文をもつものである。

63～65は体部下半の破片と考えられる。63・64は縦位太沈線文，65は横位太沈線をもつものである。

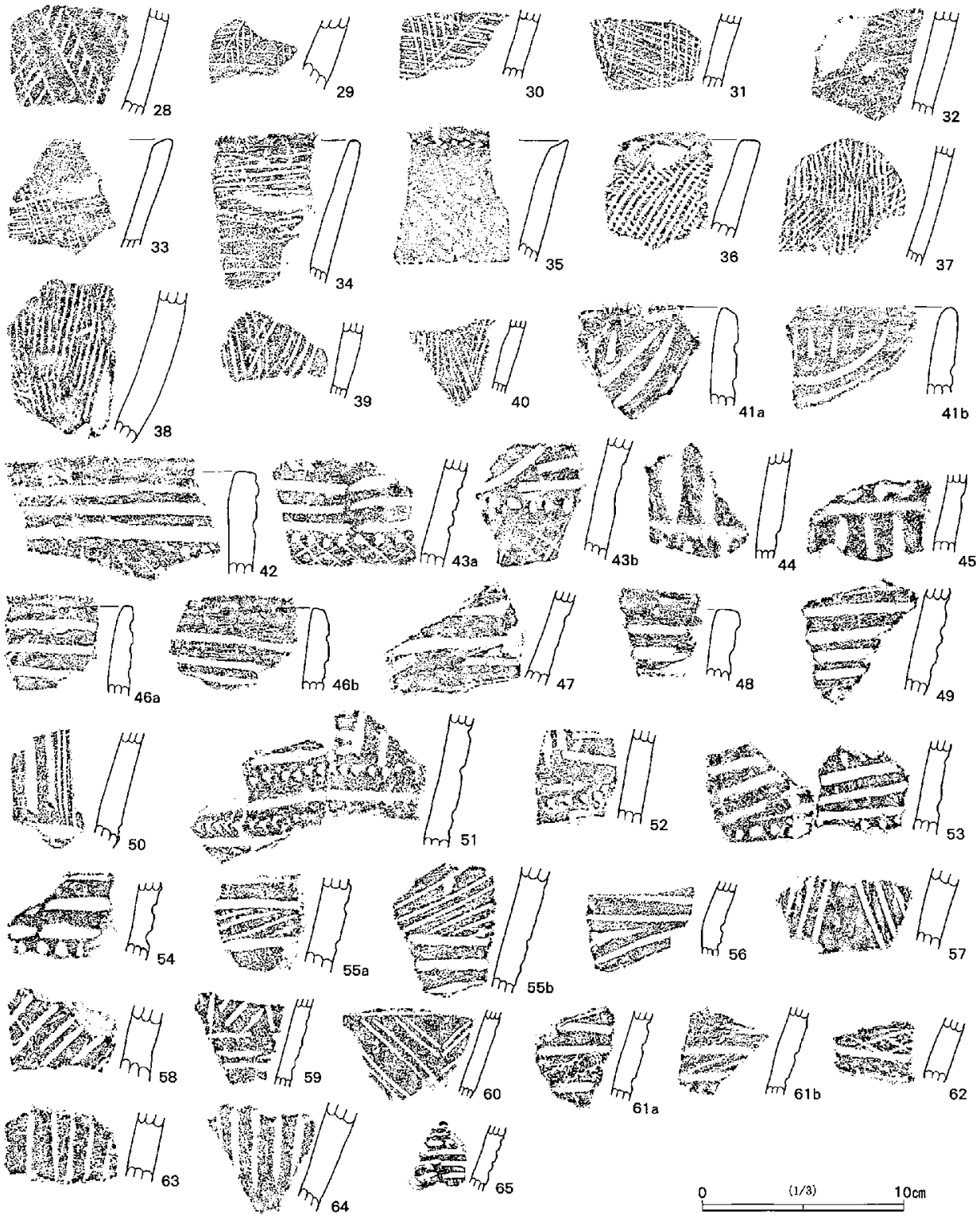
（c）田戸上層式（第55図66～70）

66～70は田戸上層式である。66は波状口縁の土器で，口唇部の内側にキザミをもつ。焼成がやや悪く，軟質で，文様が観察しにくいが，口縁部には斜沈線と波状沈線を組み合わせ文様を描く。波頂部の下には菱形状の文様意匠が描かれる。口縁部文様帯の下端はキザミをもつ低い隆線により画され，頸部以下は横位の並行沈線が重畳し，沈線間の一部には波状沈線が配されている。

67は胎土中に繊維を含む。小波状口縁の土器で，口唇部内側にキザミをもつ。やや軟質な土器で，器面はやや荒れている。波頂部の下には，拓本では分かりづらいが，結節沈線により弧状文が配される。口縁部には貝殻腹縁文が斜位に連続して施されるようである。口辺部以下には，ペン先状に加工した工具を用いた，おそらく連続刺突手法による結節沈線を横走させ，重畳させる。結節沈線間には，稲妻状の短い山形の沈線，斜位の短い弧線文を連続させる。その下には蛇行沈線を配している。

68は横位沈線間に蛇行沈線を配するものである。69も焼成のあまり良くない土器で，浅い沈線による文様が描かれる。口縁部から横位の沈線を重畳させ，間に蛇行沈線を配するものである。

70は比較的焼成良好な土器で，もう少し頸部がくびれ，胴部が張る可能性もある。おそらくキャリパー形に近い器形であり，口縁部は小波状を呈し，波頂部には突起が付く。突起は半分しか残存していないが，



第54図　グリッド出土縄文土器(2)

おそらく中央の突起の両脇に小突起が配されるものであろう。突起の周囲には，先端をペン先状に加工した工具による連続刺突文が配される。口唇部外側のやや下がった位置には，キザミをもつ低い隆帯が配され，小突起に接続する。この隆線の上下に沿って，ペン先状の工具による連続刺突文が施される。口縁部には横位の蛇行沈線が配され，口縁部下には低いキザミをもつ疑似隆線が配され，口縁部を画する。頸部には沈線により，入り組み文のような意匠が描かれる。文様が渦巻き状になる部分だけ，連続刺突手法が取られる。体部下半には斜行沈線と蛇行沈線を組み合わせた文様を描く。頸部以下の文様で，三角形状に区画された部分に，貝殻腹縁文が充填される。なお，015号炉穴から同一固体の小破片が出土した。

（ｄ）沈線文土器に伴う無文土器（第55図71～77，図版30）

71はある程度器形復元し得たものである。胎土中に微量に繊維を含むようである。やや間延びした器形であり，沈線文系土器に伴うと考えた。口唇部はしっかりした角頭状で，口縁部はわずかに外反する。補修孔をもつ。72はやや内削ぎ気味のしっかりした角頭状の口唇部をもつものである。外面はケズリによる砂粒の移動の痕跡が若干残る。内面は比較的丁寧にミガキが施される。73は，断面図では口唇部が丸頭状の部分を表現しているが，場所によっては比較的しっかりした角頭状の口唇部をもつ。外面にナデの痕跡が残る。74は焼成やや悪く，器面が荒れている。口唇部の外側がやや突き出たような形で，口縁部は若干外反する。75は二次焼成を受けているのか，やや赤化して，器面も荒れている。ややだらしない角頭状の口唇部である。76は丸頭上の口唇部で，少量の繊維を含む。77は胴部破片で，内面に擦痕が残る。繊維を少量含む。

（ｅ）底部（第53図24～27）

形態等の特徴から，沈線文系土器の底部と考え得るものである。24・25はいわゆる天狗の鼻状の尖底部である。25は特に長大である。おそらく田戸下層式であろう。26・27は微量の繊維を含むが，比較的鋭角な尖底部である。

３．早期後葉・条痕文系土器（第56・57図，第58図137）

（ａ）広義の茅山式（第56図78～99）

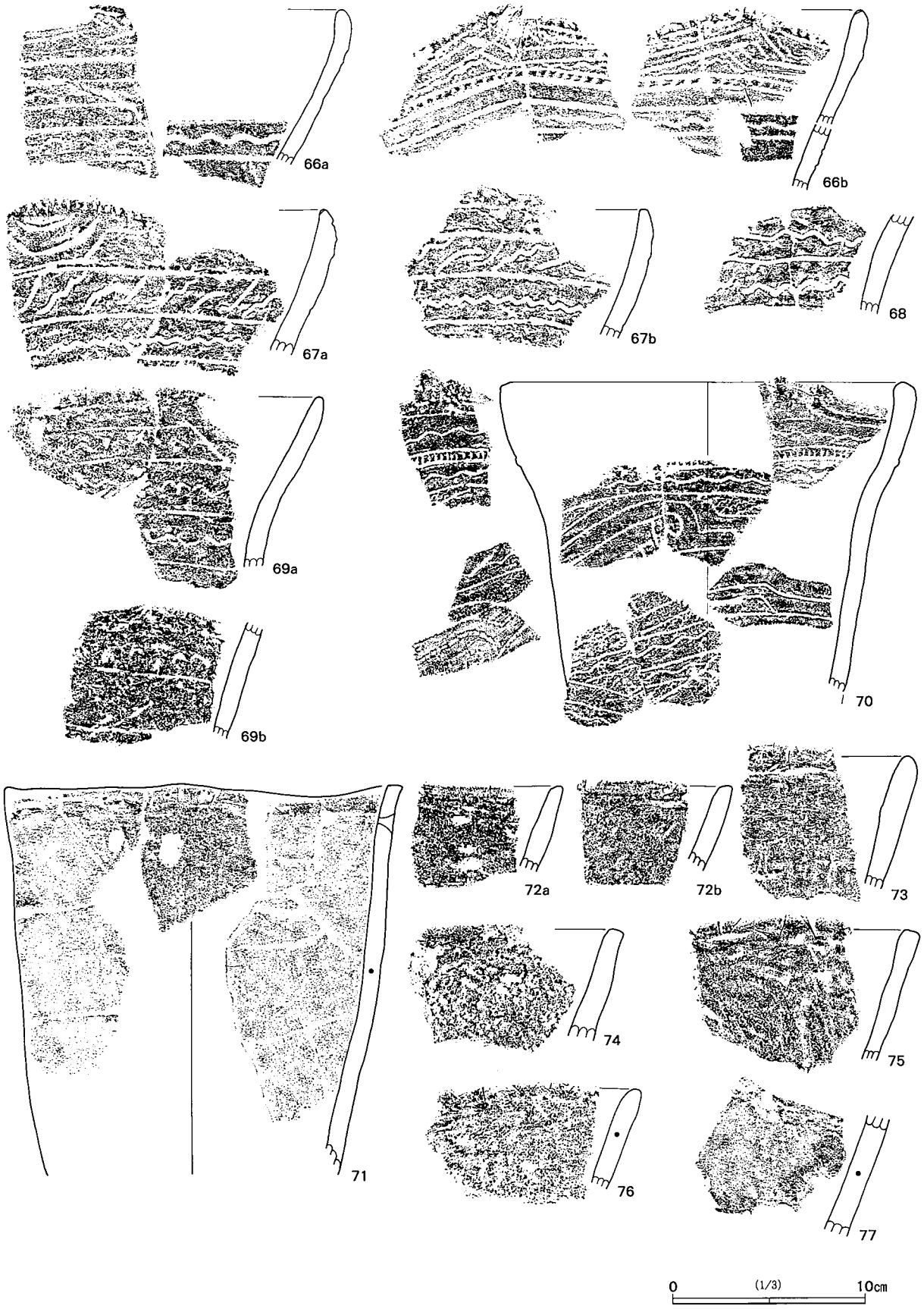
胎土に繊維を含み条痕を施す土器である。早期後葉の広義の茅山式に相当する。

78は口縁部に絡条体圧痕文をもつもので，子母口式の可能性があろう。79・80は沈線で幾何学状の区画をおこなった中に短沈線を充填するもので，野島式と判断した。両者とも比較的薄手の土器である。

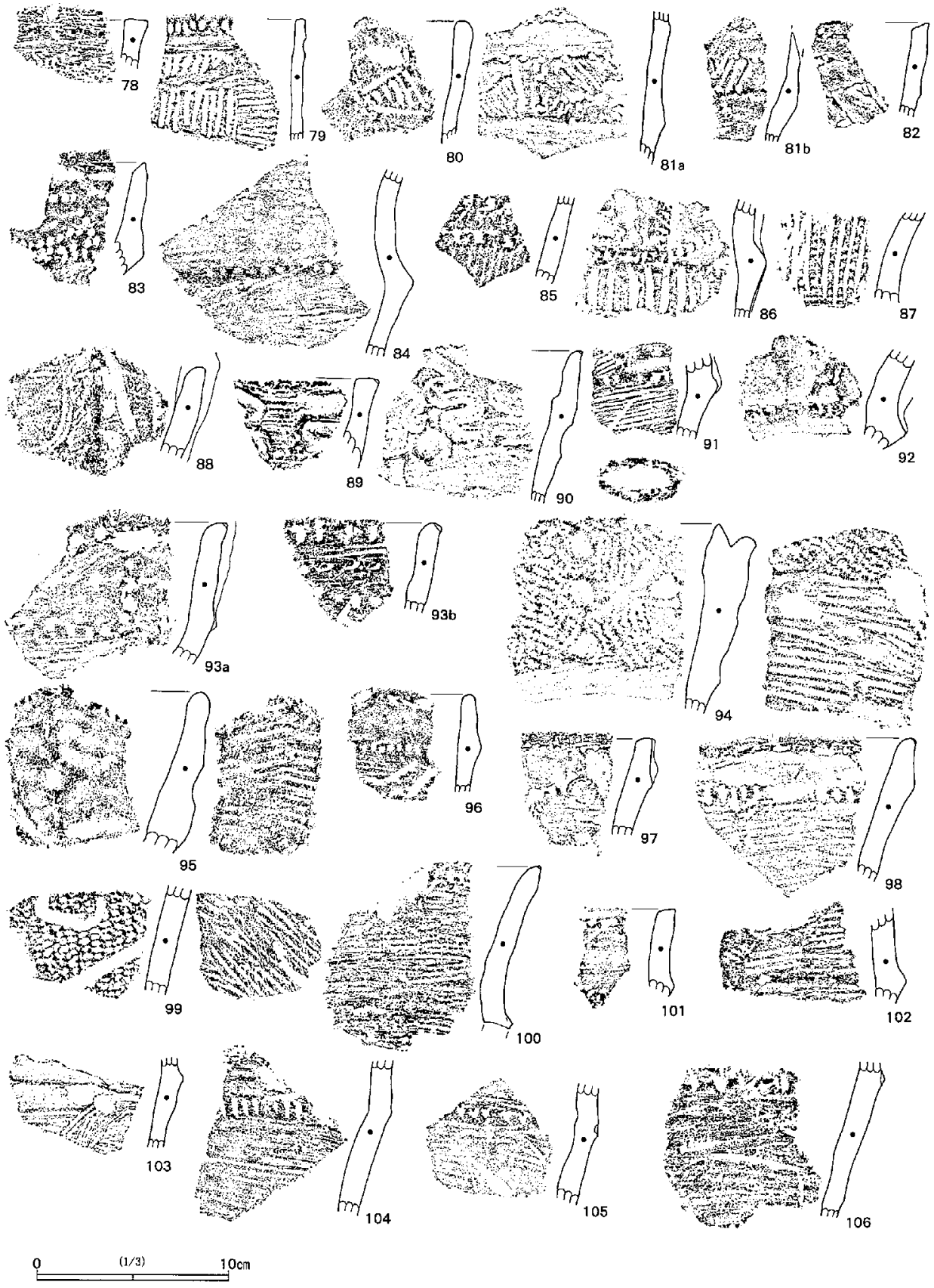
81・82は鵜ヶ島台式に相当する。81は細隆線による区画内に沈線を充填するもので，細隆線上には円形刺突が施される。82は同様の土器の口縁部で，81と同一個体かも知れない。

83～92は茅山下層式に相当するものである。83～85は，連続刺突文，押引文が施されるものである。86は連続刺突文と縦位の沈線文，87は縦位の沈線文をもつものである。88は口縁部に曲線的な沈線と，間延びした押引文をもつ。89・90は曲水状の文様をもつもので，89は指頭状工具によるいわゆる凹線文，90はヘラ状の工具を用いて文様を描いている。91にも凹線文の一部が観察できる。92は縦位の隆線と，胴部の段が接する部分に，押捺が加えられたものである。

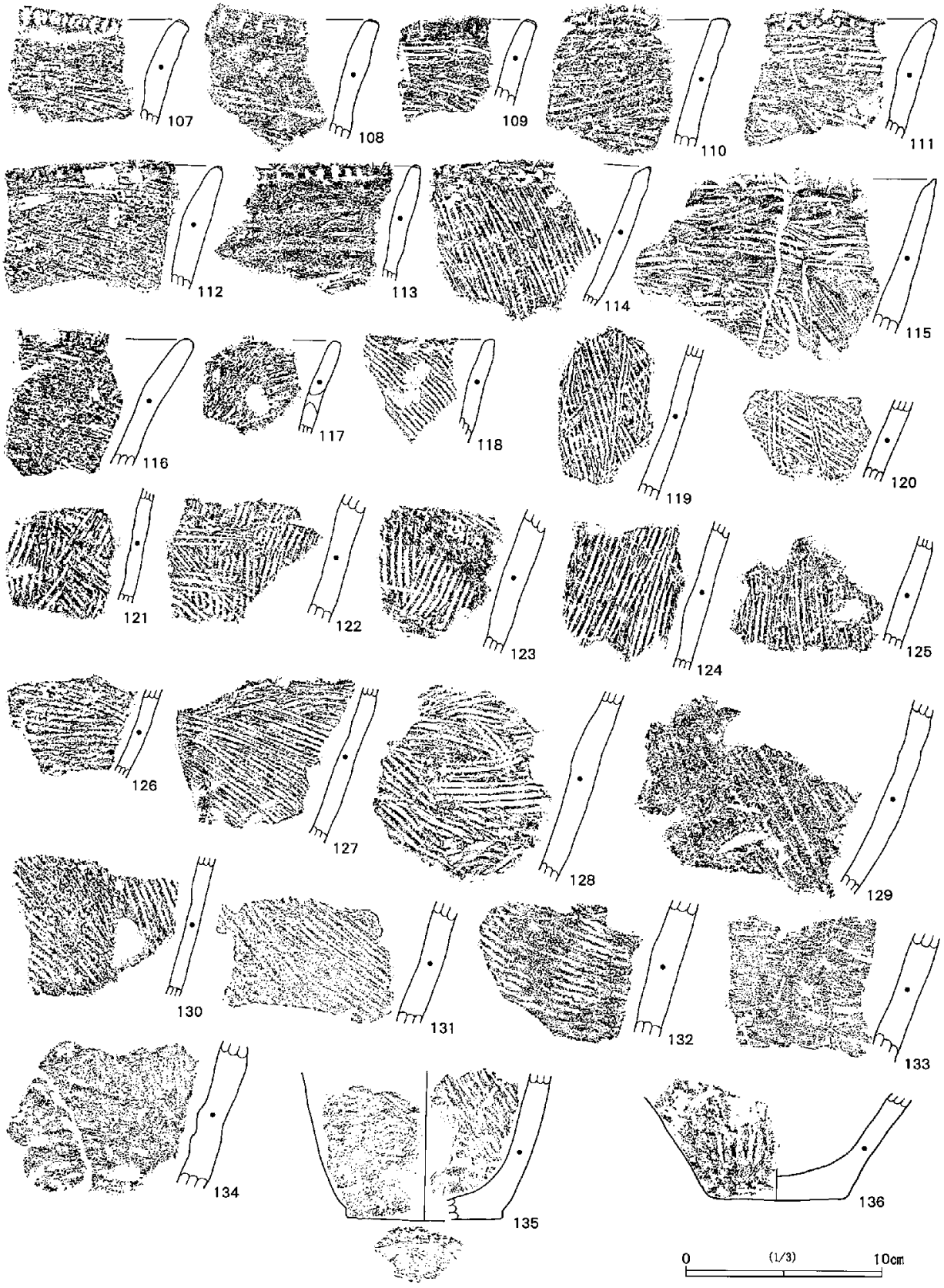
93～98は，器形上は段が明瞭でなくなり，突起も平板化し，文様が簡素化しているものである。茅山上層式の可能性があるものとしておきたい。93は狭い口縁部文様帯内に，半截竹管による刺突を横位に１条連続させる。口縁部に配される縦位の隆帯は低く，雑な刺突が施される。口縁部文様帯の下端はごく弱い段となり，竹管を下方から刺突し，横位に連続させる。94は口縁部文様帯にＲＬ単節縄文を施す。縄文は



第55図　グリッド出土縄文土器(3)



第56図　グリッド出土縄文土器(4)



第57図　グリッド出土縄文土器(5)

口縁部内面にも施される。口縁部の突起は，環状の突起が平板化したもので，口縁部文様帯内には，突起の位置に合わせて指頭状工具による押捺が縦位に3か所施される。口縁部文様帯の下端はごく弱い段となる。95は波頂部から下に伸びる低い隆帯上の中央に，1か所押捺が施される。96は口縁部の狭い無文部が，キザミを伴う弱い段によって画され，以下に押引文による文様を配している。97・98も狭い口縁部無文帯をキザミをもつ隆線により画するものである。97は口縁部文様帯内に，ごく短い縦位の隆線をもつ。

99は地文縄文上に沈線による文様が描かれる。内面に条痕をもつことから，早期後葉であろうが，文様構成はよくわからない。

（b）茅山式に伴う条痕文系土器（第56図100～106，第57図，図版31）

広義の茅山式に伴うと考え得る，条痕が主で，文様をほとんどもたない土器を一括する。一部早期中葉まで遡る可能性がある土器がある。

100～106は，広義の茅山式に伴う文様要素の少ない土器のうち，段が明瞭なものである。おそらく茅山下層式以前の土器であろう。102は口唇部にキザミをもつ。101・104～106は段の部分にキザミをもつ。

第57図107～118は，広義の茅山式に伴う文様要素の少ない土器のうち，段を持たないものである。107～114・116は口唇部にキザミをもつ。口唇部形態は角頭状に近いものから，尖頭状に近いものまであり，形態によってキザミを施す位置が若干変わる。115・117・118は口唇部にキザミをもたないものである。117は波状口縁の土器で補修孔をもつ。118はしっかりしたやや内削ぎ気味の角頭状の口唇部で，胎土中の繊維少なく，内面は擦痕が残る。あるいは早期中葉まで遡る可能性もあろう。

119～132は外面に条痕をもつ胴部破片である。119・120は内面にヘラ状工具によるケズリのような痕跡が残るもので，繊維の混入も少ない。早期中葉まで遡る可能性もある。121～131は，外面と同一工具による条痕が内面にも施されるものである。131・132は内面の条痕がナデ消されている。133～134は外面に条痕をもたないものである。134の外面はナデの痕跡が凹線状に残る。内面にはナデ消された条痕が残る。

135・136は底部破片である。135は底面の外側がやや突き出す平底の底部である。136は底面の中央が若干外側に張り出しており，不安定である。

（c）早期末葉の可能性がある土器（第58図137，図版31）

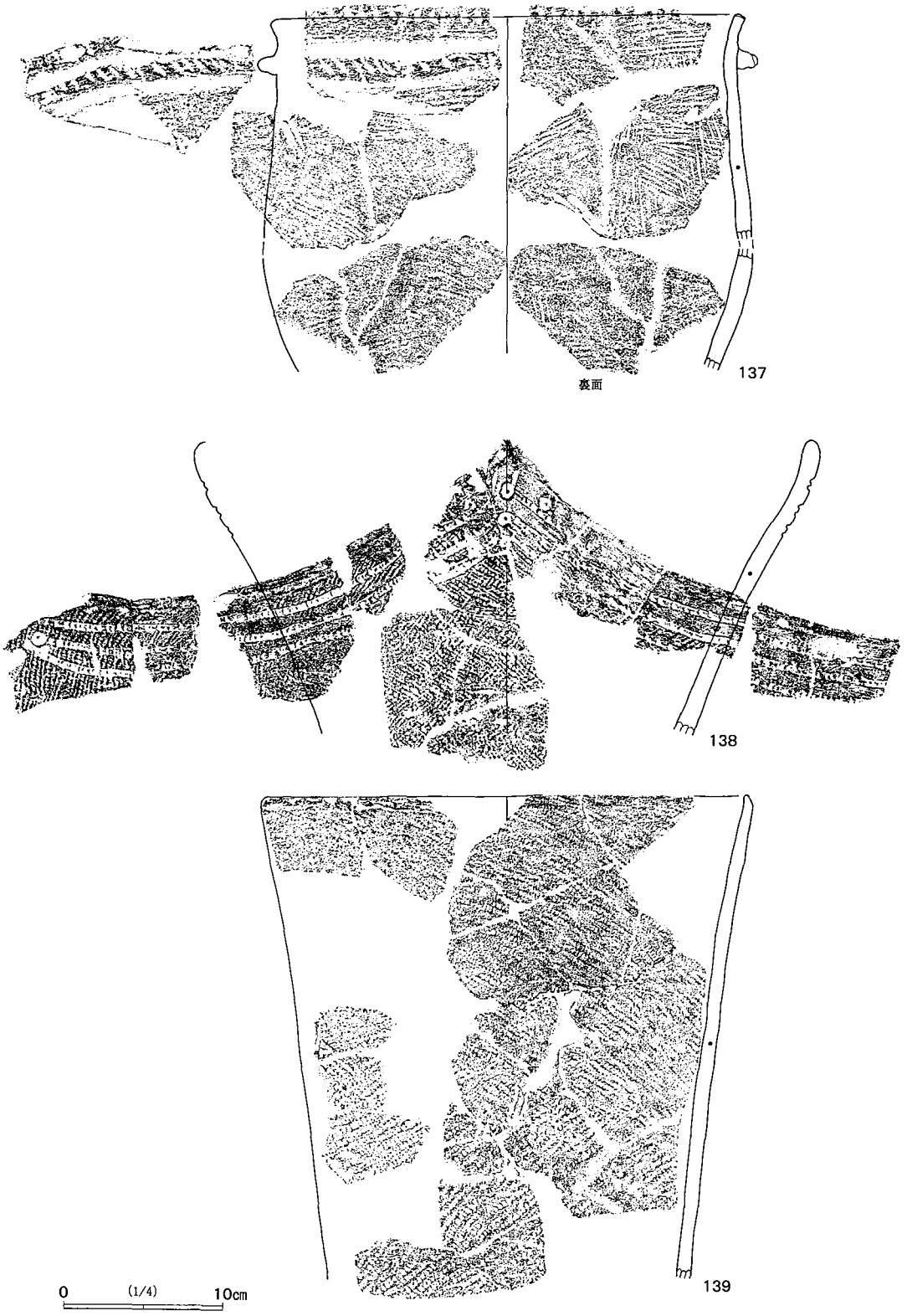
137は図上で器形復元が可能であった土器である。破片ごとのゆがみが大きく，全体のプロポーションは多分に推測を含むが，やや体下半部が張るような形で図上復元した。口縁部は若干外反し，口唇上にはキザミが施される。口縁部には，キザミを施した一条の隆帯が巡る。隆帯はかなり高く，器面から突き出すようである。外面の口縁部付近には横方向の条痕が残るが，体部の条痕は明瞭でない。内面には比較的明瞭に条痕を残す。文様要素が少なくはっきりしないが，隆帯の在り方は広義の茅山式には見られないものであり，茅山式以降の早期末葉の土器の可能性があろう。

Ⅱ群　前期の土器

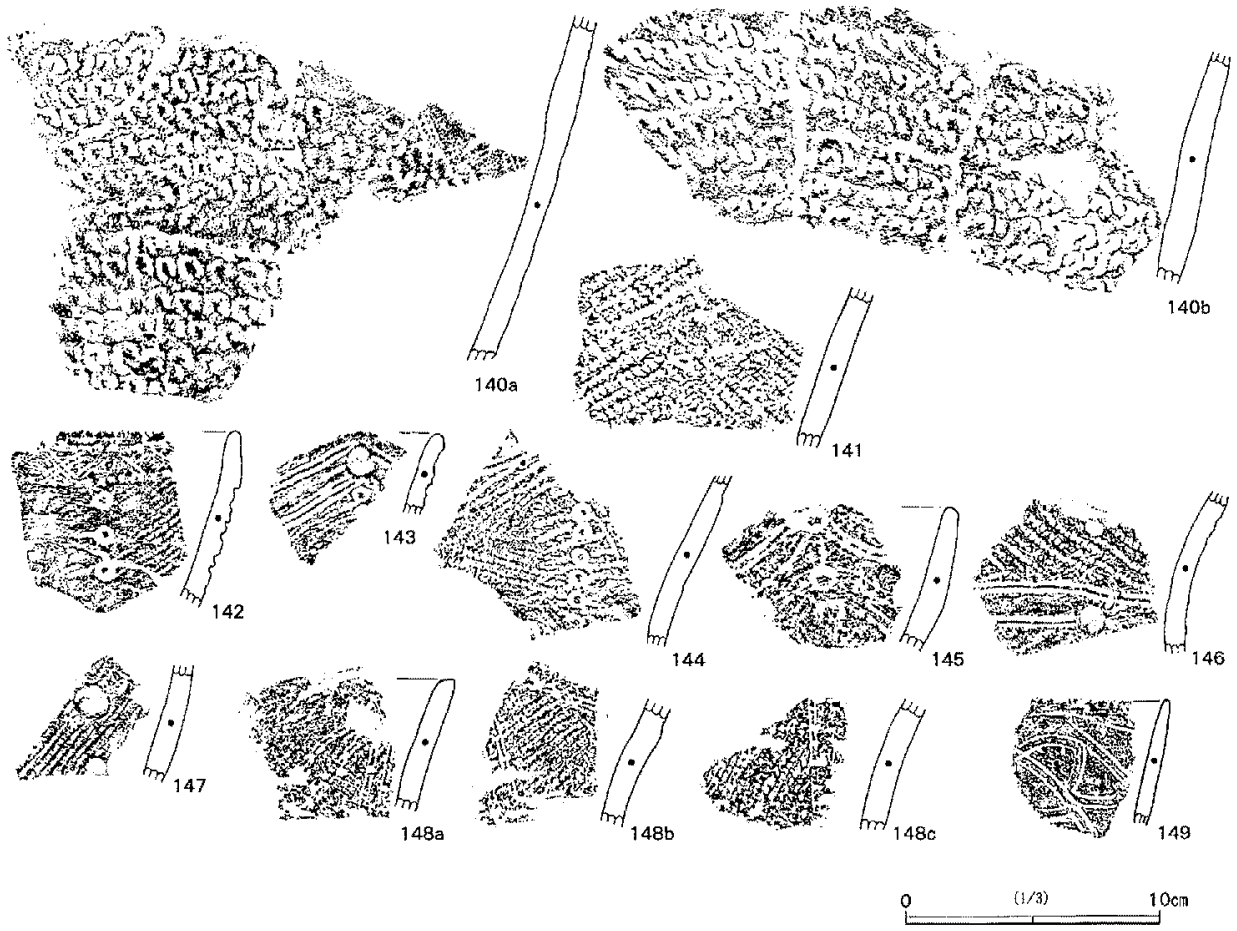
1．前期前葉の繊維土器（第58図138・139，第59図，図版31）

胎土中に繊維を含むいわゆる繊維土器である。

140はループ文をもつ土器で，おそらく関山式であろう。140aの破片の右上には，棒状工具による刺突列と竹管文が観察できる。141は異なった縄文原体を用いて，羽状効果を狙ったので，おそらく関山式であろう。138・139・142～149は，黒浜式に相当しよう。138は図上で器形復元したものである。焼成が不



第58図　グリッド出土縄文土器(6)



第59図　グリッド出土縄文土器(7)

良で，器面は荒れている。波状口縁の土器で，波頂部は鋭く尖る。波頂部下に竹管による円形刺突が施される。波頂部間を繋ぐように口縁に沿って，押し引き手法によるいわゆる爪形文が3条配される。地文には縄文が施される。器面が荒れているため判然としないが，おそらく異なった原体を用いた羽状縄文であろう。

139も図上で復元した土器である。縄文のみの土器で，口縁部の内側がナデられ，やや内折ぎみになる。体部上半にはＲＬ単節縄文，体下半部にはＬＲ単節縄文が施される。

142は口縁上端部に2条の爪形文が配され，その間に半截竹管による平行沈線で格子目状の文様が描かれる。口縁部には円形竹管文も配される。地文はＬＲ単節縄文である。

143は波状口縁の土器で，波頂部下に指頭状工具による円形の押捺と，円形竹管文が配される。波頂部間を繋ぐように，口縁上端部に半截竹管による平行沈線が2条巡る。144は143と同一個体の可能性がある土器で，地文縄文上に平行沈線の一部と縦位に連続する円形竹管文が観察できる。地文の縄文は，ＬＲ原体2本を左撚りにした正反の合と思われるものと，附加条縄文か。部分的に原体側面圧痕のように見える部分がある。

145は口辺部に半截竹管による平行沈線文を用いる土器で，波頂部下には円形竹管文を配し，円形竹管文間は単沈線で繋ぐ。146は地文のＲＬ単節縄文上に，横位の平行沈線を配し，円形竹管文，円形の押捺をもつ。147は地文に0段多条のＬＲ単節縄文を施し，円形の押捺を縦位に配する。148は押し引き手法に

よるやや間延びした爪形文で文様を構成する土器で，地文はおそらくＬＲ単節縄文である。149は半截竹管による平行沈線で雑な文様を描くものである。地文を欠く。

２．前期後葉の土器（第60図～第63図）

（ａ）諸磯ａ式とこれに類した土器（第60図150～167）

150～152は肋骨文とこれに類した文様をもつものである。150は口唇部にキザミを有し，口縁上端部にはおそらく竹管を束ねた工具による，押し引き状の結節沈線が配される。波頂部から竹管による円形刺突列が垂下し，これを中心に肋骨文類似の文様が描かれる。波長部下に１か所，焼成前に穿孔がなされている。151も同様の土器で，波頂部下に焼成前の穿孔がなされる。152も垂下する円形刺突列を繋ぐように肋骨文が描かれる。おそらく口縁上端部に爪形文が配される。

153～157は半截竹管の内面を用いた平行沈線で文様を描くものである。153は垂下する円形刺突列が存在する。154は同様な垂下文を，沈線で用いたものと同じおそらく半截竹管を束ねた工具を用いて描いている。155は縦位の単沈線を配する。156・157には波状の文様が描かれる。157は体部に縄文が施される。

158は半截竹管による平行沈線で，鋸歯状の文様を描き，円形刺突文が配される。拓本では見えにくいが，沈線間は部分的に細かい爪形文が施される。159・160は細かい爪形文により木葉文が描かれるものである。159は縄文を持つ。161は口縁部に爪形文が配されるものである。

162は肋骨文が崩れたような文様構成で，口縁端部の爪形文はやや太い。縦位に沈線を伴わない爪形文列が垂下する。163・164は162と同様の沈線を伴わない爪形文列をもつものである。164は162と似たような文様構成を取るが，地文にはＲ撚糸文を持ち，口縁上端部に細かい結節沈線を持つことが異なる。口縁上端部の結節沈線は，部分的にロッキング手法を取る。この土器は浮島Ｉ式の範疇で理解した方がよさそうである。166は沈線を主文様とする土器で，口縁部にキザミをもつ低い隆帯をもち，隆帯の上下には爪形文が配される。166は地文にＲ撚糸文をもち，半截竹管による木葉文類似の文様が描かれる。浮島Ｉ式的な要素が強い。167は幅広い口辺部に，半截竹管による平行沈線と波状文が描かれる。波状文は一部鋸歯状になる。

（ｂ）諸磯ｂ式とこれに類した土器（第61図，図版31）

168～175は爪形文が卓越するものである。168・169は木葉文類似の文様をもつが，爪形文がやや粗大であることから，諸磯ｂ式と判断した。170～175は爪形文がやや密に施されるものである。170・171は口縁部に爪形文が密に重畳する。173は口縁部に縦位の短い隆帯をもつものである。爪形文はやや細いが，口縁部に重畳する。

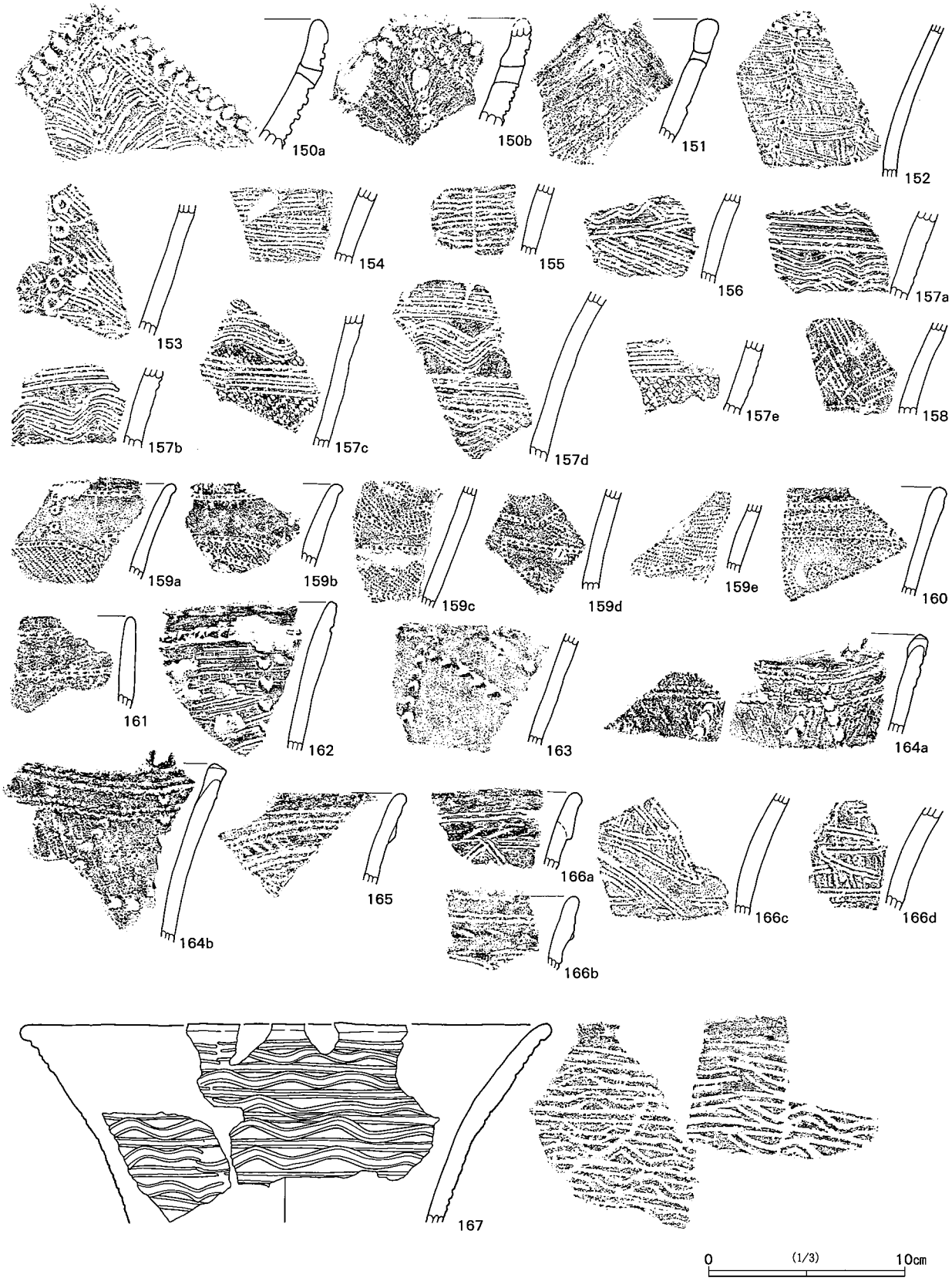
176～179は半截竹管による平行沈線が主文様となるものである。176は，諸磯ｂ式に見られる板状の波状口縁に類似したものであろう。178は体部文様帯の下端を３条の爪形文で画する。

180は浮線文の土器である。地文はおそらくＬＲ単節縄文である。浮線上にはキザミが施される。

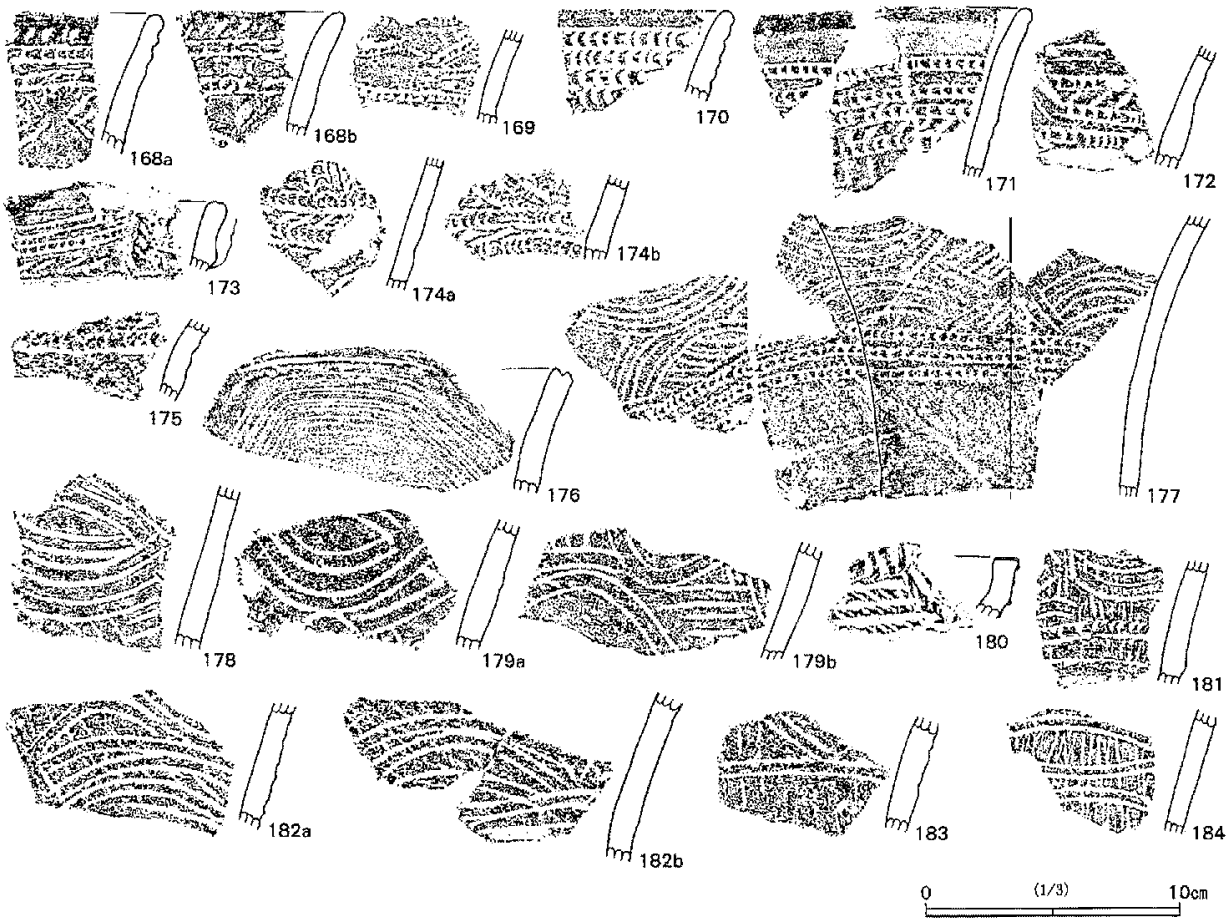
181～184は地文に撚糸文をもつものである。181は半截竹管による平行沈線と，爪形文が観察できる。182～184は半裁竹管による平行沈線により，曲線的な文様が描かれている。地文の撚糸文は183が不明で，他はおそらくＲの原体を用いたものである。184は文様構成がやや浮島式的とも見えるが，他の土器は地文以外は諸磯ｂ式と大きな違いは見出せない。

（ｃ）浮島式・興津式とその系譜上の土器（第62・63図，図版31）

185・186は変形爪形文とこれに類した文様をもつもので，浮島Ⅱ式に相当しよう。185は幅広の口辺部



第60図　グリッド出土縄文土器(8)



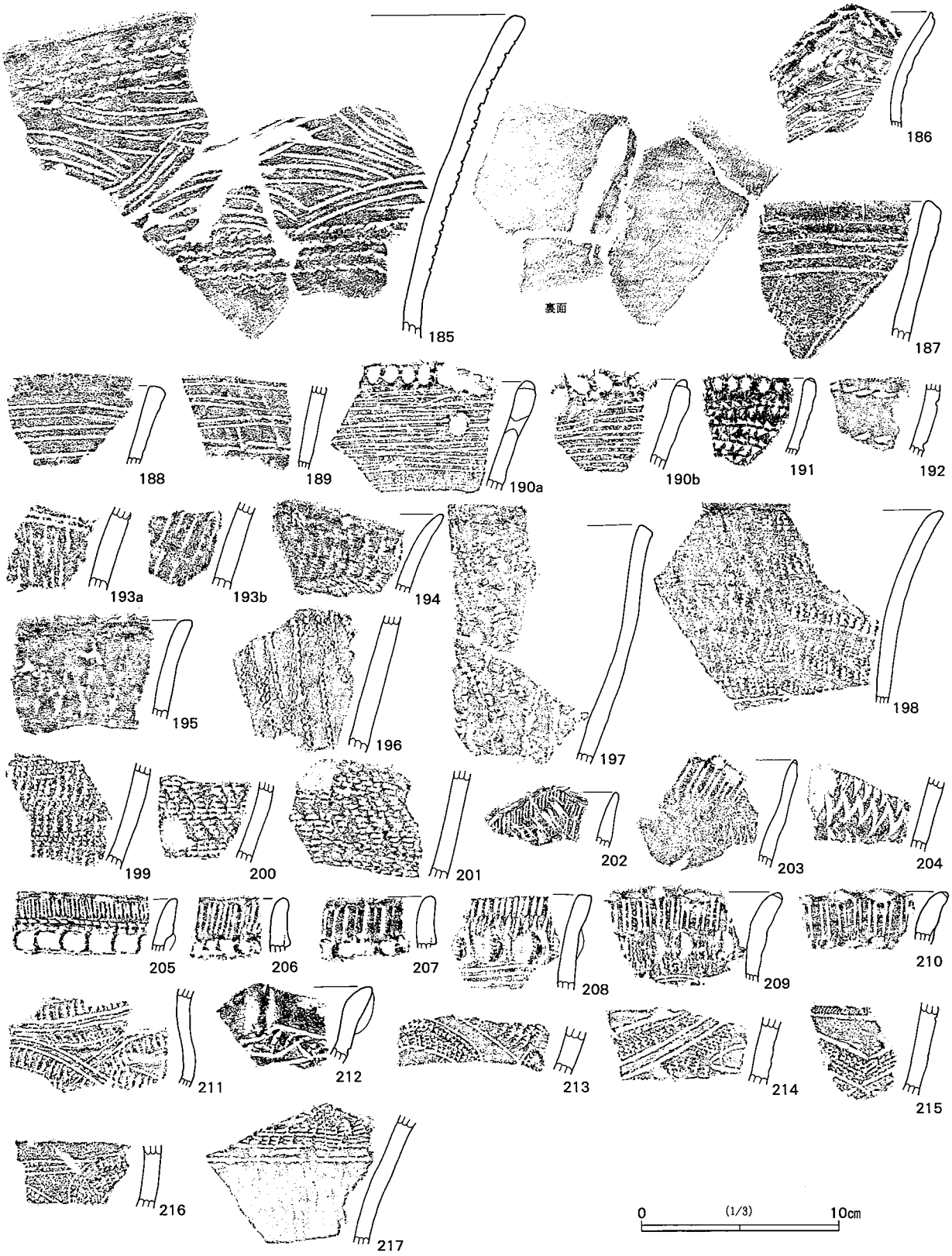
第61図　グリッド出土縄文土器(9)

文様帯の上下に，半截竹管のロッキング手法を用いた変形爪形文に準じた文様を配する。口辺部文様帯内は半截竹管による沈線で文様を描く。土器の内面に，器面乾燥以前に指頭によって深くなぞった痕が残る。この位置とほぼ対応する外面には，焼成以前につけられた「人」字形の溝状の痕跡がある。この外面の溝状の痕跡は，土器の他の面と色調が明らかに違い，もともと軽く接着されていた粘土紐が焼成後に剥落したものと思う。土器の製作の際，文様を施文した後，土器がまだ乾ききっていないタイミングで，土器の外面に粘土紐を当て具のように用いて，土器内面を指頭により強くなぞった，というような行為が想定できよう。あまり見たことがない事例であり，やや詳細に記した。186は口唇部に斜位の刺突を施し，キザミ状にする。口縁部に変形爪形文，以下に短沈線による文様を配する。

187～190は地文を欠き，半截竹管による平行沈線で文様を描くものであり，概ね浮島式の範疇と考え得るものである。190は口唇部にキザミをもち，やや密に沈線を引くものである。191は三角文をもつ土器で，浮島Ⅲ式以降に位置付けられる。192は刺突列，193は短沈線をもつ土器で浮島式の範疇と判断した。

194～201は肋脈のある貝殻を用いた波状貝殻文をもつ土器である。194～197はやや粗な波状貝殻文で，194・195・197は口縁部以下，器面全体に波状貝殻文を施すものであろう。いずれもかなり大きな貝殻を用いている。198～202は密に波状貝殻文を施すものである。198は器面全体に波状貝殻文を施すものである。201は土器片の下端に，半截竹管による爪形文が配されており，興津Ⅱ式の可能性もある。

202～204は肋脈のない貝殻を用いた波状貝殻文をもつ土器である。202は口縁端部に短い条線帯をもつ



第62図　グリッド出土縄文土器(10)

ことから，概ね浮島式の後半に相当しよう。203は粗雑な断面尖頭状の口唇部で，やや長い条線帯をもつ。口唇部にはキザミが間隔を空けて施される。少なくとも興津式以降の土器であろう。

205～210は口縁部条線帯と凹凸文をもつ土器で，概ね興津式と考え得る。205は条線帯の下に爪形文が配され，興津Ⅰ式であろう。209～210は貝殻により凹凸文が施される。

211～217はいわゆる磨消貝殻文をもつ土器で，興津Ⅱ式に相当する。211は平行沈線による区画をもつもので，212～217は単沈線による区画である。212は口縁部破片で，波頂部下に縦長のコブをもつ。

218～232は口縁部条線帯と沈線よる文様をもつもので，浮島式の後半から興津式の土器であろう。218～223は口縁部条線帯以下に，横位の沈線をもつ。223はまばらなキザミをもつ口唇部に，やや長い口縁部条線帯をもち，以下に半截竹管による横位沈線とゆるい波状沈線を配す。224～227は同様の土器の胴部破片である。228は口縁部条線帯下に横位と縦位の沈線をもち，229～232は口縁部条線帯下に縦位方向の沈線をもつものである。

233～238は櫛歯状工具による条線文をもつもので，概ね興津式以降に相当しよう。233は口縁部条線帯をもつ。

239・240は口縁部条線帯をもち，以下が無文のものである。

241は輪積痕上に指頭状工具によるキザミをもつが，凹凸文的ではなく，部分的に三角陰刻のように見える。口縁部条線帯はごく短い。242は輪積痕のみを残す土器である。

243～245は口唇部にまばらなキザミをもつ土器である。243は外面に擦痕状の痕跡が残る。244は半截竹管による浅い短沈線が存在する。245は図上で器形復元した土器である。やや内湾する口縁をもつ寸胴な器形で，外面は擦痕を残し，縦位沈線による雑な文様をもつ。浮島・興津式の系譜上の土器であろうが，かなり逸脱した土器と言わざるを得ず，前期末葉まで下る可能性もあろう。

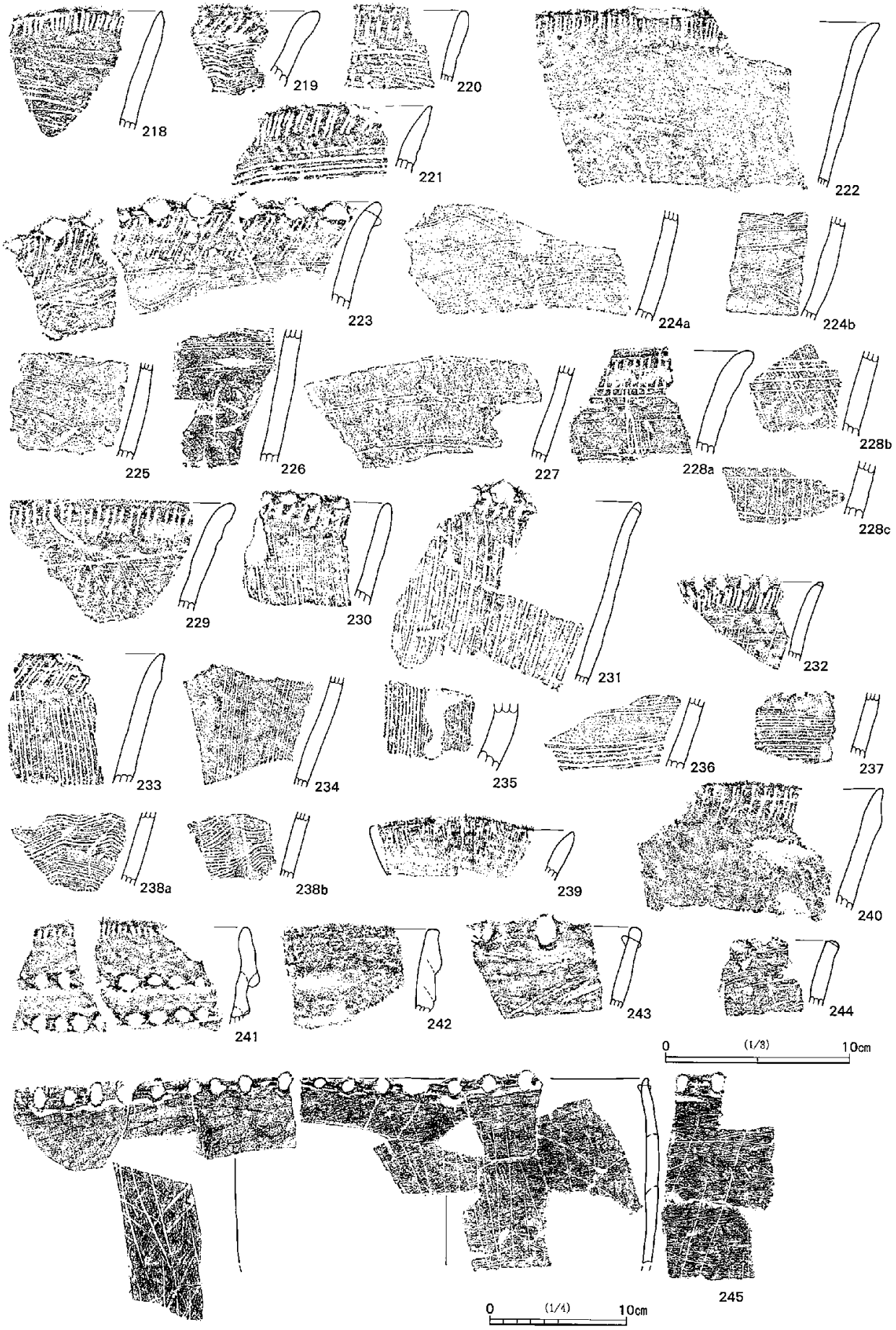
3．前期末葉の土器（第64図）

前期末葉の多様な土器を一括する。246は地文縄文上に縦位の結節浮線文を配しており，十三菩提式であろう。247～250は十三菩提式に併行する集合条線文系の土器と考え得るものである。247・248は櫛歯状工具による条線文で，大ぶりなレンズ状の意匠を描く。249は単沈線で同様の意匠を描くものである。

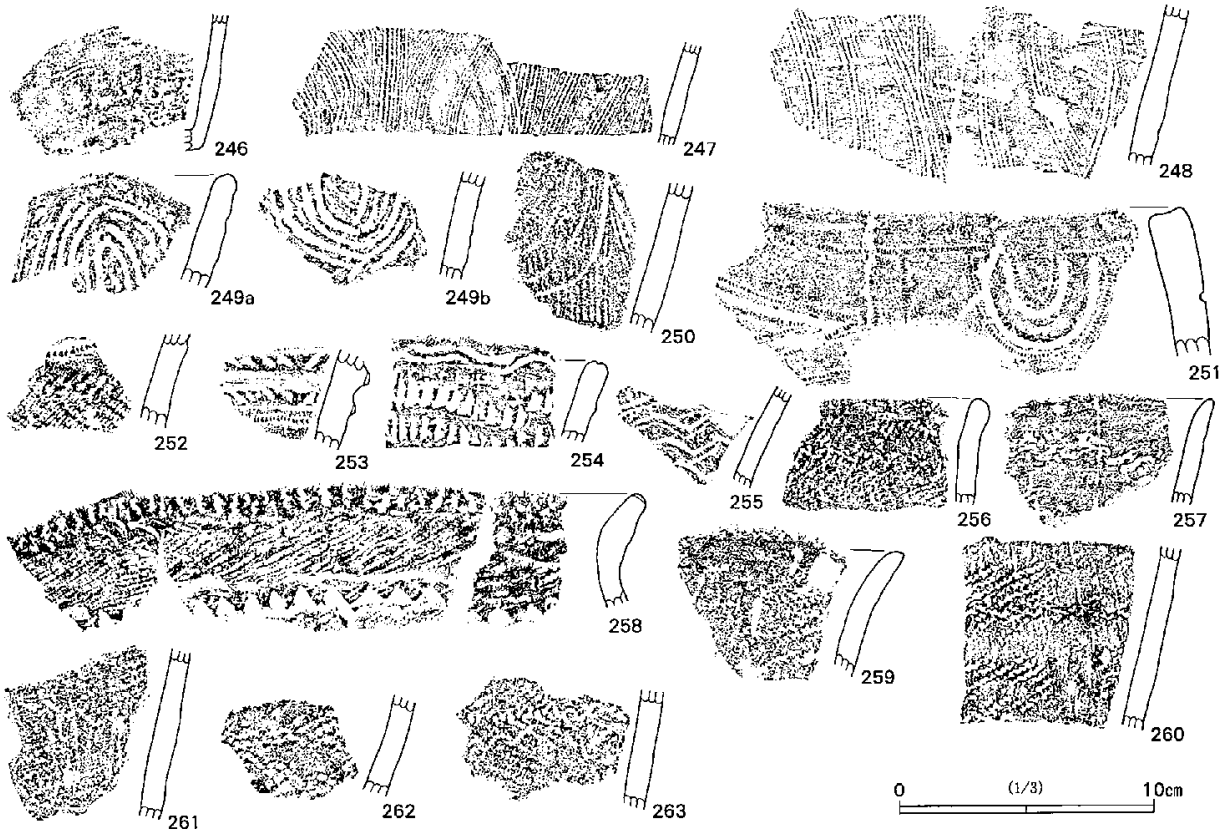
251～253はごく繊細な結節浮線文をもつもので，大木6式系の土器と判断した。251は，口縁部文様帯の区画に結節浮線文を用いるとともに，口縁部文様帯内に沈線で三角形やU字状の意匠を描き，この沈線の縁辺に沿って結節浮線文を配している。

254・255は半截竹管による鋸歯状の文様をもつものである。254は口唇上に鋸歯状文を持ち，外面には施文具不明のキザミ列が配される。部分的に三角文のように見える部分もあり，貝殻を用いた文様である可能性もある。

256～263は全面縄文施文系の土器で，いわゆる「古和田台式」である[2]。256・257は結節縄文を用いた土器の口縁部である。258は複合口縁の肥厚部下端にヘラによる三角陰刻文をもつものである。口唇上には半截竹管による連続刺突を施す。259は結節縄文を用いず，口唇上にも縄文を施す土器である。260～263は結節縄文を用いた土器の胴部破片である。



第63図　グリッド出土縄文土器(11)



第64図　グリッド出土縄文土器(12)

Ⅲ群　中期の土器（第65図～第68図）

1．中期初頭の土器（第65図264～273，図版31）

264は頸部に横位の沈線を引き，以下に結節縄文を縦位に施すもので，五領ヶ台Ⅰ式に相当しよう。265・266も結節縄文を胴部にもつもので，五領ヶ台式の胴部と判断できる。266は縄文の施文方向を変えることで羽状縄文状にするようである。

267～269は東関東に分布の主体をおく，八辺式[3]に相当するものである。267は加工した竹管を用いた三角状を呈する刺突列を，口唇上と口縁上端部に横位に施し，その下部を横位沈線を画す。さらにその下部には同様の工具を用いて，やや縦長の三角状の刺突を「ハ」の字状に刺突し，横位に連続させる。八辺式Ⅰ期に相当しよう。268は口縁部の横位沈線間に三角形陰刻文が交互に施されている。八辺式Ⅱ期に相当しよう。269はやや外に開く口縁部で，口唇部は内側に折り返し状になる。口唇上にはキザミが施される。口縁部無文帯下がキザミをもつ隆線により画され，以下に横位沈線と，竹管による連続刺突が横走する。八辺式Ⅱ期からⅢ期に相当しよう。

270は単沈線により文様を構成する土器で，大木７ａ式に近似した土器であろう。271～273は中期初頭の粗製的な土器である。271は肥厚する口縁部無文帯下に沈線が引かれるものである。胴部はＬＲ単節縄文を縦位に施す。272は複合口縁の土器で，ＬＲ単節縄文を口縁部は横位，胴部は縦位に施文する。五領ヶ台式のなかでもやや新しい部分か。273は八辺式に伴う粗製的な土器で，やや外側に開く口縁部で，頸部がくびれるものである。頸部下には小突起が付く可能性がある。

第65図　グリッド出土縄文土器(13)

2．中期前葉から中葉の土器（第65図274～第67図320）

（a）五領ヶ台式直後（第65図274）

274はいわゆる圭頭状突起をもち，三角陰刻と角押文が特徴的な土器である。波頂部下には隆線による渦巻き文が配され，口縁部文様帯内は半弧状の意匠が連続するようである。大木7b式の影響が強い，いわゆる「法正尻タイプ」であろう[4]。

（b）阿玉台式前半（第65図275～287，図版30）

275・276は阿玉台Ⅰa式に相当する土器である。275はおそらく双頭状の小突起をもつ波状口縁の土器で，口縁部文様は非対称の構成を取り，口縁部文様帯の区画がはっきりしない部分がある。竹管による角押文で文様が描かれるが，部分的に円形刺突や，沈線に置き換わっている。阿玉台Ⅰa式の範疇にとどまると思うが，口唇上への施文などは，阿玉台Ⅰb式的な要素と言えよう。276は口縁上端部に角押文を配する土器である。

277～279は阿玉台Ⅰb式に相当するものである。277は波状口縁の波頂部で，隆線による渦巻き文が配される。278は口縁部に粘土棒を芯にしたキザミをもつ縦位の貼り付けをもつ。279は区画隆線に沿って，ヘラ状工具による有節沈線を引くものである。

280・281・283・285は阿玉台Ⅱ式である。280・281・285は平行する2列1組の結節沈線，283は半截竹管による波状の平行沈線をもつものである。286は口縁部に貝殻復縁による連続したキザミを施すもので，阿玉台Ⅱ式に伴うものであろう。287は口縁部が若干肥厚し，内面に弱い稜を持つことから，概ね阿玉台Ⅱ式に伴うと考え得る無文土器である。282・284は概ね阿玉台Ⅱ式相当の胴部破片である。

（c）阿玉台式後半（第66図）

288は口縁部区画内を波状の単沈線で充填する。阿玉台Ⅱ式後半からⅢ式の土器であろう。289は口縁部文様帯内を半截竹管による平行沈線で埋める。口唇部の肥厚した外面には縄文が施されるようである。阿玉台Ⅲ式以降の土器である。

290～298は爪形文をもつ土器で，阿玉台Ⅲ式に相当する。290・294は口縁部文様帯の区画隆線に沿って爪形文が配される。291～293は波状口縁の波頂部で，垂下する隆線や突起の脇に沿って爪形文が施される。295・297は爪形文に沿って沈線が引かれるものである。296は条線をもつものである。298は爪形文と波状沈線が併用されている。

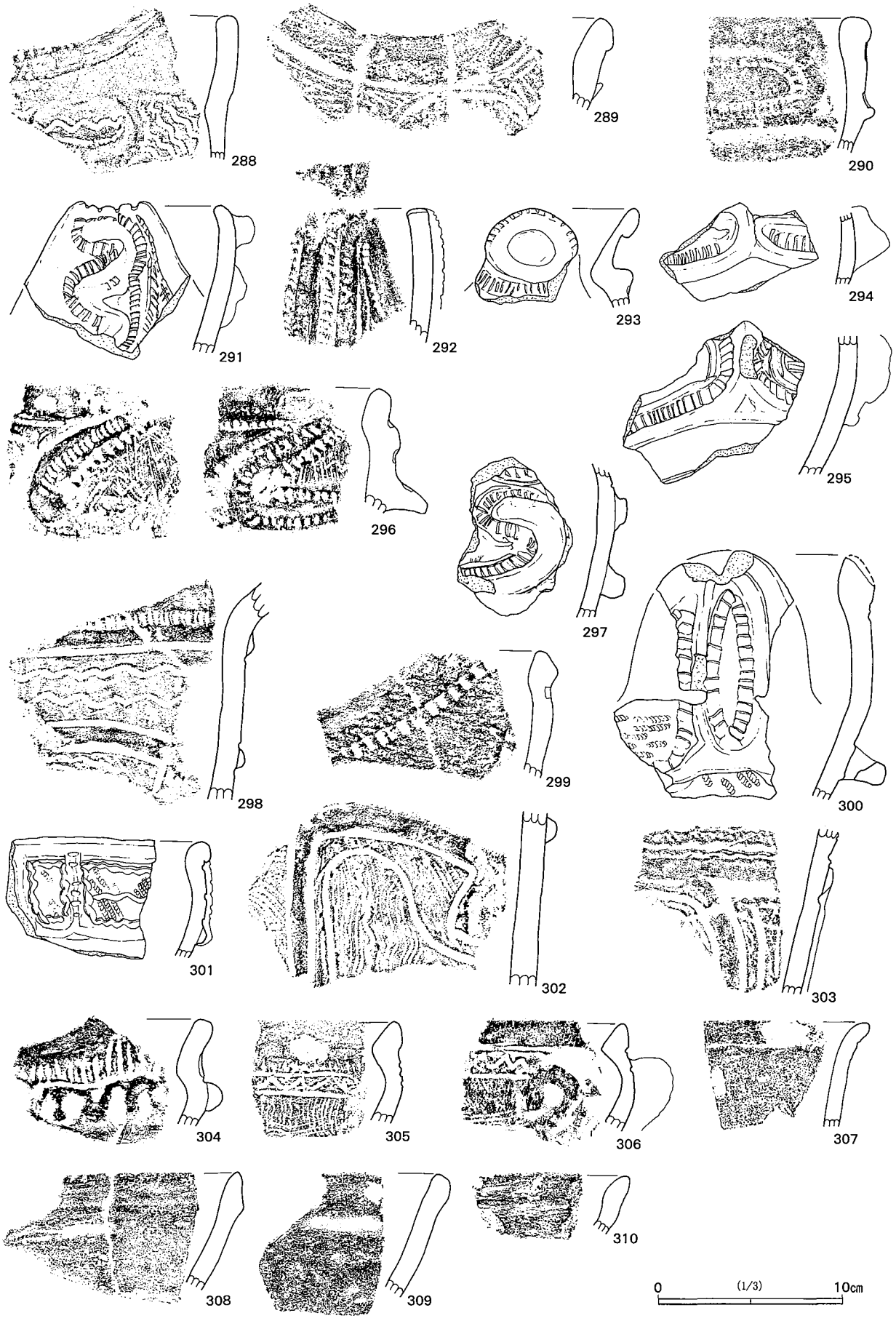
299・300は地文に縄文をもち，爪形文をもつものである。阿玉台Ⅳ式に相当するであろう。301～303は沈線を主文様とし，阿玉台Ⅳ式に相当するものである。301・303は縄文地文で，302は条線を地文とする。304～306も概ね阿玉台Ⅳ式に併行するものと考えられ，304は口縁部に縦位の単沈線を引き，以下に指頭状工具による押厚がなされた隆帯が配される。305は条線地文で，口縁部に横位平行沈線間に波状沈線を引く。306はよく似た土器であるが，地文は不明で，口縁部に平行沈線間の波状沈線を配し，小さな渦巻き状の突起をもつ。

307～310は，無文の土器で，概ね阿玉台式の後半に伴うと判断したものである。

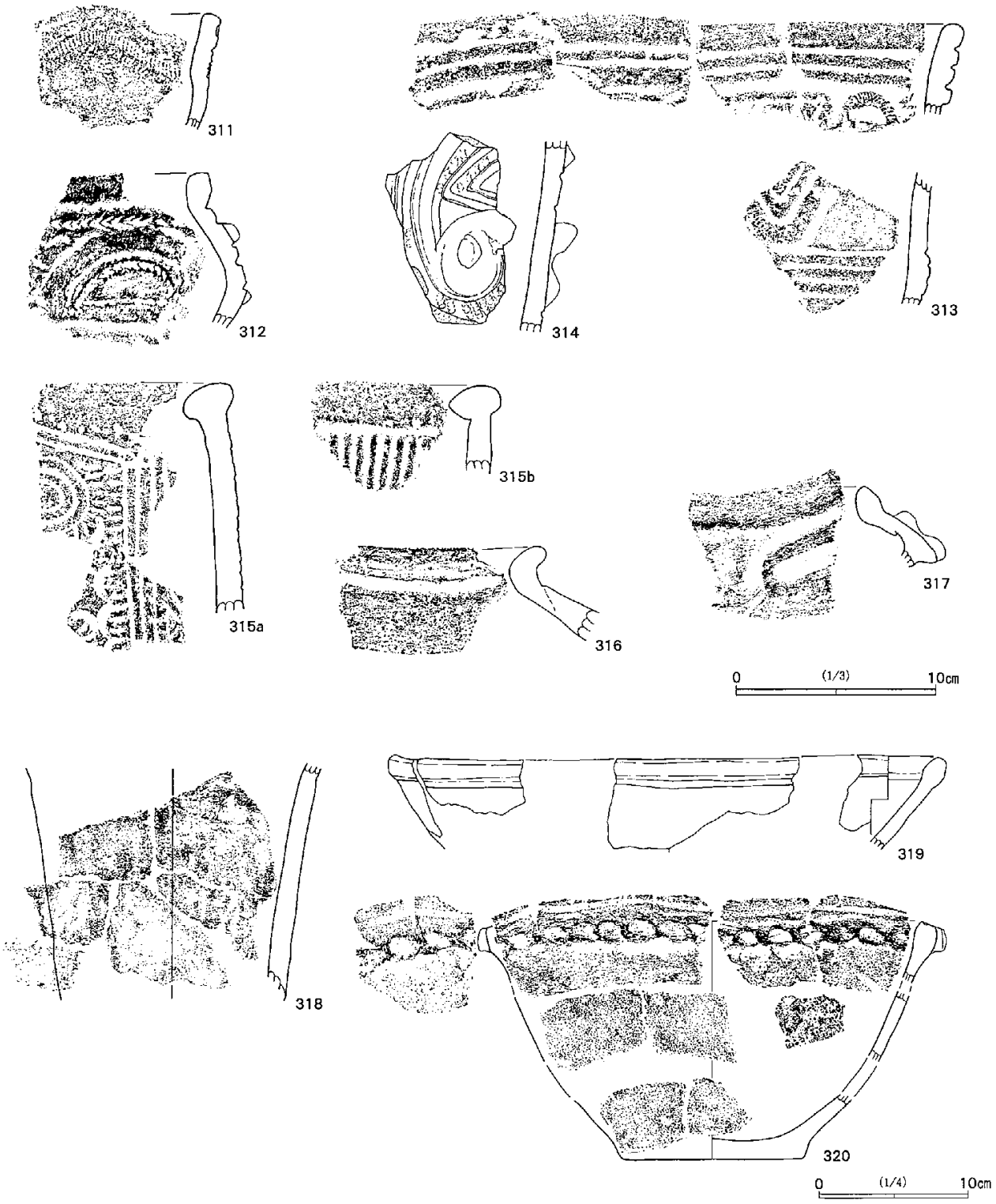
（d）勝坂式および勝坂式の影響を受けた土器（第67図311～315）

阿玉台式に客体的に伴う勝坂式と，その影響下の土器をまとめる。勝坂式の細別時期については下総考古学研究会の成果を用いることとしたい[5]。

311はいわゆる「キャタピラー紋」に沿って「クサビ状連続押圧紋」が施されるもの，312は「クサビ状連続



第66図　グリッド出土縄文土器(14)



第67図　グリッド出土縄文土器(15)

押圧紋」が区画隆線に沿って施されるものである。両者とも勝坂Ⅱ式に相当する。

313は肥厚させた口縁部に沈線を引いた疑似隆線を配し，以下に断面カマボコ状の隆線により三角形を基調とした横位区画をなす。隆線上には一部細かいキザミが施される。横位区画の下は，疑似隆線により

画される。おそらく勝坂Ⅳ式であろう。314は体部の破片で，地文に縄文をもつようで，隆線による文様が施される。勝坂式後半の土器の影響が強い土器と判断した。

315は円筒形の器形で大きく肥厚する口唇部をもち，口辺部に沈線により方形を基調とした区画をなすものであろう。区画内にいわゆる「温泉マーク紋」が配される。文様要素からは勝坂Ⅲ式に同定できるものの，時期的にはより下る可能性もある土器である。

（e）浅鉢ほか（第67図316～320，図版31）

316は阿玉台式後半に伴ういわゆる屈折鉢で，口唇部は強く外反する。317も屈折する器形の浅鉢で，文様として隆線による楕円形の区画をもつ。中期中葉のものであろう。

319は肥厚する口唇部をもつ浅鉢である。中期後葉まで下る可能性がある。

320は白色の小礫を多量に含む極めて特徴的な胎土の土器である。口縁上端部に口唇部と一体化した形でタガ状の隆帯を配し，隆帯上には連続押圧を施す。口唇上にごく浅い沈線を１条引く。底部がかなり開く器形のため，鉢として復元したが，口縁部と底部が接合する部分がないため，全体のプロポーションは推定の部分が多い。

なお318は，無文の体部破片で，中期の土器である可能性があるものの細別時期が不明のため，便宜的にここで扱った。

３．中期後葉から末葉の土器（第68図，図版30）

321～323は加曽利Ｅ式前半，概ね古い部分に相当する土器である。324は連弧紋土器の可能性がある。325は口縁端部に棒状工具による刺突が施される土器で，一部交互刺突状になっている。連弧紋土器の影響であろうか。

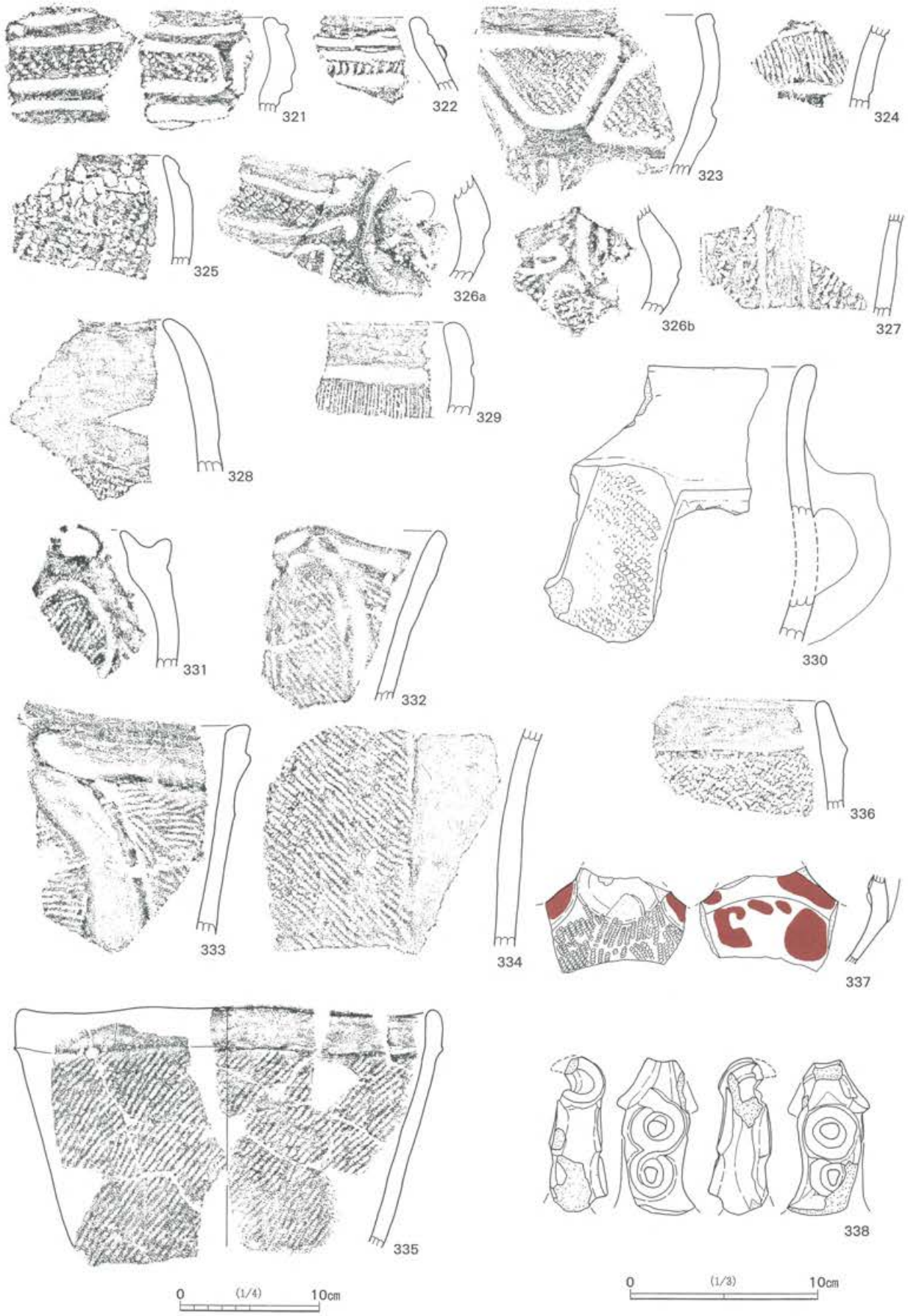
326以降は加曽利Ｅ式後半，概ね新しい部分に相当する土器である。326は円環状の突起をもつようで，口縁部文様帯は楕円区画が崩れ，沈線の末端が蕨手状になっている。327は胴部破片で，沈線間の縄文の磨り消しが明瞭である。328・329はおそらく鉢形に近い器形の土器で，328は口縁部がやや広い無文帯となり，以下に縄文が配される。329は口縁部無文帯を沈線で画し，以下に縦位の条線を引く。

330は中期後葉から末葉の，いわゆる両耳壺である。欠損部分が多く詳細は不明であるが，かなり大型の土器であろう。

331～336は中期末葉のいわゆる加曽利ＥⅣ式と考え得る土器である。331は波状縁の土器で，波頂部は筒状の小突起となる。体部文様は沈線で構成される。332・333は波状縁の土器で，隆線により文様が構成されるものである。334は胴部中位の破片であり，幅広の無文帯が低い隆線で画され，隆線上に縄文が乗るように施文される。335・336は平縁の土器で，口縁部無文帯が横位の隆線で画され，以下に縄文が施されるものである。

337は小型の鉢かと思われ，欠損があるためはっきりしないが，波頂部に隆線による渦巻き状の意匠を配し，口縁部無文帯を隆線で画すようである。文様要素から中期末葉の土器であろう。外面の口縁部無文帯と，内面全体に赤彩の痕跡がはっきりと残っている。

338は中期末葉から後期初頭にかけて存在する，いわゆる鳥形把手である。嘴状の先端部は欠損しており，目に当たる部分の隆線と一体化している。県内の出土例では佐原市多田遺跡出土資料[6]が著名であるが，これに比べると側面の文様が省略されるなど，より簡略化されているように見える。



第68図　グリッド出土縄文土器(16)

Ⅳ群　後期から晩期の土器（第69図～第78図）

1．後期初頭から前葉の土器（第69図）

339は帯状縄文による文様で，称名寺Ⅰ式に相当する。340～345は，称名寺Ⅱ式に相当する。340～343は，沈線間に刺突列が施されるものである。344は口縁部に横位沈線を重ね，沈線間にキザミを施すもので，称名寺式後半の土器に散見されるものであろう。345は先端を欠損するが，波頂部に円形刺突と弧線を組み合わせた文様を配する。波頂部から向かって左側の口縁上端部には低い円形貼り付けと，沈線による枠状文が描かれる。波頂部から向かって右側は無文である。体部は沈線と刺突文により文様を構成する。

346～365は堀之内１式に相当する土器である。346～357は口縁部破片である。346～349は沈線による文様があまり密でないものである。348は縦位沈線間に刺突列を施す。349は地文がはっきりしないものである。

350・351は地文縄文上に単沈線で比較的密に文様を描くものである。352は半截竹管を用いて文様を描くものである。353は口縁部に１条の横位沈線のみもつものである。354は沈線が密に配される口縁部の小突起である。

355は口縁部に横位の沈線を配す土器で，やや屈折する口縁部内面に，屈折部を強調するように沈線が引かれている。本来，より屈折した口縁部であったものが退化し，内面に沈線を引くことでこれに換えたように見える。堀之内１式と判断せざる得ない土器であるが，内面の沈線は堀之内２式以降の特徴であり，過渡的な土器と捉えるべきであろうか。356・357は縄文のみ施文される土器である。

358～365は堀之内１式の胴部と考え得るものである。358は地文の縄文を欠く。359・360・362・364は地文縄文上に沈線で文様を構成するものである。361は条線のみの土器で，中期後葉から後期前葉まで見られる土器である。363は地文を欠き，垂下する隆線が存在する。365は地文を欠き，多条沈線により文様を描く。

366～368は堀之内２式に相当する土器である。366・367は口縁部隆線と「８」の字状の貼り付けが存在する。368は地文縄文上に沈線で区画文を構成するものである。

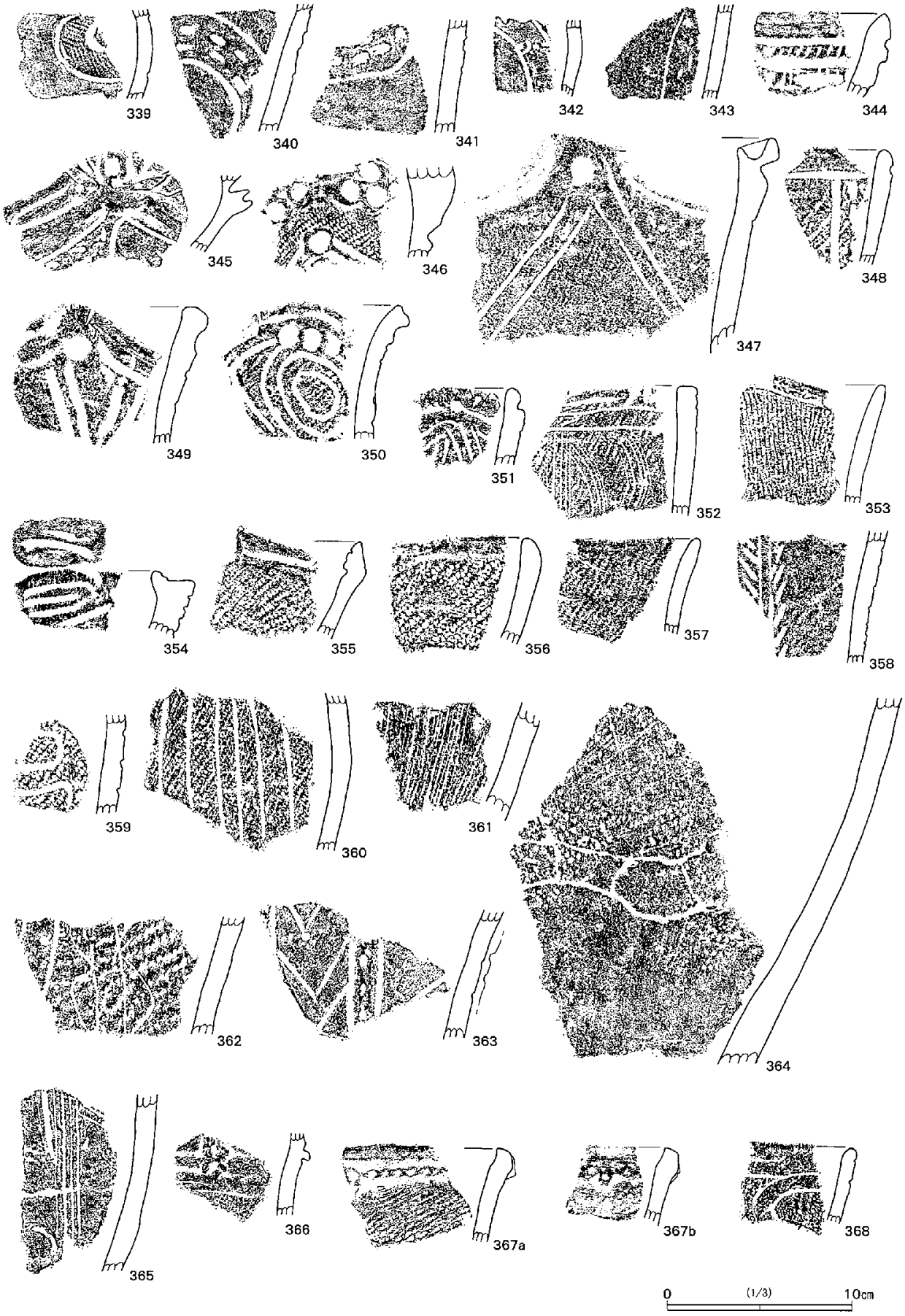
2．後期中葉の土器（第70図～第78図）

（ａ）精製土器（第70図，図版31）

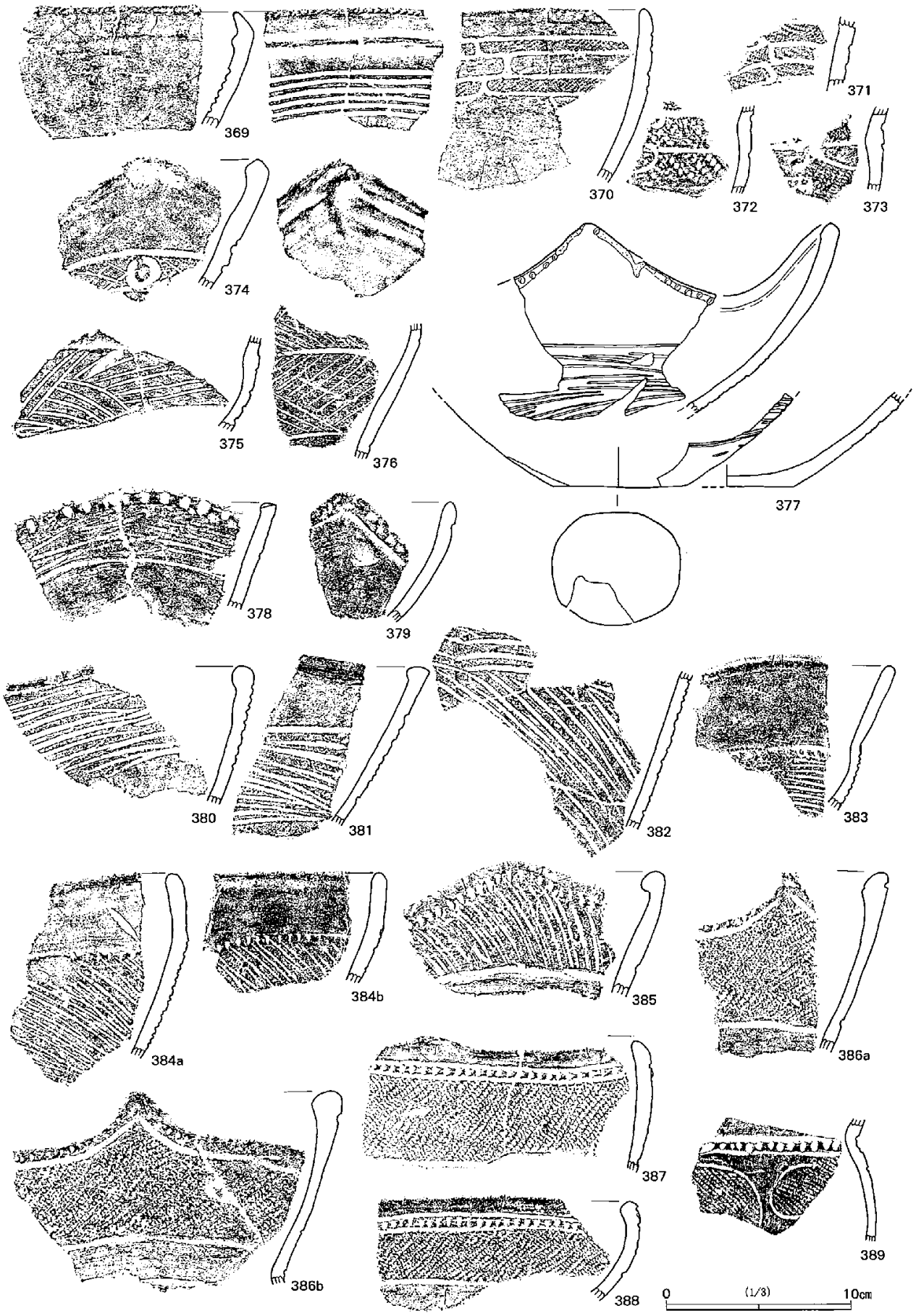
第70図には加曽利Ｂ式の精製土器をまとめた。369～371は加曽利Ｂ１式であろう。369は内文をもつ鉢あるいは浅鉢で，内文は横位の沈線を重ねるのみで，縄文は欠いている。370は帯状縄文をもつ鉢で，３段の帯状縄文の真ん中の段は縄文が磨り消される。区切文は弧線による。371も同様の文様であるが，帯状縄文間の磨り消しはない。

372・373は概ね加曽利Ｂ２式の古い部分に相当すると考え得る土器である。372・373はくびれをもつ器形の深鉢である。372は地文縄文上に横位の沈線を引き，帯状縄文に類した文様を描く。373はおそらく３単位波状口縁土器で，横位の弧線と対弧文による区切文が観察できる。横位の弧線は区切文を挟んで左右対称ではなく，入り組み文的な文様になるようである。

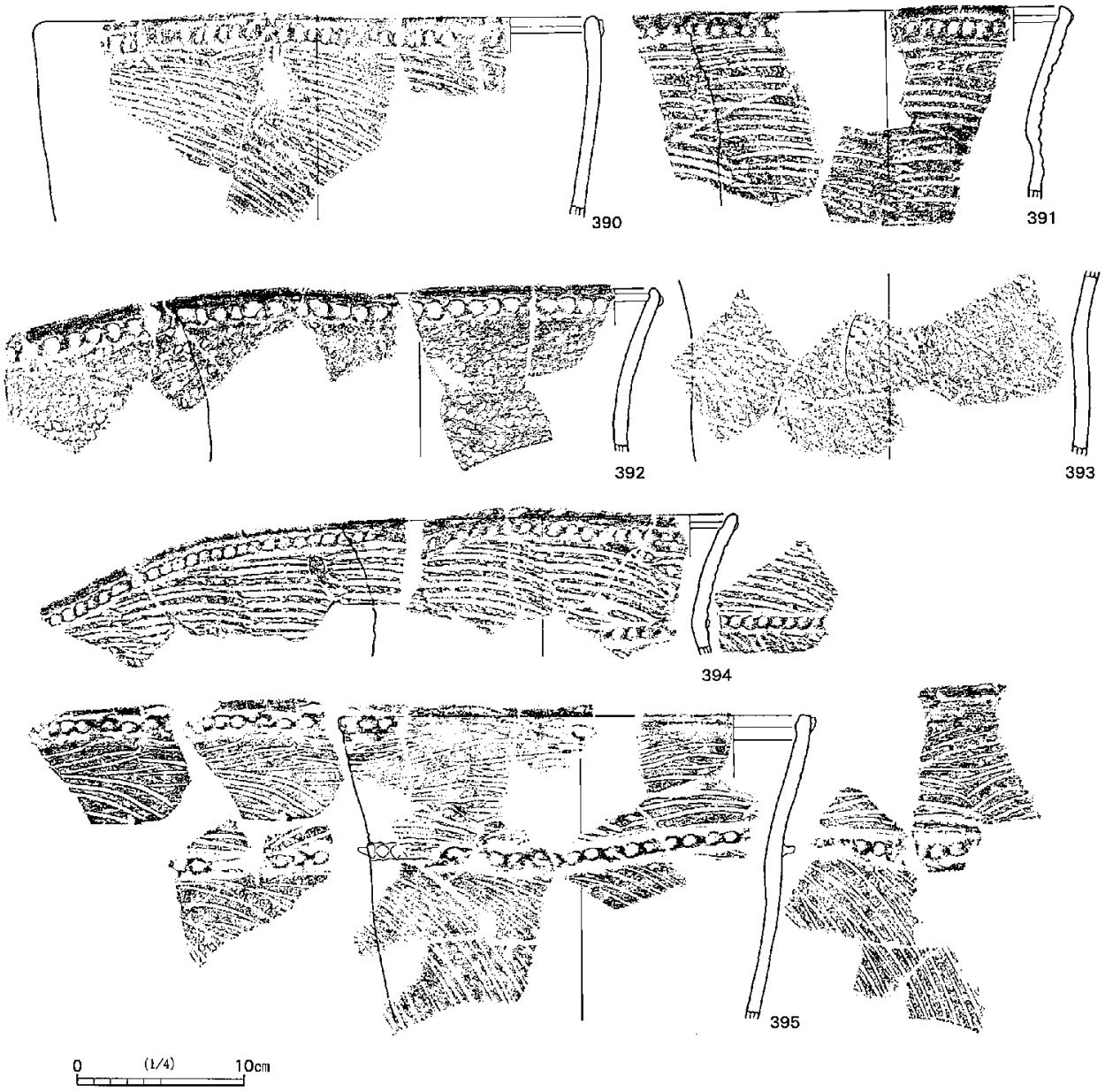
374～383は加曽利Ｂ２式に相当しよう。374は波状縁の土器で，内外面に文様をもつ。外面は口縁部無文帯の下を横位沈線で画し文様帯とする。文様帯内は細い沈線で格子目文を描き，区切文的な対弧文を配する。内面は波頂部下に隆線による弧線を貼り付け，口縁内面に沿って２条の沈線を引く。器形や文様帯構成は加曽利Ｂ２式斜線文土器と共通し，外面の文様はいわゆる「遠部第四類」[7]的な格子目文と，３単位



第69図　グリッド出土縄文土器(17)



第70図　グリッド出土縄文土器(18)

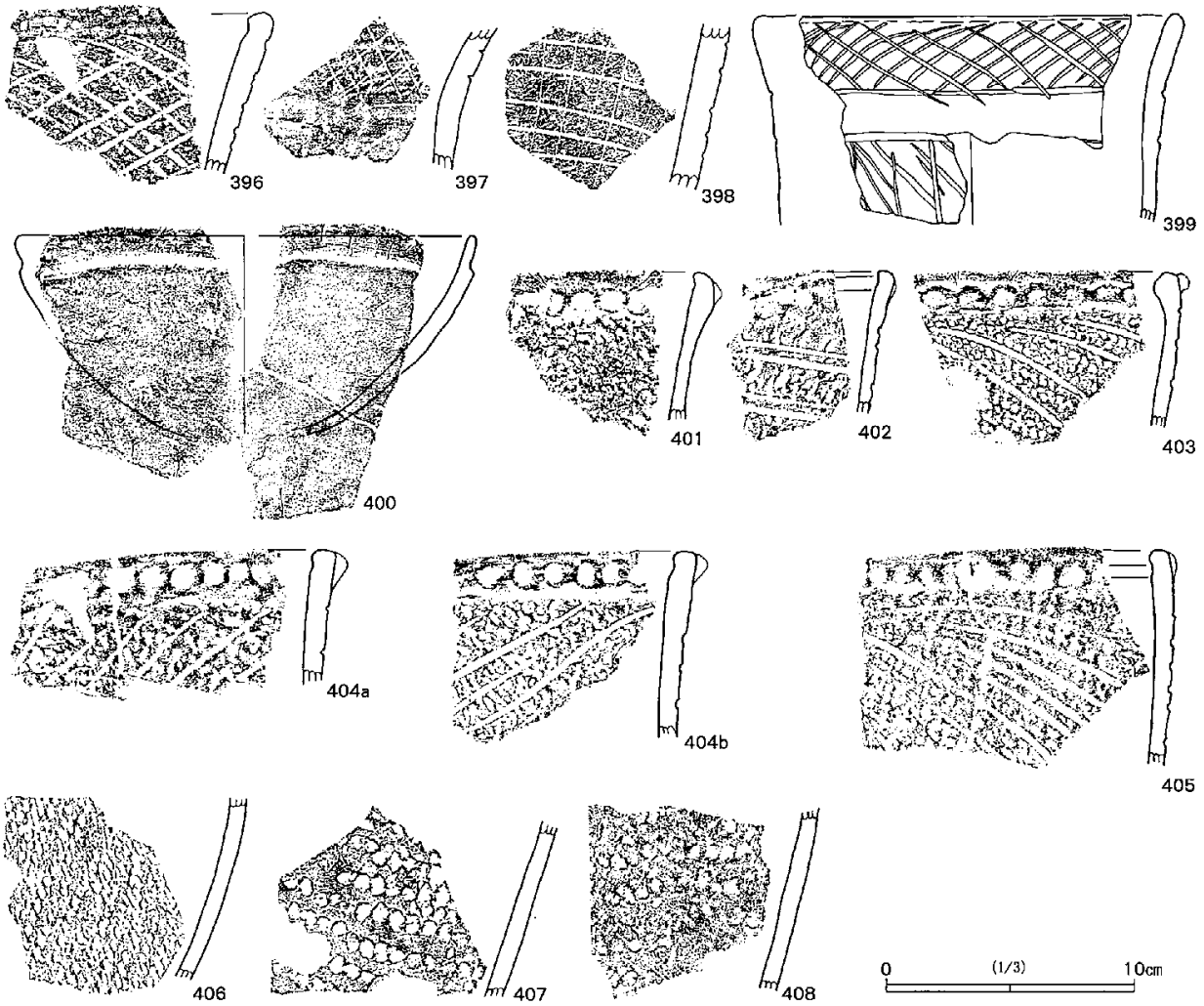


第71図　グリッド出土縄文土器(19)

波状口縁土器などの帯状縄文をもつ土器の区切文に良くある対弧文をもち，内面には紐線文系粗製土器によく見られる口縁内面の２条の沈線をもつ，という様々な文様要素を共有する。小片ながら，加曽利Ｂ２式の多様な土器の同時期性を測る重要な個体であろう。

375・376は「パッチワーク状の施文技法」[8]，「鋸歯状条線紋」[9]と呼ばれる文様をもつもので，375はやや太いしっかりした沈線で，376は細い沈線で施文帯を２段に重ねるものである。

377～383は斜線文の土器である。377はある程度器形が推定できる，波状口縁の鉢である。底面は楕円形を呈す。378は口縁部に文様帯を持ち，文様帯内は短く浅い沈線を横位に重ねるように引く。口唇上には，竹管によると思われる，深くしっかりとしたキザミが付く。379は377と同様な土器の口縁部無文帯であろう。380・381は肥厚する口唇部をもつ土器で，380は口縁部に文様帯を持ち，381は口縁部に無文帯をもち以下を文様帯とする。383は口縁部無文帯下にくびれをもつ土器である。くびれ部には刻文帯のよう



第72図　グリッド出土縄文土器(20)

なキザミが配されており，加曽利Ｂ３式まで下る可能性がある。

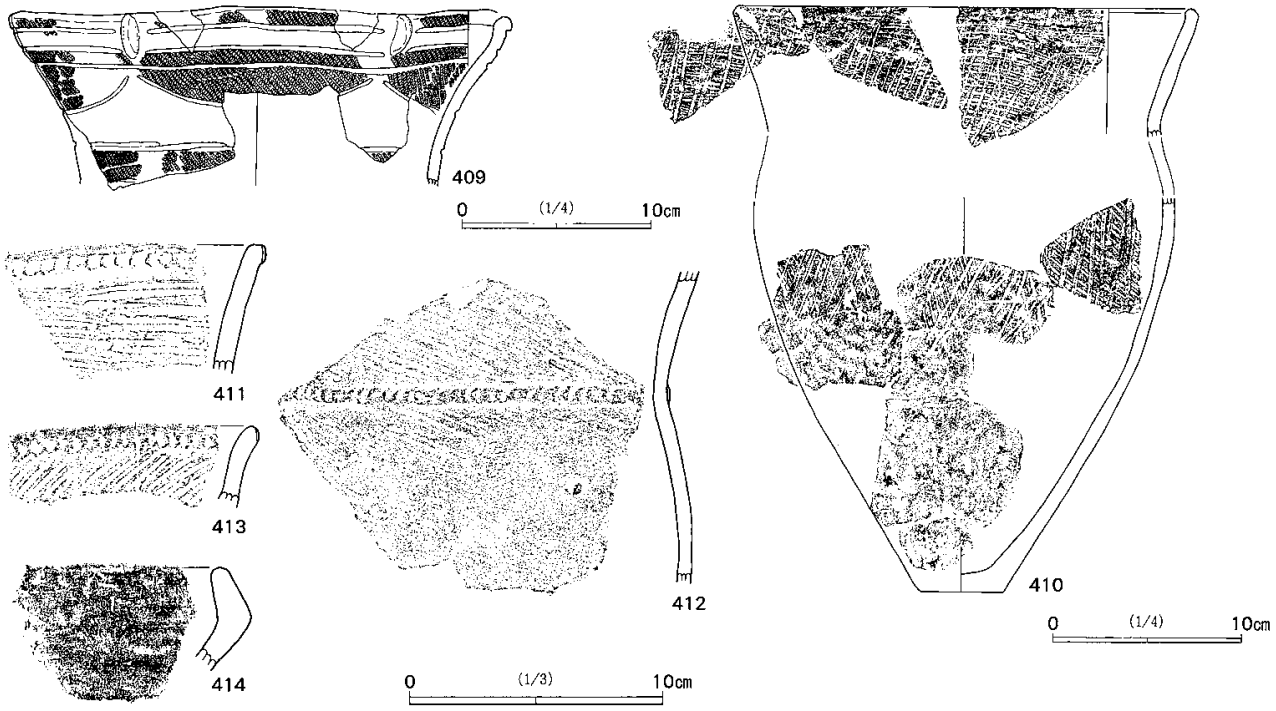
384は鉢で，口縁部無文帯下に弱い段を持ち，段の部分にはキザミを施す。段位下に細く鋭い斜沈線を配す。加曽利Ｂ２式以降で，Ｂ３式に下る可能性がある。

385～389は加曽利Ｂ３式に相当するものである。385は波状縁の深鉢で，口縁端部に列点状にキザミを施し，下部を横位沈線で画した口縁部文様帯内に，縦方向の斜沈線を充填する。386は波状縁の深鉢，387はおそらく小波状の深鉢で，両者とも口縁端部に刻文帯をもち，以下に幅広の縄文帯を配する。387は波底部の口唇部に小突起をもつ。388は鉢で，やはり口縁部刻文帯，以下に縄文帯という構成を取る。389は深鉢の胴部破片で，屈曲の強い弧線内に縄文が施される文様をもつ。おそらく弧線の末端は開放される。

（ｂ）紐線文系粗製深鉢（第71図・第72図401～408，図版31）

第71図には加曽利Ｂ式の紐線文系粗製深鉢のうち，図上で器形復元したものをまとめた。390はくびれをもたない器形のもので，地文縄文上に斜沈線を引く。391～393はくびれをもつ器形で，くびれ部に紐線をもたないものである。391は地文縄文上に，横方向の沈線を重ねる。392は沈線を欠く。394・395はくびれをもつ器形で，くびれ部に紐線をもつものである。

第72図401～408は紐線文系粗製深鉢の破片である。401～405は口縁部破片で，いずれも地文縄文上に斜



第73図　グリッド出土縄文土器(21)

沈線を引くものである。406～408は粗大な節の縄文を施すもので，粗製深鉢の胴部と判断した。

（ｃ）加曽利Ｂ式に伴うその他の土器（第72図396～400，図版30）

396～398は加曽利Ｂ２式の「遠部第四類」とこれに類するものである。396・397は地文縄文上に沈線による格子目文をもつ。396は口縁部内面には１条の沈線をもつ。397は頸部の無文帯が観察できるが，無文帯を画する横位の沈線は欠いている。398は格子目文をもつが，地文の縄文を欠く。

399も「遠部第四類」の系譜上に位置すると思うが，やや趣が異なる。地文縄文は欠いており，格子目文を描く口縁部文様帯は狭く，頸部の無文帯は横位の沈線で画される。横位の区画沈線は，口縁部文様帯の格子目文に切られる。頸部無文帯以下は，浅い斜沈線を引いた後，縦位沈線を交叉させる。胴部の文様は頸部無文帯の区画線に切られるようである。

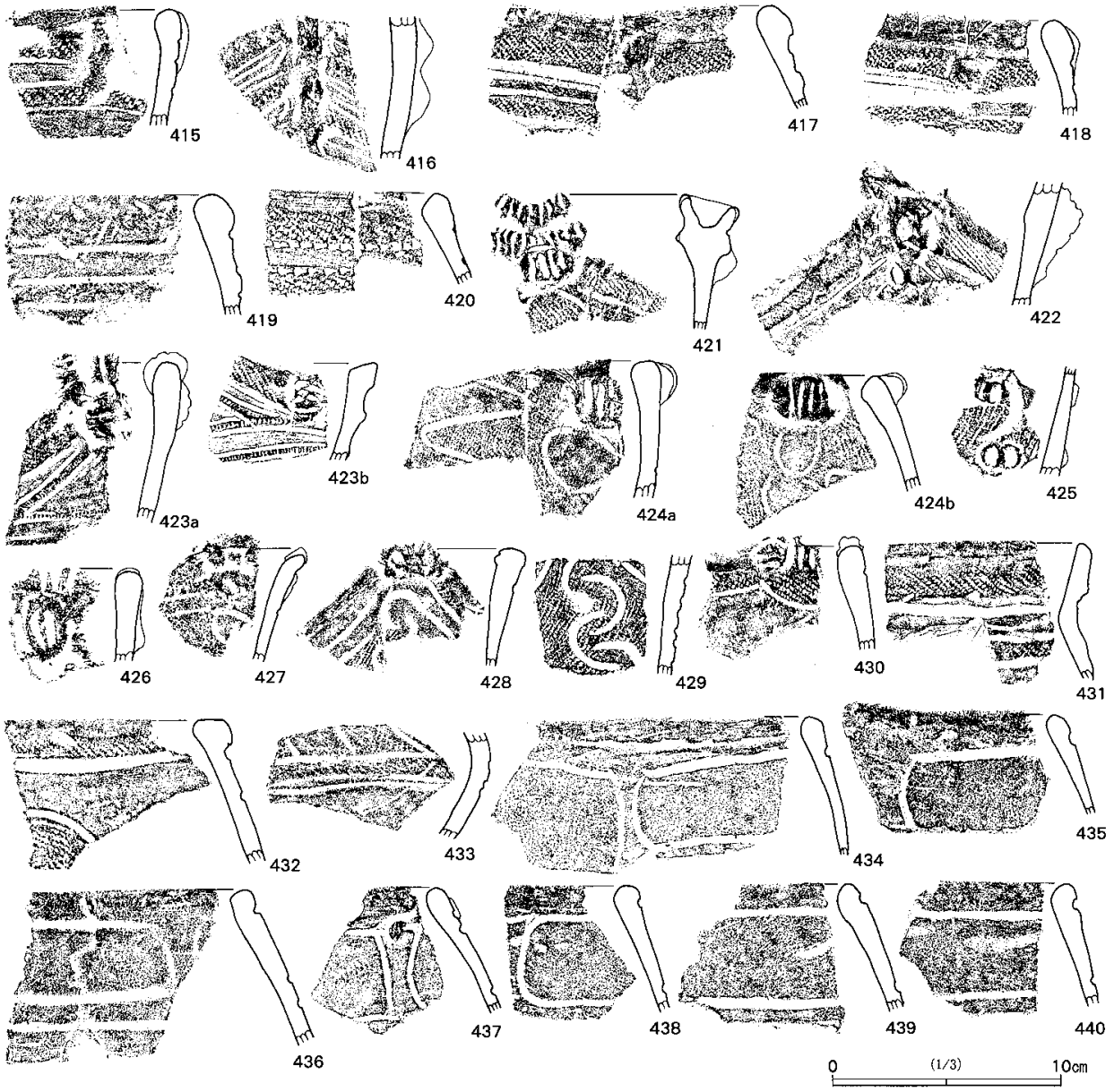
400は口縁部に段を持つ，無文の浅鉢である。小型で，器壁もやや厚い。加曽利Ｂ２式以降に出現する無文の大型の浅鉢が，変化したものと想定し，加曽利Ｂ３式以降に伴うと判断したが，より時期が下る可能性もあろう。

３．後期後葉から晩期前葉の土器（第73図～第76図）

（ａ）曽谷式（第73図，図版30・31）

第73図には曽谷式の可能性のある土器をまとめた。409は緩い波状口縁で口唇部内側はやや張り出し，稜をもつ。波底部の位置に合わせて小さなコブをもつ。コブはやや高さがあり，やや斜めに貼り付けられる。口縁部には沈線により２帯の縄文帯がつくられるが，隆起はない。縄文帯に接して緩い上向きの弧線文が配され，縄文が充填される。

410はおそらく「遠部第四類」の系譜を引く土器である。口唇部はやや内折し，口唇部直下の内面をやや強くナデ，稜を作り出している。外面の文様は，浅い沈線を斜位に方向を変えて施文することで，乱れた格子目状となす。頸部は欠損しているためはっきりしないが，無文帯は存在しない可能性がある。



第74図　グリッド出土縄文土器(22)

411・412は紐線文系粗製深鉢である。いずれも低い紐線に細かい押捺を施すものである。体部の条線は細かく，地文は観察できない。

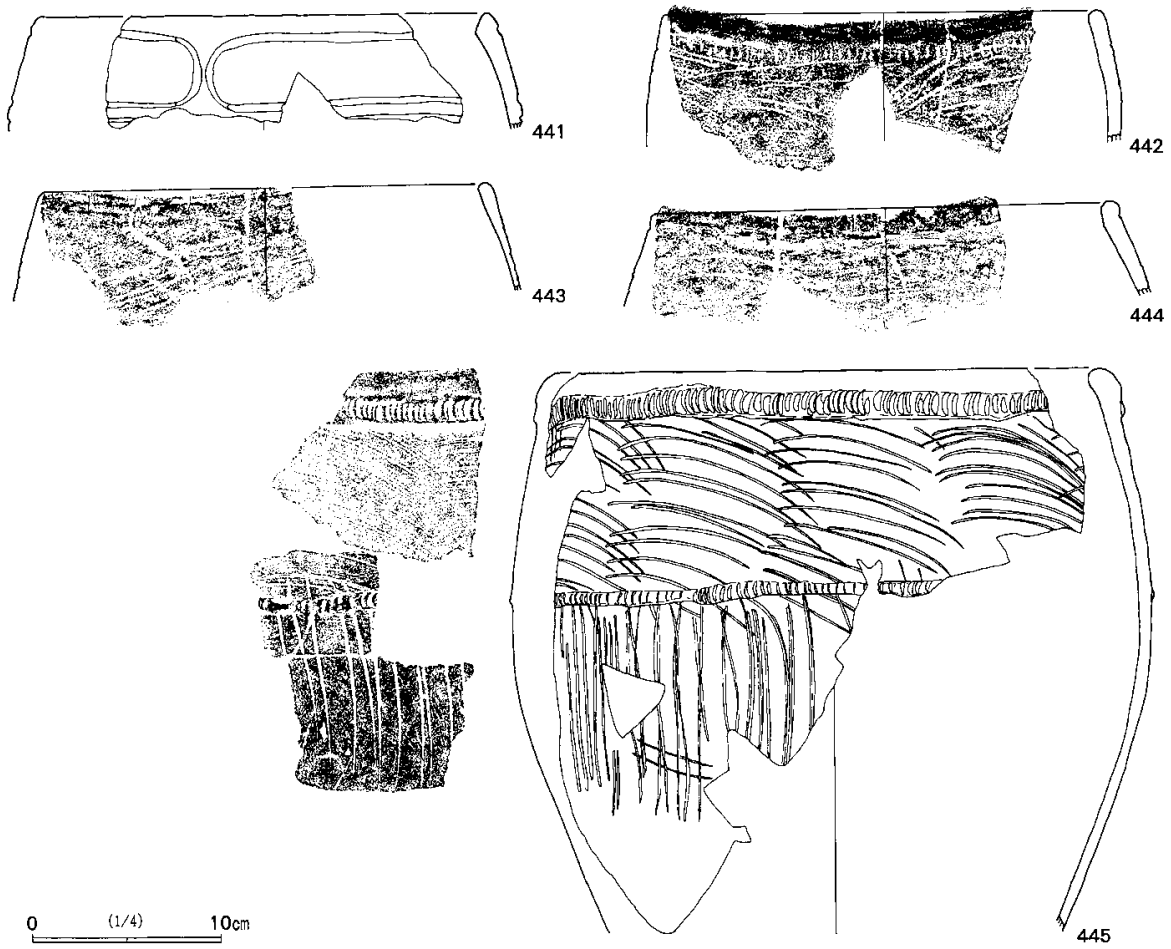
413はおそらく台付き鉢で，口唇部にキザミを施し，以下の口縁部に斜線を縦位方向に施す。安行１式期のものほど間延びした感じを受けないため，曽谷式の可能性を考えた。414は無文の浅鉢である。

（ｂ）後期安行式（第74図415～424）

415～419は安行１式に相当しよう。415は帯状縄文を口縁部に配する平縁の土器で，帯状縄文の隆起は弱いが，コブはやや縦長である。安行１式と判断した。410は隆起帯縄文の波状縁の深鉢である。417～419は平縁の土器である。

420は後期安行式の瓢形土器である。帯状縄文間に連続刺突を施す。

421～423は安行２式の波状口縁の深鉢である。421の区画隆線ははっきりしないが，突起の形状から安



第75図　グリッド出土縄文土器(23)

行２式と判断した。422の区画隆線もはっきりしないが，(拓本では分かりにくいが)波頂部下に横位のキザミをもつ縦長のコブをもつため，安行２式と判断したが，安行３ａ式まで下る可能性もあろう。423は口縁部文様帯の三角形区画が，キザミをもつ隆線によりなされ，縦長のコブが波頂部と波底部に付く。

424は平縁の土器で，口縁部に縦のキザミをもつ横長のコブを配す。これを起点に沈線による円形文が垂下し，この両脇に波状の沈線が配されるようである。沈線間には縄文が配される。安行２式以降の土器であろう。

（ｃ）晩期安行式及び姥山Ⅱ式（第74図425～第75図441，図版31）

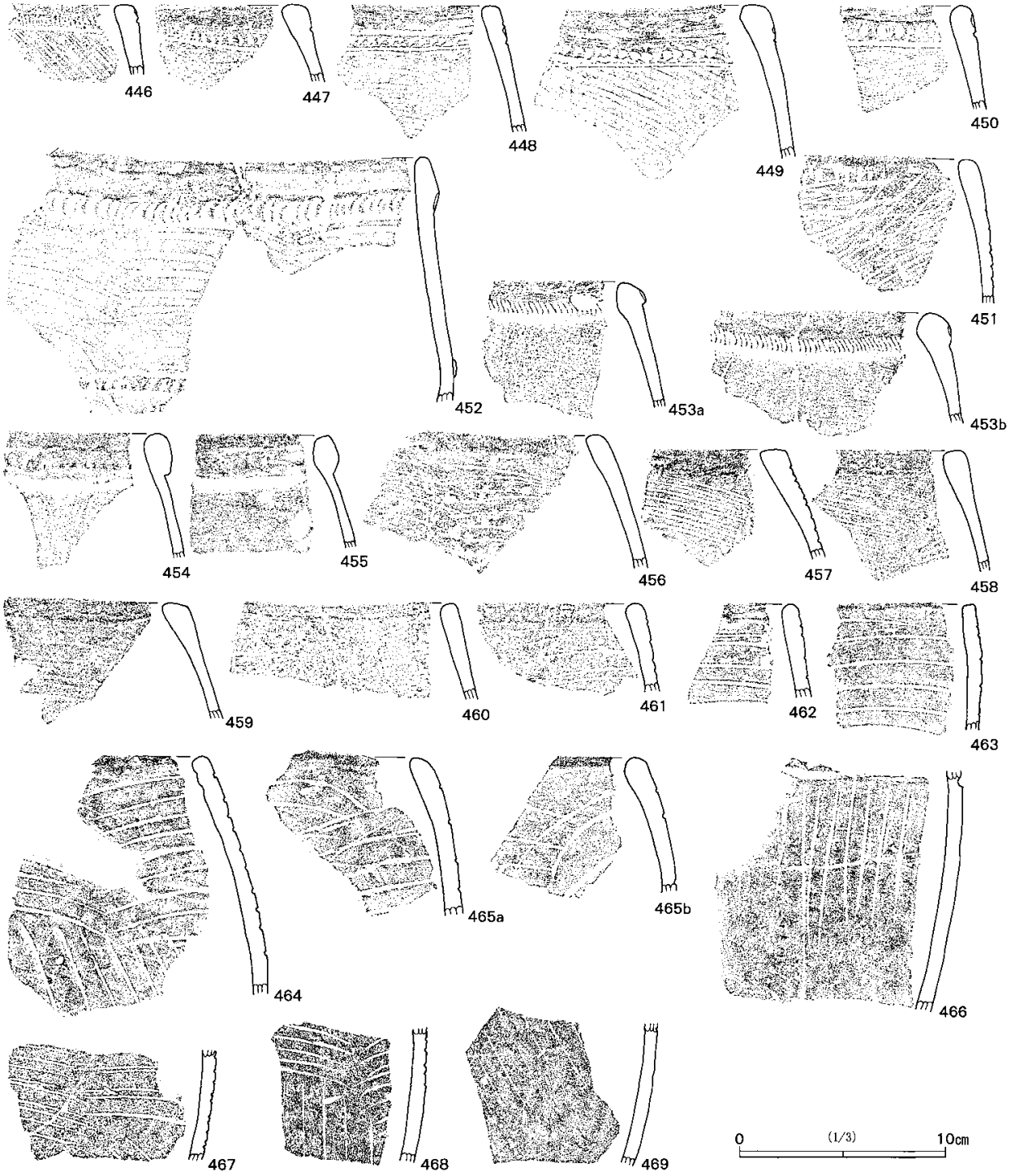
445は縄文地文に豚鼻状の突起と弧状の沈線が観察でき，晩期に至るものと判断した。426は小さく平板な魚鰭状の突起に，間延びした豚鼻状突起が付くもので，安行３ｂ式か。427は小波状の土器で，波頂部にが鉢巻き状に隆線が配され，以下に平板な豚鼻状突起が付く。安行３ｂ式か。428・429は姥山Ⅱ式であろう。428は波頂部の破片であるが，口縁の波状は大きくない。430は平縁の土器で，口縁端部に弧線による縄紋帯をもつ。431～433は晩期安行式に伴うと判断した平縁の土器である。434～441は安行３ｂ式に伴う可能性がある，枠状文の土器である。

（ｄ）粗製深鉢（第75図442～第76図469，図版30・31）

第75図には器形復元したものをまとめた。442は口縁部に連続刺突を施し，口辺部に横方向の雑な弧線を引くものである。沈線の引き方は，以下の姥山Ⅱ式の粗製土器に近い感じがする。443・444は口縁部に

横方向の弧線を配す土器で，姥山Ⅱ式の粗製土器である。445は肥厚した口唇部で，口縁部のやや下がった位置に細かい瓜形の押捺を施す。体部には低い隆線を貼り，細かい押捺を施す。口縁部は横方向の弧線で，体下半は縦位の沈線である。安行２式以降の土器である。

446～450は口縁部の刺突と横位の沈線をもつもので，安行１式の粗製土器であろう。451は口縁端部に刺突を施し，口辺部に雑な沈線を配す。452は445とよく似た土器であるが，弧線がよりしっかりした太い沈線で引かれる。安行２式以降の土器である。453は口縁部に隆線を貼り付け，細かい押捺を施す。口辺



第76図　グリッド出土縄文土器(24)

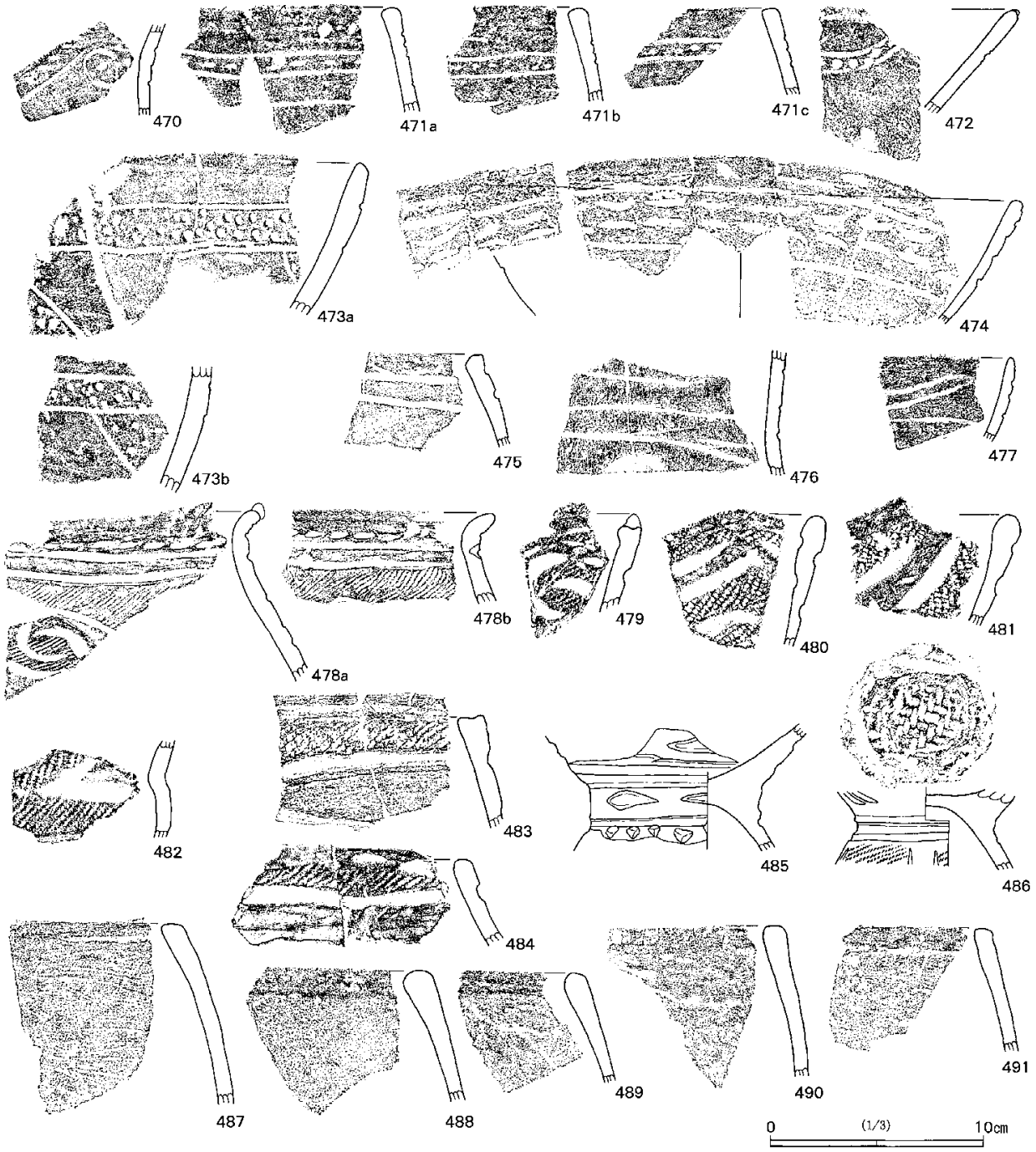
部には浅い沈線による横方向の弧線を配し，縦位の弧線を引く。安行２式以降の土器である。

454・455は肥厚した口縁部で，口辺部の横方向の弧線を欠く。454には口辺部に縦位の弧線を観察できる。晩期に至るものであろう。

456～465は姥山Ⅱ式の粗製土器と考え得るもので，456～461は弧線がやや密に施され，462～465は弧線間がやや間延びする。466～469は体部の破片である。

４．晩期中葉の土器（第77図，図版31）

470は姥山Ⅲ式的な文様構成で，沈線間に列点をもつものである。471～474は安行３ｃ式に相当しよう。



第77図　グリッド出土縄文土器(25)

471は平縁の土器で，沈線間の列点を口辺部に配する。472は浅鉢で，弧状の沈線間に棒状工具で刺突する。姥山Ⅱ式に伴うものの可能性もある。473は鉢のようで，幅広の沈線間に複列の列点文を配す。474も鉢で，幅広の沈線間に弧状の短沈線を複列に配す。475～477は列点を欠くもので安行３ｄ式の可能性がある。475は平縁の土器である。477はおそらく鉢であろう。

478は前浦式的な土器であるが，口縁部に安行３ｃ式的な列点文を配し，幅広の口辺部には地文縄文状に沈線で入り組み弧線文を描くものである。

479～484は前浦式で，479は「の」字文に近い文様をもつものである。480・481は波状縁の土器で，やや太い沈線で文様を描く。482は彫刻的な手法を取る。483・484口縁部に大ぶりな文様を描く平縁の土器である。

485・486は台付き鉢である。両者とも文様構成がはっきりしないが，485は沈線で文様を構成するようである。486は脚部の接合面に網代痕が残っている。

487～491は無文の粗製土器である。晩期中葉に至る可能性があるものとしてまとめた。

５．晩期後葉から末葉の土器（第78図）

（ａ）千網式（第78図492～499）

492ａは口縁部破片であり，外削ぎ状の口唇部上面に，おそらく２段ＲＬの縄の側面を斜方向に押圧する。口辺部にはＲ原体を用いた撚糸文を横走させる。492ｂは同一個体と考え得る胴部の破片であり，胴部では撚糸文を斜行させるようである。493は小片でかつ器面が荒れており詳細は不明であるが，小波状の波頂部と考えられ，口唇部には一部キザミが施される。口縁はやや外反し，撚糸文？が斜行する。494から496は，間隔を密にして軸に撚り紐を巻いた撚糸文を，やや乱雑に施すものである。用いる原体は494がおそらくＬ，495・496はＲであろう。

497は千網式に伴うと考え得る鉢形に近い土器で，口縁端部に１条の沈線をもつ以外，器面は無文とする。器面は内外とも平滑に仕上げられている。498も千網式伴う可能性がある土器と考えた無文の土器で，やや内湾する口縁部で，口縁部直下がナデによりややくびれる。内面は比較的丁寧に調整されるが，外面はややざらつく。499も千網式以降の土器と判断したもので，おそらく胴部が張る鉢か浅鉢であろう。外面は，撚り紐を，間隔をかなり密にして軸に巻き付けた撚糸文であろう。

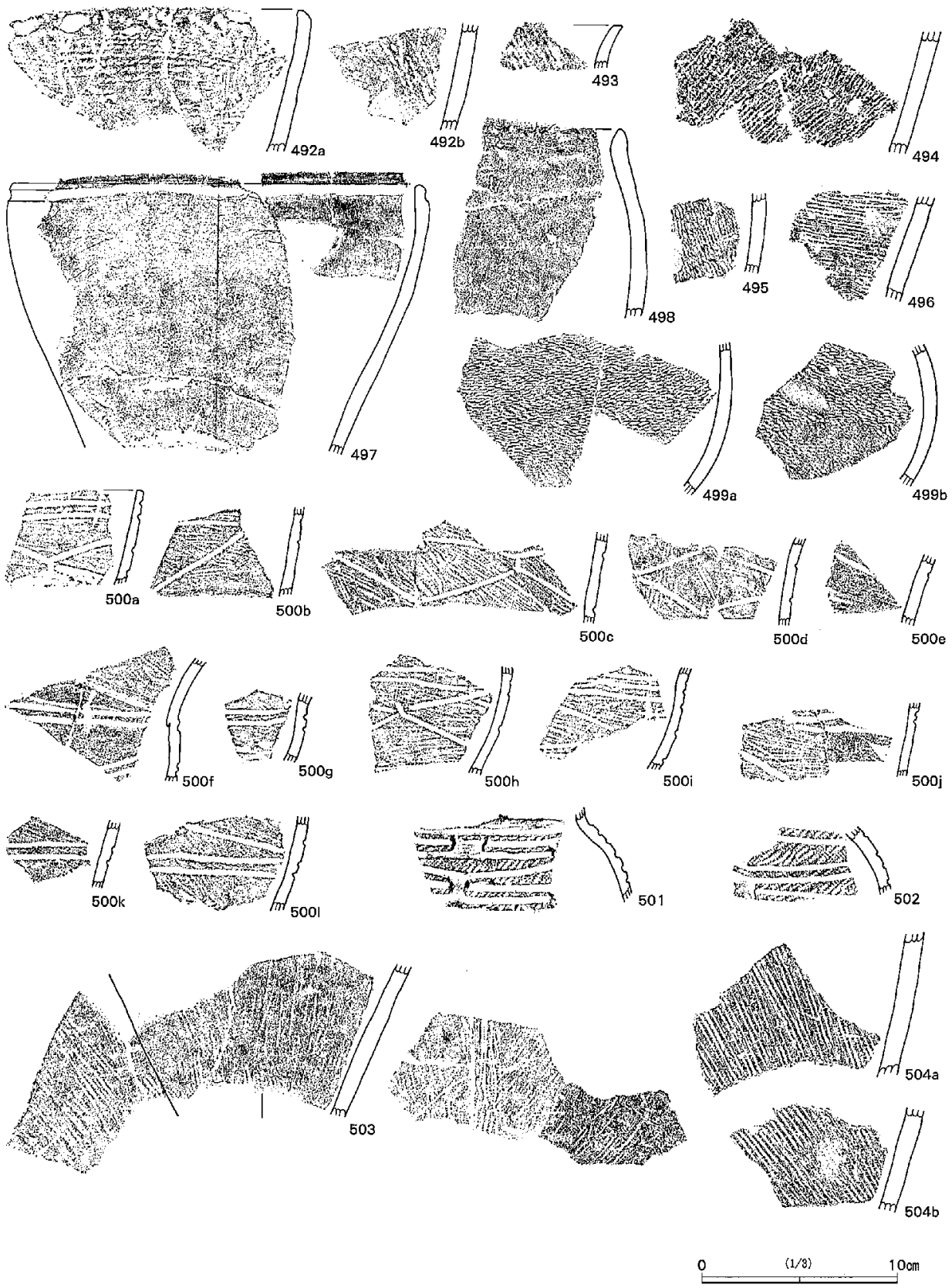
（ｂ）荒海式（第78図500～504）

500～502は荒海式の後半に相当する土器と考え得る[10]。

500は多数の破片があったものの，小片ばかりであったため，器形が復元できなかった。破片から推測する限り，やや幅広の口頸部が若干外反し，胴部がやや張る深鉢であろう。地文には条痕文が施される。500ａが口縁部破片で，口縁部に２条の沈線をもつ。ｂ～ｃは口頸部の破片と考えられ，縦位の短沈線状の刺突間を沈線で繋いだ，変形工字文状の文様が配される。ｆ以下の破片は胴部のくびれ以下の破片で，区画の横位沈線と，口頸部同様の変形工字文状の文様が観察できる。

501・502はおそらく甕形土器である。いずれも地文に縄文を施し，肩部に変形工地文を配するものである。502は沈線の交叉部が，抉り取りの手法による。

503・504は条痕文が施される胴部破片である。503は底部付近と考えられる破片で，500が出土したグリッドとほぼ同じグリッドで出土している。500と503は，色調が全く異なるため積極的には認定できないが，同一個体の可能性もある。



第78図　グリッド出土縄文土器(26)

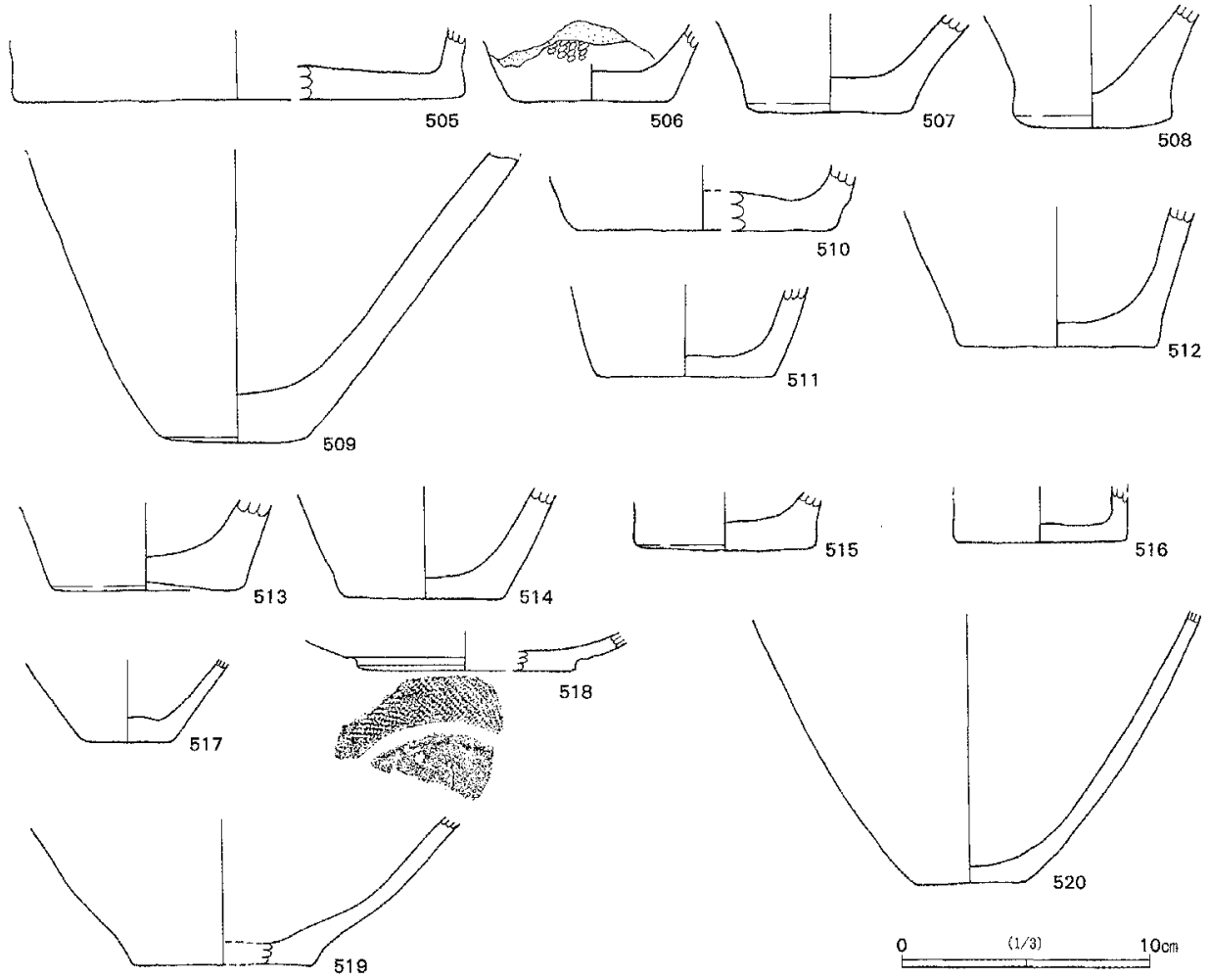
6．底部（第79図505～520）

前期後半以降の底部破片を便宜的にまとめた。505は径の大きな底部で，胎土の特徴とともに中期初頭の土器の可能性がある。506は中期後半の土器か。507～509はやや小さな底部で，中期後半から末葉の土器であろう。510～515は中期から後期の土器の底部であろう。516は後期前葉・堀之内２式か。517・520は尖底状に近い径の小さな底部で，安行式の底部である。520は底部付近のケズリが顕著である。518・519は鉢の底部で，後期から晩期のものであろう。

2　縄文時代土製品（第80図，図版42）

小金沢古墳群で出土した縄文時代の土製品を一括する。個別の計測値については第18表にまとめた。

１・２は土製玦状耳飾である。いずれも欠損品である。１は黒褐色から暗褐色を呈し，胎土に白色粒子，砂粒，赤褐色粒子を少量含む。約1/2が残存し，平面形はほぼ円形と推定される。中央の孔もほぼ円形で，孔径は切れ目の長さよりもやや長い。やや厚みがあり，側縁はナデによって若干くびれる。切れ目の切断面はやや凹凸がある。また，中央の孔は，焼成前に表裏面から穿孔されたようで，孔の真ん中付近に稜が残る。側縁に２か所キザミが施される。キザミの部分を中心に赤彩の痕跡が残っており，おそらくは全体

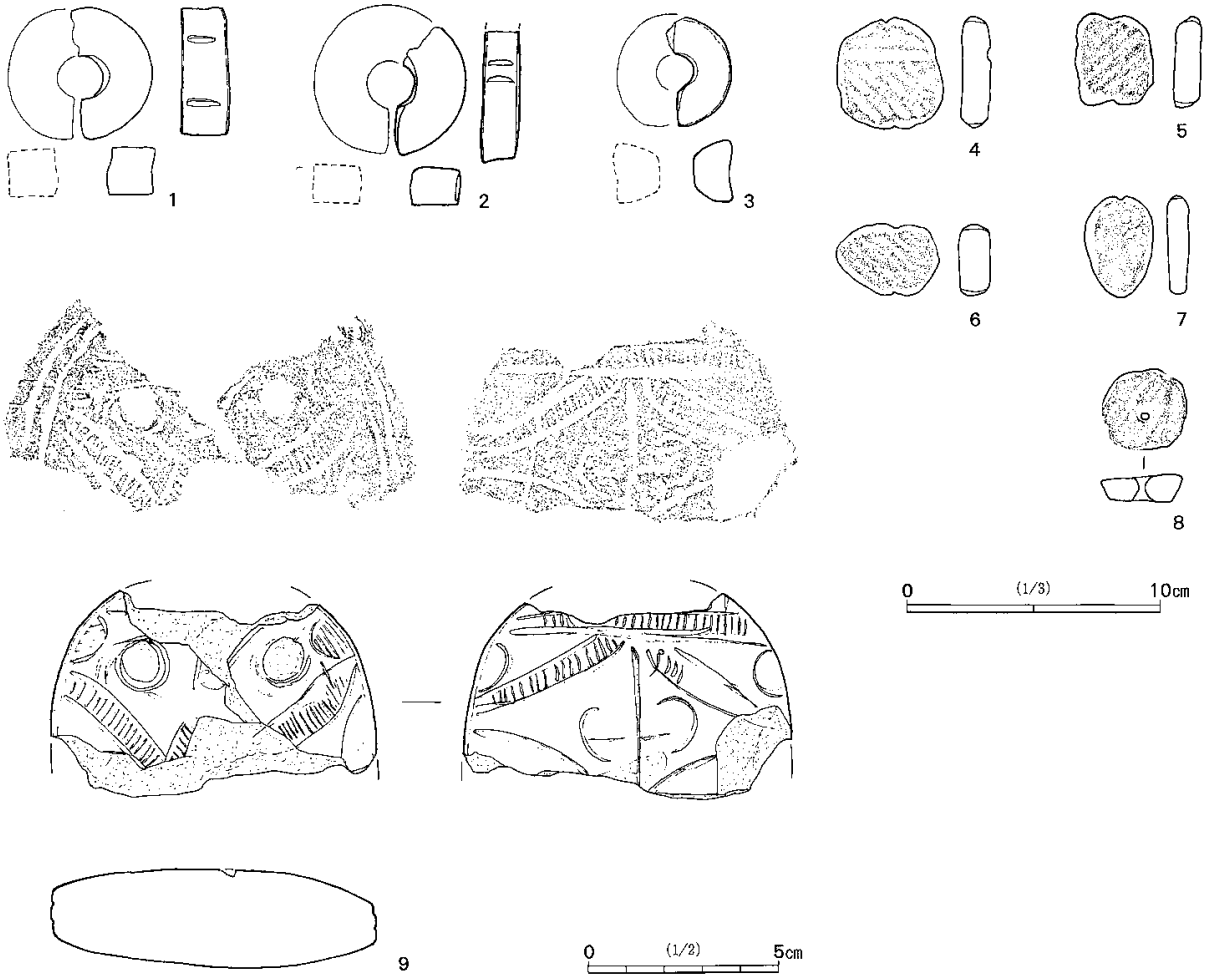


第79図　グリッド出土縄文土器(27)

に赤彩が施されていたのであろう。2も，1とほぼ同様の形態と考え得るものである。褐色を呈し，砂粒を少量含む。1/3程度残存しており，平面形はほぼ円形であろう。中央の孔もほぼ円形と推定され，孔径は切れ目の長さよりも若干短い。厚さは1よりも薄く，玦状耳飾としてはこちらの方が一般的な厚さであろう。全体に平滑に調整されており，側縁に2個一対のキザミが施されている。1・2に見られる側縁のキザミは，おそらくサメ類の椎体を模したものと思われる。

3は耳栓であろう。暗赤褐色を呈し，胎土中に白色粒子を含む。焼成は1・2に比べるとやや軟質である。約1/2が残存する。中央に孔があり，断面形は臼形に近い。

4～7は，土器片を再利用した土器片錘で，すべて土器片の対向する位置に，糸掛け用の切り込みをもつものである。4は暗赤褐色を呈し，胎土中に白色粒子，赤褐色粒子を含む。中期後葉・加曽利E式新しい部分の土器片を用いる。5は黒褐色を呈し，胎土中に白色粒子，砂粒を多く含む。6は灰黒褐色で，胎土中に砂粒を含む。5・6は縄文のみが施された土器片を用いるが，焼成などからおそらく中期後葉の土器であろう。4・5は土器片の長軸方向に切り込みをもつが，6は土器片の短軸方向に切り込みをもつものである。7は黒褐色を呈する薄手の土器片を用いる。胎土中に雲母を少量と，白色粒子を多く含む。中期中葉・阿玉台式前半の土器であろう。土器片の長軸方向に切り込みをもつものである。



第80図　縄文時代土製品

8は土器片再利用の有孔土製円板である。暗褐色を呈し，胎土中に白色粒子を含む。焼成がやや悪く，摩滅する。周囲は粗く打ち欠いた痕跡を残し，中央に表裏面から孔を穿つ。加曽利E式末葉の土器片を用いるものである。

9はおそらく人面付きの土版である。灰黒褐色から暗褐色を呈し，表裏面ともやや摩滅する。胎土中に白色粒子，赤褐色粒子を少量含む。全体の1/3程度が残存しており，本来は小判形の形状であったと考えられる。表裏面とも，2条の沈線を帯状にし，部分的にキザミを充填する文様を組み合わせて，主要な文様を構成する。表面には，目を表現したと考え得る1対の円形のくぼみがある。くぼみに沿って，目の縁を表現したような沈線が配されている。欠損のためはっきりしないが，くぼみの下には，キザミを施した帯状の沈線をW字状に配するようである。側縁沿いには，弧線文を連続させ，一部短沈線を充填する。裏面の文様は摩滅のためはっきりしない部分もあるが，帯状の沈線にキザミを充填したものを上部に配し，中央付近には帯状の沈線を菱形に近い形に配する。沈線間のキザミは部分的に施される。菱形の真ん中に縦位の沈線と，対向する弧線文を配し，弧線内には横位の短沈線が引かれるようである。側縁沿いの帯状の沈線が無い部分には表面と同様に弧線文を連続させるようである。側縁には2条の沈線を巡らせている。文様の特徴から，晩期中葉に位置付けられよう。

注1　山内清男　1979　『日本先史土器の縄紋』　先史考古学会　（1997再刊　示人社）
2　小林謙一　1991　「東関東地方の縄文時代前期末葉段階の土器様相－側面圧痕土器及び全面縄文施文土器の編年的位置付け－」　『東邦考古』15　東邦考古学研究会
3　小林謙一　1988　「東関東地方縄文時代中期初頭段階の土器様相－「八辺式」の設定とその編年的位置について」　『村上徹君追悼論文集』　村上徹君追悼論文集編集委員会
小林謙一　1989　「千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について－東関東地方中期初頭段階の土器様相－」『史学』第58巻2号　三田史学会
4　小林謙一・中山真治・黒尾和久　2004　「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（補）」『シンポジウム縄文集落研究の新地平3－勝坂から曽利へ－発表要旨』　縄文集落研究グループ・セツルメント研究会
5　下総考古学研究会　1985　「<特集>勝坂式土器の研究」『下総考古学』8号　下総考古学研究会
下総考古学研究会　2004　「<特集>房総半島における勝坂式土器の研究」『下総考古学』18号　下総考古学研究会
6　上守秀明ほか　1992　『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅶ（佐原地区4）』（財）千葉県文化財センター
7　池上啓介　1937　「千葉県印旛郡臼井町遠部石器時代遺蹟の遺物」『史前学雑誌』第九巻三号　史前学会
8　菅谷通保　1996　「南関東東部後期中葉土器群の様相」『第9回縄文セミナー　後期中葉の諸問題』　縄文セミナーの会
9　林田利之　2004　「条線紋に見る施文規範の踏襲と変化－粗製と呼ばれる土器は誰が作ったのか？－」『印旛郡市文化財センター研究紀要3』　（財）印旛郡市文化財センター
10　いずれも荒海4式である可能性が高く，そうであれば弥生式に相当することを渡辺修一氏からご教示いただいた。今回報告の小金沢古墳群の中では，他に弥生時代と評価し得る遺物がないことから，便宜的にここで扱うこととした。

第17表　縄文土器観察表(1)

挿図	No.	時期・型式名等	遺物番号	部位	焼成	色　調	胎　土	備　考
53	1	早期前葉・稲荷台	20-79	r	良	灰黄褐色	白・砂・赤少	
53	2	早期前葉・稲荷台	2D-37-7	r	やや良	黒褐色	白・砂やや多	
53	3	早期前葉・稲荷台	2E-36-1	r	良	灰黒褐色	白・砂	
53	4	早期前葉・稲荷台	3G-42-1	r	やや良	黒褐色	白・砂やや多	
53	5	早期前葉・稲荷台	3G-40-1	r	良	灰黄褐色	白やや多	
53	6	早期前葉・稲荷台	3G-51-1	r	良	黒褐～黄褐色	白	
53	7	早期前葉・稲荷台	3G-32-1	r,m	良	黒褐～暗褐色	白	a～d別に図化
53	8	早期前葉・稲荷台？	3G-50-1	r	良	暗褐色	砂少	
53	9	早期前葉・稲荷原？	3G-28-1	m	良	灰黄褐色	白少・砂	
53	10	早期前葉・撚糸文系	3D-3-6,3D-?-5	m	良	黄褐色	白少・砂多・赤少	a,b別に図化
53	11	早期前葉・撚糸文系	2E-73-25	m	良	暗褐色	白・黒・雲母少	
53	12	早期前葉・撚糸文系	3F-14-18	m	良	暗褐色	白少・砂・赤少	
53	13	早期前葉・撚糸文系	20-87	m	やや良	黒褐色	白・砂・赤少	
53	14	早期前葉・撚糸文系	3D-8-37	m	良	暗赤褐色	白・砂・赤少	
53	15	早期前葉・撚糸文系	2E-59-27	m	良	暗褐色	白・砂	
53	16	早期前葉・撚糸文系	2D-81-98	m	良	灰暗褐色	白(大)多・砂	
53	17	早期前葉・撚糸文系	2D-90-26	m	良	暗褐色	白(大)・砂・赤	
53	18	早期前葉・撚糸文系	2D-90-21	m	良	暗褐色	白少	
53	19	早期前葉・撚糸文系	23墳-23	m	良	褐色	白やや多・赤	
53	20	早期前葉・撚糸文系	00-150	m	良	褐色	砂・赤少	
53	21	早期前葉	2E-20-4	b	やや良	暗褐～褐色	白少・砂	
53	22	早期前葉	17-14	b	良	褐色	砂	
53	23	早期前葉～中葉	3G-1-1	b	良	褐色	白・砂少・雲母少	
53	24	早期中葉	3G-54-1	b	良	暗褐色	白・砂	
53	25	早期中葉	2G-94-6	b	良	暗褐色	白・砂	
53	26	早期中葉	3C-9-12	b	良	暗褐色	白少・繊維少	
53	27	早期中葉	?-61-37	b	良	暗褐色	白・赤・繊維少	
54	28	早期中葉・三戸	4D-71-69	m	やや良	暗褐色	白やや多・砂	
54	29	早期中葉・三戸	2C-64-1	m	良	暗褐色	白	
54	30	早期中葉・三戸	2C-75-29	m	良	灰黄褐色	白	内面擦痕
54	31	早期中葉・三戸	2C-74-1	m	良	灰暗褐色	白・砂・赤少	
54	32	早期中葉・三戸	3C-4-2	m	良	褐色	白・砂やや多	
54	33	早期中葉・三戸	2C-76-19,3C-76-37	r	やや良	灰黄褐色	白少・赤少	
54	34	早期中葉・三戸	2C-16-2	r	やや不良	暗褐色	白	内面擦痕
54	35	早期中葉・無文	2C-76-50	r	良	褐色	白少・砂少	
54	36	早期中葉・条痕文	2C-99-1	r	良	暗褐色	砂	
54	37	早期中葉・条痕文	2C-69-2	m	良	暗褐色	白少・砂	
54	38	早期中葉・条痕文	2C-74-1	m	良	褐色	白やや多・赤少	
54	39	早期中葉・条痕文	2D-80-48	m	良	灰黄褐色	砂少・赤少	
54	40	早期中葉・条痕文	3G-51-1	m	良	暗褐色	白・砂多・雲母少	
54	41	早期中葉・田戸下層	3G-54-1,3G-23-1	r	良	灰黄褐色	白・砂少・赤少	a,b別に図化
54	42	早期中葉・田戸下層	3H-21-1,3H-21-1	r	良	褐色	砂・赤少	
54	43	早期中葉・田戸下層	3G-52-1,3G-33-1	m	やや良	暗褐色	白少・砂	a,b別に図化
54	44	早期中葉・田戸下層	3G-38-1	m	やや良	暗褐色	白・砂少	
54	45	早期中葉・田戸下層	3G-44-1	m	良	褐色	白やや多・砂少	
54	46	早期中葉・田戸下層	2B-64-2,14	r	良	暗赤褐色	白・砂やや多	a,b別に図化
54	47	早期中葉・田戸下層	2B-75-44	m	良	暗赤褐色	白少・砂やや多	46と同一個体の可能性
54	48	早期中葉・田戸下層	3H-22-3	r	良	褐色	白・砂少	
54	49	早期中葉・田戸下層	3H-25-1	m	良	褐色	白・砂	48と同一個体の可能性
54	50	早期中葉・田戸下層	3H-22-3	m	良	暗褐色	白少・砂少	
54	51	早期中葉・田戸下層	2H-32-4,2H-40-1, 3H-22-3	m	やや良	灰黄褐色	白少・砂	
54	52	早期中葉・田戸下層	3H-23-1	m	良	暗褐色	白少・砂	51と同一個体の可能性
54	53	早期中葉・田戸下層	3G-46-1	m	やや良	灰黄褐色	白・砂やや多	
54	54	早期中葉・田戸下層	3G-52-1	m	やや良	暗褐色	白・砂やや多	53と同一個体の可能性
54	55	早期中葉・田戸下層	21墳-石-23,3H-31-1	m	良	褐色	白少・砂	a,b別に図化
54	56	早期中葉・田戸下層	2G-68-1	m	良	褐色	白・砂	
54	57	早期中葉・田戸下層	2G-60-4	m	良	暗赤褐色	白・砂少	
54	58	早期中葉・田戸下層	3I-48-1	m	良	褐色	砂	
54	59	早期中葉・田戸下層	3G-33-1	m	良	褐色	白・砂	

縄文土器観察表(2)

挿図	No.	時期・型式名等	遺物番号	部位	焼成	色　調	胎　土	備　　考
54	60	早期中葉・田戸下層？	3G-43-1	m	良	暗褐色	白・砂	
54	61	早期中葉・田戸下層	2B-74-8,2B-65-58	m	良	褐色	白少・砂	a，b別に図化
54	62	早期中葉・田戸下層	3H-22-3	m	良	褐色	砂	
54	63	早期中葉・田戸下層	3H-32-4	m	良	褐色	白・砂	
54	64	早期中葉・田戸下層	3H-22-3	m	良	褐色	白・砂	63と同一個体の可能性
54	65	早期中葉・田戸下層	3G-13-1	m	良	灰黒褐色	白	
55	66	早期中葉・田戸上層	1G-90-1,2,2F-93-1, 2F-94-3,21,25, 3F-2-1,2	r	やや良	黒褐～灰暗褐色	白・砂少	a，b別に図化
55	67	早期中葉・田戸上層	2E-19-69,2E-26-49	r	やや良	暗褐～灰暗褐色	白・砂少・繊維少	a，b別に図化
55	68	早期中葉・田戸上層	2E-67-4	m	良	黒褐色	白・繊維少	
55	69	早期中葉・田戸上層	2E-46-1,2E-86-12,45, 2E-95-28	r	やや良	黒褐～黄褐色	白・砂やや多	
55	70	早期中葉・田戸上層	2E-68-1,107,2E-69-9, 2E-71-80,91, 2E-89-64,66,127,15-1	r	良	暗褐～褐色	白・砂	
55	71	早期中葉・無文	2B-79-4,22,23,24,26, 28,30,32,33,34,35	r	良	黒褐～暗褐色	白やや多・砂・ 繊維微	補修孔あり
55	72	早期中葉?・無文	2F-67-5,2F-74-27	r	良	灰黄褐色	白(大)やや多・ 砂・赤少・雲母少	a，b別に図化
55	73	早期中葉・無文	2C-79-7	r	良	暗褐色	砂・赤	
55	74	早期中葉・無文	3C-73-51	r	やや不良	暗褐色	白	
55	75	早期中葉・無文	2D-82-60	r	良	褐色	砂	
55	76	早期中葉？・無文	2F-90-17	r	やや良	暗褐色	白・繊維少	
55	77	早期中葉？・無文	3F-20-1	m	やや良	暗褐色	白・赤少・繊維少	
56	78	早期後葉・子母口？	3G-63	r	良	灰黄褐色	白少・繊維	
56	79	早期後葉・野島	3F-32-4	r	良	黄褐色	白少・砂・繊維少	
56	80	早期後葉・野島	?	r	やや良	暗褐色	白やや多・砂・ 繊維少	
56	81	早期後葉・鵜ケ島台	2E-85-49,51	m	良	灰暗褐色	白やや多・砂・ 繊維少	a，b別に図化
56	82	早期後葉・鵜ケ島台	2E-36-32	r	良	灰黒褐色	白・繊維少	81と同一個体の可能性
56	83	早期後葉・茅山下層	3I-1	r	良	黒褐～黄白色	砂少・繊維少	
56	84	早期後葉・茅山下層	3H-66-1	m	やや良	褐色	砂・繊維少	
56	85	早期後葉・茅山下層	10-2	m	良	灰黄褐色	白少・繊維	
56	86	早期後葉・茅山下層	3H-66-1	m	良	灰暗褐色	白・繊維	
56	87	早期後葉・茅山下層	3H-77-1	m	良	暗褐色	白少・繊維	
56	88	早期後葉・茅山下層	?-57-1	r	良	暗褐色	白やや多・繊維	
56	89	早期後葉・茅山下層	1墳-17	r	良	褐色	砂少・繊維少	
56	90	早期後葉・茅山下層	3I-48-1	r	良	黒褐～暗赤褐色	白少・繊維少	
56	91	早期後葉・茅山下層	3I-35-1	m	良	暗赤褐色	白少・繊維少	
56	92	早期後葉・茅山下層	3H-79-1	m	良	暗褐色	白少・繊維	
56	93	早期後葉・茅山上層	3H-69-1,3H-86-4	r	やや良	灰黒褐～暗褐色	白少・繊維	a，b別に図化
56	94	早期後葉・茅山上層	3I-61-1	r	良	暗褐色	白少・繊維	補修孔あり
56	95	早期後葉・茅山上層	3H-56-1	r	やや不良	褐色	白やや多・砂・ 繊維少	
56	96	早期後葉・茅山上層？	3H-12-1	r	やや良	灰暗褐色	白・繊維少	
56	97	早期後葉・茅山上層	2D-78-50	r	良	灰暗褐色	砂・繊維少	
56	98	早期後葉・茅山上層	3D-19-25	r	良	褐色	白少・繊維	
56	99	早期後葉・縄文施文	3I-70-1	m	良	灰暗褐色	白・砂・繊維少	内面条痕
56	100	早期後葉・条痕文	3I-61-1	r	良	暗褐～褐色	白少・赤・繊維	
56	101	早期後葉・条痕文	10-2	r	良	灰暗褐色	白・繊維	
56	102	早期後葉・条痕文	10-3	m	良	黄褐色	白やや多・繊維 少	
56	103	早期後葉・条痕文	3H-59-1	m	良	灰暗褐色	砂・繊維	
56	104	早期後葉・条痕文	2D-89-35	m	良	褐色	白・繊維	
56	105	早期後葉・条痕文	3E-34-1	m	良	暗褐色	砂少・繊維少	
56	106	早期後葉・条痕文	3I-82-9	m	良	黄褐色	砂少・繊維	
57	107	早期後葉・条痕文	?	r	良	暗褐色	白・砂・繊維少	
57	108	早期後葉・条痕文	3I-83-7	r	良	暗赤褐色	白やや多・繊維 少	
57	109	早期後葉・条痕文	2D-98-26	r	良	灰黄褐色	白少・繊維少	
57	110	早期後葉・条痕文	3I-71-1	r	良	灰暗褐色	白・砂・繊維	

縄文土器観察表(3)

挿図	No.	時期・型式名等	遺物番号	部位	焼成	色調	胎土	備考
57	111	早期後葉・条痕文	2E-82-20	r	良	黄褐色	砂少・繊維	
57	112	早期後葉・条痕文	2D-89-28	r	良	黒～暗褐色	白少・繊維少	
57	113	早期後葉・条痕文	3H-45-29	r	やや良	灰黄褐色	白少・砂・繊維少	
57	114	早期後葉・条痕文	2D-59-21	r	良	褐色	白・砂・繊維少	
57	115	早期後葉・条痕文	4I-5-1,1G-85-1	r	良	褐色	砂・繊維	
57	116	早期後葉・条痕文	2E-84-1	r	良	黄褐色	砂少・繊維	
57	117	早期後葉・条痕文	2E-99-17	r	良	黒褐色	白・繊維少	補修孔あり
57	118	早期後葉？・条痕文	2E-63-123	m	良	褐色	白少・赤・繊維少	
57	119	早期後葉？・条痕文	2C-86-22	m	良	暗褐色	白少・砂・繊維少	
57	120	早期後葉？・条痕文	2C-86-29	m	良	暗赤褐色	白・繊維少	119と同一個体の可能性
57	121	早期後葉・条痕文	2C-89-2	r	良	褐色	砂少・繊維少	
57	122	早期後葉・条痕文	3H-69-1	m	良	暗褐色	砂・赤少・繊維	
57	123	早期後葉・条痕文	3H-68-1	m	良	褐色	白・繊維	
57	124	早期後葉・条痕文	2D-59-18	m	良	褐色	砂・赤・繊維少	
57	125	早期後葉・条痕文	2E-48-1	m	良	褐色	砂・繊維	
57	126	早期後葉・条痕文	3F-44-1	m	良	暗褐色	白・砂・繊維少	
57	127	早期後葉・条痕文	3I-70-1	m	良	灰黄褐色	砂・繊維	
57	128	早期後葉・条痕文	1G-79-12	m	良	褐色	砂・繊維	
57	129	早期後葉・条痕文	3I-93-1	m	良	褐色	白やや多・繊維	
57	130	早期後葉・条痕文	?	m	良	褐色	白・砂少・繊維少	
57	131	早期後葉・条痕文	2E-84-1	m	良	褐～灰暗褐色	砂・赤少・繊維少	
57	132	早期後葉・条痕文	3H-56-1	m	良	褐色	白少・砂・繊維	
57	133	早期後葉？・条痕文	2D-92-12	m	良	暗褐色	白少・繊維	
57	134	早期後葉？・条痕文	3D-18-254	m	良	褐色	白・赤少・繊維	
57	135	早期後葉・条痕文	2D-89-18,27	b	良	褐色	白・繊維	
57	136	早期後葉・条痕文？	3D-31-19	b	良	暗褐～褐色	白・繊維少	
58	137	早期末葉？・条痕文系	3G-33-1,3G-42-1, 3G-52-1	r	やや良	黒褐～黄褐色	白(大)やや多・ 繊維	
58	138	前期前半・黒浜	2E-59-15,2E-68-1, 2E-69-60, 2E-79-23,35,94, 2E-89-104,2F-60-87, 2F-71-40,44, 2F-90-19,30,31,32, 2F-92-14	r	やや良	黒褐～黄褐色	白少・砂・赤・ 繊維少	
58	139	前期前半・繊維土器	2E-69-42,2F-40-10, 2F-50-19,2F-51-6, 2F-60-54,104,106	r	良	黒褐～暗褐色	白少・砂少・赤少・ 繊維	
59	140	前期前半・関山	2E-63-18,19,79,83,108, 2E-64-8,82	m	良	黄褐色	白少・砂少・繊維	a，b別に図化
59	141	前期前半・繊維土器	2E-68-11,80	m	良	暗褐色	白・繊維やや多	
59	142	前期前半・黒浜	3E-12-12	r	良	暗褐色	白・繊維	
59	143	前期前半・黒浜	2E-28-1	r	良	黒褐～暗褐色	白・繊維少	a，b別に図化
59	144	前期前半・黒浜	2E-98-29	m	良	暗褐色	白・砂・赤・繊維 少	143と同一個体の可能性
59	145	前期前半・黒浜	2E-98-22	r	やや不良	灰黄褐色	白・砂少・繊維少	
59	146	前期前半・黒浜	2E-98-28	m	やや良	暗褐色	白・赤・繊維少	
59	147	前期前半・黒浜	3E-2-21	m	良	暗褐色	白・砂少・繊維少	
59	148	前期前半・黒浜	2E-16-1,9,12	r，m	やや良	灰暗褐～暗褐色	白少・砂少・繊維	a～c別に図化
59	149	前期前半・黒浜	2F-63-15	r	良	黒褐色	白・繊維少	
60	150	前期後半・諸磯a	2G-92-17,3G-4-3, 3G-30-1	r	良	褐色	白少・砂・雲母少	a，b別に図化
60	151	前期後半・諸磯a	3C-62-11	r	やや不良	暗褐色	白やや多・砂	
60	152	前期後半・諸磯a	2D-82-111	m	良	灰暗褐色	砂少・赤少・雲母 少	
60	153	前期後半・諸磯a	2E-32-11,12,13,16	m	良	暗赤褐色	白少・砂やや多	
60	154	前期後半・諸磯a	3D-25-2	m	良	褐～黄褐色	白少・砂	
60	155	前期後半・諸磯a	1墳~周3-12	m	良	褐色	白やや多・砂	
60	156	前期後半・諸磯a	2D-90-7	m	良	褐色	砂・礫片	
60	157	前期後半・諸磯a	2D-89-24,2D-99-47, 81,93,96,99,110	m	やや良	暗褐～暗赤褐色	白・砂(大)	a～e別に図化
60	158	前期後半・諸磯a	2D-90-6	m	やや良	暗褐色	白・砂(大)少	

縄文土器観察表(4)

挿図	No.	時期・型式名等	遺物番号	部位	焼成	色　調	胎　土	備　　考
60	159	前期後半・諸磯a	2E-69-37,2F-32-3,7, 2F-43-11,2F-62-1	r	良	黒褐～灰黄褐色	白少・砂やや多	
60	160	前期後半・諸磯a	1F-86-1	r	やや良	黒褐～暗褐色	白・砂少	
60	161	前期後半・諸磯a	2F-50-91	r	やや良	暗赤褐色	白・砂・雲母少	
60	162	前期後半・諸磯a	3G-64-1	r	良	灰暗褐色	白少・砂少	
60	163	前期後半・諸磯a？	1G-104	m	やや良	灰黄褐色	白やや多	
60	164	前期後半・浮島Ⅰ	2D-66-27, 2D-98-131,18-204	r	良	褐色	白・砂	a,b別に図化
60	165	前期後半・諸磯a？	2D-79-16	r	良	黒褐～暗褐色	白・砂・赤少	
60	166	前期後半・浮島Ⅰ	2D-66-3,2D-75-11, 2D-76-2,2E-54-1	r	良	暗褐～褐色	白・砂・赤少	a～d別に図化
60	167	前期後半・諸磯a	2D-78-28,2D-87-2, 2D-88-7,8,33, 2D-98-6,22,130	r	良	暗褐色	白少・砂やや多	
61	168	前期後半・諸磯b	3E-26-1,3E-57-1	r	良	暗褐色	白・砂少	a,b別に図化
61	169	前期後半・諸磯b	2G-44-15	m	良	暗褐色	白・砂少	
61	170	前期後半・諸磯b	2G-8-1	r	良	褐色	白やや多・砂	
61	171	前期後半・諸磯b	2E-79-48,31	r	良	暗褐～褐色	白・砂(大)少	
61	172	前期後半・諸磯b	2E-88-40	m	良	黄褐色	白・砂	
61	173	前期後半・諸磯b	2D-985	r	良	灰暗褐色	白少・砂少	
61	174	前期後半・諸磯b	2F-80-25,2F-90-10	m	良	暗褐～褐色	白多・礫片	a,b別に図化
61	175	前期後半・諸磯b	2E-89-22	m	良	褐色	白(大)多	174と同一個体の可能性
61	176	前期後半・諸磯b	3G-11-1	r	良	暗褐色	白やや多・砂	
61	177	前期後半・諸磯b	2E-79-20,2E-89-129, 2F-79-79	m	良	灰暗褐～褐色	白・砂やや多	
61	178	前期後半・諸磯b	2D-98-112	m	良	灰黒褐色	白(大)・砂	179と同一個体の可能性
61	179	前期後半・諸磯b	3E-17-1,3E-37-1	m	良	黄褐色	白(大)多	a,b別に図化
61	180	前期後半・諸磯b	2G-55-1	r	良	褐色	白(大)多	
61	181	前期後半・諸磯b？	2E-89-60	m	良	暗褐色	白少・砂少	
61	182	前期後半・諸磯b？	3E-24-1,83E-25-1	m	良	褐色	白・砂少	a～c別に図化
61	183	前期後半・諸磯b？	2D-82-42	m	やや良	暗褐色	白・砂少	
61	184	前期後半・浮島Ⅱ？	2F-29-6	m	やや良	暗褐色	白少・砂少	
62	185	前期後半・浮島Ⅱ	3E-19-1	r	良	暗褐色	白少・砂	
62	186	前期後半・浮島Ⅱ	4I-20-1	r	良	暗褐色	白・砂	
62	187	前期後半・浮島Ⅱ？	2F-50-28	r	やや不良	暗褐色	白・砂少	
62	188	前期後半・浮島Ⅱ？	116-4	r	良	黄褐色	白少・砂・赤少	
62	189	前期後半・浮島Ⅱ？	4I-12-1	m	良	褐色	白・砂少	
62	190	前期後半・浮島Ⅱ～Ⅲ？	21墳-周1-340, 1G-79-12	r	良	黒褐～暗褐色	白・砂少	a,b別に図化
62	191	前期後半・浮島Ⅲ	4G-70-1	r	良	黒色	白	
62	192	前期後半・浮島？	3I-61-1	m	良	褐色	白少・砂少	
62	193	前期後半・浮島？	2D-68-45,54	m	良	暗褐色	白・砂少	a,b別に図化
62	194	前期後半・浮島	2-10	r	良	黒褐色	白・砂・赤	
62	195	前期後半・浮島	2F-98-28	r	やや良	灰黒褐色	白・砂	
62	196	前期後半・浮島	2F-94-10	m	良	褐色	白少・砂・赤	
62	197	前期後半・浮島	2F-19-7,2F-29-3	r	良	褐色	白・砂少	
62	198	前期後半・浮島	3I-61-1	r	やや良	暗褐色	白・赤少	
62	199	前期後半・浮島～興津	21墳-覆4-2	m	良	暗褐～褐色	白・砂	
62	200	前期後半・浮島～興津	3H-63-1	m	良	暗赤褐色	白やや多・雲母少	
62	201	前期後半・浮島～興津	3H-42-12	m	良	黒褐～暗褐色	白やや多・赤少・雲母少	200と同一個体の可能性
62	202	前期後半・浮島～興津	2I-72-2	r	良	暗褐色	白少・砂少	
62	203	前期後半・浮島～興津	2G-36-51	r	良	暗褐色	白少・砂少	
62	204	前期後半・浮島	4I-9-1	m	良	暗赤褐色	白・赤少	
62	205	前期後半・興津Ⅰ	3H-67-1	r	良	褐色	白・砂少・雲母少	
62	206	前期後半・興津	2G-85-1	r	良	暗褐色	白少	
62	207	前期後半・興津	2G-95-19	r	良	暗褐色	白少	
62	208	前期後半・興津	3H-7-1	r	良	灰暗褐色	白・砂	
62	209	前期後半・興津	3G-28-6	r	良	灰暗褐色	白・砂少	
62	210	前期後半・興津	2H-92-10	r	良	褐色	砂・赤少	
62	211	前期後半・興津Ⅱ	2G-68-1	m	良	黒褐～褐色	白・砂少	

縄文土器観察表(5)

挿図	No.	時期・型式名等	遺物番号	部位	焼成	色調	胎土	備考
62	212	前期後半・興津Ⅱ	3I-49-1	r	やや良	暗褐色	白やや多・砂	
62	213	前期後半・興津Ⅱ	1-3	m	良	灰黄褐色	白・砂	
62	214	前期後半・興津Ⅱ	3H-21-1	m	良	黄褐色	砂・赤少	
62	215	前期後半・興津Ⅱ	3G-7-9	m	良	褐色	砂	
62	216	前期後半・興津Ⅱ	2G-1	m	良	灰黄褐色	白少・砂	
62	217	前期後半・興津Ⅱ	2G-80-5	m	良	黒褐色	白少・砂	
63	218	前期後半・浮島～興津	2H-1	r	やや良	黒褐色	白・砂	
63	219	前期後半・浮島～興津	?	r	良	黒褐色	白やや多・砂	
63	220	前期後半・浮島～興津	3H-86-3	r	良	灰黄褐色	白少・砂	
63	221	前期後半・浮島～興津	2G-88-3	r	良	褐色	白・砂少・赤	
63	222	前期後半・浮島～興津	3H-86-35,53, 3H-87-17	r	やや不良	暗褐色	白・砂・赤少	
63	223	前期後半・浮島～興津	1-136,140,172, 21墳-覆3-1	r	良	暗褐色	白少・砂	
63	224	前期後半・浮島～興津	2G-46-59,2G-54-1, 2G-57-28	m	良	暗褐～褐色	白少・砂少・赤少	a，b別に図化
63	225	前期後半・浮島～興津	2G-26-10	m	良	暗褐～褐色	砂・赤少	
63	226	前期後半・浮島～興津	2G-85-9,12	m	良	灰暗褐色	白少・砂・赤少	225と同一個体の可能性
63	227	前期後半・浮島～興津	3H-68-1	m	良	暗褐～褐色	白少・砂・赤少	
63	228	前期後半・浮島～興津	2G-89-2,21墳-覆1-2	r	良	暗赤褐色	白やや多・砂	a～c別に図化
63	229	前期後半・浮島～興津	2G-89-2	r	やや良	褐色	白やや多・砂	
63	230	前期後半・浮島～興津	2G-48-3	r	良	黒褐～暗褐色	白・砂	
63	231	前期後半・浮島～興津	2G-76-10,4,18	r	良	暗褐色	白・砂	
63	232	前期後半・浮島～興津	1-148	r	良	黒褐色	砂	
63	233	前期後半・興津	3I-90-1	r	良	黒～暗褐色	白少・砂	
63	234	前期後半・興津	2D-99-81	m	良	暗褐色	白少・砂	
63	235	前期後半・興津	2G-25-26	m	良	暗褐色	白	
63	236	前期後半・興津	21墳-覆3-2	m	良	暗褐色	砂	
63	237	前期後半・興津	21墳-覆3-1	m	良	黒褐色	白・砂	
63	238	前期後半・興津	2H-92-3,3H-1-21	m	良	灰黒褐色	白・砂	a，b別に図化
63	239	前期後半・浮島～興津	2G-84-3	r	良	黒褐色	白	
63	240	前期後半・浮島～興津	3I-71-1	r	やや不良	灰黄褐色	白少・砂	
63	241	前期後半・浮島～興津	3H-86-25,45	r	良	褐色	白やや多・砂・赤	
63	242	前期後半・浮島～興津	2E-32-3	r	やや良	褐色	白少・砂	
63	243	前期後半・興津以降	116-6	r	良	褐色	砂・赤	
63	244	前期後半・浮島～興津	2H-1	r	良	暗褐色	白・砂少	
63	245	前期後半・興津以降	2G-37-4,2G-47-50, 2G-56-1,2G-57-27, 22墳-覆4-2	r	良	黒褐～暗褐色	白・砂・赤少	
64	246	前期末葉・十三菩提	2E-41-5	b	良	褐色	白・砂(大)	
64	247	前期末葉・集合条線系？	2G-88-3	m	良	暗褐～褐色	砂・赤	
64	248	前期末葉・集合条線系？	3F-34-10,11	m	良	黒褐～暗褐色	白・砂	
64	249	前期末葉・集合条線系？	2F-17,2F-54-39	r，m	良	灰暗褐色	白・砂少	a，b別に図化
64	250	前期末葉・集合条線系	2E-71-20	m	良	灰黄褐色	白多・雲母	
64	251	前期末葉・大木系	2G-9-1	r	良	黒褐色	白(大)やや多	
64	252	前期末葉・大木系	3G-27-1	m	良	灰黒褐色	白(大)やや多	
64	253	前期末葉・大木系	2G-9-1	m	良	褐色	白(大)やや多	
64	254	前期末葉	4I-9-1	r	良	褐色	砂少	
64	255	前期末葉	2D-79-12	m	良	暗褐色	白	
64	256	前期末葉・全面縄文系	2G-1	r	やや良	灰暗褐色	白少	
64	257	前期末葉・全面縄文系	2G-72-19	r	良	暗褐色	砂	
64	258	前期末葉・全面縄文系	21墳-覆8-1	r	良	褐色	白・砂やや多	
64	259	前期末葉・全面縄文系	?-98-89	r	やや良	暗褐色	白やや多・砂	
64	260	前期末葉・全面縄文系	3F-2-8	m	良	黒褐色	白	
64	261	前期末葉・全面縄文系	2E-73-22	m	良	暗褐～褐色	白・砂少	
64	262	前期末葉・全面縄文系	21墳-周1-82	m	良	暗褐色	白	
64	263	前期末葉・全面縄文系	2D-55-16	m	良	暗褐色	白(大)多	
65	264	中期初頭・五領ヶ台Ⅰ	2G-24-1	m	良	暗褐色	白(大)・砂・雲母少	
65	265	中期初頭・五領ヶ台	2E-91-74	m	良	褐色	小礫・白(大)・砂・雲母少	

縄文土器観察表(6)

挿図	No.	時期・型式名等	遺物番号	部位	焼成	色調	胎土	備考
65	266	中期初頭・五領ヶ台	2E-56-38,2E-82-48	m	良	暗褐色	白(大)やや多・雲母少	
65	267	中期初頭・八辺Ⅰ	1墳-周1-40	r	良	褐色	白少	
65	268	中期初頭・八辺Ⅱ	3D-98-62	r	良	暗褐色	白やや多・砂少	
65	269	中期初頭・八辺Ⅱ～Ⅲ	2F-46-18	r	良	灰暗褐色	白やや多・砂	
65	270	中期初頭・大木７ａ	1墳-周4-1	r	良	灰黄褐色	白・砂少	
65	271	中期初頭	3G-5-1	r	良	灰暗褐色	白少・雲母少	
65	272	中期初頭・五領ヶ台	2E-42-1,2E-64-1, 3D-36-1	r	良	暗褐色	白少・砂	
65	273	中期初頭・八辺	2G-83-2	r	良	灰褐色	砂	
65	274	中期前葉・「法正尻タイプ」	2D-39-1,2F-66-22, 2F-67-24,2F-77-112, 2F-78-3,2F-87-30	r	良	灰黄褐色	白少・砂	ａ～ｃ別に図化
65	275	中期前葉・阿玉台Ⅰａ	2D-55-39,2D-58-2,40, 67,2D-68-52, 3D-14-1,3D-16-12	r	良	暗褐～褐色	小礫・白(大)多・砂・雲母	ａ,ｂ別に図化
65	276	中期前葉・阿玉台Ⅰａ	3D-6-21	r	良	暗褐色	白・砂少	
65	277	中期前葉・阿玉台Ⅰｂ	3H-66-1	r	良	褐色	白・砂少・雲母少	
65	278	中期前葉・阿玉台Ⅰｂ	2D-94-16	r	良	褐色	白・砂	
65	279	中期前葉・阿玉台Ⅰｂ	2F-80-4	m	良	暗褐色	白・砂・雲母	
65	280	中期前葉・阿玉台Ⅱ	2C-81-9	r	良	褐色	白少・砂・赤少	
65	281	中期前葉・阿玉台Ⅱ	2F-31-15	r	良	褐色	白・砂・雲母	
65	282	中期前葉・阿玉台	2G-66-40	m	良	褐色	白・赤	
65	283	中期前葉・阿玉台Ⅱ	2F-80-29	m	良	暗褐色	白・砂・雲母	
65	284	中期前葉・阿玉台	2E-75-8	m	良	褐色	砂・赤	
65	285	中期前葉・阿玉台Ⅱ	2F-90-6,22,2F-91-11	m	良	暗褐色	白少・砂・雲母やや多	
65	286	中期前葉・阿玉台Ⅱ	3D-16-12	r	良	褐色	白・砂少・赤	
65	287	中期前葉・阿玉台粗製	2D-94-12	r	やや良	暗褐色	白	
66	288	中期前葉・阿玉台Ⅱ～Ⅲ	3H-66-1	r	良	暗褐色	白・砂	
66	289	中期中葉・阿玉台Ⅲ以降	2E-46-10,18,52	r	やや良	暗褐色	白多・雲母	
66	290	中期中葉・阿玉台Ⅲ	3E-?0-1	r	やや良	黄褐色	白・砂	
66	291	中期中葉・阿玉台Ⅲ	3H-57-1	r	良	暗褐～褐色	白少・砂	
66	292	中期中葉・阿玉台Ⅲ	4H-24-1	r	良	褐色	白・砂	
66	293	中期中葉・阿玉台Ⅲ	3E-12-14	r	良	暗褐色	白(大)	
66	294	中期中葉・阿玉台Ⅲ	3H-57-1	m	良	褐色	白・砂	
66	295	中期中葉・阿玉台Ⅲ	2E-53-45	m	良	暗褐色	白・砂少・雲母	
66	296	中期中葉・阿玉台Ⅲ	2E-5?-51,2E-67-15	r	良	灰暗褐色	砂・赤少・雲母	
66	297	中期中葉・阿玉台Ⅲ	2E-64-58	m	良	黄褐色	白多・雲母	
66	298	中期中葉・阿玉台Ⅲ	2E-66-17,27	m	良	暗褐～黄褐色	砂・赤少・雲母少	
66	299	中期中葉・阿玉台Ⅳ	2E-26-11	r	やや良	暗褐色	白(大)多	
66	300	中期中葉・阿玉台Ⅳ	2E-86-1,19,2E-95-9	r	良	暗褐色	白(大)多・雲母少	
66	301	中期中葉・阿玉台Ⅳ	2E-65-29	r	良	暗褐色	白(大)・砂・雲母少	
66	302	中期中葉・阿玉台Ⅳ	2E-67-12	m	良	黄褐色	砂・雲母少	
66	303	中期中葉・阿玉台Ⅳ	2E-58-17,24	m	良	暗褐色	白多・赤	
66	304	中期中葉・阿玉台Ⅳ？	3F-20-3	r	良	暗褐色	白(大)少・砂	
66	305	中期中葉・阿玉台Ⅳ？	2E-36-8	r	良	暗褐色	白多・砂少・赤少	
66	306	中期中葉・阿玉台Ⅳ？	9-18	r	良	暗褐色	白多・砂	305と同一個体の可能性
66	307	中期中葉・阿玉台粗製	2D-69-13	r	やや良	褐色	砂少・雲母少	
66	308	中期中葉・阿玉台粗製	3E-36-1	r	やや良	暗褐色	白少・砂少	
66	309	中期中葉・阿玉台粗製	3E-46-1	r	やや良	褐色	白少・砂	
66	310	中期中葉・阿玉台粗製	2E-73-44	r	良	暗褐色	白(大)・雲母少	
67	311	中期前葉・勝坂Ⅱ	3E-10-1	r	良	褐色	白多・雲母	
67	312	中期前葉・勝坂Ⅱ	3E-10-1	r	良	褐色	白多・雲母少	
67	313	中期中葉・勝坂Ⅳ	2E-75-46,2E-79-3, 2E-96-25,2F-75-47, 3E-6-17	r	やや良	暗赤褐色	白やや多	
67	314	中期中葉・勝坂Ⅳ？	2E-68-28,29	r	良	暗褐色	白多・赤	
67	315	中期中葉・勝坂Ⅲ以降	2E-83-?,2E-72-19, 3E-6-33	m	やや不良	暗褐色	白少	ａ,ｂ別に図化
67	316	中期中葉・浅鉢	2E-64-1	r	良	暗褐色	小礫・白(大)多	

縄文土器観察表(7)

挿図	No.	時期・型式名等	遺物番号	部位	焼成	色調	胎土	備考
67	317	中期中葉・浅鉢	2E-53-10	r	良	灰暗褐色	白・砂・雲母少	
67	318	中期？	2E-64-9,22,24,40,55,72	m	やや良	暗褐色	白少・赤	
67	319	中期中葉～後葉・浅鉢	2E-63-26,37,38,101,102,2E-64-29,2E-73-26,91?,2E-75-60	r	良	暗褐色	白・雲母	
67	320	中期中葉？鉢	2E-83-68,2E-84-1,37,39,40,2E-88-24,2E-95-27	all	良	暗褐～褐色	小礫・白(大)多・雲母少	
68	321	中期後葉・加曽利E前半	2E-29-7,2E-39-20	r	良	暗褐色	白・砂少	
68	322	中期後葉・加曽利E前半	3B-18-1	r	良	黒褐色	白・赤少	
68	323	中期後葉・加曽利E前半	2E-7-10	r	良	灰黒褐色	白	
68	324	中期後葉・連弧文？	21墳-周1-20	m	良	暗褐色	白	
68	325	中期後葉	2G-68-1	r	良	黒褐色	白少・砂少	
68	326	中期後葉・加曽利E後半	22墳-周1-17,2G-71-1	r	良	暗褐色	白・砂少	a，b別に図化
68	327	中期後葉・加曽利E後半	21墳-周2-57	r	良	灰褐色	砂・赤少	
68	328	中期後葉・加曽利E後半	3G-5-1	m	良	灰黄褐色	白少・砂	
68	329	中期後葉・加曽利E後半	21墳-周2-3	r	良	褐色	白	
68	330	中期後葉～末葉・両耳壺	2E-27-3	r	やや良	黒褐～暗褐色	白・砂	
68	331	中期末葉・加曽利E末	3G-54-1	r	良	灰暗褐色	白・砂	
68	332	中期末葉・加曽利E末	3E-36-8	r	やや良	褐色	砂・赤	
68	333	中期末葉・加曽利E末	3E-14-15	r	良	灰暗褐色	白少・砂	
68	334	中期末葉・加曽利E末	3E-96-7	r	良	暗褐色	白少・砂	
68	335	中期末葉・加曽利E末	3E-35-2,3E-36-2,8	r	良	黒褐～暗褐色	白やや多	
68	336	中期末葉・加曽利E末	2E-43-7	m	良	黒褐色	白やや多	
68	337	中期末葉・鉢？	2E-91	r	良	黒褐～褐色	白	内外面赤彩
68	338	中期末葉～後期初頭	3E-35-4	r	良	暗褐色	白	鳥形把手
69	339	後期初頭・称名寺Ⅰ	2F-18-4	m	良	灰暗褐色	砂・赤少	
69	340	後期初頭・称名寺Ⅱ	3G-54-1	m	良	褐色	白	
69	341	後期初頭・称名寺Ⅱ	3G-64-3	m	良	黒褐～暗褐色	白やや多	
69	342	後期初頭・称名寺Ⅱ	3E-69-18	m	良	褐色	白少	
69	343	後期初頭・称名寺Ⅱ	2E-81-14	m	良	暗褐色	白・砂少	
69	344	後期初頭・称名寺Ⅱ	3B-18-1	r	良	暗褐～黄褐色	白・砂少	
69	345	後期初頭・称名寺Ⅱ	4I-10-1	r	良	暗赤褐色	白・砂	
69	346	後期前葉・堀之内1	2G-92-2	r	良	灰黒褐色	白少・砂少	
69	347	後期前葉・堀之内1	2E-76-10	r	やや良	暗褐色	白やや多・砂	
69	348	後期前葉・堀之内1	2I-2区-3	r	良	黄白色	白少・砂	
69	349	後期前葉・堀之内1	21墳-覆3-1	r	やや良	黄白色	白・砂	
69	350	後期前葉・堀之内1	2F-77-151	r	良	暗褐色	白やや多・砂	
69	351	後期前葉・堀之内1	2E-78-1	r	良	褐色	白・砂	
69	352	後期前葉・堀之内1	2F-41-1	r	良	褐色	白・砂少・赤少	
69	353	後期前葉・堀之内1	2F-55-49	r	良	暗褐色	白・砂少・赤	
69	354	後期前葉・堀之内1	2G-71-1	r	良	褐色	白少・砂	把手
69	355	後期前葉・堀之内1	2E-69-1	r	良	暗褐色	白・砂少・赤少	
69	356	後期前葉・堀之内1	2E-68-66	r	良	灰黄褐色	砂・赤少	
69	357	後期前葉・堀之内1	2F-95-44	r	良	黒褐～暗褐色	白・砂少・赤少	
69	358	後期前葉・堀之内1	3?	m	やや良	暗褐色	白少・砂やや多	
69	359	後期前葉・堀之内1	2F-88-13	m	良	暗褐色	白・砂	
69	360	後期前葉・堀之内1	2E-69-6	m	良	灰暗褐色	白・砂やや多	
69	361	後期前葉？	9-116	m	良	褐色	白・砂	
69	362	後期前葉・堀之内1	2E-41-2,3,14	m	良	灰黒褐色	白・砂	
69	363	後期前葉・堀之内1	3G-63-1	m	良	黒褐～褐色	白・砂やや多	
69	364	後期前葉	3G-13-2	m	良	褐色	白・砂	内面スス付着
69	365	後期前葉・堀之内1	21墳-覆1-2,21墳-覆4-2	m	良	暗褐色	白・砂少・赤少	
69	366	後期前葉・堀之内2	3E-?-29	m	やや良	黒褐色	白	
69	367	後期前葉・堀之内2	3H-35-1	r	良	褐色	白少・砂少・赤少	a，b別に図化
69	368	後期前葉・堀之内2	3G-20-1	r	良	灰褐色	白・砂少	
70	369	後期中葉・加曽利B1	3H-58-1,3I-58-1	r	良	黒褐～暗褐色	白・砂少	
70	370	後期中葉・加曽利B1	2E-39-29,2E-49-5,7	r	良	暗褐色	白・砂少	
70	371	後期中葉・加曽利B1	2G-48-8	m	良	褐色	白少・砂・赤少	

縄文土器観察表(8)

挿図	No.	時期・型式名等	遺物番号	部位	焼成	色　調	胎　土	備　　考
70	372	後期中葉・加曽利Ｂ２	2D-80-39	m	良	暗褐色	白少・砂少	
70	373	後期中葉・加曽利Ｂ２	2C-99-1	m	良	黒褐色	白少	
70	374	後期中葉・加曽利Ｂ２	3G-17-4	r	やや良	灰褐色	白・砂	
70	375	後期中葉・加曽利Ｂ２	2G-91-1	m	良	黒褐色	白	
70	376	後期中葉・加曽利Ｂ２	2E-74-42	m	良	暗褐色	白	
70	377	後期中葉・加曽利Ｂ２	2E-46-1,8,11,12,14,16,19,30,46,52	all	やや良	黒褐～褐色	白・砂	
70	378	後期中葉・加曽利Ｂ２	3H-25-1,3H-66-1	r	良	暗赤褐色	白・砂少・赤少	
70	379	後期中葉・加曽利Ｂ２	2E-15-9	r	良	暗赤褐色	白・砂	
70	380	後期中葉・加曽利Ｂ２	2F-21-1,2F-22-1	r	良	黒褐色	白	
70	381	後期中葉・加曽利Ｂ２	2G-55-1	r	良	暗褐～褐色	白少・砂・赤少	
70	382	後期中葉・加曽利Ｂ２	2G-46-32,48,54	m	良	黒褐～暗褐色	砂・赤	
70	383	後期中葉・加曽利Ｂ２～Ｂ３	3D-16-26	r	やや不良	暗褐～黄白色	白・黒少	
70	384	後期中葉・加曽利Ｂ２～Ｂ３	2E-88-1,2F-81-13	r	良	暗褐色	白・砂	a，b別に図化
70	385	後期中葉・加曽利Ｂ３	2F-18-6	r	良	黒褐色	白・砂少・黒少	
70	386	後期中葉・加曽利Ｂ３	2F-22-1	r	良	暗褐～暗赤褐色	白・砂	a，b別に図化
70	387	後期中葉・加曽利Ｂ３	2F-33-24,28	r	良	灰暗褐色	白	
70	388	後期中葉・加曽利Ｂ３	2F-24-4	r	良	暗褐色	白少・砂	
70	389	後期中葉・加曽利Ｂ３？	2F-16-10	m	良	暗褐色	白少	
71	390	後期中葉・粗製	2F-61-42,45,46,56,72,77	r	やや良	灰暗褐色	白・砂少	
71	391	後期中葉・粗製	2F-5-3,9,10	r	良	灰黒褐色	白少・砂少	
71	392	後期中葉・粗製	3D-02-3,7,14,15,17,3D-12-19,3D-13-6,27	r	良	褐色	白・砂	
71	393	後期中葉・粗製	2E-76-1,26,28,31	m	良	褐色	白・砂・赤少	
71	394	後期中葉・粗製	2F-27-12,2F-46-17,2F-56-3,4,6,7,8	r	良	暗褐～褐色	白やや多	
71	395	後期中葉・粗製	2F-5-6,2F-6-5,15,17,2F-16-1,11,12,2F-26-1,7,11,12,15,2F-36-1,17,19,26,27,30	r	良	灰黄褐色	砂・赤	
72	396	後期中葉・加曽利Ｂ２	3H-69-1	r	良	褐色	白・赤	
72	397	後期中葉・加曽利Ｂ２	3I-80-1	m	良	褐色	白やや多	
72	398	後期中葉・加曽利Ｂ２	3G-43-1	m	良	暗褐色	白・砂少	
72	399	後期中葉・加曽利Ｂ２？	2E-71-34,35,2E-72-13	r	良	黒褐色	白・雲母少	
72	400	後期中葉・加曽利Ｂ浅鉢	2E-00-7	r	良	褐色	白・赤	
72	401	後期中葉・粗製	2E-76-1	r	良	暗赤褐色	白少・砂少	
72	402	後期中葉・粗製	3D-9-8	r	良	暗褐色	白・砂・赤少	
72	403	後期中葉・粗製	2E-76-1	r	良	黒褐～暗褐色	白少・砂少	
72	404	後期中葉・粗製	2E-15-1,2E-25-5,2E-46-1	r	良	褐色	砂・赤	a，b別に図化
72	405	後期中葉・粗製	2F-31-2,8,22	r	良	灰黒褐色	白	外面スス付着
72	406	後期中葉・粗製	2F-61-39	m	良	褐色	白	
72	407	後期中葉・粗製	1G-78-2	m	良	灰暗褐色	白・砂・赤	
72	408	後期中葉・粗製	3H-35-1	m	良	褐色	白・赤	
73	409	後期後葉・曽谷	2E-21-11,13,15,17,22,24,41,43,45,50,55,57,2E-22-12	r	やや良	褐色	白・砂やや多・赤少	
73	410	後期後葉・曽谷？	3F-4-4,13,14,16～22,25,29,30,3F-6-9,3F-14-28,3F-16-4	all	良	暗褐色	白・砂・赤	
73	411	後期後葉・粗製	3F-40-4	r	良	灰暗褐色	白・砂少	
73	412	後期後葉・粗製	2E-20-1	m	良	暗褐色	白やや多	
73	413	後期後葉・台付鉢？	2F-5-4	r	良	灰黒褐色	白やや多	
73	414	後期後葉？・浅鉢	3E-33-14	r	良	黒褐～暗褐色	白少・砂少	
74	415	後期後葉・安行１	3E-7-18	r	良	褐色	白・砂少	
74	416	後期後葉・安行１	3E-5-143	r	良	暗褐色	白やや多・砂	
74	417	後期後葉・安行１	2B-75-33,2C-90-7	r	良	暗褐色	白少・砂・黒少	
74	418	後期後葉・安行１	3B-74-1	r	良	暗褐～褐色	白・砂	
74	419	後期後葉・安行１	1G-85-1	r	良	褐色	砂・赤・黒少	
74	420	後期安行・瓢形深鉢	2G-25-7,2G-26-24	r	良	褐色	砂少	
74	421	後期末葉・安行２	2G-25-9	r	やや良	黒褐色	白	

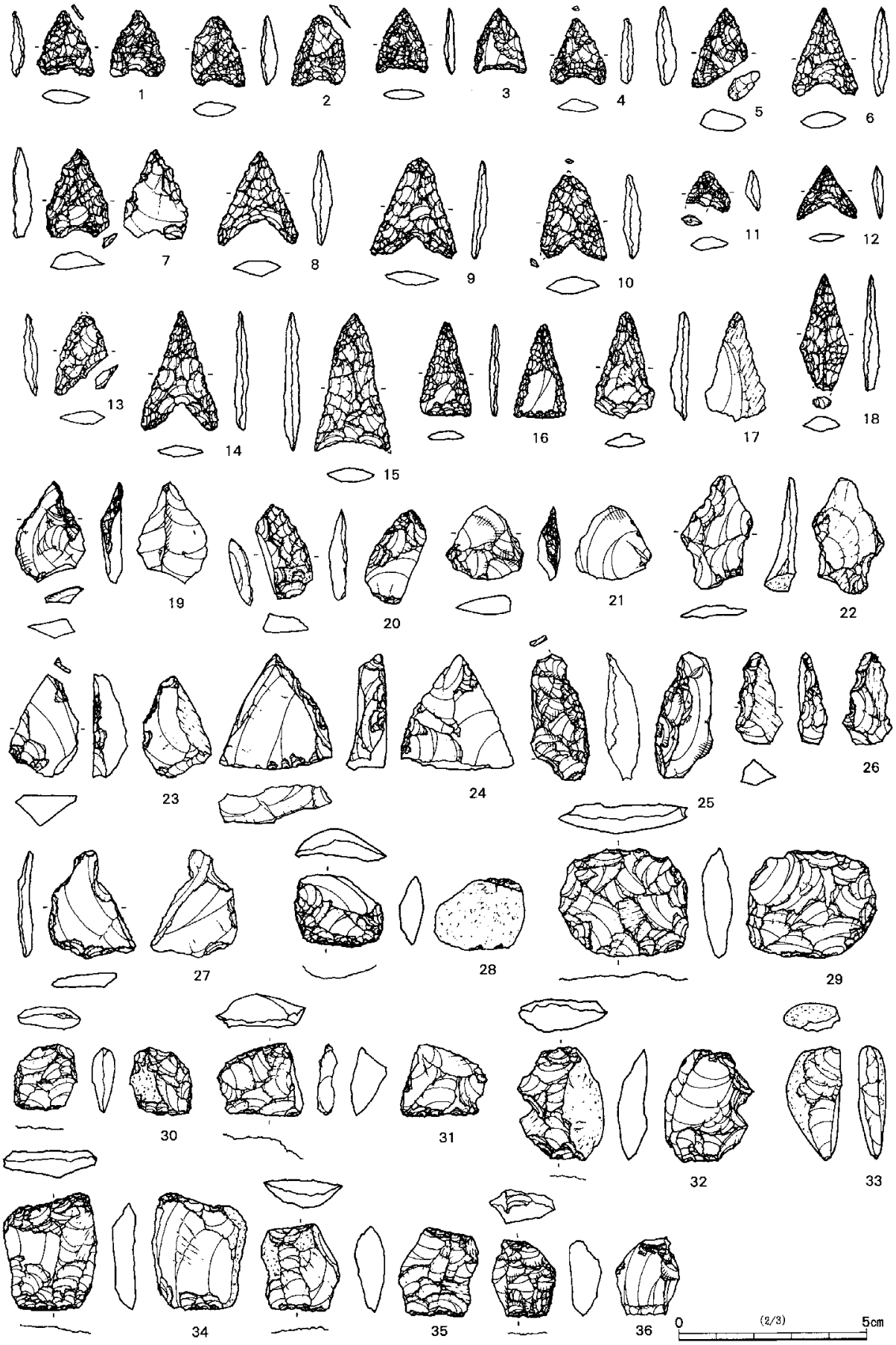
縄文土器観察表(9)

挿図	No	時期・型式名等	遺物番号	部位	焼成	色　調	胎　土	備　　考
74	422	後期末葉・安行２	3I-80-1,3I-90-1	r	良	灰黄褐色	砂・赤	
74	423	後期末葉・安行２	3B-6-2,3B-38-1	r	良	暗褐～褐色	白少・赤・黒少	a，b別に図化
74	424	後期末葉・安行２？	2G-25-15,2G-34-17, 21墳-覆3-2	r	良	暗褐色	白少・砂・赤	a，b別に図化
74	425	晩期前葉・安行３ａ？	22墳-覆4-4	m	良	褐色	砂・黒	
74	426	晩期前葉・安行３ｂ	2G-43-1	r	良	灰黒褐色	白やや多	
74	427	晩期前葉・安行３ｂ	2B-75-32	r	やや不良	灰色	砂	
74	428	晩期前葉・姥山Ⅱ	3E-48-3	r	良	灰暗褐色	砂・赤	
74	429	晩期前葉・姥山Ⅱ	3G-18-37	m	良	灰黄褐色	白少・砂・赤	
74	430	晩期前葉	2F-90-4	r	良	暗褐色	白少・砂・赤	
74	431	晩期前葉	3B-73-2,3B-74-1	r	良	灰暗褐色	白少・砂・赤	
74	432	晩期前葉	37-20	r	良	褐色	白・砂少・赤	
74	433	晩期前葉？	2F-28-5	m	やや良	灰黒褐色	白・砂	
74	434	晩期前葉	3E-68-2	r	良	暗褐色	白少・砂・赤	補修孔あり
74	435	晩期前葉	2B-66-21	r	良	暗褐色	砂・赤	
74	436	晩期前葉	2E-34-1,21	r	やや不良	黒褐色	白少・赤	
74	437	晩期前葉	3G-66-21	r	良	暗褐色	白・赤・黒少	
74	438	晩期前葉	1墳-周2-11	r	やや不良	黄白色	白・砂多	
74	439	晩期前葉	2E-67-49	r	良	黒褐～暗褐色	白・砂	
74	440	晩期前葉	1墳-周3-12	r	やや良	黒褐～褐色	砂・赤	439と同一個体の可能性
75	441	晩期前葉	2E-57-1,17,50,70,73, 74	r	やや良	暗褐色	砂・赤	
75	442	後～晩期安行・粗製	3E-48-3	r	良	暗褐色	白少・赤	
75	443	晩期前葉・姥山粗製	3E-58-1,3E-46-1	r	良	暗褐色	砂・赤少	
75	444	晩期前葉・姥山粗製	3E-58-1,3E-59-36,38	r	やや良	暗褐色	白・砂・赤	
75	445	後～晩期安行・粗製	3E-59-9,14～17,20,27, 28,3E-69-10,16	r	良	暗褐色	砂・赤少	
76	446	後期安行・粗製	2F-80-79	r	良	暗赤褐色	砂・赤少	
76	447	後期安行・粗製	2B-86-68	r	良	褐色	白・砂・赤	
76	448	後期安行・粗製	注記なし	r	良	黒褐色	白少・砂	
76	449	後期安行・粗製	3F-44-5	r	良	黒褐～暗赤褐色	白・赤少・黒	
76	450	後期安行・粗製	3E-68-9	r	良	褐色	白・砂少	
76	451	後期安行・粗製	3E-42-1	r	良	褐色	白少・砂	
76	452	後～晩期安行・粗製	2E-49-12	r	良	暗褐～褐色	白・赤少	
76	453	後～晩期安行・粗製	2E-68-1	r	良	褐色	砂・赤少・黒少	a，b別に図化
76	454	晩期安行・粗製	2D-97-25	r	やや不良	褐色	砂	
76	455	晩期安行・粗製	2D-97-5	r	やや不良	灰黄褐色	砂・赤少	
76	456	晩期前葉・姥山粗製	2F-54-34	r	良	灰黒褐色	白・砂	
76	457	晩期前葉・姥山粗製	2B-98-5	r	良	褐色	白・赤少	
76	458	晩期前葉・姥山粗製	2B-96-7	r	良	灰暗褐色	白・砂少・赤	
76	459	晩期前葉・姥山粗製	2B-66-46	r	やや良	暗褐色	白・砂少	
76	460	晩期前葉・姥山粗製	3B-5-1	r	良	暗褐色	砂・赤やや多	
76	461	晩期前葉・姥山粗製	1墳-周3-12	r	良	褐色	砂・赤少	
76	462	晩期前葉・姥山粗製	3E-57-1	r	良	灰暗褐色	白少・砂	
76	463	晩期前葉・姥山粗製	3E-46-1	r	良	褐色	砂・赤少	
76	464	晩期前葉・姥山粗製	3E-57-1	r	良	暗褐色	白・砂	
76	465	晩期前葉・姥山粗製	2B-75-44,2B-85-32	r	良	黒褐～暗赤褐色	白・砂少	a，b別に図化
76	466	晩期前葉・姥山？粗製	2E-5?-?	m	良	褐色	砂・赤少	
76	467	晩期前葉・姥山粗製	1墳-周3-12	m	良	灰黄褐色	砂・赤少	
76	468	晩期前葉・姥山粗製	3E-58-22	m	良	暗褐色	白・砂・赤少	
76	469	晩期前葉・姥山？粗製	3E-68-2	m	良	黒褐色	白・砂	外面スス付着
77	470	晩期中葉・姥山Ⅲ？	2E-38-10	m	やや良	黒褐～暗褐色	白・砂	
77	471	晩期中葉・安行３ｃ	2B-86-36,68, 2B-98-18,3C-1-2	r	やや良	暗褐～褐色	白・赤少	ａ～ｃ別に図化
77	472	晩期中葉・安行３ｃ	2E-00-6	r	良	褐色	白・砂・赤少	
77	473	晩期中葉・安行３ｃ	3B-56-2, 3B-81-1,68-1	r	やや良	黒褐～褐色	砂	a，b別に図化
77	474	晩期中葉・安行３ｃ	2B-67-15,2B-68-3,8, 2B-77-74,78,79, 2B-87-53,55	r	やや良	黒褐～暗褐色	白・砂・赤少	
77	475	晩期中葉・安行３ｄ？	3G-44-2	r	良	黒色	白	

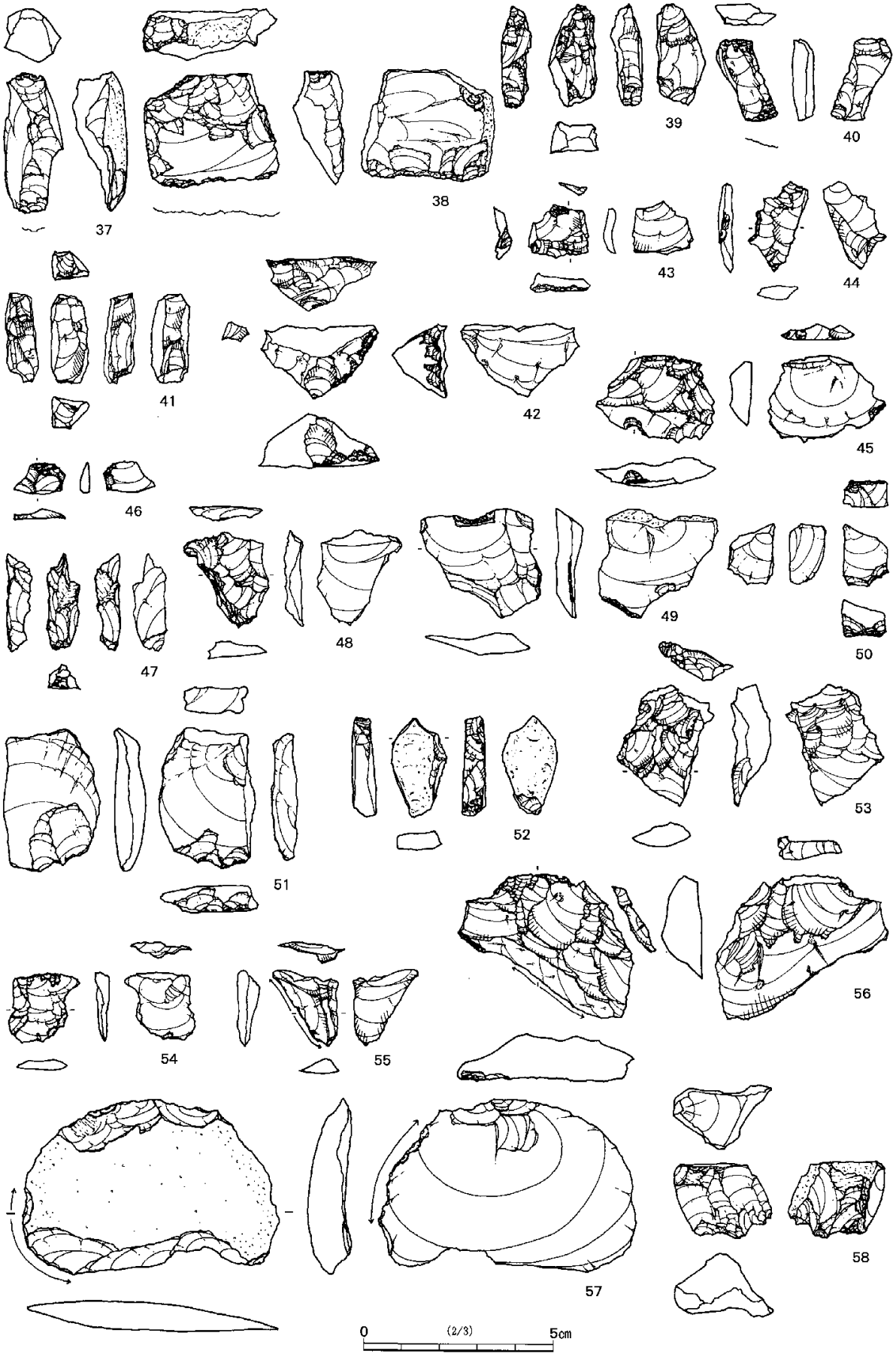
縄文土器観察表(10)

挿図	No.	時期・型式名等	遺物番号	部位	焼成	色調	胎土	備考
77	476	晩期中葉・安行３ｄ？	2B-79-18,19	m	良	暗褐色	砂・赤・黒	
77	477	晩期中葉・安行３ｄ？	3E-68-2	r	良	黒褐～暗褐色	砂・黒	
77	478	晩期中葉・前浦	3E-58-1,14,3E-59-5	r	良	褐色	白・砂少・赤少	a，b別に図化，補修孔(未貫通)あり
77	479	晩期中葉・前浦	2E-56-38	r	良	褐色	白・砂少	
77	480	晩期中葉・前浦	4I-21-1	r	良	褐色	白・砂少・赤少	
77	481	晩期中葉・前浦	3H-10-36	r	良	褐色	砂・赤	
77	482	晩期中葉・前浦	21墳-覆3-1	m	良	褐色	砂	
77	483	晩期中葉・前浦	110-3	r	良	暗褐色	白・砂	
77	484	晩期中葉・前浦	1-213	r	良	灰暗褐色	白・砂少	
77	485	晩期中葉・台付鉢	3G-13-1,3G-22-1	m	やや良	黄褐色	砂・赤	
77	486	晩期中葉？・台付鉢	3I-91-1	m	良	灰暗褐色	白・砂	接合部網代痕あり
77	487	晩期中葉？・粗製	2F-54-37	r	良	黒褐色	白やや多	
77	488	晩期中葉？・粗製	2B-54-10	r	やや良	褐色	白少・砂	
77	489	晩期中葉？・粗製	21墳-周2-62	r	良	灰黄褐色	白少・砂	
77	490	晩期中葉？・粗製	3E-17-1	r	良	暗褐色	白・赤少	
77	491	晩期中葉？・粗製	3E-59-36	r	良	褐色	白少・砂少・赤少	
78	492	晩期後葉・千網	3G-20-1,3G-32,40-1	r，m	良	黒褐～褐色	白少・砂少	a，b別に図化
78	493	晩期後葉・千網	?-3-26	r	良	灰黒褐色	白・砂少	
78	494	晩期後葉・千網	3E-12-1	m	良	褐色	白	
78	495	晩期後葉・千網	3F-14-4	m	良	黒色	白やや多	
78	496	晩期後葉・千網	3E-03-1	m	良	暗赤褐色	白・砂少	
78	497	晩期後葉・千網	3C-4-1,2	r	良	黒褐～黄褐色	砂少・黒	
78	498	晩期後葉・千網？	?	r	やや良	暗赤褐色	白・砂	
78	499	晩期後葉～末葉	3I-70-1,3I-92-1	m	良	黒褐～暗褐色	白少・砂少	a，b別に図化
78	500	晩期末葉・荒海	3E-12-1,3E-13-33,3E-33-11,3E-41-12,3F-12-4,18-27,30,64,82,89,95,146,157	r，m	良	黒褐～暗褐色	白少・砂	a～l別に図化
78	501	晩期末葉・荒海	3I-81-2	m	良	黒褐色	白	
78	502	晩期末葉・荒海	3I-72-1	m	良	黒褐色	白・砂	
78	503	晩期末葉・荒海	3E-32-1,3E-41-8,9,11,18-92,155,205	m	良	褐色	白少・砂	
78	504	晩期末葉・荒海	2C-66-10,13	m	良	褐色	白少・砂	a，b別に図化
79	505	中期初頭～前葉？	2E-12-1	b	やや不良	暗褐色	白やや多・砂	
79	506	中期後葉	2E-77-37,2E-78-20	b	良	褐色	白・赤少	
79	507	中期後葉～末葉	2E-42-1,2E-52-1	b	良	暗褐～褐色	白少・砂	内面スス付着
79	508	中期後葉～末葉	3E-3-22,30,32	b	良	褐色	砂	
79	509	中期後葉～末葉	3E-47-1,3E-48-3	b	良	褐色	白・砂	
79	510	中～後期	2E-64-26	b	やや不良	暗赤褐色	白	一部網代痕
79	511	中～後期	2E-57-68,2E-36-1	b	良	黒褐～赤褐色	白少・砂	
79	512	中～後期	3E-2-26	b	良	暗褐色	白やや多・砂	内面スス付着
79	513	中～後期	3E-57-1	b	良	暗褐～黄褐色	白・砂	
79	514	中～後期	2E-78-1	b	良	暗褐～褐色	白やや多・砂	
79	515	後期	2D-81-20,2D-83-15	b	良	暗褐～褐色	白少・砂	
79	516	後期	2E-33-1	b	良	黒褐色	白やや多	
79	517	後～晩期・安行	2E-85-5	b	良	暗赤褐色	白・砂	
79	518	後～晩期	3I-95-1	b	良	暗褐色	白・砂少	
79	519	後～晩期	2E-63-21,50,80	b	良	暗褐色	白・砂少・黒	
79	520	後～晩期・安行	3E-68-2	b	良	暗褐色	白・砂	

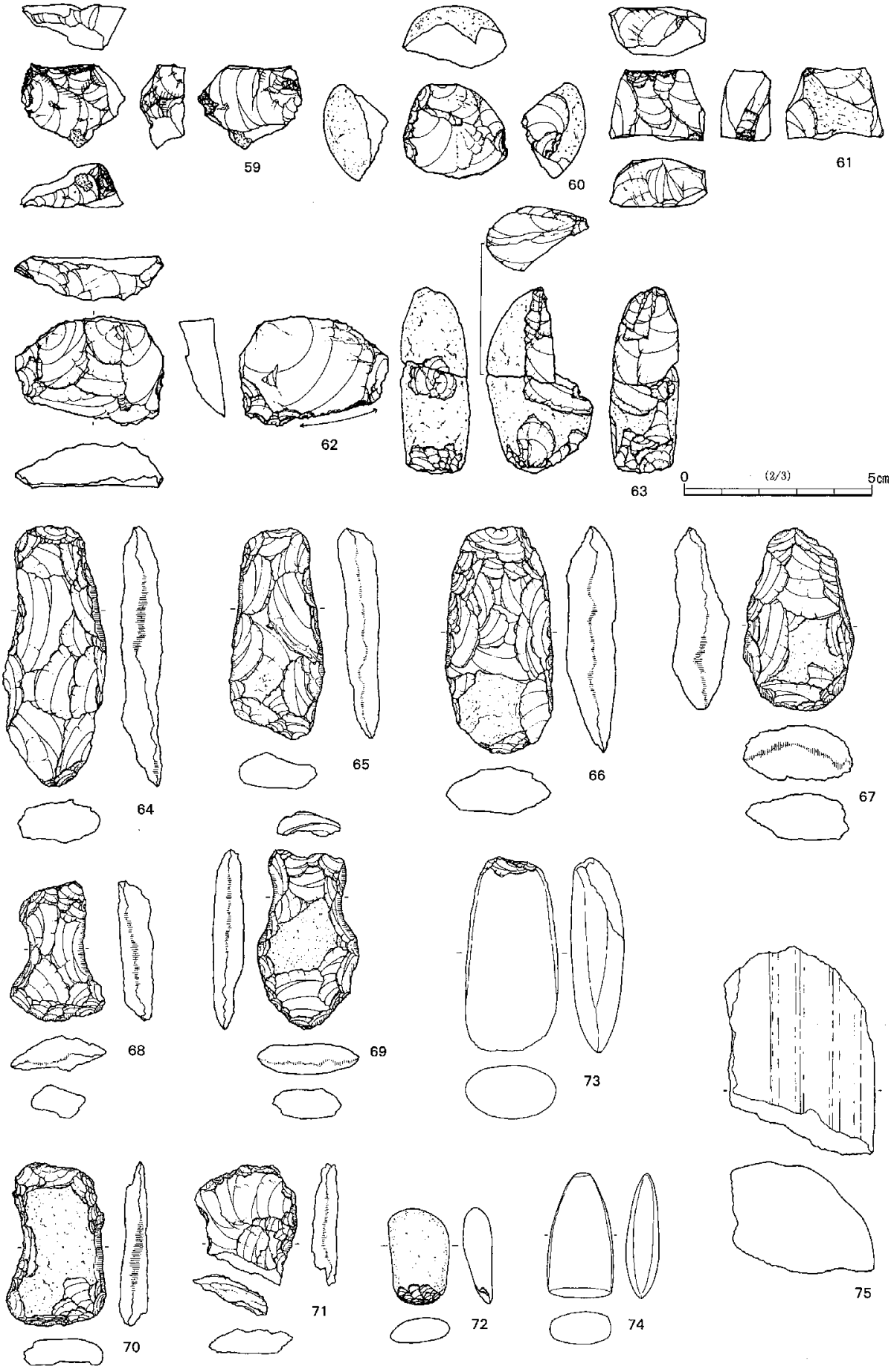
※部位欄の記号は，ｒが口縁部，ｍが胴部，ｂが底部を意味する。
※色調は外面の色調である。
※胎土欄の記号は，白が白色粒子，砂が砂粒，赤が赤褐色粒子，黒が黒色粒子，(大)は大粒を意味する。



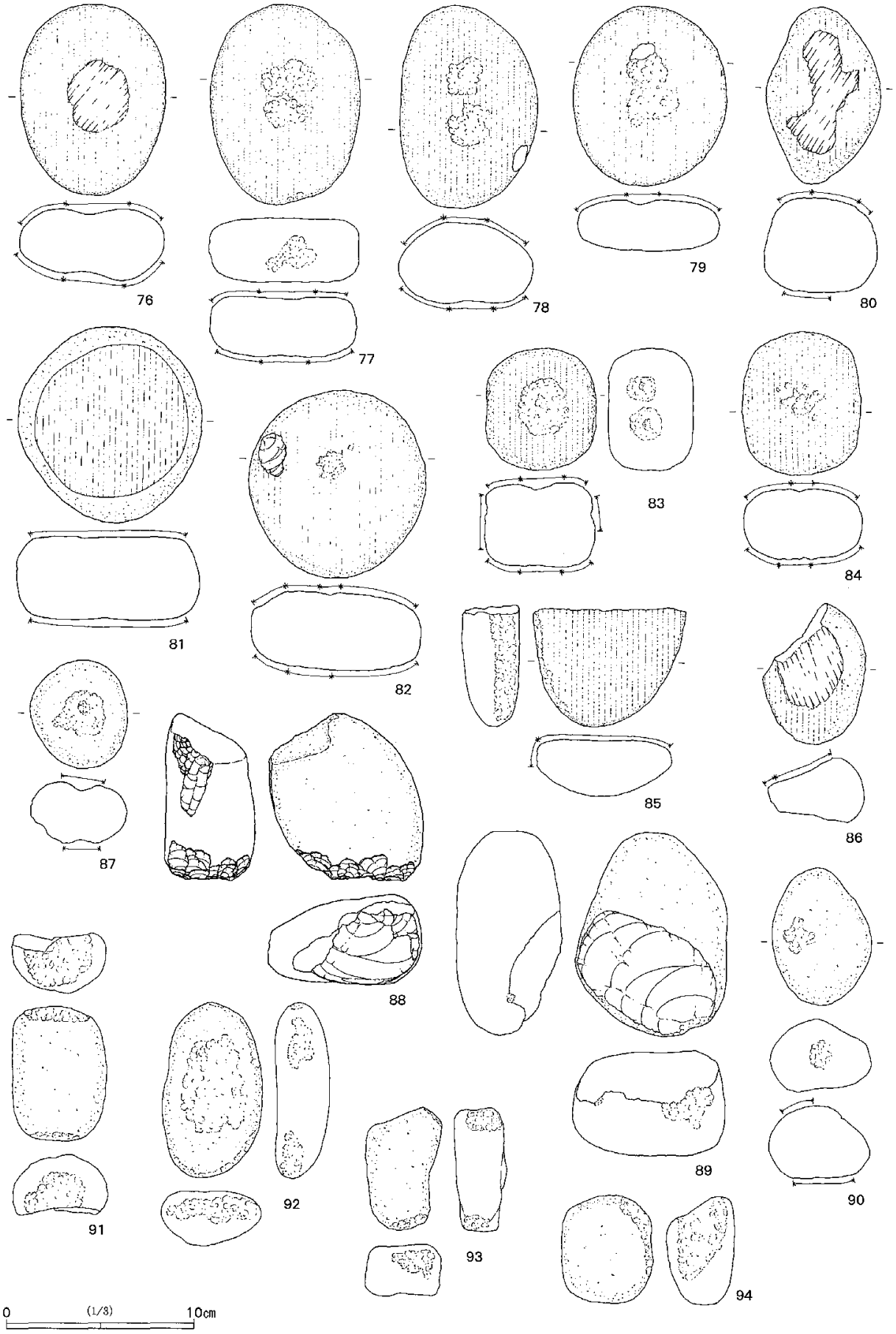
第81図　縄文時代石器(1)



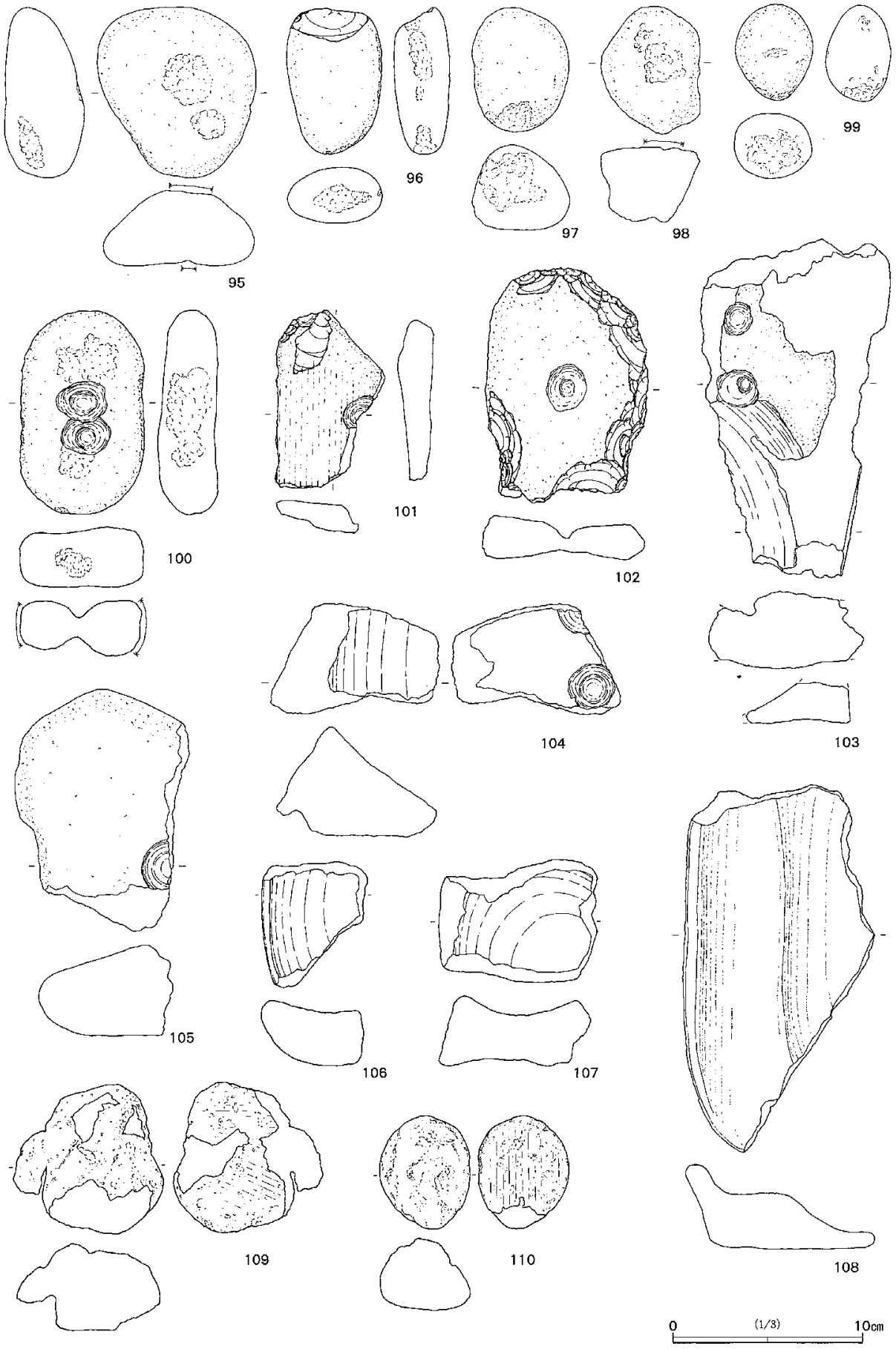
第82図　縄文時代石器(2)



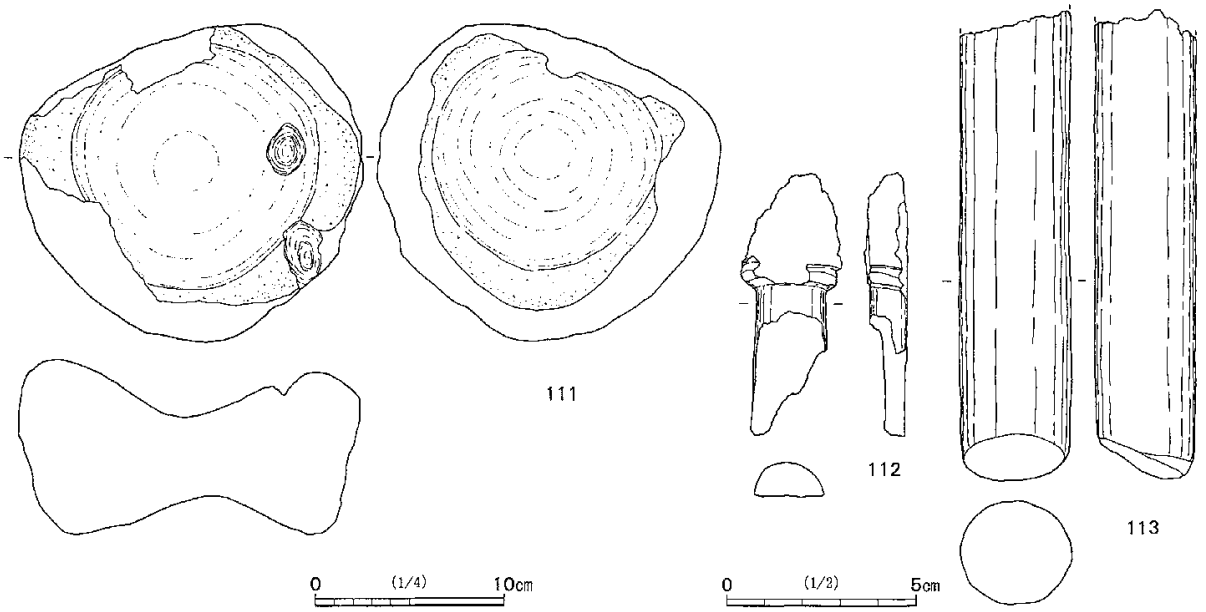
第83図　縄文時代石器(3)



第84図　縄文時代石器(4)



第85図　縄文時代石器(5)



第86図　縄文時代石器(6)

第18表　縄文時代土製品計測表

挿図	No.	種　類	遺物番号	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	遺存度	時期	備　考
80	1	玦状耳飾	22墳4区-7	34	(39)	12.5	9.7	1/2	前期後半	切れ目長11mm・赤彩
80	2	玦状耳飾	2H-91-6	33	(39)	10	7.1	1/3	前期後半	切れ目長13mm
80	3	耳栓	1-216	28	(30)	16	6.7	1/2	後期以降？	
80	4	土器片錘	3G-42-1	43	42	11	22.8	完形	中期後葉	
80	5	土器片錘	018-72	36	31	11	16.3	完形	中期後葉？	
80	6	土器片錘	3E-1-7	28	41	11.5	14.8	完形	中期後葉？	
80	7	土器片錘	2E-78-1	39	27	8	9.2	完形	中期中葉	
80	8	有孔土製円板	2E-91	32	32	11	11.7	完形	中期末葉	孔径8mm
80	9	人面付き土版	2B-85-2, 2B-86-52	〈55〉	87	27	129.0	1/2	晩期中葉	

第19表　縄文時代石器計測表(1)

〈 〉内は現存値

番号	遺物番号	器　種	石　材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	017-44	石　鏃	黒曜石	1.7	1.4	0.37	0.66	
2	2E-41-6	石　鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.44	0.93	
3	3H-64-3	石　鏃	黒曜石	1.6	1.3	0.27	0.49	
4	2G-55-2	石　鏃	黒曜石	1.7	1.4	0.35	0.65	
5	2F-64—23	石　鏃	黒曜石	2.1	1.4	0.58	1.16	
6	3H-50-2	石　鏃	安山岩	2.3	1.7	0.45	1.23	
7	1号墳-周1	石　鏃	安山岩	2.3	1.6	0.48	1.71	
8	009-243	石　鏃	頁岩	2.4	2.1	0.51	1.45	
9	2F-40-1	石　鏃	チャート	2.5	2.2	0.37	1.42	
10	2F-60-105	石　鏃	チャート	2.2	1.7	0.47	1.38	
11	3H-87-11	石　鏃	黒曜石	1.1	1.1	0.39	0.35	
12	2B-84-8	石　鏃	チャート	1.3	1.5	0.24	0.31	
13	003-41	石　鏃	粘板岩	2.2	1.3	0.42	0.91	
14	017-10	石　鏃	チャート	3.1	2.0	0.34	1.35	
15	2F-33-21	石　鏃	安山岩	3.6	2.0	0.44	2.27	
16	3I-91-2a	石　鏃	チャート	2.4	1.3	0.25	0.68	
17	2D-57-16	石　鏃	粘板岩	2.8	1.5	0.4	1.42	
18	014-8	石　鏃	チャート	3.0	1.2	0.49	1.25	
19	3C-03-1	石鏃未製品	黒曜石	2.7	1.8	0.58	1.64	
20	2E-53-4	石鏃未製品	チャート	2.4	1.4	0.49	1.51	
21	3B-34-1	石鏃未製品	黒曜石	1.9	2.0	0.64	1.79	
22	3I-61-2-3	石鏃未製品	チャート	3.0	1.8	0.7	2.3	
23	2E-88-5	石鏃未製品	チャート	2.6	1.8	0.88	3.37	
24	2F-41-3	石鏃未製品	チャート	3.1	2.9	1.04	8.55	
25	3G-32-5	石鏃未製品	黒曜石	3.3	1.7	0.89	3.34	
26	3G-22-2	揉錐器未製品	チャート	2.3	1.2	0.79	1.68	
27	3B-66-3	石匙？未製品	粘板岩	2.8	2.2	0.41	2.43	
28	2D-63-93	楔形石器	珪質頁岩	2.4	1.8	0.7	3.09	
29	3D-06-11	楔形石器	雲母片岩	2.8	3.4	0.77	8.31	
30	3E-04-56	楔形石器	チャート	1.7	1.6	0.6	1.88	
31	3E-17-19	楔形石器	チャート	1.8	2.1	0.97	3.83	
32	3I-61-2-2	楔形石器	チャート	2.9	2.3	0.82	6.05	
33	3E-18-3	楔形石器	チャート	2.9	1.4	0.76	3.74	
34	3I-73-1	楔形石器	チャート	3.0	2.4	0.72	5.98	
35	004-7-1	楔形石器	チャート	2.3	2.0	0.78	3.63	
36	3I-93-2	楔形石器	黒曜石	2.0	1.6	0.84	2.75	
37	012-17	楔形石器	チャート	3.7	1.6	1.37	7.15	
38	21墳-4-1-A	楔形石器	チャート	2.8	3.4	1.33	15.39	
39	2F-38-4	楔形石器	黒曜石	2.6	12.0	0.84	2.71	
40	2F-66-2	楔形石器	黒曜石	2.1	1.5	0.55	1.42	
41	2F-92-17	楔形石器	黒曜石	2.3	1.0	0.8	2.23	
42	3B-44-2-1	二次加工剥片	黒曜石	1.9	3.0	1.32	5.2	
43	2C-73-60	二次加工剥片	黒曜石	1.3	1.5	0.42	0.59	
44	2C-82-11	二次加工剥片	黒曜石	2.0	1.9	0.42	0.97	
45	2D-71-43	二次加工剥片	黒曜石	2.2	3.1	0.67	3.99	
46	2E-36-38	二次加工剥片	黒曜石	0.8	1.2	0.24	0.26	
47	3I-95-2-6	二次加工剥片	チャート	2.5	0.8	0.64	1.18	
48	2G-95-3	二次加工剥片	珪質頁岩	2.5	2.2	0.45	1.9	
49	3G-28-5	二次加工剥片	頁岩	2.8	3.1	0.8	4.44	
50	3E-23-25	二次加工剥片	玉髄	1.6	1.1	0.93	1.84	
51	4I-91-2	二次加工剥片	ホルンフェルス	3.6	2.5	0.78	9.1	
52	1号墳-00	二次加工剥片	黒曜石	2.5	1.4	0.63	3.26	
53	2B-55-51	剥　片	黒曜石	3.1	2.4	1.08	5.08	
54	3B-44-2-2	剥　片	チャート	1.7	1.8	0.41	1.01	
55	2F-21-3	剥　片	黒曜石	2.0	1.7	0.56	0.93	
56	2C-85-21	二次加工剥片	黒曜石	3.6	4.6	1.25	13.0	
57	2B-96-38	剥　片	砂岩	4.4	6.7	1.08	32.3	
58	3E-18-2	石　核	チャート	1.7	1.8	0.82	2.38	
59	2E-55-8	石　核	黒曜石	2.2	2.7	1.17	5.28	
60	3E-18-6	石　核	チャート	2.5	2.7	1.69	11.6	
61	3I-95-2-5	石　核	チャート	1.9	2.5	1.31	8.74	
62	22墳-4-2-1	石　核	チャート	2.9	3.9	1.22	13.4	
63	2E-88-79 3E-08-13	石　核	チャート	4.9	2.8	1.87	28.38	2点接合
64	2E-78-60	打製石斧	砂岩	13.8	5.5	2.23	185.12	短冊形
65	2E-65-7	打製石斧	砂岩	11.2	5.0	1.89	127.18	短冊形
66	2F-22-3	打製石斧	砂岩	12.0	5.7	2.76	249.94	短冊形
67	2E-56-14	打製石斧	ホルンフェルス	9.6	5.9	3.04	169.58	洋梨形
68	3B-29-3	打製石斧	砂岩	7.4	5.0	1.86	58.85	分銅形

縄文時代石器計測表(2)

〈 〉内は現存値

番号	遺物番号	器　種	石　材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
69	2E-57-67	打製石斧	砂岩	9.5	5.3	1.66	101.99	分銅形
70	2D-80-8	打製石斧	粘板岩	8.6	5.2	1.55	81.41	撥形
71	003-24	打製石斧	ホルンフェルス	〈6.4〉	5.4	1.35	46.05	分銅形
72	2C-76-9	礫　斧	凝灰岩	5.1	3.2	1.41	34.05	
73	3D-18-141	磨製石斧	砂岩	10.3	4.8	2.82	233.32	両刃
74	045-33	磨製石斧	安山岩	6.6	3.5	1.7	61.03	両刃
75	3F-24-4	砥　石	流紋岩	〈11.0〉	〈8.1〉	〈6.47〉	505.0	
76	2E-67-72	磨　石	砂岩	10.2	7.7	3.88	465.0	
77	2E-26-14	磨　石	安山岩	10.7	7.9	3.3	480.0	
78	4I-11-2	磨　石	石英斑岩	10.8	7.3	4.7	535.0	
79	2F-88-6	磨　石	砂岩	9.6	8.2	2.96	365.0	
80	017-89	磨　石	砂岩	9.4	6.0	5.14	390.0	
81	21墳-封4-83	磨　石	安山岩	10.4	9.7	4.5	795.0	
82	3I-93-2-A	磨　石	安山岩	10.0	9.4	4.28	645.0	
83	2F-73-41	磨　石	安山岩	6.5	5.8	4.5	287.94	
84	3E-07-8	磨　石	安山岩	7.6	6.3	4.02	316.93	
85	2E-55-5	磨　石	砂岩	6.2	8.1	3.11	227.84	
86	21墳-封4-1	磨　石	砂岩	〈7.4〉	5.5	3.42	141.86	
87	?-81-48	敲　石	安山岩	5.8	5.1	3.32	118.31	
88	3D-16-30	敲　石	頁岩	9.9	7.5	4.85	440.0	
89	3F-30-2	敲　石	砂岩	10.7	8.1	5.62	670.0	
90	3G-64-2	敲　石	砂岩	7.3	5.2	4.01	203.57	
91	2E-30-10	敲　石	砂岩	7.0	4.9	31.0	167.47	
92	2E-56-16	敲　石	チャート	9.2	5.2	2.89	203.27	
93	2G-46-1	敲　石	チャート	6.6	3.9	2.7	105.94	
94	3D-17-30	敲　石	泥岩	5.1	5.9	3.59	145.58	
95	3D-18-184	敲　石	石英斑岩	9.3	8.1	4.28	390.0	
96	3E-48-2	敲　石	砂岩	7.6	5.0	2.91	158.0	
97	3I-93-2-B	敲　石	チャート	6.5	5.0	4.61	204.07	
98	2E-75-20	敲　石	チャート	6.6	5.4	4.01	174.04	
99	3H-86-59	敲　石	チャート	5.1	4.1	3.5	95.64	
100	2F-71-69	凹　石	安山岩	10.7	6.5	3.0	325.0	
101	2C-95-1	凹　石	緑泥片岩	9.4	5.7	1.88	106.19	
102	2F-18-10	凹　石	緑泥片岩	12.4	8.5	2.22	355.0	
103	2H-91-13,14	凹　石	緑泥片岩	18.0	10.0	4.53	730.0	
104	2E-84-5	石　皿	安山岩	6.3	8.1	5.8	234.76	凹石に転用
105	2B-77-81	石　皿	流紋岩	12.4	10.8	5.82	850.0	凹石に転用
106	2F-55-22	石　皿	安山岩	6.6	5.8	4.02	132.69	
107	3E-68-16	石　皿	安山岩	7.7	6.4	4.2	166.16	
108	3E-15-106	石　皿	安山岩	19.5	10.2	5.2	380.0	
109	3D-25-101A	軽　石	浮岩	7.9	6.3	4.71	59.15	
110	1-19-1	軽　石	浮岩	6.0	4.7	3.76	23.59	
111	2E-56-19	石　皿	安山岩	16.4	18.2	9.3	3,490.00	
112	2E-15-11	石　棒	粘板岩	〈6.9〉	2.5	〈1.04〉	17.44	
113	2F-92-19	石　棒	緑泥片岩	〈12.4〉	2.9	2.75	200.26	

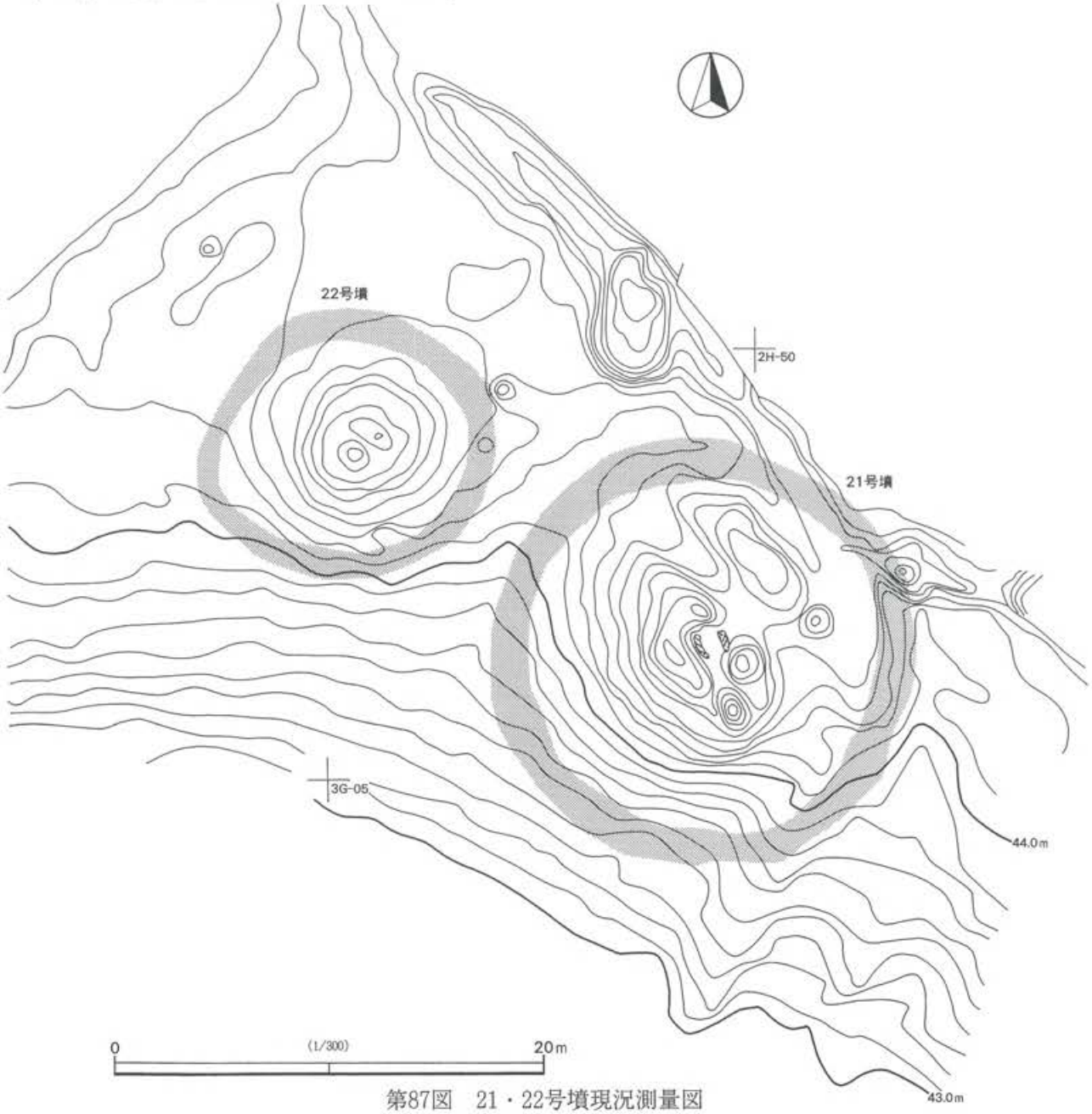
第4章　古墳時代以降

第1節　古　墳

21号墳

位置と現況（第87図，図版3）

調査区の東側，舌状台地の基部付近で，標高43.5m～44.5mの平坦地から緩斜面にかかる位置に占地している。22号墳が北西に隣接する。南西側周溝の一部を利用して002有天井土坑が構築され，その周辺には施釉陶器が散布するなど，奈良・平安時代の遺構に削平されている箇所もある。また北側から南側にかけて，近代の溝状遺構が曲線的に走り，その範囲が壊されている。墳丘はわずかに残っていたが，石室の上面の一部がすでに露出しており，前庭部も攪乱を受けている。石室の構築材である砂質粘土も風化が進み，全体に遺存状態はあまり良好ではない。



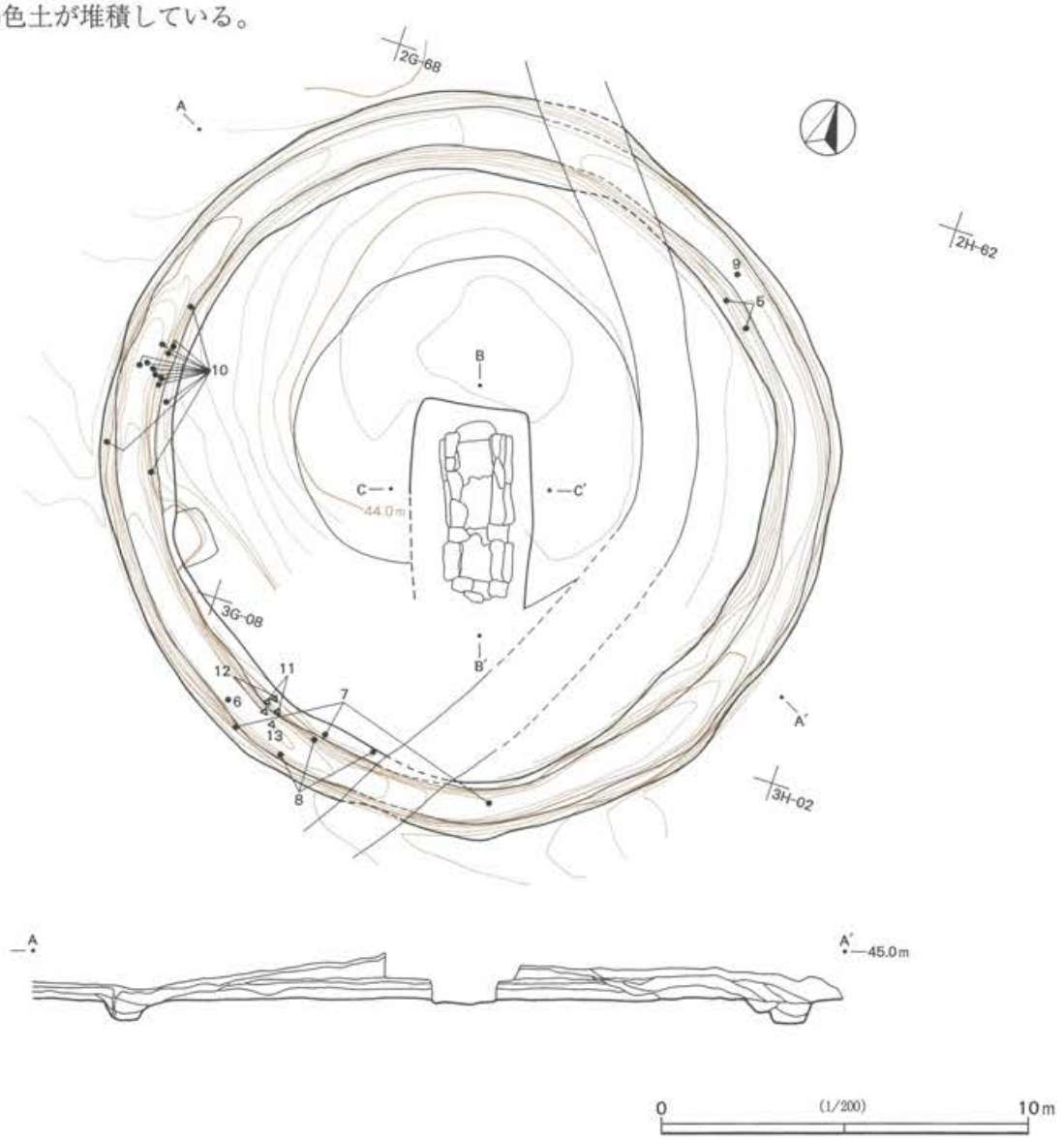
第87図　21・22号墳現況測量図

墳丘と周溝（第88図，図版７）

円墳である。調査前の現況測量では，攪乱のため墳形は判然としなかったが，発掘調査の結果，周溝が比較的整った形態の円墳であることが判明した。現地表面からの高さは，0.8m～1.5mである。

墳丘は，旧表土である黒褐色土の上に盛土によって築造されているが，遺存状態は悪く，旧表土上面から残存している墳頂まではわずかに87cmである。暗褐色土が主体の土層が積み上げられているが，墳丘の本来の築造方法は不明である。旧表土層は，墳丘の中央部の9.0m×9.5mの範囲にほぼ水平に堆積している。旧表土層と周溝の間は角度をもって削平され，旧表土層との境に55cm前後の段を形成している。その範囲は，周溝に沿ってテラス状に円形に巡っている。

周溝は全周し，外縁径・内縁径はそれぞれ東西20.2m・16.5m，南北20.5m・16.8mを測り，ほぼ正円に近い形態である。上端は約1.5mの幅を保って巡るが，南側で1.2mと狭くなり，南東側では2.2mと最も広くなる。逆台形に掘り込まれ，深さは0.7m～0.8mを測り，南西側の広い範囲が最も深くなっている。溝底幅は0.9m～1.3mを測り，底面はやや凹凸がある。覆土は，暗黄褐色土がまず堆積し，その上に暗褐色土や黒褐色土が堆積している。

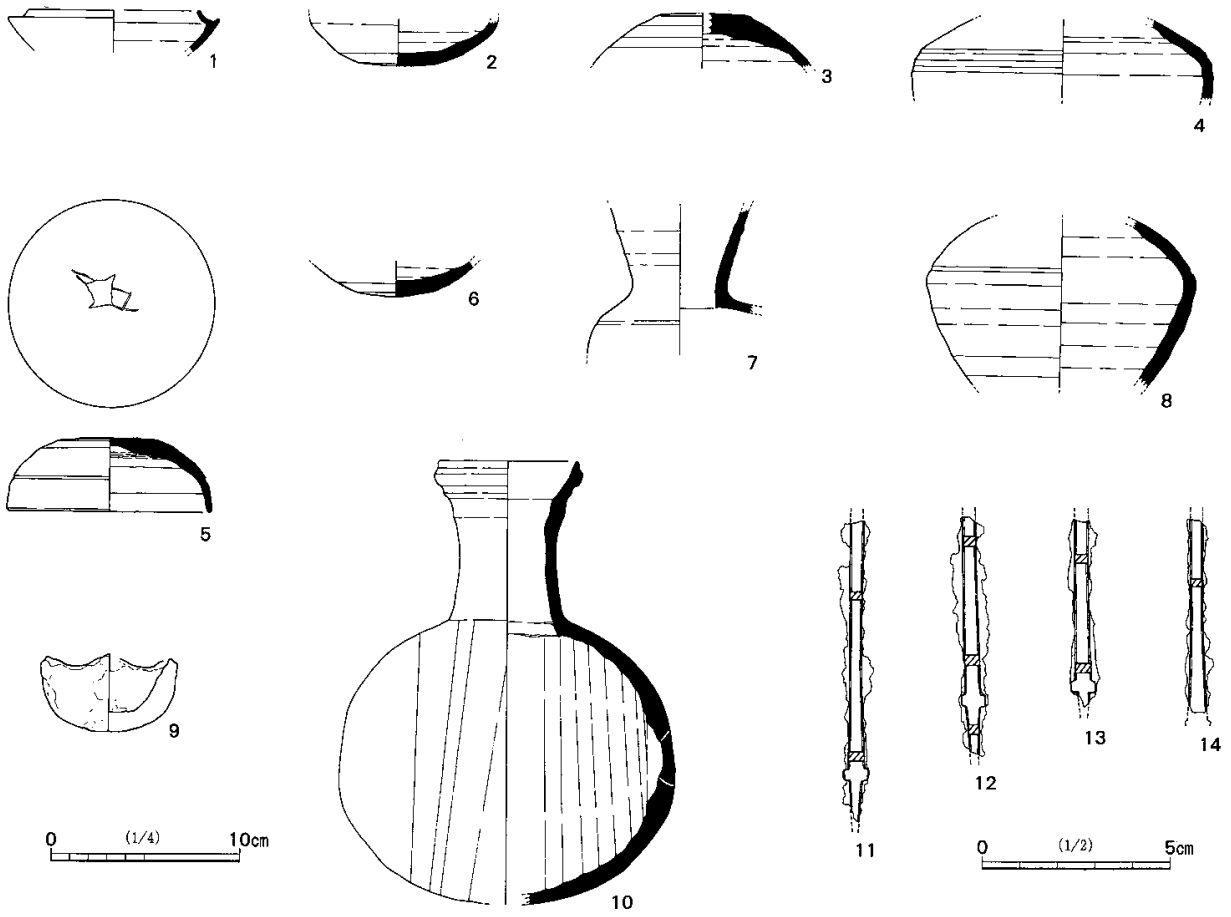


第88図　21号墳全体図

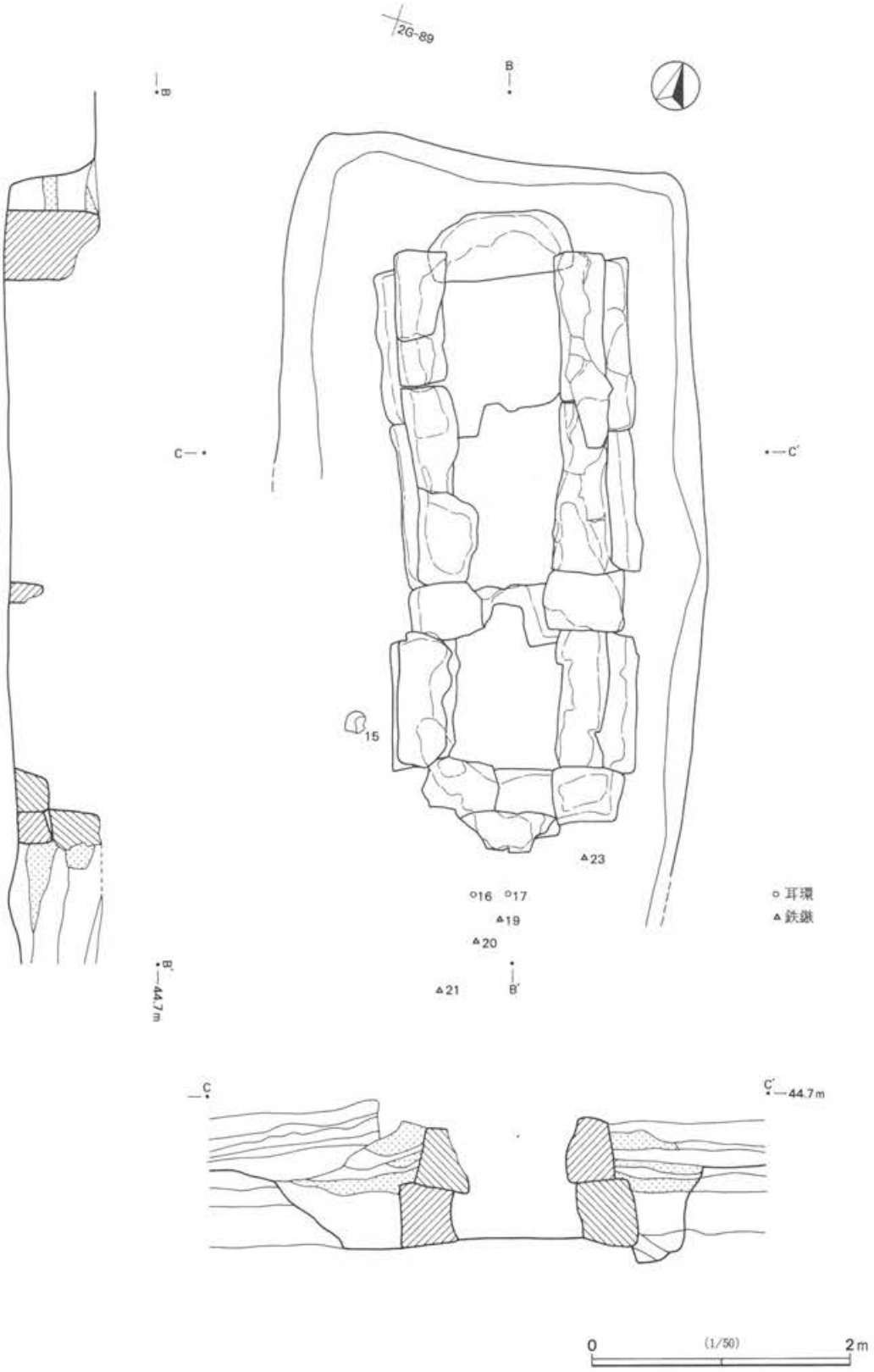
墳丘と周溝の出土遺物（第89図，第21表，図版46）

遺存していた墳丘の盛土内から，須恵器杯・壺などが出土しているが，いずれも破片である（１～５）。

周溝の覆土からは，土師器，須恵器や鉄鏃など，多数の遺物が出土している。特に周溝南側の前庭部周辺に分布が多いが，攪乱を受けているため本来の位置からは移動している遺物が多いと思われる。このうち，本古墳に伴うと判断されたもので図示できるのは，須恵器（６～８・10），手捏ね（９）と鉄鏃(11～14)である。５は須恵器杯蓋で，天井部にヘラ記号がみえる。周溝北東部からの出土で，手捏ねも周辺から出土している。10はフラスコ形瓶である。周溝の西側から破片の状態でまとまって出土した胴部の破片と，墳丘の盛土から出土した口縁部の破片が接合した。７の平瓶片と８の長頸壺の体部は，前庭部に近い周溝からの出土である。３本の鉄鏃(11～14)は，南側周溝の墳丘側からまとまって出土しているが，鏃身を欠き遺存状態は悪い。形態から長頸鏃の可能性が高い。



第89図　21号墳墳丘及び周溝内出土遺物



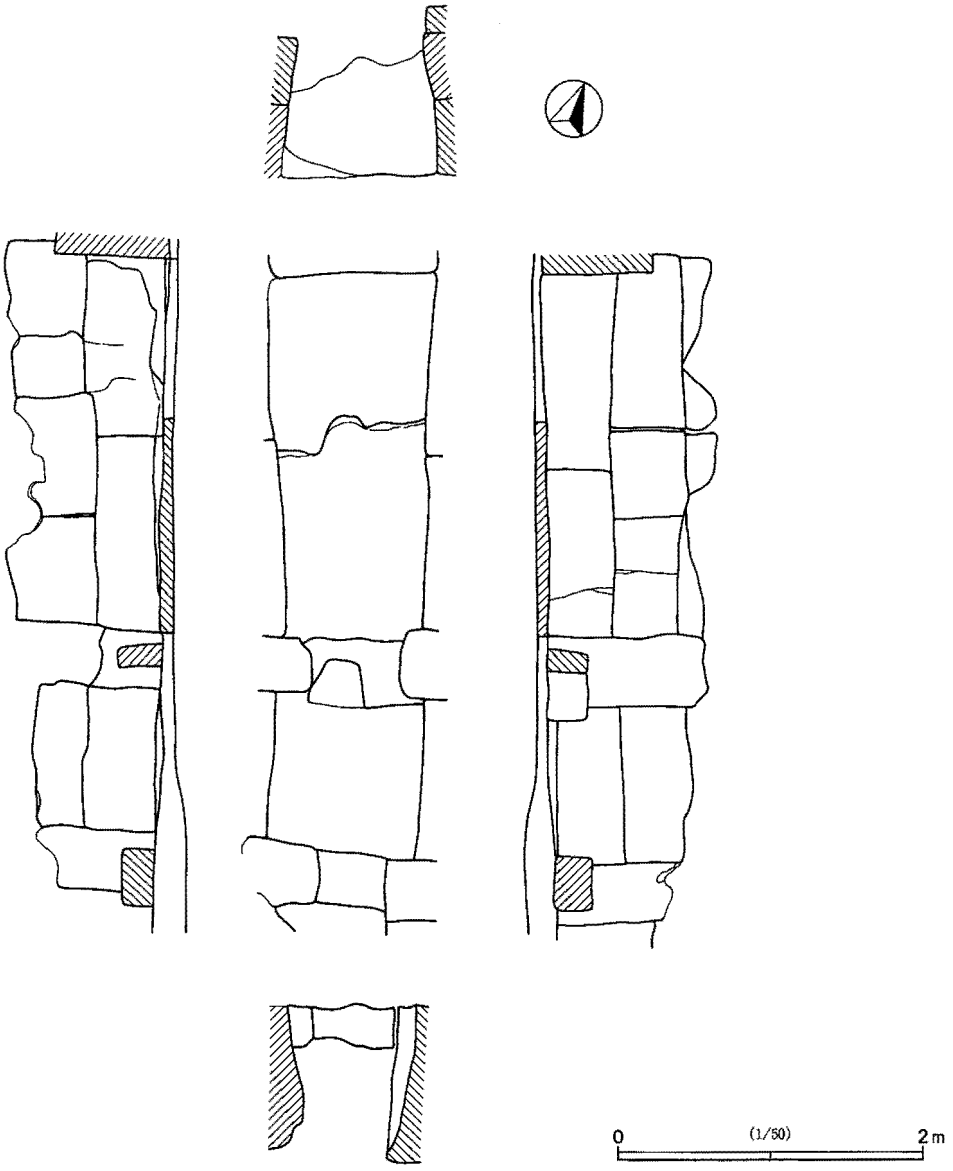
第90図　21号墳石室及び遺物出土状況

埋葬施設（第90・91図，図版７・８）

南東に開口する単室の横穴式石室である。盗掘や近代の溝状遺構による攪乱のため，石室の石材の一部が露出しており，その位置は容易に確認できた。石室は，古墳のほぼ中央部に設けられた掘方内に，軟質砂岩の截石を用いて構築されている。全長は4.7ｍを測り，主軸方向はN-23°-Wである。

掘方は，攪乱のため前庭部側と西側の約1/2が失われている。古墳の中央部に位置する掘方と周溝とは距離があるが，開口部と周溝がどのような形態で連絡していたのかは不明である。主軸方向はN-14°-Wで，石室の主軸より９°東へ振れている。長方形を呈すると考えられ，現存値で中心線上の長さ5.9ｍ，奥壁側の上端幅2.7ｍを測る。旧表土から掘り込まれ，深さは60㎝～64㎝である。

前庭部は攪乱のため形態や規模等は不明であるが，石室の前面の床面から耳環(16～18)や三角形鏃(19・20)，鉄鏃の箆被(21)，鍔(23)がまとまって出土した(第90図16～23)。また，22の長頸鏃は周溝に近い近代の溝状遺構から出土している。いずれも本来の位置は不明であるが，当初は石室内に副葬されていたものが追葬時に掻き出されたことも考えられる。



第91図　21号墳石室展開図

石室は両袖式の横穴式石室である。石室の一部はすでに露出し，特に盗掘のためか奥壁側では天井部が失われ陥没している。天井石の多くは石室内に崩落し，側壁上にわずかに残存する。奥壁は上部がすでに大きく破壊されている。側壁は２段に構築されているが，上段の石材の多くは風化が著しく，特に左側壁の遺存状態は悪い。また，奥壁と左側壁１段目の境付近は，盗掘のため欠損している。玄室内の床石も玄門側で一部が遺存しているが，奥壁側ではすでに失われ，掘方の底面が露出している。梱石も羨道部側の一部が大きく削り取られたような状態で，全体に遺存状態は悪い。

玄室床面の平面形態は長方形で，長さは主軸線上2.42ｍ・右側壁2.35ｍ・左側壁2.37ｍ，幅は中央部1.0ｍ・奥壁下1.05ｍ・玄門下0.9ｍを測る。高さは比較的遺存状態の良い右側壁の奥壁側で0.92ｍ～1.12ｍ，遺存が悪い左側壁では0.7ｍ～1.0ｍである。上部が破壊されている奥壁は，本来は外側がやや丸味をもつ台形に近い形態と考えられるが，現存で高さ0.5ｍ～0.77ｍ，下辺幅1.05ｍを測る。奥壁の側辺部には切り込みが施され，奥壁側に迫り出した左右の２段目の側壁とそれぞれ対応していたと思われるが，その部分の周辺が破壊されているため詳細は不明である。左右の側壁は２段に積まれ，ともに２枚ないし３枚の直方体の截石によって構築されているが，上段の遺存状態は悪い。両側壁間は床面で1.0ｍであるが，２段目上部では0.77ｍと次第に幅を減じる「持ち送り」が行われている。床面には数枚の板石(厚さ７㎝～12㎝)が敷かれていたが，奥壁側では攪乱のため失われている。

玄門には方柱状の截石が左右に配置され，その間には梱石が置かれている。右袖石は遺存状態は良好でやや内傾して現高1.0ｍを測るが，左袖石は上半部が完全に折れて羨道部内に倒れていた。梱石(厚さ40㎝)も羨道部側の中央部が攪乱のため大きく抉り取られたような状態になっており，床面からの高さは玄室側で26㎝，羨道部側では20㎝を測る。

羨道部は，左側壁側の遺存状態が悪く風化が進んでいる。床面の平面形態は長方形で，長さは主軸線上は推定で1.0ｍ・右側壁1.05ｍ・左側壁0.95ｍ，幅は玄門側・羨門側ともに0.85ｍを測る。高さは右側壁で0.9ｍ，左側壁では0.82ｍで，それぞれ玄室側の側壁と高さを揃えている。左右の側壁とも２枚の截石を２段に積み上げて構築されているが，右側壁側の截石の方が大きく加工されている。床面は凹凸があり，中央部がやや高くなっている。

羨門は玄門と同様に方柱状の截石を左右に配し，その間に梱石を置く。上面はすでに風化し遺存状態は悪い。閉塞には３段に４枚以上の截石が使用されている。右側壁側の上面がすでに失われているが，まず梱石上に平板な截石を載せ，その上に直方体の小形の截石を並列して置く。さらにその上に平板な截石を積み上げ，高さを羨門に揃えて閉塞していると想定される。

石室と掘方の間は，軟質砂岩屑・黒褐色土・暗褐色土で裏込めされ，その作業は截石の積み上げと並行して行われていたと考えられる。

遺物の出土状況（第90図，図版８）

埋葬施設では，羨道部床面から鉄鏃の破片７点が出土した。玄門袖石の倒壊等によりすでに小片となっており，図示することはできなかった。玄室からの出土はない。

石室掘方の羨道部左側壁付近の裏込めから，須恵器広口壺(第92図15)が出土した。裏込めの上層の位置で，石室構築の最終段階で置かれたものであろう。

出土遺物（第92図，第20・21表，図版46・48）

須恵器広口壺(15)　口縁部から肩部の一部を欠損しているが，遺存状態は良好である。全体に丸みをもち，口縁部は短く立ち上がる。胴部の張り出しは大きく，底部は粗いヘラケズリで小さく平底になる。

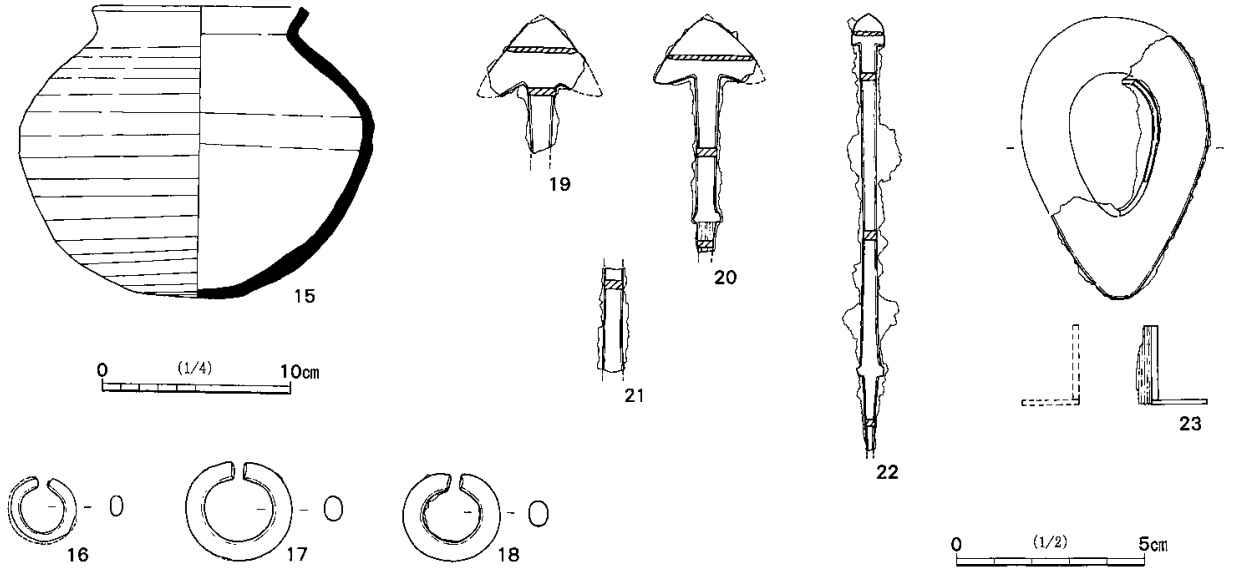
耳環(16～18)　いずれも銅芯で表面は銀板巻金鍍金の可能性が考えられるが，遺存状態が良好でないため断定はできない。16は他の耳環より小形で表面の一部が欠損している。前庭部から出土した。

第20表　耳環計測表

番号	遺物番号	径（cm）	断面径(cm)	重量(g)	備　考
16	11	1.75×1.68	0.54×0.31	3.13	一部欠損
17	32	2.80×2.60	0.64×0.50	12.35	
18	33	2.67×2.32	0.72×0.56	10.47	

鉄鏃(19～22)　三角形鏃(19・20)と長頸鏃(22)が出土している。19・20は，鏃身が広がり鏃身幅が鏃身長より長く，逆刺は浅い形態である。いわゆる飛燕式よりは，鏃身幅の開きは少ない。鏃身の造りは扁平である。22は鏃身が小さく篦被が長い形態をとる。鏃身はやや丸みをもつ三角形で扁平に造り，逆刺は浅い。篦被は8.8cmと長く，関部は棘状である。22は篦被の一部で，形態から三角形鏃の一部であろう。

鍔(23)　約1/2の遺存で，鎹の一部が装着している。鍔は倒卵形で無窓である。推定で長径7.4cm・短径4.9cmで，厚さは1.2cmである。鎹は1/3の遺存で内側に木質が付着し，長径3.8cm・短径2.35cmと推定される。遺存している長さは2.0cmである。現重量は18.11ｇである。



第92図　21号墳出土遺物

第21表　21号墳鉄鏃計測表

単位：cm

番号	遺物番号	全長	鏃身				篦被			茎			重量(g)	備　考
			長さ	幅	厚さ	逆刺長	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
11	047,198	7.95	—	—	—	—	6.85	0.32	0.25	1.10	—	—	3.38	周溝
12	199,226	6.32	—	—	—	—	5.10	0.40	0.30	1.22	—	—	4.52	周溝
13	200	4.95	—	—	—	—	4.55	0.40	0.23	0.40	—	—	2.55	周溝
14	227	5.10	—	—	—	—	5.10	0.35	0.20	—	—	—	2.34	周溝
19	019	3.60	2.05	2.60	0.15	0.35	1.80	0.75	0.20	—	—	—	4.23	前庭部
20	020	6.10	1.70	2.70	0.15	0.20	3.80	0.50	0.25	0.80	—	—	5.7	前庭部
21	031	2.85	—	—	—	—	2.85	0.50	0.25	—	—	—	1.71	前庭部
22	201,225	11.55	0.80	0.85	0.15	—	8.80	0.50	0.30	1.95	0.25	0.20	6.35	前庭部

※ 数値は現存値を示す。

22号墳

位置と現況（第93図，図版３・７）

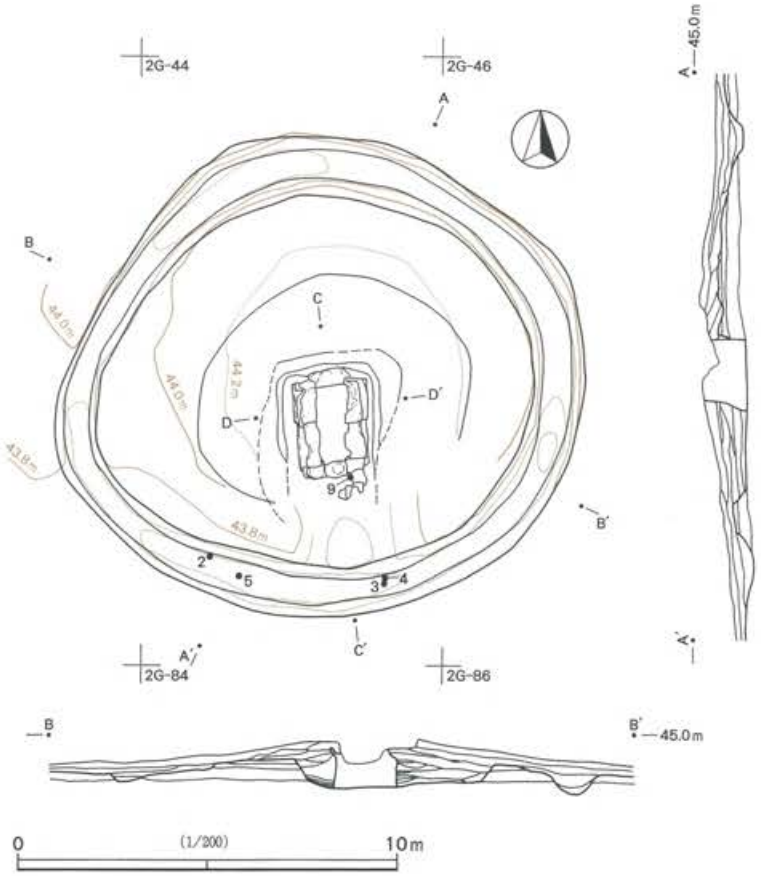
調査区の東側，舌状台地の基部付近で標高44ｍの平坦地に位置する。南東に21号墳が隣接している。墳丘は全体に削平され，特に前庭部付近の削平が大きい。石室の上面の一部がすでに露呈し風化が進んでおり，全体に遺存状態は悪い。

墳丘と周溝（第93図，図版７）

円墳であるが，21号墳のような整った形ではなく，東西に長く北西の周溝がやや直線的な，不整円形を呈している。現地表面からの高さはわずかに60㎝程度である。

墳丘は旧表土上に盛土によって築造されているが，削平されているため旧表土面は50㎝程度の盛土が残存しているにすぎない。盛土は，下部では暗褐色土や黒褐色土を積み上げているが，その上部や詳細な築造方法は不明である。旧表土は，墳丘の中央に径5.5ｍ×7.5ｍの範囲にほぼ水平に堆積している。旧表土と周溝の間は，緩やかに削平されテラス状に巡っている。

周溝は全周し，外縁径・内縁径はそれぞれ東西14.3ｍ・11.7ｍ，南北12.7ｍ・9.9ｍを測り，東西に長い不整円形である。上端幅は0.8ｍ～1.8ｍを測り，北側が最も広く，直線的な北西側が狭くなっている。溝底幅は0.6ｍ～1.1ｍで，底面は部分的に凹凸があるが，ほぼ平坦である。全体に緩やかに掘り込まれ，深さは0.3ｍ～0.6ｍを測る。覆土は暗褐色土を主体に，暗黄褐色土が混在している。

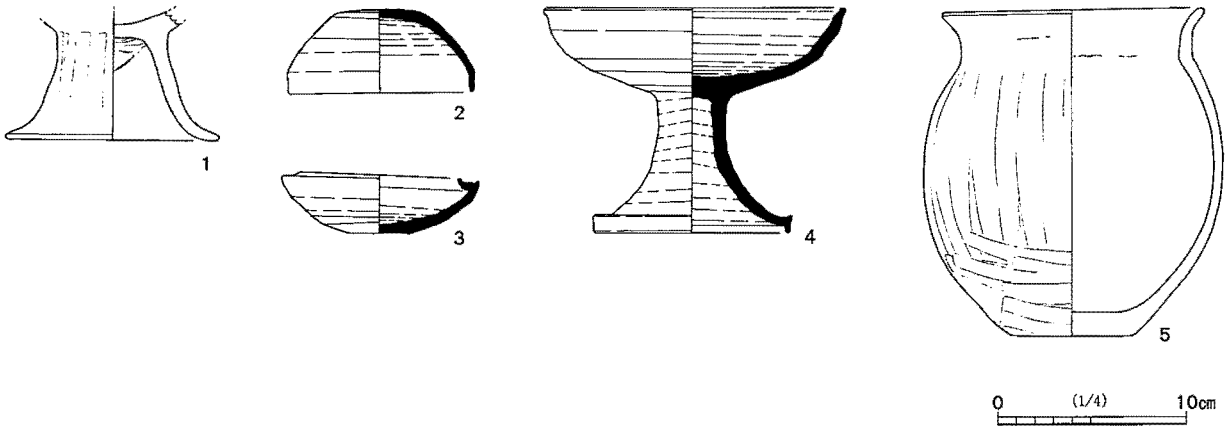


第93図　22号墳全体図

墳丘と周溝の出土遺物（第94図，図版９・46）

墳丘の盛土内からは，土師器や須恵器などが出土しているが，いずれも小片である（１）。

周溝内からは，須恵器や土師器などの遺物が出土している（２～５）。全体に散漫であるが，周溝南側の前庭部周辺からの出土が多い。特に須恵器では，４の高杯の杯部の縁に３の杯が乗った状態で出土した。ともに完形品で，本来は高杯内に杯を入れたまま，前庭部の開口部近くに置かれていたと考えられる。３の杯は，口縁部のたちあがりが低く内傾し，平底の底部を小さく削っている。４は，いわゆる半球形杯部をもつ高杯である。５の土師器甕は，細かく割れた状態で出土した。



第94図　22号墳墳丘及び周溝内出土遺物

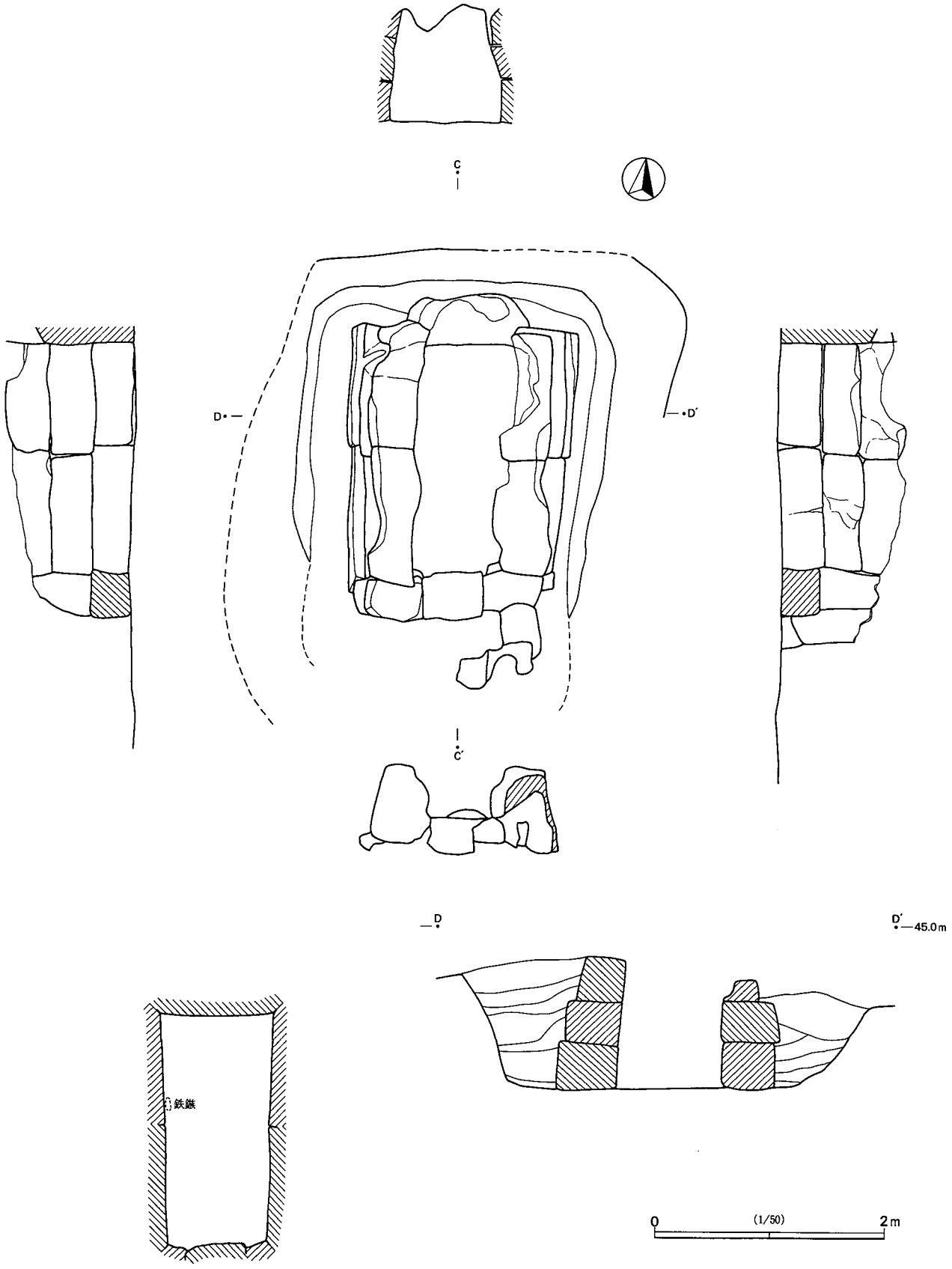
埋葬施設（第95図，図版９）

ほぼ南に開口する単室の横穴式石室である。すでに上面を削平され，石室を被覆していた粘土や石材の一部も露出している。石室は，古墳の中央部に設けられた掘方内に軟質砂岩の截石を用いて構築されている。全長2.85ｍを測り，主軸方向はN－４°－Wである。

掘方の形態等は遺存状態が悪く判然としないが，長方形を呈していたと考えられる。長さは推定で4.0ｍ，幅は奥壁側で3.5ｍ前後である。開口部や前庭部も不明である。奥壁側や西辺側は緩やかに75㎝程度掘り込まれているが，東辺側では60㎝と浅くなっている。

石室は両袖式の横穴式石室である。天井部はすでに失われ，天井石が石室内に崩落していた。奥壁上部や側壁上段の截石の多くが破損し，風化が進んでいる。短い羨道部が付設されていたようであるが，左側が完全に失われ，右側も截石の一部がわずかに残存している程度である。閉塞施設も遺存しておらず閉塞の状態も不明で，全体に遺存状態は悪い。

玄室床面の平面形態は長方形で，長さは主軸線上2.0ｍ・右側壁2.05ｍ・左側壁2.1ｍ，幅は中央部0.9ｍ・奥壁下1.0ｍ・玄門側0.85ｍを測る。高さは比較的遺存の良い左側壁中央1.14ｍ，玄門側0.85ｍである。奥壁は，本来は台形の截石を使用していたが，上部をすでに破壊されており現状で高さ1.05ｍ，下辺幅1.1ｍを測る。奥壁の側辺に切り込みは認められず，側壁は奥壁にもたせかけるように置かれている。左右の側壁は，２枚の直方体の截石を３段に積み上げて構築されている。両側壁間は床面で0.9ｍ，３段目では0.75ｍと次第に幅を減じる「持ち送り」が行われている。



第95図　22号墳石室及び遺物出土状況

玄門には方柱状の截石が左右に配置され，その間に梱石(43cm×54cm，厚さ32cm)が置かれている。右袖石は粘土を主体とした基盤の上に据えられているが，左袖石は加工された扁平な截石上に載せられている。両袖石とも遺存状態は悪く，特に左袖石の前面は攪乱のため斜めに削平されている。

羨道部は，玄門右袖石に接して遺存していた方柱状の截石と，その截石から内側へ延びる方形の截石によって構成されている。攪乱のため大きく削平されており，本来の形態は判然としないが，わずかな空間を形成している。この部分を「閉塞施設」として捉えることもできるが，右截石に接するように内側に須恵器平瓶が置かれており，ここは「羨道部」としての機能を考えたい。

石室と掘方の間は，砂質粘土・黒褐色土・暗褐色土などを交互に積み重ねて裏込めとしている。截石の積み上げの際の削り屑もこのなかに使用している。

遺物の出土状況（第95図，図版９）

玄室と羨道部から遺物が出土しているが，盗掘のためかわずかな遺物しか残されていなかった。

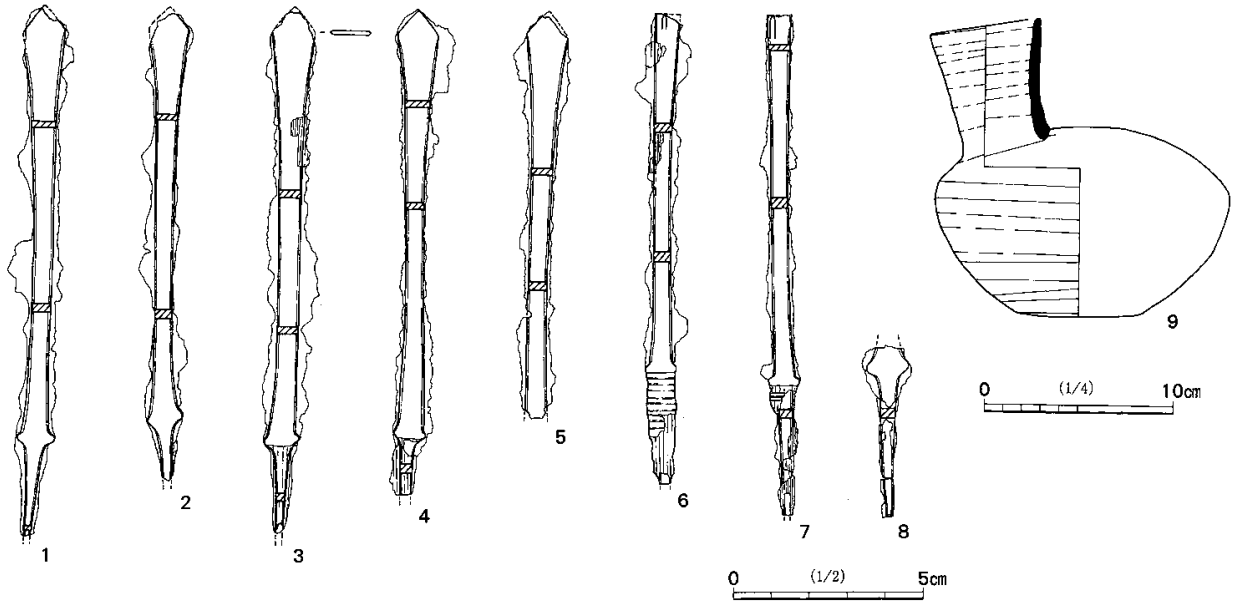
玄室からは，床面中央の左側壁下から鉄鏃が８本まとまって出土した。いずれも刃部を玄門側に向けている。このうち１本は鏃身を欠いており，実際にはもっと多くの鉄鏃が副葬されていたと考えられる。

羨道部からは完形の須恵器平瓶が出土した。方柱状の右截石の近くで，外側の截石の底面とほぼ同じレベルに正位で置かれていた。

出土遺物

鉄鏃(第96図１～８，第22表，図版48)　８本が出土しているが，１本は鏃身を欠く。鏃身の形態からみると，７本のうち５本は圭頭鏃(１～５)，２本は方頭鏃(６・７)に大別できるが，いずれも鏃身の大きさに比較して箆被が長く，長頸鏃に分類することも可能であると思われる。一部の鏃には木質が付着し，特に６の茎元には樹枝による口巻が施されていた。また，１・２・６は融着していた。

須恵器平瓶(第96図９，図版46)　完形品である。口縁部は斜上方に立ち上がり，肩部の稜は明瞭である。体部下半から底部にかけてヘラケズリを施し，底部をほぼ平底に削っている。



第96図　22号墳出土遺物

第22表　22号墳鉄鏃計測表

単位：cm

番号	遺物番号	全長	鏃身				篦被			茎			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ	逆刺長	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
1	003	13.75	—	1.05	—	—	—	0.50	0.25	2.50	0.20	0.15	—	2，6と融着
2	003	12.35	—	1.00	—	—	—	0.50	0.25	1.60	—	—	—	1，6と融着
3	003D	13.78	—	1.10	0.15	—	—	0.60	0.20	2.45	0.32	0.30	9.94	
4	003H	12.80	—	1.10	—	—	—	0.42	0.20	1.40	0.35	0.25	9.83	
5	003E	10.60	—	1.10	—	—	—	0.60	0.20	—	—	—	7.88	
6	003	12.40	9.40	0.68	0.15	—	※	0.50	0.30	3.00	—	—	—	1，2と融着
7	003G	13.20	9.75	0.65	0.15	—	※	0.60	0.15	3.45	0.30	0.30	8.77	
8	003	4.50	—	—	—	—	0.80	—	—	3.70	0.40	0.30	2.17	

※ 数値は現存値を示す。
※ 6，7の鏃身の長さは，鏃身から篦被までの長さを示す。
※ 1，2，6は錆着しているため，計測が不可能な部位がある。

23号墳

位置と現況（第97図，図版10）

調査区の中央，標高42.3m～43.2mの南緩斜面上に位置する。24号墳の北西15mに隣接している。墳丘は大きく削平され石室の一部が露出しており，遺存状態は悪い。

墳丘と周溝（第97図，図版10）

円墳である。調査前の墳丘測量で，周溝の形態から円墳であることが判明していたが，斜面にかかる南側の周溝は確認できなかった。埋葬施設の位置する中央部は周辺より低く，土坑の範囲が陥没していた。墳丘はすでに削平され，漸移層が表土直下に現れており，築造方法等は不明である。

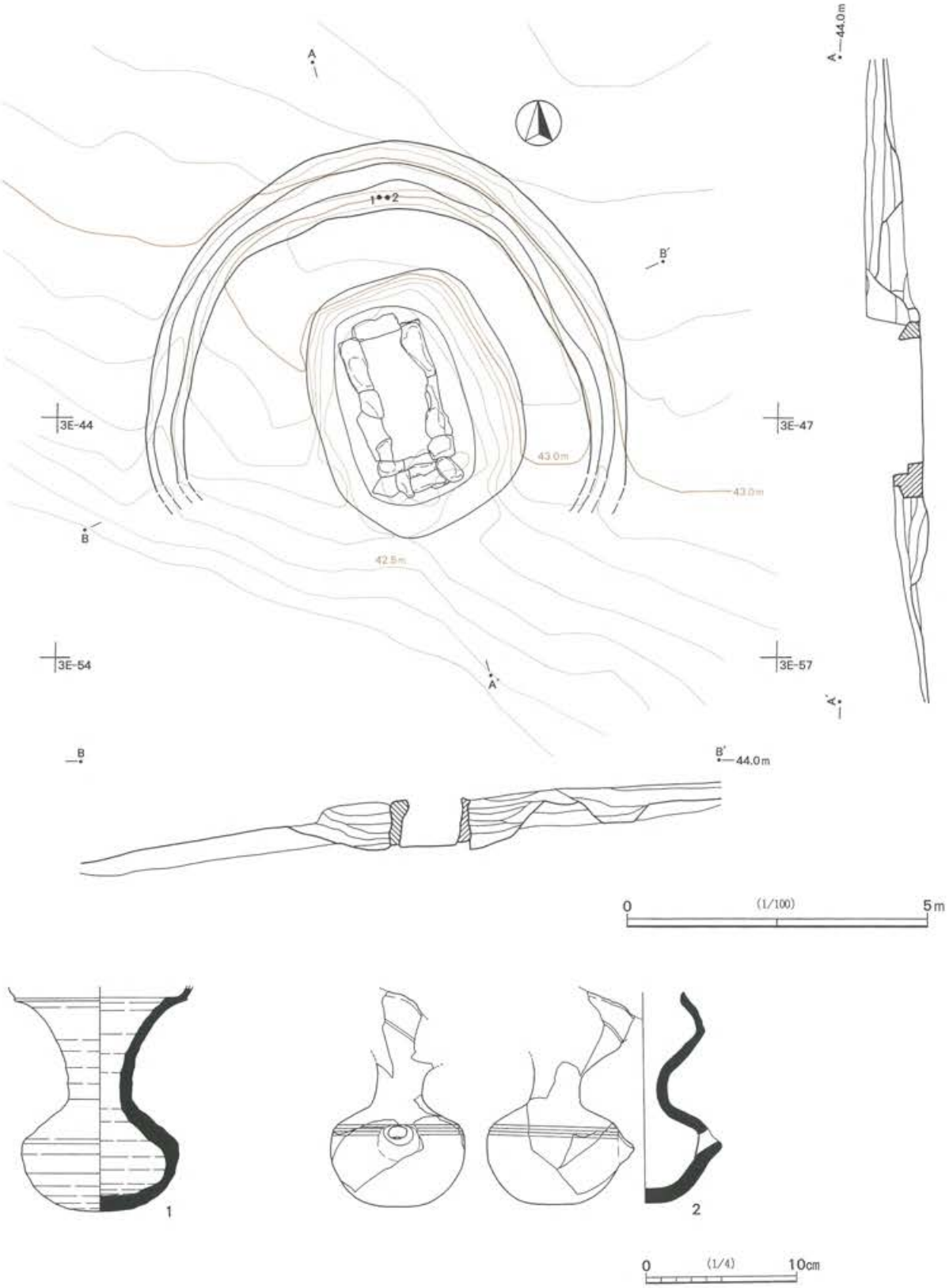
周溝は南側を除く約3/5が巡っている。外縁径・内縁径はそれぞれ東西8.0m・6.4mを測り，南北は8.2m・6.6mと推定される。上端幅は0.54m～1.2mで，北側が最も広い。溝底幅は20cm～40cmで，底面はほぼ平坦である。緩やかに掘り込まれ，深さは10cm～43cmと全体に浅く，北東側がやや深くなっている。覆土は黒褐色土と暗褐色土が堆積している。

周溝等の出土遺物（第97図，図版47）

周溝内では北側を中心に遺物が出土しているが，図示できたのは1の須恵器瑞である。古墳の北側に散布(3E-14・34など)していた破片と接合した。3/5の遺存で口縁部の一部を欠き，頸部から体部にかけて大きく欠損している。注口部の形態は不明である。体部に沈線や櫛描列点文などの文様は認められない。口縁部は外側に大きく張り出し，口唇部部はやや開きながら立ち上がる。肩部が張り，底部を平坦に削っている。全体に器厚が厚いつくりで，器面の色調は黒色である。なお，2の須恵器瑞は，古墳調査前に行った包含層の調査中に出土している。その地点は墳丘の範囲と重なるため，本来は盛土内あるいは土坑周辺に置かれていた可能性が高く，ここで報告することとした。口縁部から底部にかけて約1/2の遺存である。口縁部から頸部が，成形不良のため大きく歪んでいるため，口縁部の形態は不明である。肩部に2条の沈線を巡らし，下端がやや突出する注口部をもつ。

埋葬施設（第98図，図版10）

南東に開口する単室の横穴式石室である。古墳中央部に掘り込まれた土坑内に設置されている。土坑の南側は周溝にむかって開口せずに立ち上がっている。天井部はすでに失われ，奥壁や左右の側壁上段の一部が破損しており遺存状遺体は悪い。石室は軟質砂岩の截石で構築され，全長は2.95mを測る。主軸方向はN-14°-Wである。



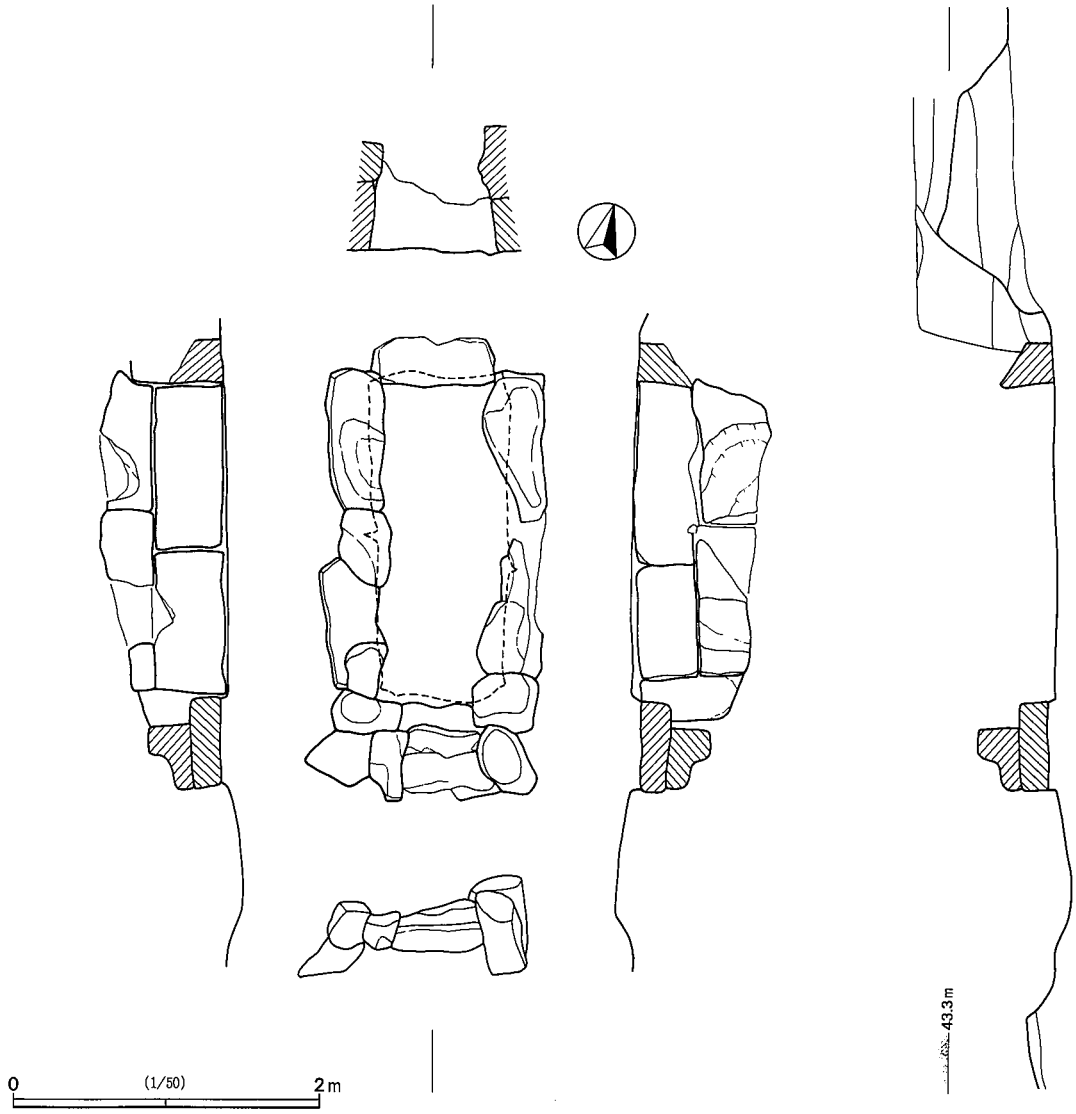
第97図　23号墳全体図及び墳丘内出土遺物

土坑は不整長方形を呈し，コーナーは丸みをもつ。規模は，長軸長(南北)4.2m・短軸長(東西)3.4mを測る。主軸方位はN-15°-Wである。全体に掘り込みは緩やかで，特に東側では緩やかに掘り込まれている。底面はほぼ平坦で，長軸長3.3m・短軸長2.0mを測る。確認面からの深さは0.5mである。

掘方が土坑であるため前庭部は明確に形成されていないが，土坑の南側周辺に土師器杯などが出土することから，この範囲は前庭部として捉えることもできる。

石室は両袖式の横穴式石室で，羨道部を持たない構造である。天井石は失われ，奥壁の上部や両側壁の中央部が大きく欠損している。玄門や閉塞施設の截石も前面が削平され風化が進んでいる。底面に接するいずれの截石も，粘土で構築された基盤の上に配置されている。

玄室床面の平面形態は長方形で，主軸線上2.15m・右側壁2.07m・左側壁2.02m，幅は中央部0.9m・奥壁下0.87m・玄門袖石下0.8mを測る。高さは最も遺存の良い側壁でも0.8mである。奥壁は台形の截石を用いていたが，上半部を大きく破壊されており，現状で高さ0.3m～0.6m，下辺幅0.9mである。奥壁の側面に切り込みは認められず，側壁は奥壁にもたせかけるように置かれている。左右の側壁は，2枚の直方



第98図　23号墳石室

体の截石を2段に積み上げて構築しているが，2段目は大きく攪乱を受け抉り取られるように欠損している。両側壁間は床面で0.9m，2段目の遺存の良い部分で0.6mと，簡便な「持ち送り」が行われている。

玄門には方柱状の截石を左右に配し，その間に扁平な梱石(45cm×60cm，厚さ12cm～20cm)を置いている。袖石は左右とも上面が削平され，やや内側に傾けて置かれている。右袖石(高さ67cm，35cm×40cm)は遺存状態は比較的良好である。梱石は上面が加工され，右袖石側へ低く傾いている。

玄門の外側には，方柱状の截石が左右に配置され，その間に長方形の石を梱石の上に載せ閉塞している。この閉塞石は前面が攪乱のため欠けている。方柱状の截石は，左側が大きく欠損し下端部が残存している程度であるが，右側の截石の遺存は良好で玄門袖石の傾きに合わせて置かれている。

石室と土坑の間は，黄褐色土・暗黄褐色土・暗褐色土を積み上げて裏込めとしている。一部に截石の砂岩屑が混在している。

遺物の出土状況（第99図，図版10）

遺物は玄室と土坑周辺の2か所から出土している。玄室内は盗掘や攪乱のため，わずかに鉄鏃4点や刀子の小片1点が床面中央部付近に散乱していた程度で，本来の副葬品の組成や数量は不明である。原形を留めているものはなく，副葬品の多くは玄室外に持ち出されたと考えられる。土坑周辺から出土した丸玉や鉄鏃(3・6)は，玄室内の副葬品が盗掘等により外に持ち出される際に散在したものであろう。

なお，玄室内の床面からは貝ブロックが，中央より奥壁側に2か所，玄門側に3か所の計5か所から検出された。いずれも小ブロックで遺存状態は悪い。分析結果については付章に記載した。

玄　室

鉄　鏃	4以上	刀　子	1

土坑周辺

鉄　鏃	2以上	翡翠製丸玉	1

出土遺物

鉄鏃(第99図3～8，第23表，図版48)　玄室から4本，土坑周辺から2本の計6本を図示した。鏃身の遺存している3本(3～5)はいずれも三角形鏃に分類できる。鏃身長が鏃身幅より大きく，下端に逆刺をもつ。箆被や茎部の破片も三角形鏃の一部であろう。箆被の関部は棘状である。

刀子(第99図9，図版48)　茎部の一部である。柄木の下にわずかに紐巻きのような部分が観察できる。現存長1.75cm，幅0.6cm，厚さ2cm～3cm，現重量は0.96gである。

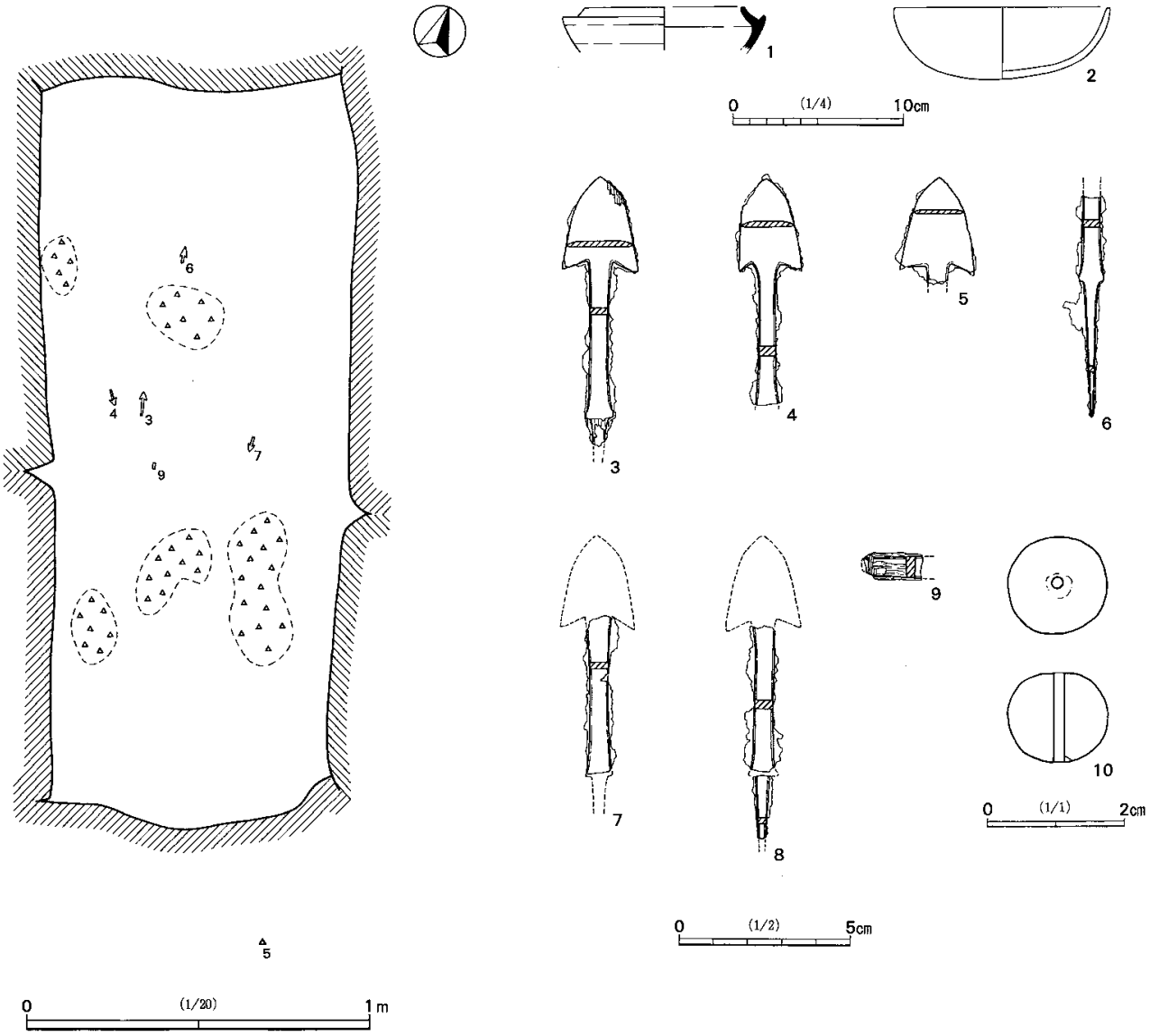
翡翠製丸玉(第99図10，図版47)　土坑上面から出土した。完形であるが表面はやや風化し，部分的に小さな剥離も認められる。色調は淡緑色で，径1.3cm×1.4cm，孔径2cm，重量は4.3gである。

第23表　23号墳鉄鏃計測表

単位：cm

番号	遺物番号	全長	鏃身				箆被			茎			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ	逆刺長	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
3	007	7.90	2.80	2.15	0.18	0.30	4.55	0.60	0.20	0.85	—	—	7.02	石室
4	008	6.80	2.80	1.80	0.20	0.20	4.20	0.50	0.30	—	—	—	5.43	石室
5	015	3.08	2.75	2.15	0.15	0.15	0.48	0.63	0.33	—	—	—	3.26	土坑周辺
6	009	6.48	—	—	—	—	2.50	0.50	0.25	3.98	0.20	0.20	3.12	石室
7	005	4.60	—	—	—	—	4.60	0.60	0.20	—	—	—	2.91	石室
8	016	6.05	—	—	—	—	4.25	0.55	0.25	1.80	0.30	0.20	3.43	土坑周辺

※ 数値は現存値を示す。

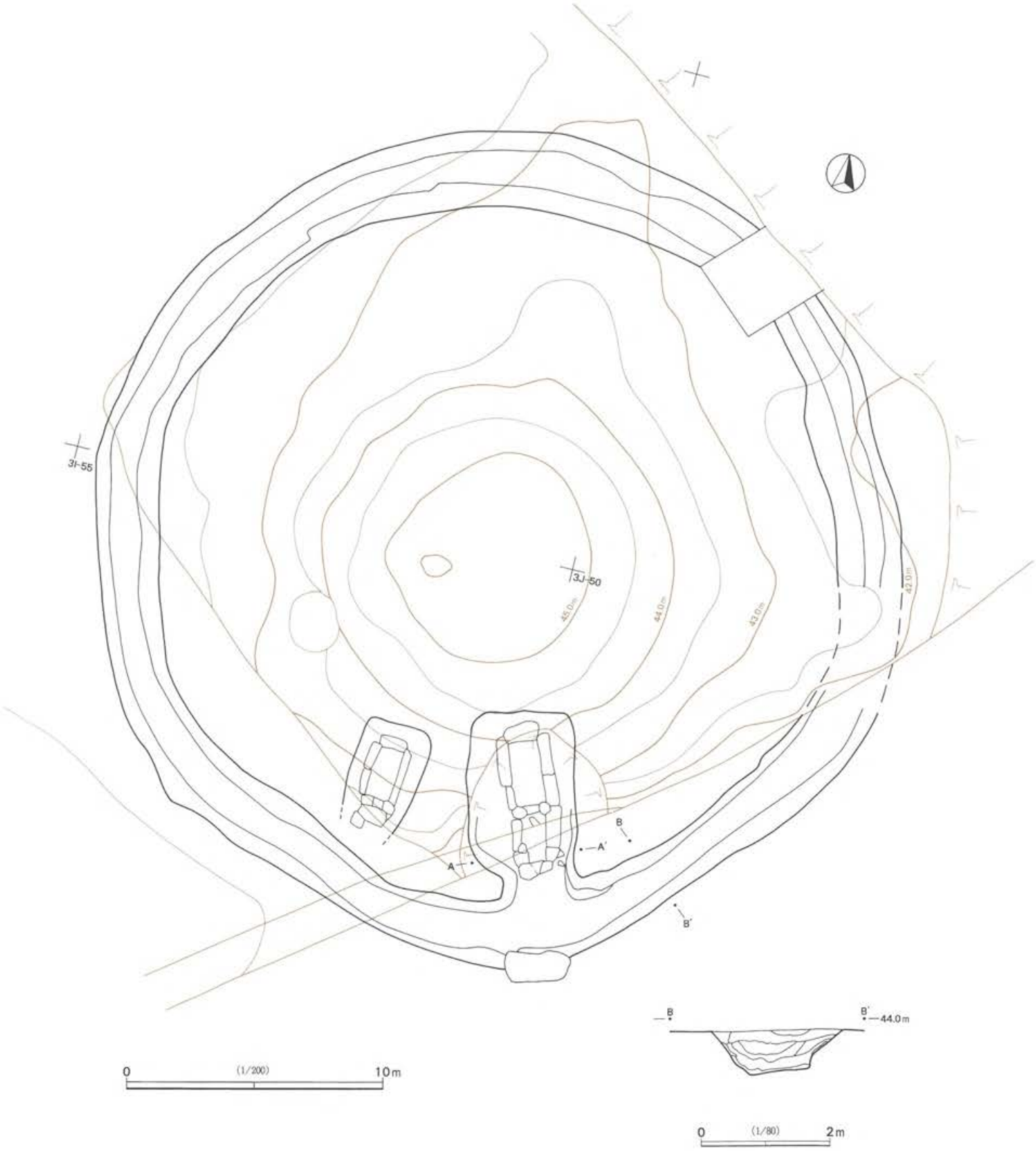


第99図　23号墳遺物出土状況及び出土遺物

1号墳

位置と現況（第100図）

調査区の東端，舌状台地の南側に侵入した小支谷の奥部で，東側は南から入り込んだ鍋田谷津を臨む標高42ｍの台地上に位置している。昭和51年度に調査を実施したが，第１埋葬施設の羨道部と周溝の一部が県道下に位置していたため，この部分は県道の迂回後に調査を行うこととなった。この範囲は，平成３年度に行われた御塚台遺跡の調査で検出されたが，小金沢１号墳として本書に収録する。１号墳の詳細についてはすでに刊行されている『千葉東南部ニュータウン８』を参照されたい。ここでは，平成３年度の調査で明らかとなった第１埋葬施設と周溝の全容について報告する。



第100図　1号墳全体図

周溝（第100図）

昭和51年度の調査では約3/4周を検出したが，今回の調査で全周していることが判明した。外縁径・内縁径はそれぞれ東西31.5m・26.5m，南北32.5m・27.0mを測り，正円に近い形態をとっている。今回検出された範囲の上端幅は1.8m～2.7m，溝底幅は0.9m～1.8mである。底面は部分的に凹凸がみられる。逆台形に掘り込まれ，深さは確認面から0.6m～0.7mである。覆土は，黒褐色土を主体に黒色土や暗褐色土が混在している。

周溝内の遺物出土状況（第101図，図版11）

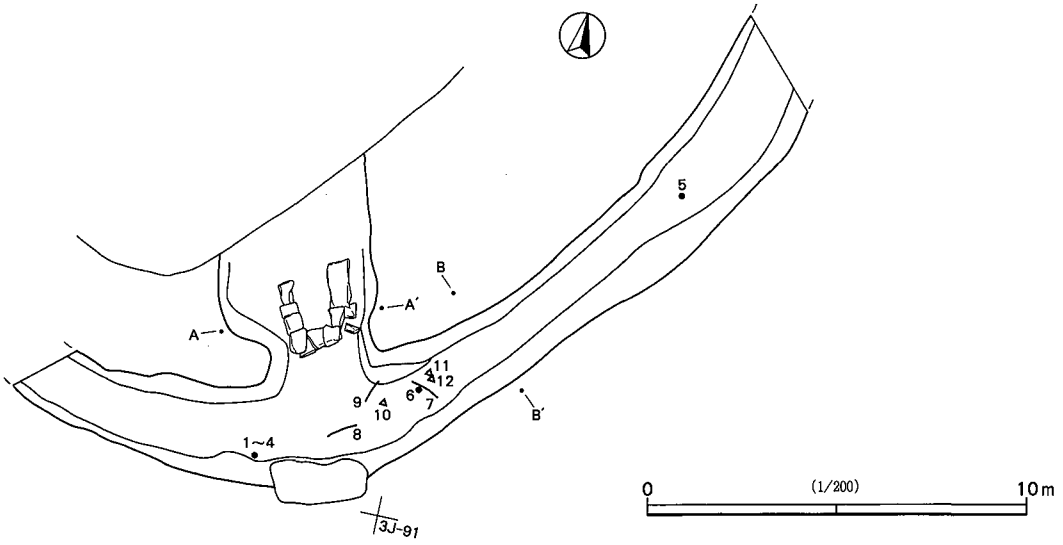
周溝内からは，須恵器，大刀，鍔が出土している。前庭部周辺に散乱した状態で出土しており，追葬あるいは盗掘の際に石室内から掻き出されたものと考えられる。

須恵器の杯身と返蓋（１～４）は，南側外縁部に近い覆土下層からまとまって出土した。蓋は２点ともつまみを下にむけほぼ完形であったが，杯身は破片で欠損している部分も多い。平瓶（６）は完形品で，前庭部の東側周溝の覆土中層からの出土である。この前庭部前面から東側にかけての範囲からは，３本の大刀（７～９）や鍔の破片(10～12)が覆土上層からまとまって出土した。７・８のように刀身が数点の破片になっているが，完形に近く復元できる遺物もある。また，８の茎部の裏側に別の大刀の茎尻が付着している。この茎尻は９のものである可能性が高く，この２本の大刀は本来は近接して副葬されていたと思われる。10～12は大刀の鍔の破片であろう。方形の窓の一部がみえる。この３点は判然としないが同一個体の可能性もある。５の須恵器高杯の破片は，他の遺物から離れて，南東周溝の覆土中層から出土している。

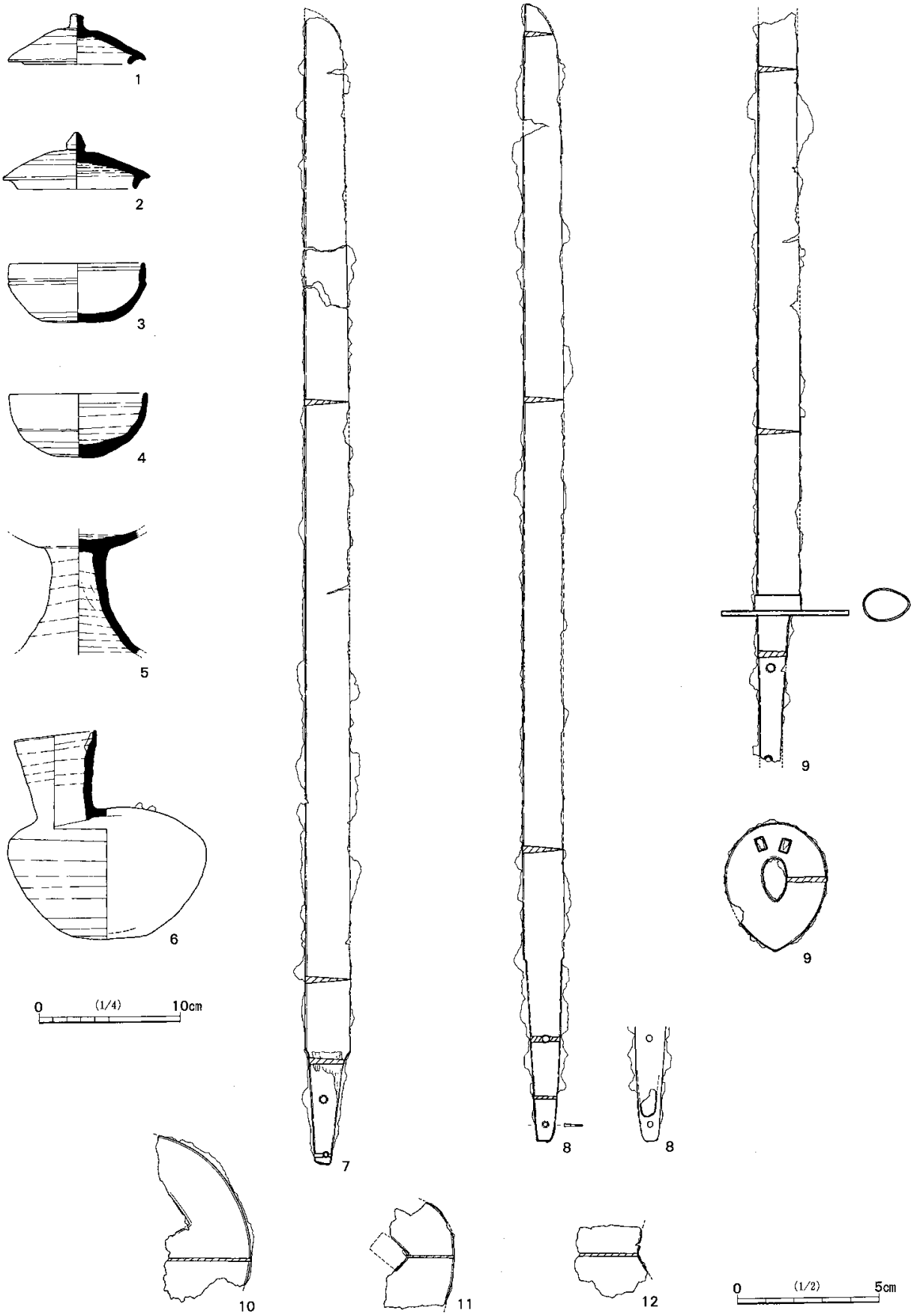
周溝内の出土遺物（第102図，第24表，図版47・49）

須恵器（１～６）　１・２は返蓋の形態で，天井部に簡略化したつまみがつく。内面のかえりは口縁部よりも下方に内傾して突出する。２の方が突出は大きい。６の平瓶は完形品で，口縁部から体部にかけて自然釉が多く付着し，なかには瘤状に融着している部分もある。

大刀（７～９）　７はほぼ完形であるが，鋒と刀身の一部を欠損する。鍔は装着していない。銹化が進み遺存状態は良好ではない。現存長80.9cmを測る。刀身は平棟，平造りで，鋒にはふくらがある。関は両関で，刃関は緩やかである。茎部は刀身の長さに比べて短く，２か所に円形の目釘孔（Ａ径3.0cm×3.5cm，Ｂ径4.5cm)が認められる。茎部に柄木の木質の一部が付着している。８は10片に割れており，図上で復元



第101図　１号墳周溝内遺物出土状況



第102図　1号墳周溝内出土遺物

した。刀身の一部を欠損し，鍔は装着していない。銹化が進み遺存状態は良好ではない。現存長79.15cmを測る。刀身は平棟，平造りで，鋒にはふくらがある。関は両関である。茎部には2か所に円形の目釘孔（A径4.1cm，B径4.5cm×4.7cm）が認められる。前述したように，茎部の先端裏側に別の大刀の茎尻の断片（長さ2.0cm，厚さ1.5cm～1.7cm）が付着している。形状から9の大刀の茎尻の可能性が高い。9は鋒・刀身・茎部の一部を欠損する。鍔と鏶が装着しているが，全体に銹化が進み遺存状態は悪い。現存長52.9cmを測る。刀身は平棟，平造りで，鋒は不明である。鏶（径2.3cm×3.3cm，長さ1.15cm）のため関の形状は不明である。茎部には2か所に円形の目釘孔（A復元径4.0cm，B径5.0cm）が認められる。鍔（径7.1cm×9.0cm，孔径1.65cm×3.0cm，厚さ3.0cm×3.8cm）は倒卵形で，2か所に方形の窓（一辺5.5cm～9.0cm）が開いている。

鍔片（第102図10～12，図版49）　いずれも小片で同一個体の可能性もあるが判然としない。方形の窓の一部が観察できる。遺存長2.6cm～5.4cm，遺存幅2.4cm～4.4cmを測る。厚さは1.5cm前後と薄い。

第1埋葬施設（第103図，図版11）

昭和51年度の調査では，南向きに開口する単室の横穴式石室で主軸方向はN-17°-Wであること，天井石はすべて崩落していること，玄室は1枚の奥壁と軟質砂岩の截石を少なくとも3段に積み上げた側壁で構築されているが玄門側では遺存状態が悪いこと，などが明らかとなっている。羨道部の構造については，前回の調査成果も含めて記載する。

掘方は長方形を呈し，長さは6.2m，上端幅3.8m～4.1mを測る。主軸方向はN-22°-Wで，石室の主軸より5°東へ振れている。東辺はほぼ直線的に周溝へ向かうが，西辺はすぼまりながら周溝へ続く。前庭部は長さ1.2m，上端幅2.8mで開口している。石室は，掘方のやや東寄りに設置されているが，掘方内に整然と納まらずに羨道部から閉塞施設にかけての部分がはみ出すような状態になっている。

玄室と羨道部の間には，方柱状の截石を左右に配して玄門とし，その間に梱石を置いている。袖石の遺存状態は良好で，高さは右袖石1.0m，左袖石0.9mを測る。

羨道部は，天井石の一部が崩落し側壁の一部も破壊されており，遺存状態は悪い。床面の平面形態は長方形で，長さは主軸線上1.84m・側壁1.8m，幅は玄門側0.85m・羨門側0.75mをそれぞれ測る。高さは，比較的遺存の良い玄門側で0.85mであるが，両側壁は上端が削平されており現存で0.3m～0.65mを測る。2枚から3枚の直方体の截石により構築されているが，大きさは一定していない。床面は凹凸がある。羨門は玄門と同様に方柱状の截石（50cm×50cm，高さ60cm）を左右に配しているが，高さは羨門より低くなっている。玄門の外側には袖石の外側にさらに方柱状の截石を立て，その間に板状の截石を置き，閉塞施設としている。閉塞石は存在していない。

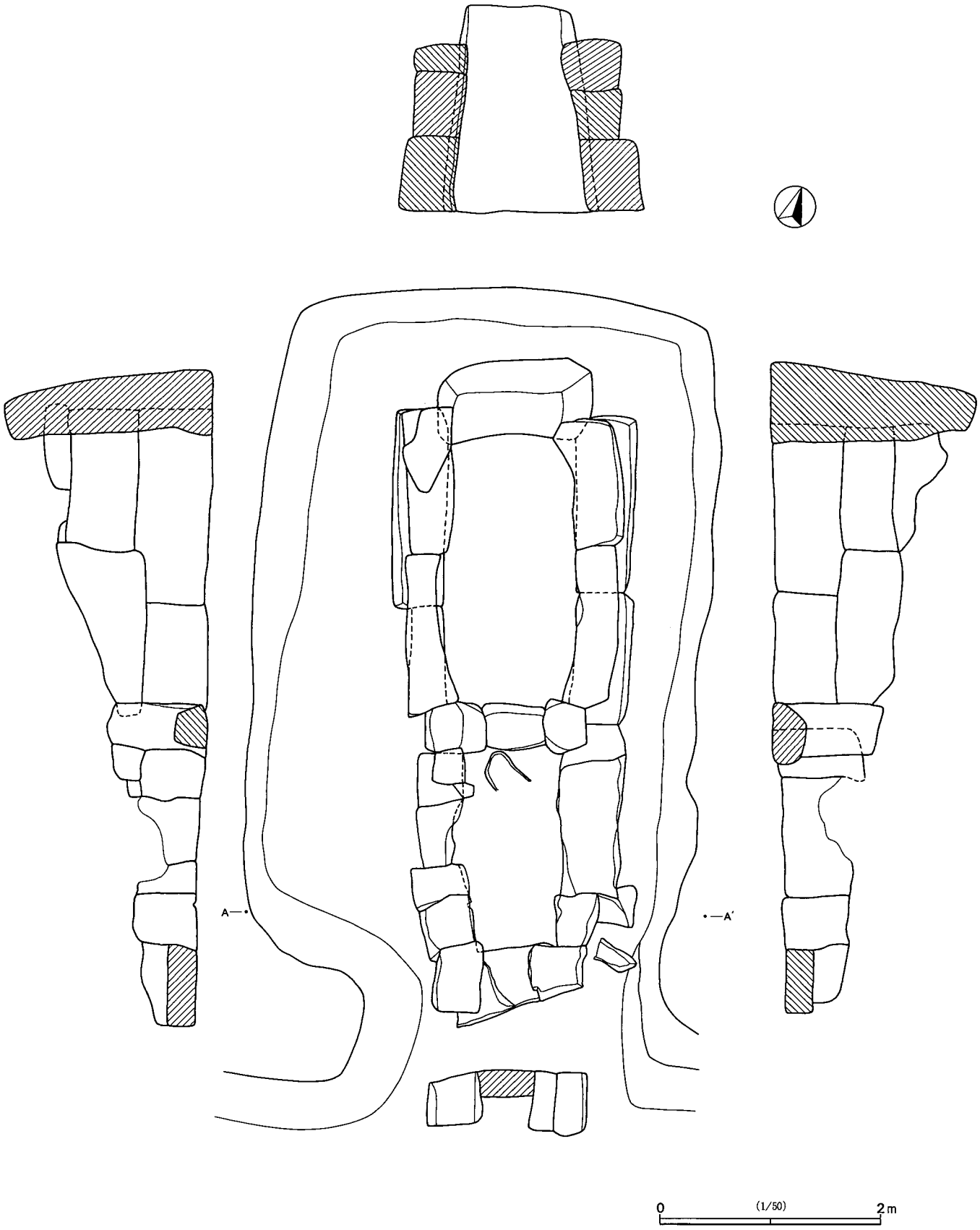
遺物の出土状況（第104図，図版11）

羨道部からは鉄鏃10本が出土した。他の出土遺物はない。鉄鏃は羨道部の羨門寄りの範囲に散乱して出土している。天井石の崩落や攪乱等により破片になっている鏃も多い。出土レベルも高低差があり，本来の位置からは大きく移動している。

昭和51年度調査の出土遺物も含めて，第1埋葬施設とその周辺から出土した遺物は以下のとおりである。

玄　室

琥珀製棗玉	1	耳　環	2
瑪瑙製丸玉	1	刀　子	3
ガラス小玉	12		



第103図　1号墳石室

羨道部

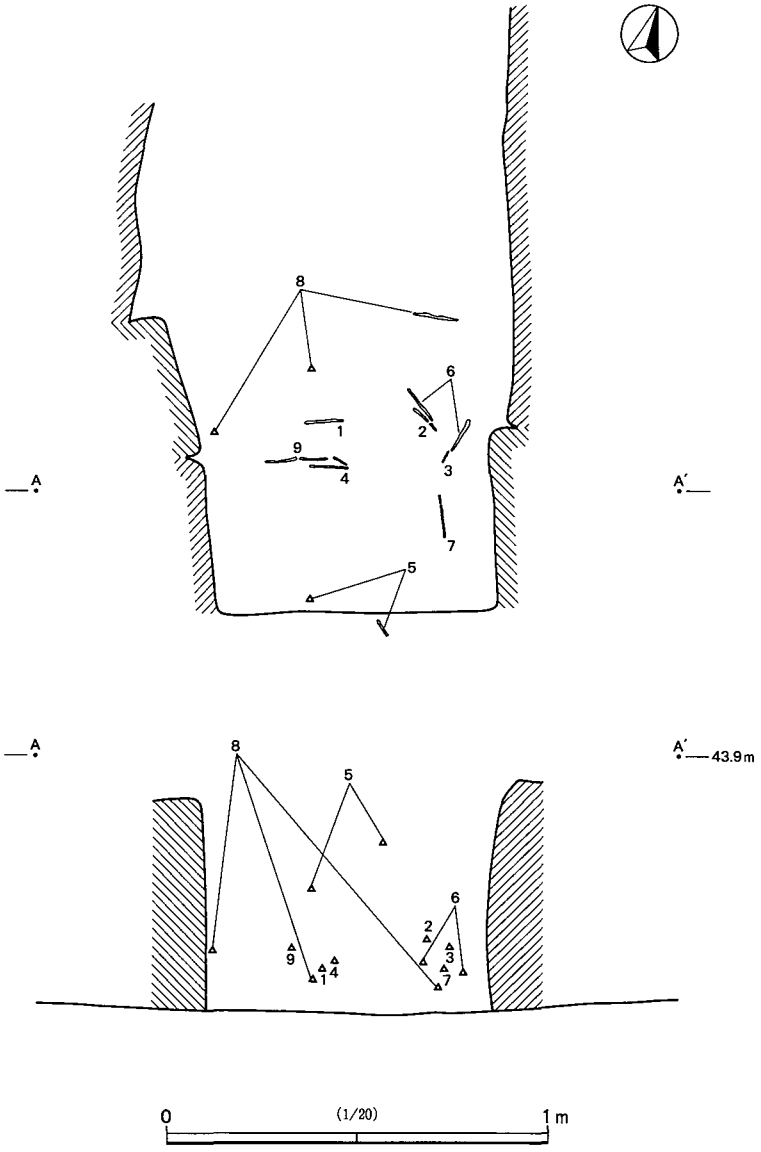
鉄　鏃	10		

前庭部から周溝

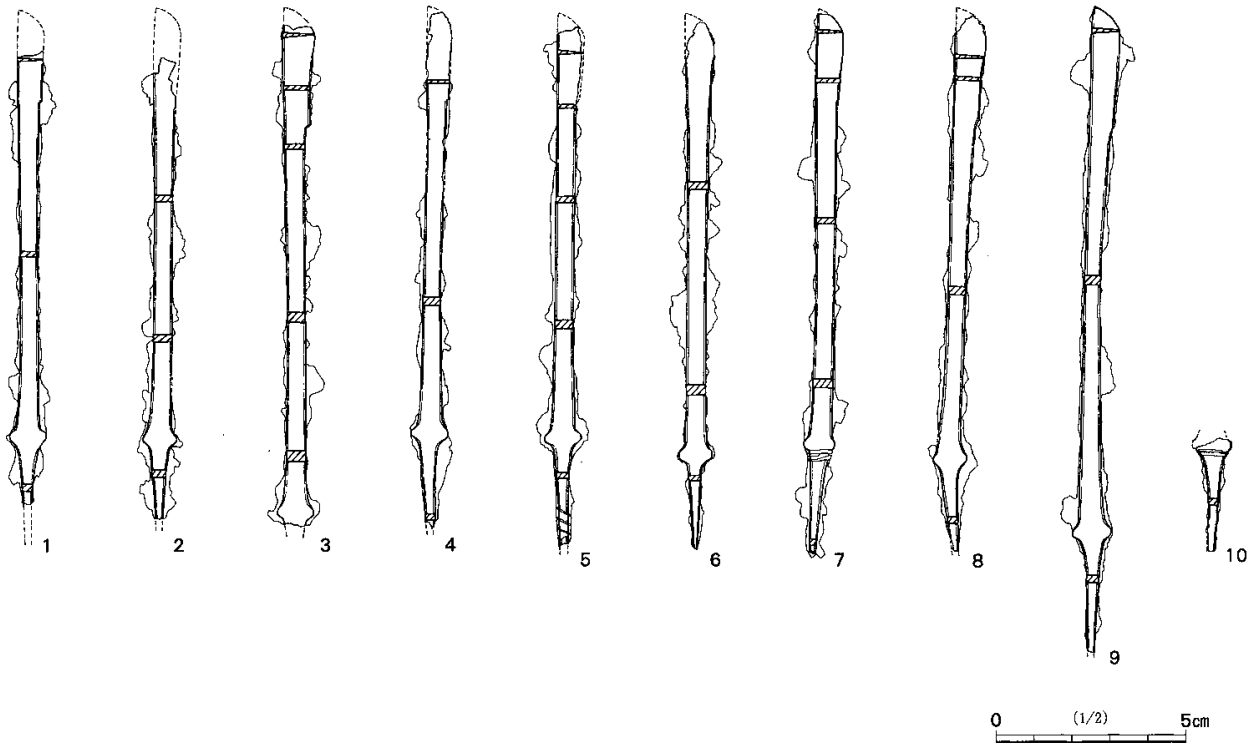
大　刀	3	須恵器(杯身・蓋)	4
鍔	3(破片)	須恵器(平瓶)	1

出土遺物

鉄鏃(第105図1～10，第25表，図版49)　羨道部からの出土である。10本のうち9本が，長頸鏃の片刃鏃に分類される。1本は関部から茎部の遺存で鏃身の形態は不明である。鏃身関部が判然としない鏃もあるが，篦被長は9㎝前後と10㎝前後のものに大きく分類できる。刃部から篦被までの長さは，11㎝代のものがほとんどであるが，14㎝前後の鏃が2本ある。いずれの鏃も逆刺はなく，篦被の関部は棘状である。



第104図　1号墳石室遺物出土状況



第105図　1号墳石室内出土遺物

第24表　1号墳大刀計測表

(現存値・cm)

番号	遺物番号	全長	刀身			茎			重量(g)	備考
			長さ	身幅	背厚	長さ	茎幅	茎厚		
7	002	80.90	73.03	3.1～3.2	0.6～0.65	7.87	1.28～2.6	0.2～0.38	451.70	
8	001	79.15	69.00	2.1～2.85	0.36～0.55	10.15	1.35～2.1	0.25～0.43	344.78	
9	008	52.90	41.05	3.05	0.4～0.5	11.85	2.05	0.35～0.50	424.11	

第25表　1号墳鉄鏃計測表

単位：cm

番号	遺物番号	全長	鏃身				箆被			茎			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ	逆刺長	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
1	0025	02.10	1.60	0.70	0.10	—	8.90	0.30	0.20	1.60	0.30	0.20	7.40	羨道部
2	021,030	12.20	—	—	—	—	10.20	0.50	0.20	2.00	0.88	0.20	6.13	羨道部
3	020	13.20	2.65	0.90	0.10	—	10.35	0.50	0.30	0.20	0.65	—	10.53	羨道部
4	027	13.65	2.35	0.65	0.10	—	10.40	0.45	0.25	2.25	—	—	8.60	羨道部
5	017,030	13.70	—	0.60	0.15	—	11.10	0.50	0.25	2.60	0.32	0.20	9.72	羨道部
6	028,029	13.95	0.95	0.70	0.10	—	11.60	0.50	0.25	2.35	0.32	0.18	10.00	羨道部
7	019	14.20	—	0.75	0.10	—	11.50	0.55	0.20	2.70	0.20	0.20	8.41	羨道部
8	022	14.20	2.85	0.80	0.10	—	9.15	0.45	0.25	2.25	0.20	0.15	9.37	羨道部
9	026	17.05	2.30	0.75	0.10	—	14.05	0.45	0.25	3.00	0.50	0.20	11.72	羨道部
10	031	3.00	—	—	—	—	—	—	—	2.70	0.25	0.18	1.04	羨道部

※ 数値は現存値を示す。
※ 2,4,5,6,7,9の箆被の長さは，刃部から箆被までの長さを示す。

25号墳

位置と現況

調査区の東端，１号墳の南西10ｍの台地上に位置している。平成３年度の御塚台遺跡の調査で検出されたが，分布状況からは小金沢古墳群に含まれるため，25号墳として本書で報告する。埋葬施設が単独で検出され，墳丘や周溝は確認されていない。県道にかかっていたため上面を大きく削平され，天井部は失われ天井石が石室内に崩落していた。さらに埋設工事で石室の一部が欠損しており，遺存状態は悪い。

埋葬施設（第106図，図版12）

南に開口する単室の横穴式石室である。羽子板状を呈する土坑の中央部に構築されている。

土坑は，直線的な北壁側からやや膨らみをもって南に向かって延びるが，途中で急にすぼまり南端では丸みをもっておわる。長さは中心線上で5.44ｍ，幅は北壁2.9ｍ・中心部3.27ｍ・南端0.6ｍを測る。壁は南側を除いてほぼ垂直に掘り込まれている。南側は緩やかに立ち上がり，幅も次第に狭まる。現状での深さは北側から中央部で23cm～37cm，中央部から南側は次第に浅くなり南端ではわずかに９cmである。石室と土坑の主軸方位はＮ－２°－Ｗと，ほぼ北向きである。全長は推定で3.15ｍである。

玄室床面の平面形態は長方形であるが，玄門側を削平されている。長さは主軸線上で2.3ｍと推定される。幅は中央部0.85ｍ・奥壁下0.9ｍを測る。１段目の截石はほぼ遺存しているが，２段目はほとんど失われ左側壁上にわずかに痕跡が残る程度である。高さは１段目で40cm，２段目の残存部分を含めても55cmである。奥壁(幅98cm，厚さ37cm)には，台形の截石を用いたと思われるが上部を削平され，現状の高さは45cmである。側壁には直方体の截石を用い，右側壁は２枚の截石からなっている。左側壁は埋設工事のため判然としないが，３枚の截石を使用していることも考えられる。

玄門には方柱状の截石を左右に配していたと思われるが，埋設工事のため左側は完全に失われ，右側の截石や玄門の間に置かれていた梱石も斜めに切られており，形態等は不明である。

玄門の外側には截石を左右に方柱状に配し，さらにその外側にも幅15cm～20cmの小形の截石を置いている。その間を粘土で基盤を構築し，上に板状の截石を置いて閉塞施設としている。全体に左側の截石は攪乱のため遺存状態が悪く，上部を欠損している截石が多い。

石室と土坑の間は，暗褐色土・茶褐色土を積み上げて裏込めとしている。ソフトローム粒の混在する土層が多く，部分的に截石の加工屑を含んでいる。

出土遺物（第106図１，第26表，図版48）

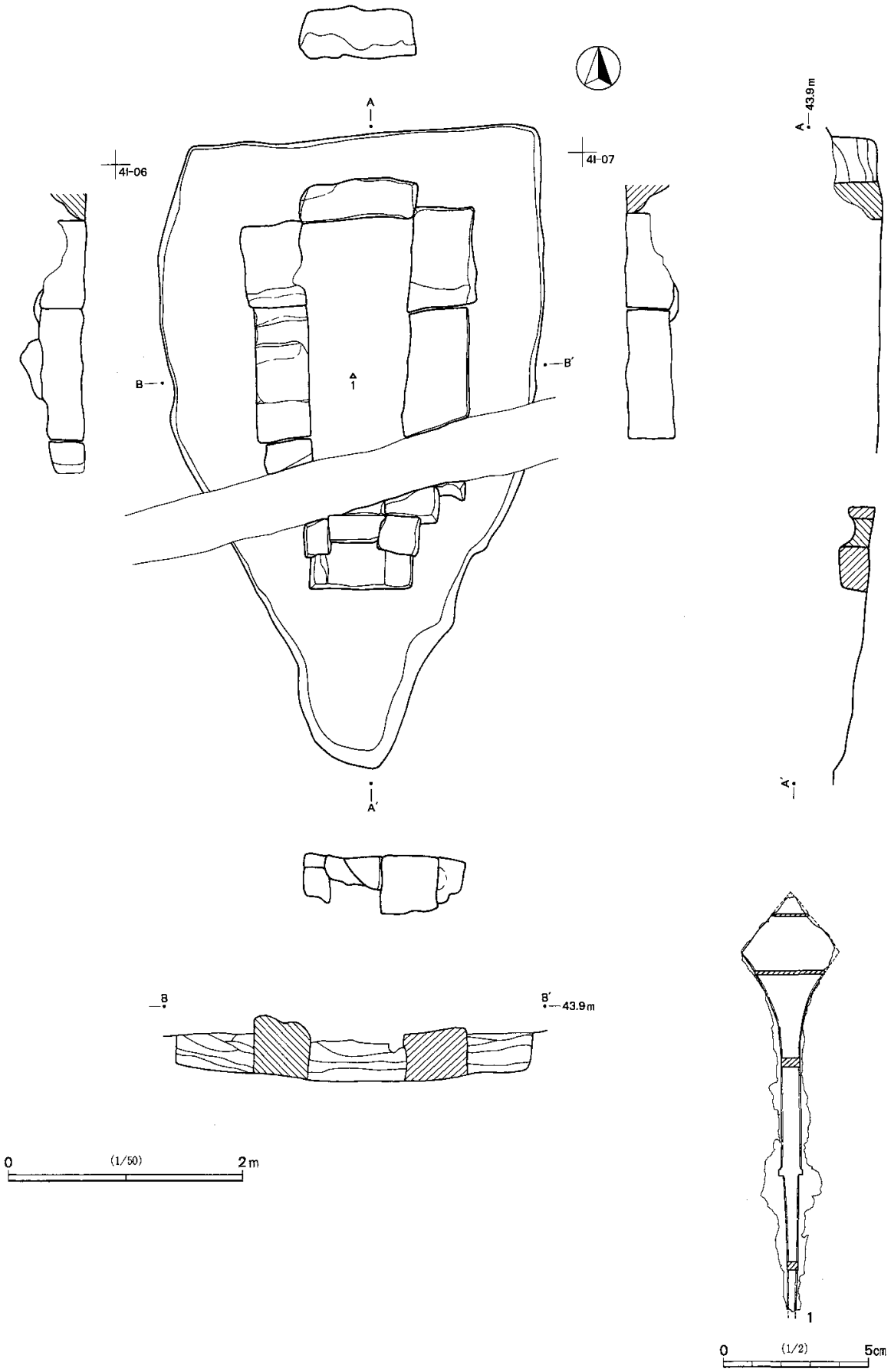
鉄鏃　玄室床面の中央部から，１の鉄鏃が刃部を玄門側に向けた状態で出土した。これ以外の出土遺物はない。圭頭鏃に分類できる。鏃身は平造りで，鏃身から篦被へやや内彎しながら続いている。刃部から篦被までは9.6cmと長く，関部は棘状である。

第26表　25号墳鉄鏃計測表

単位：cm

番号	遺物番号	全長	鏃身				篦被			茎			重量(ｇ)	備考
			長さ	幅	厚さ	逆刺長	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
1	001	14.30	1.90	3.15	0.10	－	9.60	0.65	0.40	4.70	0.55	0.30	25.72	石室

※ 数値は現存値を示す。
※ 篦被の長さは，刃部から篦被までの長さを示す。



第106図　25号墳石室及び出土遺物

24号墳

位置と現況

調査区の中央，標高43.5ｍの南緩斜面上で検出された。谷部にやや張り出した場所に占地し，23号墳が西15ｍに位置する。縄文時代晩期包含層の調査中に銅鏡や玉類が出土し，埋葬施設の存在が確認された。周辺を精査したが，墳丘・周溝等の形態や埋葬施設の詳細については明らかにできなかった。また，供献土器に使用された土器も周辺や本遺跡内からは出土していない。

埋葬施設（第107図，図版10）

銅鏡や玉類の出土状況から，主軸方位を北方向にとる木棺が設置されていたと考えられる。このような古墳の埋葬施設では，小口や側縁部などに充填された粘土塊やロームブロックが多くみられるが，ここでは確認されていない。遺物の出土範囲から判断すると，木棺の規模は長さ3.0ｍ・幅1.0ｍ前後と推定される。南側にまだ長く延びる可能性もあるが，斜面にかかるため概ねこの範囲に収まるだろう。土坑の深さは不明だが，遺物の出土状況からすでに棺底まで掘り下げていたものと思われる。出土レベルは北側の頭部周辺は約20cmの範囲に収まっているが，南側は斜面にかかるためか，それより低い位置に集中している。

遺物の出土状況（第107図）

木棺の推定範囲内の北側から中央部にかけての範囲に，銅鏡や玉類が集中している。小型の管玉１点とガラス玉２点はこの範囲から離れて出土しているが，これは棺蓋の腐朽等による移動であろう。銅鏡は，鏡面を上に向け，鏡背は内側へ傾いた状態で出土した。銅鏡の南側の径70cmの範囲内には，琥珀製勾玉・ガラス製管玉・緑色凝灰岩製管玉・ガラス玉が集中し，銅鏡の下からもガラス玉３点が出土した。

出土した遺物は以下のとおりである。

七獣形鏡	1	管玉(ガラス製)	1
琥珀製勾玉	1	管玉(緑色凝灰岩製)	7
		ガラス玉	36以上

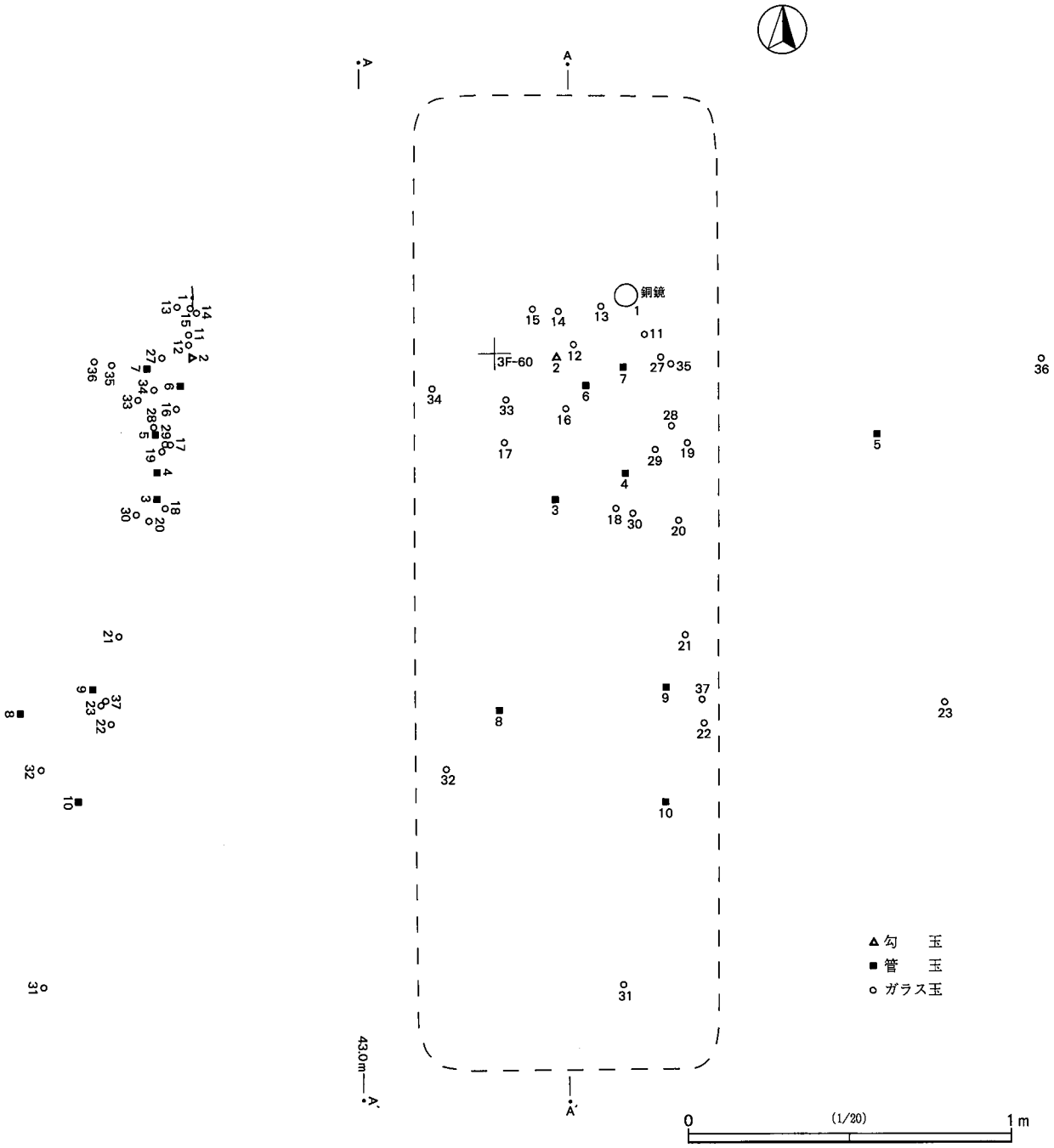
出土遺物

七獣形鏡(第108図１，巻頭図版・図版50)

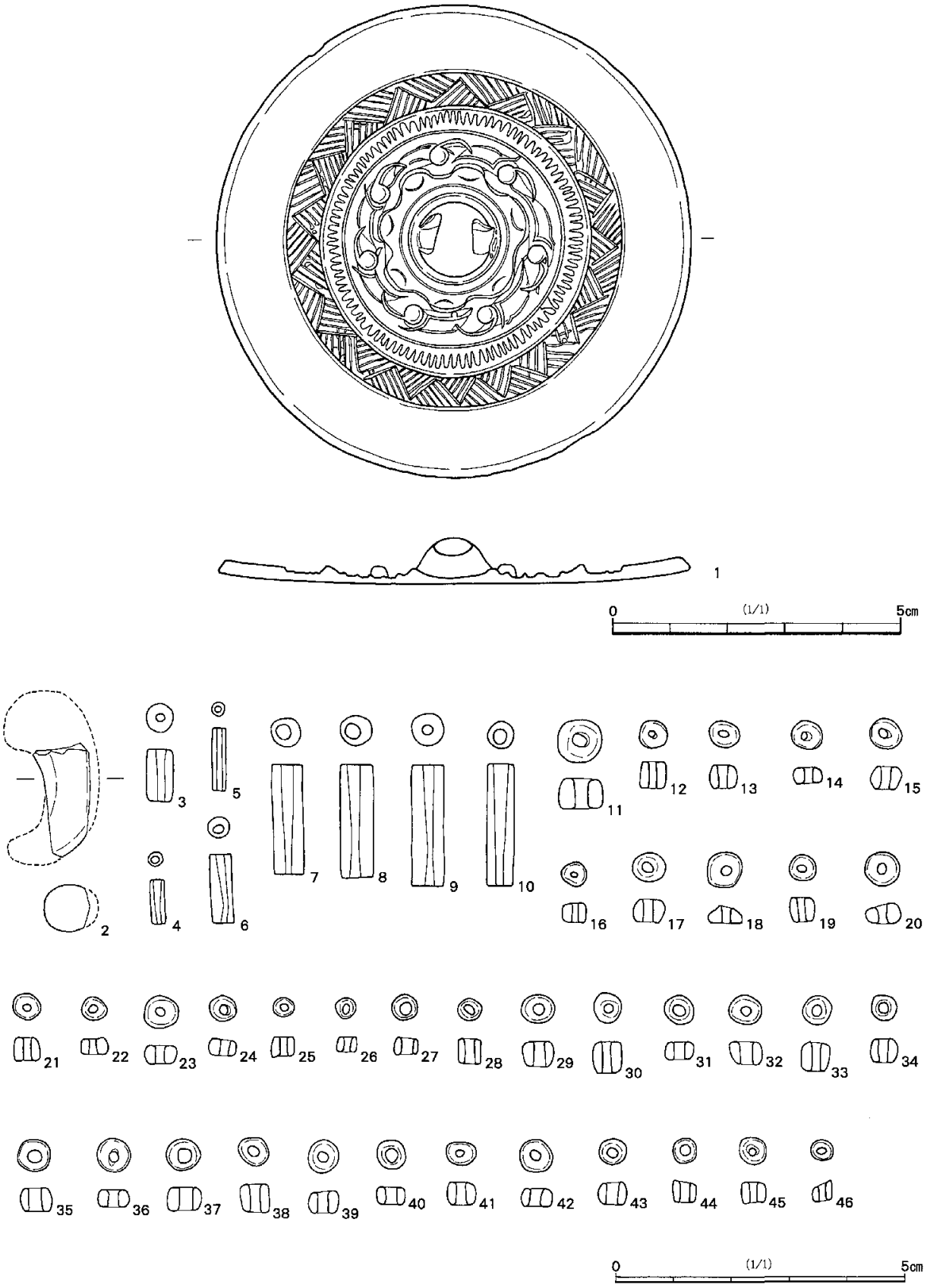
鏡面を上に，鏡背を内側に傾けた状態で出土した。玉類の出土状況などから推測して，被葬者の頭部付近に埋納されたものであろうが，本来の鏡面と被葬者の位置関係は不明である。色調はやや緑色がかかる漆黒色を呈し，全体に鋳上がりは良い。鏡面，鈕，主文の肉厚部分，界圏，縁部を研磨している。内区文様帯の一部に赤色顔料が付着している箇所が認められる。縁部の一部は錆化が進み，漆黒の薄い膜が剥がれたような状態になっているが，遺存状態は全体に良好である。内区の文様から七獣形鏡と判断した。

計測値：直径8.3cm，厚さは内区で1.0mm～1.75mm，外区の複合鋸歯文帯で1.5mm，縁部では2.5mmである。重量は74.0ｇを測る。以下の高さは，すべて鏡面からの計測値を示す。

文様構成：半球形の鈕で，鈕座は一段高くなる。内区は，花弁のように連続する弧状の隆線と，その外側に獣像を表現した文様がめぐっている。界圏に内向きの鋸歯文を入れ，界圏と縁部の間に設けた凹部には，複合鋸歯文を充填している。一段高い縁部は素縁である。文様は内側から順に，主文－鋸歯文－複合鋸歯文の構成になっている。



第107図　24号墳遺物出土状況



第108図　24号墳出土遺物

鈕：径1.3cm，高さは鏡面から7mmを測る。鈕孔(上端幅7.5mm・下端幅3.5mm，高さ4mm)は逆台形状を呈し，断面は外反するように大きく開いている。鈕孔の中央部は最も窪み，厚さは1mm程度で鏡面と高さをそろえている。鈕孔の縁はよく研磨され丸みをもつ。鈕は鈕座(底径1.6cm，高さ1.5mm)の上にのり，その外側を一条の細い圏線(径1.9cm)がめぐり，内区の文様帯と区画されている。

内区主文：7単位の獣形文を基本として内区の文様は構成されているが，文様としての獣像は簡略化され，大きく形を変えている。獣の頭部や頸部はすでに消失し，胸部から腰部の胴部が文様として表現されたのであろう。獣の胴部の一部は，乳状の半球形(径3mm～3.5mm，高さ2mm)に表現されているが，先端は乳のような鋭さはなく丸くおさめている。これを巻き込むように，尻尾のような弧状の隆線が左側へ延びており，この半球形の胴部は獣像の腰部を表現しているようである。この腰部の右側は，その曲線に沿った隆線と，さらに右側へのびる2本の隆線で構成されている。この2本の隆線に囲まれた部分はやや肉厚に鋳出され，獣の胴部を立体的に表現している。あるいは，獣毛文鏡系の捩文鏡にみられるような獣毛の表現を，細線を省略して簡略化したことも考えられる。この部分の上に尻尾のような弧状の隆線が延び，これを1単位として獣像の一部が重なりながら旋回しているような文様の構成をとっている。この主文の内側には，胴部の隆線に対応して連続する花弁状の隆線がめぐり，さらにその内側には花弁状の隆線が外側へ張り出す位置に，爪形の文様が7か所に認められる。

界圏：断面が三角形(底幅5mm，高さ1.5mm)で，内側の傾斜は緩い。内側斜面に内向きの鋸歯文を入れる。鋸歯文は細く，形は整っていない。この部分の文様の鋳出はやや甘く，図の右斜め下の一部には不明瞭な部分がみえる。外側面の傾斜は約70度である。

外区：界圏と縁部の間に設けた凹部(幅6mm)には複合鋸歯文帯を入れ，内向き・外向きの三角形はそれぞれ18の単位を数える。一つの単位は6本が最も多いが，3本から8本の同斜方向の細隆線で描かれ，対応する向きの単位の外側の細隆線で一辺を区画し，三角形を構成している。細隆線の方向は，内向きは向かって左上から右下に，外向きでは右上から左下へ斜行する。三角形の形は，図の左側は比較的整っているが，右側は不揃いな箇所が目立ち，なかには細隆線も3本や4本に減少して交叉している三角形もある。三角形の底辺の長さは，内向きは0.8cm～1.35cm(平均1.04cm)，外向きは0.65cm～1.1cm(平均0.87cm)と，内向きの三角形が大きく区画されている。三角形の頂点の角度は，内向きは87度～120度(平均104度)と鈍角に開いているが，外向きでは65度～92度(平均81度)とその分が鋭角になっている。図の下方の細隆線は，鋳出が甘くやや不明瞭である。

縁部：無文で，縁に向かってやや反りを増す。厚みは2.5mmとほぼ一定で，上面は平滑である。縁頂部までの長さは1.0cmを測り，縁部外斜面は外方向に2.5mm面取されている。反りは2.5mmである。

玉類(第108図2～46，第27表，巻頭図版・図版51)

琥珀製勾玉(2)は，頭部と尾部の先端や背面の一部を欠損する。断面形はやや丸みをもつ。現存長1.9cm，幅1.1cm，厚さ0.9cmを測り，茶褐色を呈している。復元すると長さは3.0cmほどであろう。

管玉(3～10)は8点出土している。3はガラス製である。色調は青緑色で，径に比べて高さは低い形態である。4～10は緑色凝灰岩製である。大きさから，長さ1cm前後の小型品(4～6)と，長さ2cm前後の中型品(7～10)にわけられる。小型の管玉は濃緑色を呈し，風化してくすんだような淡灰緑色の中型品よりは表面に光沢があり優品である。4は特に小型で，高さはわずかに7.5mmである。7と10を除いて，穿孔は両側から行われ，6のように大きくずれているものもある。

ガラス玉(11～46)は36点出土している。発掘調査で出土したのは，11～36の27点である。このうち，16～18の3点は銅鏡の下から出土している。38～46の9点は調査後の篩い作業により検出されており，出土点数以上に副葬されていたと考えられる。大きさは，径3.5㎜～径7.5㎜までと不揃いであるが，径4.5㎜～径5.5㎜が26点と最も多い。径5.5㎜以上は4点，径4.0㎜以下は6点がそれぞれ出土している。色調は，ほとんどが青緑系であるが，緑系が強い色調のものもある。

第27表　24号墳玉類計測表

番号	遺物番号	種　類	色　調	材　質	最大径(㎜)	高さ(㎜)	孔径(㎜)	重量(g)	備　考
3	12	管玉	青緑	ガラス	5.0	10.0	1.5	0.46	
4	13	管玉	濃緑	緑色凝灰岩	2.5	7.5	1.5	0.08	両側穿孔
5	8	管玉	濃緑	緑色凝灰岩	2.5	11.0	1.5	0.12	片側穿孔
6	9	管玉	濃緑	緑色凝灰岩	3.5	12.0	1.5	0.31	両側穿孔
7	27	管玉	淡灰緑	緑色凝灰岩	5.0	19.0	1.0×2.5	0.88	片側穿孔
8	32	管玉	淡灰緑	緑色凝灰岩	5.5	19.5	2.0×2.5	0.86	両側穿孔
9	28	管玉	淡灰緑	緑色凝灰岩	5.8	21.0	1.5×2.0	1.37	両側穿孔
10	29	管玉	淡灰緑	緑色凝灰岩	4.5	21.5	1.5×2.5	0.59	片側穿孔
11	3	小玉	灰青緑	ガラス	9.6×9.7	6.8～7.8	3.2×3.3	1.04	
12	4	小玉	灰黄緑	ガラス	9.3×9.4	8.3	3.3×3.4	1.01	
13	5	小玉	暗灰色	ガラス	9.6×10.0	7.8	3.6×3.7	1.10	
14	6	小玉	灰黄緑	ガラス	9.8×9.9	7.9～8.9	3.1×3.2	1.08	
15	7	小玉	灰青緑	ガラス	9.7×10.1	7.8	3.5×3.6	1.13	
16	10	小玉	灰黄緑	ガラス	9.4×9.8	8.2～8.8	3.3×3.7	1.10	
17	11	小玉	灰黄緑	ガラス	9.5×9.8	8.9	3.2×3.3	1.13	
18	14	小玉	暗灰黄緑	ガラス	9.2×9.7	8.5	3.1×3.3	0.93	
19	15	小玉	明灰黄	ガラス	9.0×9.2	8.3	3.1×3.1	0.82	
20	16	小玉	暗灰黄緑	ガラス	9.6×9.8	8.9	3.0×3.2	1.20	
21	17	小玉	青紫	ガラス	4.6×4.9	2.2～3.2	2.5×2.7	0.08	
22	18	小玉	青紫	ガラス	4.3×5.2	3.1	2.6×3.0	0.09	
23	19	小玉	濃青紫	ガラス	5.2×5.4	3.4	1.8×1.9	0.14	
24	20-1	小玉	濃青	ガラス	4.8×4.9	3.6	2.4×2.7	0.11	
25	20-2	小玉	青紫	ガラス	4.5×5.3	3.5	1.0×1.0	0.10	
26	20-3	小玉	濃青紫	ガラス	5.3×5.4	3.1～3.6	2.2×2.4	0.12	
27	21	小玉	濃青紫	ガラス	4.2×4.3	3.6	2.2×2.5	0.07	
28	22	小玉	濃青紫	ガラス	5.1×5.3	3.0	2.2×2.3	0.09	
29	23	小玉	濃青	ガラス	5.2×5.5	2.5～3.2	1.9×2.3	0.09	
30	24	小玉	濃青	ガラス	4.8×5.2	3.0	2.0×2.1	0.11	
31	25	小玉	濃青	ガラス	4.8×5.2	2.6～3.1	2.3×2.8	0.11	
32	26	小玉	濃青	ガラス	4.5×4.9	2.3	2.1×2.1	0.08	
33	30	小玉	濃青	ガラス	4.6×5.1	2.1～2.3	1.8×2.3	0.08	
34	31	小玉	濃青紫	ガラス	4.5×4.6	2.6～2.9	2.0×2.3	0.09	
35	33	小玉	濃青	ガラス	5.6×6.0	2.9～3.2	2.4×2.5	0.17	
36	34	小玉	濃青紫	ガラス	4.9×5.1	3.1	1.8×2.1	0.04	
37	35	小玉	くすんだ青	ガラス	4.0×4.1	1.9	1.3×1.6	〈0.01	
38	36-1	小玉	くすんだ青	ガラス	3.7×4.1	1.8	1.8×1.8	〈0.01	
39	36-2	小玉	くすんだ青	ガラス	3.9×4.0	2.2	1.0×1.2	〈0.01	
40	36-3	小玉	濃青	ガラス	3.7×3.8	2.7	1.2×1.2	〈0.01	
41	36-4	小玉	くすんだ青	ガラス	4.0×4.1	1.7	1.6×1.6	〈0.01	
42	36-5	小玉	くすんだ青	ガラス	3.8×4.0	1.9	1.8×1.8	〈0.01	
43	36-6	小玉	くすんだ青	ガラス	3.8×4.0	2.1	2.0×2.0	〈0.01	
44	36-7	小玉	くすんだ青	ガラス	3.8×3.8	2.4	1.6×1.6	〈0.01	
45	36-8	小玉	くすんだ青	ガラス	4.0×4.0	2.3	1.6×1.9	〈0.01	
46	36-9	小玉	くすんだ青	ガラス	3.0×3.1	2.1	1.4×1.4	〈0.01	

第２節　竪穴住居跡

１　古墳時代

竪穴住居跡は，東西に延びる舌状台地の中央部から西側にかけての平坦地や緩斜面上に，東西に長く展開している。台地の東側の基部には古墳が集中していることから，居住空間は限定的な範囲での利用であったことがわかる。重複する遺構もなく，良好な立地にもかかわらず，周辺の御塚台遺跡と比べると遺構数が極めて少ない。２軒乃至３軒の住居で一つのまとまりをもつ散漫な配置で，一般的な集落とは異なる様相をみせている。

009（第109・110図，図版13・52）

調査区の中央，２Ｅグリッドに位置する。重複する遺構もなく，遺存状態は良好である。

平面形態は南北にやや長い方形で，規模は6.85ｍ×7.26ｍを測る。主軸方位はＮ－４°－Ｅである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，壁高は44cm～64cmを測り，東壁側が高くなっている。床面は全体に堅緻で，ほぼ平坦である。壁溝(幅12cm～15cm，深さ４cm～７cm)の遺存状態は良好で，カマド部分を除いて全周する。主柱穴はやや外側に寄って４本検出された。掘方は楕円形で，64cm～78cmと深く掘り込まれている。出入り口施設に伴うピットは，南壁直下の床面から南北に２基並んで検出された。北側のピット(径48cm×52cm，深さ43cm)の上面には砂質粘土が置かれていた。南側のピット(径36cm×57cm，深さ42cm)は長楕円形である。カマドの東側の壁際には，楕円形の貯蔵穴(58cm×66cm，深さ52cm)が付設されていた。覆土は暗黄褐色土と茶褐色土を主体に，黒褐色土が混在している。

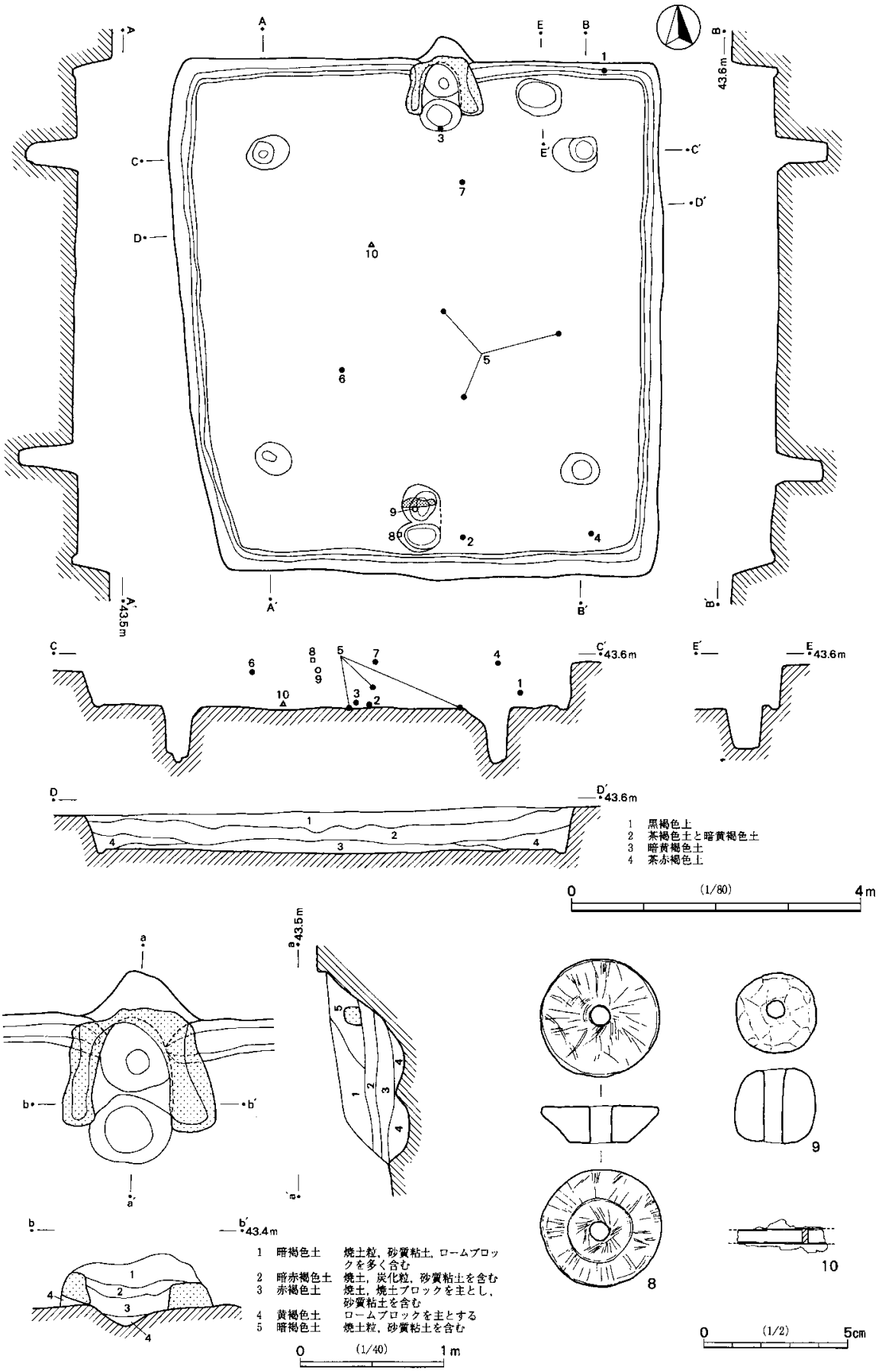
カマドは，北壁中央に壁を32cm掘り込んで構築されている。遺存状態は比較的良好である。天井部はすでに崩落していたが，砂質粘土で構築された袖部の遺存は良い。煙道部は緩やかに立ち上がる。火床は15cmほど皿状に掘り窪められ，焼土が堆積していた。

覆土中を中心に多数の土師器片が出土したが，復元可能な遺物は少ない。図示した土器は，いずれも土師器杯・高杯・甕の一部である。３の高杯はカマド前からの出土である。８は蛇紋岩製の紡錘車で，南壁際の覆土上面から出土した。径上面4.1cm・下面2.3cm，厚さ1.2cm，孔径0.7cm，重量28.0ｇを測る。９は土玉で，径1.8cm，高さ2.5cm，孔径６mmを測る。出入り口施設に伴う北側のピットから出土した。10は刀子の茎部であろう。現存長3.1cm，幅0.53cm，茎厚0.23cmを測る。床面直上からの出土である。

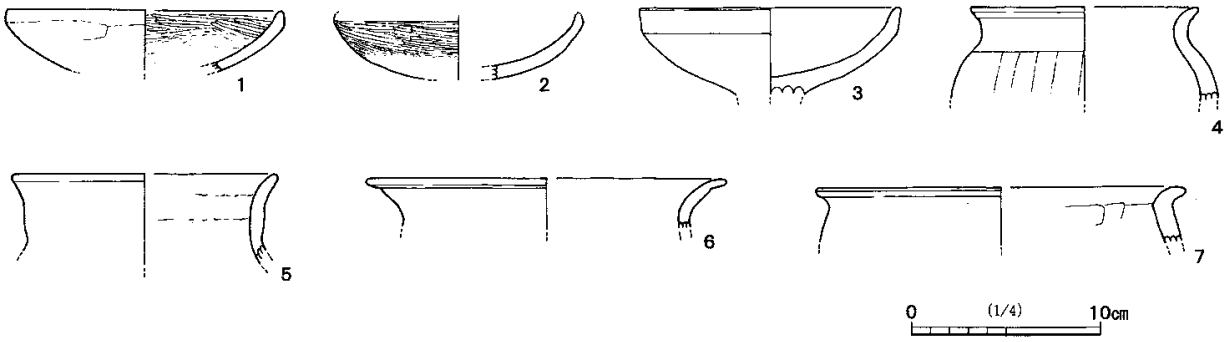
010（第111～114図，図版13・52）

調査区の中央，２Ｄグリッドに位置し，009の西側20ｍに構築されている。本遺跡の中では最も大型の住居跡で，遺存状態は良好である。

平面形態はほぼ正方形で，規模は9.02ｍ×9.14ｍを測る。主軸方位はＮ－３°－Ｅで，009と同様に南北方向にとっている。壁は垂直に深く掘り込まれ，壁高は51cm～72cmを測る。北東壁側がやや高くなっている。床面は全体に堅緻で，ほぼ平坦である。壁溝(幅15cm～20cm，深さ７cm～12cm)は全周する。主柱穴はやや外側に寄って４本検出された。掘方は楕円形で，北側のP1(径42cm×50cm，深さ66cm)とP2(径46cm×52cm，深さ45cm)に比較して，北側のP3(径52cm×58cm，深さ83cm)とP4(径48cm×60cm，深さ84cm)は深く掘り込まれている。主柱穴の底面には，柱の基盤として硬い粘土が敷かれていた。出入り口施設に伴うピットは，南壁際中央の床面に２基のピットが連結して設けられている。カマドの東側には貯蔵穴(径52cm×76cm，深さ47cm)が付設されていた。覆土は，暗黄褐色土がまず堆積し，その上に暗褐色土と茶褐色土や黒褐色土が自然に堆積していた。



第109図　009及び出土遺物(1)



第110図　009出土遺物(2)

カマドは，北壁中央に壁を50cm掘り込んで設けられている。遺存状態は良好で，天井部はすでに崩落していたが砂質粘土で構築された袖部が良く残っている。煙道部は緩やかに立ち上がる。火床は皿状に15cm掘り窪められ，底面はよく被熱していた。カマド内からは，甕(21・22)，甑(24)，支脚(28)が出土した。

遺物は住居全体から出土している。特に，カマド周辺の床面からは2個の高杯(11・12)，貯蔵穴付近から甕(18)，壁際からは須恵器壺(16)・甕(19・20)などが，それぞれまとまって出土している。1・2の須恵器杯は西壁側の床面からの出土で，1には底部外面に「×」のヘラ記号が残る。25は埋木の棗玉で1/2の遺存である。最大径1.2cm・高さ1.4cm・孔径1.5mmを測る。覆土中から出土した。26は土玉で，径1.3cm×1.4cm・孔径1.5mm～3.0mmを測る。貯蔵穴から出土した。27は滑石製の臼玉である。径1.2cm・高さ0.8cm・孔径2mmを測る。カマド左袖脇の壁際からの出土である。

011（第115・116図，図版13・53　）

調査区の西端，3Cグリッドに位置する。南東斜面に構築されているが，遺存状態は良好である。

平面形態は方形で，規模は4.03m×4.52mを測り，主軸方向が短い。主軸方位はN-34°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが，斜面にかかるため壁高は41cm～85cmと差があり，南西側が次第に低くなっている。床面はほぼ平坦で，全体に堅緻である。壁溝(幅12cm～20cm，深さ3cm～8cm)は，カマド部分を除いて全周する。4本の主柱穴はやや内側に寄っており，P3(径50cm×62cm，深さ60cm)を除いてはほぼ一定の規模(径32cm～38cm，深さ47cm前後)である。P1には炭化した柱痕が一部遺存していた。出入り口施設に伴うピットや貯蔵穴は検出されていない。覆土は，ハードロームブロックを含む茶褐色土を主体に，炭化粒やロームブロックを含む暗褐色土が混在している。

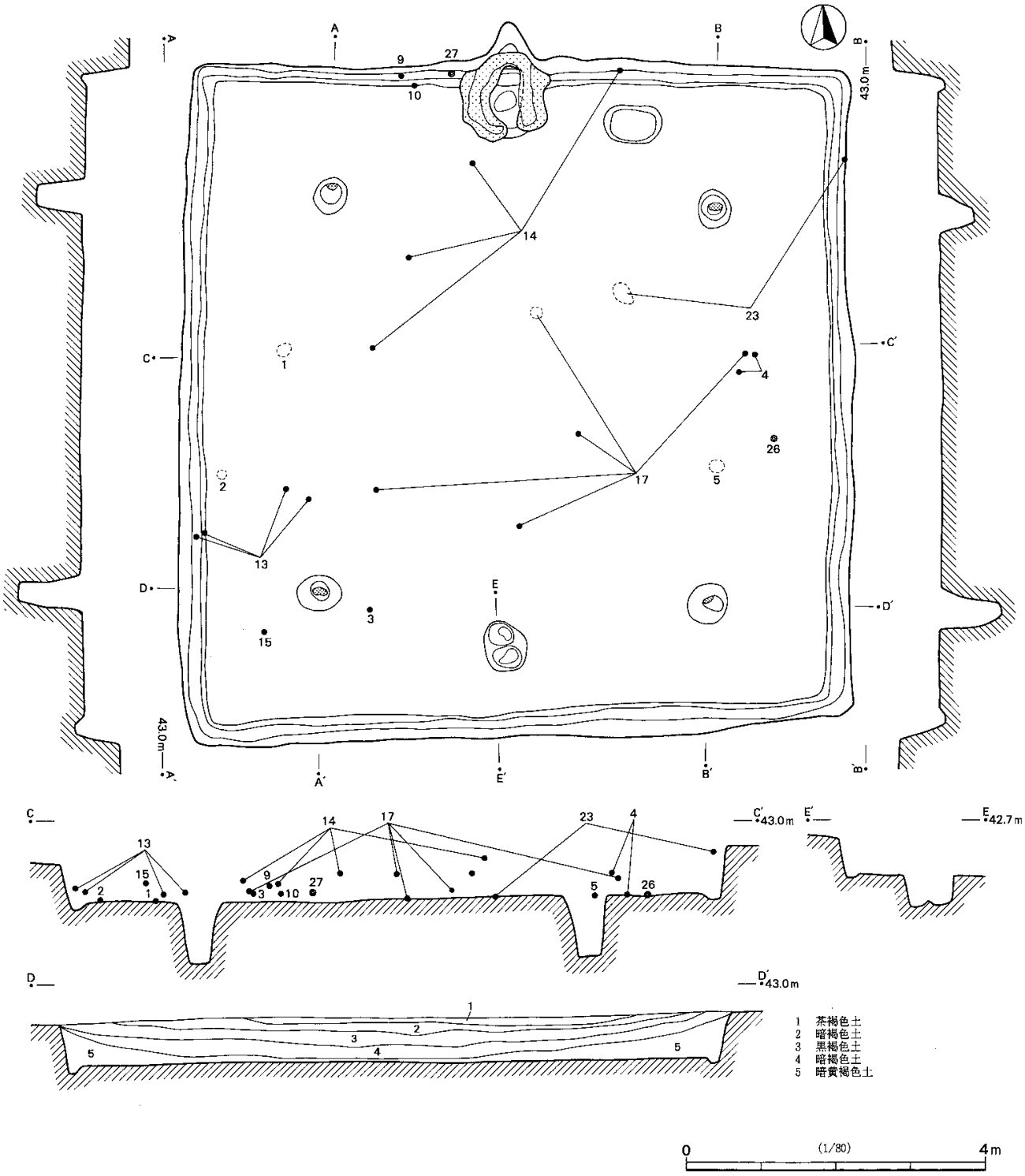
カマドは北西壁中央に設けられ，壁を45cm掘り込んでいる。遺存状態は良好で，天井部の一部と袖部がよく残っていた。煙道部の立ち上がりは緩やかである。火床の掘り込みは浅く，わずかに3cm程度である。カマド内には，高杯(6)や甕(9・10・12)がまとまって残されていた。

小型の住居であるが，覆土中から土器片が多数出土した。特に，13の甕と15の甑は多くの破片として東壁側から住居中央の床面直上に流れ込んでいる。11の甕も，破片として覆土中から床面上から出土している。これらの土器は，住居が埋没する過程で周辺から投棄されたものであろう。

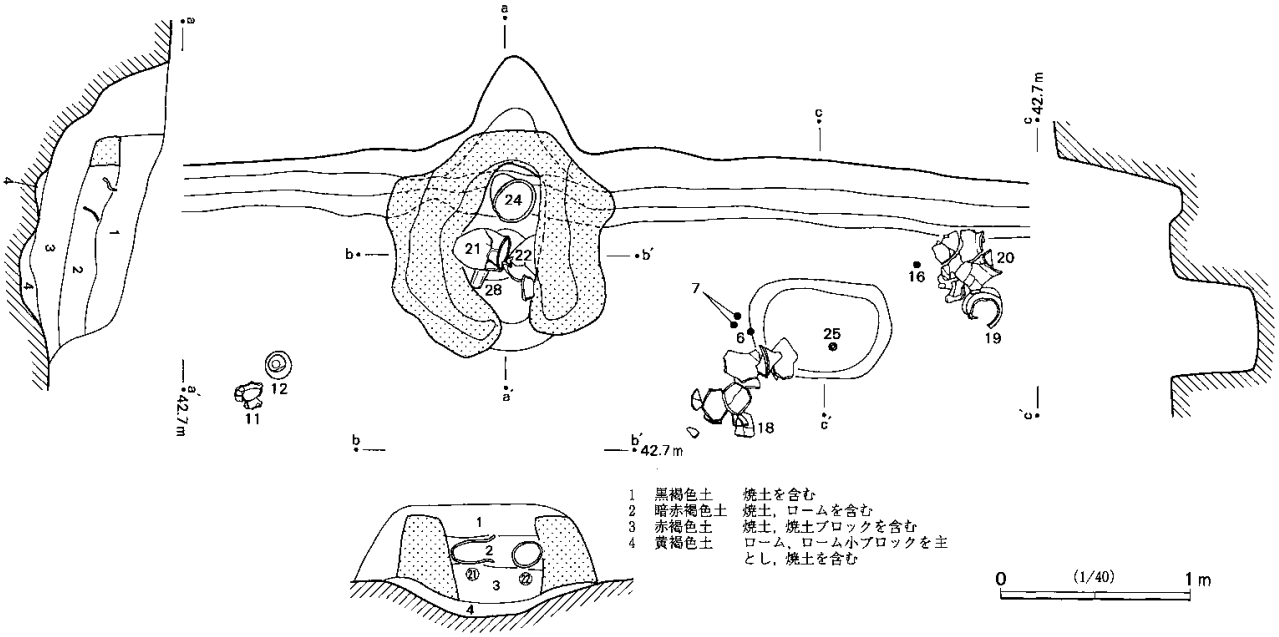
014（第117図，図版14・53）

調査区の中央やや西寄り，3Cグリッドに位置する。南斜面に一部かかって構築されているが，遺存状態は良好である。

平面形態はほぼ正方形で，規模は3.40m×3.34mを測る。主軸方位はN-69°-Wである。壁はほぼ垂直


A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
43.0m
42.7m
1 茶褐色土
2 暗褐色土
3 黒褐色土
4 暗褐色土
5 暗黄褐色土
0
(1/80)
4m

第111図　010



第112図　010カマド

に掘り込まれている。壁高は16cm～66cmを測り，斜面にかかる南側が低い。床面は，北側から南東側にかけてよく踏み固められ，特に中央部から南東側の範囲が堅緻でやや高くなっている。壁溝は認められない。また，主柱穴と出入り口施設に伴うピットや貯蔵穴も検出されていない。覆土は，まず焼土粒や小ローム・ブロックを含む暗褐色土や茶褐色土が堆積し，その上に暗褐色土や黒褐色土が堆積している。

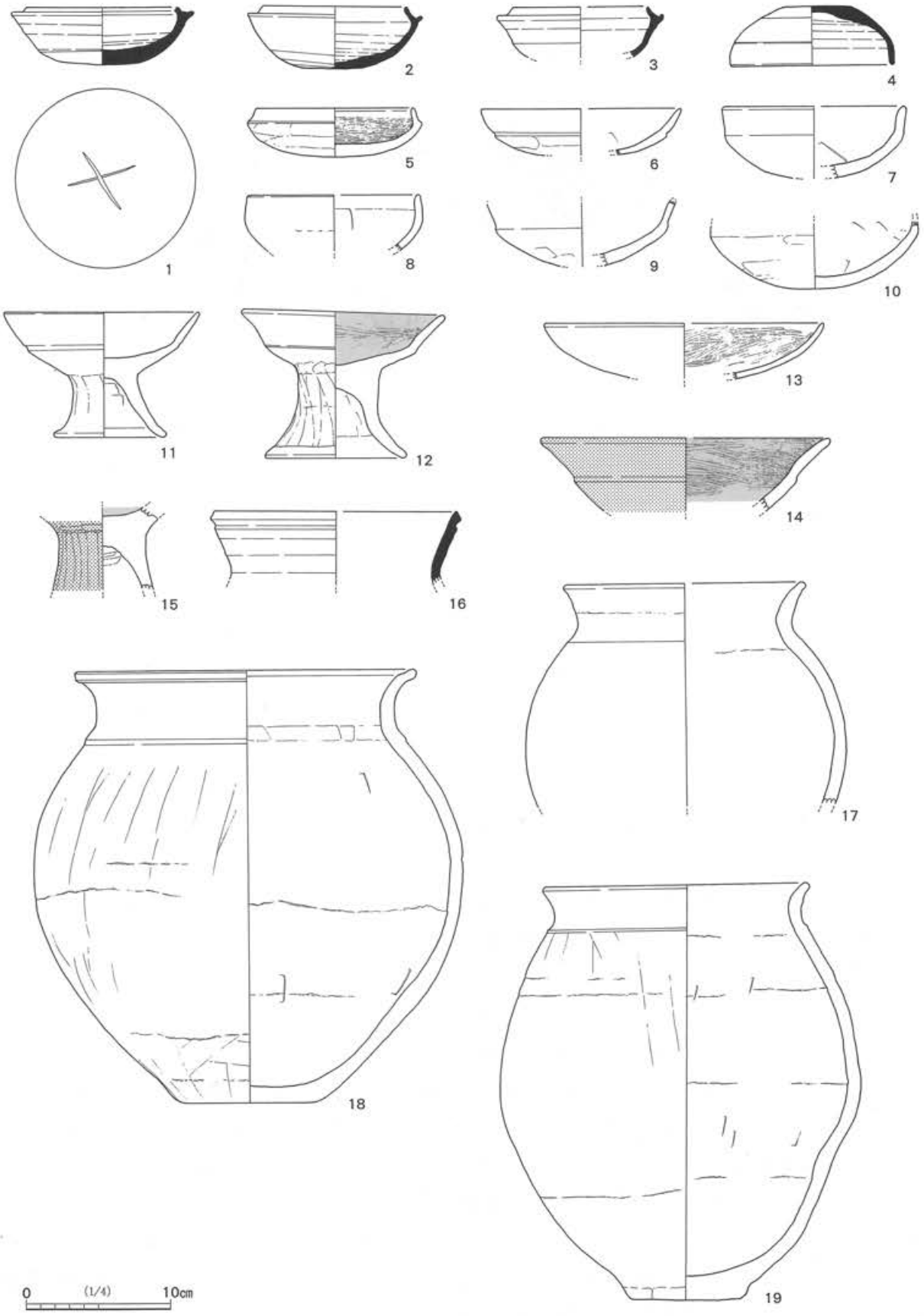
カマドは，西壁中央に壁を40cm掘り込んで設けられている。天井部はすでに崩落していたが，袖部はよく遺存していた。煙道部の立ち上がりは緩やかである。火床の掘り込みは浅く，わずかに3.cm程度であるが，焼土粒が堆積していた。

遺物は，覆土中から土器片が出土しているが，出土点数は少ない。1の須恵器杯は北東壁際からの出土で，底部外面にヘラ記号が残る。4の土師器杯は，カマド前面の床面直上から出土した。

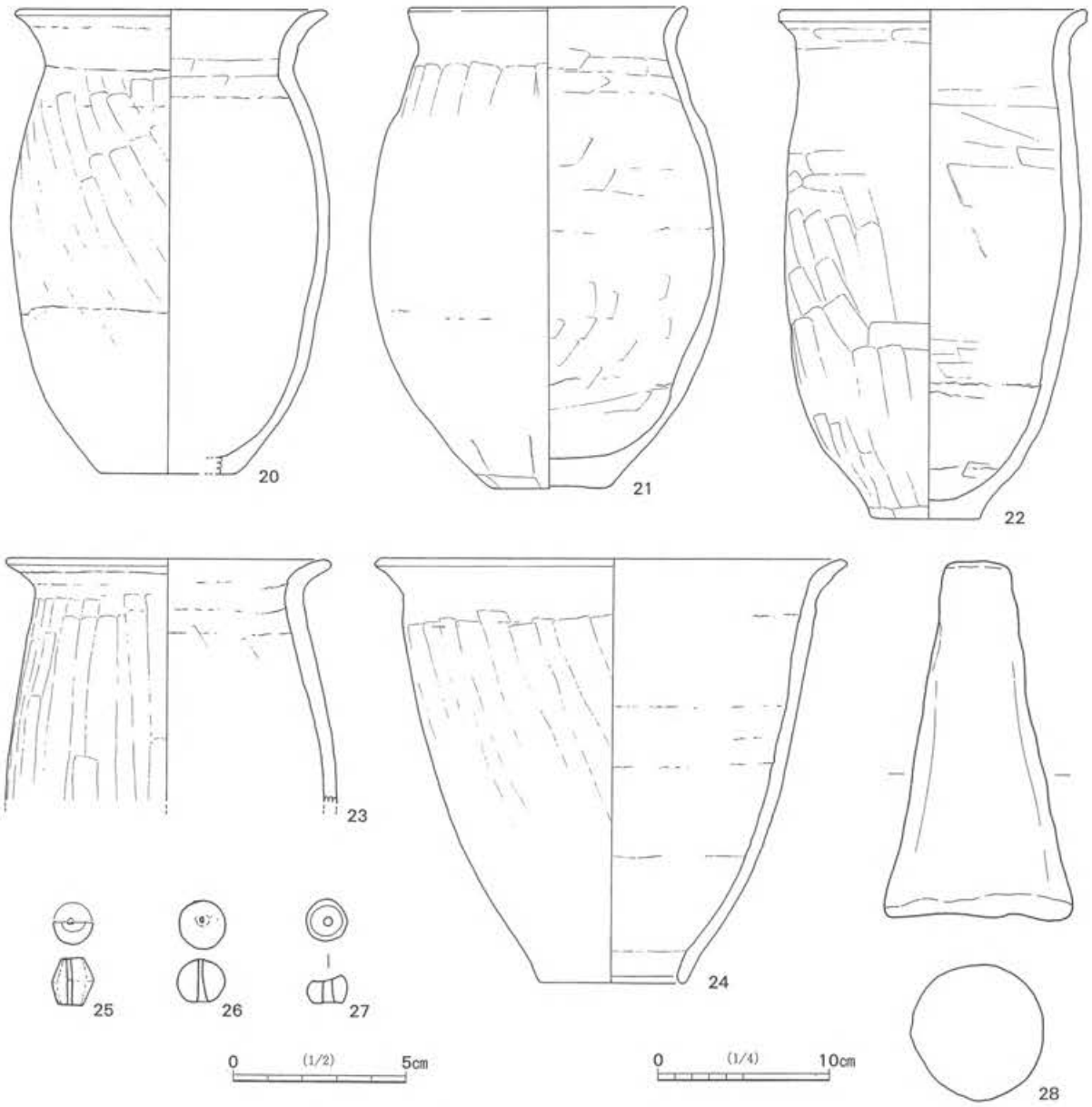
017（第118・119図，図版14・54）

調査区西端，3Bグリッドに位置している。011の北西5mの平坦地に構築されている。床面からは炭化材が多数出土しており，火災を受けた住居であるが，遺存状態は良好である。

平面形態は方形で，規模は6.55m×6.40mを測る。主軸方位はN-33°-Wと，隣接する011とほぼ同じ方位である。壁は垂直に掘り込まれ，壁高は55cm～69cmを測る。南壁側がやや低くなっている。床面は，全体にほぼ平坦で堅緻であるが，P2周囲では円形に軟弱な面が確認された。壁溝(幅10cm～20cm，深さ6cm～10cm)は全周する。主柱穴は4本検出された。北側のP1とP2は，ほぼ同じ規模(径50cm～56cm，深さ67cm前後)であるが，南側の2本はやや大きく(径60cm～76cm)，深さも72cm～78cmと深く掘り込まれている。出入り口施設に伴うピットや貯蔵穴は検出されていない。覆土はローム粒やロームブロックを含む黄褐色土を主体に，焼土粒を含む茶褐色土や暗褐色土，黒色土が混在している。



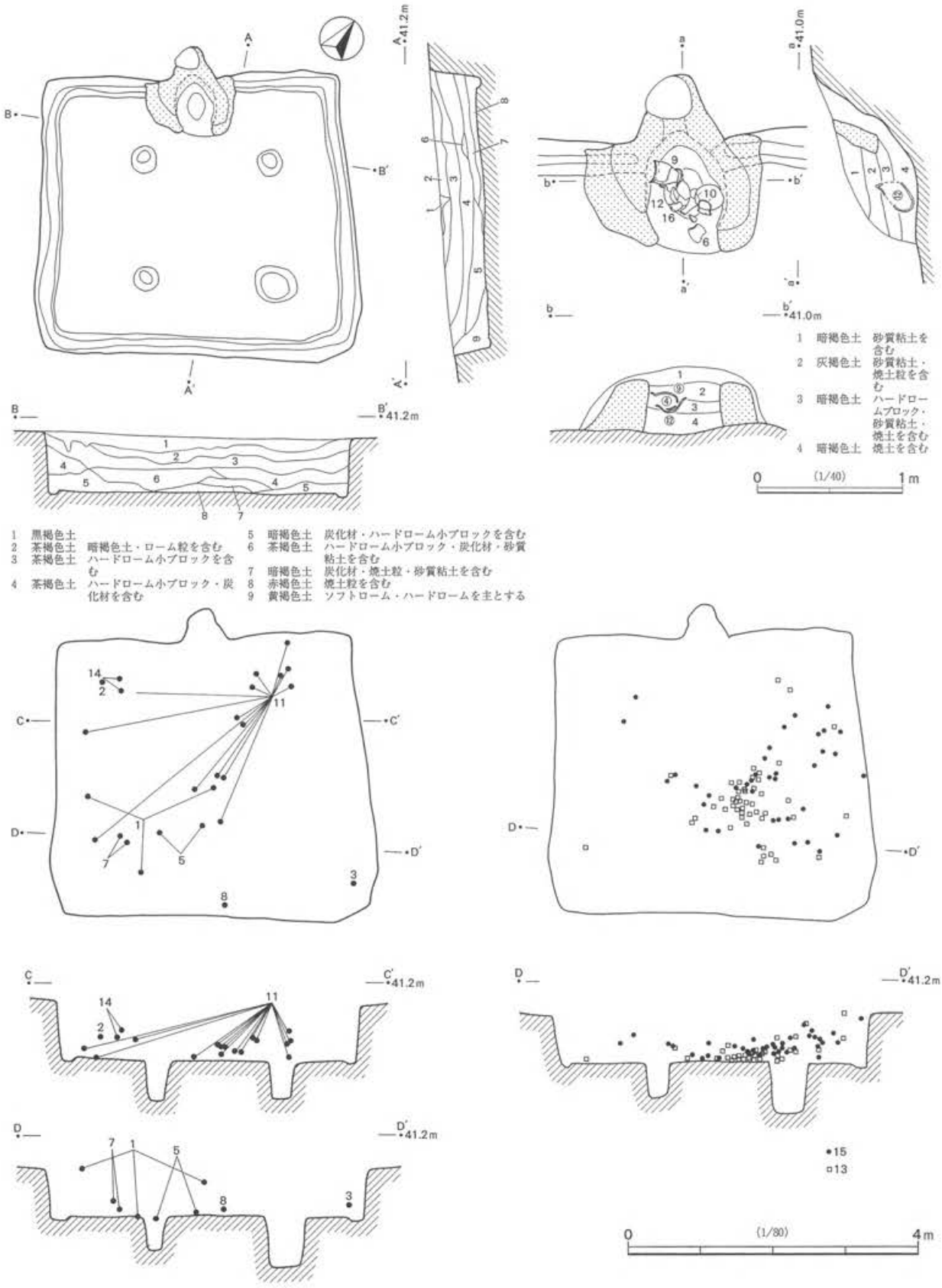
第113図　010出土遺物(1)



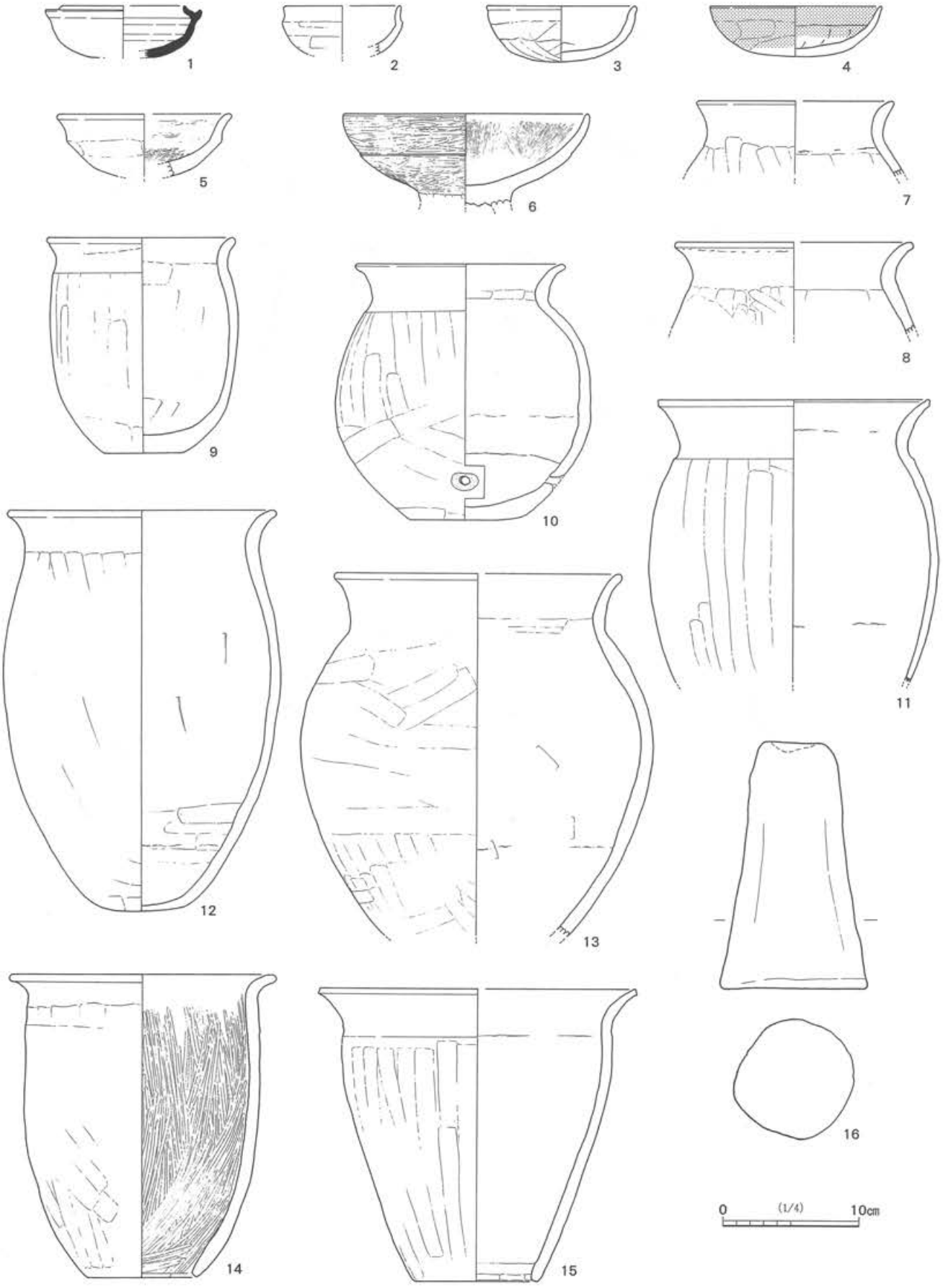
第114図　010出土遺物(2)

カマドは，北壁中央やや西寄りに設けられ，壁への掘り込みは20cmである。天井部はすでに崩落していたが，袖部は良好に遺存していた。煙道部は角度をもって立ち上がり，焚き口を塞ぐように右袖部から連続している砂質粘土は，天井部前面の部分が落下したものであろう。袖部の内側は被熱で赤色化し，焼土の堆積が多い。火床は皿状に14cm掘り窪まれ，底面はよく被熱していた。カマド内からは，甕(13・15)と支脚(16)が出土している。

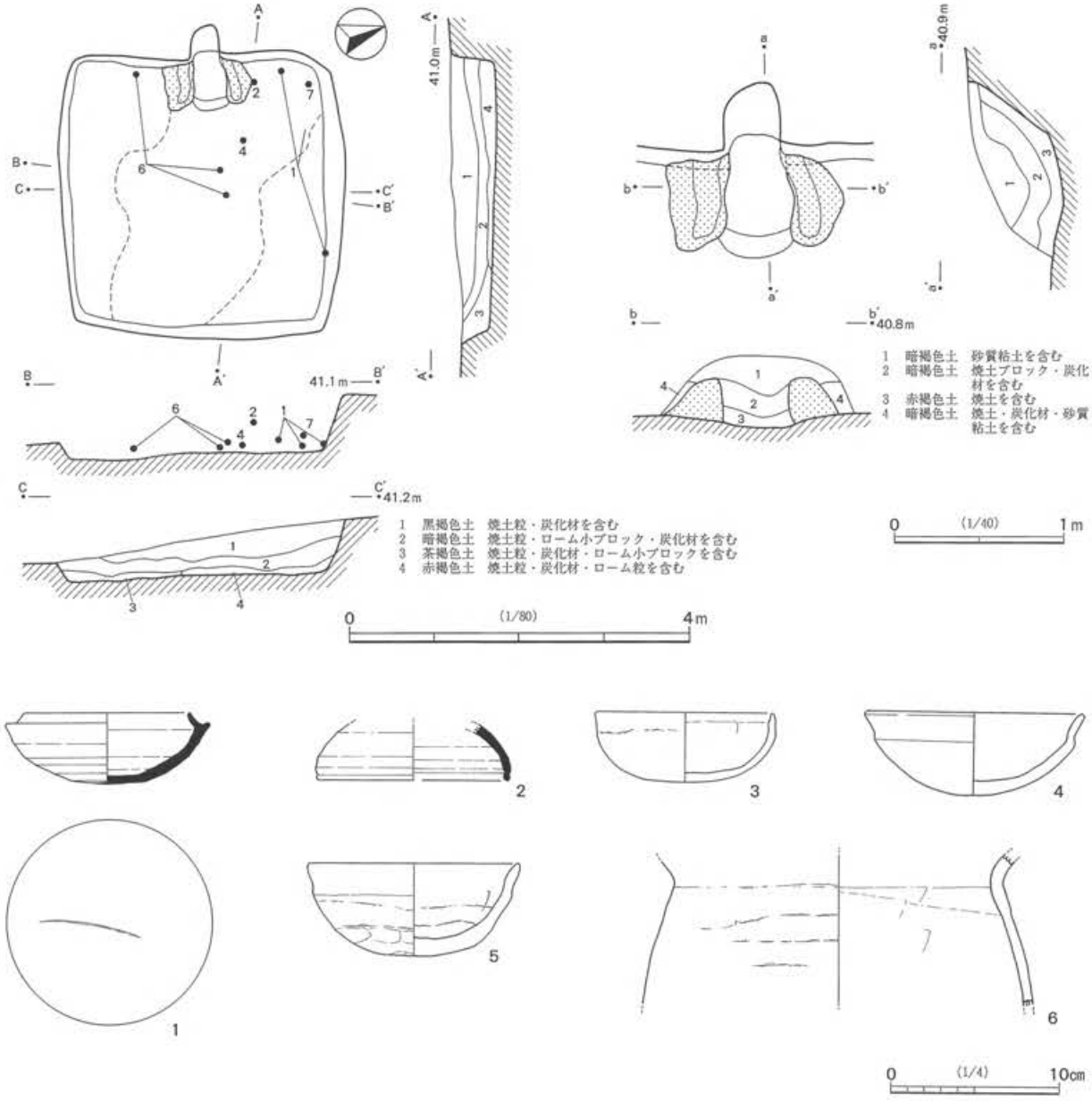
遺物は，覆土中から多数の土師器杯・高杯・甕や須恵器などの破片が出土している。1の須恵器杯は，P3西側の床面からの出土である。底部外面のやや窪んだ中央部に斜格子状の刻みを入れ，周縁に回転ヘラケズリを施している。2の須恵器杯蓋と6の土師器杯は南壁際から，12の高杯はP1際から，それぞれ出土した。14の甕は北東壁際からの出土である。


A
A'
41.2m
B
B'
41.2m
a
a'
41.0m
b
b'
41.0m
C
C'
41.2m
D
D'
41.2m
1 黒褐色土
2 茶褐色土 暗褐色土・ローム粒を含む
3 茶褐色土 ハードローム小ブロックを含む
4 茶褐色土 ハードローム小ブロック・炭化材を含む
5 暗褐色土 炭化材・ハードローム小ブロックを含む
6 茶褐色土 ハードローム小ブロック・炭化材・砂質粘土を含む
7 暗褐色土 炭化材・焼土粒・砂質粘土を含む
8 赤褐色土 焼土粒を含む
9 黄褐色土 ソフトローム・ハードロームを主とする
1 暗褐色土 砂質粘土を含む
2 灰褐色土 砂質粘土・焼土粒を含む
3 暗褐色土 ハードロームブロック・砂質粘土・焼土を含む
4 暗褐色土 焼土を含む
0 (1/40) 1m
•15
□13
0 (1/80) 4m

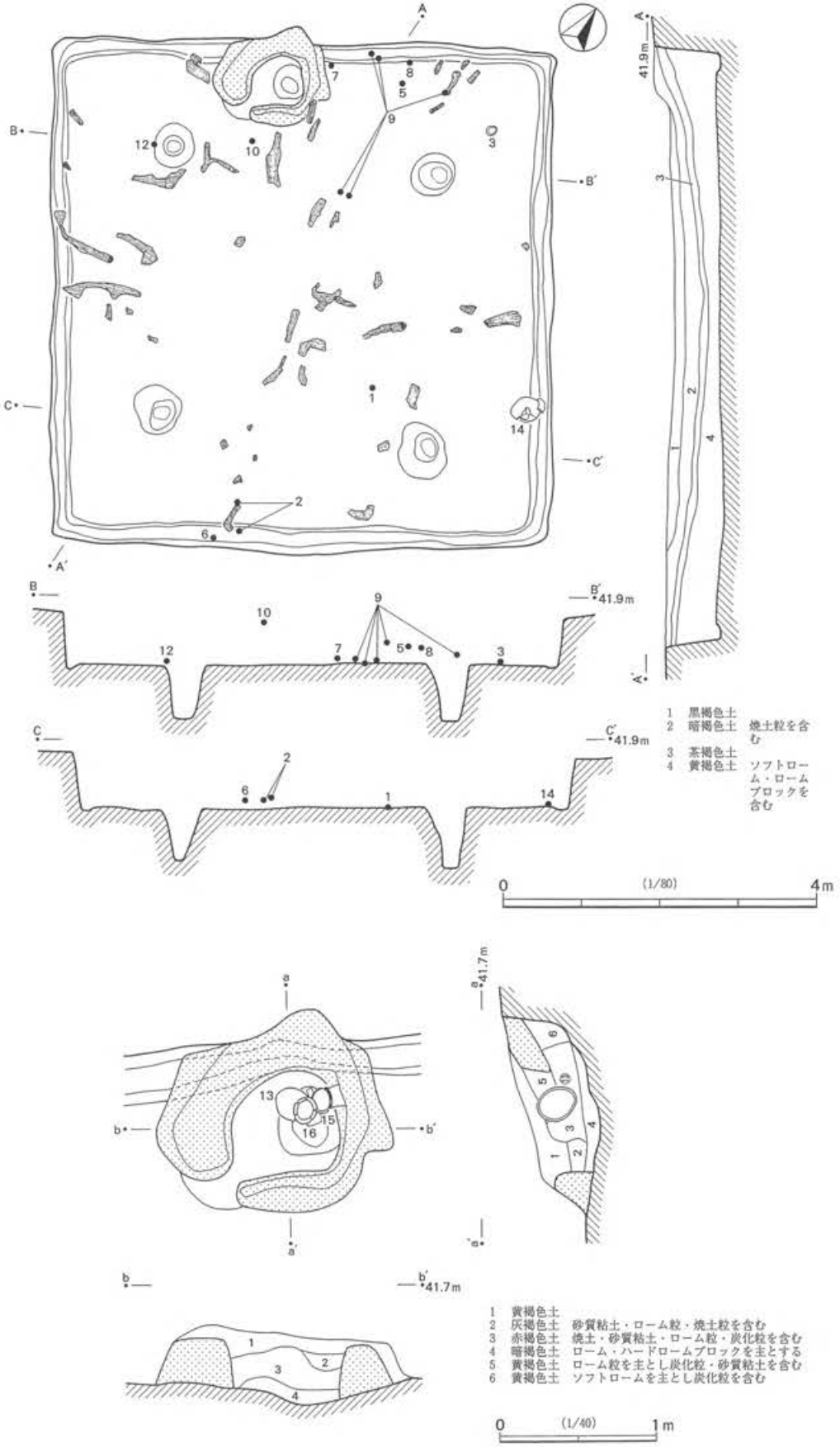
第115図　011



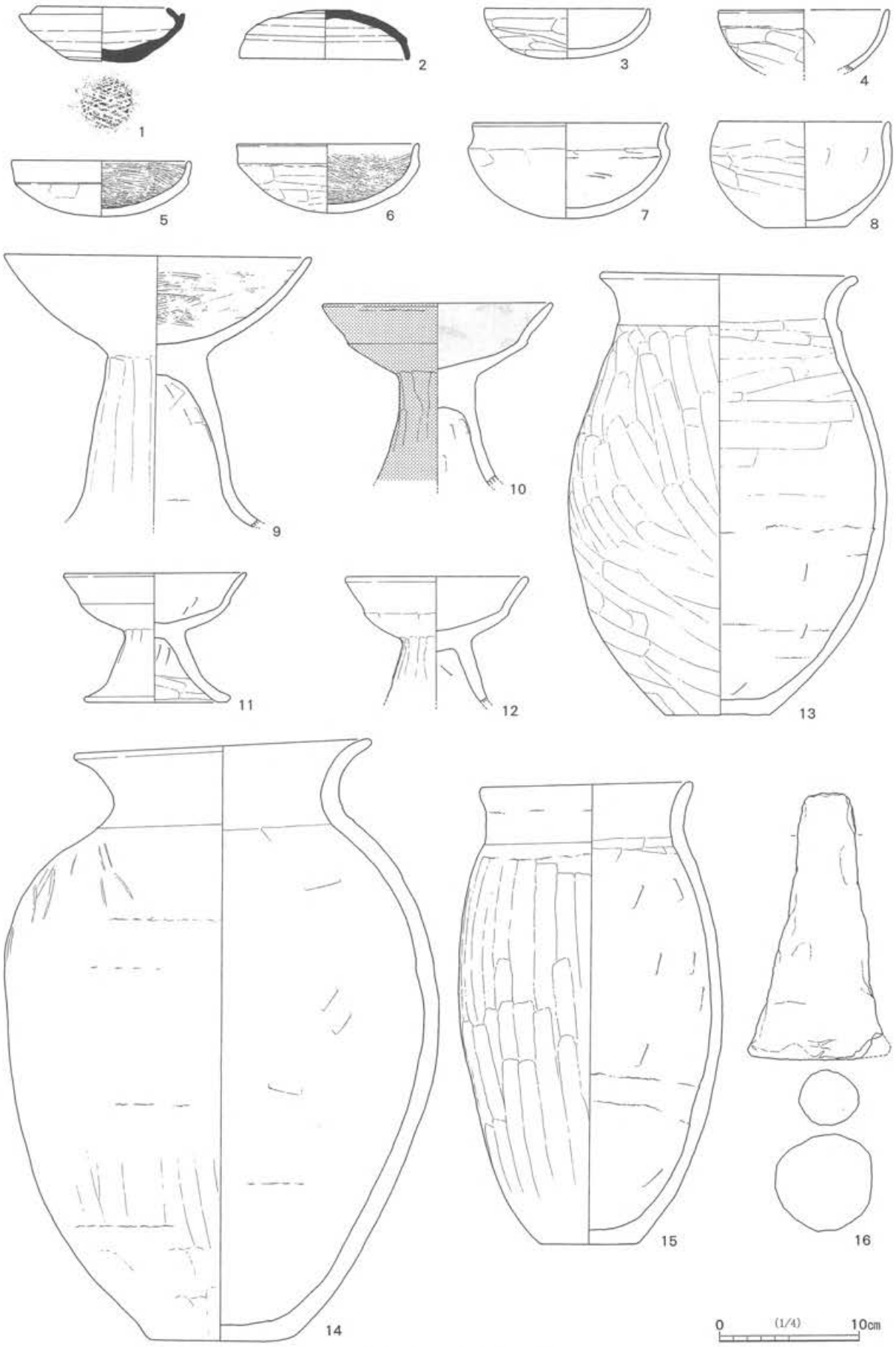
第116図　011出土遺物



第117図　014及び出土遺物


A
A′
B
B′
C
C′
41.9m
41.7m
a
a′
b
b′
1 黒褐色土
2 暗褐色土 焼土粒を含む
3 茶褐色土
4 黄褐色土 ソフトローム・ロームブロックを含む
1 黄褐色土
2 灰褐色土 砂質粘土・ローム粒・焼土粒を含む
3 赤褐色土 焼土・砂質粘土・ローム粒・炭化粒を含む
4 暗褐色土 ローム・ハードロームブロックを主とする
5 黄褐色土 ローム粒を主とし炭化粒・砂質粘土を含む
6 黄褐色土 ソフトロームを主とし炭化粒を含む
0 (1/80) 4m
0 (1/40) 1m

第118図　017



第119図　017出土遺物

018（第120図，図版15・53）

調査区中央，３Ｅグリッドに位置する。009の南７ｍの南緩斜面に構築されているが，遺存状態は良好である。カマドが北西壁と北東壁の２か所から検出されたが，北西壁側の方（カマドＡ）が新たに付設されたものである。壁際から炭化材が出土しており，火災を受けた住居である。

平面形態は方形で，規模は4.90ｍ×5.10ｍを測る。主軸方位はN-45°-Wである。壁は垂直に掘り込まれ，壁高は46㎝～81㎝を測り，斜面にかかる南側が次第に低くなっている。床面は，全体にほぼ平坦で堅緻である。壁溝（幅15㎝～20㎝，深さ７㎝～10㎝）は全周する。主柱穴は４本検出され，P4（深さ45㎝）を除いてはほぼ同様の深さ（53㎝～57㎝）である。出入り口施設に伴うピットや貯蔵穴は検出されていない。覆土は，ローム粒を多く含む黄褐色土を主体に，暗褐色土や黒色土が混在している。

カマドは２か所に付設されていた。カマドＡは，北西壁中央に壁を30㎝掘り込んで構築されている。遺存状態は良好で，天井部の一部や煙道部がよく残っている。袖部は壁から1.25ｍ張り出し，幅は1.1ｍを測る。内側は被熱で赤色に硬化していた。煙道部はほぼ直角に立ち上がり，径20㎝の煙り出しが残る。火床は皿状に約10㎝掘り窪まれ，底面はよく被熱していた。右袖部の脇に２個の支脚が置かれていた。カマドＢは，北東壁中央やや北寄りに壁を25㎝掘り込んで付設されていた。すでに袖部も取り除かれており，皿状に掘り窪められた火床や，角度をもって立ち上がる煙道部がわずかに遺存している程度である。

遺物は，カマドＡの周辺を中心に出土しているが点数は少ない。右袖際からは環状の土製品（５・６）が，左袖周辺からは土玉（７～10）がまとまって出土した。５はやや縦長の楕円形を呈し，径4.1㎝×4.3㎝・孔径1.7㎝×1.9㎝，断面は楕円形で径1.2㎝×1.5㎝を測る。重量は23.7ｇである。６は1/2の遺存である。ほぼ円形になると考えられる。現存の外径は3.6㎝，孔径は推定で1.2㎝，断面は円形で径1.3㎝を測る。現重量は8.0ｇである。土玉は８以外は欠損している。現存値は，径2.3㎝～2.8㎝，高さ2.3㎝～2.7㎝，孔径２㎜～３㎜，重量11.5ｇ～18.9ｇである。１の土師器杯は南壁際の床面からの出土である。

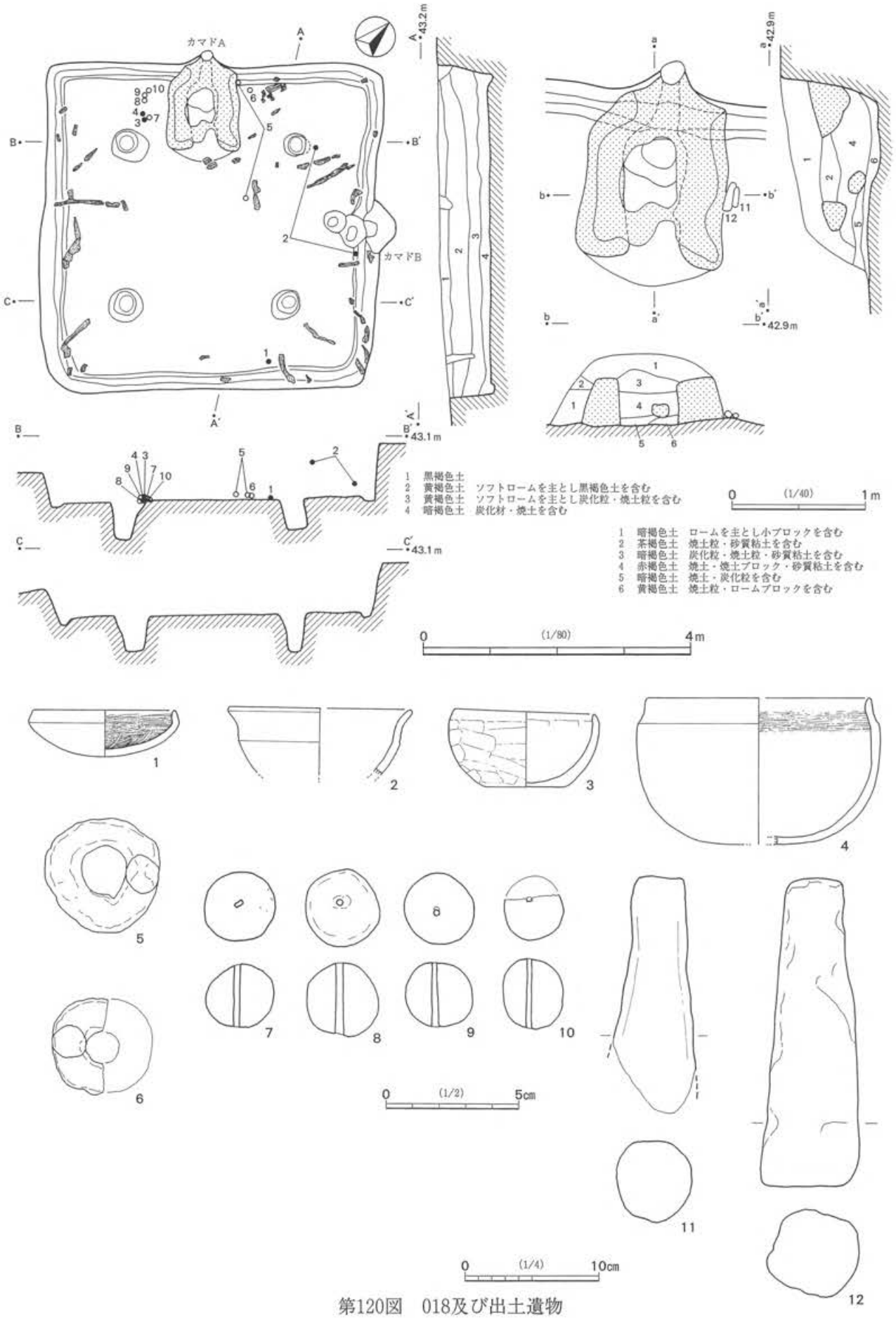
２　奈良・平安時代

竪穴住居跡は，台地中央部から東側の台地基部にかけての範囲に東西に長く展開し，調査区東側の一群（035・037）と，古墳群を挟んで東端の一群（052・102・103）に大きく分けられる。東側の住居には016方形周溝が隣接している。21号墳と22号墳の周溝際に005と030の２基の土坑墓があり，古墳の存在を意識的に利用した配置になっている。全体に散漫な分布で，掘立柱建物も検出されておらず，一般的な集落の様相とは異なっている。

035（第121図，図版16・55）

調査区の中央やや東寄り，３Ｆグリッドに位置する。平坦地から緩斜面にかかる場所に構築されているが，遺存状態は良好である。

平面形態は正方形で，規模は2.90ｍ×2.94ｍを測る。主軸方位はN-21°-Wである。壁は垂直に掘り込まれ，壁高は65㎝～81㎝を測り，全体に深くなっている。南壁側は斜面にかかるため次第に低くなる。床面は凹凸があるが，全体に堅緻である。壁溝（幅15㎝，深さ３㎝前後）は，カマド部分と貯蔵穴が付設されている南東コーナー付近を除いて巡っている。主柱穴と出入り口施設に伴うピットは検出されなかった。



第120図　018及び出土遺物

貯蔵穴(径60cm×64cm，深さ27cm)は楕円形で，南東コーナーに設けられている。貯蔵穴の埋土は，ロームブロックを多量に含む暗褐色土である。住居の覆土は，ロームブロックを含む茶褐色土を主体に，黒褐色土が薄く堆積している。

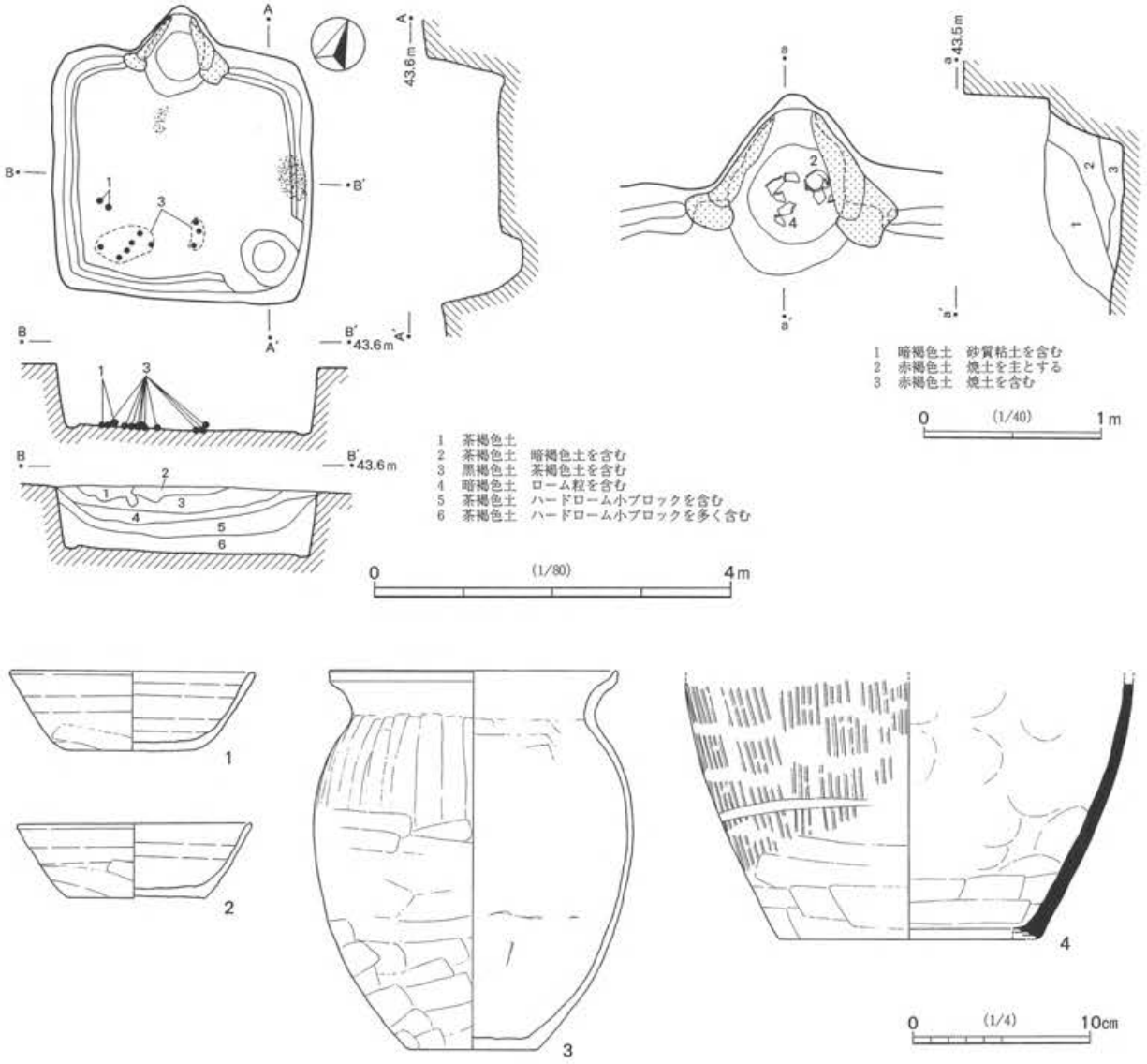
カマドは北壁中央西東寄りに設けられ，遺存状態は良好ではない。壁を50cm大きく掘り込んでおり，袖部の住居内側への張り出しは小さくなっている。煙道部は緩やかに立ち上がり，火床は浅く円形に掘り窪められ，焼土が堆積していた。カマド内からは，土師器杯(２)と須恵器甕(４)が出土した。

出土遺物は少ない。南壁周辺の床面から，土師器杯(１)や甕(３)が出土している。

037（第122・123図，図版16・55）

調査区の東側，２Ｆと３Ｆグリッドの境に位置する。やや緩斜面にかかる場所に構築されており，遺存状態は良好である。

平面形態は北東コーナーが丸味をもつが，ほぼ正方形である。規模は2.80ｍ×2.90ｍを測る。主軸方位

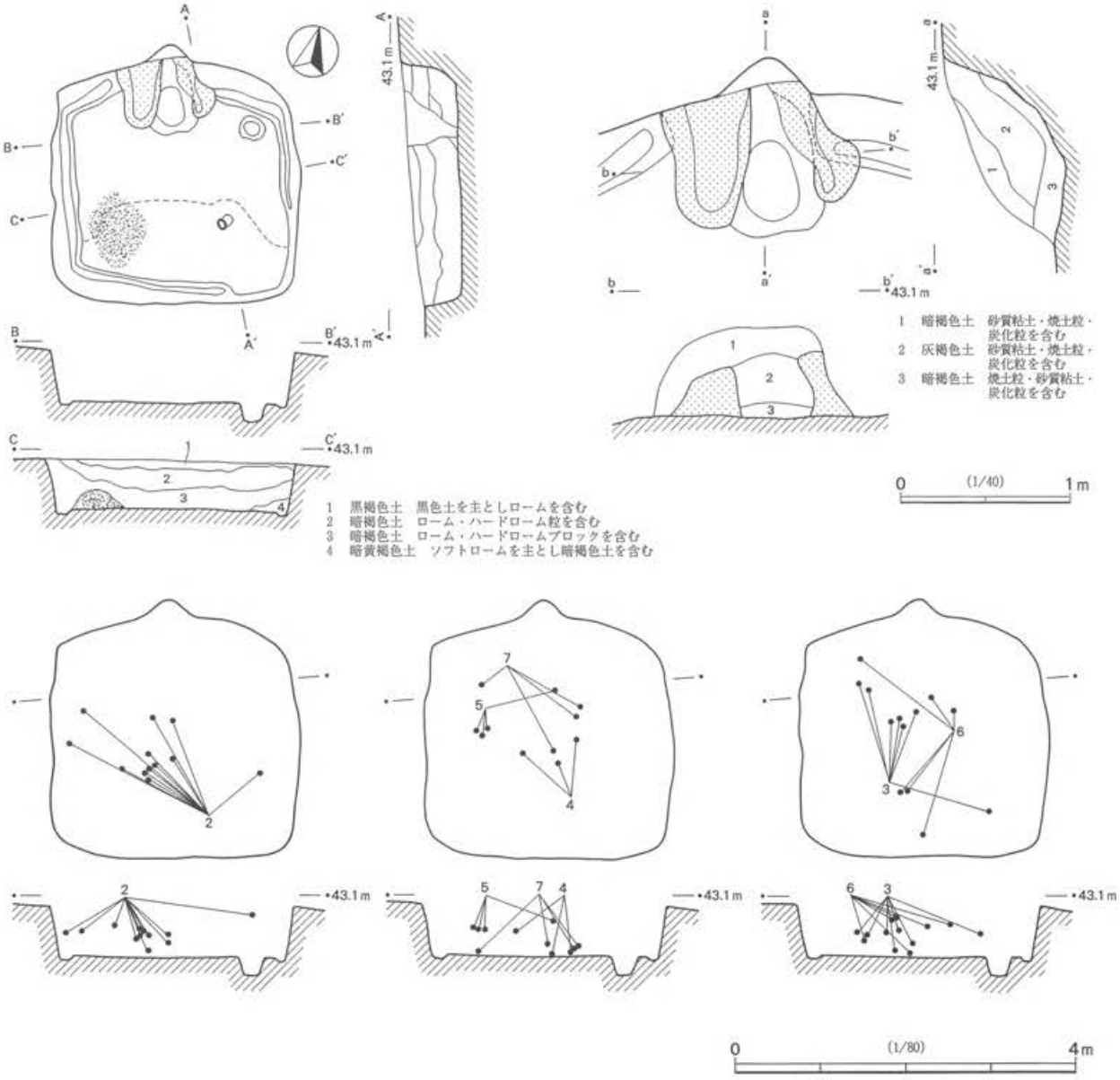


第121図　035及び出土遺物

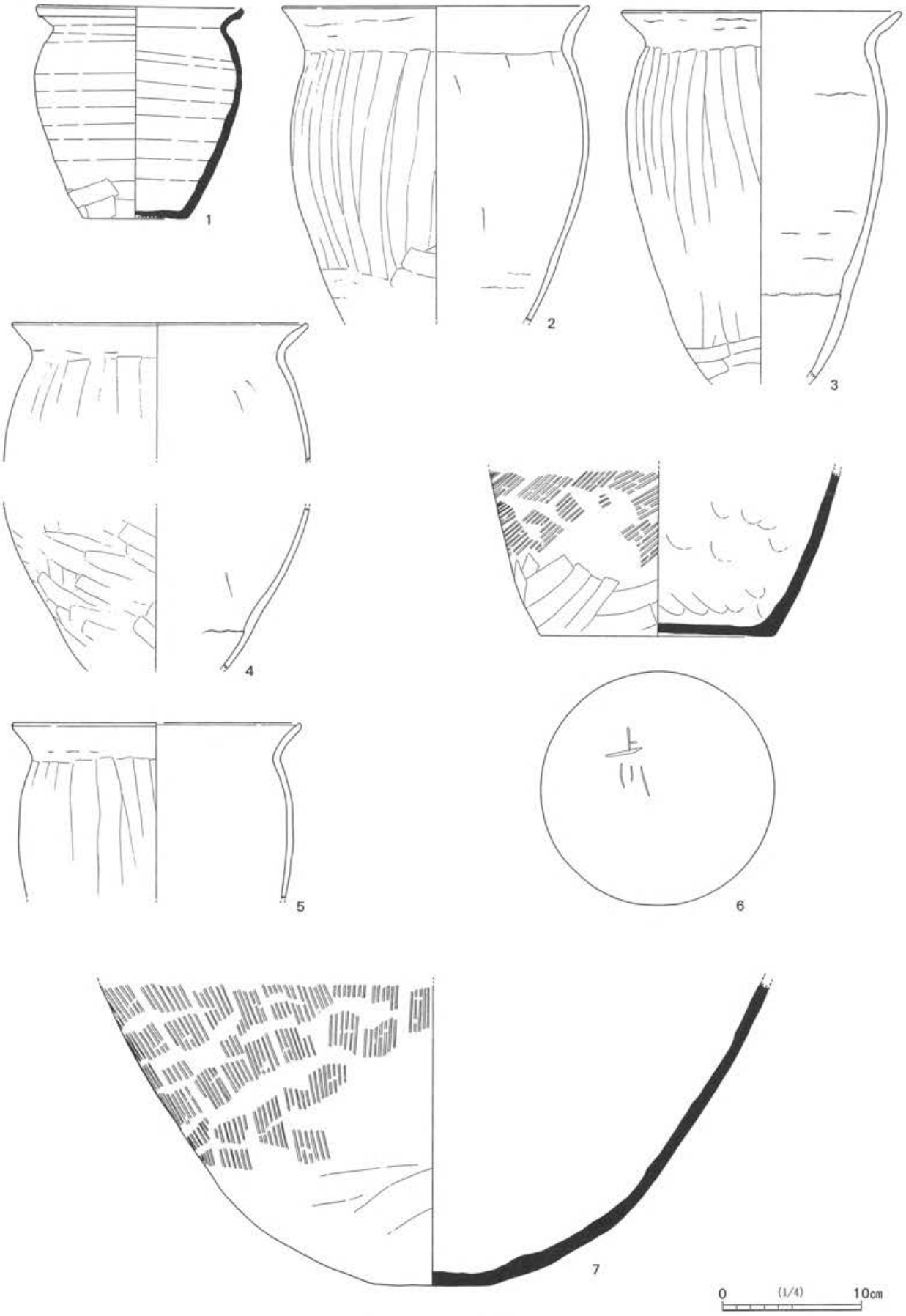
はN-14°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，壁高は48cm～66cmを測る。南壁側が斜面にかかるため浅くなっている。床面はやや凹凸があるが，中央からカマド前面の範囲がよく踏み固められている。南西コーナー付近は不整形な範囲で，床面がやや低くなっている。壁溝(幅15cm～20cm，深さ2cm～6cm)は，カマド部分と南東コーナー付近を除いて巡っている。北西コーナー付近の床面から1個のピット(径28cm，深さ22cm)を検出したが，出入り口施設に伴うピットは確認できなかった。覆土は，ローム粒を多く含む暗褐色土を主体に，暗黄褐色土や黒褐色土が混在する。

カマドは北壁中央に設けられている。遺存状態は良好ではなく，袖部の一部が残存している程度である。壁を25cm掘り込んで，緩やかに立ち上がる煙道部を形成している。火床は浅く5cm程度である。

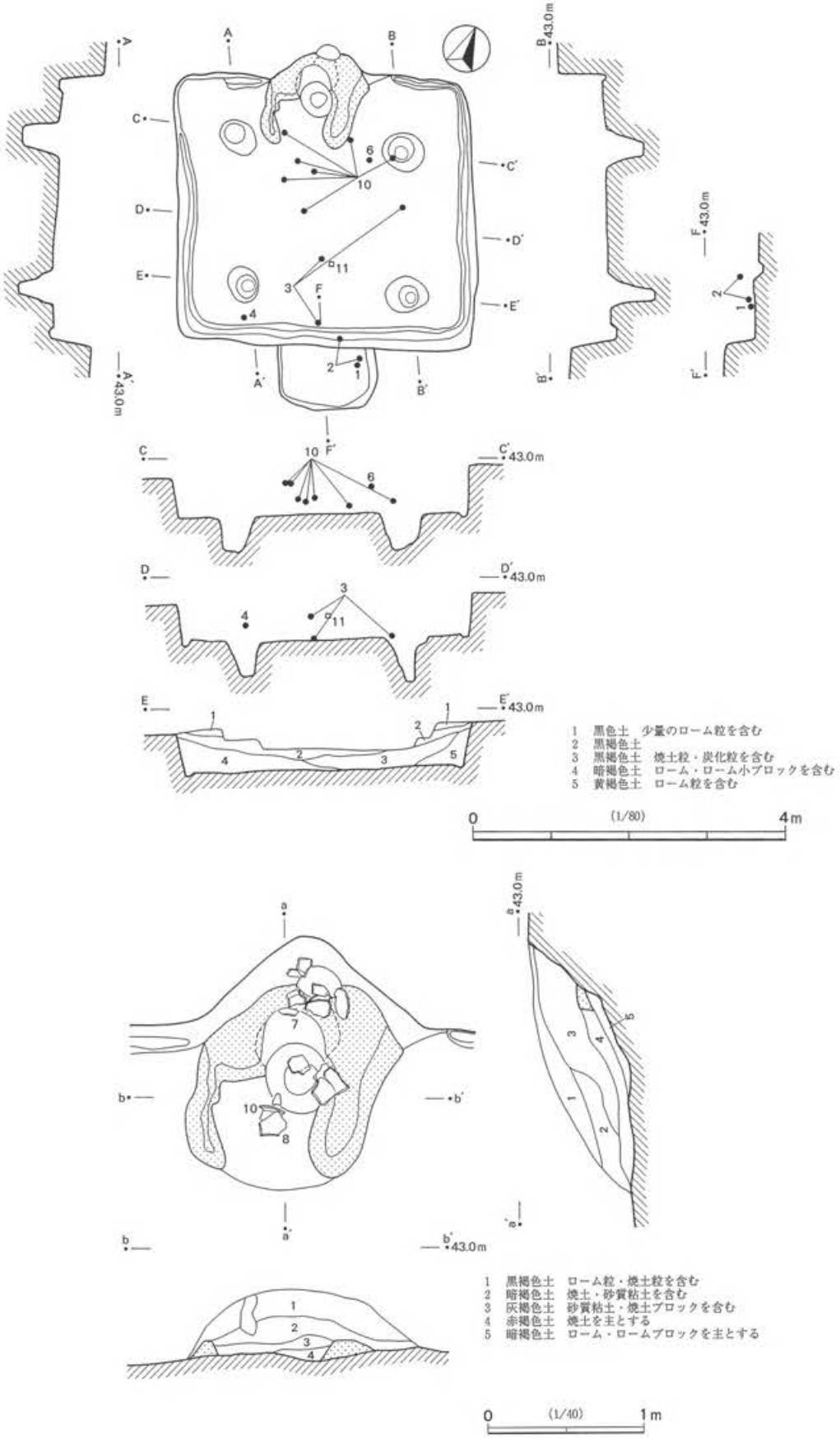
出土遺物は多いが，ほとんどの土器は覆土中から床面直上にかけて破片として出土している。特に，2～7は主に覆土中位から床面直上に散布している。まとまりはなく，破片の状態で投棄されたものであろう。1の須恵器甕は床面からの出土である。なお，6の須恵器甕は，底部外面に「上川」と線刻されている。



第122図 037



第123図　037出土遺物

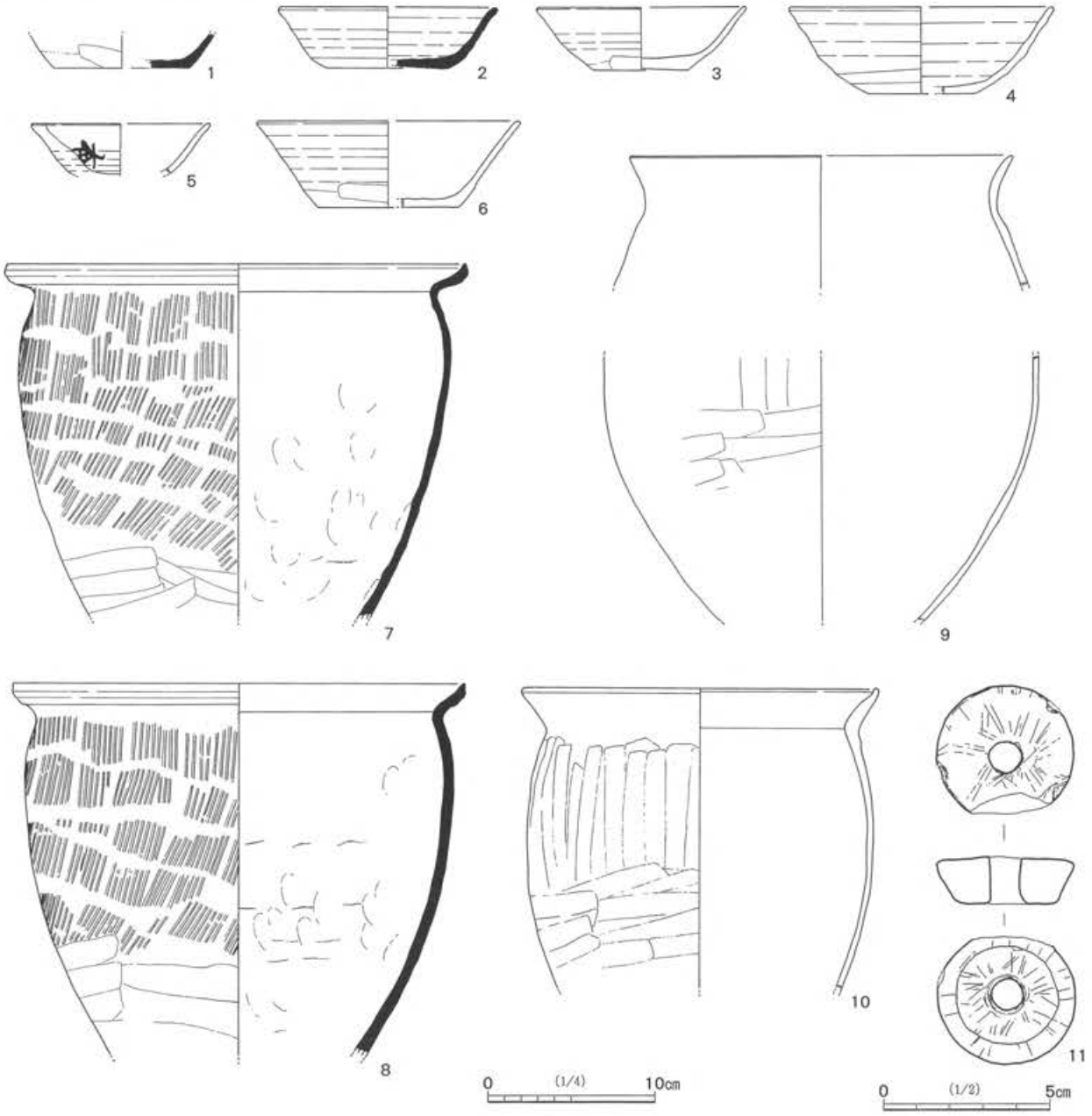

A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
43.0m
1 黒色土　少量のローム粒を含む
2 黒褐色土
3 黒褐色土　焼土粒・炭化粒を含む
4 暗褐色土　ローム・ローム小ブロックを含む
5 黄褐色土　ローム粒を含む
0
(1/80)
4m
a
a′
b
b′
1 黒褐色土　ローム粒・焼土粒を含む
2 暗褐色土　焼土・砂質粘土を含む
3 灰褐色土　砂質粘土・焼土ブロックを含む
4 赤褐色土　焼土を主とする
5 暗褐色土　ローム・ロームブロックを主とする
0
(1/40)
1m

第124図　052

052（第124・125図，図版16・55）

調査区の東端，３Ｈグリッドに位置する。やや緩斜面上に構築されているが遺存状態は良好である。出入り口施設が壁外に張り出す形態をとる住居である。

基本的な平面形態は方形で，規模は3.50ｍ×3.86ｍを測る。主軸方位はＮ−21°−Ｗである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，壁高は45㎝〜63㎝を測る。南壁が緩斜面にかかるため，やや低くなっている。床面は平坦で，全体に堅緻である。壁溝(幅８㎝〜15㎝，深さ４㎝〜９㎝)は，カマド部分と北西コーナー付近を除いて巡っている。主柱穴はやや外側に寄って４本検出された。P3(深さ60㎝)を除いて，深さは50㎝前後である。出入り口施設(幅1.26ｍ，奥行0.78ｍ，深さ35㎝)は，南壁外に張り出して設けられている。底面は住居床面より10㎝ほど高くつくられている。この施設内からピットや壁溝は検出されていない。覆土は，ロームブロックやローム粒を多く含む暗褐色土や黒褐色土を主体に，黄褐色土が混在している。



第125図　052出土遺物

カマドは北壁中央に設けられている。壁を60cm掘り込んで，緩やかに立ち上がる煙道部を形成する。遺存状態は良好ではなく，特に左袖部の遺存は悪い。火床は4cm掘り窪められ，底面はよく被熱していた。カマドの上面からは須恵器甕(7・8)と土師器甕(10)の口縁部が出土した。

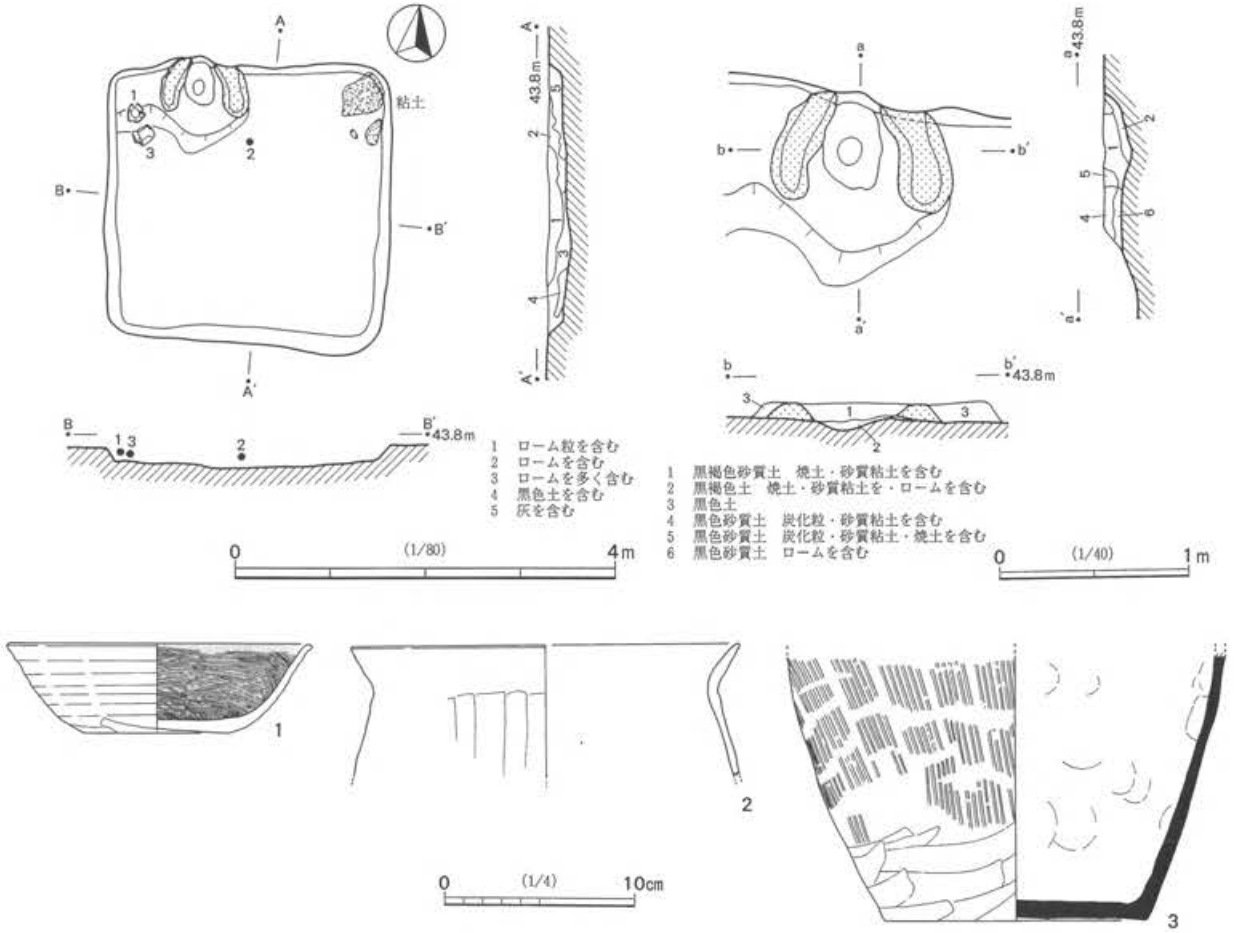
遺物は，土師器杯・甕，須恵器杯などの破片が主に覆土中から出土している。1・2は，出入り口施設から出土した。5の土師器杯は覆土中からの出土で，体部外面に「本」と墨書されている。10の甕は，破片としてカマド前面の覆土中から主に出土し，カマド上面の破片と接合した。11の蛇紋岩製の紡錘車は，覆土中からの出土である。上面の一部が欠損している。径上面4.1cm・下面3.0cm，厚さ1.35cm，孔径0.9cm，現重量は 28.0gを測る。

102（第126図，図版17・56）

調査区の東側中央，2Hグリッドに位置する。縄文時代の炉穴004と重複する。台地平坦部に構築されているが，全体に上面が削平され，遺存状態は良好ではない。

平面形態はほぼ正方形で，規模は2.90m×3.02mを測る。主軸方位はN-5°-Wである。壁は垂直に掘り込まれているが，壁高は11cm～19cmと浅い。床面は凹凸があり全体に堅緻であるが，中央部が軟弱で周囲よりやや低くなっている。柱穴・壁溝等は検出されていない。北東コーナーから粘土塊が出土した。覆土は，ローム粒を多く含む土層が主体である。

カマドは北壁中央の西側寄りに設けられている。遺存状態はあまり良好ではない。壁への掘り込みは浅



第126図　102及び出土遺物

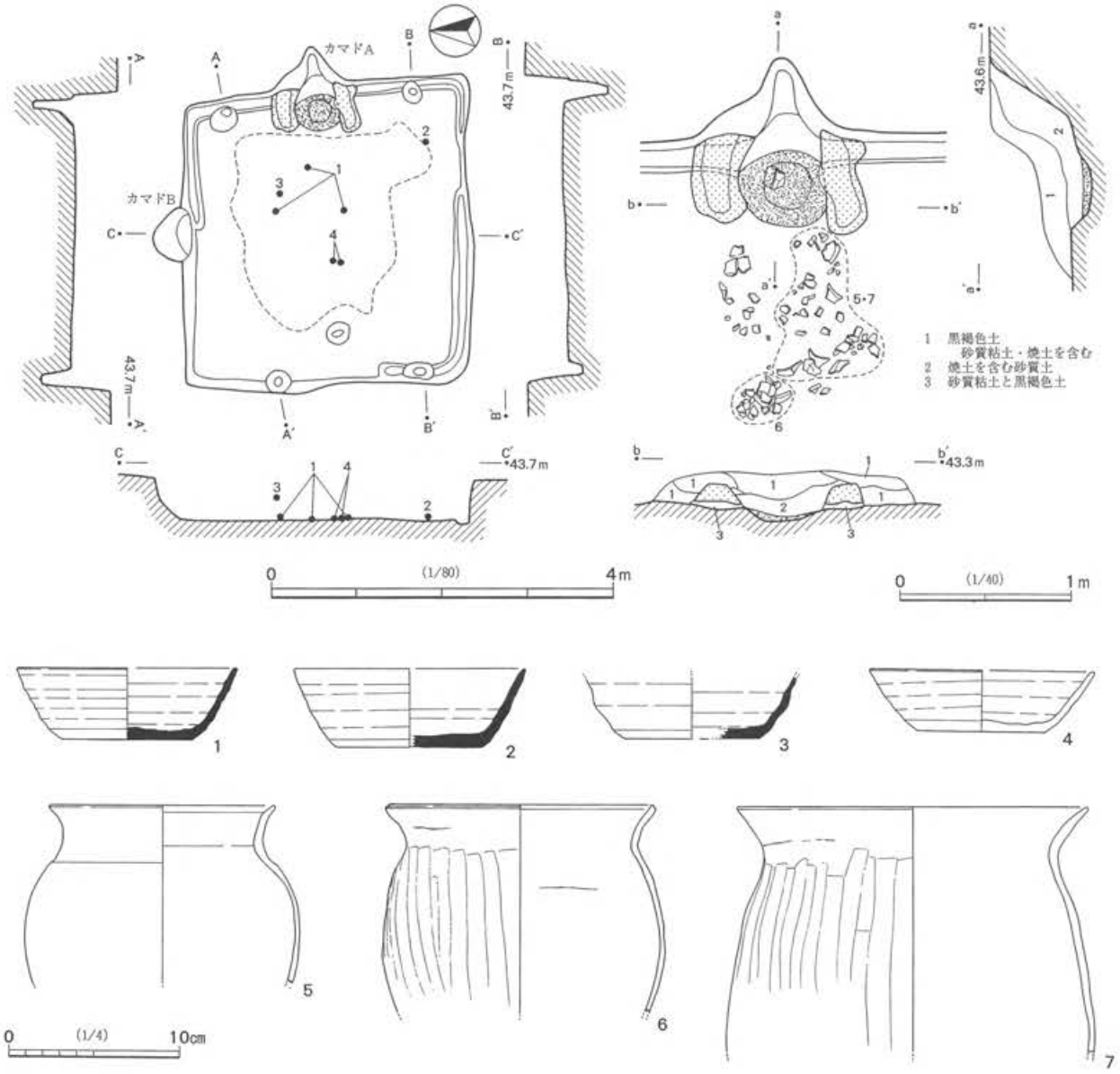
く，煙道部は緩やかに立ち上がる。袖部の一部が残存し，内面はよく被熱していた。火床は皿状に7㎝程掘り窪められ，焼土がわずかに遺存していた。

出土遺物は少ない。1～3の土器は，カマド周辺の床面直上から出土している。

103（第127図，図版17・56）

調査区の東端，3Hグリッドに位置する。緩斜面にかかる場所に構築されているが，遺存状態は良好である。カマドが北壁と東壁の2か所から検出された。東壁のカマド(A)は新しく構築され，旧カマドの痕跡(B)が北壁中央に残存している。

平面形態は方形で，規模は3.60m×3.45mを測る。主軸方位はN-89°-Eで，東西方向に主軸をとる住居である。北壁にカマドが設けられていた痕跡があり，こちらの主軸方位は，N-2°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，壁高は43㎝～50㎝である。床面は凹凸はあるが全体に堅緻で，カマド前面から中央部には硬化面が広がっている。壁溝(幅6㎝～15㎝，深さ2㎝前後)は，北西側を除いて巡っているが，全体



第127図　103及び出土遺物

的に判然としていない。主柱穴はP1～P4で，いずれも壁際の周溝内に設けられている。東壁のP1とP2は深さが48cm前後であるが，西壁のP3とP4は深さ20cm～30cmと浅くなっている。P5は出入り口施設に伴うピットであろう。覆土は，ローム粒とロームブロックを含む黒色土の単一層で，短期間に人為的に埋め戻されたと考えられる。

カマドは2か所に付設されていた。新しいカマド(A)は，壁を45cm掘り込んで東壁中央に設けられている。遺存状態は良好ではなく，袖部が一部残存していた。煙道部は角度をもって立ち上がり，火床は楕円形に12cm掘り窪められ，焼土が堆積していた。旧カマド(B)は，北壁中央に設けられていた。壁を32cm掘り込み，煙道部の立ち上がりは緩やかである。貼り床を除去すると，火床の一部が残存していた。

遺物は，カマド周辺を中心須恵器杯や土師器甕などが出土している。1～4の杯は，カマド前面から住居中央の床面からの出土である。5～7の甕は，カマド前面の床面に破片の状態で散布していた。個体ごとのまとまりはなく混在している。

第3節　土坑墓・土坑

古墳時代の土坑墓(005・030)と，奈良・平安時代の有天井土坑(002・004)や土坑墓(123・125)及び埋土に貝が投棄された土坑(107)を検出した。古墳時代の土坑墓は，古墳の周辺に単独で分布している。土坑を長方形に掘り込み，そのなかに木棺が置かれていたと考えられる。出土遺物がほとんどないので詳細な時期は不明であるが，古墳と同時期あるいはやや先行する時期が想定される。奈良・平安時代の遺構は，古墳の周溝の窪みを利用しているものもある。この時期まで周溝は完全に埋没せずに，窪みとして遺存していたことを示している。

005（第128図，図版18）

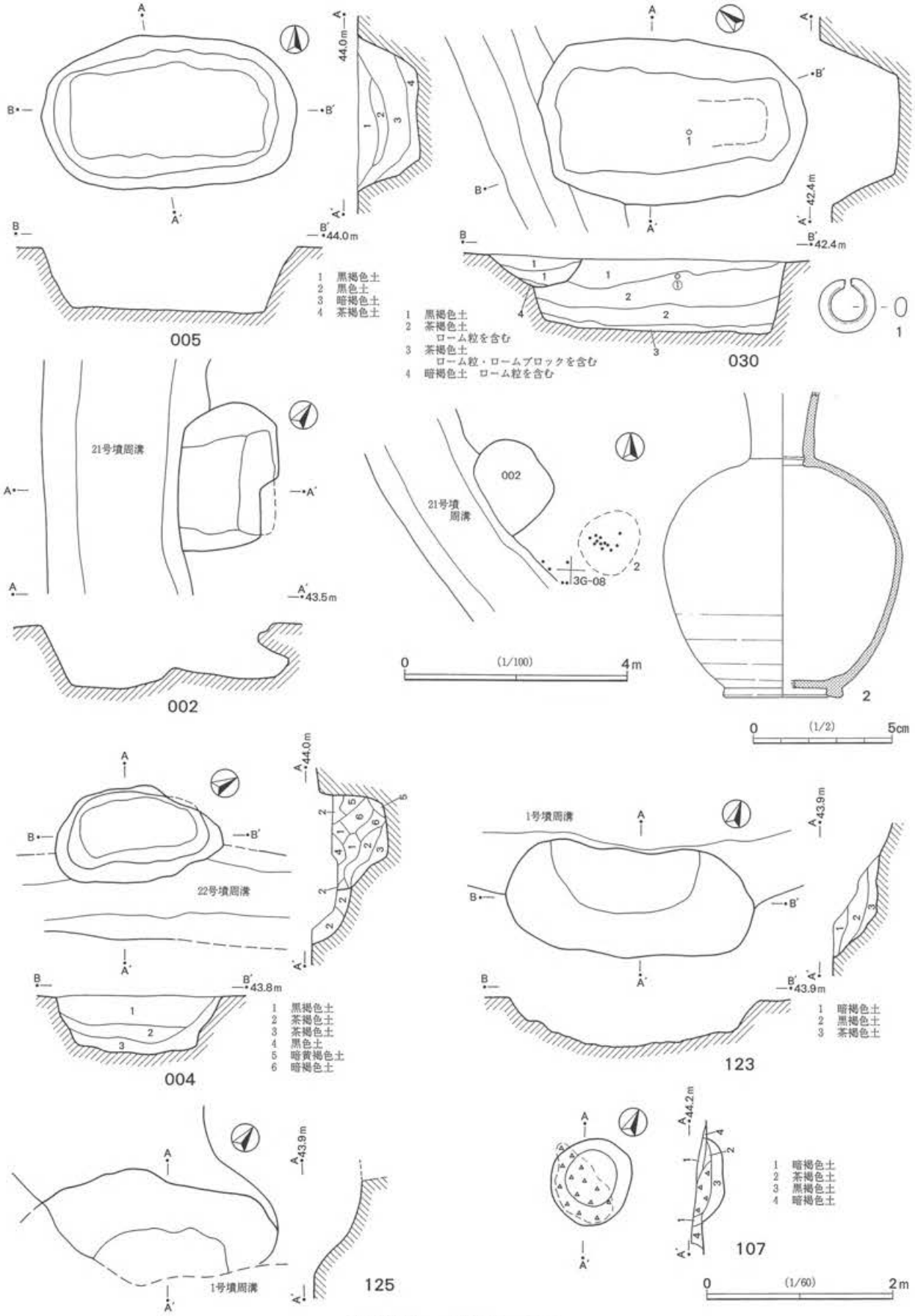
調査区の東側，2Gグリッドに位置し，22号墳や奈良・平安時代の土坑墓004の西側に隣接する。遺存状態は良好である。平面形態は隅丸長方形に近く，長軸長2.76m・短軸長1.66m，深さ72cmを測る。長軸方位はN-88°-Eである。掘り込みは緩やかである。底面は長方形で，長軸長2.1m・短軸長0.95mを測る。底面は堅緻で凹凸があり，ピットや溝等は検出されていない。壁際が中央部よりやや低くなっている。埋土は，ローム粒やロームブロックを多く含む茶褐色土・暗褐色土・黒色土が主体で，人為的に埋め戻された様相を現している。遺物は，土器片が覆土中からわずかに出土したが，本遺構に伴うものはない。

030（第128図，図版18）

調査区の東側，3Gグリッドに位置する。21号墳の南10mの平坦地に構築され，北東側の上面を溝に削平されているが，遺存状態は良好である。平面形態は隅丸長方形を呈し，長軸長2.90m・短軸長1.76m，深さ76cmを測る。長軸方位はN-50°-Eである。壁は緩やかに掘り込まれている。底面は長方形で，長軸長2.4m・短軸長1.05mを測る。ピットや溝等は検出されていない。底面の中央部(図の破線部分，幅50cm)は，堅緻で周辺よりやや高くなっており，木棺の痕跡であろう。埋土は，ローム粒やロームブロックを多く含む茶褐色土が主体で，黒褐色土がその上に堆積しており，人為的に埋め戻されている。遺物は，覆土中から耳環(1)や土器片が出土した。耳環は銅芯に金鍍金が施されている。径2.0cm×2.05cm，断面径4.2mm×6.6mm，重量7.69gを測る。

002（第128図，図版18・56）

調査区の東側，2Gグリッドに位置する有天井土坑である。21号墳の南西側周溝内側から，墳丘側に向


005
1 黒褐色土
2 黒色土
3 暗褐色土
4 茶褐色土
030
1 黒褐色土
2 茶褐色土
ローム粒を含む
3 茶褐色土
ローム粒・ロームブロックを含む
4 暗褐色土 ローム粒を含む
002
21号墳周溝
002
21号墳
周溝
3G-08
0 (1/100) 4m
2
0 (1/2) 5cm
004
22号墳周溝
1 黒褐色土
2 茶褐色土
3 茶褐色土
4 黒色土
5 暗黄褐色土
6 暗褐色土
123
1号墳周溝
1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 茶褐色土
125
1号墳周溝
107
1 暗褐色土
2 茶褐色土
3 黒褐色土
4 暗褐色土
0 (1/60) 2m

第128図　土坑墓・土坑

かって掘り込まれている。遺存状態は良好ではなく，天井部はすでに崩落しているが，平面形態は長方形である。現存で長軸長1.54m・短軸長1.2m，深さ0.6mを測る。長軸方位はN-34°-Wである。周溝側からの掘り込みは緩やかで，底面に向かって次第に深くなっている。中段は確認されていない。底面は長方形で，現存で長軸長1.0m・短軸長1.0mである。底面は凹凸があり，溝等は検出されていない。

遺物は，覆土中からはわずかに土師器片などが出土したのみであるが，南東1.4m×2.0mの範囲に施釉陶器(2)の破片が散乱していた。本来は本遺構に近接して置かれていた可能性が高く，攪乱等により散乱したものと思われる。口縁部や底部を欠いているが，ほぼ復元できた。肩部は丸みをもち，体部下半に薄く施釉されているのがわかる。底部には糸切り痕が残り，高台は断面方形の付け高台である。

004（第128図，図版18）

調査区の東側，2Gグリッドに位置する有天井土坑である。22号墳の西側周溝から，外側に向かって掘り込まれている。遺存状態は悪く，天井部や壁はすでに崩落しているが，平面形態は長楕円形と考えられる。現存で，長径1.8m・短径1.0m，深さ0.83mを測る。長軸方位はN-65°-Wである。周溝の底面から，幅1.5m・奥行0.9m，深さ40cmの規模で緩やかに掘り込まれ，中段は確認されていない。底面は長楕円形で，長径1.37m・短径0.54mを測る。底面は凹凸があり，溝等は検出されていない。出土遺物はない。

123（第128図，図版18）

調査区の東端，3Jグリッドに位置する。1号墳の南側周溝から，外側に向かって掘り込まれている。遺存状態は悪く，北側部分は判然としない。平面形態は長楕円形と考えられ，現存で長径2.7m×短径1.1m，深さ48cmを測る。緩やかに掘り込まれ，底面は楕円形で，長径1.6m，短径は現存で0.7mを測る。底面は凹凸がある。出土遺物はない。

125（第128図，図版18）

調査区の東端，3Iグリッドに位置する。1号墳の周溝から前庭部の西側側面に掘り込まれている。北西部の一部が遺存しているが，遺存状態は悪い。平面形態は長楕円形になると考えられ，現存で長径2.0m×短径1.0m，深さ53cmを測る。緩やかに掘り込まれ，底面はやや凹凸がある。埋土は，ローム粒を多く含む暗褐色土が堆積している。出土遺物はない。

107（第128図）

調査区の東端，2Iグリッドに位置する。平面形態は円形で，径0.85m×0.95m，深さ30cmを測る。緩やかに掘り込まれ，底面はほぼ平坦である。わずかにローム粒を含む黒褐色土の上に，45cm×95cmの範囲で厚さ30cmに貝が投棄されていた。貝の分析結果は付章に記載した。

第4節　方形周溝

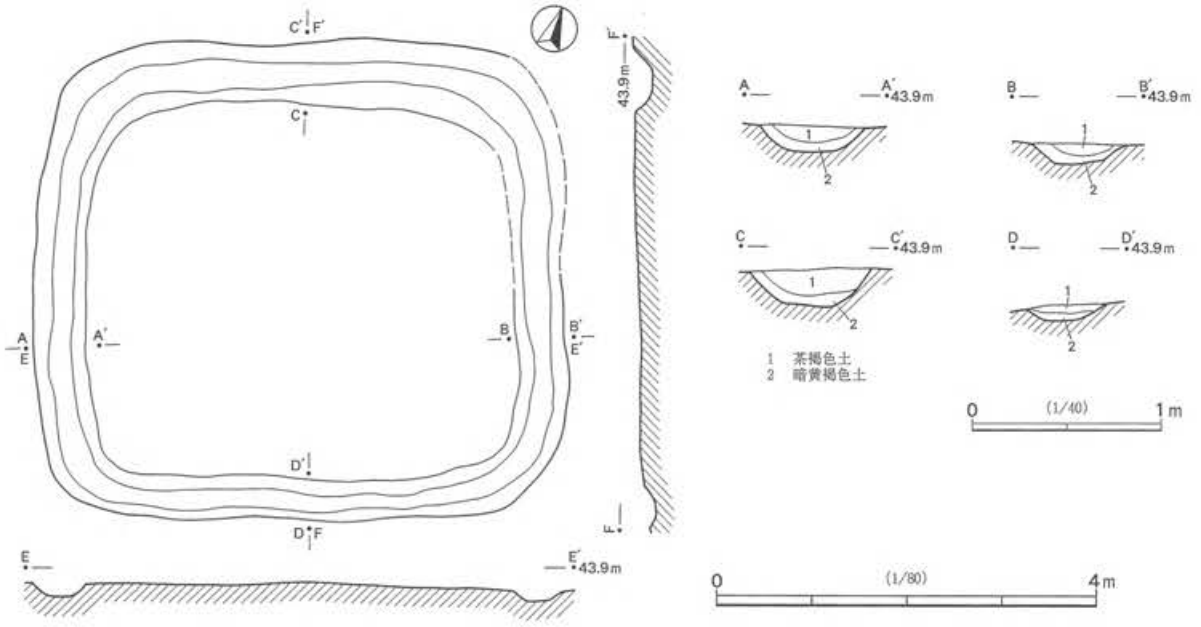
016（第129図，図版18）

調査区の中央，2Fグリッドの台地平坦部に位置し，平安時代の住居跡037の北西3mに隣接する。盛土は確認されていない。

平面形態は隅丸方形である。規模は，外縁長東西5.56m・南北5.06m，内縁長東西4.52m・南北4.02mを測り，東西方向にやや長い形態となっている。南北方向を主軸とした場合，方位はN-17°-Wである。

周溝は緩やかに掘り込まれ，底面はほぼ平坦である。周溝の上端は42cm～72cm，溝底幅14cm～36cm，深さは10cm～20cmと全体に浅い。土坑等の埋葬施設は検出されていない。周溝内からわずかに土器片が出土

したが，本遺構に伴うものはない。



第129図　016

第５節　土器集中地点

025（第130図，図版15・57）

調査区中央，３Ｄグリッドの緩斜面上に位置する古墳時代後期の土器集中地点である。古墳時代の住居跡010とは南西に12ｍ離れている。破片は径0.8ｍ×1.0ｍの範囲に分布しているが，中心となる径0.7ｍの範囲には，完形に近い土師器甕や杯・高杯・甑と須恵器杯が集中して出土した。甕は４個体，杯・高杯・甑はそれぞれ１個体と，甕の出土点数が多い。周囲に明確な遺構などの掘り込み，カマドの痕跡や焼土も確認されていない。また，特殊な土器や石製模造品等の遺物も出土していないことから，祭祀的な遺構とは判断しがたい。遺構の性格は判然としないが，周辺の住居からの廃棄によるものであろう。

第６節　遺構外出土遺物

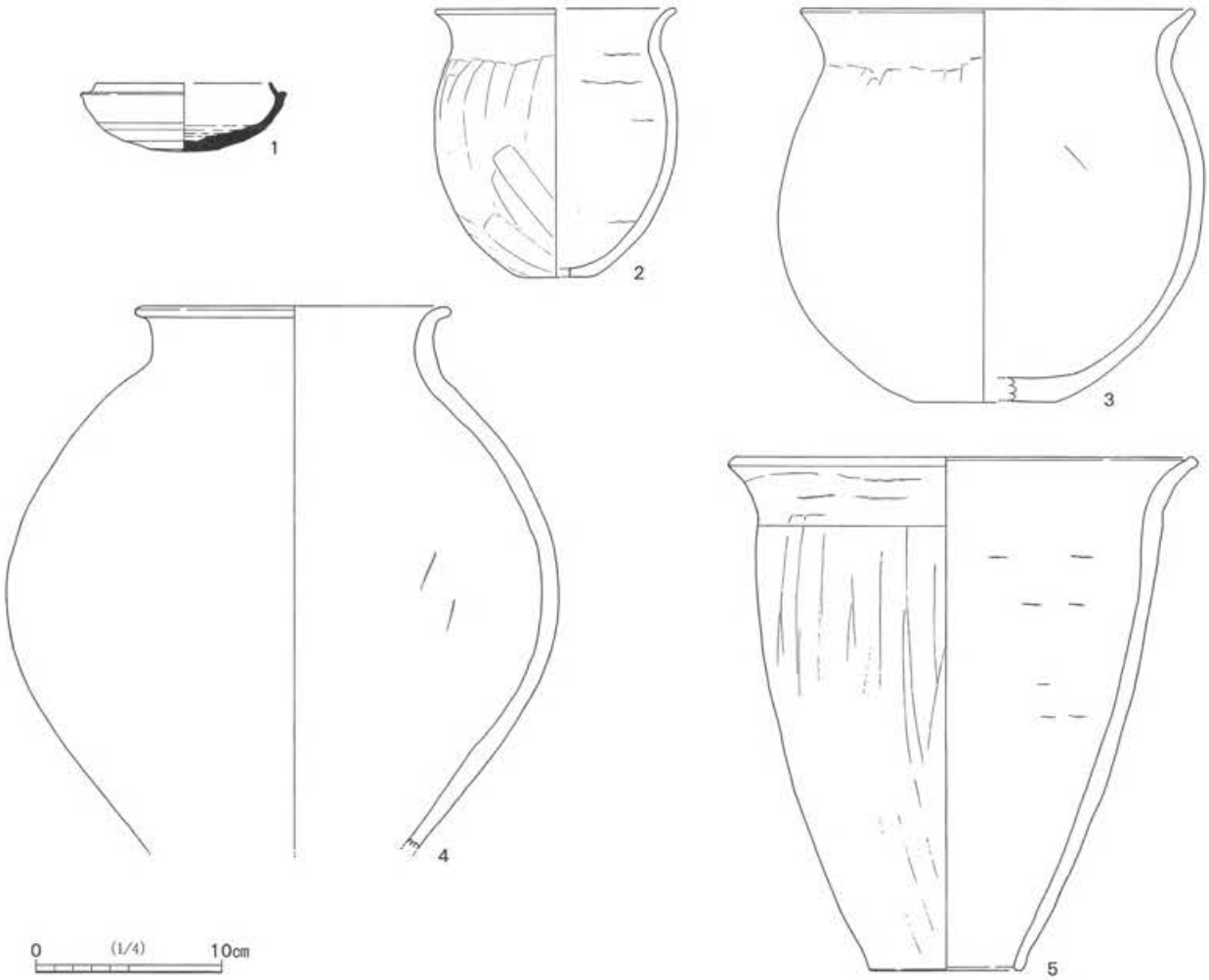
確認調査時や遺構に伴わずに出土した遺物をまとめて報告する（第131図，図版57）。

須恵器で注目されるのは，23号墳の北側で009住居跡との中間地点(3E-04～06･15･24･25など)から，長頸壺(５・６)・提瓶(７)などの破片がまとまって出土していることである。このなかには，図示できなかったが瑳や瓶類の破片も含まれている。このような器種は，本来は７世紀前半代の古墳に伴う製品であるが，この範囲には古墳の存在は確認されておらず，鉄製品や玉類などの副葬品類も出土していない。すでに存在していた古墳を破壊した際に須恵器を廃棄したことも予想されるため周辺を十分に精査したが，埋葬施設や周溝等の痕跡は検出されなかった。また，3E-14～17から出土した口縁部片が23号墳の瑳(第97図１)と接合関係にある。23号墳の墳丘築造に関連した須恵器をこの周辺に投棄した可能性も考えられ，ここで

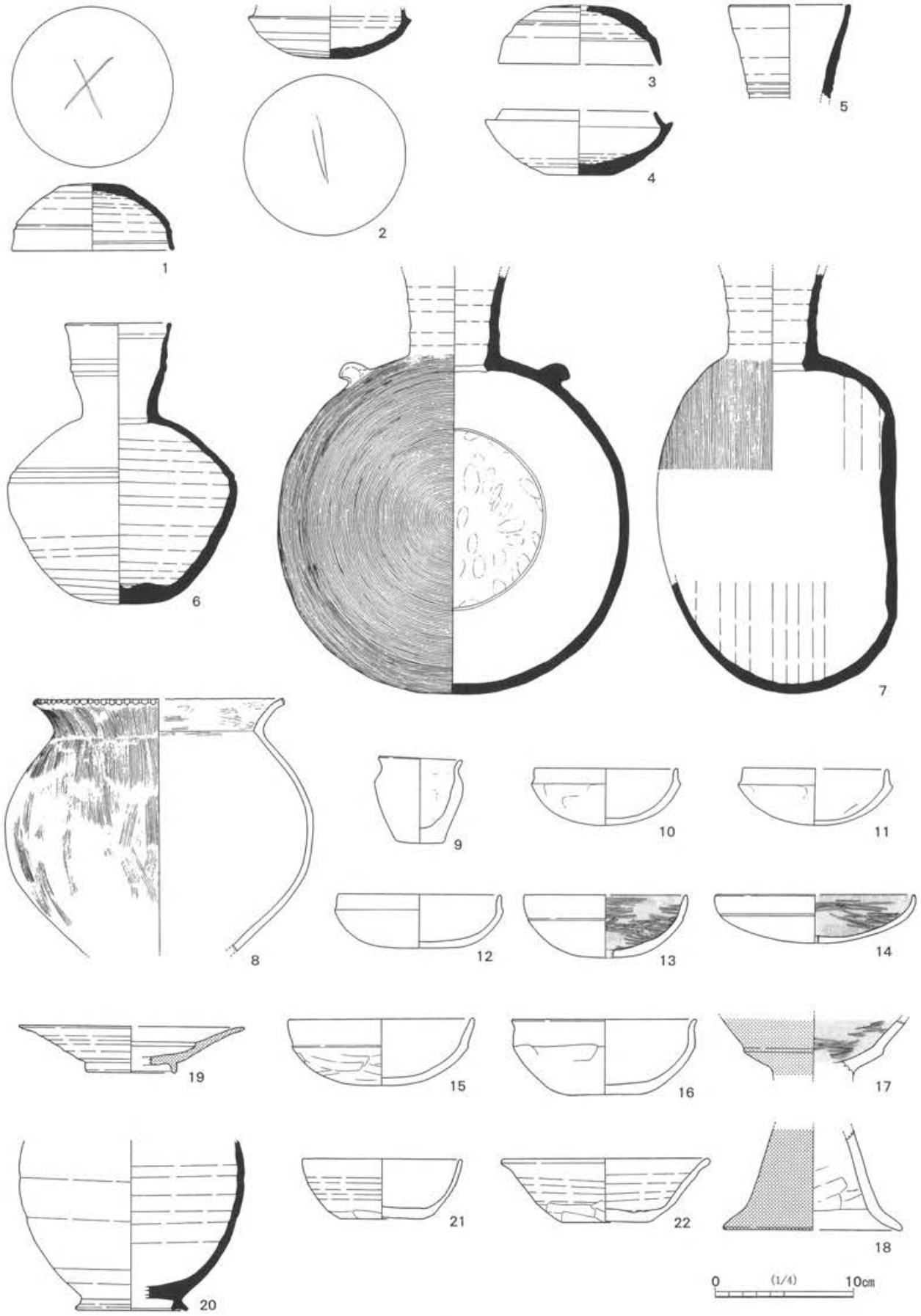
の須恵器の出土状況は注目される。

土師器では2F-86から刷毛目調整の甕(８)が出土した。底部を欠損しているが，台付甕の可能性もある。口唇部は棒状工具の押捺による刻みが施され，口縁部から胴部にかけては刷毛による器面の調整を行っている。また，ミニチュアの土器(９)も2G-98から出土している。弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は，本遺跡や周辺の遺跡はもとより，東南部地区内からの検出例も稀であるが，本遺跡内や周辺に当該期の何らかの遺構が存在していたと思われる。

灰釉陶器の段皿(19)が3B-08から出土している。古墳時代後期の住居跡017に隣接する位置であるが，周辺に平安時代の遺構は検出されていない。1/3の遺存であるが，内面は濃緑色の釉が比較的厚く施釉され，明瞭な段が形成されている。高台は付け高台で，断面はやや内湾し先端は細い形態である。



第130図　土器集中地点出土遺物



第131図　遺構外出土遺物

第5章　まとめ

1　小金沢古墳群について

小金沢古墳群は，今回の調査ですべての発掘調査が完了し，その全容が明らかとなった。調査が終了している6基の古墳については，すでに刊行された報告書で述べられている(田坂・白井1979)。周辺には北側の台地上に展開している小金沢貝塚内の古墳群や，南側の台地に続く御塚台遺跡内の方墳群も存在しているが，その間には空閑地も存在しており，関連性を保ちながらもそれぞれ独立した古墳群として形成されていたと考えられる。ここでは同一台地上で東側に隣接する小金沢古墳群のこれまでの調査成果も踏まえ，まとめとしたい(第28・29表)。ただし24号墳については，ほかの古墳よりも時期が遡り様相も異なるため，別に記載することにする。

構成と立地　小金沢古墳群は10基の古墳から構成されているが，その立地から大きく2つのグループにわけることができる。今回調査した古墳のうち21号墳と22号墳は，東西に張り出した舌状台地の基部付近を中心に立地し，台地の南側斜面中央には23号墳がほかの古墳と離れて占地している。これに対し，1号墳や2号墳と6号墳が南側から侵入する鍋田谷津に沿って，北東から南西方向に配列されている。さらに2号墳と6号墳の間には，墳丘が判然としない3号墳から5号墳の埋葬施設のみの古墳が3基配置されている。1号墳の南西側にも埋葬施設のみの25号墳が今回調査されており，鍋田谷津を臨む緩斜面上には，1号墳を中心として3基の古墳と4基の埋葬施設のみの古墳が占地し，本古墳群の中心となっている。

墳形と規模　鍋田谷津に沿った一群には，本古墳群で唯一の「帆立貝式古墳」(2号墳)と，規模の大きな円墳(1号墳)が存在する。2号墳は南側がすでに削平されていたが，全長38.5mを測り本古墳群のなかでは規模が最も大きい古墳である。鍋田谷津を挟んで対岸の台地上に位置するムコアラク1号墳も同形の古墳であるが，こちらは全長33mとやや小規模である。1号墳は径約27mを測り，小金沢貝塚内の16号墳とほぼ同規模で，周辺の古墳群のなかでも比較的規模の大きな古墳である。6号墳は，鉄塔に規制され調査範囲が限定されていたため正確な墳形は不明で円墳か前方後円墳に想定されているが，いずれにしてもやや歪な墳形を呈している。今回調査を行った21号墳から23号墳は円墳であるが規模は小さく，特に23号墳は径約6.5mと本古墳群はもとより，周辺の古墳群のなかでも最小規模の古墳である。

埋葬施設　墳丘のある古墳は，複数の埋葬施設を設けずに1基の埋葬施設を基本としているが，1号墳は時期差のある2基の横穴式石室が設けられている。墳丘をもたない埋葬施設のみの古墳は，3号墳と25号墳が横穴式石室の構造をとっているが，4号墳と5号墳は箱式石棺を採用している。墳丘をもつ6号墳

第28表　小金沢古墳群一覧

古　墳	墳　形	規　模	埋葬施設	主軸方位	出土遺物
1号墳	円墳	南北27.0m，東西26.5m	横穴式石室 横穴式石室	N-22°-W N-10°-E	須恵器(周溝内)，直刀，鉄鏃，耳環，玉類 須恵器
2号墳	帆立貝式	全長38.5m，墳丘長34m，前方部幅9m，後円部最大径27.8m	横穴式石室	N-70°-E	須恵器(周溝内)，直刀，刀子，耳環
3号墳	不明		横穴式石室	N-32°-W	耳環，玉類
4号墳	不明		箱式石棺	S-82°-W	鉄鏃，刀子，耳環，釧
5号墳	不明		箱式石棺	N-37°-E	鉄鏃
6号墳	円墳か		箱式石棺	N-25°-E	耳環
21号墳	円墳	南北16.8m，東西16.5m	横穴式石室	N-23°-W	須恵器，鉄鏃，耳環，鍔

※ 主軸方位は，石室の長軸方向を示す。古墳の主軸方位とは一致しない。

も箱式石棺を用いており，本古墳群の北東側の一群は西側の一群とは異なる様相をみせている。箱式石棺は，小金沢貝塚内の古墳群では主体的に採用されているが，本古墳群ではこの3基のみである。坂崎谷津を挟んで東側に位置するムコアラク8号墳でも石棺が用いられているが，周辺の古墳群のなかではこれが東限となっている。なお，6号墳は箱式石棺のほかにも埋葬施設が存在したようであるが詳細は不明である。石室は，いわゆる半地下式の横穴式石室で，いずれも第三紀層(成田層)を切り出した軟質砂岩で構築されている。玄室・羨道部の構造を採用しているが，次第に簡素な構造になる傾向が認められる。22号墳は形骸化された短い羨道部が付設され，23号墳では全く存在していない。

今回調査した21号墳・22号墳の石室は，1号墳とは異なり墳丘の中央部に設けられている。1号墳では，墳丘の南側で周溝に開口するように掘方が掘り込まれ，石室はその中に構築されている。ほかの古墳群でも横穴式石室を採用している古墳の多くは，そのような配置をとっている。ところが，21号墳・22号墳の石室は中央部に位置しているため，掘方と周溝の間は間隔がある。いずれの古墳も前庭部周辺は攪乱のため，掘方の形態や周溝とどのように連絡していたのかは不明であるが，周溝側にその痕跡が確認されていないことなどから，ムコアラク古墳群の3号墳や4号墳にみられるような溝状の施設が付設されていた可能性は低い。この場合は23号墳のように掘方は土坑状を呈し，周溝へは開口していない構造であったことも考えられ，同じ古墳群であっても埋葬施設の構造に差違が認められる。

石室の規模は，1号墳第1主体部が全長5.9mと最も大きく，次いで21号墳の4.7mとなる。その他の古墳は2.7m～4.0mと小規模である。横穴式石室の構造をとってはいるが，全体に石室内の高さは低い。最も高い1号墳では1.6m前後になるが，その他の古墳では上面がすでに削平されているため0.9m～1.1m程度が残存しているにすぎない。

副葬品　ほとんどの古墳が盗掘や攪乱を受けており，追葬の様相，副葬品の正確な位置や組成・数量は明らかにできなかったが，ある程度の傾向の違いを知ることができる(第29表)。副葬品は，大きく装飾品(玉類・耳環・釧)，武器(鉄鏃・大刀)，刀子，須恵器に分けられる。

玉類は3基の古墳から出土したが，盗掘のためか出土点数は少ない。最も点数の多い1号墳でもわずかに14点である。この中では23号墳の土坑周辺から出土した翡翠製の丸玉は径1.4cmと比較的大きく，注目される。耳環は，北東側を中心とした5基の古墳から出土している。遺存状態が良好ではなく判然としないものもあるが，いずれも銅芯で表面は銀板巻金鍍金であろう。21号墳からは3点の耳環が出土したが，

第29表　小金沢古墳群出土副葬品一覧

古　墳	玉　類			耳環	武　器		刀子	その他
	棗玉	丸玉	ガラス玉		鉄　鏃	大刀		
1号墳	1	1	12±	2	10±(片刃)	3	3	鍔片3
2号墳				2		1	1	鍔2
3号墳			10±	2				
4号墳					4±(無茎・短茎)		1	釧1
5号墳					1±(不明)			
6号墳				1				
21号墳				3	4±(三角形)			鍔1
22号墳					8±(圭頭・方頭)			
23号墳		1			6±(三角形)		1	
25号墳					1±(圭頭)			

※ 石室と周辺からの出土品を集計した。盗掘や攪乱を受けている主体部が多く，埋葬時の正確な数量ではない。
※ 玉類と鉄鏃は，発掘時にすでに破片のものが多く，正確な点数は前後する可能性がある。

本来は2対4点が副葬されていたと考えられる。

大刀や鉄鏃の武器類は8基の古墳から出土している。このうち大刀が副葬されていたのは1号墳と2号墳である。玉類や耳環が副葬されていた1号墳第1埋葬施設では，3本の大刀と10本以上の鉄鏃が出土し，本古墳群のなかでは最も副葬品の出土点数が多い。帆立貝式の2号墳は石室が大きく削平されているが，本来は多くの副葬品が置かれていたと思われる。鉄鏃は7基の古墳から出土している。1号墳は，羨道部から10本以上が出土したが，鏃身の形態は主に長頸鏃群の片刃鏃に分類される(杉山1988)。これに対し，4号墳は無茎鏃・短茎鏃，21号墳・23号墳は三角形鏃，22号墳・25号墳は圭頭鏃・方頭鏃が，それぞれ出土しており，同じ古墳群であっても主体的に副葬される鉄鏃の形態が異なる様相をみせている。

古墳群の年代　1次調査の古墳群の築造時期については，出土した1号墳の須恵器の形態などから，7世紀中葉～後半と想定され，2号墳から6号墳もほぼ同時期に位置づけられている(田坂・白井1979)。今回調査した古墳についても同時期の築造と推定できるが，出土した須恵器を基に再度検討したい。須恵器は主に東海地方の窯で生産された搬入品であることから，東海地方(東海土器研究会2000・2001)や飛鳥地域(古代の土器研究会1992・1993・1997，奈文研2002)の編年・推定年代を参考とした。

1号墳の南側周溝からは杯身と返蓋が，覆土下層からまとまって出土した。出土状態から第1埋葬施設の追葬に伴い，周溝内に掻き出されたと考えられる。蓋は摘みが高く，特に2では宝珠状に丁寧につくられ，かえりの端部は口縁部より突出している。器高は3.6cmと4.0cmで，やや高い。口径は1は9.5cm，2では10.1cmである。身はやや深い形態をもち，底部は回転ヘラケズリでやや平底に削り出されている。返蓋については，飛鳥地域の編年では山田寺下層の杯G蓋の検討から，次第に小型化と調整の簡略化が進む傾向が指摘されている(奈文研2002)。東海地方の製品では，湖西市殿田第4地点1号窯の製品や浜松市地蔵平A19号墳出土品と形態は類似している。以上のことから推定して，概ね7世紀中頃に位置づけられよう。6の平瓶は前庭部東側の周溝覆土中層から出土した。胴部がやや丸みをもち，やや外反しながら立ち上がる頸部が付く形態で，7世紀末の時期が想定される。以上のことから，まず7世紀中頃に第1埋葬施設が，次いで第2埋葬施設は7世紀後半に構築され，第1埋葬施設では7世紀末まで追葬が行われていたと考えられる。21号墳の周溝と墳丘から出土したフラスコ形瓶は，球形の胴部にやや外反しながら立ち上がる口頸部が付けられている。口頸部は比較的短く，口縁部下端がやや張り出している。静岡県浜松市蜆塚3号墳や浜松市地蔵平A19号墳の出土品と形態が近似していることから，7世紀中頃の時期が想定される。石室掘方の裏込め上層から出土した広口壺は，口縁部の立ち上がりは短く胴部は大きく張り出し，底部は小さく平底である。1次調査で1号墳周溝から出土した広口壺(短頸壺)と形態は類似し，7世紀中頃から後半の時期であろう。22号墳からは完形の須恵器が3点出土している。周溝内からは無蓋高杯に杯身が入った状態で出土した。杯身は短く内傾して立ち上がる口縁部と，回転ヘラケズリによる平底の底部をもつ。高杯はやや浅い半球形の杯部をもち，口唇部は短く外反する。杯部には凹線が一条巡っている。脚台の端部は短く立ち上がる。ともに東海地方では7世紀第2四半期に比定されている湖西市殿田第4地点1号窯上部灰層出土品と形態が類似している。この形態の高杯は7世紀末頃まで残るが，浜松市地蔵平A19号墳出土品に凹線や口唇部の形態が近似している。以上のことから概ね7世紀中頃の時期を想定したい。羨道部から出土した平瓶は，やや外反しながら立ち上がる口頸部は比較的短く，肩部はまだ丸みをもち体部との境に稜を形成する。底部は回転ヘラケズリにより平坦につくりだされている。形態の特徴から7世紀中頃の時期であろう。23号墳の周溝や墳丘の周辺からは2点の甕が出土している。これまでの須恵器は，主

に東海地方を中心とした地域の製品と考えられるが，このうち1の瓹は，形態・胎土・色調などからみて南比企を中心とした北武蔵地域の須恵器の特徴をもっている。欠損部分が多く全体の形態は不明であるが，口頸部の開き具合や口縁部や肩部の形態などから概ね7世紀中頃の時期が考えられる。2の瓹は口頸部が成形不良のため大きく歪んでいる。突出する注口部をもち，肩部に2条の沈線が巡る。これも北武蔵地域の須恵器であろう。注口部の特徴などから7世紀後半の時期が想定される。なお，23号墳の北側には提瓶や長頸坩などの須恵器が散布している。この周辺に本来は古墳が存在していた可能性は高いが不明である。提瓶は口唇部を欠損しているが，口頸部は上部でやや外反しながら立ち上がり，肩部には形骸化した鉤形の吊り手が残る。体部は一面は平坦で，背面には丸みをもたせている。長頸壺は肩部の張る体部に短い頸部が付く形態である。東南部地域では，6世紀後半から7世紀初めの時期に想定されている椎名崎2号墳周溝内や馬ノ口4号墳出土の長頸壺が類似する形態であるが，今回出土した須恵器より頸部が長く肩部もやや丸みをもつ。提瓶や長頸壺は，形態的な特徴から7世紀初頭から前半を中心とした時期が考えられ，本古墳群のなかでは初期に構築された古墳が存在していた可能性が高いが，主体部や周溝なども検出されていないため，詳細は不明である。

以上のことから，小金沢古墳群は出土した須恵器から判断して，まず7世紀初頭から前半に舌状台地の中央部，23号墳の北側周辺に古墳が築造されたと考えられる。この古墳については，埋葬施設も検出されていないので詳細は不明であるが，後出の石室や石棺を採用した古墳とは異なり，埋葬施設は木棺直葬であろう。次に時期をおいた7世紀中頃に台地の基部周辺に，1号墳が造営され第1埋葬施設が構築される。1号墳を中心に西側では21号墳と22号墳が造られ，鍋田谷津に沿って北側へも2号墳をはじめとして，周辺に次々と古墳が造営されていく。近接しながらも所有する鉄鏃の形態が異なっており，箱式石棺を採用する墳丘をもたない古墳の存在など，様相は一様ではない。1号墳では第2埋葬施設が7世紀後半に構築され，7世紀末まで追葬を行っている。1号墳は古墳の規模や副葬品の種類や量の豊富さから，本古墳群では中心的な古墳であったと考えられる。23号墳は，これらの古墳とやや距離をおいて西側に築造されている。その時期は，出土した須恵器から1号墳とほぼ同時期かやや後出する時期の可能性もあるが，羨道部をもたない石室の構造などからみて，7世紀後半の時期が考えられる。

2　24号墳について

調査区中央，南側に谷津を臨むやや張り出した緩斜面上に占地しており，西側に後期古墳の23号墳が位置している。銅鏡と玉類の出土により古墳の存在が確認できたが，墳形や埋葬施設の詳細などは明らかにできなかった。そのため，ここでは銅鏡の文様や玉類の組成から古墳の性格を検討したい。

七獣形鏡　内区主文に配列された7単位の文様を簡略化された獣像と判断し，七獣形鏡とした。図像は記号的に簡略化されているため，原鏡を特定しその文様の系譜をたどることは困難である。そこで，この銅鏡では唯一明確な文様である外区文様帯の複合鋸歯文を手掛かりに，その系譜を考えてみたい。

複合鋸歯文は，古墳時代前期から中期の石製腕飾類などの石製品にも使用される文様である。本遺跡の周辺においても，千葉市七廻塚古墳や市原市草刈3号墳から出土した石釧に，その文様を見いだすことができる。管見に触れた外区文様帯に複合鋸歯文を配置する銅鏡は，第30表のとおりである。内区主文による鏡式では，珠文鏡・鼉龍鏡(単頭双胴神獣鏡系)・神獣鏡・獣文鏡・神頭鏡・神像鏡・捩文鏡・画像鏡・人物禽獣鏡・乳文鏡に使用されている。前期を中心とした多くの鏡式に複合鋸歯文が用いられているが，

第30表　複合鋸歯文をもつ鏡

番号	所在地	出土遺跡	時期	鏡式名	外区の文様構成(縁部から順に)					面径	主な文献	大観No.
1	千葉県千葉市	小金沢24号墳	前期	七獣形鏡	素縁	**複鋸**	【鋸歯】			8.3	本報告書	
2	石川県金沢市	下安原遺跡	前期	珠文鏡	素縁	**複鋸**				7.8	車崎編2002	220-17
3	千葉県千葉市	下田遺跡		珠文鏡	素縁	**複鋸**	【櫛歯】			8.6	倉田1998	
4	兵庫県太子町	黒岡山古墳	前期	龍龍鏡(単頭双胴神鏡系)	素縁(狭)	**複鋸**	羽状	【鋸歯】		12.7	車崎編2002	253-5
5	岐阜県糸貫町	舟木山27号墳	前期	龍龍鏡(単頭双胴神鏡系)	素縁(狭)	**複鋸**	鳥文	【鋸歯】		15.2	車崎編2002	253-6
6	広島県福山市	掛迫６号墳	前期	龍龍鏡(単頭双胴神鏡系)	素縁(狭)	**複鋸**	羽状	【鋸歯】		10.8	車崎編2002	253-9
7	大坂府高槻市	弁天山Ｃ１号墳	前期	神獣鏡	三角雲か	**複鋸**	【鋸歯】			13.2	車崎編2002	254-4
8	兵庫県柏原町	沖田１号墳	前期	獣文鏡	素縁	**複鋸**	鋸歯			16.1	車崎編2002	263-1
9	奈良県大宇陀町	後出３号墳	前期	獣文鏡	素縁	**複鋸**	鋸歯			17.0	車崎編2002	265-2
10	鳥取県鳥取市	六部山45号墳	前期	獣文鏡(鳥頭四獣鏡系)	素縁	櫛歯	**複鋸**			10.8	車崎編2002	269-8
11	鳥取県鳥取市	六部山３号墳	前期	神頭鏡	素縁	**複鋸**	櫛歯	【鋸歯】		11.1	車崎編2002	270-6
12	出土地不明	泉屋博古館蔵	前期	神像鏡	素縁	**複鋸**	櫛歯	【鋸歯】		13.9	車崎編2002	271-2
13	岐阜県南濃町	行基寺古墳	前期	神像鏡	斜縁	鋸歯	**複鋸**	【鋸歯】		13.0	車崎編2002	271-3
14	香川県坂出市	蓮尺茶臼山古墳	前期	捩文鏡(獣毛文鏡系)	素縁	**複鋸**	羽状	【櫛歯】		12.2	車崎編2002	272-2
15	高知県宿毛市	曾我山古墳	前期	捩文鏡(獣毛文鏡系)	素縁	**複鋸**	鋸歯			10.4	車崎編2002	272-3
16	出土地不明	東京国立博物館蔵	前期	捩文鏡(獣毛文鏡系)	素縁	**複鋸**	【櫛歯】			12.3	車崎編2002	272-6
17	岡山県美作町	楢原寺山古墳	前期	捩文鏡(獣毛文鏡系)	素縁	**複鋸**	【鋸歯】			13.8	車崎編2002	272-11
18	兵庫県出石町	御屋敷遺跡		捩文鏡(獣毛文鏡系)	素縁	**複鋸**	鳥文	【鋸歯】		9.7	水野1997	
19	伝　和歌山県	五島美術館蔵	前期	捩文鏡(俵文鏡系)	素縁	**複鋸**	**複鋸**	珠文	【櫛歯】	11.0	車崎編2002	273-8
20	岡山県岡山市	一宮天神山２号墳	前期	捩文鏡(俵文鏡系)	素縁	**複鋸**	捩文	【櫛歯】		10.4	車崎編2002	273-9
21	大坂府高槻市	弁天山Ｃ１号墳	前期	捩文鏡(羽文鏡系)	素縁	鋸歯	**複鋸**			10.4	車崎編2002	274-4
22	大分県佐賀関町	築山古墳		捩文鏡	素縁	**複鋸**	珠文	捩文	櫛歯	11.4	水野1997	
23	岡山県津山市	日上天王山古墳		捩文鏡	素縁	**複鋸**				7.9	水野1997	
24	長野県更埴市	県山古墳		捩文鏡	素縁	**複鋸**	櫛歯	櫛歯		7.8	水野1997	
25	福岡県北九州市	高津尾遺跡		捩文鏡	素縁	**複鋸**	櫛歯			7.3	水野1997	
26	奈良県山辺郡	伝　都介野		捩文鏡	素縁	**複鋸**	捩文	櫛歯	珠文		水野1997	
27	長野県更埴市	矢先山古墳		捩文鏡	素縁	**複鋸**	櫛歯			6.8	水野1997	
28	愛知県一宮市	車塚古墳		捩文鏡	素縁	**複鋸**	櫛歯	無文		10.2	水野1997	
29	福岡県筑穂町	桜ヶ丘古墳		捩文鏡	素縁	**複鋸**	捩文	櫛歯			小沢1988	
30	奈良県奈良市	佐紀丸塚古墳	前期	獣文鏡	素縁	列点	**複鋸**	列点	【櫛歯】	16.2	車崎編2002	276-4
31	伝　宮崎県高鍋町	持田古墳群	前期	獣文鏡	素縁(狭)	**複鋸**	櫛歯	【鋸歯】		18.5	車崎編2002	276-5
32	大坂府堺市	狐塚古墳	前期	獣文鏡	素縁(狭)	珠文	**複鋸**	珠文	【鋸歯】	17.8	車崎編2002	276-7
33	出土地不明	大和文華館蔵		獣文鏡	素縁	**複鋸**	【鋸歯】			12.0	田中1981	
34	佐賀県浜玉町	横田下古墳		獣文鏡	素縁	**複鋸**	鋸歯			12.1	佐賀県博1979	
35	滋賀県栗東市	新開古墳	前期	画像鏡(神獣車馬画像鏡系)	素縁	**複鋸**	獣脚文			19.5	車崎編2002	280-4
36	愛知県犬山市	東之宮古墳	前期	人物禽獣文鏡						16.3	車崎編2002	282-2
37	愛知県犬山市	東之宮古墳	前期	人物禽獣文鏡						16.2	車崎編2002	282-3
38	推定　宮崎県高鍋町	持田34号墳	後期	獣文鏡(旋回式獣像鏡系)	素縁	鋸歯	鋸歯	**複鋸**	櫛歯	17.3	車崎編2002	298-7
39	群馬県昭和村	化粧坂３号墳	後期	獣文鏡(鈴鏡)	素縁	櫛歯	櫛歯	**複鋸**		9.6	車崎編2002	299-8
40	伝　群馬県	五島美術館蔵		乳文鏡	素縁	櫛歯	**複鋸**	【櫛歯】		12.8	田中1981	
41	静岡県袋井市	石ノ形古墳	中～後期	乳文鏡	素縁	櫛歯	**複鋸**			9.0	車崎編2002	302-11
42	兵庫県豊岡市	ヱノ田１号墳	中～後期	乳文鏡	素縁	櫛歯	**複鋸**			11.5	車崎編2002	302-10
43	佐賀県佐賀市	花納丸古墳	後期	乳文鏡	素縁	鋸歯	**複鋸**			9.0	車崎編2002	302-14

複合鋸歯文は，単に「**複鋸**」と略し，太字で表す。　【　】内は界圏斜面の文様を示す。
34の獣文鏡は，図録では龍龍鏡とあるが，33と同型鏡と判断し鏡式名を改めた。
東之宮古墳出土鏡の文様構成は複雑なため，ここでは空欄にしてあるが，複合鋸歯文は確かに使用されている。
鏡式名と時期は，車崎編2002を主に参考にした。銅鏡の図版は，大観No.の欄を参照されたい。

次第にその形が崩れ，後期の乳文鏡では単なる細線の文様になってしまう。これらの鏡式のうち，最も多く用いられている銅鏡は捩文鏡である。

捩文鏡については多くの研究があるが，「単頭双胴怪獣倭鏡」(鼉龍鏡)の図像の一部を抜き出して主文とし成立したもので，その「図像文様を小面積に収めるために単純化した」鏡であるという田中琢の見解(田中1979，1981)が最も説得力がある。この見解を敷衍した車崎正彦(車崎1993)は，捩文鏡の外区文様帯に着目し鼉龍鏡との比較検討のなかから，「複合鋸歯文帯が菱雲文帯の変容」であり，「捩文帯と複合鋸歯文帯が面径の小さい鼉龍鏡に頻用される事実」をあげて，鼉龍鏡と捩文鏡の「接近」を説明した。確かに，岐阜県舟木山27号墳出土鏡(面径15.2cm)や広島県掛迫6号墳出土鏡(面径10.8cm)をみると，菱雲文は複合鋸歯文に置き換えられており，その説明は首肯できる。このうち，本鏡と外区文様帯の構成が類似する銅鏡は，岡山県楢原寺山古墳出土鏡(面径13.8cm)，東京国立博物館蔵鏡(面径12.3cm)や，ほかに獣文鏡ではあるが大和文華館蔵鏡(面径12.0cm)と同型鏡である佐賀県横田下古墳出土鏡(面径12.1cm)と，珠文鏡の千葉市下田遺跡出土鏡(面径8.6cm)があげられる。いずれも複合鋸歯文の次に界圏をもつものである。

楢原寺山古墳出土鏡は，田中が「獣毛倭鏡」とよぶ，捩文鏡のなかでも初期に分類される銅鏡である。やや幅の狭い素縁に続いて19単位の複合鋸歯文が配され(本鏡は18単位)，界圏(斜面は鋸歯文)の内側には半円方格の文様帯が巡り，内区主文に続く。東京国立博物館蔵鏡は，本鏡と同様に幅広の素縁をもち，やはり19単位の複合鋸歯文が配置され，界圏斜面には櫛歯文を用いている。大和文華館蔵鏡と横田下古墳出土鏡は，やや幅の狭い素縁をもち，本鏡と同じ18単位の複合鋸歯文が配されているが，界圏の間は凹線で区画されており，本鏡とはこの部分が異なっている。界圏斜面には鋸歯文を用いている。下田遺跡出土鏡は，主文を除けば本鏡に最も近似している。この銅鏡は，奈良・平安時代の竪穴住居跡の「北西コーナー近くの覆土中位から鏡面を斜め上にして炭化材の層に埋もれながら出土」したという(倉田1998)。内区を4本の隆線で四分割し，そのなかに4列の珠文を整然と配置している。珠文鏡の内区は，「珠文の数が増え，さらに当初は比較的整然と並べられていたものが乱雑に埋め込む方向へ推移」(森下1991)していったと想定されいる。珠文を一列に整然と並べた内区をもつ石川県下安原遺跡出土鏡(面径7.8cm)は，幅広の素縁に続いて複合鋸歯文を用いており，森下章司の分類(森下1991)では2式になる。珠文の列が増加すると，乱雑に並べられたり，まばらに埋められることが多くみられる傾向があるというが，下田遺跡出土鏡は珠文の列は多いが整然と埋められている。しかも外区文様帯は，素縁と複合鋸歯文という下安原遺跡出土鏡と同様の構成になっており，内区と外区の文様の変化が一様ではなく，その位置づけはむずかしい。

この5面の銅鏡のうち，面径の大きさや界圏斜面に櫛歯文を用いていることを除けば，本鏡に外区文様帯が近似するのは東京国立博物館蔵鏡と下田遺跡出土鏡である。このうち下田遺跡出土鏡は，主文からみて系譜が異なる銅鏡であろう。東京国立博物館蔵鏡は，小沢洋(小沢1988)によると，「主文の外周に二重の文様帯をめぐらす」外区2型e類で，「獣形文の名残りを最もよくとどめた」主文Ⅰ型(環状乳型)に分類されている。外区文様帯の構成はほぼ一致するものの，主文が大きく異なっている。面径のより狭い小型鏡に図像の各要素を取り入れる場合，複雑な文様の省略は起こり得ることであるが，獣毛の表現を良く残す図像と本鏡とはすぐには結びつかない。本鏡の主文については，その系譜をたどり原鏡を特定することは困難であるが，前章に記載した観察のように，楢原寺山古墳出土鏡のような「獣毛倭鏡」の主文や，または獣文鏡の獣像からの変化(簡略と省略)を重ねながら，この文様に至ったと推定している。

玉類　琥珀製勾玉，ガラス製管玉，緑色凝灰岩製管玉，ガラス玉が出土している。このうち注目される

のは，ガラス製管玉と琥珀製勾玉である。同様の玉類を出土する周辺の古墳を第31表にまとめた。

ガラス製管玉は，草刈１号墳第２主体部から出土している。これは報告書(田井1997)では「凝灰岩製」とされてあるが，再度検討したところ分析を行っていないので断定はできないが，「ガラス製」の可能性が高いと判断された。「極めてうすい緑色を帯びた白色」を呈し，「粉末状に剥離しており，両端を」欠損し，X線写真でも黒く撮影されており，鉛ガラス系の可能性が高いと考えられる。大きさは，現存長2.71cm，径7.8mm×8.1mmと，欠損はしているが比較的大きな管玉である。24号墳と時期が近いと思われる古墳では唯一の出土例である。第２主体部からは，管玉のほか，ガラス玉・滑石製臼玉・琥珀玉の玉類をはじめ，剣・矛・鏃・鋸・斧などの鉄製品も出土しているが，銅鏡は副葬されていない。この草刈１号墳は，村田川北側の台地上に位置する墳丘径35ｍの円墳で，３基の主体部が設けられ２枚の鉄鋌や鋸，剣や玉類など豊富な副葬品をもつ４世紀末頃に比定されている古墳である。

草刈１号墳の村田川を挟んだ対岸には，新皇塚古墳と大厩浅間様古墳が位置している。２基の粘土槨が設けられている新皇塚古墳(斎木ほか1974)の北槨からは，琥珀製の勾玉をはじめ，内行花文鏡や石釧，水晶製勾玉，多数の管玉，鉄製品などが出土している。南槨にも珠文鏡や管玉などが副葬されており，周溝内から出土した底部穿孔の二重口縁壺形土器から４世紀後半に築造されたと想定されている。出土した琥珀製の勾玉は，長さ2.7cm・腹部厚0.8cmを測り，全体的に丸みをもったつくりである。大厩浅間様古墳(浅利・田所1999)の第１主体部からは，８点の琥珀製勾玉や，珠文鏡，石釧，ガラス製勾玉・三連玉などが出土している。これらの勾玉は，長さ1.17cmから3.03cmと大きさが段階的に変化し，全体に丁寧なつくりである。やはり周溝内から出土した底部穿孔の壺形土器から，築造時期は新皇塚古墳よりやや下る時期が想定されている。また，地域は異なるが，山武郡域で初めて調査された前期古墳である島戸境１号墳(平山・椎名1994)からは，琥珀製勾玉２点，捩文鏡２面・連弧文鏡・珠文鏡をはじめ，素材の多彩な勾玉(水晶製・硬玉製・瑪瑙製)・凝灰岩製管玉・水晶製棗玉・琥珀製丸玉・ガラス玉などの豊富な副葬品が出土した。琥珀製勾玉は長さ3.4cm・腹部厚1.2cmと，比較的大きいタイプである。築造時期は，銅鏡などから判断して４世紀後半代が想定されている。本古墳の勾玉は頭部・尾部とも欠損しており，本来の形態が判然としないので形態的な比較検討はできないが，長さ3.0cm前後と推定している。大きさから判断する

第31表　関連する古墳の副葬品

古　墳	鏡	玉　類						その他
		勾　玉		管　玉		ガラス玉	その他	
		琥珀製	その他	ガラス製	凝灰岩質			
小金沢24号墳	**七獣形鏡**	**1**	**－**	**1**	**7**	**36±**	**－**	**－**
草刈１号墳 第２主体部	－	－	－	1	7	16	琥珀玉１ 滑石製臼玉192	鉄製品
新皇塚古墳 南槨	珠文鏡	－	－	－	5	1	－	鉄製品
新皇塚古墳 北槨	内行花文鏡	1	水晶製１	－	94	－	－	石釧 鉄製品
大厩浅間様古墳 1号主体部	珠文鏡	8	ガラス製１ 瑪瑙製２	－	52	34	琥珀玉24　ガラス 三連玉１	石釧 鉄製品
島戸境１号墳	捩文鏡２ 連弧文鏡 珠文鏡	2	硬玉製３ 水晶製２ 瑪瑙製５	－	35	196	水晶製棗玉４ 琥珀製丸玉２ ガラス製丸玉３	
馬ノ口２号墳	－	－	硬玉製１	－	5	－	－	－

※ 草刈１号墳のガラス製管玉は，分析を行っていないがその可能性が高い。

と大厩浅間様古墳出土品に近く，同様の形態であった可能性が高いと考えられる。

以上のように，このような鏡式の銅鏡と琥珀製勾玉が副葬されている古墳は前期古墳に属し，築造時期も４世紀後半代まで遡ることがわかった。24号墳は墳丘の形態も埋葬施設の詳細も全く不明であり，出土した銅鏡と玉類に類例を求め，その築造時期の判断を頼らざるを得ない。24号墳の築造時期は，これまでにあげた類例から４世紀後半代に収まると考えられるが，その詳細な時期については，出土した銅鏡や玉類の分析をすすめ，さらに検討する必要があろう。

参考文献

斎木　勝ほか　1974　『市原市菊間遺跡』　(財)千葉県都市公社
田坂　浩・白井久美子　1979　『千葉東南部ニュータウン８－ムコアラク遺跡・小金沢古墳群－』　(財)千葉県文化財センター
古内　茂・白井久美子ほか　1984　『千葉東南部ニュータウン15－馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡－』　(財)千葉県文化財センター
杉山秀宏　1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集　第八』　吉川弘文館
平山誠一・椎名信也　1994　『島戸境１号墳』　(財)山武郡市文化財センター
田井知二　1997　『千原台ニュータウン７－草刈１号墳－』　(財)千葉県文化財センター
倉田義広　1998　『下田遺跡』　(財)千葉市文化財調査協会
浅利幸一・田所　真 1999　『市原市大厩浅間様古墳発掘調査報告書』　(財)市原市文化財センター
奈文研　2002　『山田寺発掘調査報告』　独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
・須恵器の編年や銅鏡については下記の文献を参照した。
古代の土器研究会　1992　『都城の土器集成』
古代の土器研究会　1993　『都城の土器集成Ⅱ』
古代の土器研究会　1997　『古代の土器５－１　７世紀の土器(近畿東部・東海編』
東海土器研究会　2000　『須恵器生産の出現から消滅－猿投窯･湖西窯編年の再構築－』
東海土器研究会　2001　『須恵器生産の出現から消滅－猿投窯･湖西窯編年の再構築－』補遺・論考編
樋口隆康　1979　『古鏡』　新潮社
佐賀県立博物館　1979　『－古代九州の遺宝－鏡・玉・剣』図録
田中　琢　1979　『日本の原始美術８　古鏡』　講談社
田中　琢　1981　『日本の美術 第178号　古鏡』　至文堂
小沢　洋　1988　『俵ヶ谷古墳群』　(財)君津郡市文化財センター
森下章司　1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻６号　史学会
車崎正彦　1993「鼉龍鏡考」『翔古論聚』　久保哲三先生追悼論文集刊行会
水野敏典ほか　1997　『日上天王山古墳』　津山市教育委員会
車崎正彦編　2002　『考古資料大観５ 弥生･古墳時代　鏡』　小学館

第32表　古墳出土土器観察表(1)

（　）推定値　〈　〉現存値

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
21号墳	第89図1	須恵器杯	10	口径 (8.9) 底径 — 器高 〈2.2〉	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
21号墳	第89図2	須恵器杯	30	口径 — 底径 4.1 器高 〈2.6〉	底部 回転ヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
21号墳	第89図3	須恵器蓋	10	口径 — 天井径 — 器高 〈2.9〉	天井部 回転ヘラケズリ 体部 回転ラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
21号墳	第89図4	須恵器壺	10	口径 — 底径 — 器高 〈4.1〉	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
21号墳	第89図5	須恵器蓋	80	口径 10.4 天井径 — 器高 3.9	天井部 回転ヘラケズリ 体部 回転ラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	天井部にヘラ記号
21号墳	第89図6	須恵器杯	30	口径 — 底径 4.0 器高 〈1.9〉	底部 回転ヘラケズリ 体部 回転ラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
21号墳	第89図7	須恵器平瓶	10	口径 — 底径 — 器高 〈7.7〉	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
21号墳	第89図8	須恵器壺	20	口径 — 底径 — 器高 〈8.8〉	底部 — 体部 回転ラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
21号墳	第89図9	手捏ね	10	口径 (6.5) 底径 — 器高 〈4.1〉	底部 雑なヘラナデ 体部 ヘラナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母・スコリア	
21号墳	第89図10	須恵器瓶	50	口径 (8.8) 底径 — 器高 23.4	底部 — 体部 回転ラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	フラスコ形瓶
21号墳	第92図15	須恵器 広口壺	90	口径 10.6 底径 — 器高 15.5	底部 回転ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
22号墳	第94図1	土師器高杯	30	口径 — 裾径 (11.0) 器高 〈6.8〉	脚部 ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・雲母・スコリア	
22号墳	第94図2	須恵器蓋	40	口径 (9.1) 天井径 — 器高 〈4.5〉	天井部 回転ヘラケズリ・ナデ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
22号墳	第94図3	須恵器杯	完形	口径 8.4 底径 3.2 器高 3.3	底部 回転ヘラケズリ・ナデ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
22号墳	第94図4	須恵器高杯	完形	口径 15.7 裾径 10.2 器高 11.9	脚部 回転ナデ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
22号墳	第94図5	土師器甕	50	口径 13.7 底径 6.4 器高 17.4	底部 ヘラナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石・雲母・スコリア	
22号墳	第96図9	須恵器平瓶	完形	口径 5.7 底径 6.7 器高 15.7	底部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英・長石	
23号墳	第97図1	須恵器甕	50	口径 — 底径 — 器高 〈15.0〉	底部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗灰色	長石	
23号墳	第97図2	須恵器甕	40	口径 — 底径 — 器高 〈14.3〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗灰色	石英・長石	口頸部は大きく歪んでいる。 注口部がある。
23号墳	第99図1	須恵器杯	10	口径 (9.2) 底径 — 器高 〈2.6〉	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
23号墳	第99図2	土師器杯	90	口径 12.6 底径 — 器高 4.3	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
1号墳	第102図1	須恵器蓋	90	口径 9.5 天井径 — 器高 3.6	天井部 — 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	返蓋，摘み
1号墳	第102図2	須恵器蓋	完形	口径 10.1 天井径 — 器高 4.0	天井部 — 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	返蓋，宝珠形摘み
1号墳	第102図3	須恵器杯	50	口径 9.5 底径 — 器高 4.2	底部 回転ヘラケズリ・ナデ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	

古墳出土土器観察表(2)

( ) 推定値　〈 〉現存値

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
1号墳	第102図4	須恵器杯	90	口径 9.6 底径 — 器高 4.5	底部 回転ヘラケズリ・ナデ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	
1号墳	第102図5	須恵器高杯	50	口径 — 裾径 — 器高 〈8.7〉	脚部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	
1号墳	第102図6	須恵器平瓶	完形	口径 5.8 底径 5.6 器高 14.7	底部 回転ヘラケズリ・ナデ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	雲母・スコリア	自然釉

第33表　住居跡・土坑・遺構外出土土器観察表(1)

（　）推定値　〈　〉現存値

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
009	第110図1	土師器杯	20	口径 (14.4) 底径 — 器高 3.2	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ・ナデ	黒褐色	石英・長石	
009	第110図2	土師器杯	20	口径 — 底径 — 器高 〈3.5〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ミガキ・ナデ	暗赤褐色	石英・長石	
009	第110図3	土師器高杯	20	口径 13.6 裾径 — 器高 〈4.6〉	脚部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・スコリア	
009	第110図4	土師器甕	10	口径 (12.0) 底径 — 器高 〈4.8〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明赤褐色	石英・スコリア	
009	第110図5	土師器甕	10	口径 (13.6) 底径 — 器高 〈4.8〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明赤褐色	石英・スコリア	
009	第110図6	土師器甕	10	口径 (18.5) 底径 — 器高 〈2.6〉	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	
009	第110図7	土師器甕	10	口径 (19.3) 底径 — 器高 〈3.1〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石	
010	第113図1	須恵器杯	完形	口径 10.5 底径 — 器高 4.0	底部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	底部外面にヘラ記号
010	第113図2	須恵器杯	完形	口径 10.0 底径 — 器高 4.3	底部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
010	第113図3	須恵器杯	20	口径 (9.3) 底径 — 器高 〈3.5〉	底部 — 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英	
010	第113図4	須恵器蓋	90	口径 11.2 天井径 4.8 器高 4.1	天井部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英	
010	第113図5	土師器杯	完形	口径 10.8 底径 — 器高 3.4	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ・ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
010	第113図6	土師器杯	20	口径 (13.7) 底径 — 器高 〈3.2〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
010	第113図7	土師器杯	30	口径 (12.4) 底径 — 器高 〈5.0〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
010	第113図8	土師器杯	10	口径 (11.7) 底径 — 器高 〈3.9〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
010	第113図9	土師器杯	10	口径 — 底径 — 器高 〈4.4〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
010	第113図10	土師器杯	10	口径 — 底径 — 器高 〈4.5〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明赤褐色	石英・雲母・スコリア	
010	第113図11	土師器高杯	80	口径 13.3 裾径 — 器高 8.7	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	裾端部磨滅
010	第113図12	土師器高杯	90	口径 13.8 裾径 9.6 器高 10.4	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ・ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理
010	第113図13	土師器高杯	30	口径 (19.3) 裾径 — 器高 〈3.7〉	脚部 — 体部 ナデ 内面 ミガキ・ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
010	第113図14	土師器高杯	20	口径 (19.8) 裾径 — 器高 〈4.1〉	脚部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラケズリ	褐色	石英	外面赤彩 内面黒色処理
010	第113図15	土師器高杯	10	口径 — 裾径 — 器高 〈5.7〉	脚部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ・ナデ	橙褐色	石英・長石	外面赤彩 内面黒色処理
010	第113図16	須恵器壺	10	口径 (16.7) 底径 — 器高 〈5.1〉	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	
010	第113図17	土師器甕	30	口径 (16.3) 底径 — 器高 〈15.4〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	明黄褐色	石英・スコリア	

住居跡・土坑・遺構外出土土器観察表(2)

( )推定値　〈 〉現存値

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
010	第113図18	土師器甕	90	口径 23.2 底径 9.7 器高 29.9	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
010	第113図19	土師器甕	90	口径 18.1 底径 7.6 器高 28.9	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
010	第114図20	土師器甕	80	口径 18.1 底径 (7.8) 器高 27.0	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
010	第114図21	土師器甕	90	口径 15.9 底径 6.8 器高 28.0	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
010	第114図22	土師器甕	90	口径 17.6 底径 6.4 器高 29.7	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
010	第114図23	土師器甕	50	口径 18.3 底径 — 器高 〈12.1〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	赤褐色	石英・長石・小礫	
010	第114図24	土師器甑	90	口径 26.7 孔径 8.4 器高 24.7	孔部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
011	第116図1	須恵器杯	20	口径 (9.0) 底径 — 器高 〈3.8〉	底部 — 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英	
011	第116図2	土師器杯	10	口径 (8.4) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・スコリア	
011	第116図3	土師器杯	60	口径 10.8 底径 — 器高 4.1	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
011	第116図4	土師器杯	完形	口径 12.5 底径 — 器高 3.7	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・スコリア	内外面赤彩
011	第116図5	土師器杯	30	口径 (12.5) 底径 — 器高 〈4.6〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	
011	第116図6	土師器高杯	30	口径 (17.7) 裾径 — 器高 〈6.8〉	脚部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黄褐色	石英	
011	第116図7	土師器甕	20	口径 (14.2) 底径 — 器高 〈5.5〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
011	第116図8	土師器甕	10	口径 (17.1) 底径 — 器高 〈6.8〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
011	第116図9	土師器甕	90	口径 13.3 底径 5.7 器高 15.9	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	明赤褐色	石英・長石・小礫	
011	第116図10	土師器甕	90	口径 14.8 底径 8.0 器高 18.8	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	体部下半に穿孔あり(外→内)
011	第116図11	土師器甕	40	口径 19.8 底径 — 器高 〈20.7〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	橙褐色	石英・長石	
011	第116図12	土師器甕	90	口径 19.4 底径 6.0 器高 29.4	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	橙褐色	石英・長石・小礫	
011	第116図13	土師器甕	60	口径 (20.6) 底径 — 器高 〈26.5〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
011	第116図14	土師器甑	70	口径 (19.3) 孔径 8.0 器高 22.2	孔部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	明赤褐色	石英・長石・小礫	
011	第116図15	土師器甑	50	口径 (23.0) 孔径 〈8.9〉 器高 21.4	孔部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英	
014	第117図1	須恵器杯	完形	口径 9.8 底径 — 器高 4.2	底部 回転ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	底部外面にヘラ記号
014	第117図2	須恵器蓋	10	口径 (11.2) 天井径 — 器高 〈3.4〉	天井部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	

住居跡・土坑・遺構外出土土器観察表(3)

( )推定値　〈 〉現存値

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
014	第117図3	土師器杯	50	口径 10.4 底径 — 器高 4.2	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
014	第117図4	土師器杯	90	口径 12.7 底径 — 器高 4.9	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗黄褐色	石英・長石	
014	第117図5	土師器杯	完形	口径 12.4 底径 — 器高 5.5	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石	
014	第117図6	土師器甕	10	口径 — 底径 — 器高 〈9.0〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
017	第119図1	須恵器杯	完形	口径 9.4 底径 — 器高 3.4	底部 周縁回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	底部外面に斜格子状の刻み目
017	第119図2	須恵器蓋	80	口径 12.0 天井径 — 器高 3.5	天井部 — 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
017	第119図3	土師器杯	90	口径 11.7 底径 — 器高 3.6	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
017	第119図4	土師器杯	20	口径 (12.0) 底径 — 器高 〈4.4〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	
017	第119図5	土師器杯	70	口径 (12.6) 底径 — 器高 4.0	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ・ナデ	橙褐色	石英	
017	第119図6	土師器杯	90	口径 12.8 底径 — 器高 4.9	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
017	第119図7	土師器椀	80	口径 13.6 底径 — 器高 6.9	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石	内面黒褐色
017	第119図8	土師器椀	90	口径 12.1 底径 5.8 器高 7.7	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
017	第119図9	土師器高杯	60	口径 (21.8) 裾径 — 器高 19.3	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ナデ 内面 ミガキ・ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
017	第119図10	土師器高杯	70	口径 16.0 裾径 — 器高 〈13.0〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ナデ 内面 ミガキ・ナデ	橙褐色	石英・長石	外面赤彩 内面黒色処理
017	第119図11	土師器高杯	70	口径 (12.8) 裾径 9.9 器高 9.2	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
017	第119図12	土師器高杯	50	口径 (12.6) 裾径 — 器高 〈8.9〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
017	第119図13	土師器甕	完形	口径 18.0 底径 7.5 器高 31.6	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
017	第119図14	土師器甕	90	口径 20.5 底径 10.1 器高 43.0	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
017	第119図15	土師器甕	完形	口径 14.7 底径 7.0 器高 33.0	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
018	第120図1	土師器杯	完形	口径 10.5 底径 — 器高 3.5	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ・ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
018	第120図2	土師器椀	10	口径 (13.5) 底径 — 器高 〈4.9〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
018	第120図3	土師器椀	完形	口径 10.4 底径 5.9 器高 5.9	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
018	第120図4	土師器椀	20	口径 (16.6) 底径 — 器高 〈11.0〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ・ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	

住居跡・土坑・遺構外出土土器観察表(4)

( )推定値　〈 〉現存値

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
035	第121図1	土師器杯	80	口径 12.9 底径 7.6 器高 4.2	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石	
035	第121図2	土師器杯	70	口径 13.4 底径 7.4 器高 4.5	底部 全面手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
035	第121図3	土師器甕	40	口径 (16.1) 底径 (7.2) 器高 (21.3)	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
035	第121図4	須恵器甑	20	口径 — 孔径 — 器高 〈14.5〉	孔部 — 体部 タタキ・ナデ 内面 ヘラナテ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
037	第123図1	須恵器甕	完形	口径 14.6 底径 7.6 器高 15.5	底部 粗いヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
037	第123図2	土師器甕	60	口径 22.0 底径 — 器高 〈21.8〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	黄褐色	石英・長石	
037	第123図3	土師器甕	60	口径 19.9 底径 — 器高 〈26.7〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	明褐色	石英・長石	
037	第123図4	土師器甕	40	口径 21.0 底径 — 器高 〈20.5〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
037	第123図5	土師器甕	20	口径 (20.5) 底径 — 器高 〈12.7〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
037	第123図6	須恵器甕	30	口径 — 底径 16.8 器高 〈12.0〉	底部 ヘラナデ 体部 タタキ・ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	灰色	石英・長石	底部外面に線刻「上川」
037	第123図7	須恵器甕	20	口径 — 底径 8.4 器高 〈22.0〉	底部 — 体部 タタキ・ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	
052	第125図1	須恵器杯	20	口径 — 底径 (8.0) 器高 〈2.1〉	底部 手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
052	第125図2	須恵器杯	40	口径 (12.9) 底径 (7.0) 器高 〈3.7〉	底部 全面回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	
052	第125図3	土師器杯	20	口径 (12.4) 底径 (5.6) 器高 3.8	底部 回転糸切り・手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
052	第125図4	土師器杯	30	口径 (15.8) 底径 (6.4) 器高 5.2	底部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
052	第125図5	土師器杯	10	口径 (10.7) 底径 — 器高 〈3.1〉	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	墨書「本」
052	第125図6	土師器杯	30	口径 (15.8) 底径 (8.6) 器高 5.2	底部 手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・雲母・スコリア	
052	第125図7	須恵器甕	80	口径 27.5 底径 — 器高 〈21.3〉	底部 — 体部 タタキ・ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石	
052	第125図8	須恵器甕	20	口径 (27.0) 底径 — 器高 〈22.4〉	底部 — 体部 タタキ・ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
052	第125図9	土師器甕	30	口径 (22.8) 底径 — 器高 〈23.9〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
052	第125図10	土師器甕	60	口径 21.0 底径 — 器高 〈18.0〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
102	第126図1	土師器杯	略完形	口径 15.8 底径 7.6 器高 5.8	底部 回転糸切り・手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理
102	第126図2	土師器甕	10	口径 (20.5) 底径 — 器高 〈7.1〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	黒褐色	石英・雲母	
102	第126図3	須恵器甕	30	口径 — 底径 13.8 器高 〈14.0〉	底部 ヘラナデ 体部 タタキ・ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	

住居跡・土坑・遺構外出土土器観察表(5)

( )推定値　〈 〉現存値

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
103	第127図1	須恵器杯	40	口径 (12.6) 底径 (7.6) 器高 4.2	底部 全面回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
103	第127図2	須恵器杯	20	口径 (13.6) 底径 (8.6) 器高 4.6	底部 全面回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・雲母	
103	第127図3	須恵器杯	10	口径 — 底径 (7.8) 器高 〈3.6〉	底部 全面回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
103	第127図4	土師器杯	50	口径 (13.0) 底径 7.4 器高 3.5	底部 全面回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母・スコリア	
103	第127図5	土師器甕	20	口径 13.0 底径 — 器高 〈10.4〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
103	第127図6	土師器甕	50	口径 15.4 底径 — 器高 〈12.2〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
103	第127図7	土師器甕	40	口径 20.6 底径 — 器高 〈14.4〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
002	第128図2	施釉陶器瓶	60	口径 — 底径 (8.2) 器高 〈21.8〉	底部 糸切り・ナデ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英	器面に薄く施釉
025	第130図1	須恵器杯	40	口径 9.4 底径 — 器高 3.7	底部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
025	第130図2	土師器甕	40	口径 (12.8) 底径 (3.6) 器高 14.5	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	赤褐色	石英・長石	
025	第130図3	土師器甕	80	口径 (21.0) 底径 (7.5) 器高 21.3	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
025	第130図4	土師器甕	60	口径 (14.3) 底径 — 器高 〈29.3〉	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	橙褐色	石英・長石	
025	第130図5	土師器甑	70	口径 24.6 孔径 7.4 器高 27.7	孔部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
遺構外 2D-67	第131図1	須恵器蓋	50	口径 (11.5) 天井径 4.4 器高 4.9	天井部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	天井部外面にヘラ記号
遺構外 2D-98・99	第131図2	須恵器杯	50	口径 — 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	底部外面にヘラ記号
遺構外 2D-67・68	第131図3	須恵器蓋	40	口径 (11.4) 天井径 — 器高 4.3	天井部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
遺構外 3E-25	第131図4	須恵器杯	20	口径 (11.0) 底径 (4.6) 器高 4.7	底部 回転ヘラケズリ・ナデ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
遺構外 3D-16	第131図5	須恵器長頸壺	20	口径 (8.5) 底径 — 器高 〈6.9〉	底部 — 頸部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
遺構外 2E-36 3E-15	第131図6	須恵器長頸壺	40	口径 (7.4) 底径 — 器高 20.3	底部 回転ヘラケズリ・ナデ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	
遺構外 3E-05・24	第131図7	須恵器提瓶	40	口径 — 底径 — 器高 〈30.3〉	底部 — 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	吊り手が遺存
遺構外 2F-86	第131図8	土師器甕	40	口径 (17.8) 底径 — 器高 〈18.3〉	底部 — 体部 刷毛目・ナデ 内面 刷毛目・ナデ	暗茶褐色	石英・長石・スコリア	台付甕か

住居跡・土坑・遺構外出土土器観察表(6)

( )推定値　〈 〉現存値

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
遺構外 2G-98	第131図9	ミニュチュア土器	90	口径 5.8 底径 3.4 器高 6.3	底部 ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
遺構外 3D-23・24・51	第131図10	土師器杯	60	口径 (10.0) 底径 — 器高 4.1	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英・長石	
遺構外 3D-14	第131図11	土師器杯	30	口径 (10.2) 底径 — 器高 4.1	底部 — 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	長石・雲母	
遺構外 3D-15	第131図12	土師器杯	60	口径 (11.6) 底径 — 器高 3.9	底部 ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・スコリア	
遺構外 3D-15	第131図13	土師器杯	50	口径 (11.6) 底径 — 器高 〈4.5〉	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ・ナデ	黄褐色	石英・スコリア	内面黒色処理
遺構外 3D-15	第131図14	土師器杯	30	口径 (14.3) 底径 — 器高 3.5	底部 — 体部 ナデ 内面 ミガキ・ナデ	褐色	石英・スコリア	内面黒色処理
遺構外 3D-14	第131図15	土師器杯	90	口径 13.2 底径 — 器高 4.8	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・雲母	
遺構外 2B-66・67	第131図16	土師器杯	50	口径 (13.0) 底径 5.2 器高 5.4	底部 ヘラナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	
遺構外 2D-63	第131図17	土師器高杯	20	口径 — 裾径 — 器高 〈4.1〉	脚部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・雲母	外面赤彩 内面黒色処理
遺構外 2D-32・51・65	第131図18	土師器高杯	20	口径 — 裾径 (13.1) 器高 〈7.3〉	脚部 ヘラナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩
遺構外 3B-08	第131図19	灰釉陶器皿	30	口径 (16.1) 底径 (6.2) 器高 3.3	底部 回転ヘラケズリ・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英・長石	段皿，付け高台
遺構外 2F-54・78・87	第131図20	須恵器瓶	40	口径 — 底径 7.9 器高 〈12.2〉	底部 回転糸切り 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
遺構外 3D-15	第131図21	土師器杯	50	口径 (11.5) 底径 6.0 器高 4.3	底部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・スコリア	
遺構外 2G-90	第131図22	土師器杯	60	口径 (14.7) 底径 6.2 器高 4.6	底部 手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	

付　章　貝サンプルの分析結果

縄文時代早期後葉の炉穴２基，古代に属すると見られる土坑１基，後期古墳の主体部１基で貝殻の堆積が認められた。貝サンプルは9.52㎜，４㎜，２㎜，１㎜メッシュの試験フルイによる水洗分離を経て，選別を行った。なお，107と111で微小貝が多量に検出されたが，分析を行っていない。貝類のほかには107でフジツボ多数，魚骨の小片数点，カニ類のはさみ脚１点が検出された。

分析試料は少ないが，縄文早期の貝類の利用，古代人のフジツボ、ウミニナ類の食習慣を知ることができ，貴重な分析例を加えることができた。

（１）出土状況

106　炉穴内に入った70㎝×30㎝，厚さ10㎝ほどの貝ブロックである。取り上げ後の堆積は約３リットルである。貝層下土層もサンプリングされたが，貝層から落ち込んだと思われる貝殻数点のみであったため，貝層一括サンプル１カットとして扱った。なお，貝層の上下には灰とともに白い固形物がみられた。真っ白で発泡しており，水を含んだ灰が熱を受けて固まったものと思われた。

111　炉穴内に入った60㎝×25㎝ほどの貝ブロックである。厚さは不明だが，取り上げ後の堆積が55リットルあるので，かなりの厚さを有したと思われる。

107　土坑内に入った45㎝×95㎝，厚さ30㎝ほどの貝ブロックである。取り上げ後の堆積は約40リットルであった。出土遺物は縄文早期・後期，奈良･平安時代の土器小片のみであり，しかも土坑外出土のものも混じっているため，時期決定は難しい。しかし，貝層中に残りのよい土師器小片が数点みられたことに加えて，後述のように貝種やサイズの組成からも古墳時代以降のものとみてよい。

23号墳　石室内の底面に５つの小さなブロック貝層が見られた。遺体が頭部を奥壁に向けて横たえられたとするなら，上肢部に２か所，下肢部に３か所に分かれていた。ただし，貝種組成はブロックごとの差がなく，貝殻の残りはきわめて悪いので，本来は１か所ないし２か所に置かれたものかもしれない。後に動いた可能性もある。

（２）貝種組成

４つのサンプルから19種を検出した。縄文早期の106と111では，この時期を特徴づけるハイガイ，マガキが多い。106はハイガイ，オキシジミの湾奥干潟群集が98.3％を占めるのに対し，111では湾奥干潟群集のマガキ，ハイガイ，オキシジミと湾奥砂底群集のハマグリ，シオフキガイがほぼ半々である。古代の107はイボキサゴ，ハマグリ，マテガイ等は遺跡に近い干潟で採取が可能であったとみられる。このうちハマグリとシオフキガイはいっしょに採取されるが，そのほかは生息場所や採取方法が異なっていて，それぞれ別に採取されたはずである。176点(6.7％)検出されたダンベイキサゴは，九十九里方面で採取されたものが陸路運び込まれた可能性が高い。当地区では奈良時代の高沢遺跡119号住居で検出例がある。23号墳はイボキサゴにハマグリなどの二枚貝が若干混じる。これも遺跡に近い干潟で採集可能であったろう。

（３）貝殻のサイズ

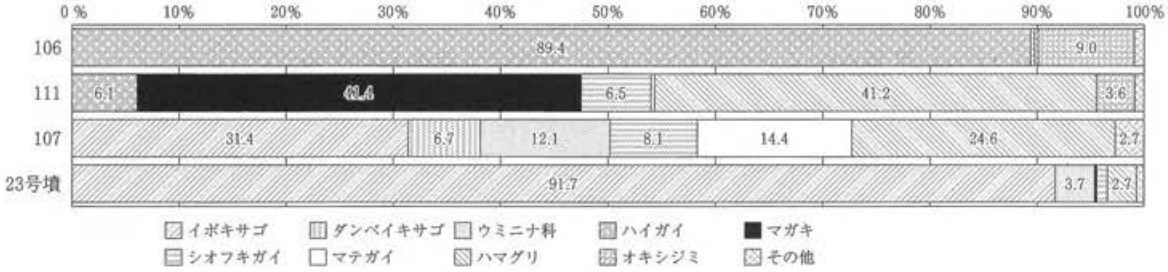
ハイガイは106で２㎝前後のごく小さな個体に偏るのに対して，111では2.5㎝～３㎝を中心とした偏りの少ない分布を示している。106の小さいものほど多いありかたは，たとえばようやくある程度成長した当歳ものをまとめて採取したようなことが考えられよう。一方，ハマグリは3.5㎝～５㎝を中心として，当地域の大型貝塚のものにくらべて，かなり大きい。ウネナシトマヤガイは幼貝のみであり，マガキ等に

第34表　小金沢古墳群貝サンプル

遺構	時期	遺構	採取法	カット数	採取量	備考
106	縄文早期後葉	炉穴	I	1	14.0ℓ	
111	縄文早期後葉	炉穴	I	1	40.0ℓ	
107	古墳時代以降	土坑	I	1	56.0ℓ	
23号墳	古墳後期	古墳	I	1	3.0ℓ	玄室床面

第35表　貝類種名一覧

腹足綱	原始腹足目	ユキノカサガイ科	ツボミガイ	*Patelloida pygmaea lampanicola*
		ニシキウズガイ科	イボキサゴ	*Umbonium (Suchium) moniliferum*
			ダンベイキサゴ	*Umbonium (Suchium) giganteum*
	中腹足目	ウミニナ属	ウミニナ属	Batillaria sp.
		タマガイ科	ツメタガイ	*Glossaulax didyma*
	新腹足目	アクキガイ科	アカニシ	*Rapana venosa*
		ムシロガイ科	アラムシロガイ	*Reticunassa festiva*
			ムシロガイ	*Niotha livescens*
二枚貝綱	フネガイ目	フネガイ科	ハイガイ	*Tegillarca granosa*
	ウグイスガイ目	イタボガキ科	マガキ	*Crassostrea gigas*
	マルスダレガイ目	バカガイ科	シオフキガイ	*Mactra quadrangularis*
			バカガイ	*Mactra chinensis*
		シオサザナミガイ科	シオサザナミガイ科種不明	Psammobiidae gen. & sp. Indet.
		マテガイ科	マテガイ	*Solen strictus*
		マルスダレガイ科	ウネナシトマヤガイ	*Trapezium liratum*
			カガミガイ	*Phacosoma japonicum*
			アサリ	*Ruditapes philippinarum*
			ハマグリ	*Meretrix lusoria*
			オキシジミ	*Cyclina sinensis*
計		12科		19種



第132図　貝種組成

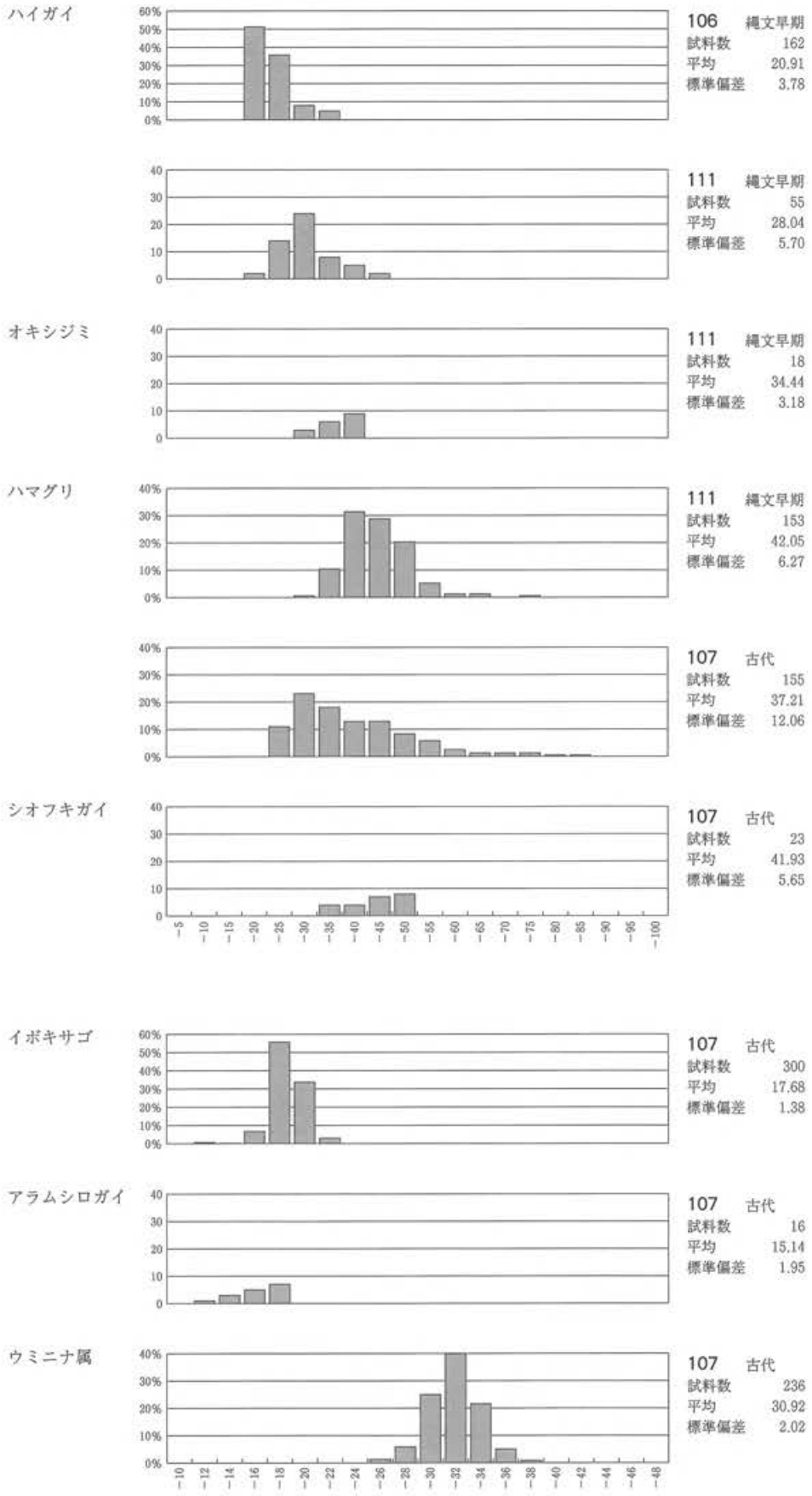
第36表　貝類同定結果

種名	縄文早期 106	縄文早期 111	古代 107	古墳後期 23号墳
ツボミガイ			2	
イボキサゴ		830		541
ダンベイキサゴ		176		
ウミニナ科		319		22
ツメタガイ		5		
アカニシ		0	2	
アラムシロガイ	1	19		
ムシロガイ		1		
ハイガイ	287		73	
マガキ			493	1
シオフキガイ	1	214	78	6
バカガイ		3		
シオサザナミガイ科		6		
マテガイ		380	3	
ウネナシトマヤガイ			3	
カガミガイ		29	0	1
アサリ	2	9	3	3
ハマグリ	1	651	491	16
オキシジミ	29	0	43	
合　計	321	2642	1191	590
水洗前体積(リットル)	14.0	40.0	56.0	3.0

第37表　ウミニナ属計測値

殻高復元値 mm	個数	計測値 口長	殻高
−16.0		11.74	31.23
−18.0		10.40	29.07
−20.0		11.15	30.01
−22.0		10.20	30.33
−24.0		11.11	30.44
−26.0	3	10.94	31.53
−28.0	14	11.09	31.21
−30.0	59	10.27	31.78
−32.0	95	11.03	31.45
−34.0	51	11.17	33.51
−36.0	12	10.62	31.97
−38.0	2	11.39	32.93
−40.0		11.22	34.17
−42.0		11.49	36.16
−44.0			
−46.0			
−48.0			
試料数	236		
平均	30.92		
標準偏差	2.02		

上のイボウミニナ計測値から殻高回帰式を求めた
殻高＝口長×2.9
個体差が大きく，不安定な式である。
左は殻高の復元値



第133図　貝類計測値分布

第38表　貝類計測値分布

ハイガイ殻長

mm	106		111
-5.0			
-10.0			
-15.0			
-20.0	83	51.2%	2
-25.0	58	35.8%	14
-30.0	13	8.0%	24
-35.0	8	4.9%	8
-40.0			5
-45.0			2
-50.0			
-55.0			
-60.0			
-65.0			
-70.0			
-75.0			
-80.0			
-85.0			
-90.0			
-95.0			
-100.0			
試料数	162		55
平均	20.91		28.04
標準偏差	3.78		5.70
最小	15.2		16.2
最大	32.9		44.9

ハマグリ殻長

mm	107		111	
-5.0				
-10.0				
-15.0				
-20.0				
-25.0	17	11.0%		
-30.0	36	23.2%	1	0.7%
-35.0	28	18.1%	16	10.5%
-40.0	20	12.9%	48	31.4%
-45.0	20	12.9%	44	28.8%
-50.0	13	8.4%	31	20.3%
-55.0	9	5.8%	8	5.2%
-60.0	4	2.6%	2	1.3%
-65.0	2	1.3%	2	1.3%
-70.0	2	1.3%		
-75.0	2	1.3%	1	0.7%
-80.0	1	0.6%		
-85.0	1	0.6%		
-90.0				
-95.0				
-100.0				
試料数	155		153	
平均	37.21		42.05	
標準偏差	12.06		6.27	
最小	20.6		27.6	
最大	80.8		71.0	

シオフキガイ殻長

mm	107
-5.0	
-10.0	
-15.0	
-20.0	
-25.0	
-30.0	
-35.0	4
-40.0	4
-45.0	7
-50.0	8
-55.0	
-60.0	
-65.0	
-70.0	
-75.0	
-80.0	
-85.0	
-90.0	
-95.0	
-100.0	
試料数	23
平均	41.93
標準偏差	5.65
最小	32.5
最大	49.9

オキシジミ殻長

mm	111
-5.0	
-10.0	
-15.0	
-20.0	
-25.0	
-30.0	3
-35.0	6
-40.0	9
-45.0	
-50.0	
-55.0	
-60.0	
-65.0	
-70.0	
-75.0	
-80.0	
-85.0	
-90.0	
-95.0	
-100.0	
試料数	18
平均	34.44
標準偏差	3.18
最小	28.0
最大	38.8

イボキサゴ殻径

mm	107	
-10.0		
-12.0	2	0.7%
-14.0	1	0.3%
-16.0	20	6.7%
-18.0	167	55.7%
-20.0	101	33.7%
-22.0	9	3.0%
-24.0		
-26.0		
-28.0		
-30.0		
-32.0		
-34.0		
-36.0		
-38.0		
-40.0		
-42.0		
-44.0		
-46.0		
-48.0		
試料数	300	
平均	17.68	
標準偏差	1.38	
最小	10.1	
最大	21.0	

アラムシロガイ殻高

mm	107
-10.0	
-12.0	1
-14.0	3
-16.0	5
-18.0	7
-20.0	
-22.0	
-24.0	
-26.0	
-28.0	
-30.0	
-32.0	
-34.0	
-36.0	
-38.0	
-40.0	
-42.0	
-44.0	
-46.0	
-48.0	
試料数	16
平均	15.14
標準偏差	1.95
最小	10.6
最大	17.7

ダンベイキサゴ殻径

mm	107
-10.0	
-12.0	
-14.0	
-16.0	2
-18.0	1
-20.0	
-22.0	4
-24.0	21
-26.0	4
-28.0	
-30.0	1
-32.0	
-34.0	
-36.0	2
-38.0	
-40.0	
-42.0	
-44.0	
-46.0	
-48.0	
試料数	35
平均	23.17
標準偏差	3.78
最小	15.0
最大	34.8

オキシジミ殻長

106	
試料数	3
平均	35.57

アサリ殻長

107	
試料数	2
平均	27.45

カガミガイ殻長

107	
試料数	2
平均	59.40

付着して持ち込まれたものであろう。

古代の107の貝は，縄文時代のものに比べて大きく，当地域の古代の貝採取のあり方を示している。そのなかでハマグリの小さな個体が多い点が目立っている。また，ウミニナ類はイボキサゴ漁で混獲されて遺跡に持ち込まれることが多いが，ここでは大きな個体を選んで食用に持ち込んだものと推定された。

（4）107のウミニナ類に見られる食痕について（付図版）

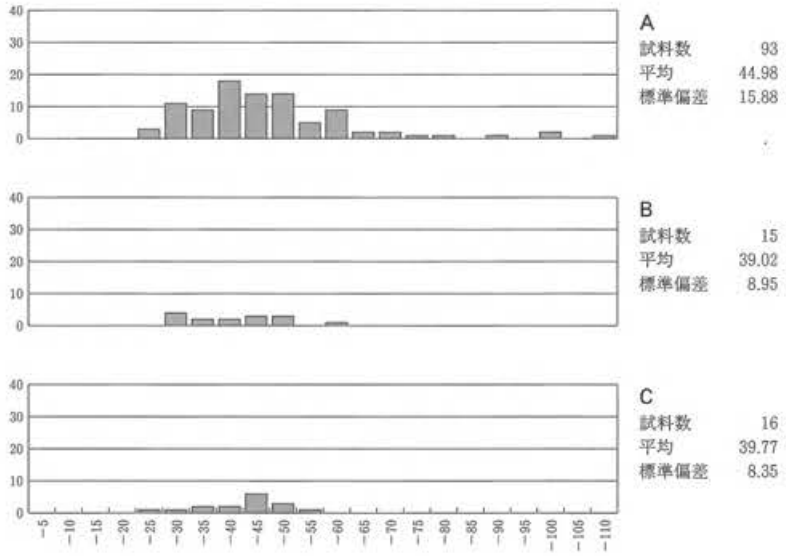
約300個体出土し，ほとんどすべて殻頂部を失っており，2㎜メッシュには殻頂部のみの破片が数多く見られる。これは殻頂部を切断し，殻口部から身を吸い出した証拠である。村田川水系ではほかに千葉市中野台遺跡の例が知られている(西野1997)。いずれも殻高3㎝を越える大きな個体がたくさん入っている。食用として大きめの個体を選んで採取したものであろう。

（5）111のマガキの付着痕観察結果

マガキの左殻のうち，殻頂部付近が残る試料を観察したところ，以下のようであった。

A．	付着痕をもたないもの，およびマガキに付着したもの	142	76.3%
B．	付着痕をもつが何に付着したか不明のもの	25	13.4%
C．	二枚貝に付着したもの	19	10.2%
	試料数	186	100.0%

mm	A	B	C
-5.0			
-10.0			
-15.0			
-20.0			
-25.0	3		1
-30.0	11	4	1
-35.0	9	2	2
-40.0	18	2	2
-45.0	14	3	6
-50.0	14	3	3
-55.0	5		1
-60.0	9	1	
-65.0	2		
-70.0	2		
-75.0	1		
-80.0	1		
-85.0			
-90.0	1		
-95.0			
-100.0	2		
-105.0			
-110.0	1		
試料数	93	15	16
平均	44.98	39.02	39.77
標準偏差	15.88	8.95	8.35



	個体数(計測不可も含む)	
A 付着痕をもたないもの，およびマガキに付着したもの	142	76.3%
B 付着痕をもつが何に付着したか不明のもの	25	13.4%
C 二枚貝に付着したもの	19	10.2%

第134図　マガキ計測値分布

マガキ同士で付着したカキ礁から採取したものが多かったことが予想される。当遺跡付近は多数の貝塚が知られているが，このようなマガキは本例と伯父名台遺跡SK062(西野2004)の縄文早期後葉の2例がある。この付近の谷は谷奥までの距離が短く，谷底の傾斜が強い(松島1982)ため，カキ礁は形成しにくかったと思われる。早期後葉に形成されたカキ礁は，海退により比較的短い期間で失われた可能性が高い。一

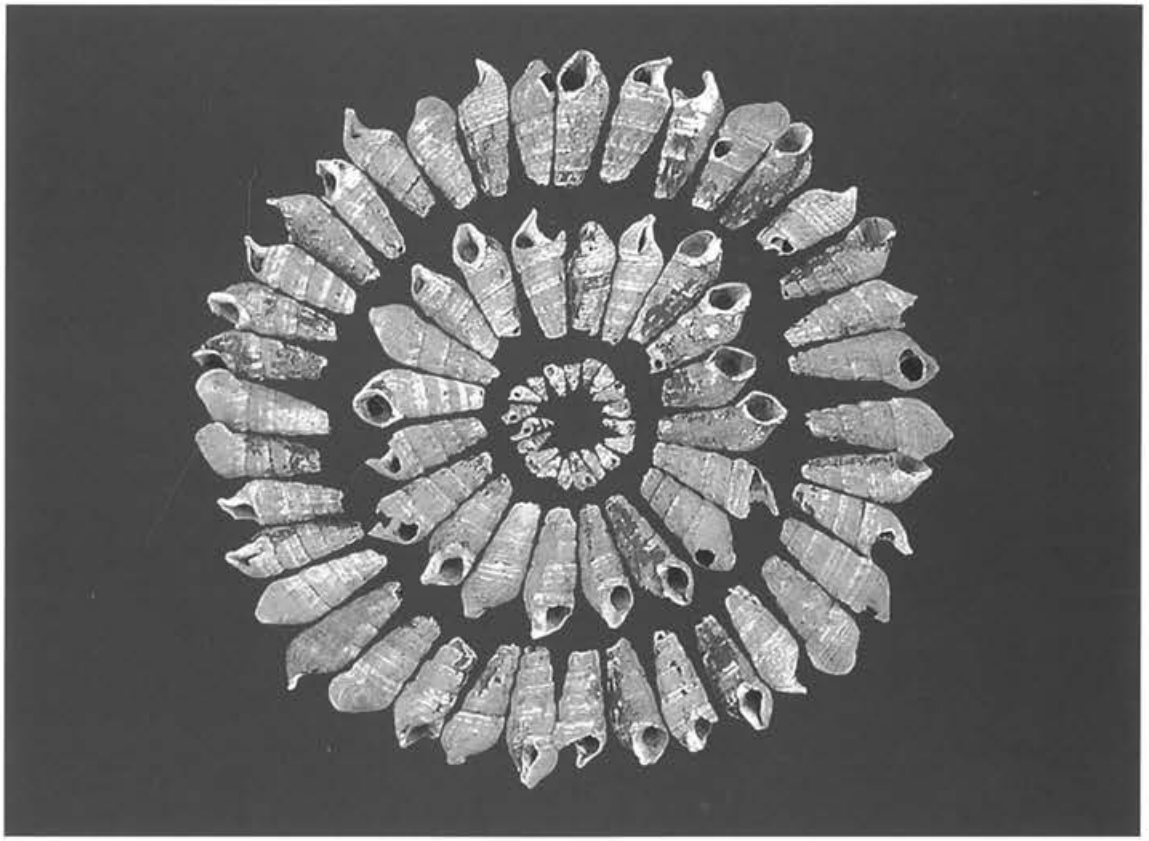
方で，二枚貝に付着したものでは，ハイガイに着くかその痕跡をもつものが多く，ハマグリとシオフキガイもみられる。伯父名台例では棒状の植物に着いたと見られるものが多いが，当試料にはみられなかった。付着痕の分類ごとに殻高分布をみると，分布の中心は変わらないものの，カキ礁を形成したと思われるAは，かなり大きなものが混じっている。

（6）107のフジツボについて

4㎜メッシュ以上で選別したフジツボは194.3ｇあり，食用に持ち込まれた可能性が高い。細かく破砕しているため，2㎜，1㎜の選別していないものにも多量に入っている。当サンプルにはフジツボの付着した貝殻はみられず，フジツボの付着痕跡は棒状のものであるので，河口の湿地などに生えた植物に付着したものを採取したことが予想できる。今のところ種名は調べていないが，通常マガキに付着して貝サンプルに入っているものより，やや大きめのものばかりである。同じ東南部地区では，伯父名台遺跡の縄文早期のサンプル，木戸作貝塚の縄文後期のサンプルでも，フジツボのまとまった検出例がある。縄文早期から古代まで，かなり長い間にわたって，フジツボを食べる習慣があったものとみられる。

文献

松島義章　1982　「小金沢貝塚周辺の沖積低地」『千葉東南部ニュータウン10－小金沢貝塚－』(財)千葉県文化財センター
西野雅人　1997　「ウミニナ類の身を取り出す２つの方法」『研究連絡誌』第50号　(財)千葉県文化財センター
西野雅人　2004　「貝サンプルの分析結果」『千葉東南部ニュータウン30－千葉市伯父名台遺跡－』(財)千葉県文化財センター

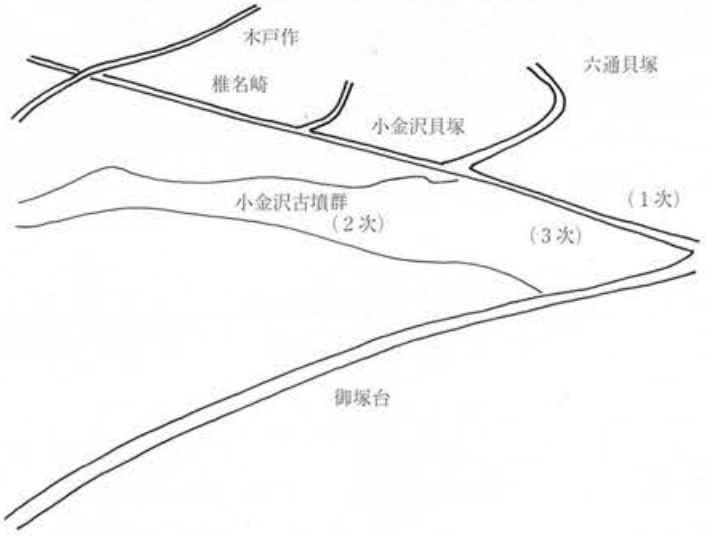


107 出土のウミニナ類

写　真　図　版

図版1

遺跡周辺航空写真



遺跡全景

調査前風景（西側）

調査前風景（東側）

確認調査状況（西から）

確認調査状況（東側）

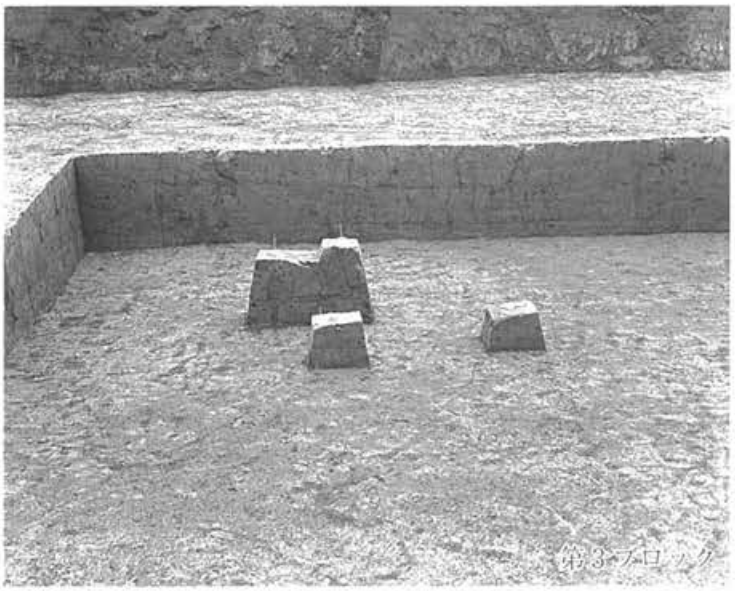
遺跡遠景（西・神明社裏から）

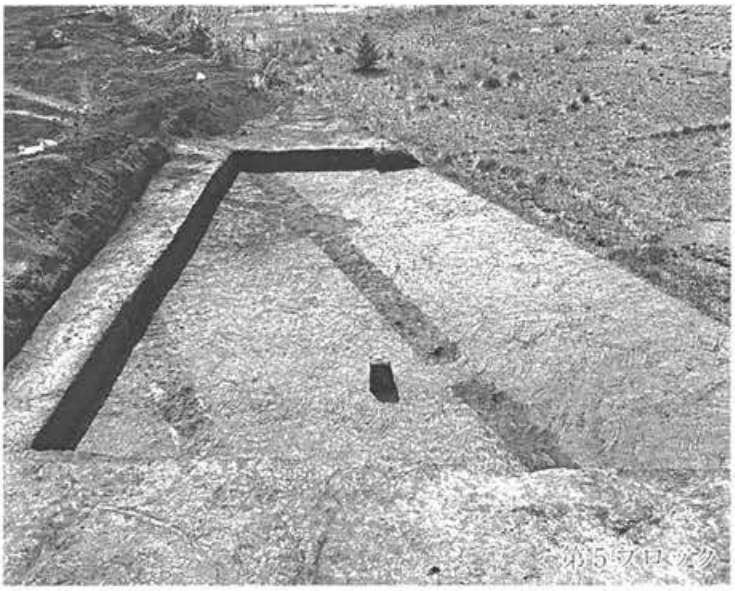
22（左）,21（右）号墳調査前状況

22号墳調査前状況

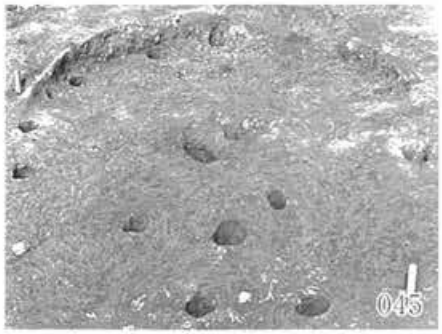
21号墳調査前状況

調査前状況

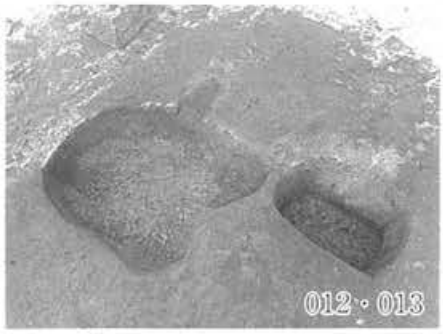




旧石器時代遺物出土状況


045

050A

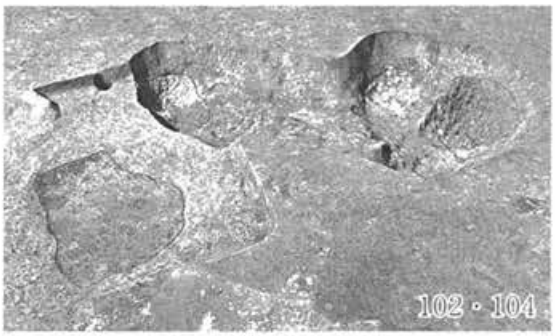

012・013

026

015遺物出土状況

015

031

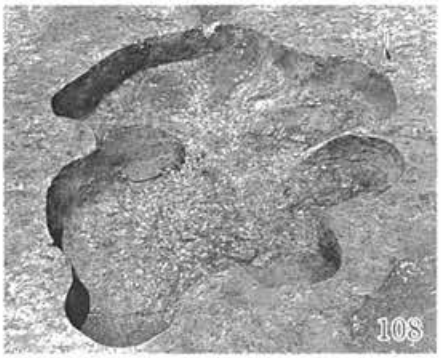

102・104

106

105

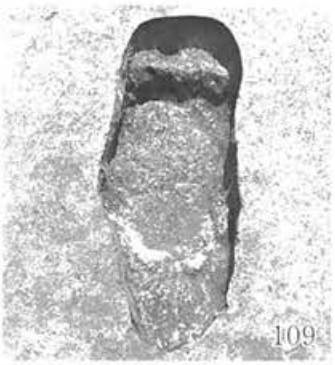
106貝殻堆積状況

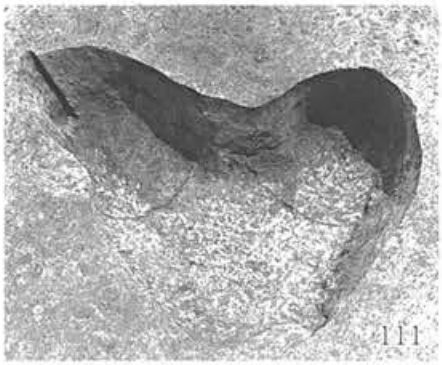
106

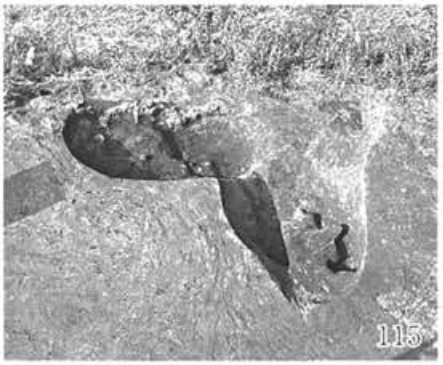

108

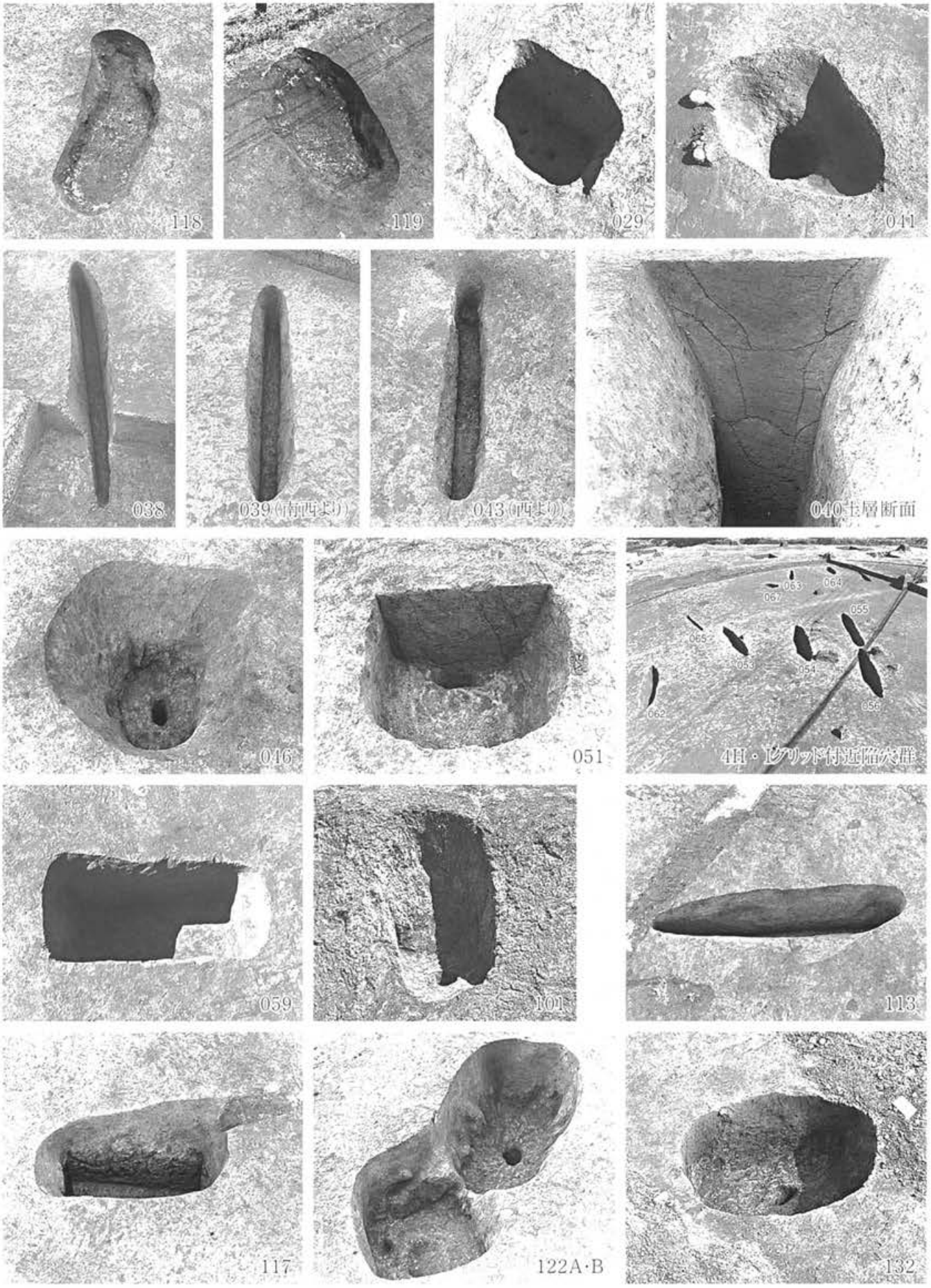
111

112(南より)


109


111


113


118
119
029
041
038
039（南西より）
043（西より）
040土層断面
046
051
063
064
067
055
065
053
054
056
062
4H・Iグリッド付近陥穴群
059
101
113
117
122A·B
132

縄文時代遺構（2）

21号墳(手前)22号墳(奥)

21号墳石室全景(南から)

石室確認状況（南から）

周溝内遺物出土状況（西から）

石室内石材崩落状況（南から）

周溝内鉄鏃出土状況（西から）

石室羨門外面（南から）

石室裏込上部須恵器出土状況

石室（奥壁から）

石室全景（南から）

22号墳

石室内石材崩落状況

羨道部土層断面

羨道部遺物出土状況

周溝内遺物出土状況

23号墳

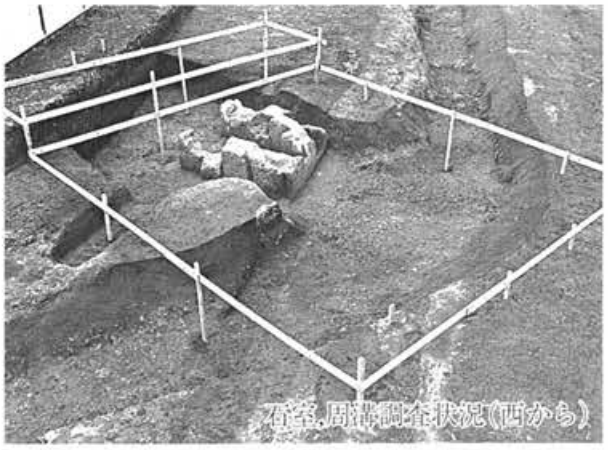
23号墳全景（東から）

石室全景（羨道部から）

23号墳玄室貝殻敷土状況

石室全景（奥壁から）

24号墳銅鏡出土状況


石室,周溝調査状況(西から)

石室羨道部(東から)

石室羨道部(北から)

羨道部鉄鏃出土状況

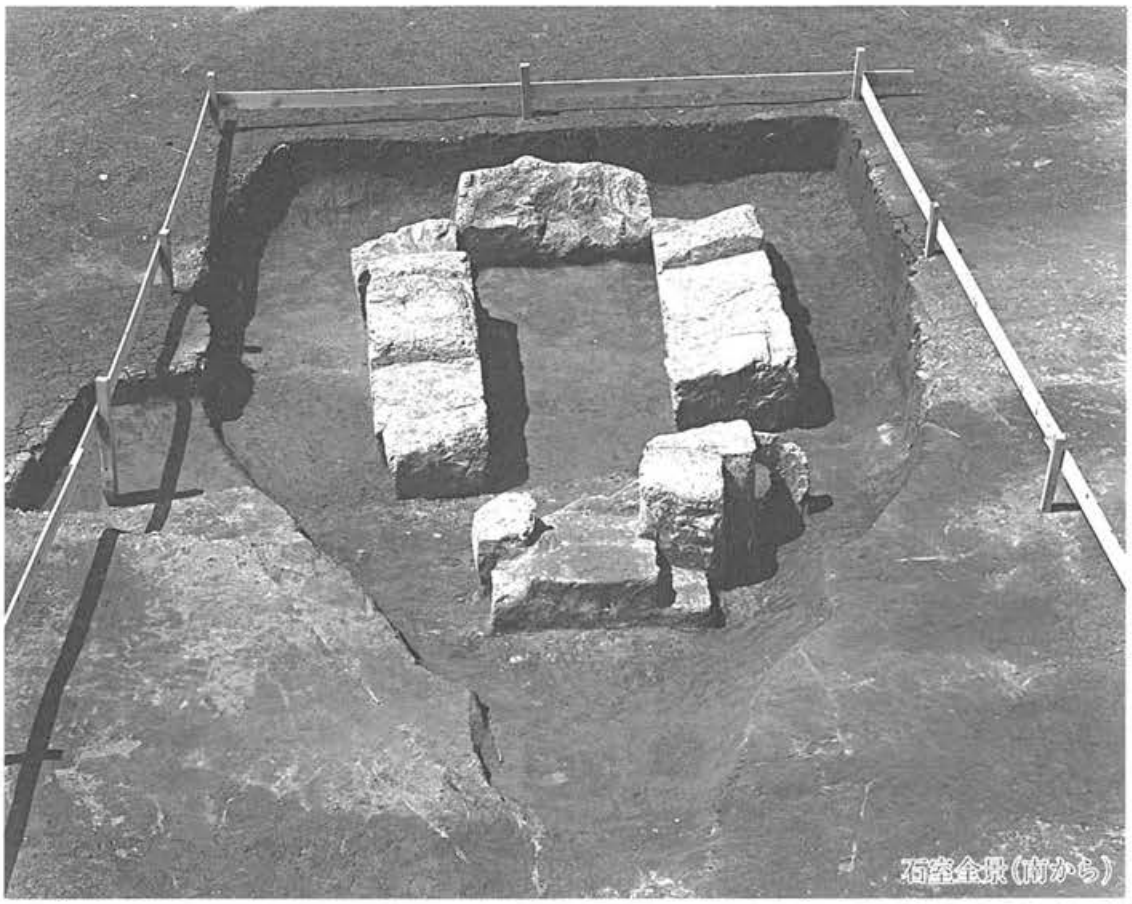
周溝内須恵器蓋杯出土状況

第1埋葬施設羨道部内側

周溝内須恵器平瓶出土状況

周溝内大刀出土状況

25号墳

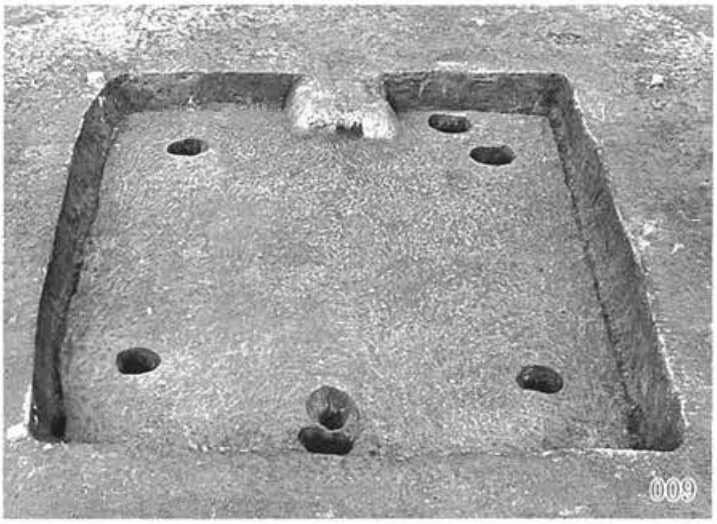

石室全景（南から）

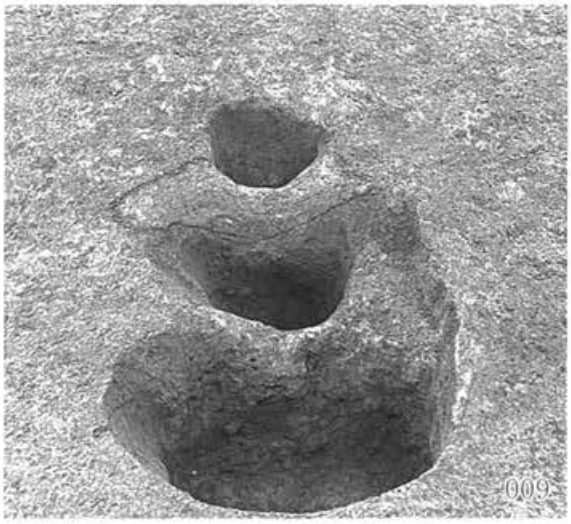
石室確認状況

玄室内土層断面

石室裏込土層断面

玄室床面鉄鏃出土状況


009

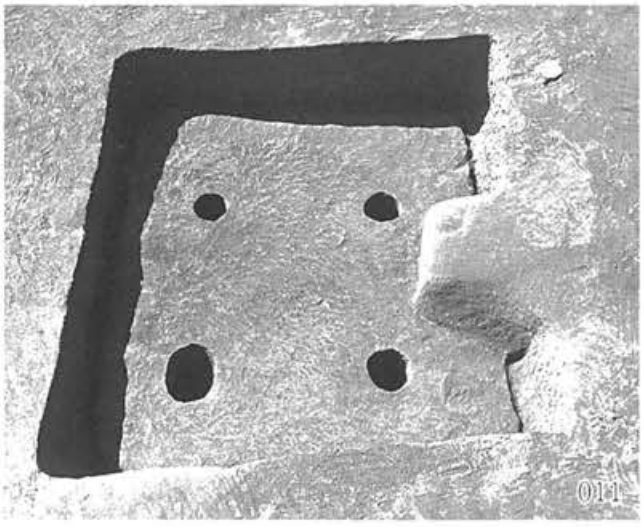

009

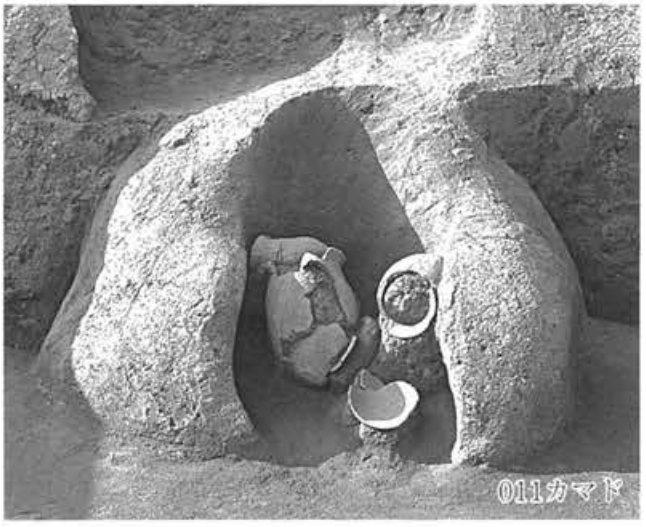
009カマド

010

010カマド遺物出土状況

010カマド


011


011カマド

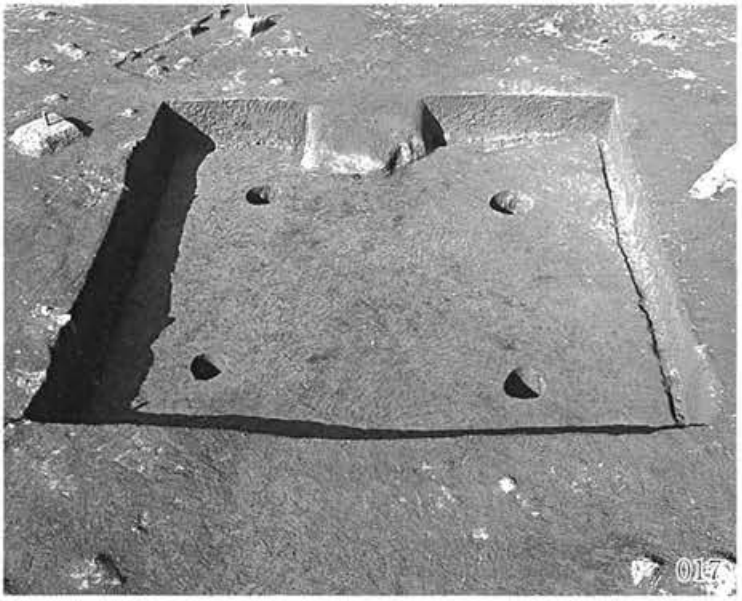
図版 14

014

014カマド

017炭化材検出状況

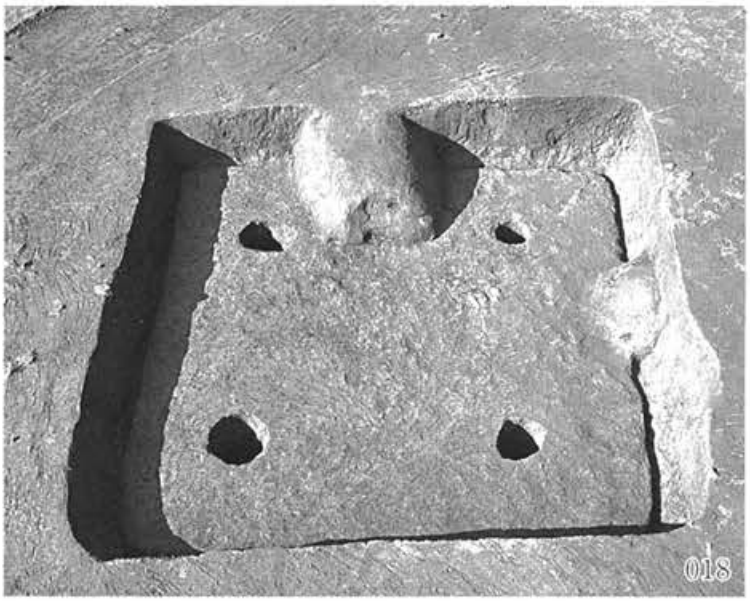
017カマド遺物出土状況


017

017カマド

018炭化材検出状況

018カマド

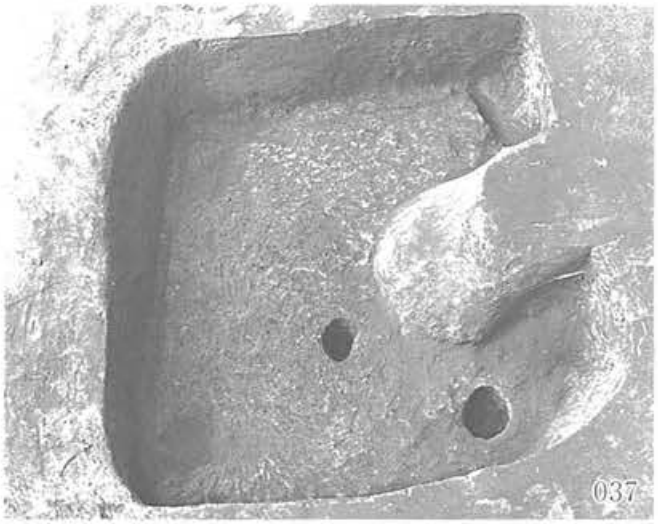

018

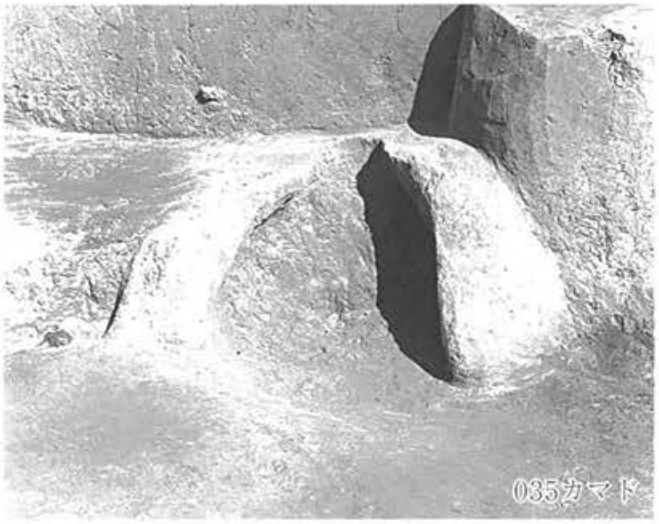
018出土支脚

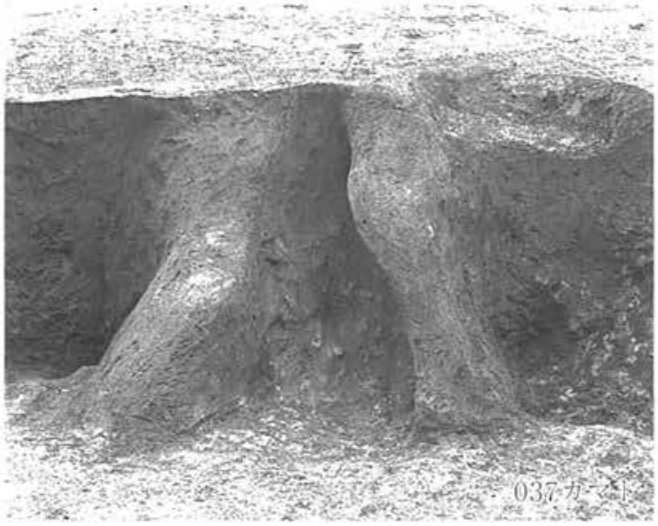
025土師器集中地点

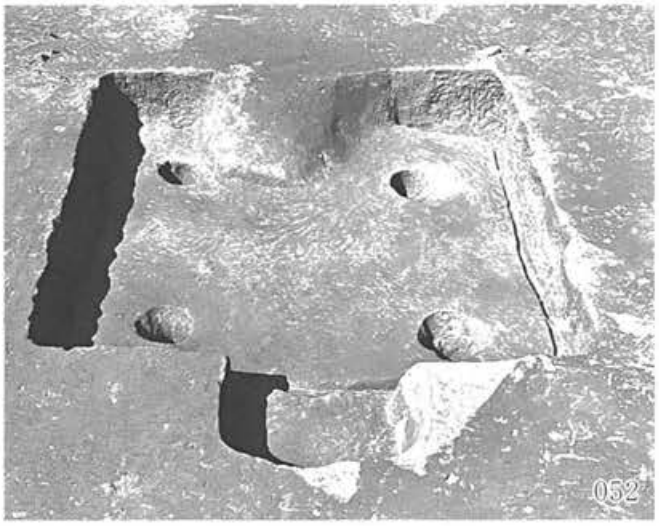
035

035カマド遺物出土状況


037


035カマド


037カマド


052

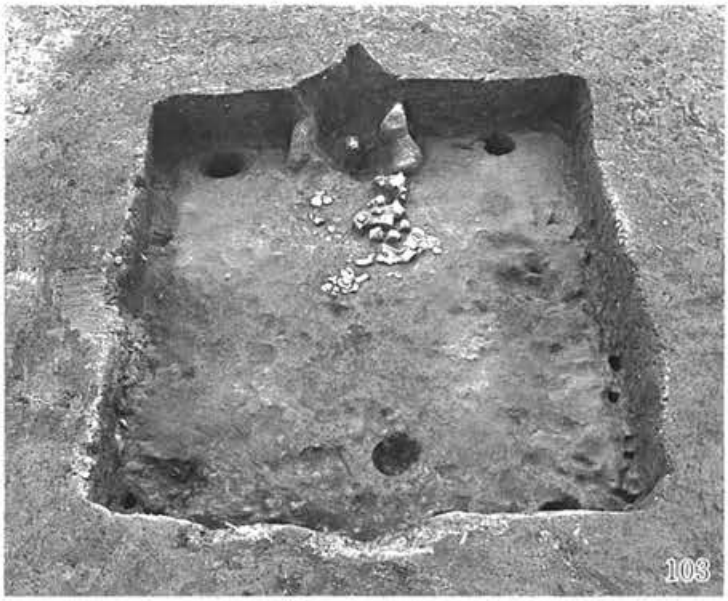
052カマド遺物出土状況

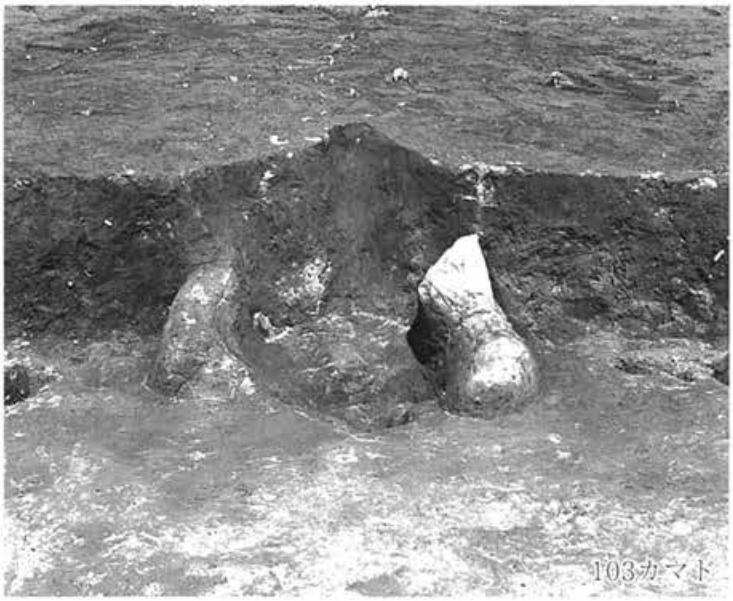
052カマド

102遺物出土状況

102・104

102カマド


103


103カマド

103旧カマド

005・004

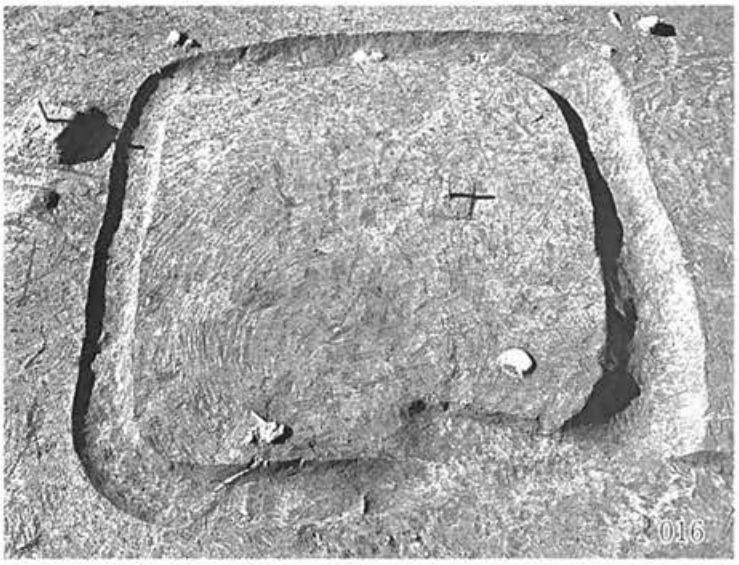
030

004

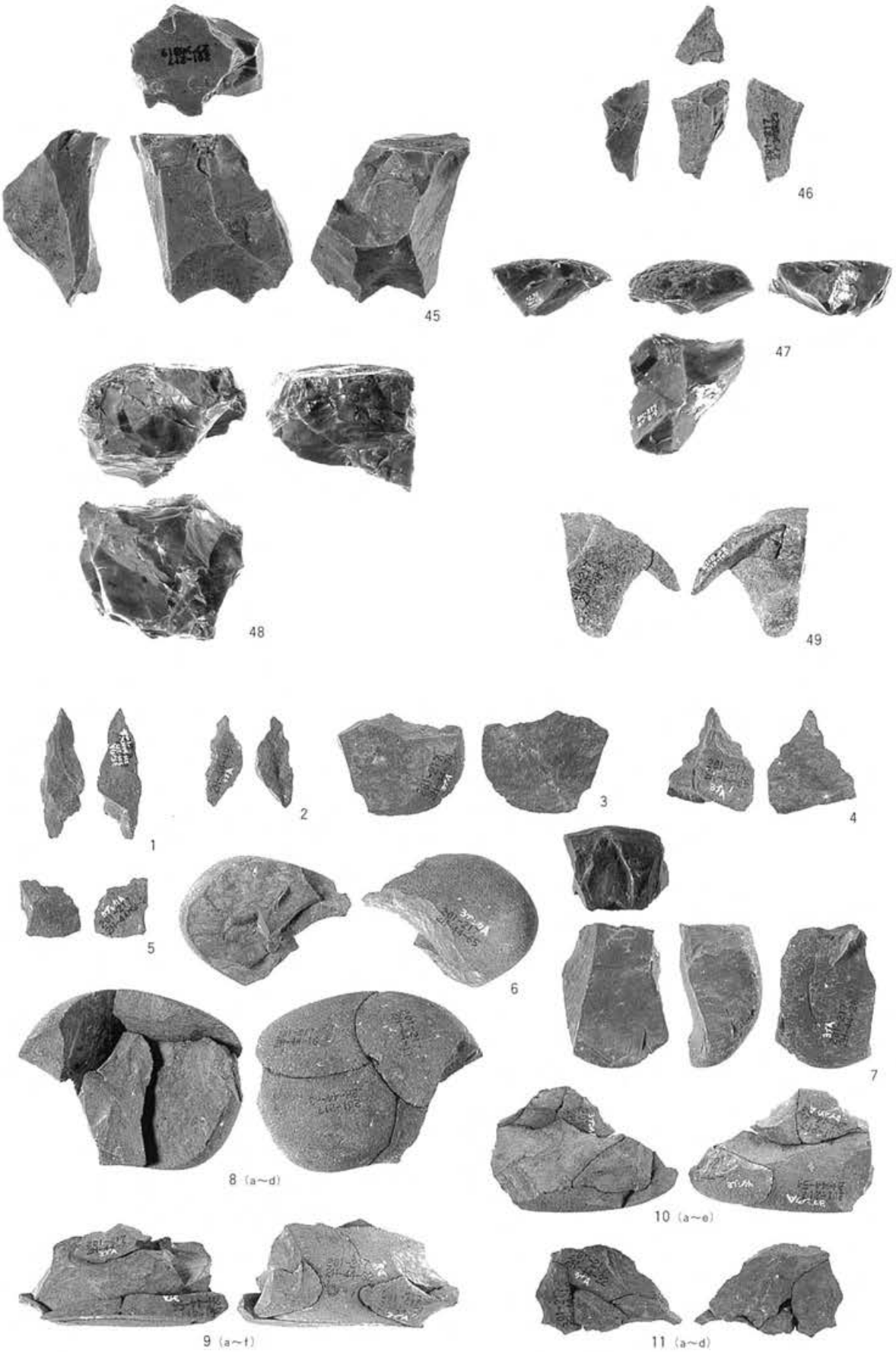
005(北)・004

002

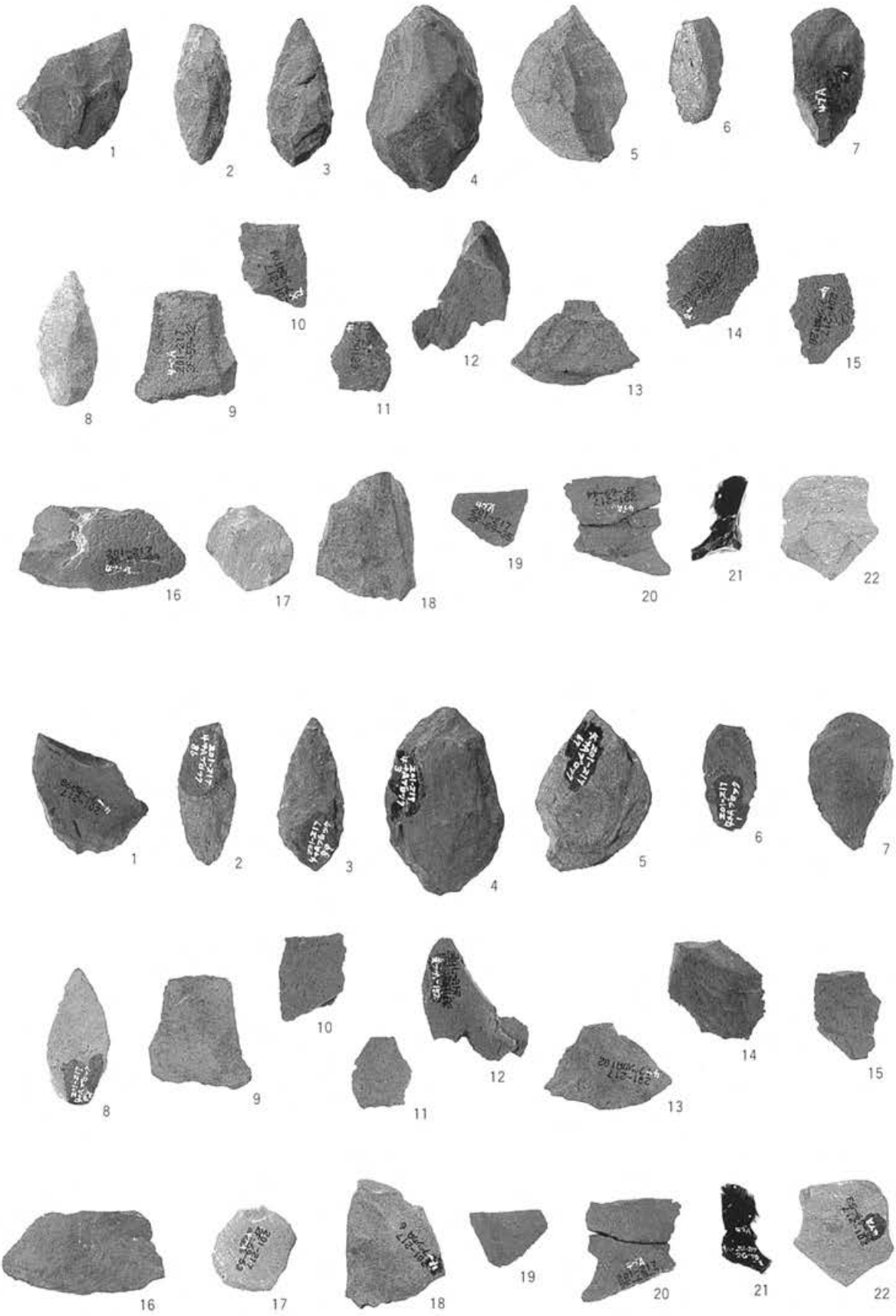
123


016

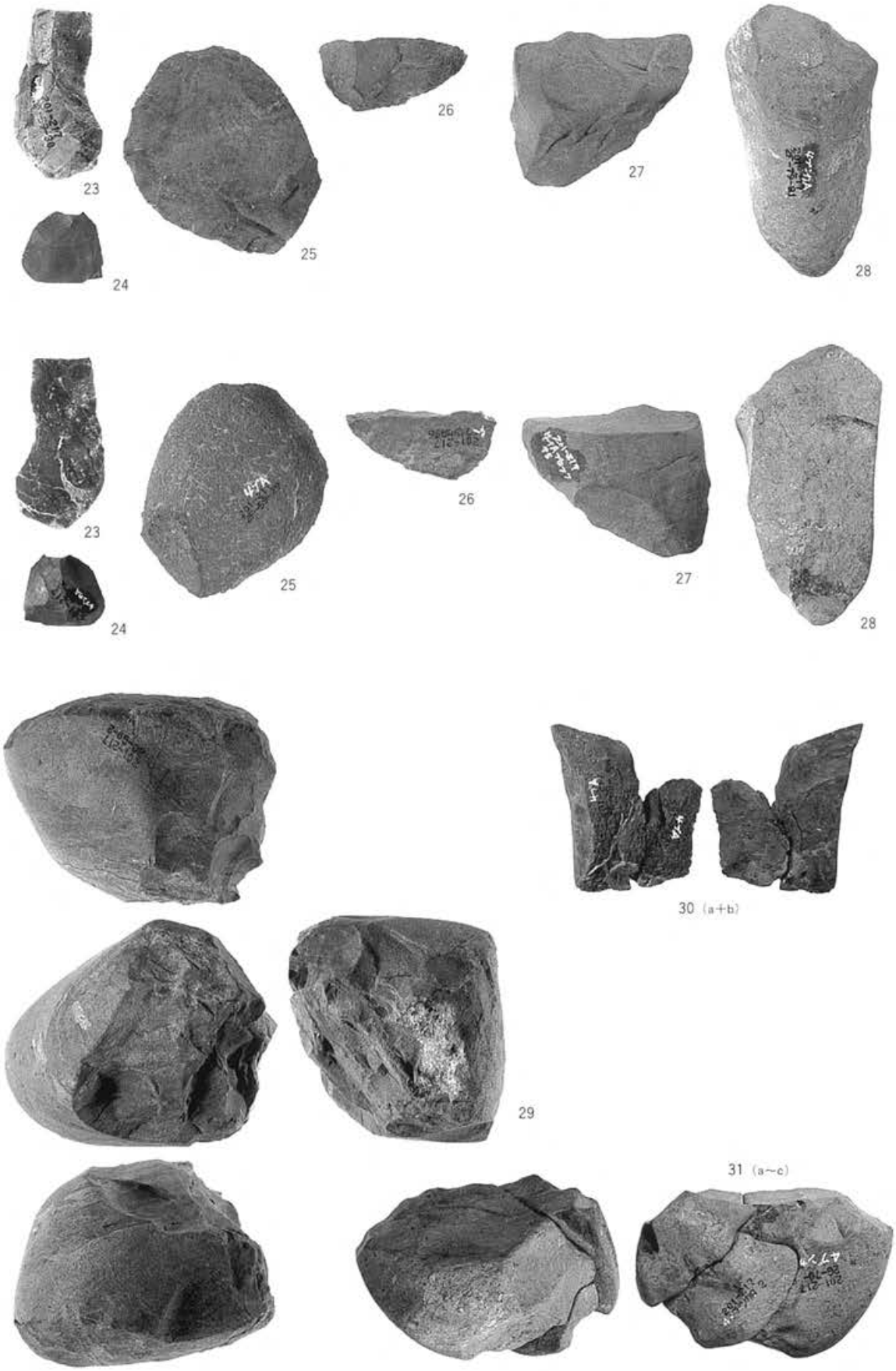
125



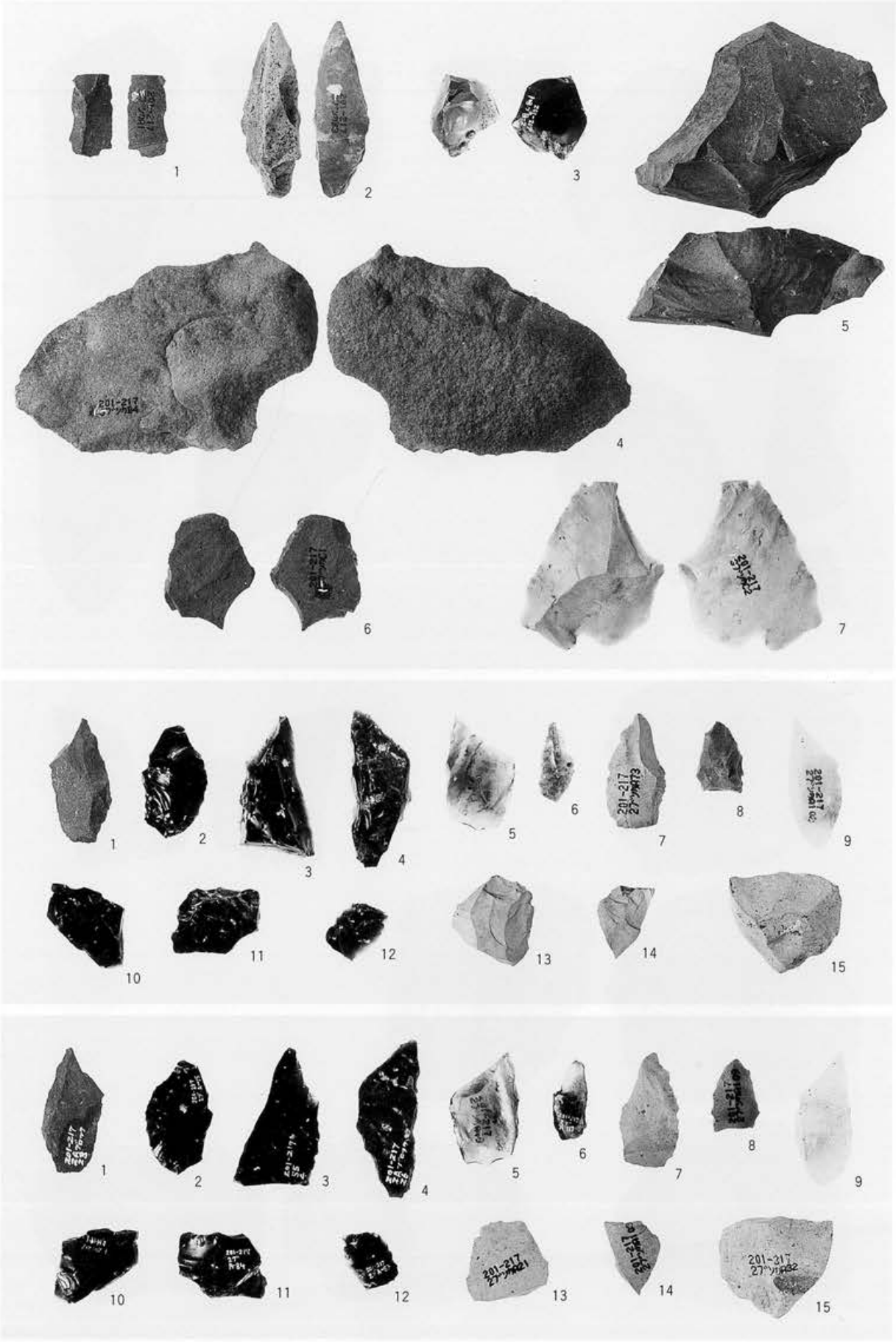
上段：第1ブロック出土遺物，下段：第6ブロック出土遺物



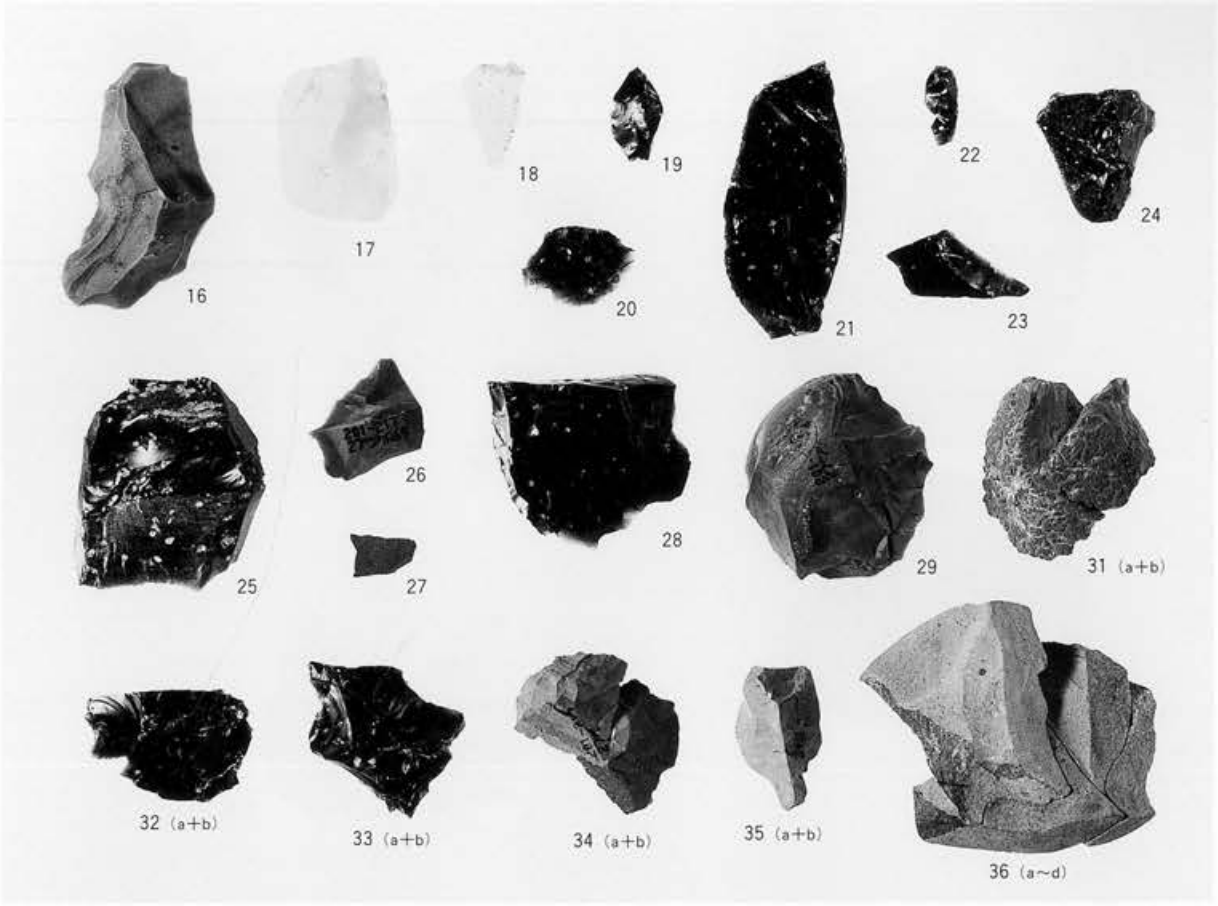
第4ブロック出土遺物（1）

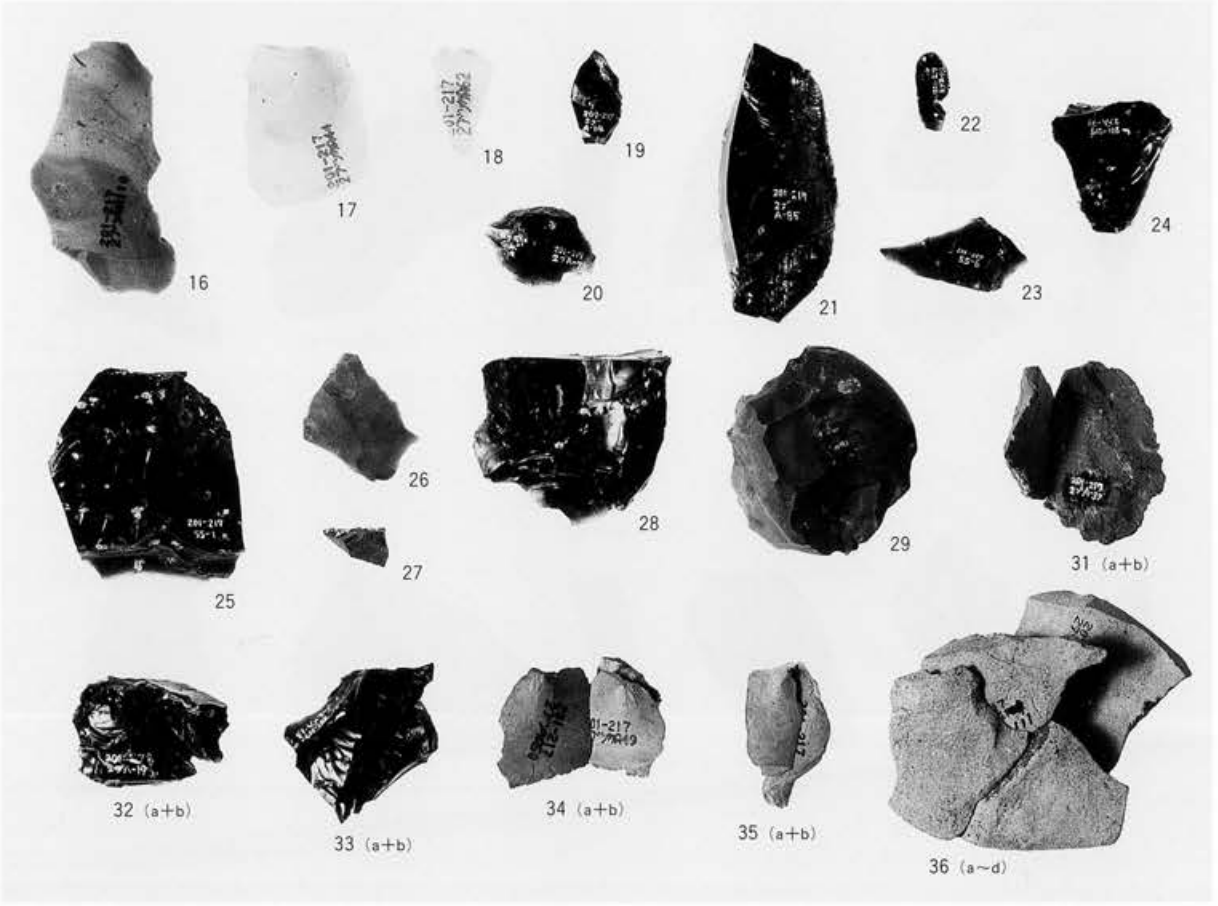


第４ブロック出土遺物（２）

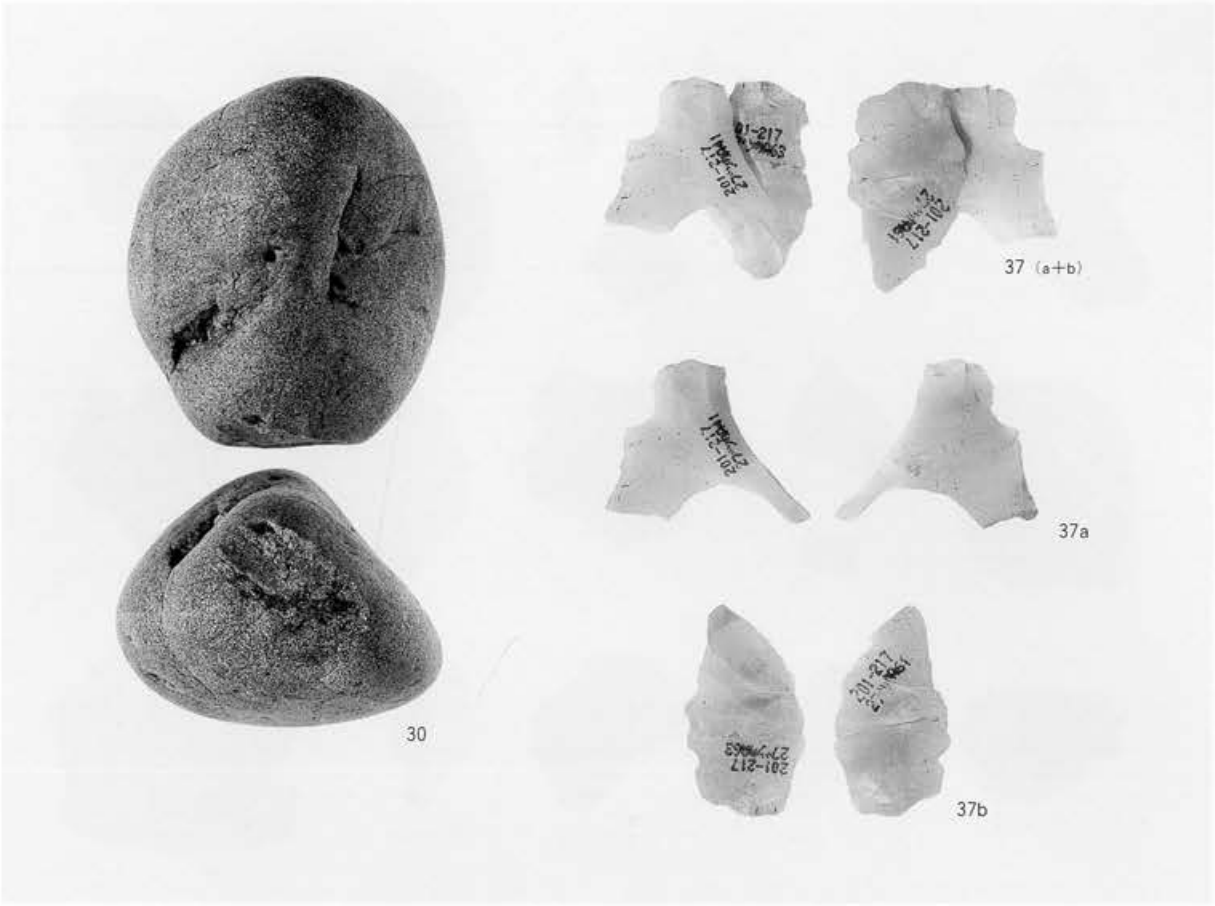


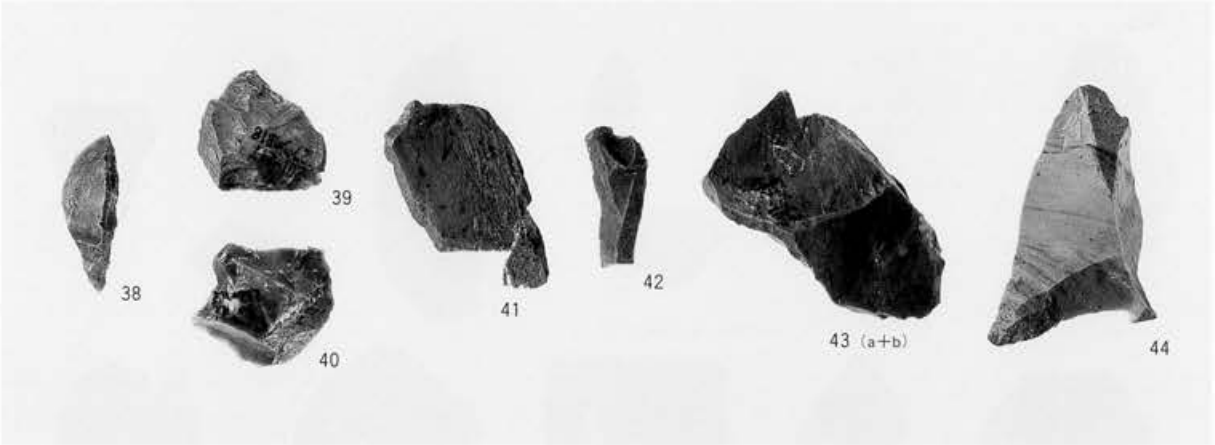
上段：第５ブロック出土遺物，下段：第７ブロック出土遺物（１）

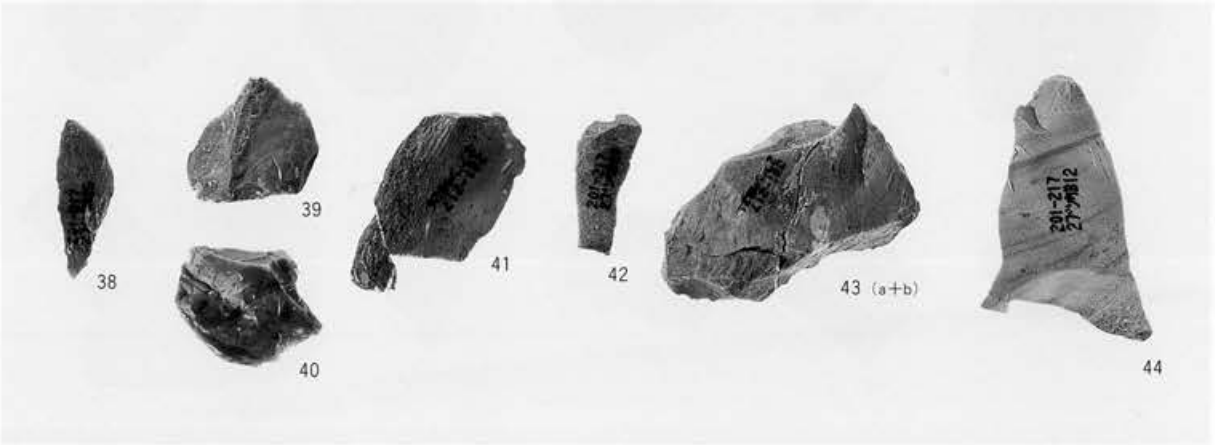




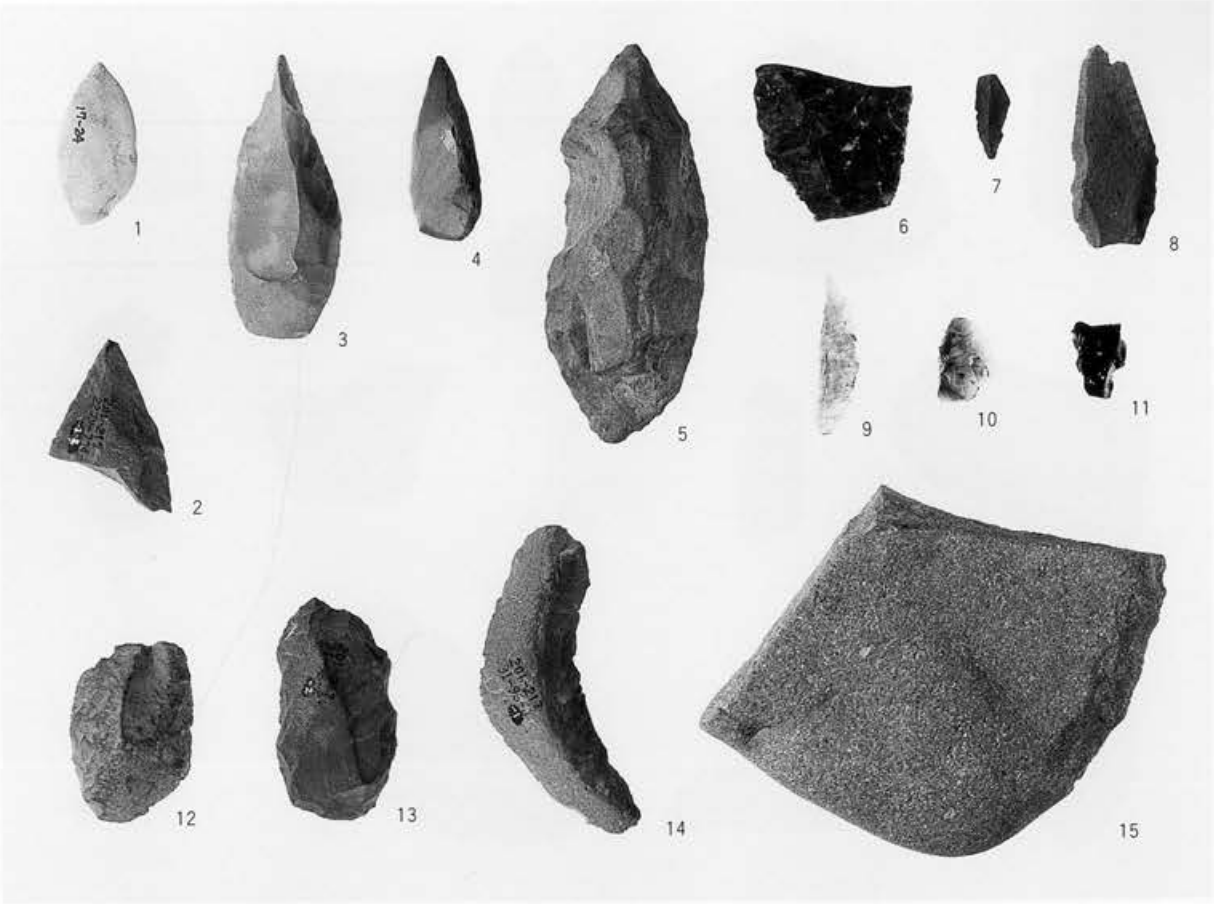
第７ブロック出土遺物（２）

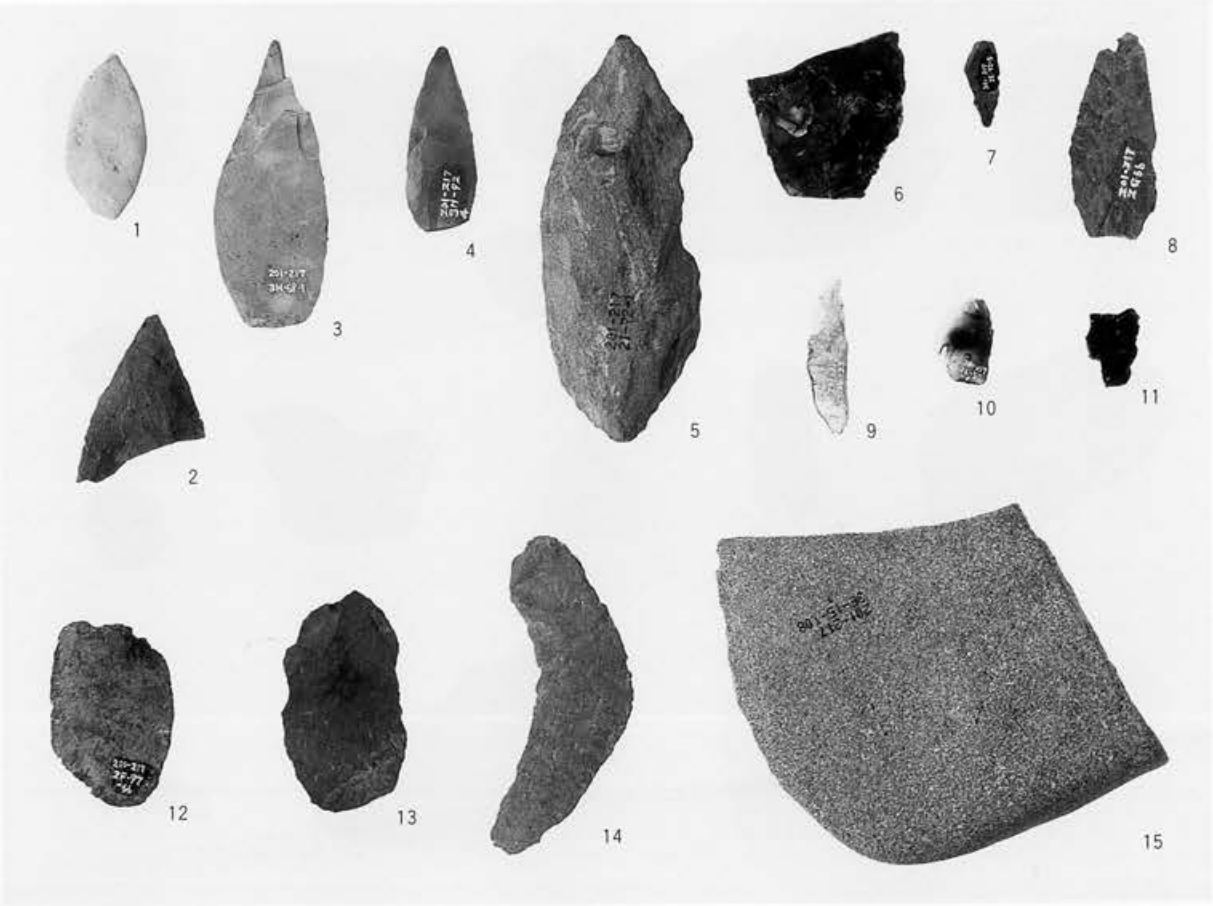




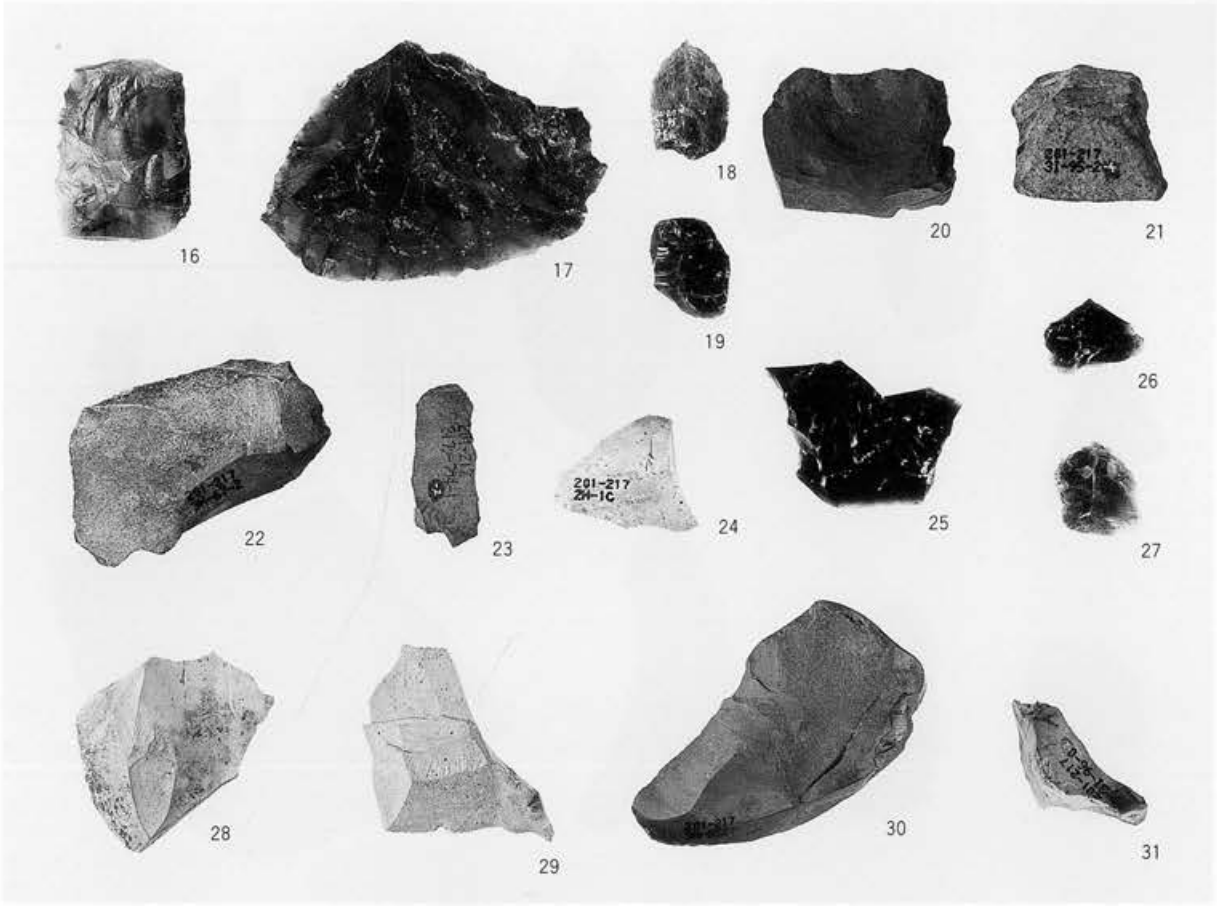


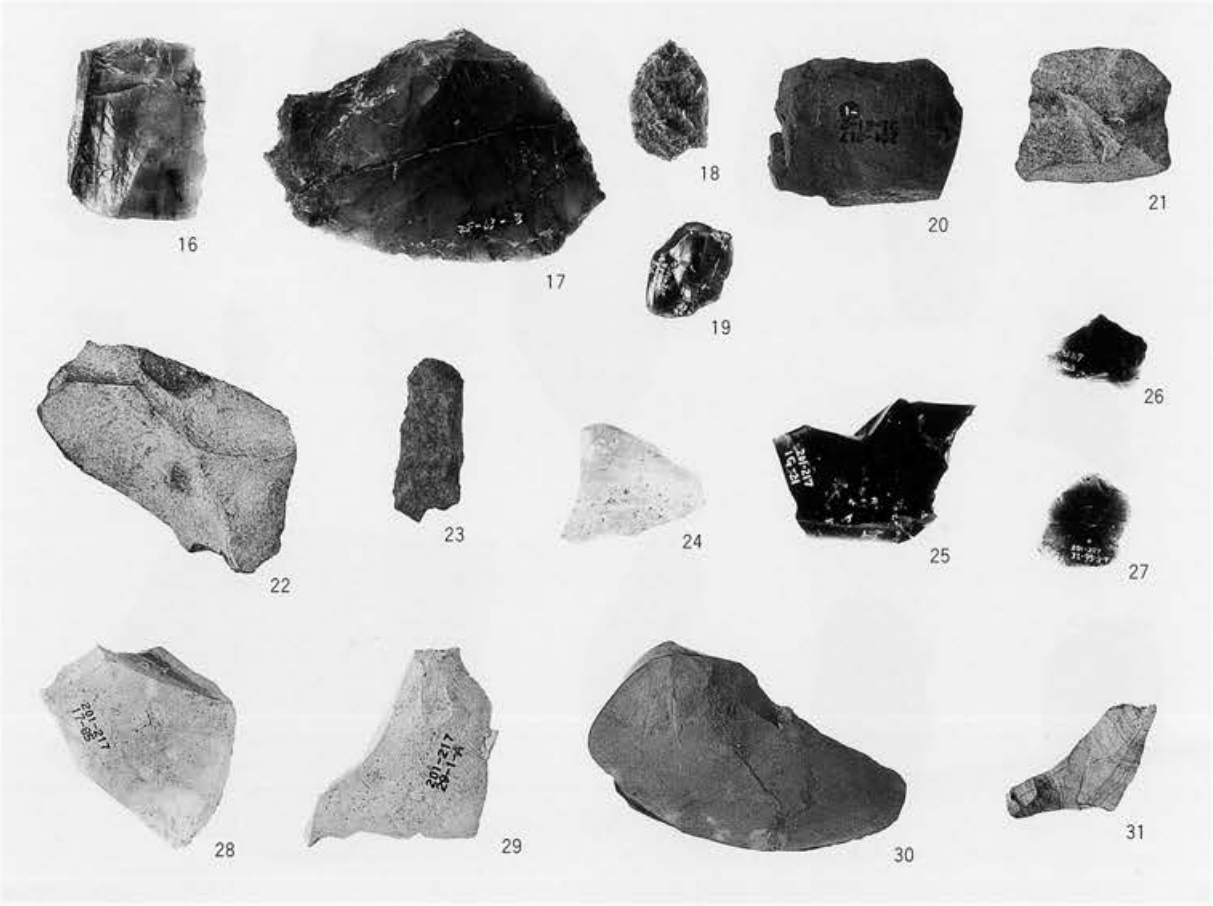
第７ブロック出土遺物（３）



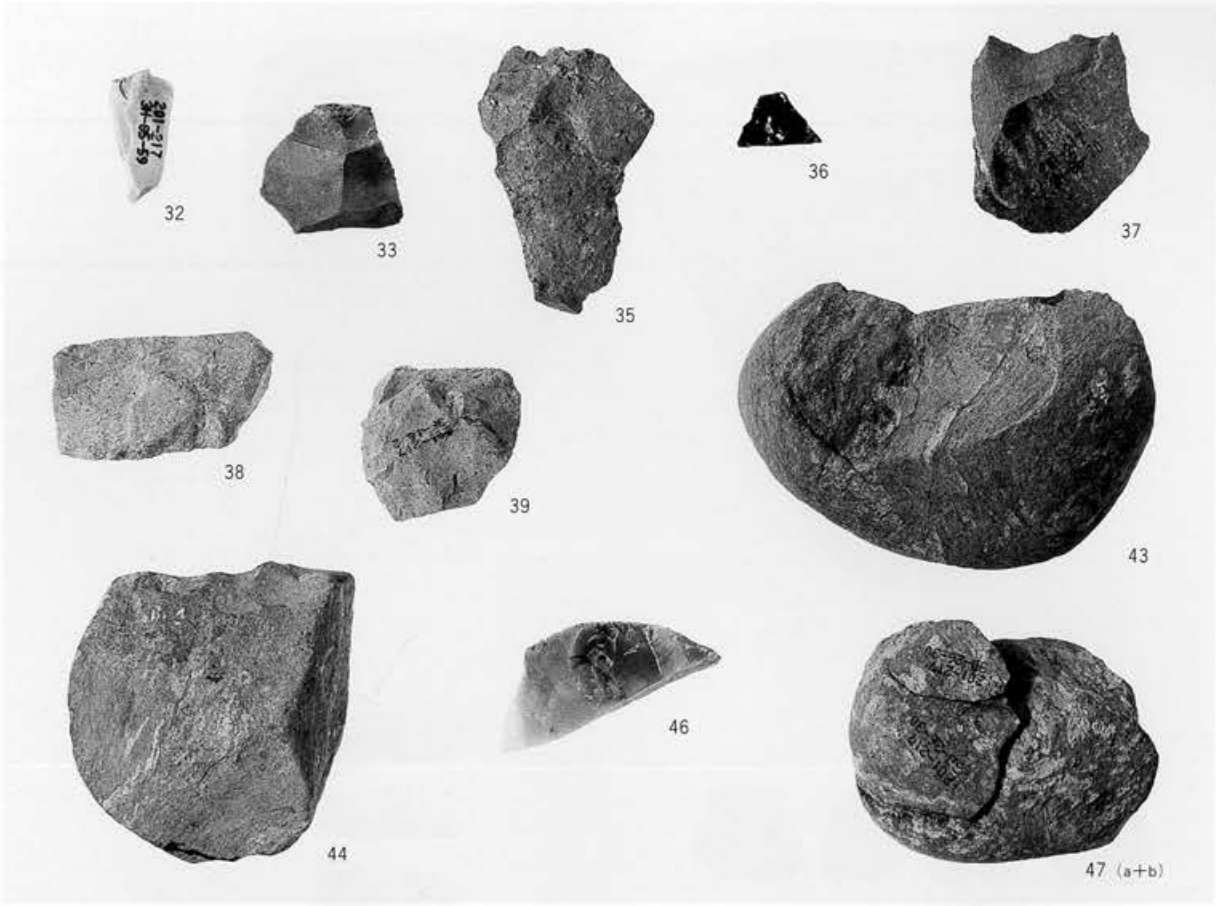


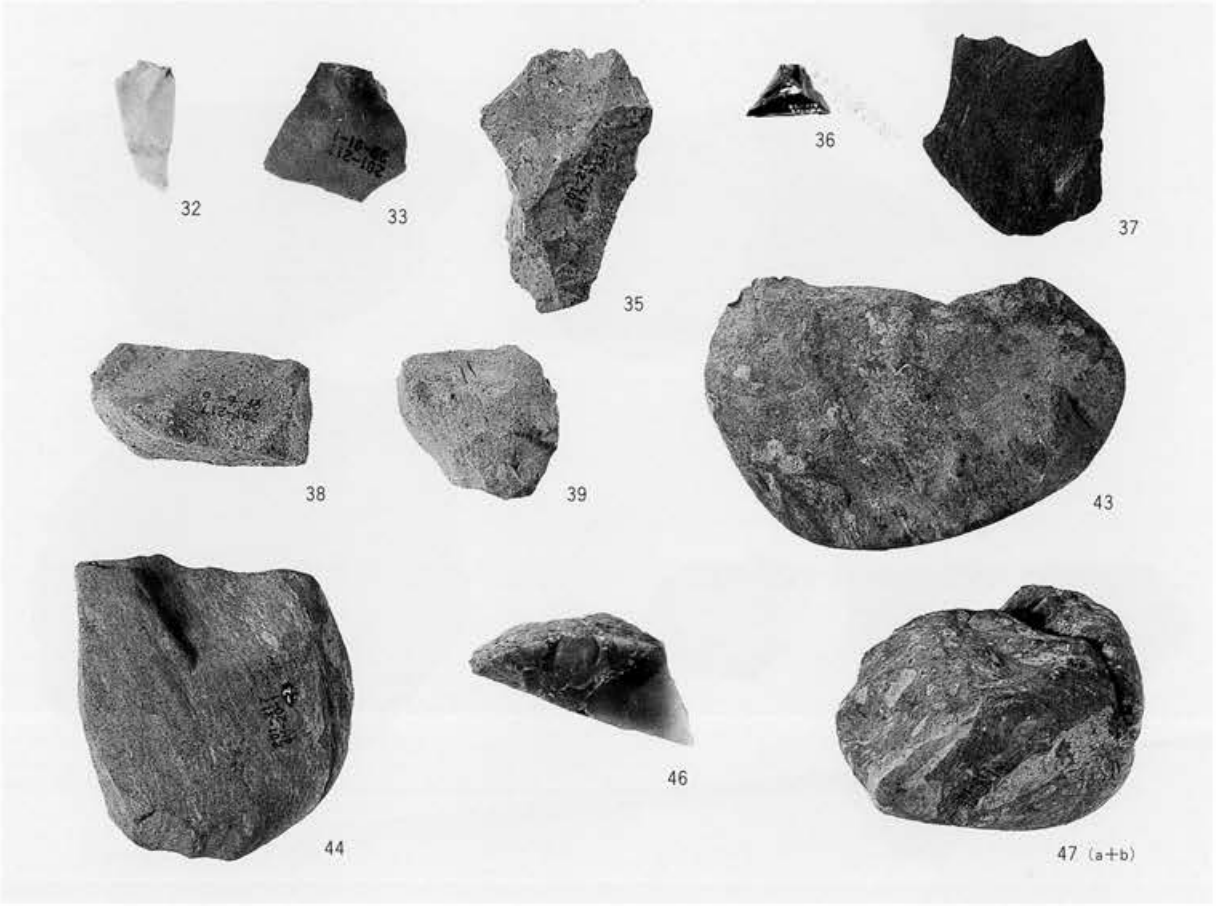
地点外・単独出土遺物（1）


16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31


16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

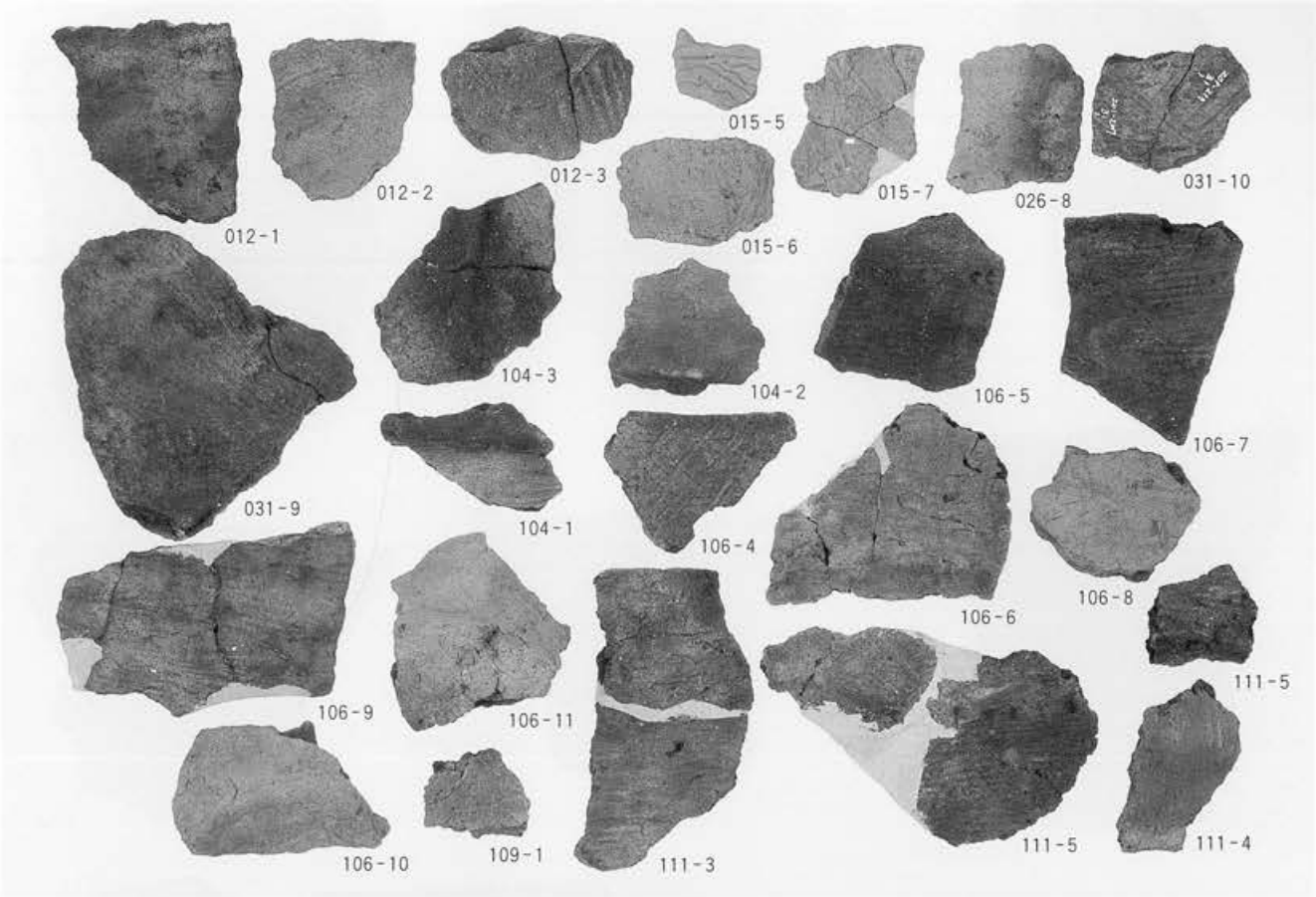
地点外・単独出土遺物（2）

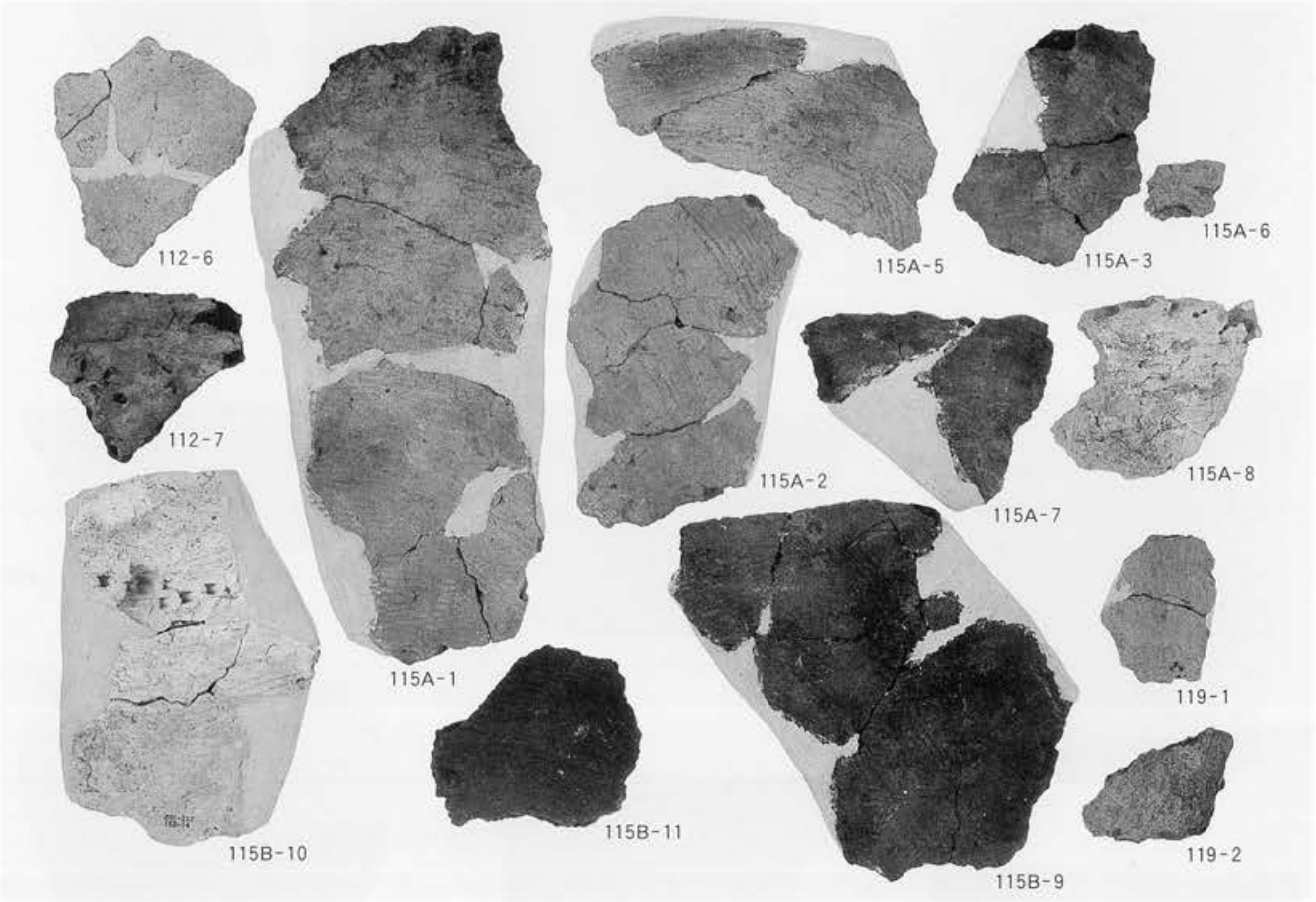




地点外・単独出土遺物（3）

地点外・単独出土遺物（4）


012-1
012-2
012-3
015-5
015-7
026-8
031-10
015-6
104-3
104-2
106-5
106-7
031-9
104-1
106-4
106-6
106-8
111-5
106-9
106-11
111-3
111-5
111-4
106-10
109-1


112-6
115A-5
115A-3
115A-6
112-7
115A-2
115A-7
115A-8
115A-1
119-1
115B-10
115B-11
115B-9
119-2

炉穴出土土器

015-4

115B-4

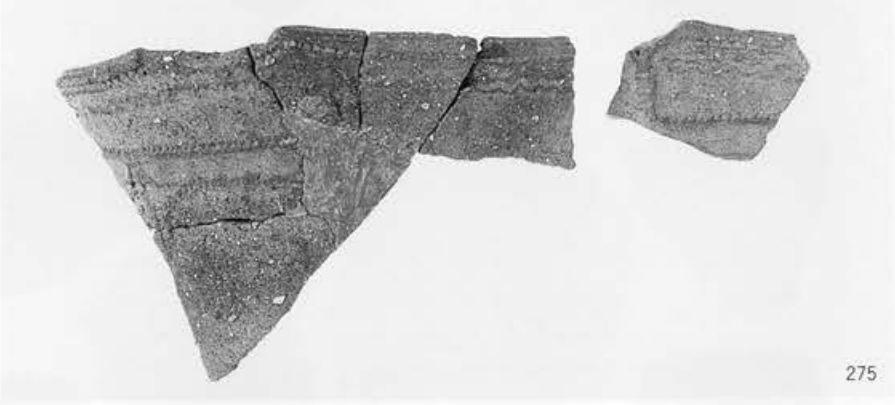
111-2

050A-1

050B-2

050B-3

045-1


275

71

335

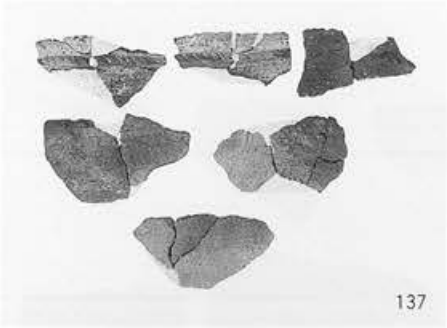
409

400

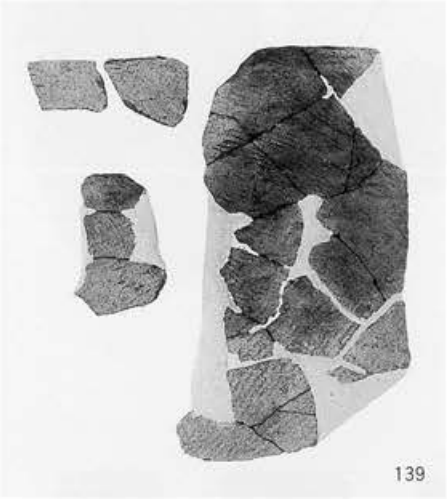
399

445

縄文土器（1）


137

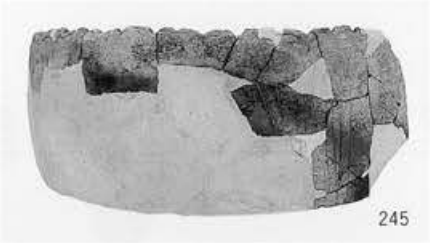
138


139

167

135

136


245

272

318

319

377

390

392

393

394

395

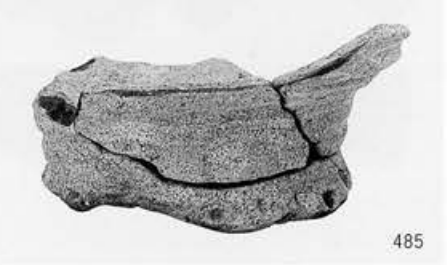
410

441

442

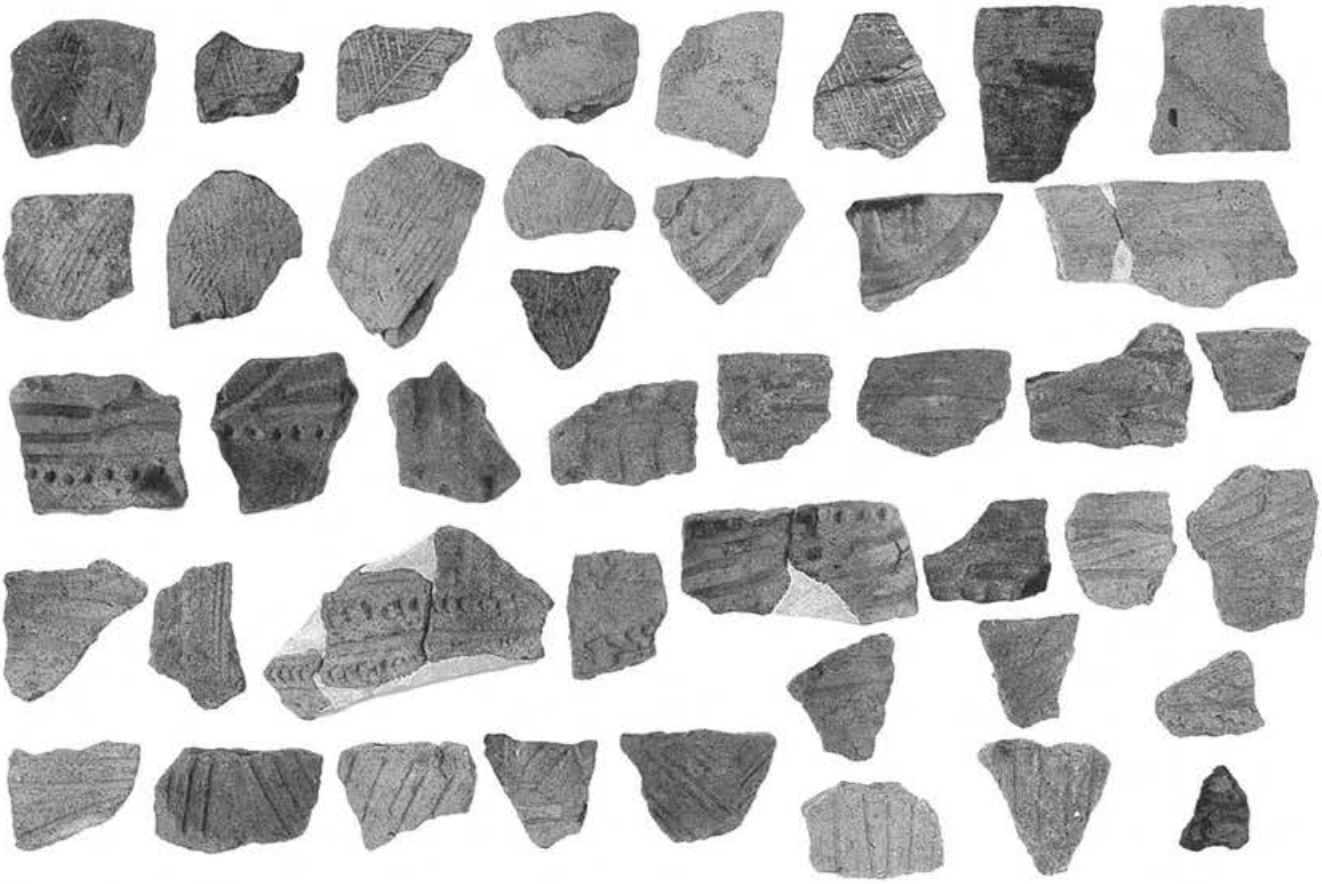
443

444


485

縄文土器（2）

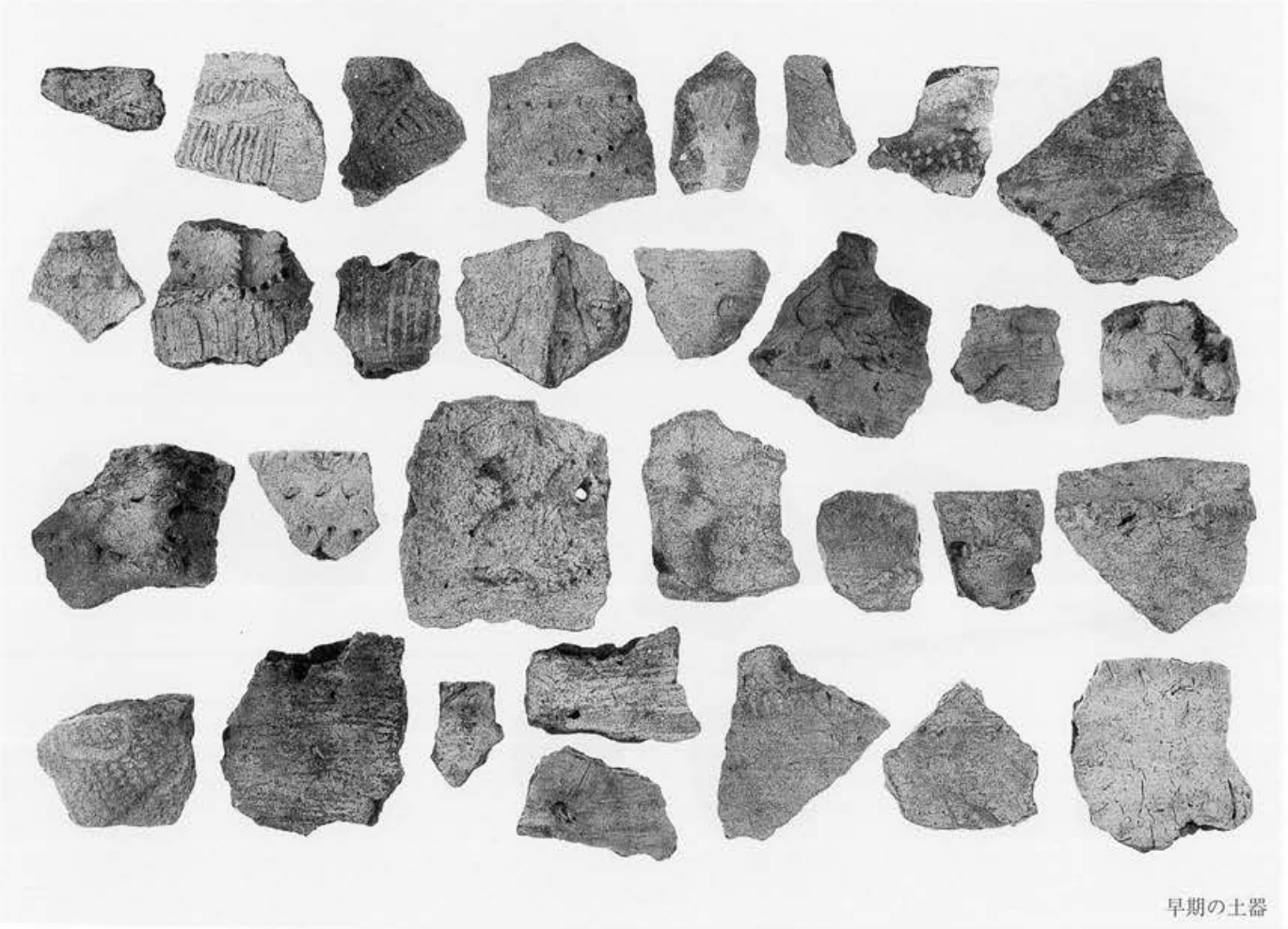
早期の土器



早期の土器

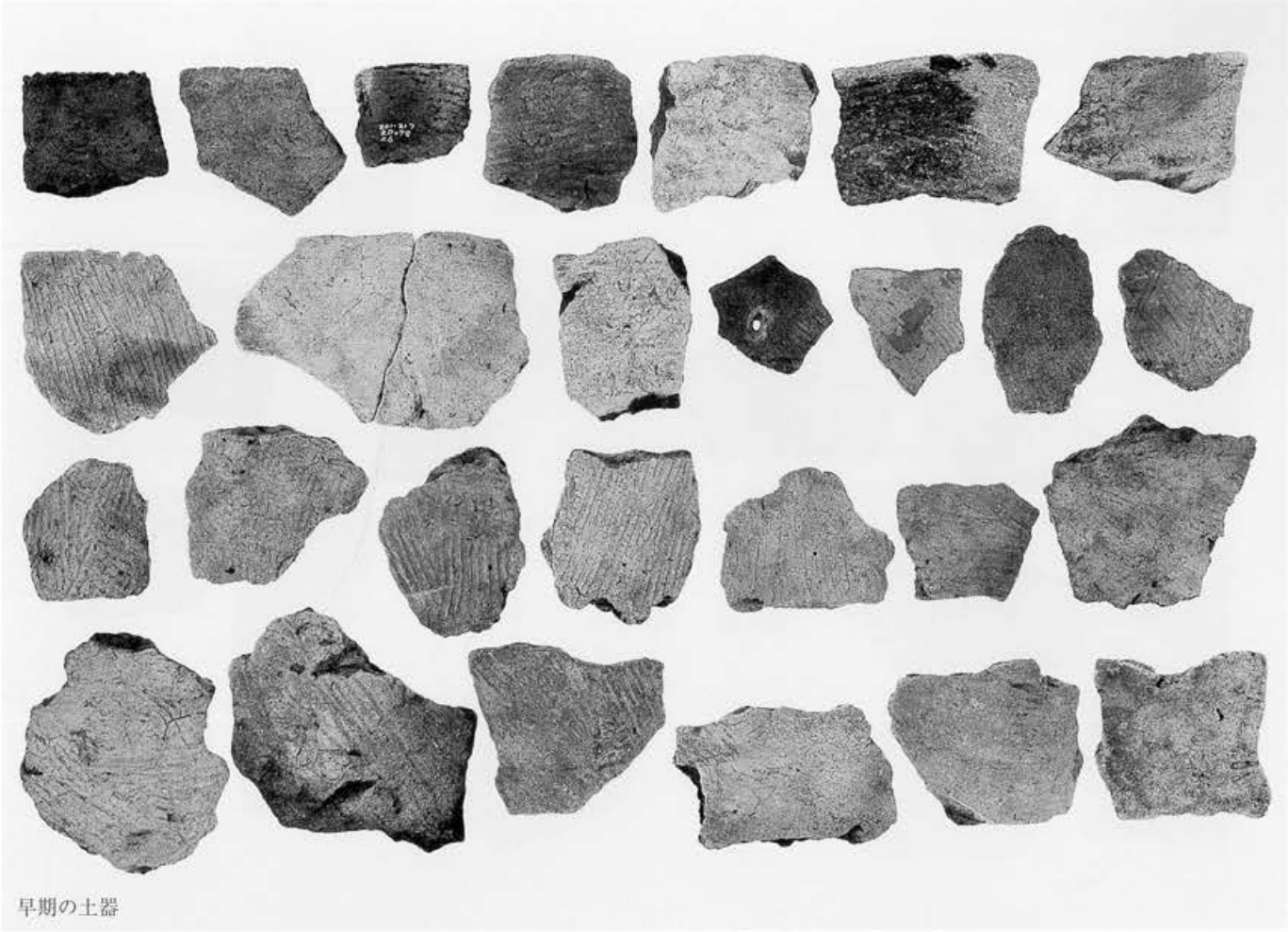
縄文土器（3）

早期の土器

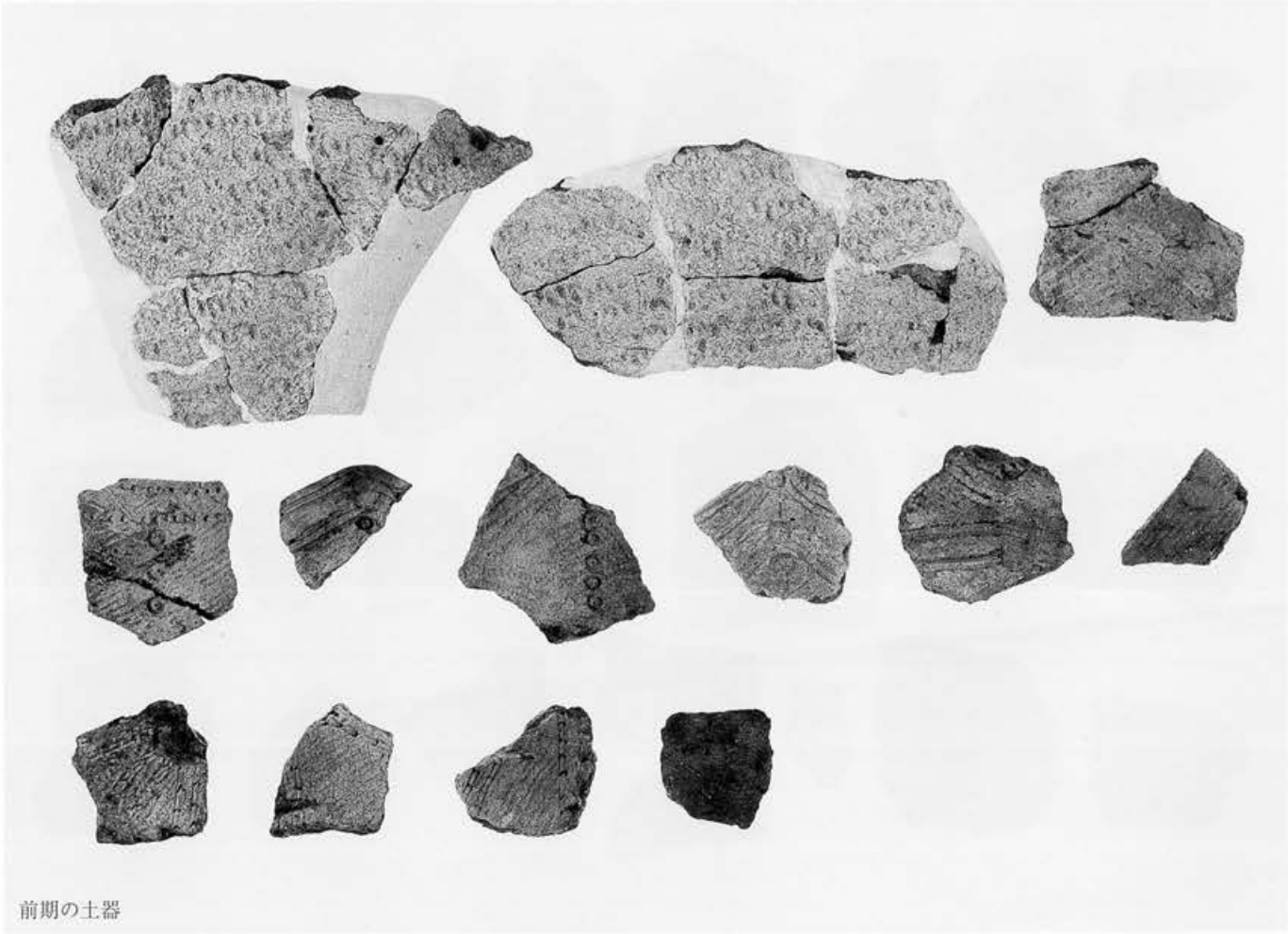


早期の土器

縄文土器（4）

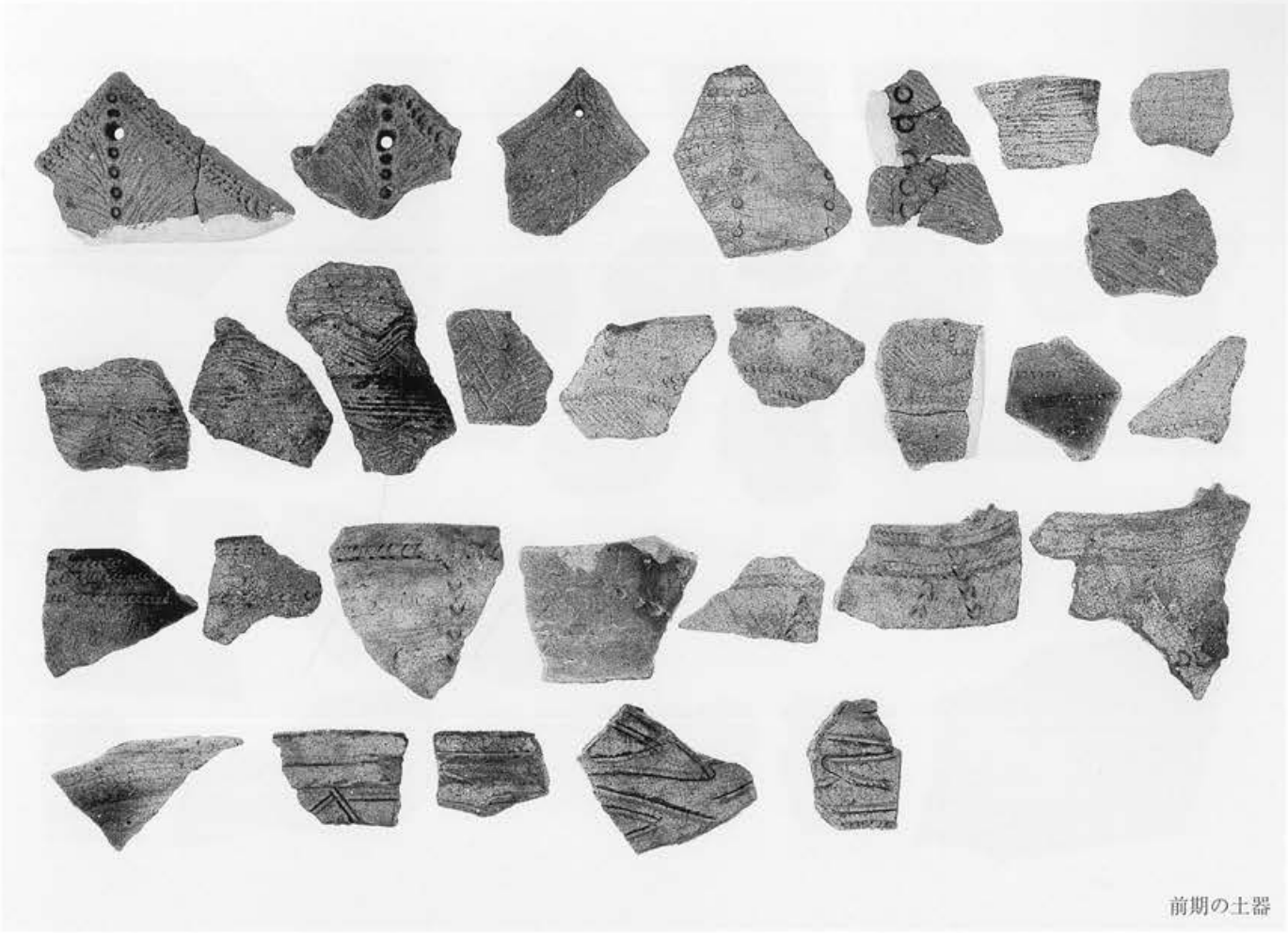


早期の土器

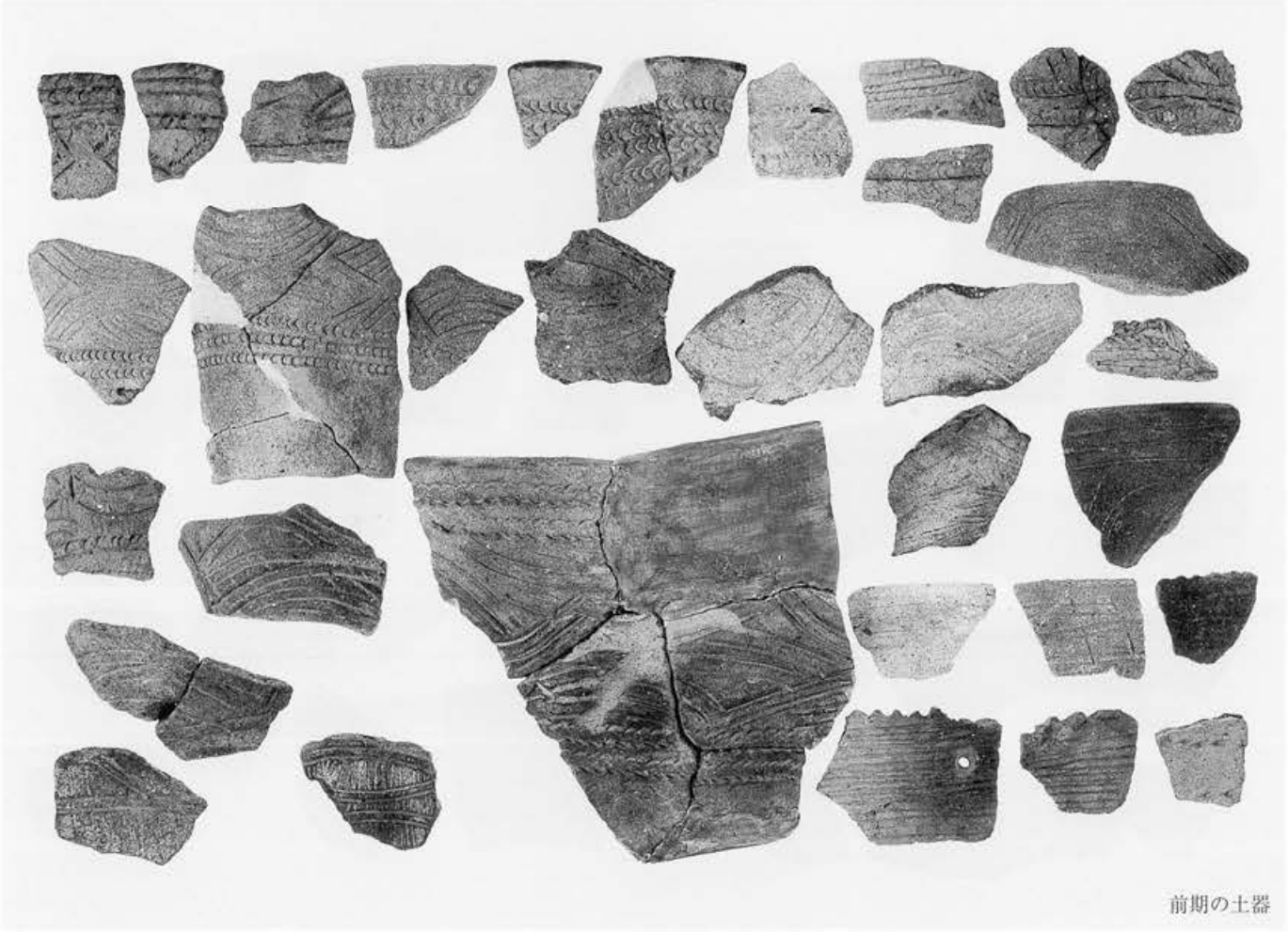


前期の土器

縄文土器（5）

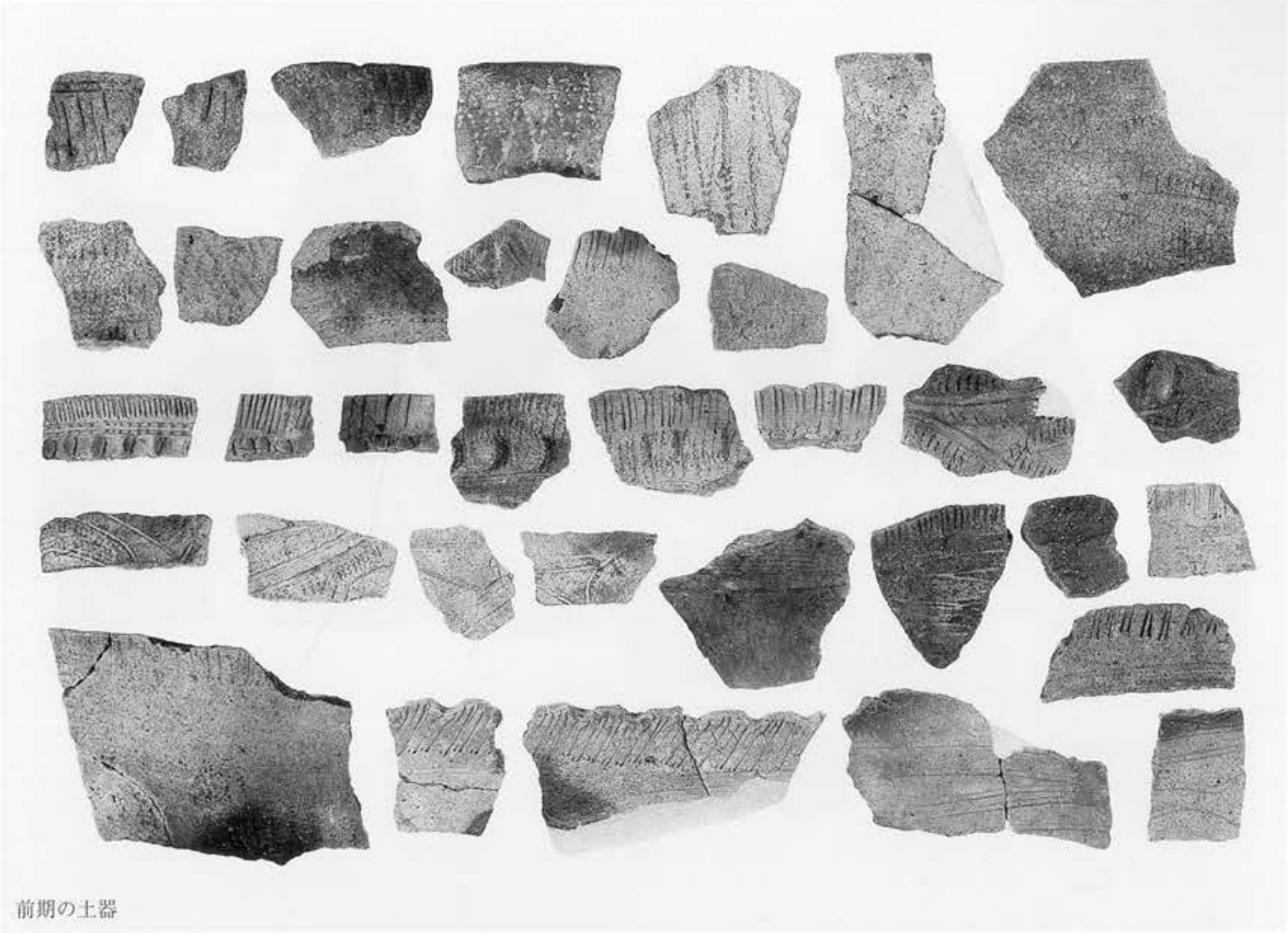


前期の土器

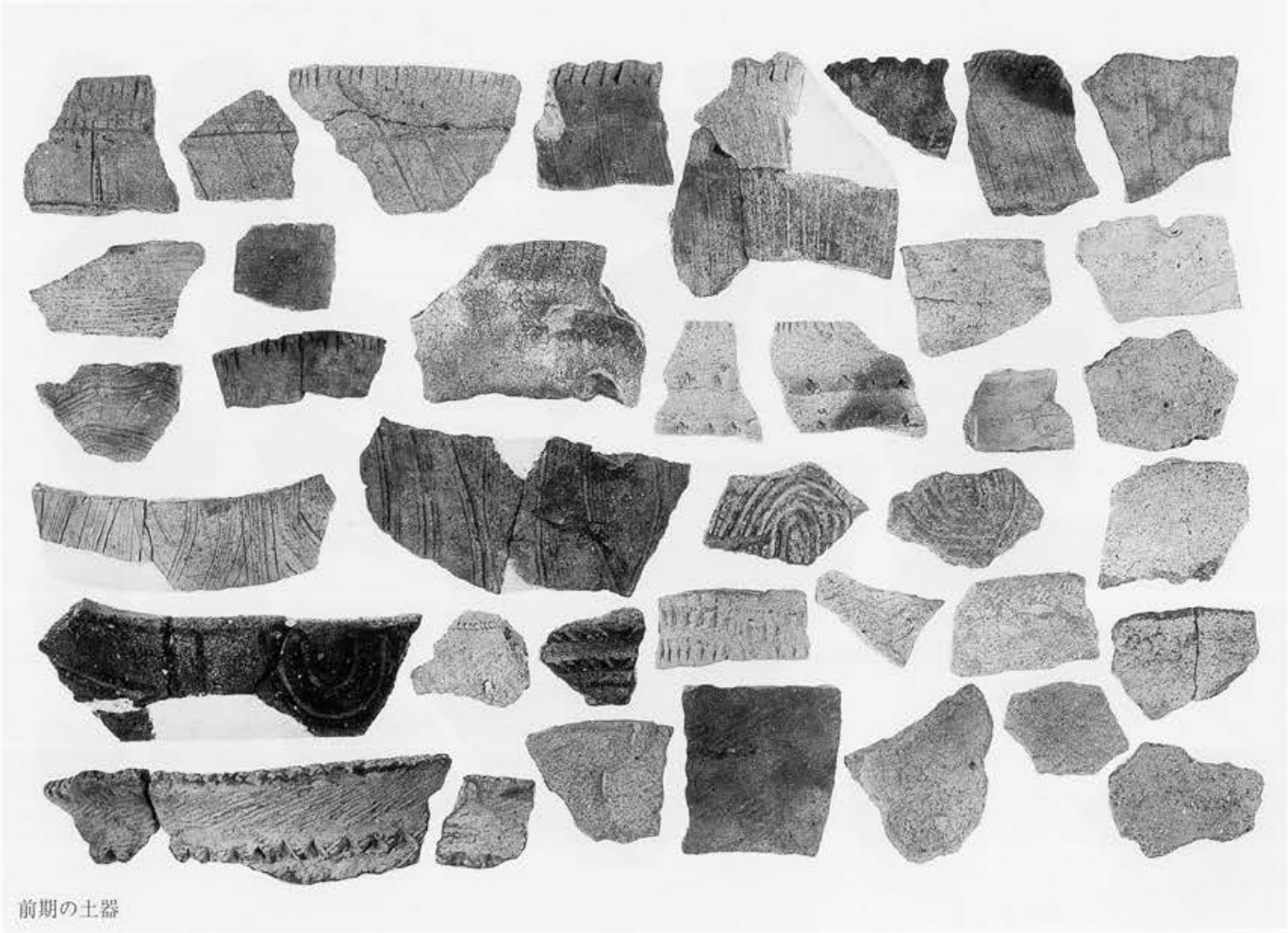


前期の土器

縄文土器（6）

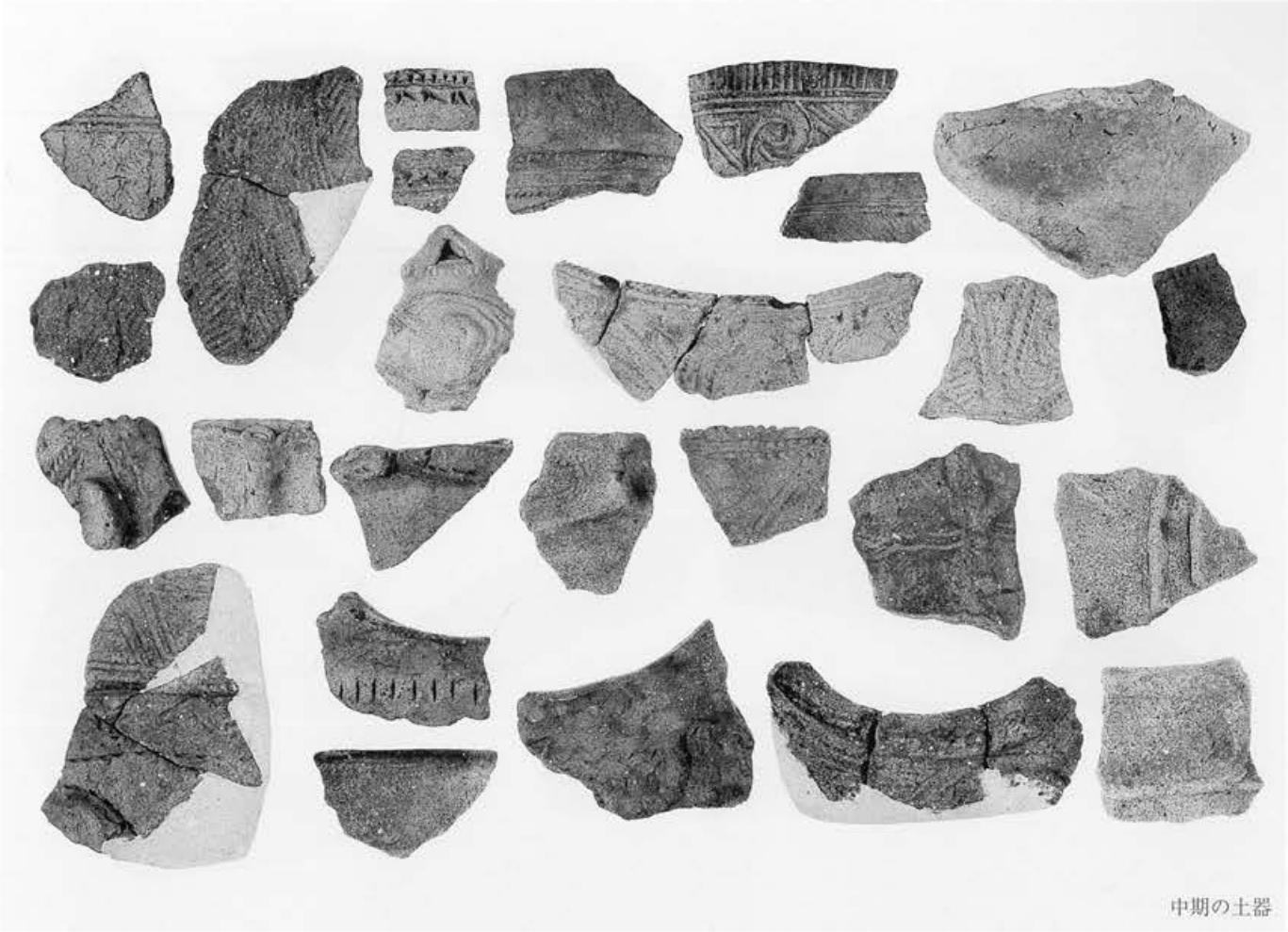


前期の土器

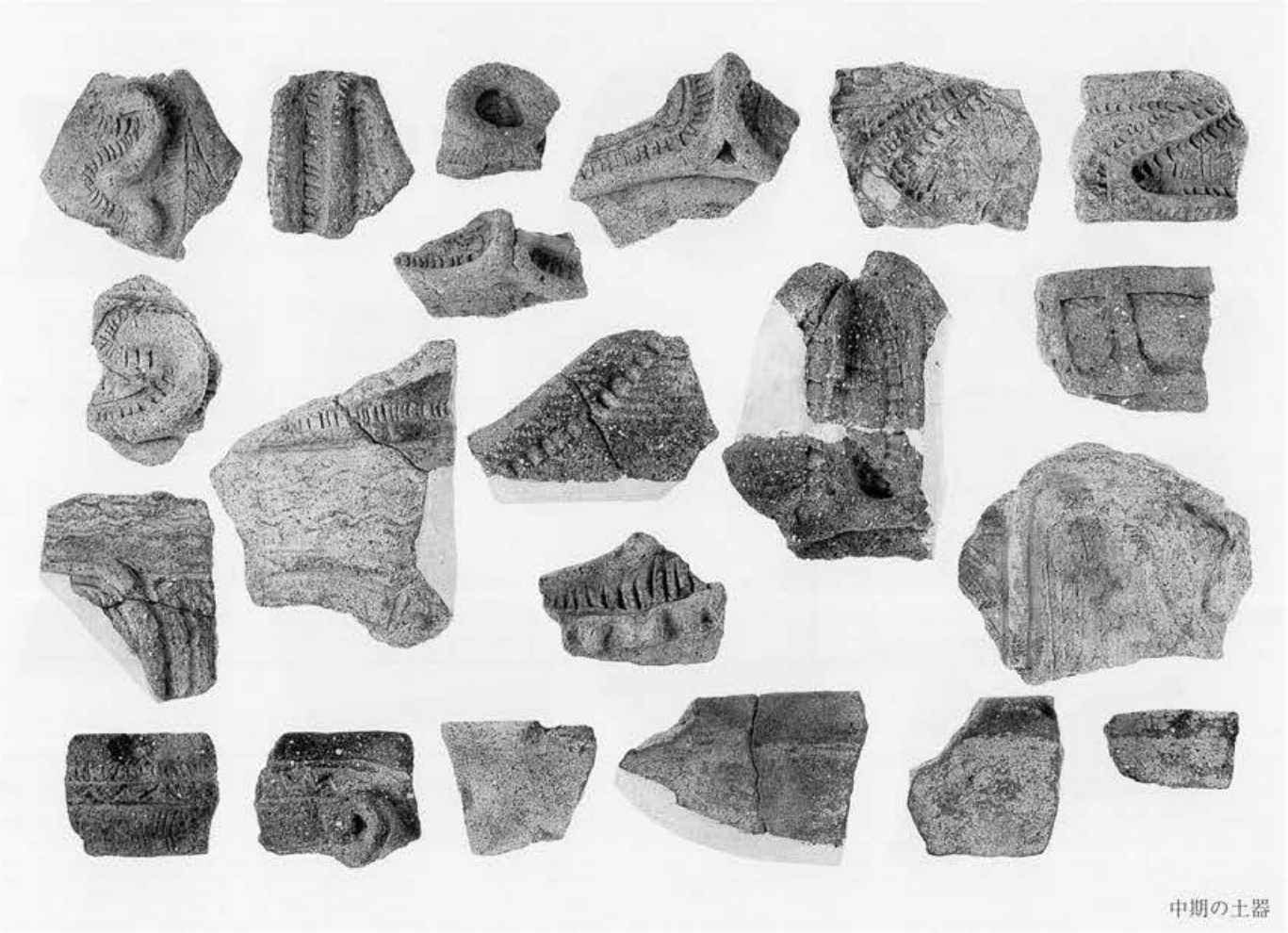


前期の土器

縄文土器（7）



中期の土器



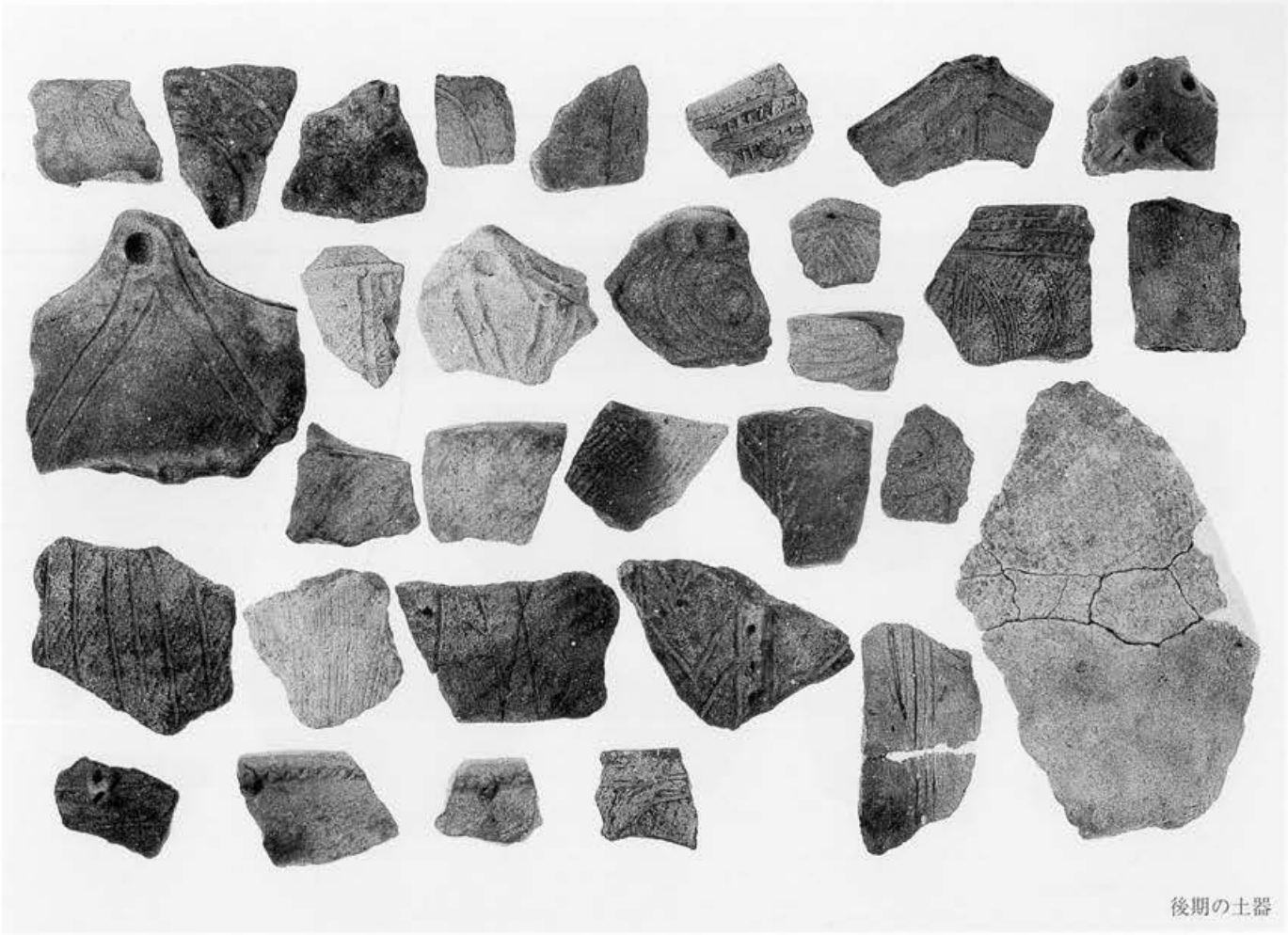
中期の土器

縄文土器（8）

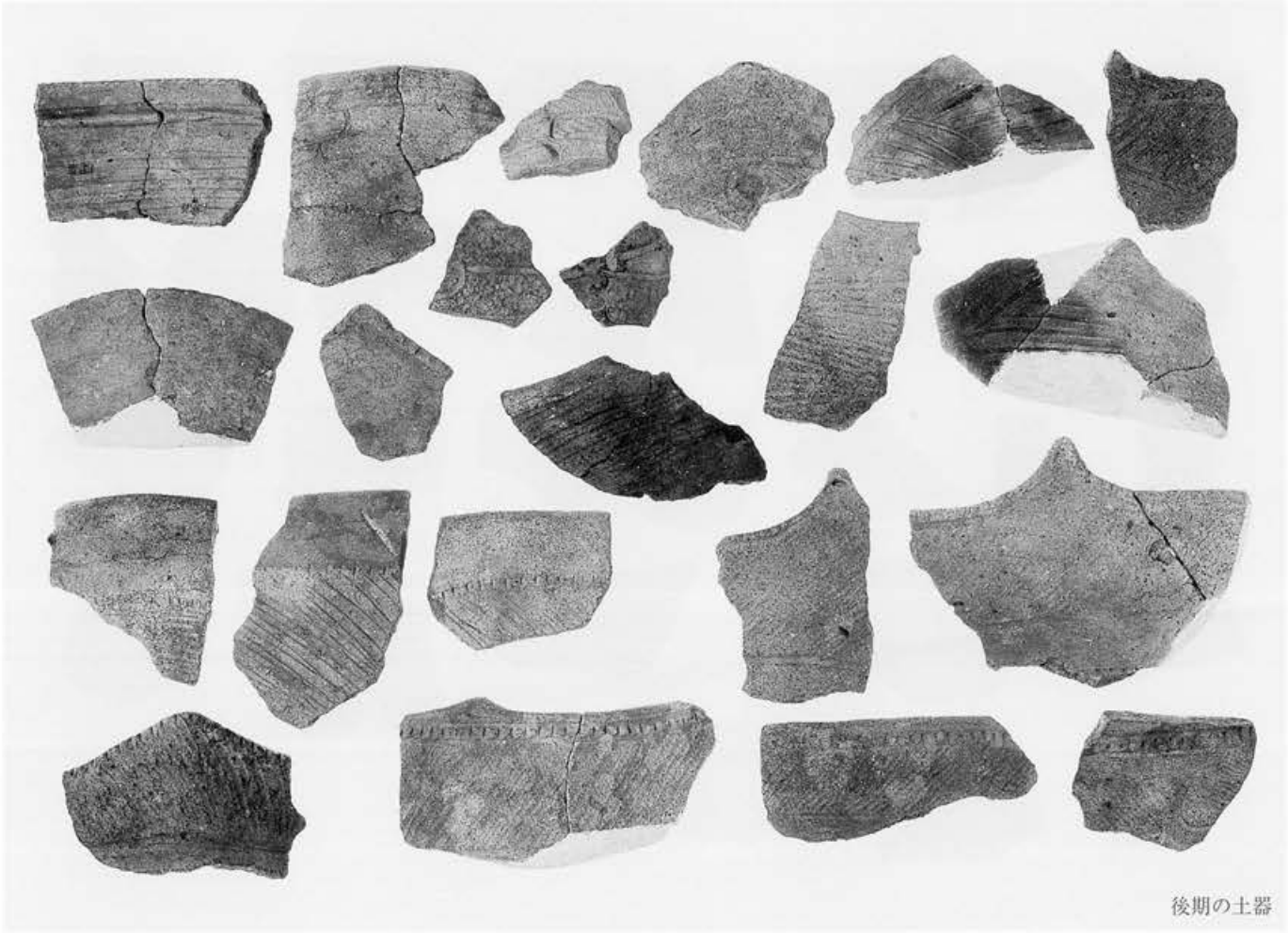
中期の土器

中期の土器

縄文土器（9）

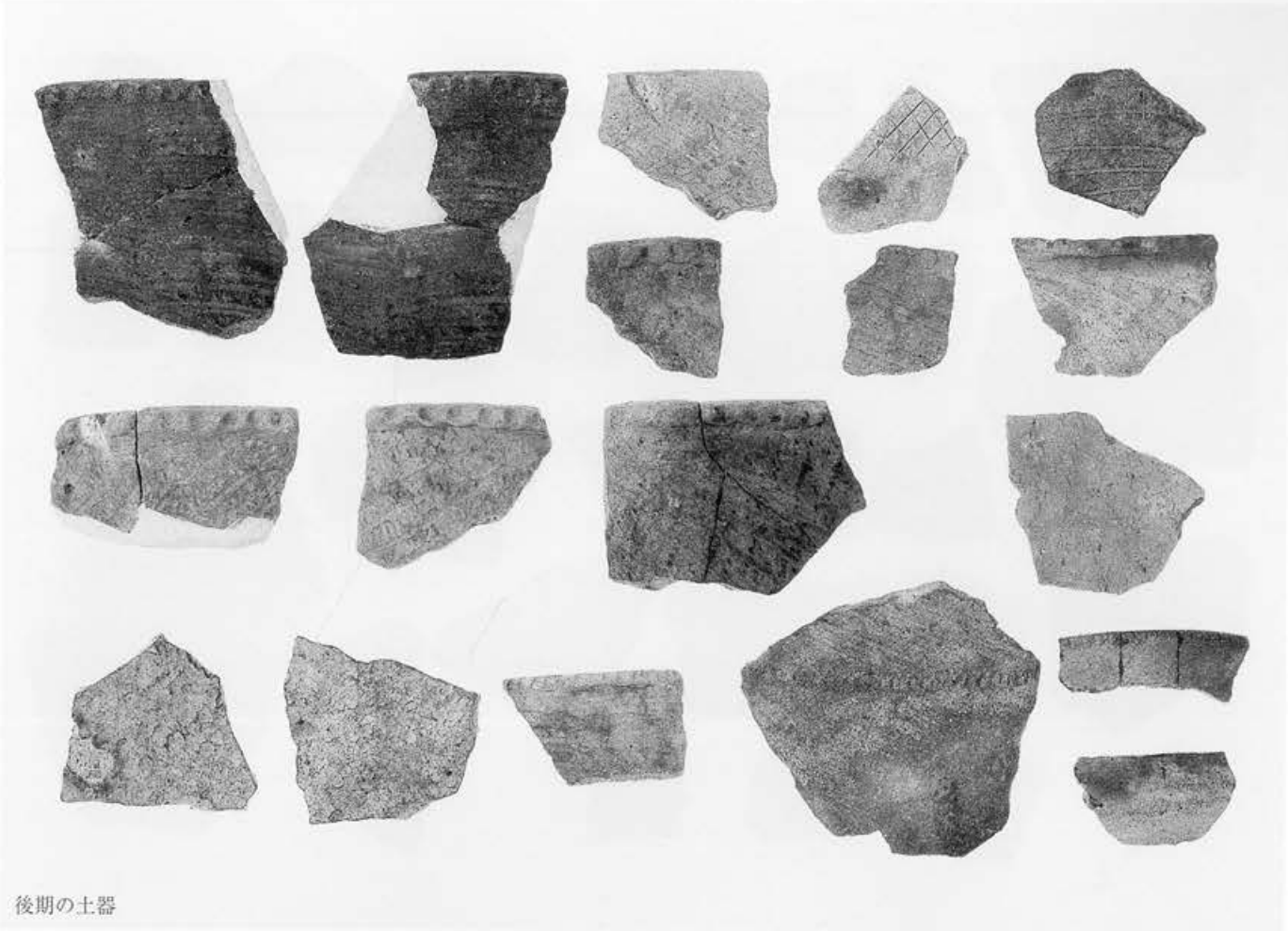


後期の土器

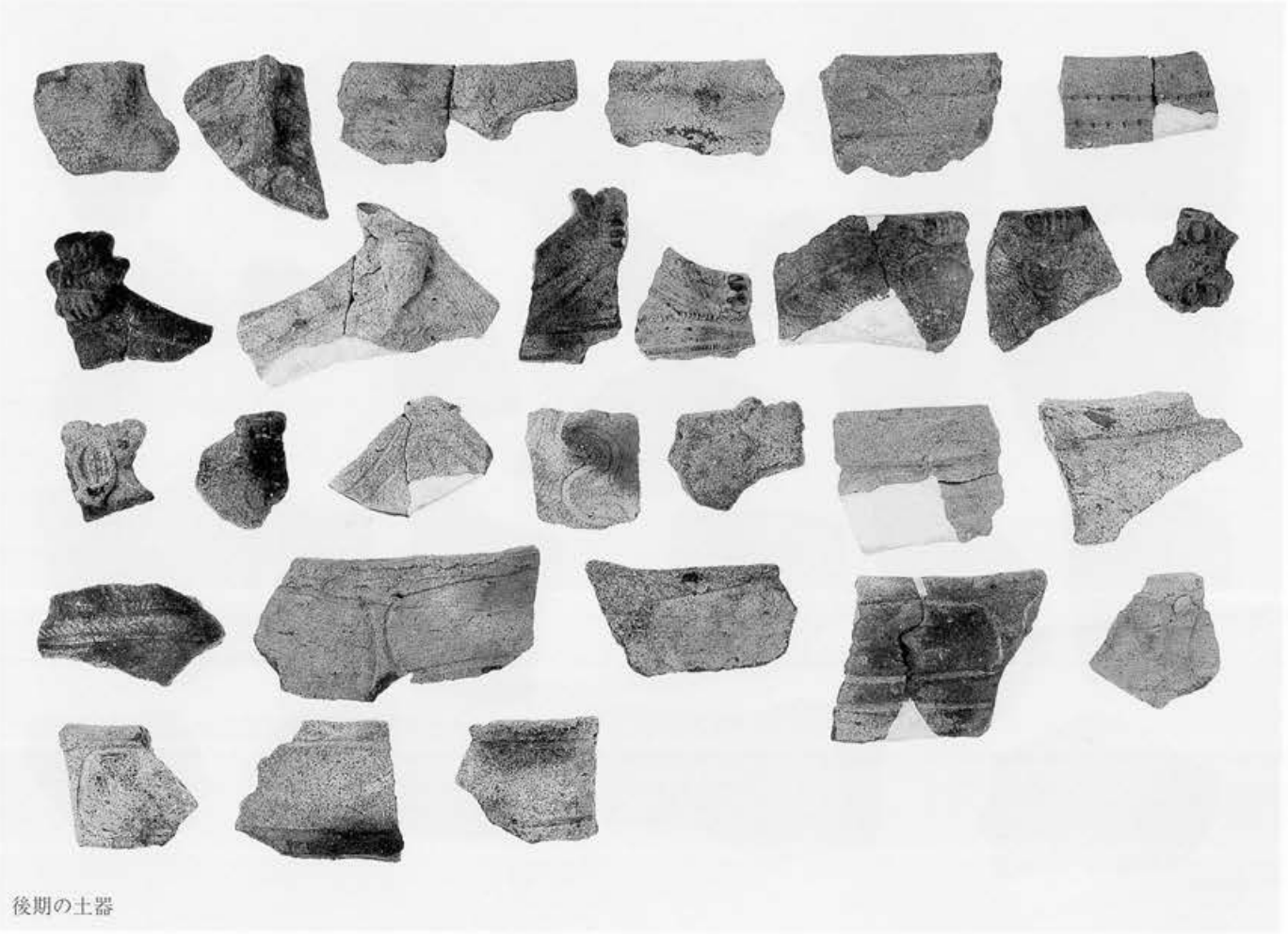


後期の土器

縄文土器（10）

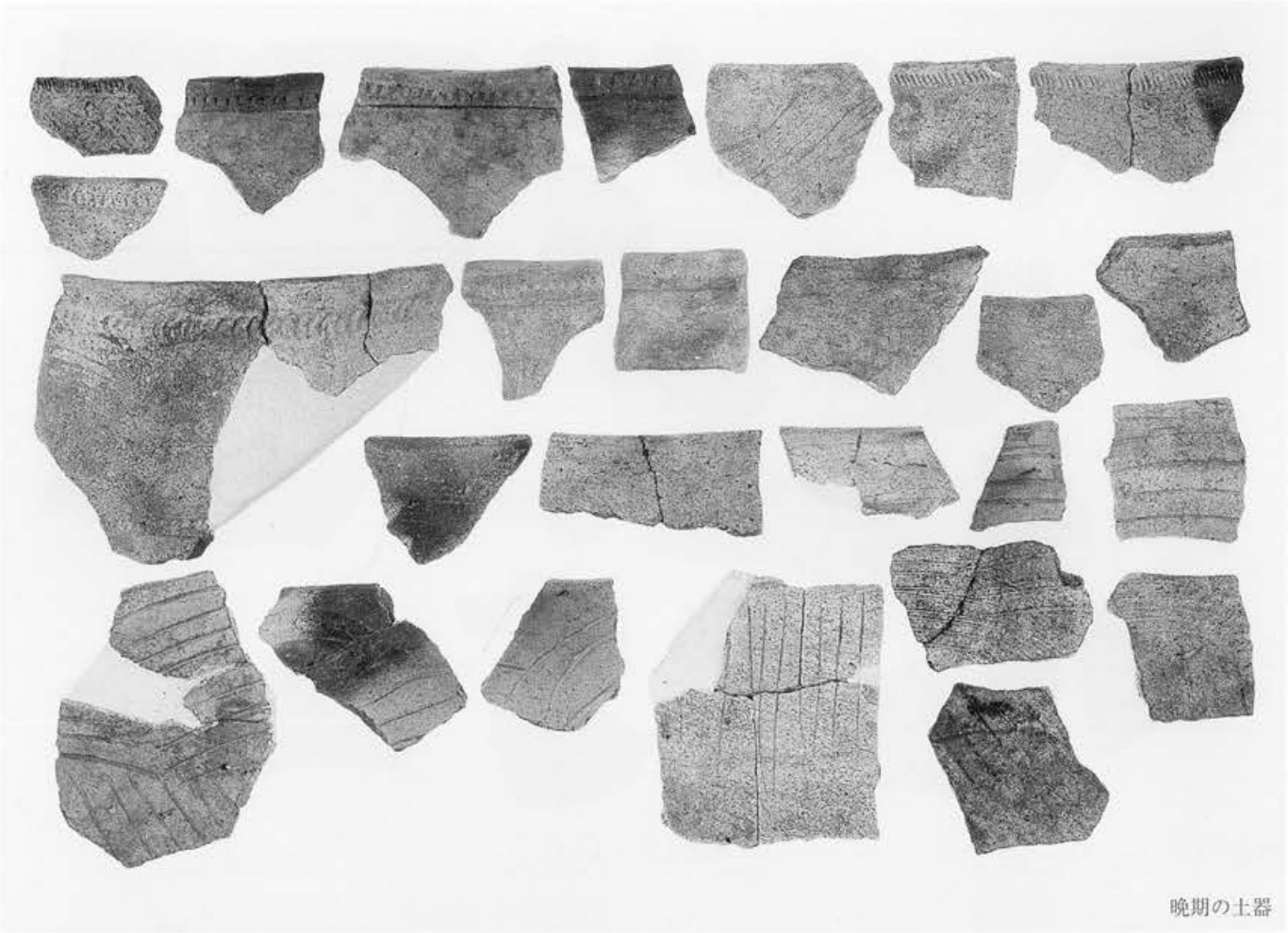


後期の土器

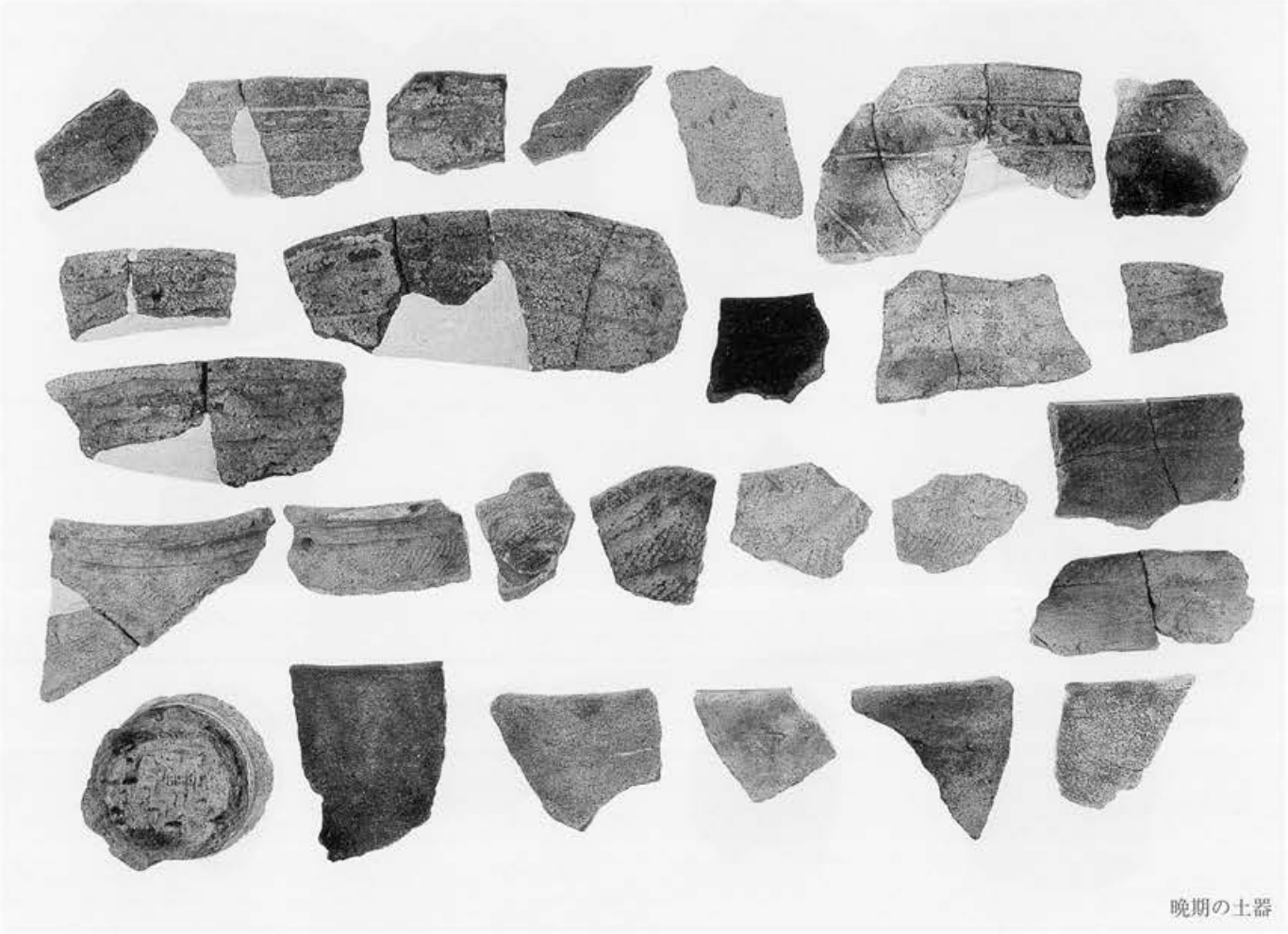


後期の土器

縄文土器（11）

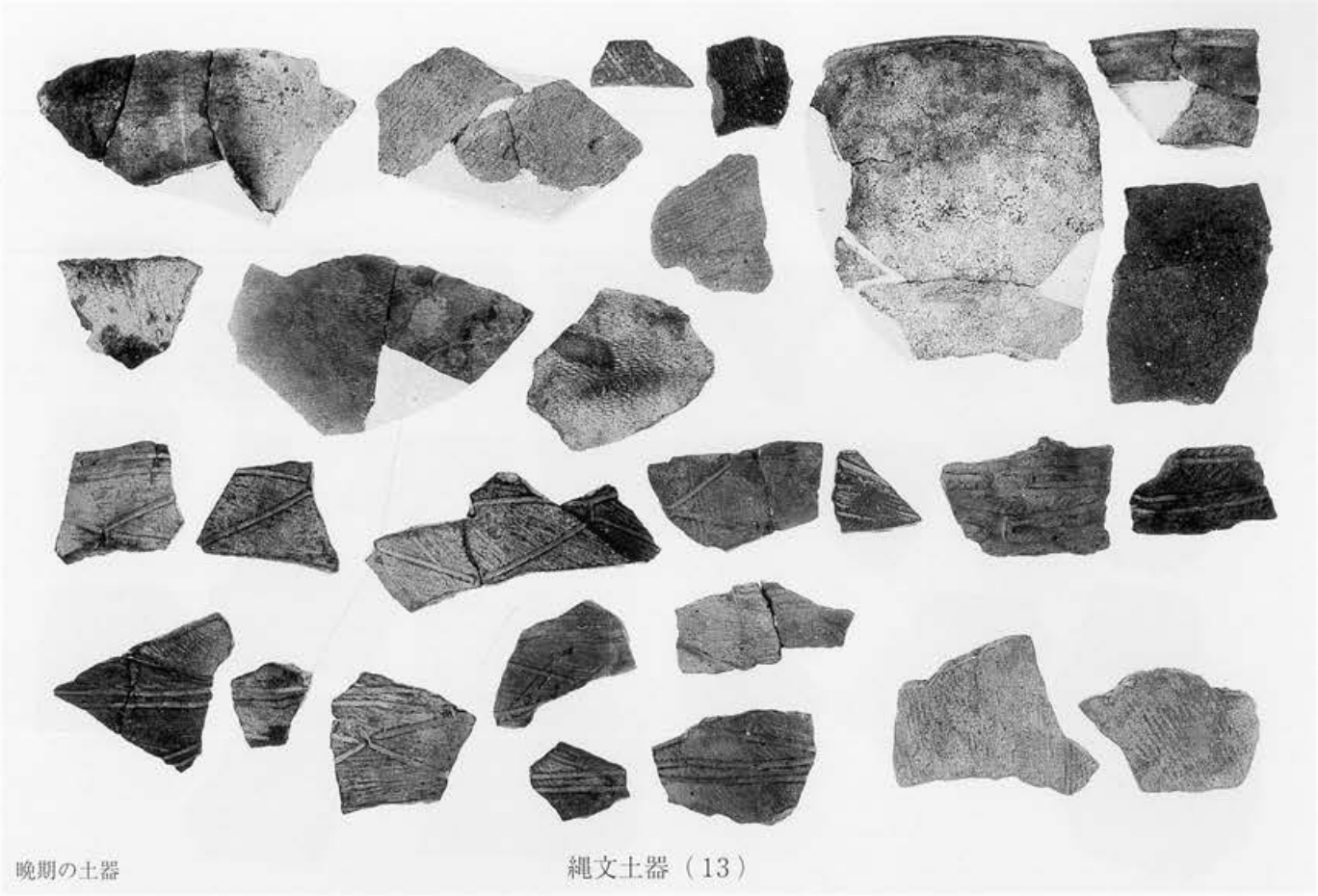


晩期の土器



晩期の土器

縄文土器（12）

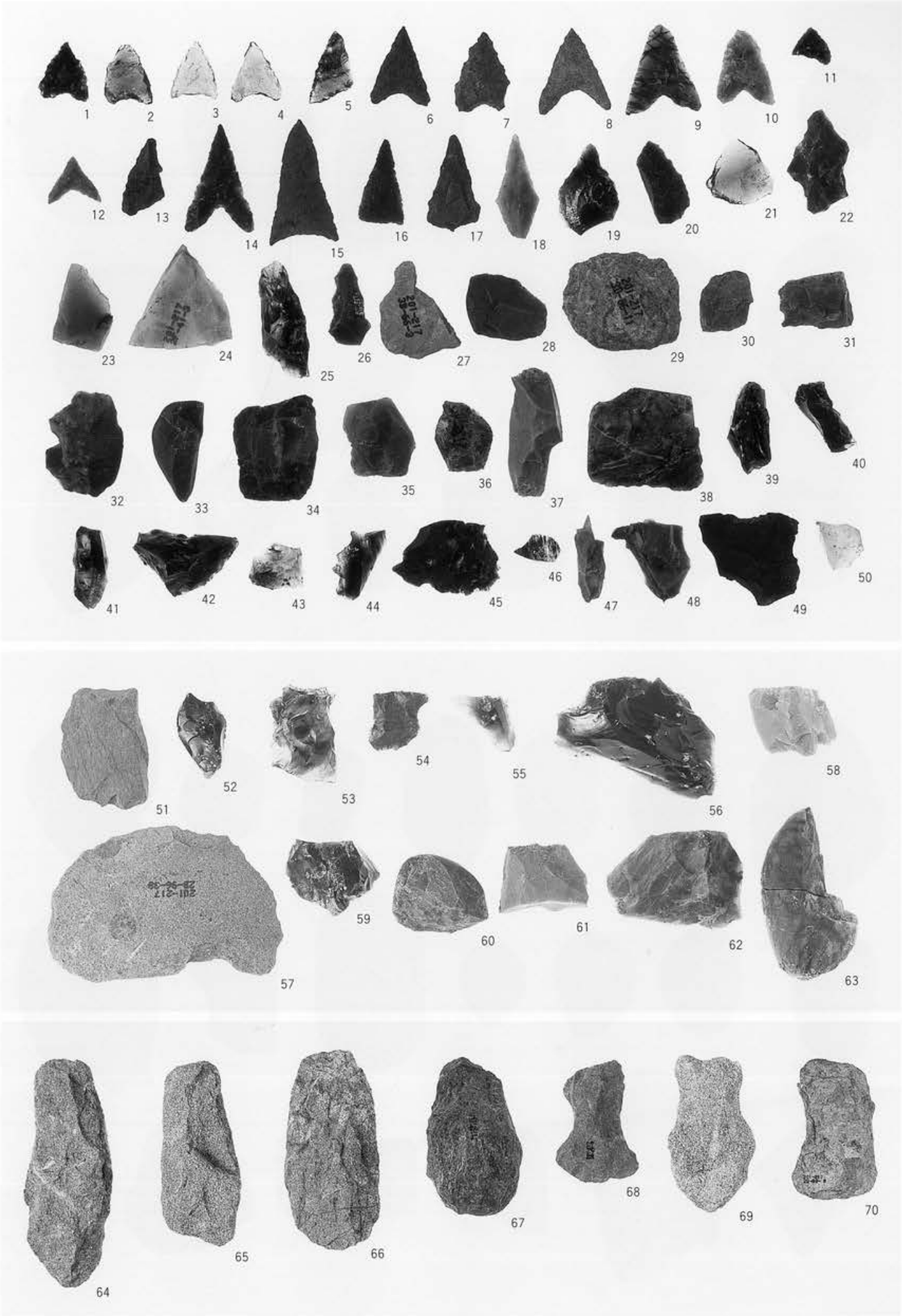


晩期の土器　　縄文土器（13）

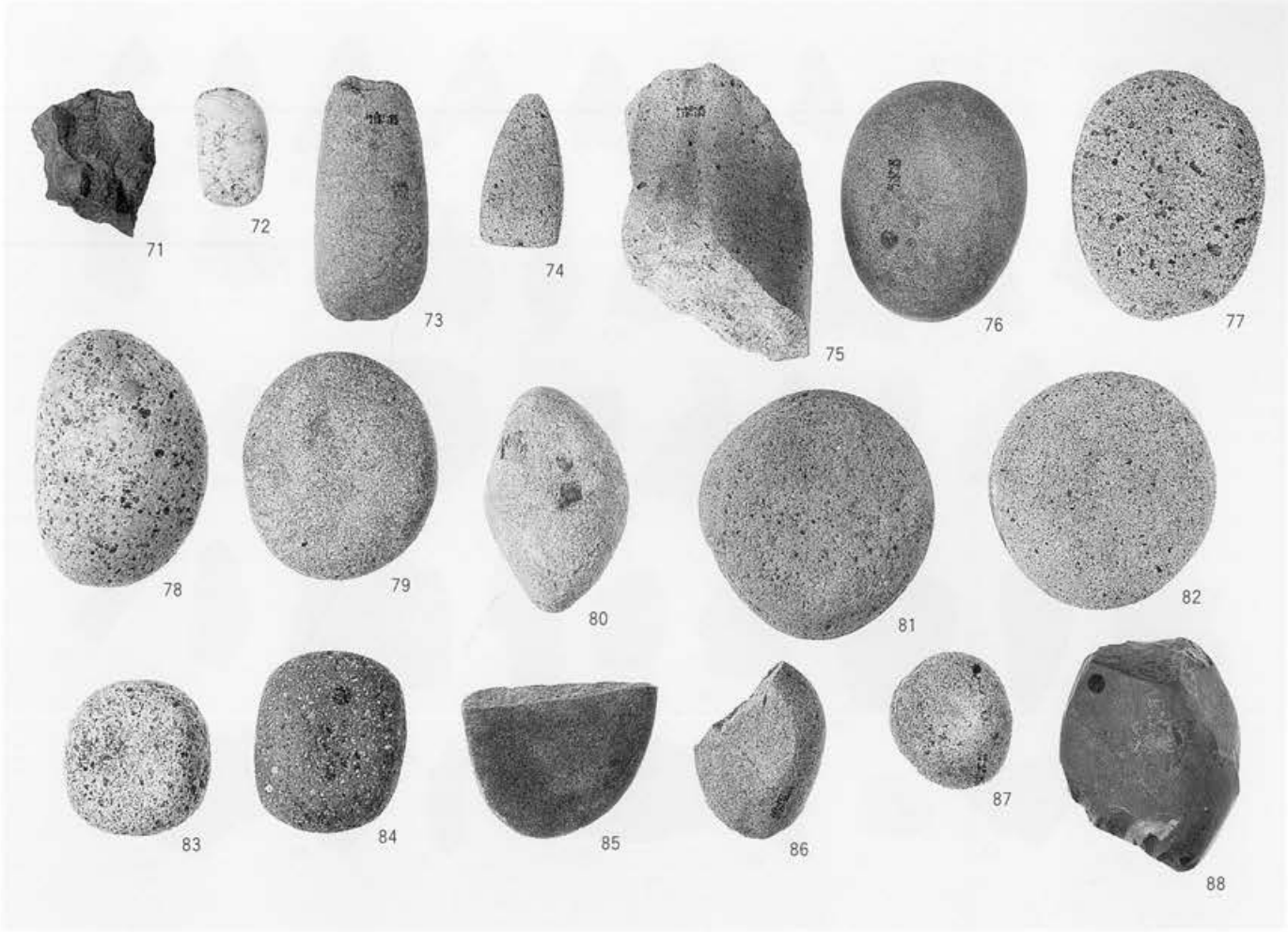
土版

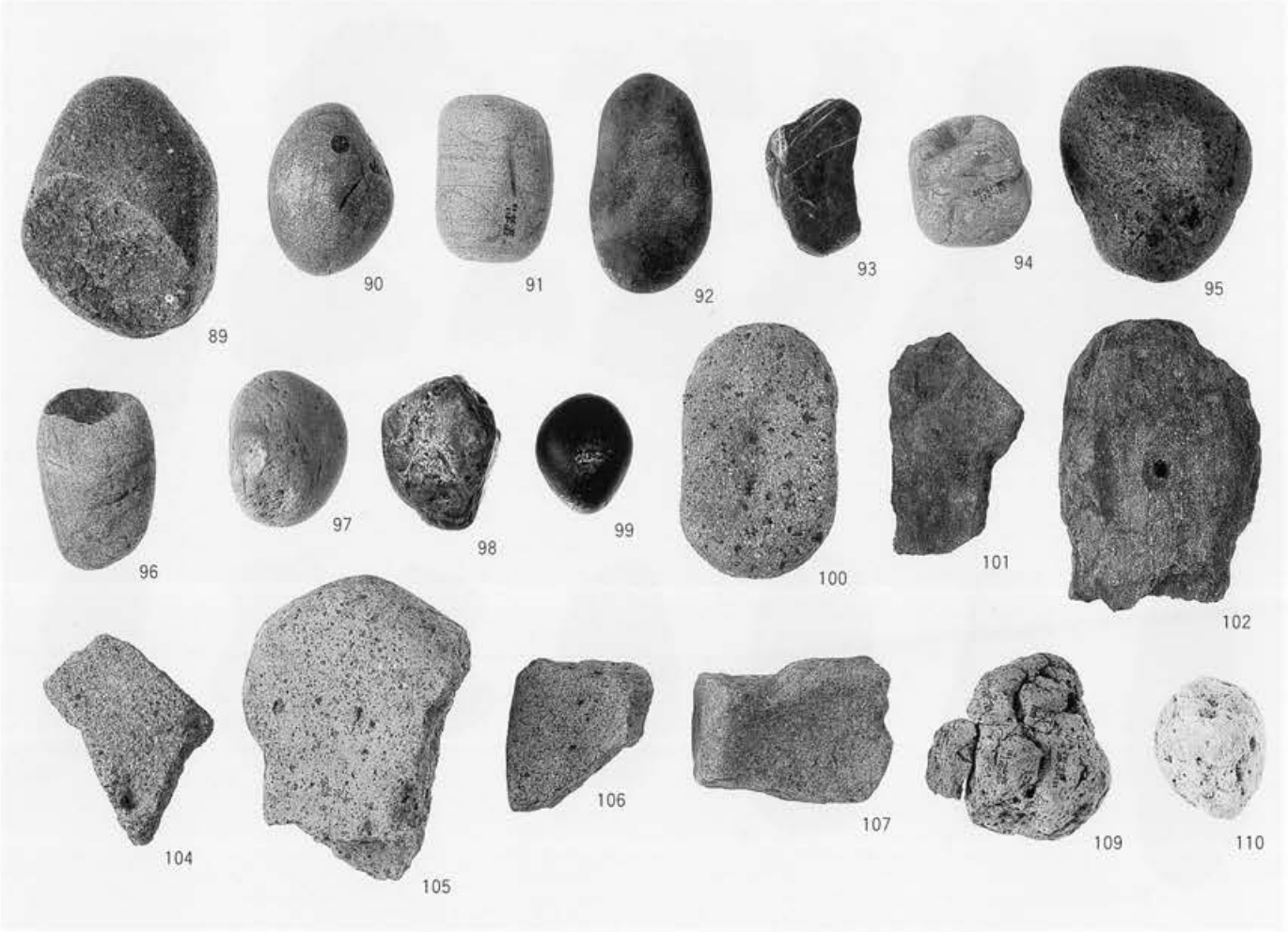
玦状耳飾　　有孔円板

土器片錘

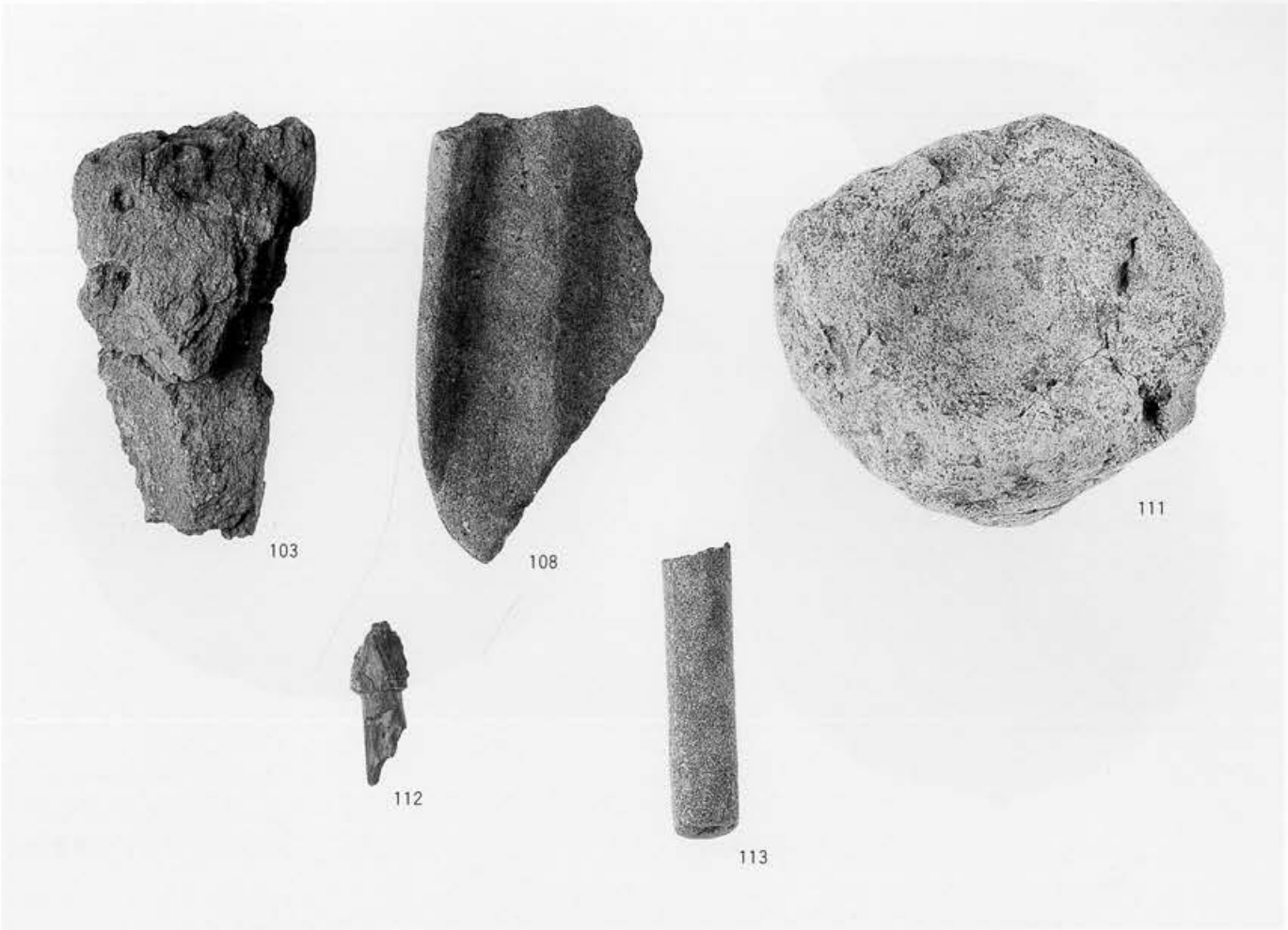


縄文時代石器（1）


71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88


89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
104
105
106
107
109
110

縄文時代石器（2）



縄文時代石器（3）

21号墳-10

21号墳-15

22号墳-1

22号墳-4

22号墳-9

22号墳-2

22号墳-3

22号墳-5

古墳出土土器（1）

23号墳-1

23号墳-2

23号墳

23号墳

1号墳-1

1号墳-2

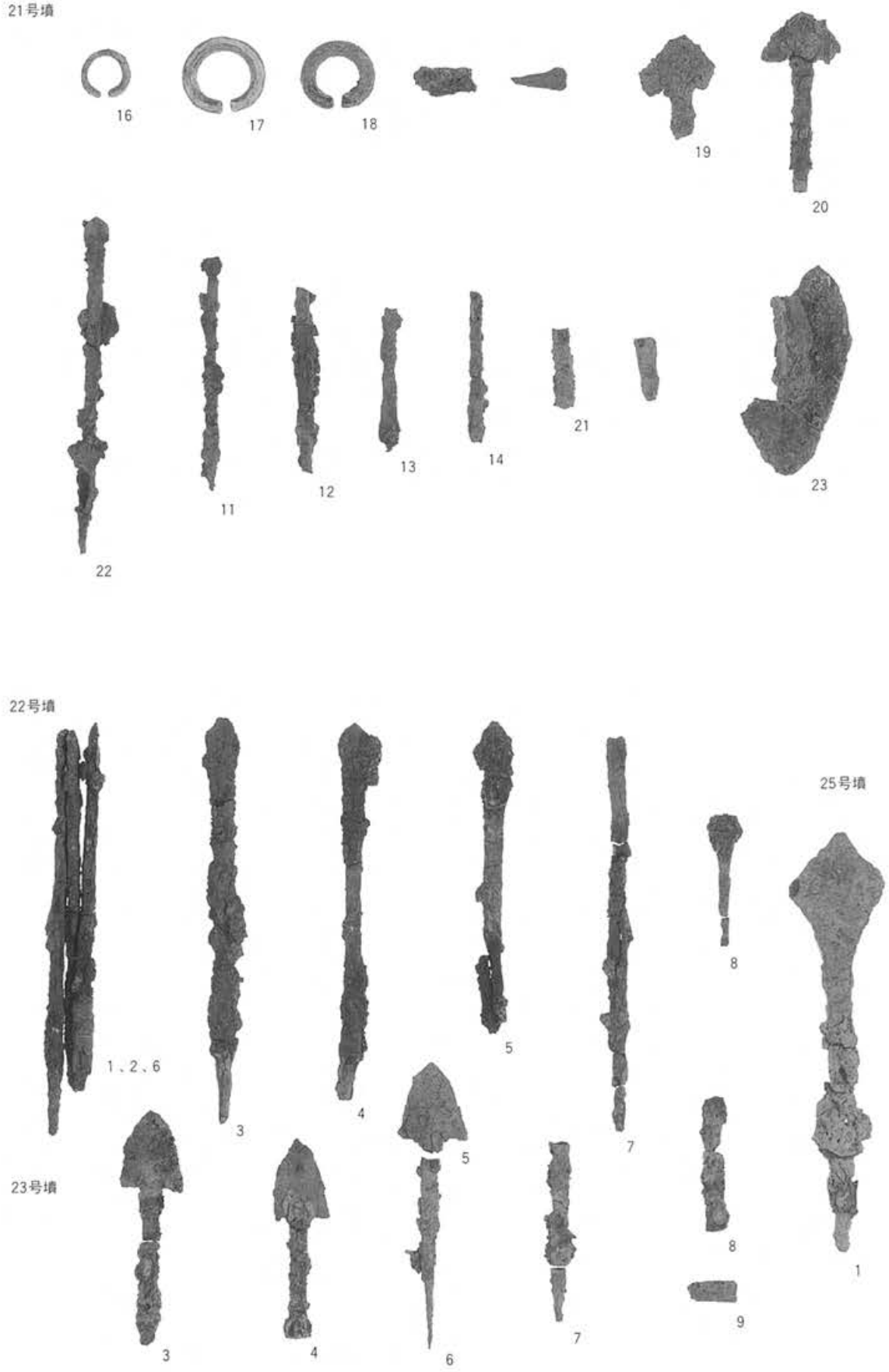
1号墳-5

1号墳-3

1号墳-4

1号墳-6

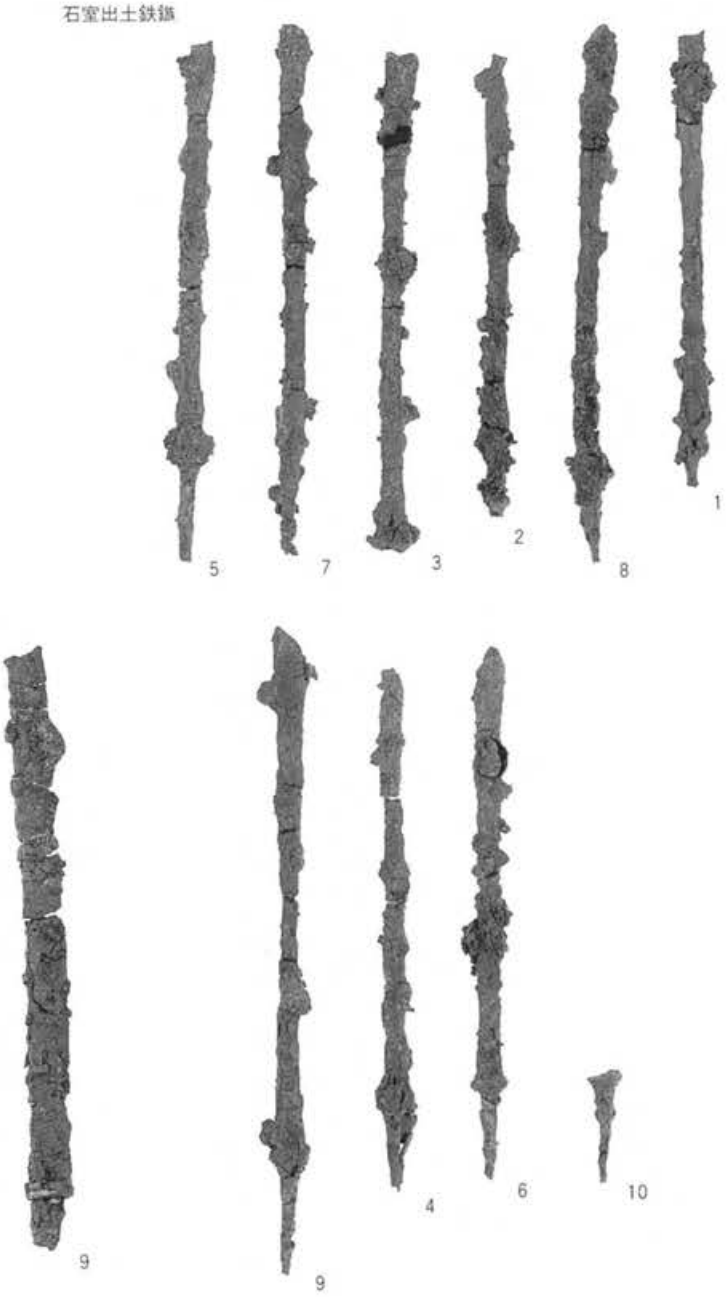
古墳出土土器（2）


21号墳
16
17
18
19
20
22
11
12
13
14
21
23
22号墳
1、2、6
3
4
5
7
8
25号墳
1
23号墳
3
4
5
6
7
8
9

古墳出土鉄製品

周溝出土鉄刀

石室出土鉄鏃

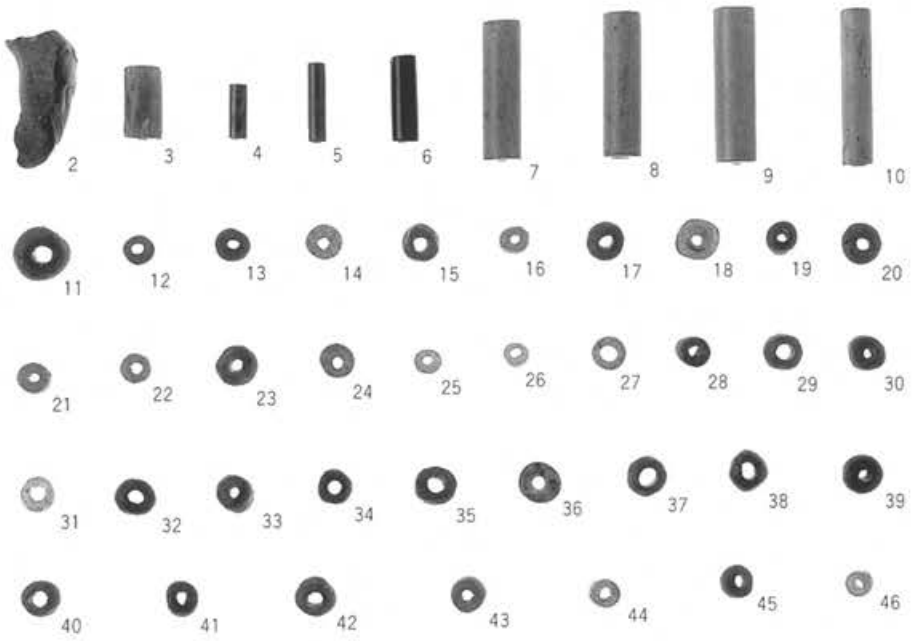


鈎

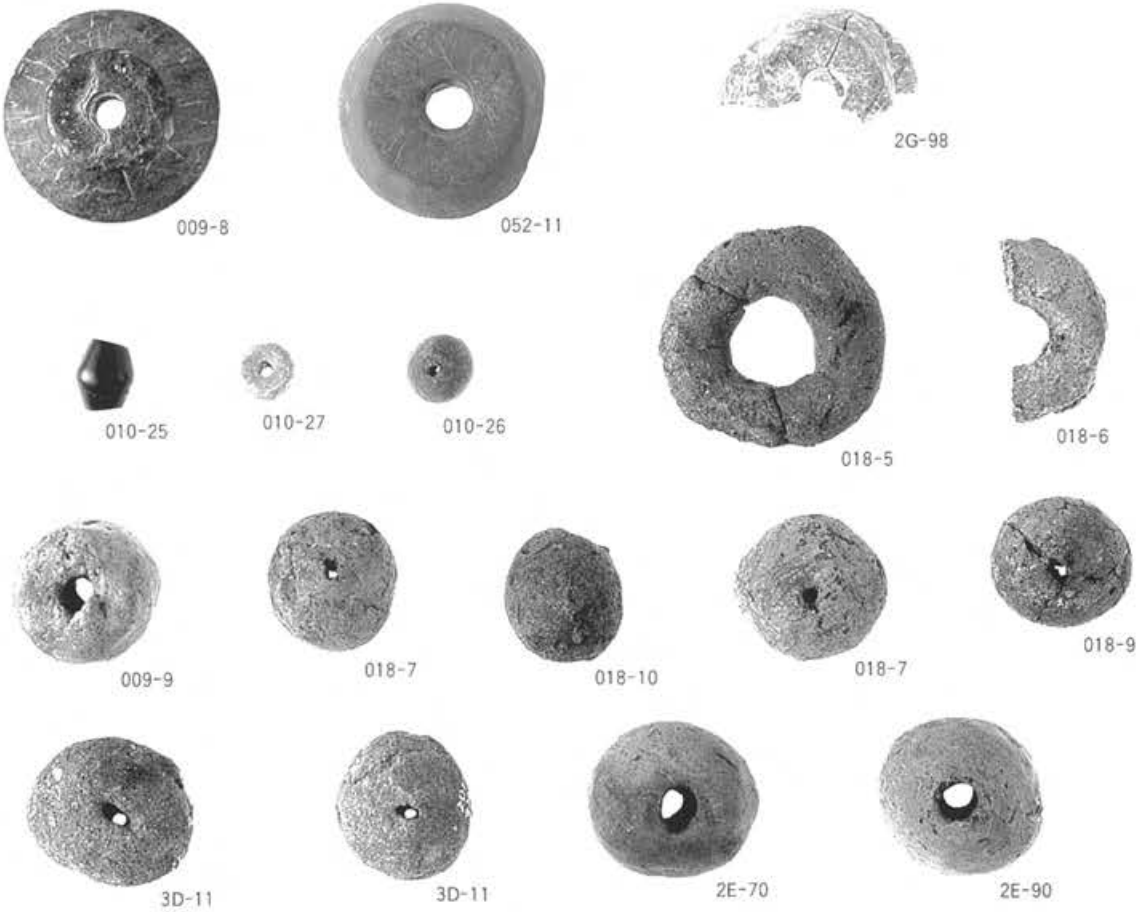
1 号墳出土鉄製品

（原寸大）

24号墳出土七獣形鏡



24号墳出土玉類



石製紡錘車・玉類・土玉

009-3

010-1

010-2

010-4

010-5

010-19

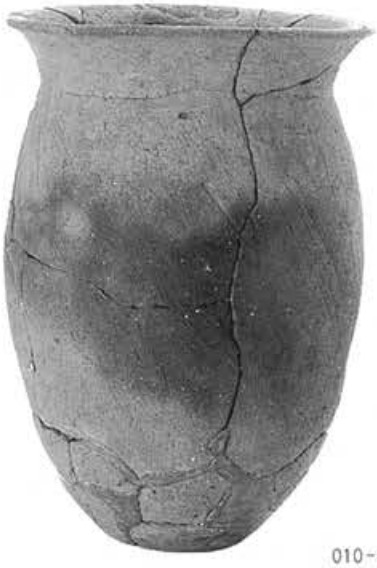
010-12

010-11

010-18

010-21

010-22


010-20

010-23

010-24

古墳時代出土土器（1）

011-3

011-4

011-6

011-11

011-9

011-14

011-12

011-13

011-10

014-1

014-3

018-1

014-4

014-5

018-3

017-1

017-2

017-3

017-5

017-6

017-7

017-8

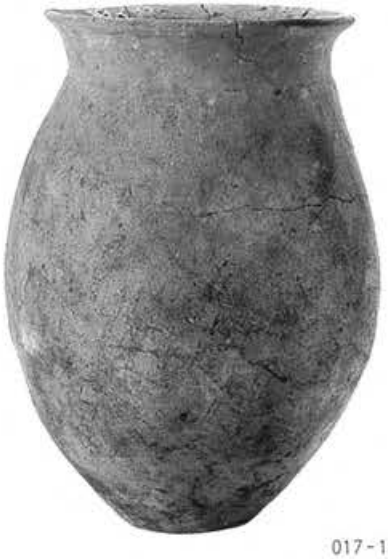
017-9

017-10

017-11

017-12

017-15


017-13

017-14

古墳時代出土土器（3）

035-1

035-2

037-6

037-1

037-2

037-6

037-3

037-4

052-8

037-7

052-10

052-5

奈良・平安時代出土土器（1）

奈良・平安時代出土土器（2）

002-2

土坑出土土器

025-3

025-4

025-5

1

2

7

9

10

12

6

15

20

19

22

土器集中地点・遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ちばとうなんぶにゅーたうん
書名	千葉東南部ニュータウン
副書名	千葉市小金沢古墳群２
巻次	32
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第514集
編著者名	関口達彦，大内千年
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809-2
発行年月日	西暦2005年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
小金沢古墳群２	千葉県千葉市緑区 おゆみ野中央７丁目 ９番地他	201	217	35度 32分 43秒	140度 10分 38秒	19870401～ 19880331 19920401～ 19920625	18,000㎡	千葉東南部地区土地区画整理事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
小金沢古墳群２	包蔵地	旧石器時代	７ブロック	ナイフ形石器，角錐状石器，石刃核，剥片	24号墳は七獣形鏡や玉類が副葬された前期古墳。 周辺の古墳は７世紀中頃から後半の後期古墳。 古墳時代後期から平安時代の集落跡。
	包蔵地	縄文時代早期以降	竪穴住居跡１軒，埋設土器２基，陥穴26基，炉穴14基	縄文土器，石器，玦状耳飾，耳栓，土版	
	集落跡 古墳 墓跡	古墳時代	古墳６基，竪穴住居跡６軒，土坑墓２基	銅鏡(七獣形鏡)，玉類(琥珀製勾玉・ガラス製管玉・緑色凝灰岩製管玉・ガラス玉・翡翠製丸玉)，土師器，須恵器，鉄製品(鉄鏃・大刀・刀子)，耳環	
	集落跡 墓跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡５軒，土坑墓４基，方形周溝１基	土師器，須恵器，施釉陶器，灰釉陶器，墨書土器，支脚，石製紡錘車	

千葉県文化財センター調査報告第514集

千葉東南部ニュータウン32

－千葉市小金沢古墳群２－

平成17年３月25日発行

編　　集　　財団法人　千葉県文化財センター

発　　行　　独立行政法人　都市再生機構
千葉地域支社
千葉市美浜区中瀬１－３

財団法人　千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809-2

印　　刷　　大和美術印刷株式会社
千葉県木更津市潮浜2-1-10